

やはり俺が太刀川隊に所属してるのは間違っていない

ナインハルト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつてこの都市は後に『近界民』と呼ばれる異世界からの侵略に晒された。

こちらの世界とは違う技術を持つ近界民には地球の兵器の効果は薄く、誰もが都市の壊滅は時間の問題だと思い始めた、その時。

突如、現れた謎の団が近界民を撃破しこう言った。

『こいつらのことはまかせてほしい。我々はこの日のためにずっと備えてきた』

近界民の技術を独自に研究し、『こちら側』の世界を守るため戦う組織、その名を境界防衛機関『ボーダー』。

彼らはわずかな期間で巨大な基地を作り上げ、近界民に対する防衛体制を整えた。

これは1人の少年と、その少年に助けられた1人の少女の物語

目次

比企谷八幡はこの日運命の出会いをした事にまだ気付いていない

1

こうして比企谷八幡と黒江双葉は再会する。 | 12

黒江双葉は想い人の妹と邂逅を果たす | 26

加古望は比企谷八幡に度々接触する。 | 39

比企谷八幡と黒江双葉は夢の国に遊びに行く | 52

聖夜の夜に黒江双葉は動き出す。 | 67

比企谷八幡は出水平公平に背中を押され一歩踏み出す。 | 78

比企谷八幡は中学生となった黒江双葉との未来に希望を持つ | 89

比企谷八幡はいきなりの罵倒により怒りが頂点に達する。 | 100

比企谷八幡は逃げ切る事に成功する。 | 109

比企谷八幡は戸塚彩加の練習に付き合う | 121

比企谷八幡は戸塚彩加の為に試合をする | 134

比企谷八幡は運が悪い | 147

比企谷八幡はスーツを着てバーに行く | 158

こうして職場見学が始まる | 172

比企谷八幡は加古隊の選んだステージに苦勞する。 | 188

比企谷八幡は疲れ果てる | 200

黒江双葉は恋人をバカにされ怒りが頂点に達する。 | 214

比企谷八幡と黒江双葉は徐々にデートをする | 228

比企谷八幡は妹や仲間、恋人と一緒に旅行へ行く事になった | 245

比企谷八幡は面倒事を感じとり頭を痛める | 255

比企谷八幡は色々としらしみ最後の最後で嫌な予感に襲われる。

比企谷八幡は話し合いに参加する	283
旅行中、黒江双葉は大胆になる	295
比企谷八幡はロリコンの気があると思われる。	309
比企谷八幡は遂にシスコンとロリコンを両立する男となった。	
322	
黒江双葉は鶴見留美の話を聞く	333
黒江双葉と鶴見留美は友達になる。	341
比企谷八幡は新しい面倒事に頭を痛める	349
こうして旅行は終わる	360
比企谷八幡は祝ってもらった	376
こうして入隊者が決まる	387
4人は仮入隊して訓練をする	398
比企谷八幡と黒江双葉は花火大会に行く	411
こうして2人きりの至福の一時が始まる。	430
こうして新学期が始まる	462
比企谷八幡はとことん運が悪い	470
比企谷八幡でも嫌な事はある	482
予想通り4人は無双する	495
比企谷八幡は相模南が無能である事を改めて認識する	513
比企谷八幡は実行委員会が末期である事を理解する	522
比企谷八幡は氷見亜季の為にヤル気を出す	533
比企谷八幡は裏で動く	543
比企谷八幡の案によりサボリ組は肩身が狭くなる	555
比企谷八幡は自隊の隊長の最大のライバルの様に暗躍をする	564
比企谷八幡は最愛の恋人と文化祭を楽しみ、愛の絆を更に深める	

比企谷八幡はやる気のない状態で相模南を探しに行く

こうして文化祭は幕を閉じる

こうして比企谷八幡の後夜祭が行われる

太刀川隊は新しく出来た隊と試合をする事になった

思いのほか戸塚隊は優秀である

やはり太刀川隊を崩すのは困難な道のりである。

比企谷八幡はこの日運命の出会いをした事にまだ気付いていない

三門市、ボーダー本部周辺警戒区域内

僅かにはねたくせ毛にびよこんとたったアホ毛となによりも腐った目をしている男は民家の屋根に腰掛けてぼんやりしていた。

「ふあゝ、眠いな」

「何だ比企谷、眠いのか？」

俺の隣にいるチームメイトの金髪の男子が話しかけてくる。

出水公平、俺と同じA級1位太刀川隊の射手でアダ名は弾バカ。ボーダーでもトップクラスのトリオン制御能力を持つ男だ。ちなみに俺と同期で入隊当初からのライバルだ。

「まあな、昨日国近先輩と今朝までゲームしたから」

俺がそう口にするとう水が苦い顔をする。まあこいつも経験者だからな。

「あー、ドンマイ」

そう言っ肩を叩いてくる。やはりこの苦しみは太刀川隊共有だからな。

そう思っていると

「だからと言って任務中に欠伸はA級1位として問題がありますよ」

と後ろから声がかかってくる。

「うるせー、お荷物」

俺と出水がハモった。おおっ、息ピッタリだ。

「比企谷先輩も出水先輩も酷い!!」

後ろから嘆き声が聞こえる。

唯我尊、一応A級1位太刀川隊銃手だ。ボーダー最大のスポンサーでそのコネを使って太刀川隊に入った男だ。その為扱いが雑だ。まあこいつ単体の実力はB級下位クラスだからな。

「はっはっはっ」

唯私の弱さに改めて呆れていると後ろから笑い声が聞こえてくる。

「遅いですよ。太刀川さん」

後ろを見ると我らが太刀川隊隊長がいた。

太刀川慶、A級1位太刀川隊隊長にして個人総合ランク1位、攻撃手1位の肩書きを持つバケモノだ。ちなみに俺の剣の師匠だ。戦闘においては本当に尊敬しているがそれ以外では一切尊敬していない。戦術の師匠の月見さんからも「太刀川君からは剣以外習っちゃダメよ」と言われたくらいだ。実際毎回レポートに付き合わされてるからな。マジで大学辞めてボーダーに就職してください。

「悪い悪い。さっき加古の炒飯でハズレを引いて倒れてな……」

よく見ると太刀川さんの顔は真っ青だ。ハズレを引いたなら仕方ないな、うん。俺もこの前ストロベリーカスタードサーモン炒飯を食って死んだからな。あの時に巻き込んだ三輪の睨みは今でも忘れられない。

「無理しないでくださいよ。なんなら本部に連絡して休んでもいいですよ」

出水の言う通り任務前にハズレ炒飯を食ったなら本部も休ませてくれるだろう多分。

「大丈夫だ。顔色は悪いが体調は問題ないからな。というか比企谷も病み上がりだろ？大丈夫か？」

太刀川さんが心配そうに聞いてくる。

「大丈夫です。退院したのは一週間も前ですから」

そう、俺は高校入学初日、事故に遭った。新しい生活にワクワクしたわけではなく単純に入学式の時間を読み間違えて一時間早く家を出てしまった。自転車で歩道を走っていると車道のだ真ん中に犬がいた。歩道には飼い主らしき人がいたので飼い主から離れたのだろう。そして向こうからは明らかに高そうなりムジン。その状況を見ると自転車を降り出し犬に向かって駆け出していた。そして、俺は車

に轢かれた。

バカな飼い主の所為で救急車で病院へ搬送され左足の骨折と判断された。そのまま全治三週間と言われ入院となり入学ぼっちが決定した。

ぼっちになるのは別に構わない。総武高にはボーダー隊員もいるからそこまで孤独と言う訳ではない。それに車の持ち主からは入院費を全額出して貰ったしな。

「ならいいけどな。これからは気をつけろよ」

「はい」

『2人とも大丈夫なら動いて、誤差6・32だよ』

太刀川さんの注意に頷いていると通信が入る。

国近柚宇 A級1位太刀川隊オペレーターだ。ボーダートップクラスのオペレーターでかなりゆるふわな雰囲気を出していて俺の心のオアシスだ。偶に頭を撫でてくれるがアレには逆らえない。そして極度のゲーマーでよく徹夜でゲームをしてよく巻き込まれる。負けがこむと首を絞めてくる。

それはともかく門が開いたなら動かなくてはな。

「わかった。行くぞお前ら」

太刀川さんは意識を切り替えて俺達を見てくる。俺達は3人は頷いて現場に走り出した。

現場に着いて種類と数を確認する。

「モールモッド15体とバムスター11体か……」

俺が声に出して確認すると太刀川さんが腰の剣を抜いた。それを見て俺も腰の剣を抜き、出水は両手からトリオンキューブを出して、唯我は腰から拳銃を出す。

それを確認した太刀川さんは薄く笑い、

「行くぞ」

そう言っってトリオン兵に突っ込んだので俺もそれに続いた。

モールモッドのブレードが襲いかかってくるのでそれを紙一重に避けて弱点の目を切り裂く。……これで3体か。

息を吐くと

「うわああああ!!来るな来るな!!」

煩い声が聞こえてくるので振り向くと唯我が大慌てでモールモッドから逃げている。ったく……

ため息をひとつ吐いて

「旋空孤月」

そう呟いてオプシヨントリガー「旋空」を発動して唯我を追いかけているモールモッドを真つ二つにした。モールモッドの沈黙を確認して近くにいるバムスターを狙う。何か後ろで唯我が騒いでいるが無視だ。

暫くトリオン兵を殺して残りが5体になった時だった。

『まずいよ〜!警戒区域と市街地の境界あたりに門が開いたよ!』

珍しく国近先輩の焦った声が聞こえてきた。マジかよ?!急がないとマズいな。

「比企谷、お前が行け!グラスホッパーを2つ入れてるお前が1番早く着く!」

国近先輩の通信に驚いていると太刀川さんから指示が入る。確かにグラスホッパーを2つ入れてる俺が行くのがベストだな。

「わかりました!そっちは任せます」

太刀川さんの返事を聞かず俺はグラスホッパーを起動して目的の場所へ向かって跳んだ。

俺達がいた場所は目的地と基地との中間地点とかなり遠い。しかし場所は太刀川隊が1番近いので俺がやるしかない。

「国近先輩!敵の数は?!」

『バムスター1体だよ!急いで!もう警戒区域から出たよ!』

国近先輩はいつものおっとりした声ではなくかなり焦っている声

を出している。それを聞いた俺は内心焦りながらグラスホッパーを起動する。

現場に着くと警戒区域から150メートルくらい離れた所にバムスターがいた。

しかも……

(マズイ!!あの子が危ない!!)

バムスターの近くには小さい女の子がいた。それを確認した俺は走り出した。見ると女の子は腰を抜かしていた。それを確認したバムスターは頭を下げて食おうとしていた。

(そんな事させねーよ)

そう思いながら手からキューブを出してバムスターに向ける。

「アステロイド」

手から放たれたキューブは真っ直ぐ進みバムスターの背中にぶつかった。装甲にはヒビ一つ入っていない。まあ射程と弾速に特化して威力はほぼゼロだからな。

しかし今回は倒すのが目的でないから問題ない。俺の予想通りバムスターは一旦止まりゆつくりとこつちを向いてくる。

(まだまだ、まだダメだ。今倒すとあの子も巻き込まれる)

今殺したら最悪の場合女の子がバムスターの下敷きになる可能性があるからな。女の子は未だに腰を抜かしているがバムスターはこちらを向こうとしてあの子には興味を失っている。

そうこうしているとバムスターはこつちを向いて俺の方へ進み始めた。そろそろいいな……

「グラスホッパー」

一言呟いて一気に距離を詰めて弱点の目を一閃する。バムスターは目から緑色の煙を出してゆつくりと倒れた。

標的の沈黙を確認して国近先輩に通信を入れている。

「バムスターを撃破しました」

『よかつた、じゃあ死傷者の確認をお願いね』

「了解しました」

そう言って通信を切る。死傷者の確認もそうだが先ずはバムスターの後ろにいる女の子の無事の確認だな。そう判断してバムスターの上に乗って女の子を見る。女の子は未だに腰を抜かしていたが怪我はないようだ。そしてこつちを向いている。まあ一応聞いてみるか。

「よう。無事か？」

???
side

もうダメだ。私はそう思った。

ゴールデンウィークに警戒区域の近くにある知り合いの家から帰ろうとした時ふとした好奇心が湧いた私はボーダー基地や警戒区域と市街地の境界を見ようと立ち寄った時だった。

突然目の前に黒い門のようなモノが開いてその中からバケモノが出てきた。

(近界民……！)

誰もが知っている存在だ。数年前に突然三門市に現れて街や人、あらゆるモノを蹂躪した存在だ。写真では見た事はあるが実物がこんなに怖いなんて……

私は慌てて逃げようと走った。しかし石に躓いて転んでしまった。痛みを感じていると頭の上に影が現れた。

上を見るとバケモノが私を見ていた。

(どうしよう……！逃げなきゃいけないのに！)

間近で見ってしまった私は腰を抜かして動けない。怯えている私を無視してバケモノは私に頭を近づけてくる。バケモノは私を食べるのだろう。

(……嫌！誰か助けて！)

私が目を瞑って祈った時だった。

「アステロイド」

バケモノの後ろから声が聞こえて、その直ぐ後にガギギンツ!!、と音がした。するとバケモノは動きが止まった。そして直ぐに私から顔を離して後ろの方を向こうとした。

暫くしてバケモノは私に背を向けて歩き出した。もう完全に私に興味を失ったようだ。

そう思っているとザシュリと音がした。顔を上げるとバケモノから緑色の煙が出ていてバケモノは地面に倒れて動かなくなった。

(……助かったの?)

自分の無事について自問自答している時だった。

バケモノの上に人が現れてこちらを見ている。それを見ると1人の少年が立っていた。おそらくはボーダーだろう。少年は高校生くらいだろうか? 頭にはアホ毛がたっていて目は凄く澀んでいた。凄い目だな……

それでも私にとっては彼はヒーローの様に凄いかっこよく見えた

その少年をもっと見てみると私は驚いた。その少年は5月に着るようなモノじゃない黒いロングコートを着ていた。

しかし驚いたのはソコではない。

私は少年の肩にあるマークに驚いたのだ。見ると肩には『A01』と書かれ3本の剣が刻んであるマークがあった。

(まさか、ボーダー最強のチーム太刀川隊?!)

ボーダーの情報は余り知られてないが有名な存在もある。

例えば広報部隊としてテレビに出ている嵐山隊、テレビで特集が組まれた事のある那須玲さんなどがある。

そしてA級1位隊長である太刀川慶さんも有名であり、私を助けてくれた彼は太刀川慶さんと同じ服を着ていた。

まさか助けてくれた人がA級1位の人だったとは……

驚きながら見ていると少年は口を開ける。

「よう。無事か？」

八幡side

無事かどうか確認する為女の子に呼びかけると返事はしない。どうやら腰を抜かして立てないようだな。

「立てるか？」

女の子に近いて手を差し伸べるとゆっくりと手を伸ばして掴んでくる。それを確認した俺はゆっくりと女の子を立たせる。女の子は涙目でこちらを見てくる。

「大丈夫か？怪我はないか？」

「は、はい！助けてくれてありがとうございます！私は大丈夫です！」

「そっか、なら良かった」

そう言つて軽く頭を撫でる。

「……あ、あの……！」

女の子は顔を物凄く真っ赤にしている。しまった、妹にやる癖で撫でちゃった。

「あ、悪い」

慌てて頭から手を離す。

「……あー！」

女の子は驚いた声を出す。

「どうした？」

俺がそう聞くと女の子は真っ赤になりながらも口を開ける。

「……その、もう少しだけ撫でてくれませんか？気持ち良かったので……」

え？マジで？てつきり嫌だと思っていたんだが……。しかしどうしよう？流石に意識的にやるのは……

「あく、えーつとだな……」

俺が口をモゴモゴしていると

「……ダメですか？」

上目遣いで俺を見てくる。クソ可愛い。マジで可愛い。俺ロリコンじゃないけどロリコンに目覚めそう。

まあそれはともかく……こんな目をされちゃ拒否出来ないな。

息を吐いて頭を撫でる。髪は柔らかく気持ちがいい。

「……あつ」

女の子は可愛い声を出してこちらを上目遣いで見てくる。それを見た俺は胸が熱くなってきた。いかんいかん落ち着け俺。

「あゝ、ところでお前以外に人はいたか？」

話を逸らすように女の子に尋ねる。周りの状況を見るとバムスターは道路を歩いていて家は壊れていない。となると安全じゃないのは道にいた人だけだ。

「いえ、私以外はいませんでした」

「なら良かった」

頭を撫でながらホツとする。すると女の子は話しかけてくる。

「……あの、お名前を聞いてもいいですか？」

そんな事を聞いてくるが教えてもいいだろう。断つてもボーダーのサイト見りやわかるし。

「比企谷八幡だ」

「比企谷八幡さんですか……。あ、すみません名乗らずに。私は黒江双葉です」

「そうか黒江か。無事で良かったよ」

「はい！ありがとうございます八幡先輩！」

そう言つて黒江はとびきりの笑顔を見せてくる。それを見て俺も無事で良かったと思つた。
すると

『比企谷君？状況は分かった？』

国近先輩から通信が入る。

「はい、幸いバムスターは道路を歩いていて住宅には被害なし。死傷者も捕まった人もいません」

『良かったゝ、回収班呼ぶねゝ』

そう言つて通信が切れたので黒江に話しかける。

「ところで黒江」

「はい。何でしょうか？」

「もしも近界民の恐怖があるならボーダーに保護してもらうか。そうすれば今日の記憶も消してもらえるぞ」

ボーダーでは機密保持の為に記憶消去がある。まあ黒江は警戒区域に入っていないから違反者じゃないから強制じゃないがもし黒江が怖いなら記憶を消してもらうのも一つの手だ。

「それって八幡先輩の事も忘れちゃうんですか？」

「……？多分な」

知らないが細かく記憶を残すのは多分無理だろうしな。

「なら結構です。命の恩人を忘れるなんて嫌です」

強い口調で返してくる。まさかここまで高く評価されるとは予想外だ。まあ本人がそう言うなら従うだけだ。

「分かった。じゃあ保護はしないでおく」

「お願いします」

黒江と話していると

『比企谷君、誤差4.27で門が開いたよ。さっきほどじゃないけど警戒区域に近いから比企谷君が倒してね』

国近先輩から通信が入る。見ると少し離れた場所に門が開いている。行くか。

「悪いな黒江。俺はもう行く。お前も用がないなら早く帰れ」

「はい。わかりました」

「ああ、じゃあな」

そう言っただけで走り出すとすると

「八幡先輩！」

黒江に呼ばれて振り向いた時だった。

ちゅっ……

黒江が俺の頬にキスをしてきた。

それが分かった俺は顔が熱くなるのがわかってきた。黒江を見ると黒江も真つ赤になりながらも笑顔を見せてくる。

「……助けてくれたお礼です。男の人ってこんなのが好きって本で読んだので」

そう言っただけで黒江は頭を下げて走り去って行った。それを確認すると更に顔が熱くなってきた。

(ヤベエ、恥ずかしい!!しかもグツときたぞ……)

俺は照れ隠しをするようにグラスホッパーを起動してレーダーに出ているバムスターへ向かって行った。

かつてこの都市は後に『近界民』と呼ばれる異世界からの侵略に晒された。

こちらの世界とは違う技術を持つ近界民には地球の兵器の効果は薄く、誰もが都市の壊滅は時間の問題だと思い始めた、その時。

突如、現れた謎の一団が近界民を撃破しこう言った。

『こいつらのことはまかせてほしい。我々はこの日のためにずっと備えてきた』

近界民の技術を独自に研究し、『こちら側』の世界を守るため戦う組織、その名を境界防衛機関『ボーダー』。

彼らはわずかな期間で巨大な基地を作り上げ、近界民に対する防衛体制を整えた。

これは1人の少年と、その少年に助けられた1人の少女の物語

こうして比企谷八幡と黒江双葉は再会する。

夏休みも終わり今日は9月8日、正式入隊日だ。

入隊指導をするのはいつも通り嵐山隊だろう。嵐山隊は少し前に大型ルーキー木虎藍を入れてかなり戦績が上がっている。チームのランクは6月の時点でB級上位と中位の間あたりだったが8月のランク戦終了時点でB級4位とかなり強くなっている。おそらく次のシーズンのランク戦でA級への挑戦権を得られるだろう。

「木虎、緑川に続いて大型ルーキーは出ると思うか？」

「さあな、あいつらは別格だし出てこないんじゃないかね？」

俺はチームメイトの出水とボーダー基地の廊下を歩いている。暇だから一緒に正式入隊式でも見ようぜ、って話になった。

ちなみに隊長の太刀川さんは行きしたがっていたが大学1年目にして留年する可能性が既にあると大学から連絡が来た事が忍田本部長と風間さんにバレてしごかれている。これには部下の俺達も呆れてモノが言えなかった。

米屋と三輪は防衛任務でいない。

始めのオリエンテーションは少し遅れて聞けなかったので俺達は今、訓練室に向かっている。

やるのはいつものバムスターを倒すアレだろう。これで大体向いてるかわかり、1分切れればまあまあと評価される。俺や出水はその訓練が導入される前に入隊したからどの位の才能かわからないがA級1位でやっていけるから才能はある方だと思う。

そんな事を考えていると少し離れた場所に訓練室が見えてきた。ザワザワしてるからもう始まっているのだろう。っとその前に……

「すまん、トイレに行くから先に行つててくれ」

「はいよ。面白そうな奴がいたら教える」

「頼む」

出水を先に行かせて俺はトイレに向かった。

用を足し終わり訓練室に向かおうとすると歓声が聞こえてきた。煩いな。

一瞬イラついたが、そんなに煩い歓声って事はかなり凄い奴がいたのだろうと判断して興味が湧いた俺は早歩きで訓練室に入った。

訓練室の戦闘ルームを見ると既に居なかつたので戦闘ルームから出ているのだろう。そう判断した俺は入り口の近くにいた出水に話しかける。

「おい出水、さっき凄い歓声がしたんだがそんなに凄い奴がいたのか？」

「ああ、いたぜ。11秒の記録を叩き出した逸材がな」

「おっ、マジか?! 11秒だ?! 木虎、緑川に続いて今期も大型ルーキーが現れるとはな……」

「で、どいつだ?」

「ああ、あの女の子だぜ」

そう言っただけで出水が指差す方向を見て俺は絶句した。

出水が指差したのはかつて俺が助けた女の子黒江双葉だった。

これについては完全に予想外だった。黒江が入隊した事、凄い記録を叩き出した事、それらが頭を占めていた。

「……比企谷?」

話しかけられて我に返ると出水が訝しげに見ていた。

「大丈夫か? 何か今様子が変だったぜ?」

「あ、ああ悪い。実はだな……」

俺が口を開けようとする足音がこちらに近づいてくるので音源の方向を見ると黒江が笑顔でこちらにやって来た。

「八幡先輩! お久しぶりです!」

そう言つて頭を下げてくる。隣では出水がポカンとしてるし。まあ今は出水は置いといていいか。

「久しぶりだな。お前が入隊してるとは思わなかった」

「はい！八幡先輩に憧れて入隊しました！」

笑顔でそう言つてくると柄にもなく照れるな。やっぱりこいつの笑顔可愛いし。

黒江の笑顔に癒されてると出水が話しかけてくる。

「何？お前の友達？」

「友達つてほどじゃないな。まあ知つた顔だ」

「ふーん。あ！俺は出水公平。比企谷のチームメイトだ。よろしくな」

「八幡先輩のチームメイトという事なら太刀川隊の人ですか？初めまして、黒江双葉です」

黒江がそう返すと出水は訝しげに黒江を見る。

「アレ？何で比企谷が太刀川隊つて知つてんの？太刀川さんはともかく、俺や比企谷はそんなに有名じゃないし、目立つのが嫌いな比企谷が太刀川隊に所属してるなんて言わないだろうし」

「はい。実は以前近界民に襲われたところを八幡先輩に助けられました」

黒江がそう返すと出水は納得したように頷く。

「あー、なるほど。つまり2人の関係は迅さんと緑川みたいなもんか」
「そういう事だ」

すると黒江が話しかけてくる。

「あの、緑川つて緑川駿の事ですか？」

「ん？そうだけど知り合いか？」

「はい、駿とは同じ小学校でした」

「なるほどな。随分仲が良さそうだな」

お互いに名前呼びしてるし。知り合いがいるなら気も楽だろう。そう思つて話したが黒江の反応は予想外だった。

「い、いえ！ただの腐れ縁です！駿とはそんな関係ではありません！」

黒江が俺に近づいてくる。そんな関係つて何だよ？てか近い近い。

いい匂いするから離れてください。

「わ、わかったわかった。わかったから落ち着け」

宥めるように黒江に話しかけると黒江は真っ赤になり後退する。

「……あ、すみません」

「いや、別に怒ってないから気にするな」

申し訳なさそうな顔をしているので軽く頭を撫でる。すると黒江は驚いたように顔を上げてくすぐったそうに目を細める。

何か後ろで出水が「おや？もしかして黒江ちゃんって……」とか言ってるが何をコソコソ呟いてんだ？

出水の発言に訝しんでいると最後の訓練生の訓練が終わったようだ。

「黒江、もう戦闘訓練は全員終わったみたいだからそろそろ戻れ。次の訓練もあるぞ」

すると黒江はハツとした顔になり「わかりました」と言ってくるので頭から手を離す。

黒江は嵐山さんの元へ戻ろうとして歩き出すがピタリと止まりこちらを見てくる。

「ん？どうした？」

すると黒江は真っ赤になり恥ずかしがりながら口を開ける。

「……そ、その、次の訓練も見ていてくれませんか？」

ん？いきなりどうしたんだ？頭の中に疑問符を浮かべていると出水が

「黒江ちゃんはお前に見て欲しいみたいだし見てやれよ」

珍しく強い口調で言ってくる。こいつがこんな声を出すとは予想外だ。まあ元々新入隊員の訓練は見るつもりだったからいっか。

「ああ、わかった。頑張れよ」

了承すると黒江は笑顔を浮かべてくる。

「はい！頑張りますので見ててくださいい！」

そう言って嵐山さんの元へ走って行った。少しして嵐山さん達が次の訓練室に向かって歩き出したので後続に続いた。

「それにしても随分懐かれてるな」

出水がそう言うってくる。まあ確かに懐かれてる自覚はある。何か迅さんを前にした緑川に若干似てるし。

「そうだな」

「まあ、素直な後輩みたいだし優しくしてやれよ」

もちろんそのつもりだ。ボーダーで才能のある新人は結構生意気な奴が多いからな。菊地原とか菊地原とか菊地原とか。その点黒江は初めから礼儀正しいからこちらとしても邪険に扱うつもりはない。

出水の発言に軽く頷いて次の訓練室に歩いて行った。

目的地に着くと嵐山さんは説明を始めた。この訓練室では地形踏破、隠密行動、探知追跡と、B級に上がりチームに入った場合に行うチームランク戦で重要視される内容の訓練をする。

今回は新入隊員だけだが、いつもは300人近くが訓練に参加するので新人は上位を取りにくい。黒江は大丈夫か？

少し心配している中訓練が始まった。

すると俺の心配は一気に吹き飛んだ。

「すごいな、あの動き」

出水が感嘆の声を出しているが概ね同意だ。モニターでは黒江はビルの壁を蹴って一気にチェックポイントにたどり着いていた。

「アレだろ？確か黒江は緑川と同じ小学校だから山で鍛えたんだろ？」

「あー、なるほどな。確かに緑川も地形踏破訓練はいつも1位だったしな」

俺と出水が話している中黒江は最後のチェックポイントにたどり着いた。ぶっち切りの1位だった。これなら他のC級がいても1位だろう。

感心している間にも訓練は続いて、ついに地形踏破、隠密行動、探知追跡訓練が終わった。

「それじゃあ最後にC級ランク戦についての説明をする。もう一度移動するから付いてきてくれ」

嵐山さんはそう言ってC級ランク戦のロビーへ歩き出しC級もそれに付いて行く。

俺達も少し離れて後を追うと前から黒江がやってきたので劳いの言葉をかける。

「お疲れ」

黒江は若干浮かない顔をしていた。

「はい。……ですが探知追跡訓練は……」

少し落ち込んでいた。黒江は地形踏破、隠密行動はぶっち切りの1位だった。しかし探知追跡はちょうど中位くらいだったからそれで落ち込んでいるのだろう。

しかし落ち込む必要はない。

「気にするな。初めてリーダーを持たされてもまともに使いこなせるわけではないからな」

「そうそう。それに中位と言っても記録は団子状態だったから悪くはないぜ」

俺も探知追跡は初めから1位じゃなかったしな。1位ともそこまです差がなかったし気に病む必要はない。

そう思いながら口を開ける。

「お前は今日入隊したばっかなんだ。これから強くなればいいだろう？」

そう言って頭を撫でると黒江はハツとした顔になり直ぐに笑ってくる。

「そうですね。これから頑張っていきます」

元氣になって何よりだな。内心笑っているとC級ランク戦の口

ビーに着いた。

「それじゃあC級ランク戦のやり方を説明する。C級ランク戦は基本的に仮想戦場での個人戦だ。やり方は簡単だ。ブースの中にあるパネルにブースの番号と武器とポイントが出ている。それが現在ランク戦に参加している隊員だ。好きな相手を選んで押せば対戦が出来る。逆に向こうからも指名される場合もある。対戦をやめたい時はブースから出ればいい」

そうそう。そして止めようとしてブースから出ようとした時に指名されるとかなりイラつくんだよな。殆ど米屋によって。

しみじみ思っている中嵐山さんの説明は続く。

「そして、ポイントが高い相手に勝つほど点がたくさん貰える。逆に自分よりポイントが低い相手だと勝っても余り貰えず負けた時に沢山取られる」

そんなんだよな。カゲさんなんてしよつちゅうポイント減らされててポイントは低いが実力が俺とほぼ互角だ。だからカゲさんとやるというも俺が損をしている。だって勝率が五分五分だからねえ？

「それじゃあ2人組みになってランク戦をやってみよう！好きな相手と組んでくれ」

すると近くにいる者同士組み始めたが黒江に話しかける奴はいなかった。

「まあ当然だな。さっきの戦闘訓練を見る限り黒江ちゃんの実力はB級下位クラスだしな」

マジかよ？俺は見えてないがそれほどとはな……

驚いていると黒江以外は全員組んでいた。どうやら新入隊員は奇数だったようで黒江1人余ったようだった。まあ負けるとわかっていいるから挑みたくないって思う気持ちはわかるが……

呆れている中嵐山さんは黒江に話しかけようとする。すると黒江は何やら嵐山さんに話しかけている。すると木虎は驚いてこつちを見てくる。俺と出水は頭に疑問符を浮かべながら状況を見守る。そんな中嵐山さんは黒江に一つ頷き俺達の方へやってくる。

「比企谷、彼女はお前と戦いたいらしいぞ」

「は?!俺と?!

隣では出水も驚いていた。とにかく理由を聞く為黒江の所へ行こうとする。黒江がやってきた。

「八幡先輩、お願いします。私と戦ってください」

そう言っ頭を下げてくる。

「待て待て。理由を聞かせろ」

「はい。八幡先輩はA級1位ですから相当強いのはわかります。私はやるからにはトップになりたいです。ですからトップクラスの八幡先輩と戦って壁の高さを知りたいです」

黒江はかなり真剣な表情をしている。目を見ればわかる。こいつは本気で強くなりたいと思っている。普段なら面倒だつて断るがこんな真剣な表情をしている奴の誘いを断るのは失礼だろう。

「俺は構わない。嵐山さんよろしいですか?」

「彼女が了承するなら構わないぞ」

「はい、お願いします」

どうやら俺が戦うのはOKみたいだ。そう判断した俺は胸ポケットからトリガーを取り出す。

「トリガー、起動」

そう呟くと戦闘体に換装される。すると周りの新入隊員から騒めきが聞こえる。

「おい、アレ……!!」

「A級1位だ!!」

そんな声が聞こえてくる。まあ太刀川さんは世間に知られて有名だからな。隊服も知られてるから目立つのは仕方ない。まあそれはほっとくか。

「じゃあ出水、ちょっと行ってくるわ」

「はいはい。お前の事だから手は抜かないだろ?」

「当たり前だ。黒江は本気で強くなりたいと思ってる。手を抜くのは黒江に対する侮辱だ」

そう言つて黒江と向き合う。

「じゃあやるぞ。俺は102号室に入るからお前は隣の103号室に入つてくれ」

「はい」

黒江から了承を得たのでブースに入る。

ブースに入り黒江のブースに通信を入れる。

「黒江、聞こえるか？」

『はい、聞こえます』

「じゃあ操作パネルを見てくれ。一番下に黒い四角があるからそれを押してくれ」

『押しました』

「そうすればC級はB級以上の奴と戦える。そんで102号室のボタンを押してくれ。ちなみにランク外対戦でポイントの奪い合いじゃないからポイントの心配はしないで思い切りかかってこい」

『はい。よろしくお願いします』

「おう、よろしくな」

挨拶を交わすと仮想戦場に飛ばされてアナウンスが流れる。

『対戦ステージ市街地A。ランク外対戦1本勝負開始』

目の前に黒江が現れたのを確認して孤月を出した。すると向こうも孤月を出してきた。同じ孤月使いとは思わなかった。てつきり身体能力を生かす為にスコアピオンかと思った。

すると黒江はいきなり斬りかかってくる。俺は若干驚きながらも孤月で受け止める。黒江の孤月を押し返そうとすると黒江は孤月を引いて直ぐに俺の腹を狙って孤月を振ってくる。

それに対してバックステップで下がると黒江は更に突っ込んでくるので再び孤月で黒江の孤月を受け止める。

(なんつー猛襲だよ！こいつ本当に今日入隊したのか?!下手すりゃB級中位に届くぞ！)

こいつは危険だ。そう判断した俺は黒江の孤月を跳ね上げてお返しとばかりに首を狙う。しかしそれを予期していたのか後ろに大きく跳んで再び突っ込んでくる。

(まさか俺や太刀川さんと同じタイプとはな……)

孤月の使い手には色々なタイプがいる。その中で代表的なスタイルは今のところ4つある。

1つ目は相手の動きを捌きまくり隙が出来たら斬り込む那須隊攻撃手の熊谷友子が使うカウンタertypeだ。

2つ目は仲間の活路を開くのを重視する二宮隊攻撃手の辻新之助が使うサポートタイプだ。

3つ目は2人で戦う事を前提条件としている東隊攻撃手の奥寺常幸や小荒井登が使うコンビネーションタイプ。

そして4つ目が攻撃は最大の防御とばかりにガンガン攻めまくる俺や太刀川さんが使うスピードタイプだ。

黒江は正にスピードタイプだろう。素早い機動力でガンガン斬りかかってくる。

「にしても随分攻めるな」

孤月を打ち合う中つい口が開いてしまう。すると向こうも口を開けてくる。

「八幡先輩は私より強いですから守りに入ったらダメだと思いまし

た」

なるほどな。その判断は正しい。そう思っていると黒江は更に激しく斬り込んでくる。なんつーやる気だよ。やはりこいつは末恐ろしいな。

(……だが、まだ甘いな)

黒江の振り下ろしを軽く逸らすように避けて孤月を黒江の孤月の横っ腹に叩きつける。

すると黒江は孤月を落としかけてバランスを崩した。

確かにこいつの攻撃の激しさは目を見張るものがある。しかしまだ新人。反撃された時に体勢を立て直す事は未熟のようだ。

もちろん俺がそんな隙を見逃すつもりもない。隙を突いて黒江の左腕を斬り落とした。

スコープオンならともかく重さのある孤月は片手で使うのは慣れが必要だ。俺も片手で一応戦えるが基本は両手で扱っている。うちの隊長は平然と孤月の二刀流で戦ってるが。

案の定片腕が落ちた黒江の剣速はかなり遅くなっている。そろそろ終いにするか……

俺は黒江の孤月を振り下ろす前に右腕も斬り落とした。これで詰みだ。もう黒江に勝つ道はない。

「楽しかったぜ」

俺は最後にそう言って黒江の首を飛ばした。黒江は妙に満足した様な顔をしてベイルアウトした。するとアナウンスが入った。

『一本勝負終了。勝者比企谷八幡』

そのアナウンスを聞いて俺もブースへ戻ってきた。ブースに戻り外に出ると黒江も同じタイミングで出てきた。すると黒江は頭を下げてきた。

「ありがとうございます」

「おう。B級に上がったらまたやろうぜ」

黒江との勝負割と楽しかったしな。おそらくこいつはB級に上

がいたらいろんなチームから引つ張りだこになるだろうな。

すると黒江は急にモジモジし始めた。どうしたんだいきなり？疑問に思っていると

「あ、あの……、八幡先輩にお願いがあるんですけど……」

「お願い？何だよ？何か奢ってくれとかなら高いのは無理だぞ。今財布に400円しかないから」

「……それ、安いのも無理だと思いますよ。……いえ、そうではなく」
そう言うと黒江は再びモジモジする。

「おい、大丈夫か？どつか調子が悪いのか？」

そう尋ねると黒江は意を決した様に俺を見て頭を下げてくる。

「……お願いします！私を八幡先輩の弟子にしてください！」

黒江がそう口にするのと周りから騒めきが聞こえる。

「A級1位に弟子入り志願かよ……!!」

「こりや凄い事になったな……!」

周りを見ると新入隊員は全員俺と黒江を見ていた。嵐山隊のメンバーでは木虎がかなり驚いているし。嵐山さんと時枝はいつもの表情で見守ってる。

(どうすりゃいいんだよ?)

こんな状況だと凄い断りにくいんだが。マジでどうしよう？小町助けて。

この場にいない妹に助けを求めていると

「いいじゃん？弟子にしてやれよ」

後ろから声がしたので振り向くと我らが太刀川隊長が餅を食いながらやって来た。すると新入隊員からは更に騒めきが生じた。

「あれ？太刀川さんはもう本部長と風間さんのしごきは済んだんですか？」

「まあな。というかその話はするな」

そう言う太刀川さんの顔は真っ青になっていた。どんだけしごかれたんだよ？戦慄している中太刀川さんは俺に話しかけてくる。

「話を戻すと弟子にしてやれよ。俺もお前を弟子にとつてからお前から色々と学んだぜ。だから弟子をとつても損はないぜ」

そう言ってくる益々断りづらいな。悩んでいると

「お願いします！」

黒江がもう一度頼んでくる。黒江の頼みを聞いて俺は考える。

(……まあ俺が強くなる為の経験になるならいいか。それに黒江は礼儀正しいから断るのも悪い気がするしな)

そう判断した俺は口を開ける。

「……わかったよ。俺で良ければ鍛えてやる」

そう口にする黒江は驚いた顔で見ってくる。

「本当ですか?！」

「ああ」

「あ、ありがとうございます!!」

もう一度頭を下げてくる。まさか俺が弟子をとるとはな……。しかも昔俺が助けた人とは……。何か黒江とは縁を感じるな。

「気にするな。俺は出水の所に戻る。詳しくはオリエンテーションが終わってからな」

「わかりました」

黒江から返事をもらい出水の所に戻る。

「意外だな。てっきり断ると思ったぞ」

「まあ気まぐれだ。黒江なら不満はないしな」
適当に返しながら他のC級のランク戦をボンヤリと眺める。

全ペアのランク戦が終了して新入隊員は初めの入隊式があったステージに戻っている。

「これでオリエンテーションを終了する。君達が正隊員に上がり一緒に防衛任務に就ける日を待っている」

嵐山さんがそう締めくくりオリエンテーションは幕を閉じた。
すると黒江がこちらにやって来るので出水と迎えに行く。

「んじゃ今からやるか？」

「はい！」

黒江から返事を貰うと同時に俺と出水の携帯が鳴るので見ると国近先輩からゲームやろうよ、と誘いのメールが来ていた。

「出水。俺は行けないからな」

「わかってる。柚宇さんには俺が言っとく。でも柚宇さんは4人プレイがしたいだろうから、俺、太刀川さん、柚宇さんとあと1人はどうしよう？お前はいいないし唯我は下手だし……」

「冬島さんにでも頼め。あの人の作戦室だと落ち着いてゲーム出来ないし」

「なるほどな。多分諏訪隊の作戦室か開発室にいるだろうし聞いてみるわ」

そう言つて出水は走り去って行ったので黒江と向き合う。

「悪いな。じゃあ行こうぜ」

「はい！よろしくお願いしますー！」

黒江は明るい笑顔を向けてくる。凄い可愛い弟子を取ったもんだ。そう思いながら2人でC級ランク戦のブースへ歩き出した。

黒江双葉は想い人の妹と邂逅を果たす

「黒江」

「任せてください」

俺が愛弟子の名前を呼ぶと同時に黒江は俺の後ろにいたモールモツドの目を斬る。

「サンキュー」

「いえ」

お互いに一言だけ交わして次の標的へ足を向ける。

現在午後3時半、俺達太刀川隊は俺の弟子にしてB級個人の黒江双葉と合同で防衛任務に就いている。

黒江を弟子にとつてから約1ヶ月、黒江は既にB級に上がっていてメキメキと腕を上げている。もうB級下位で黒江に勝てる奴はいないだろう。

黒江は現在個人で活動していて防衛任務のシフトは太刀川隊と殆ど一緒だ。太刀川さんが出来るだけ黒江の都合に合わせてシフトを組んでくれている。俺としても弟子と同じ時間帯なら結構修行をつけれるからありがたい。

ちなみに当初唯我が「何でB級1人の都合の為にA級1位のボクら太刀川隊がシフトを調整するんですか?!」とか喚いていたが俺が「お前を叩き出して黒江を後釜にするぞ」と言ったら即座に撤回した。俺としては本気で黒江を後釜にしてもいいと思った。

弟子の成長のスピードに感心しながらモールモツドを片付ける。

一通り片付けて少し離れた所にいる太刀川さん達に合流しようとした時だった。

『比企谷君に双葉ちゃん、また門が発生したから太刀川さん達と合流する前よろしく』

国近先輩から通信が入ったので了承の返事をした。

「はい」

「わかりました」

2人で頷いてトリオン兵がいる場所の情報をもたらした。俺達はそれを受け取ると同時に走り出した。

暫く走り続けるとバムスターが見えてきた。ヤバイな、もう少しで警戒区域を出るな。

そう判断した俺は手からアステロイドを出してバムスターにぶつける。するとバムスターはこちらを向いてくるので走り出し、目が合った瞬間に孤月で斬りつけた。

バムスターの目からは煙が出て活動を停止する。それを確認した俺は国近先輩に連絡を入れる。

「国近先輩、バムスターを撃破しました。回収班の手配をお願いします」

『ほくい、そろそろ今日の防衛任務は終わりだから基地に戻っておいで』

「はい。失礼します」

通信を切って話しかけると黒江を見ると黒江は市街地を懐かしそうに見ている。「どうしたんだ？」

気になって話しかけると黒江はこちらを見ずに口を開ける。

「はい。懐かしくて、つい」

「懐かしい？何がだ？」

「覚えていませんか？ここは私と八幡先輩が初めて会った場所ですよ」

そう言われて見渡してみると納得する。確かにそうだ。まだ道路の一部が壊れたままだ。民家も壊れてないし間違いない俺と黒江が

初めて会った場所だ。

「……本当だ。確かに懐かしいな」

あの時助けた女の子が今は俺の弟子になって一緒に戦っている。運命とは不思議な物だ。俺も懐かしさに耽っていると黒江が振り向いてくる。

「改めて……あの時私を助けてくれてありがとうございます」

そう言っつて黒江はとても綺麗な笑顔を見せてくる。それを見た俺は照れ臭くなり視線を逸らす。

「気にするな。ボーダーとしての仕事をしただけだ」

「それでもですよ。今こうして生きているのは八幡先輩のおかげです。本当にありがとうございます」

黒江は逸らした視線の先に歩いてきて頭を下げってくる。

「だから気にするな。礼は貰ったんだし……」

頭を下げるな。俺はそう言おうとしたが言えなかった。黒江から貰った礼を思い出してしまったからだ。そうだ、あの時に頬にキスをされたんだつた。ヤバイ、思い出しただけで顔が熱くなってきた……

黒江は途中で口を閉じた俺に訝しんだのか顔を上げ俺の顔を見ってくる。すると黒江もハツとした顔になり、直ぐに真っ赤な顔になった。どうやら黒江も俺の頬にキスをした事を思い出したのだろう。

「え、あ、その……」

黒江がテンパっている。珍しい光景だがそれを指摘出来ない。とりあえず謝つとくか。

「悪いな。嫌な事を思い出さして」

「いえ、その……八幡先輩にした事はそんなに嫌じゃなく、……寧ろ八幡先輩が相手で良いと思……あ！」

黒江は途中でとんでもない事を言っつたのを途中で気付いて再び真っ赤になって俯く。俺としてはさつき黒江が言っつた事を聞いてさつきより顔が熱くなつて仕方ない。

暫くの間沈黙が続いていると

『2人共どうしたの？早く戻つといでー』

国近先輩にそう言われて俺達は漸く動き始めた。

帰り道警戒区域にある家の屋根の上を走っていると、

「あ、あの、八幡先輩。さっきは、その……」

隣を走っている黒江が恥ずかしそうに話しかけてくる。俺は大分冷静になっていたので何とかしないとな。

「もう気にするな。あの時は俺も嫌じゃなかった」

黒江は驚いた顔で見ってくる。

「……本当ですか？」

「まあな」

正直そう答えるのは恥ずかしいが今は黒江の恥じらいを無くす事が最優先だから我慢だ。

「お互い嫌じゃないなら気にしないでいいだろ？いつも通り過ごそうぜ」

嫌じゃないなら気にする必要はないからな。黒江も納得した様な顔をして頷くと再び口を開ける。

「……じゃあまた八幡先輩に助けられたら同じ事をしていいですか？」

爆弾を投下してきた。ヤバいまた顔が熱くなってきた。

「あー、いや、それは……」

嫌じゃないし別にされても構わない。構わないが……してもいいって口にするのはちよつと……

内心テンパっている時だった。

「……クスッ」

黒江が横で笑っていた。まさかこいつ……

「お前からかったのか？」

「ふふっ、ごめんなさい。でも今の八幡先輩可愛かったですよ。お先に失礼します」

そう言っただけで黒江は速度を上げて基地へ走り出した。つか一瞬間が見えたがお前も顔が真っ赤だったぞ。そんなに恥ずかしいなら逃げる以前にからかうな。

「……つたく、俺の弟子は純粹過ぎだろ」
ため息を吐いて黒江の後を追いかけた。

「……だからこのタイミングで向こうはグラスホッパーでお前の後ろに回り込んだだろ？お前は迎え討とうとして振り向いた時に焦りが見える。こういう時は直ぐに迎撃しないで香取が跳ぶ前にいた所ぐらいまで移動してから落ち着いて迎撃に移るべきだったな」

「……なるほど。そして距離をとってから旋空を使う、ですか？」
「そうだ。格上と戦う時は焦りは禁物だからな。決して無理な迎撃はするな」

「わかりました」

防衛任務を終えた俺は黒江と2人きりで太刀川隊作戦室にいる。

太刀川さんは加古さんに拉致された。おそらく新作炒飯の試食だろう。

ちなみに俺と出水も声をかけられたが俺は黒江の指導、出水は二宮さんの指導があつた為逃げれた。その時の太刀川さんの絶望に満ちた顔は忘れられない。出水は二宮さんに指導をする為二宮隊作戦室に行った。国近先輩は女子会がどうか言って作戦室にやって来た綾辻と嵐山隊作戦室に行った。唯我？あいつは知らん

女子と2人きりと言ったら普通はドキドキするが会話の内容は色気もクソもない。

今は黒江の個人ランク戦の記録を見て改善点を指摘している。これもトレーニングメニューの一つだ。

ちなみに訓練内容としては

①太刀川隊作戦室のトレーニングステージで俺と一対一の模擬戦

を10本勝負をして孤月の技術を身体に叩き込む

②個人ランク戦で自分より少しポイントが高い相手に1人10本勝負で最低3人に挑む。尚勝負する相手は必ず1種類のポジションに拘らないで色々なポジションの相手と戦う事

③太刀川隊作戦室で戦った記録を見て反省会

が基本だ。場合によっては俺との勝負を増やしたり、ポイントを稼ぐ為互角、もしくは格下とのランク戦もやらせている。尚今日の10本勝負は防衛任務前にやった。

格上と戦う事で嫌でも実践経験が積める。これは俺も太刀川さんに言われてやっていた。まあ俺の頃は風間さんや二宮さんとかが相手で凄く辛かった。

そのおかげか最近になって黒江は俺から勝ち星を挙げ始めた。この調子で頑張って欲しい。

黒江の個人ポイントは現在5235と余り高くないが実力は既にマスタークラス一歩手前だ。そして今回ランク戦で10本勝負で戦った相手は荒船哲次さん、犬飼澄晴さん、香取葉子と3人だ。ちなみに結果は荒船さん相手には5-5と引き分け、犬飼先輩相手には6-4で勝利、香取相手には4-6で敗北している。マスタークラスやその一歩手前とマトモにやり合えているから正に期待の新人だ。

そして現在香取との試合の記録を見ている。黒江にとって少し格上のスコープオン使いは香取と木虎、緑川くらいだ。それより上はカゲさんや風間さんと圧倒的だからな。

閑話休題……

「それとだ、最後から2本目の勝負だが工業地区は場所によっては狭い場所が多いから無理に攻め込まずに広い場所で待つ方が良かったな。狭い場所だと振り辛い孤月に対してスコープオンは自由自在だからな」

「……ですが広い場所で待っていても香取先輩が来るとは思えないんですが」

「その場合は狭い場所と広い場所の境界辺りで香取をおちよくれ。あいつは短気だから広い場所に乗り込むだろう。相手の性格を利用するのも戦術の1つだぞ」

「なるほど……」

黒江が感心している。今回は負けたが次回は勝って欲しいモノだ。そう思いながら反省会を終わらせた。時計を見ると時刻は6時半だった。腹も減ったしそろそろ帰るか。

「黒江、俺は帰りがてら飯を食うがお前は帰るのか？それともランク戦をするのか？」

俺がそう口にするると黒江は驚いた顔をしている。

「珍しいですね。いつもは妹さんの料理を食べてる八幡先輩が」

「まあな。さつき小町から那須隊と飯食うって連絡がきたし」

「那須隊と仲が良いんですか？」

「まあな、小町、日浦とは同じ学校だからな」

「という事は今妹さんは中学2年生ですか？」

「ああ。っと腹が減ったし俺は帰る」

そう返すと黒江は恥ずかしそうに

「じゃ、じゃあ八幡先輩さえ良ければ私も一緒に行っているんですか？」

そう尋ねてくる。そういや黒江と2人で飯を食った事はないな。まあ偶にはいいか。

「わかった。じゃあサイゼでいいか？」

「はい。大丈夫です」

そう言つて俺と黒江は作戦室を出て歩き出した。

サイゼに着いて席に座つてサイゼで最も人気なドリアとデザートを頼み料理がくるのを待つ。

暫くすると料理が来たので食べ始める。黒江はスパゲッティを頼んでモグモグ食べている。

「しかし夕飯で外食は久々だな」

やっぱサイゼならドリアだな。

「そうですね。私も家で食べるのが多いです。ところで八幡先輩の妹さんはどんな人なんですか？名前は聞いた事ありますが会った事はないので」

「天使」

「…………え？」

黒江はポカンとしている。しまった、つい即答してしまった。まるで俺がシスコンみたいじゃねーかよ！

当の黒江は理解したのか頷く。

「…………なるほど、八幡先輩は妹思いなんですね」

しみじみと呟いている。そこには呆れがなかった。これが米屋とかだったらバカにしてくるからシバき倒しているだろう。こんな反応は初めてだ。

「は、八幡先輩?!」

黒江が叫んでくるので我に返ると俺の手は黒江の頭を撫でていた。いかん、あまりに純粋な反応に嬉しくて撫でてしまった。

「あ、悪い」

謝って手を離そうとした時、黒江は真っ赤になって上目遣いで俺を見ってくる。

「…………いいえ、それよりもう少しだけ撫でてくれませんか？八幡先輩の撫で方凄い気持ちが良いので…………」

クソ可愛い。グツとききました、はい。まあ偶にはいいか。

「わかったよ」

頷いて撫でるのを続けた。黒江は目を細めくすぐったそうに髪を揺らしている。その姿を愛でている時だった。

「……お兄ちゃん？」

そんな声が聞こえたので振り向くとそこには妹が呆然と立っていた。俺が小町に話しかけようとする。

「よう、こま……何やってるの？」……は？」

小町がドン引きしている。え？俺何かしたか？とりあえず状況を確認しよう。

俺は今黒江の頭を撫でている。↓撫でられている黒江は小学生↓撫でている俺は目の腐った高校生↓場所は人目があるレストラン

結論、明らかに犯罪臭がします。

そう判断した俺は慌てて黒江の頭から手を離し口を開ける。

「いや、待ってくれ小町」

弁明しようとするも小町はドン引きしたままだ。

「お兄ちゃんが柚宇さん以外の女子と一緒にいるのは小町的にポイント高いけど……、レストランで小学生？、の頭を撫でるのはポイント低いよ……」

小町はドンドン後ろに下がっている。マジでどうしよう？誰か助けて。

俺の願いが叶ったのか

「ごめん！遅くなっちゃった！」

「席は空いてる？」

「空いてますね！……あれ？比企谷先輩に双葉ちゃん？」

サイゼの入り口から引き籠もりオペレーターを除いた那須隊メンバーがやって来た。

「……へ？」

小町はドン引きをしなくなりキョトンとした顔で俺と黒江を見つめる。

「へ〜！お兄ちゃんの弟子なんだ！お兄ちゃんも教えてくれても良かったのに！」

現在小町は黒江に色々な事をガンガン聞いていて黒江はタジタジしている。

あれから那須隊の3人が事情を説明してくれたから小町は納得してくれた。那須隊感謝だ。

「悪かったよ」

「私は双葉ちゃんと戦った事はないけど強いのか？」

「強いよ。私は戦った事あるけど負け越してるしね」

那須の質問に熊谷が答える。

「そうなんだ。今度私も戦わない？」

「はい。その時はよろしくお願いします」

「うん」

黒江は頭をペコリと下げ那須は微笑んでいる。

「那須はマスタークラス一步手前だから良い経験になるな」

「比企谷先輩はどんな訓練をしてるんですか？」

日浦がそんな事を聞いてくる。

「あん？俺がやってるのは模擬戦で孤月の使い方を身体に叩き込ませる事と黒江と一緒に黒江がやったランク戦の反省会だな」

「ランク戦の対戦相手は比企谷が決めてるのか？」

「基本は黒江に任せてる。強いて言うなら6000以上9000以下のポイントの相手だな。それ以上のポイントの持ち主は今の黒江じゃ厳しいからな」

「実戦を中心にしてるんだね」

「まあな、俺が太刀川さんにやられた訓練に少しアレンジを加えた」

「そうなんだ。ところで双葉ちゃんは比企谷君相手に勝った事はあるのか？」

「あるにはありますが……300試合近く戦って勝ったのは5回だけです」

「でも入隊して1ヶ月でしょ？なら凄いいじゃない。私なんて入隊して1年以上経ってるけど全然比企谷に勝てないし」

「そう言えばお兄ちゃんってどれくらい強いんですか？A級1位部隊に入っているからかなり強いとは思うんですけど」

「私は10本勝負で2本取ればラッキーってレベルね。玲は？」

「私？1回だけマグレで3本取れた事があるわ」

「お兄ちゃんってそんなに強いんだ?!」

「まあ師匠が個人ランク1位だからな」

あの人は怪物だ。今でもよく10本勝負をしているが最高成績は3ー7だしな。

太刀川さんの強さに戦慄している中小町は黒江に質問を続ける。

「で！双葉ちゃんはお兄ちゃんの弟子だけど不満とかってあるの?!」

お前は何つー質問してんだよ？ボロクソに言われたら泣くぞ俺。俺が心配している中黒江は首を横に振る。

「ないですね。私は八幡先輩の弟子で本当に良かったと思います。八幡先輩優しいですし」

黒江がそう返すと小町は一層興奮する。

「え？双葉ちゃんお兄ちゃんにどんな風に優しくされてるの?!」

お前興奮し過ぎだ。少しは自重しろ。那須隊3人は呆れながらも止めないが止めろよ。

呆れている中黒江は語りだす。

「そうですね…、修行以外にも私の勉強の為に時間を取ってくれたり、防衛任務上がりに飲み物を奢ってくれたりしてくれます。後は偶に頭を撫でてくれますけどそれが凄い気持ち良かったり、帰りが遅い時は家まで送ってくれます」

あのー、黒江さん？確かに事実だけど俺がいる場所で言わないでくれない？改めて思うと結構恥ずかしいからね？

それを聞いた小町は喜んでいる。

「へえ、お兄ちゃん優しいね」

「その生暖かい視線は止めろ」

見ると那須と熊谷、日浦も生暖かい視線で見ってくる。呆れていると小町が「これは脈あるかな？」とか呟くと黒江は真っ赤になる。脈？あるに決まってるんだろ？ないなら死んでるからな？

小町の発言に疑問を抱きながら食事を続けた。

食事を済ませ会計をすると既に時計は8時を回っていた。店を出ると

「じゃあ小町は玲さん達と買い物をするからお兄ちゃんは双葉ちゃんを送ってあげなよ!」

小町が食い気味に言ってくるが目が怖いぞ?

「わかったわかった。じゃあ那須、済まんが小町をよろしくな」

「うんわかった。双葉ちゃんもまたね」

「はい、失礼します」

「双葉ちゃん今度はうちに遊びに来てね」

去り際に小町がそう叫んで那須達は去って行った。

「じゃあ送るわ」

「はい、ありがとうございます」

こうして2人で黒江の家路に歩いた。

歩く事20分漸く着いた。

「じゃあ次の防衛任務は明後日の昼からだからよろしくな」

「わかりました。……それとお願いがあるんですが」

「何だ?」

「……その、テストが近いので八幡先輩さえ良ければ明日勉強教えてくれませんか?」

モジモジしながらそんな事を言ってくる。別に恥ずかしがる必要はないだろ?

「別にいいぞ。と言っても午前中は米屋のバカの間試験対策しなきゃいけないから無理だけどな」

昨日三輪からヘルプの連絡が来たからな。面倒だが仕方ない。流石に知り合いが留年するのは避けたいしな。

「ありがとうございます。じゃあ2時くらいにお願いしてもいいです

か？」

「わかった。2時にうちの作戦室に来てくれ」

「わかりました。…送ってくれてありがとうございます」

「気にするな、じゃあな」

挨拶を交わし自分の家に向かって歩こうとした時だった。

「八幡先輩！」

いきなり黒江に呼ばれて振り向くと可愛い笑顔を浮かべて

「おやすみなさい」

そう言つて家の中に入って行つた。それを見た俺は若干照れている事を自覚した。

「………つたく返事くらいさせろよ」

既に家に入っていない弟子に呟いて再び歩き始めた。

加古望は比企谷八幡に度々接触する。

11月も中旬になりかなり寒くなってきた。俺は暖かいコートを来てシヨツピングモールを歩いている。今日は好きな作者の新作小説の発売日なので本屋に向かっている。

本屋に到着すると同時に携帯が鳴るのでメールを見ると黒江からだ。内容は今日は家の用事が出来たから訓練は休ませて欲しいとの事だった。家の用事なら仕方ない。俺は『了解』と打ち込んで送信した。

しかしそうなると今日は暇だな……

(暇潰し用に他にも何冊か買っておくか)

そんな事を考えながら書店に入った。

結局、目的の本以外に2冊買って本屋を出た。さてどこで読むか。

シヨツピングモールからだの家よりボーダー本部の方が近いから作戦室で読むか。一瞬そう思ったが止めた。もしも作戦室に国近先輩がいたらゲームする事になって1日が潰れる。しかも今日は土曜日だから下手すりや明日も潰れるかもしれない。

そう判断して家で読む事にした。一度決まると迷いはなくなったので早く帰って読むか。

軽く決心しながら歩こうとした時だった。

「あら？比企谷君？」

後ろから声をかけられたので振り向くと知った顔がいた。

「どうもっす。加古さん」

そこにはA級加古隊隊長加古望さんがいた。

「奇遇ね。比企谷君は本を買いに？」

「そうです。加古さんは？」

「私は知り合いと映画を見てきたの。終わってちようど今解散して家に帰ろうとしたら比企谷君を見つけたの」

「なるほど……、んじや俺はこれで」

頭を下げて立ち去ろうとすると肩を掴まれる。

「待つて、実は比企谷君にお願いがあるんだけどいいかな？」

「お願い？加古さんが誰かにお願いするなんて意外だな。少し興味が湧いてきた。」

「わかりました。何でしょうか？」

「ありがとうございます。話す少し長いからあそこのカフェに行きましょう」

そう言うってスタスタと歩いて行く。加古さんみたいな美人とカフェ行くなんて緊張するんだが…… まあ本人は既に注文をしてるから行かなくちゃいけないな。どんだけマイペースなんだよ？

加古さんとカフェの席についてコーヒーを飲む。寒い身体には暖かいコーヒーが良いな。暫くは他愛のない雑談をして一区切りついたので本題に踏み込んだ。

「それでお願いつて何ですか？」

俺がそう口にするのと加古さんはコーヒーを一口飲んで口を開ける。

「それは、比企谷君の弟子の双葉ちゃんについてなのよ」

「黒江？あいつ何かやったんですか？」

「違うわよ。問題は起こしてないわよ」

なら良かった。まああいつは礼儀正しいからないとは思ったが。しかしそうなるって何で加古さんは黒江の話を出したんだ？俺の考えを読んだのか加古さんは口を開ける。

「双葉ちゃんについてなんだけど……あの子、うちの部隊に入れたくてね。それで比企谷君に話しておこうと思って」

……マジか？そういう話か……

まあ理由はわかる。黒江は師匠として鼻真目なしに見ても強い。才能があるのにそれに驕らず俺に言われた以上の特訓メニューをこなしているしな。その結果入隊して約2ヶ月だが黒江の実力は既にマスタークラスに届いている。実際この前負けたとはいえ米屋相手に4ー6まで迫ったからな。見物人の二宮さんも珍しく褒めてたし。その上黒江のインシヤルは『くろえ』とKだ。加古さんはチームメンバーのインシヤルをKで統一するというよくわからん考えを持っている。未だに理由は知らないが。まあ多分加古さんのよくわからん感覚だろうけど。

閑話休題……

「まあ確かにあいつは個人ですからね。勧誘しない理由がありません。寧ろ今まで勧誘されてない方が不思議ですし」

俺がそう口にするのと加古さんは若干驚いた顔で見ってくるがどうでしたか？

「……あの、どうかしましたか？」

「私はてっきり比企谷君が双葉ちゃんを何処のチームに入れるのか決めると思っていたのよ……。だから今日比企谷君にうちに来よう交渉するつもりだったんだけど」

「は?!」

つい素っ頓狂な声を出してしまう。加古さんもキョトンとしながら口を開ける。

「知らないの？ボーダーでは双葉ちゃんが入るチームは比企谷君が決

めるって噂されてるわよ?」

「何ですかそれ?完全にデマですから」

弟子を束縛する趣味は俺にはないぞ。とりあえず話を戻すか。

「俺は黒江が入りたいと思うチームならそこに文句はつけません。……まあ、出来るなら黒江の強さを発揮出来る優秀なチームがいいですけど、加古さんのチームなら不満はありませんよ」

かつてA級1位にいた加古さんが隊長、そして数少ない特殊工作兵の喜多川、戦闘員は2人だが立派なA級部隊だ。そこに黒江が加われれば戦術の幅も広がりA級最下位から上に上がれるだろう。

ちなみに今のA級は

- 1位 太刀川隊
 - 2位 二宮隊
 - 3位 冬島隊
 - 4位 風間隊
 - 5位 草壁隊
 - 6位 影浦隊
 - 7位 三輪隊
 - 8位 加古隊
- ランク外 玉狛第一

となっているが黒江が入ってチームに慣れれば中堅くらいには上がれるだろう。

「じゃあ比企谷君の許可はいらないのね?」

「はい。もし良かったら黒江の勧誘する場所を設けるのを手伝いましょうか?」

「いいの?」

「構いませんよ。黒江のシフトは太刀川隊と合わせていますのでわかりやすいですし」

「じゃあお願いするわ。あ、これは私のシフトね」

そう言って携帯にデータを渡してくる。

「この赤いマークが予定のない日ね」

「わかりました。とりあえず黒江に話をしておきます」

「どうもありがとう」

「いえ」

加古さんから礼をもらいこの話は終わりだ。その後は他愛もない雑談をしてティータイムは終わった。

余談だが会計の際に自分の分は自分で払おうと財布を出したら「歳上のお姉さんの奢りよ」と艶のある視線で頭を撫でられた。加古さんの仕草にドキドキしていたら何故かゾクリとも寒気に襲われたが何だったんだ？

翌日、現在俺は作戦室で出水と一緒に餅を食べている。太刀川さんの焼いた餅は絶品だ。焼いた本人は報告書の不備とかで忍田本部長に拉致された。ドンマイ。

餅を食べていると作戦室に黒江が入ってきた。

「来たか」

「よーす黒江ちゃん。餅食べる？」

「こんにちは、頂いてもいいですか？」

「ほいよ」

出水が差し出した餅を黒江はハフハフしながら食べているが小動物みたいで凄く可愛いな」

「は、八幡先輩?! い、いきなり何ですか?!」

黒江が真っ赤になって叫んでくるがどうかしたか？

「やるな、比企谷。まさか堂々と可愛いって発言するなんて」

出水が感心した様に言うが声に出してたのかよ?! ヤバイ恥ずかしい。い。

「あー、すまん」

「い、いえ……私は、八幡先輩にそう言って貰えて、その、嬉しいですから……」

それを聞いて俺と黒江は俯く。この空気はアレだ。凄い顔が熱くなる。こっそりと顔を上げると黒江と目が合っただけで恥ずかしくなり再

び俯いた。これを3回以上繰り返し返した。途中で出水にチラリと視線を向けるもため息を吐いて助ける気配は全くない。

結局元の空気に戻ったのはそれから30分後だった。

何とか落ち着いたので餅を食べるのを再開する。暫くの間食べて一息ついたので黒江に話しかける。

「黒江、訓練を始める前にお前に話がある」

「はい、何ですか？」

「実は加古さんがお前をチームに入れたらしいんだよ」

俺がそう言うのと黒江は驚いた。出水は一瞬驚いたが納得したように頷く。

「あー、確かに黒江ちゃんは加古さんに気に入られるだろうな」

「私が、ですか？それに気に入られるって理由はあるんですか？」

そうか、黒江は知らないみたいだな。そう思い加古さんのチームのコンセプトについて話した。

「……なるほど。イニシャルについてはよくわかりませんが、話はわかりました」

「それでどうする？チーム入りは考えてるのか？」

「今の所どちらでもないですね。まあ話は聞いてみます」

「わかった、じゃあこれが加古さんのスケジュールだから赤いマークがある所から暇な日を選んでくれ」

そう言つて携帯を見せると黒江は少しの間唸り、俺に携帯を渡す。

「じゃあ明後日の夕方6時から7時の間にします」

「はいよ。加古さんには俺が連絡しとく。当日は俺も付いてこうか？」

そう尋ねると黒江は暫く考えている。そしてゆっくりと首を横に振った。

「……いえ、私一人で大丈夫です。自分の事ですから自分でしっかり考えたいです」

意思是固そうだ。なら俺は何も言うまい。

「わかった。じゃあ俺が加古さんに連絡を入れたら訓練を始めるぞ。出水、悪いが国近先輩いないからお前がステージ作ってくれ」

「はいはい」

黒江を弟子に取ってから国近先輩がいない時は出水がステージを作ってくれている。本当に申し訳ないな。

出水に謝罪しながら加古さんに電話をかける。すると偶然にもワシントンコールで出た。

『比企谷君?もしかして聞いてくれた?』

「はい。黒江は明後日の6時から7時の間をお願いとの事です」

『わかったわ。じゃあ場所はうちの作戦室でいいかしら?』

「黒江にそう伝えておきます。では……」

『ありがとうね』

通話が切れたので黒江に向き合う。

「集合場所は加古隊作戦室だ。当日は作戦室まで俺が案内する」

「ありがとうございます。じゃあ早速訓練よろしくお願いします」

一つ頷きトレーニングステージに入った。さて今日も弟子を強くないとな。初めは面倒と思っていたが今は割と楽しい。

(いつか俺を超えて欲しいな)

そう思いながら孤月を抜いて黒江とぶつかった。

この日は8-2で俺が勝ったが最近になって勝率が安定してきた。次は3勝を目標にして欲しいな。

約束した当日、俺は今黒江と一緒に廊下を歩いている。加古さんは悪い人じゃないがマイウエイをマイペースでモデルウオークで歩く人だから黒江が断つても諦めなさそうなのが怖い。……いや、大丈夫か?

そう思いながら歩くと作戦室前に加古さんがいたので挨拶をする。

「お待たせしました。黒江は連れてきました」

「こんばんわ加古さん」

「こんばんわ双葉ちゃん。比企谷君もありがとうね」

「いえ、じゃあ黒江しつかり考えろよ」

「あら？比企谷君は参加しないの？」

「ええ。黒江は自分の事だから自分で決めると言いましたから黒江に一任します。……ただ、黒江が嫌がってるのに無理に誘うなら諦めさせますので」

軽く睨むが加古さんは笑いを崩さない。

「それは大丈夫よ。無理矢理仲間に取り入れてもそれはチームじゃないから」

まあそうだよな。無理矢理入れてもモチベーションが上がらないからチームランクは下がるだろう。

「そうですか。なら安心です。じゃあまた後でな」

「はい。ではまた」

挨拶を交わし黒江は加古隊作戦室に入っていった。ドアが閉めたのを確認すると息を吐く。

(…… あいつに一任はしたが……何か凄い気になるな)

内心モヤモヤしながら自隊の作戦室に戻った。

作戦室に戻り1時間くらい本を読んでいるが全然内容が入らないので読むのを止めて寝転がった。すると見兼ねたのか出水が話しかけてくる。

「お前がこんなに過保護だったとはな……」

意外そうに聞いてくる。確かにそうだ。

「まあ黒江と過ごす時間は結構楽しいしな。あいつが強くなってるのがわかると嬉しい」

弟子を取る前はそんな事一切想像出来なかったしな。

「そんなもんか？よくわからん」

「それはお前の弟子は二宮さんだからだろ？」

「あー、確かにな……」

二宮さんが強くなっても余り嬉しくない。寧ろ恐怖に感じるだろ？あの怪物、当時からトップクラスだったにもかかわらず出水の技術を身に付けようとしてるし。恐怖以外は何も湧かねーよ。

そんな事をモヤモヤ考えていると作戦室からノックがきたので

「はい。どちら？」

『あ、八幡先輩。黒江です』

ん？黒江か。もう終わったのか？まあとりあえず開けるか。ロツクを解除すると

「し、失礼します」

そう言っに入ってきた黒江を見て絶句した。

黒江が着ている隊服はいつものエンブレムなし太刀川隊隊服ではなく黒地に紫を基調としたセクシーな隊服だった。しかも半袖でショートパンツスタイルだから健康的な手足が丸見えで凄く可愛い。そして胸には羽の部分にKと刻まれた蝶のエンブレムがあった。その隊服を着ているという事は……

「へえー、加古隊に入ったんだ！」

出水がテンションを上げている。

「はい。加古さんとは気が合いましたので」

なるほどな、まあ隊長と気が合うなら問題なくやれるだろうから安心だ。

「とりあえずおめでどう。加古隊を強くしてやれよ」

俺がそう返すと

「ええ。そしていつか貴方達からA級1位の座を奪ってみせるわ」

黒江の後ろから加古さんがやって来て宣戦布告してきた。それに對して出水は

「そうはいかないっすよ。A級1位は太刀川隊のモノですから」

不敵に返す。まあ俺も同意見だ。1位の座は太刀川さんにこそ相応しいと思っているしな。

「まあそれはいずれ……、それより比企谷君」

加古さんが俺の事を見てくる。

「何ですか?」

そう返すと加古さんは楽しそうに黒江を俺の前に出してくる。

「双葉の隊服なんだけど比企谷君の好み?」

は?!何つー事を聞いてくるんだよ?!正直言つてメチャクチャ好みだよ!でも流石に面と向かつては言いにくい。

悩んでいると

「……もしかして似合いませんか?八幡先輩はこんな隊服が好みって聞いたんですけど」

悲しそうに聞いてくる黒江を見て罪悪感が湧いてきた。好みって言うのは恥ずかしくて嫌だが悲しそうな黒江を見るのはもつと嫌だ。

すると俺の口は

「いや、好みだ。凄く可愛いぞ」

いつの間にか開いていた。

「あ、ありがとうございます……」

真っ赤になって礼をする黒江を見て俺も恥ずかしくなってきた。視界の端では出水と加古さんがニヤニヤしてくるのが何か凄いイラついた。後でランク戦でボコボコにしてやる。

そう決心しながら黒江が落ち着くのを待ち続けた。

黒江が加古隊に入って2週間経った頃、俺は今加古さんに呼ばれ力

フエにいる。いきなり呼び出して何かあったのか？

「それで何の用ですか？」

「それはね……」

そう言っただけで加古さんはバッグから2枚のチケットを取り出してきた。

「これは……遊園地のチケット？」

見るとそこには夢の国ディステイニールランドのペアチケットが2枚あった。しかしどうして俺に？まさか加古さんと一緒に行くのか？!

「違うわよ。双葉とよ」

「ナチュラルに心を読まないでください。黒江とですか？」

「ええ。3日後の日曜日、双葉の誕生日なのは知ってるわよね？」

「まあ一応」

何か以前国近先輩と話しているのを聞いて、国近先輩から覚えておけって言われたからな。一応誕生日プレゼントも用意してある。

「それでね。双葉は前にディステイニールランドに行きたいって言っただからチケットを用意したの。だから比企谷君、双葉と行ってあげてね」

「いやいや何で俺なんすか？」

「だって双葉は比企谷君と行きたいだろうし」

「それはないでしょう。俺なんかと言ってもあいつは楽しめないだろうし、行くなら加古さんや幼馴染の緑川がいいですよ」

こんな目の腐った男といっても楽しくないだろうしな。そう思っていると加古さんは呆れた様な顔をしてくる。加古さんのそんな顔は珍しいな。

「……双葉の想いは当分届かなそうね」

何か小さい声でボソボソ言っていたがよく聞こえなかった。

「加古さん？」

「……まあいいわ。とにかく比企谷君は双葉と行く事。良いわね？」

強い口調で言ってくる。

「いや、でも「比企谷君？」……行きます」

怖すぎますよあなた……

「よろしい。じゃあ渡すわね。ちゃんと誘いなさいよ」

そう言って加古さんは去って行った。手元にはペアチケット。誘わないと殺されそうだし誘うか。まあ多分断られるだろうけど。

加古さんとカフェでの一時を済ませ俺は今作戦室に歩いている。すると曲がり角を曲がった所で

「あ、八幡先輩。今日もよろしくお願いします」

加古隊の隊服を着た黒江がいた。丁度いいタイミングだな。そう判断して口を開ける。

「なあ黒江」

「何ですか？」

「来週の日曜日って空いてるか？」

俺がそう聞くと黒江は何故かテンパリだった。

「え?!あ、空いてますけど!」

「じゃあお前さえ良ければディスプレイニードランドに行かないか？」

そう言ってペアチケットを差し出すと黒江はアタフタしながらチケットを落としかける。

「お、おい。大丈夫か？」

「は、はい!あ、あの、それって、八幡先輩と2人ですか?!」

「ああ。一応そうだが嫌だったら無理しないで「嫌じゃないです!!」お、おう」

途中で遮った黒江の叫び声にタジタジしてしまう。黒江も気付いたのか真っ赤になる。

「……あ。す、すみません。でも私は八幡先輩と行きたいです」

チラリと上目遣いをしてくる黒江から目を逸らす。

「じゃ、じゃあ行くって事でいいんだな？」

「は、はい……」

黒江も了承したので行く事になった。てつきり断られると思っていたので完全に予想外だ。

この結果に疑問符を浮かべながら黒江と一緒に作戦室へ歩き出した。

比企谷八幡と黒江双葉は夢の国に遊びに行く

日曜日当日、俺は朝から出かけていた。電車に乗ってボンヤリしていると窓から白亜の城や煙を上げる火山が見えてきて、柄にもなくテンションが上がった。

目的地の舞浜駅に着いて電車から降りてホームを歩いていると

「八幡先輩、おはようございませすー」

後ろから声をかけられて振り向くと黒江がいた。

「おはよう黒江。早いな」

「は、はい。実はディスティニーランドに行くのは初めてでワクワクしちゃって……」

恥ずかしそうにしているのを見て苦笑しながら頭を撫でる。

「気にするな。初めてなら当然だ。昔は俺もワクワクしてたしな」

そう言っつて黒江を元に戻しながら改札へ歩き出した。

改札を出て歩いて入場待ちの列に並び、チケットをパスに引き換えエントランスゲートから入る。広場に入ると西洋風の建物が並ぶメインストリート、その背景にある白亜の城。改めて見るとその景色に圧倒されるな。

黒江を見ると白亜の城をキラキラした目で見ていた。初っ端から楽しそうで何よりだ。

「黒江、折角だし写真でも撮ろうか」

初めてなら何度も思い出せるように写真を撮っておいた方がいいだろうしな。

すると黒江はモジモジしながら

「じゃ、じゃあ一緒に撮ってくれませんか？八幡先輩と一緒に写りたいですから」

マジかよ？まあ今回は黒江の誕生日だし黒江の要望くらい聞くか。

「……わかったよ。あ、すみません。写真お願いします」

近くのスタッフにデジカメを渡して白亜の城がバックに写るように黒江と並ぶ。すると黒江が手を握ってきたので見ると真っ赤になりながらも笑顔を浮かべている。そんなに恥ずかしいなら握るなよ……

苦笑しているとフラッシュがしたので撮れたのだろう。スタッフはカメラを渡した後に一礼して去って行った。

写真を確認すると

「……やっぱり目が腐ってるな」

俺の目が腐っていて危ない感じがする。黒江と手を繋いでいる事もあって下手すりゃ捕まりそうだな。

「別に目が腐っててもいいじゃないですか。私は気にしないですし、性根が腐っている訳じゃないんですから」

そう言っただけで貰えるとは思わなかった。正直凄く嬉しい。

「……ありがとな」

「いえ、事実を言っただけです」

軽く笑いながら手を振る黒江に感謝しながらパンフレットを取り出した。

「それじゃあ何処に行きたい?」

「……じゃあ此処に行きたいです」

そう言っただけで黒江が指差したのは3大コースター系アトラクションの1つのスペースユニバースマウンテンだった。まあ最初に行くとしたら3大コースターのどれかだろうな。

「わかった。行こうぜ」

「はいー!」

意見が合ったので目的の場所に移動し始めた。

スペースユニバースマウンテンに着いて暫く並んでいると

「あの、八幡先輩。あそこに途中退出口のマークがあるんですがそんなに怖いんですか?」

黒江が不安そうに聞いてくる。

「まあ人によってはな。怖いのもあるけど結構気分が悪くなる事もあ
るしな。もしも不安なら無理しなくていいぞ」

「…… いえ、大丈夫です。折角ですから」

まあ本人が言ってるならいつか。何事も経験だしな。1つ領いて
前へ歩き始める。

並ぶこと30分、遂にコースターに乗りゆっくりと動き始めた。黒
江は不安そうにバーを握っているが速くなるのはまだまだ先だぞ？

コースターはゆっくりと登り始める。今はゆっくりと登っている
が頂上に着いた瞬間猛スピードになるだろう。

「黒江、頂上に着いたらアレだから今のうちに覚悟しとけ」

「は、はい」

黒江は未だ不安そうだ。それを見た俺は黒江の手を軽く握る。

「大丈夫だ。死ぬ訳じゃないんだし」

黒江は驚いた顔で俺を見てくるが直ぐに笑顔を浮かべる。

「……ありがとうございます」

どうやら不安は少し拭えたようだな。

そう思っていると遂に頂上に着き物凄い速度で走りだす。その上、
上下左右に何度も急なタイミングで曲がるので何がなんだがわから
ない。

「キヤアアア！」

隣では黒江が叫んでいる。こんな黒江を見るのは初めてだから凄
い新鮮に感じるな。現実逃避気味に俺もコースターによって揺らさ
れた。

スペマンから降りると、足元がふらふらした。高速でぶん回される
間は感じなかったが、一気に重力が戻ってきたような感覚に襲われ
る。隣では黒江が「ううっ…」と呻きながらふらふらしている。

「大丈夫か？少し休むか？」

「……じゃあお願いしてもいいですか？」

「わかった」

黒江を近くのベンチに座らせお茶を渡す。

「ほら、これ飲め」

「あ、ありがとうございます」

申し訳なさそうにお茶をチビチビ飲む黒江の隣に座りパンフレットを出す。

「その様子じゃ当分コースター系は無理だろうから次からは暫く激しくないヤツにするがいいか？」

「……すみません。私の所為で……」

「気にするな。それにコースター系じゃなくても面白いのは沢山あるんだ。コースター系は体調が戻ったらな」

「……はい」

俺は申し訳なさそうな顔をしている黒江を励まそうと優しく撫で続けた。

休む事15分、黒江は立ち上がった。

「もう歩けます。お待たせしてすみません」

「気にするな。次は何処に行きたい？今決められないなら、この場所から反時計回りで回るか？」

「……そうですね。とりあえず適当に回って良さそうな物があったら……でどうでしょうか？」

「わかった。行こうぜ」

方針が決まったので近くのアトラクションに向かって歩き出した。次のアトラクションは『パンさんのバンブーフアイト』だ。パンさんはデイスティニーランドの人気キャラだ。まあ人によつては目が可愛くないって理由もあり好き嫌いが別れる。

暫くの間、並んでいるとライドが見えてきたから後10分で乗れるだろう。ボンヤリとライドを見ているとある一点に目がとまった。

そこには黒髪のロングヘアの美少女がいた。しかし問題はそこではない。

(まさかの1人でライドに乗る奴がいるとは……)

この世に俺以上のぼっちがいるなんて……。そう思っているとその少女が乗ったライドは出発して視界から消えた。

「……八幡先輩?もう次ですよ」

袖を引つ張られたので振り向くと黒江が訝しげな顔をしている。不審に思われたみたいだな。

「ああ、悪い悪い」

「ならいいですけど……。体調が悪いなら無理しないでくださいね」

心配そうな目で見てくる。悪い事したな。

「大丈夫だ。だから乗ろうぜ」

「あ、はい」

俺達の番なのでライドに乗る。そしてライドのドアが閉められると、係のお姉さんに手を振られ「バンブーフアイトの世界へ行つてらっしゃーい」と見送られた。

ライドは暗闇の中へ移動していき、進んだところで、急に赤やオレンジの光が弾ける。いよいよ始まりだが問題が1つある。

「あの、黒江?近いんだけど……」

このライドは3人か4人は乗れるライドだ。だから2人ならかなり余裕がある。しかし何故か黒江は俺に近寄ってくる。ヤバイヤバイ凄いい良い匂いが刺激してくる。

「……ダメですか?」

上目遣い、グツとききました。これを狙ってやってないからタチが悪い。マジでロリコンに目覚めそうだ。可愛い過ぎる。

「……好きにしろ」

照れた顔を見られたくないので逸らしながら了承する。黒江から「ありがとうございます」と言われて近寄られる。

ドキドキしながらもライドは進み、大きなスクリーンの前に出た。スクリーンの中のパンさんは縦横無尽に駆け回り、そして、ぬいぐるみのパンさんがアトラクション内を所狭しと跳ね回る。俺達が乗っ

ているライドもパンさんの動きに応じるようにアトラクション内を動き回る。

「わあっ……い！」

「おーっ、これすげえな」

俺が素直な感想を漏らすと同時に黒江は感嘆をあげている。いくら普段がクールでも小学生。年相応の笑顔を浮かべている。

それを見て嬉しく思いながらアトラクションの内容を楽しんだ。

『パンさんのバンブーフアイト』を出たすぐのところにパンさんシヨップがあった。

「八幡先輩。少し寄ってもいいですか？」

「いいぞ」

黒江はさつきまで本当に楽しそうだったからな。気に入った物があつたら買うだろうな。

黒江に続いて店に入るとぬいぐるみやパペット、キーホルダーなど色々なパンさんグッズがあった。中々良いものもあるな。

店の中を歩いていると黒江が20センチくらいのパンさんぬいぐるみを持って目を輝かせている。

「気に入ったのか？」

「はい。可愛いですね、これ」

「そうか。欲しいなら買ってやるぞ」

俺がそう口にするると黒江は驚いて首を横に振る。

「い、いえーそれは悪いですから自分で払いますよ」

「気にするな」

つーか弟子（しかも小学生）が欲しい物があるのにただ見ているだけってのはアレだしな。

「……でも」

まだ渋る黒江。仕方ない理由を作るか。

「じゃあこう思え。お前この前孤月でマスタークラスになっただろ？その祝いつて事で」

そう強い口調で言うと黒江はウンウン唸りやがて申し訳なさそうに口を開ける。

「……じゃあ買ってもらっていいですか？」

おずおずとぬいぐるみを差し出してくるので受け取りレジへ歩き出した。

値段は1500円とまあまあな値段だが1年以上前からA級にいた俺からすれば問題なく払える。

会計を済ませ店を出ると黒江がいたのでぬいぐるみの入った袋を渡す。黒江は受け取ったら頭を下げてきた。

「どうもありがとうございます。大切にしますね」

「喜んでくれたなら何よりだ」

「……そしてこれからもっと強くなります」

「そいつは楽しみだな」

「はい、いつか八幡先輩も越えたいです」

「悪いがそう簡単には勝たせねーよ」

実際にそう思っているが越えて欲しいとも思っている。これが師匠になつた影響か？

「まあ、それはさておき、そろそろ飯にするか？」

時計を見ると丁度正午だったしな。少し小腹がすいてきた。

「そうですね。少しお腹が空いたので是非」

「じゃあ次に行くアトラクションの近くの飯屋で食おうぜ。次は何処に行きたい？」

「それでしたら体調も戻りましたしコースター系に乗りませんか？」

体調が戻ったらなら乗るのが定石だな。黒江の意見に賛成だ。

「わかった。じゃあブラックサンダーの近くに美味しい店を知ってるからそこにしないか？」

「いいですよ。じゃあ行きましょう」

そう言つて黒江は楽しみなのか俺の手を引っ張ってくるので転ばないように早足で動き始めた。

レストランに着いたので俺はハンバーグランチを、黒江はカレーを頼み席に座った。幸いにも席は直ぐに座れたので一息つく。

少しして食べ始めるがやはり美味しいな。結構高いけど。つーか何でランドの料理はあんなに高いんだ？

「それにしても八幡先輩のそれ、美味しそうですね」

「まあな。昔食ったら気に入ってな。良かったら一口食べるか？」

「じゃあもらってもいいですか？」

「いいぜ。ほらよ」

ハンバーグを小さく切って黒江のカレーの上にのせる。黒江はカレーを少し絡め食べ始める。

「あ、美味しいです。ありがとうございます」

満足そうに笑っているのを見て俺も嬉しくなってきた。やっぱり黒江は天使だ。俺の中では小町、国近先輩、黒江が俺の心のオアシスだ。

癒されていると

「良かったら八幡先輩も一口いりますか？」

そう言われてカレーは食った事がないので興味が湧いてきた。

「んじゃあ、一口貰って「どうぞ」……んっ?!」

俺が了承すると同時に黒江は俺の口にカレーを入れてきた。俗に言う「あーん」ってヤツだ。

「お前……いきなりやるなよ」

「ごめんなさい。八幡先輩を驚かせたくて」

小悪魔な笑みを浮かべている黒江を見て照れ臭くなったので目を逸らした。

するとそこには携帯を持った犬飼先輩と当真さんがいた。

……え？何でいるの？つーか今の撮られたの？

よく見たら隣では荒船さんと村上先輩が呆れて2人を見ていた。まさかこんな所にいるとは予想外だ。

余りの状況にポカンとしてしていると犬飼先輩と当真さんはニヤニヤしながら敬礼をしてレストランから出て行った。荒船さんと村上先輩は俺に向けて両手を合わせて軽く頭を下げてから2人を追うように店を出た。

とりあえず俺は思った。

(最悪だ！絶対にボーダーで広められる！マジで渾名が腐り目から口リコンになりそうだ)

目の腐った高校生が小学生にあーんされてる写真なんて客観的に見て完全にアウトだ。マジでヤバい。特に米屋や太刀川さんに知られたら絶対に笑われる。

(いや、待て。もし2人がからかってきたら米屋はランク戦で潰せばいいし、太刀川さんは今のレポートの提出状況を風間さんと本部長にチクると脅せば笑わないだろう)

内心で今後の対策を考えていると

「……八幡先輩？」

黒江が心配そうに聞いてくる。そうだ。それは後回しでいい。今は黒江の誕生日だから黒江を楽しませる事だけを考えなきゃな。

「いや、大丈夫だ。食べようぜ」

「は、はい」

一度切り替えてからは写真の事を忘れて食事を楽しむ事が出来た。

「い、ち、そ、う、じ、ゃ、あ、」

「ごちそうさまっと、んじやブラックサンダー行こうぜ」

「はい。行きましよう」

黒江は楽しそうに俺を手を引つ張って歩き出した。楽しんでいるようで何よりだ。これからもっと楽しませてやらないとな。

そう思いながらブラックサンダーの入口に入り並びだした。

夜になると臨海部に位置するランドに冷たい風が吹き始める。余り風が強いとパレードの後の花火も中止になるがアナウンスがないから大丈夫だろう。

あれから俺達はブラックサンダーに乗った後、いくつかアトラクションを回り、自分の隊への土産を買ったりした。

歩きっぱなし、立ちっぱなしの状態が続くと疲れがたまってくる。今後の予定はスプライドマウンテンに乗ってから花火を見て帰る予定だ。誕生日プレゼントは花火の時か別れる時に渡せばいいだろう。

スプライドマウンテンの近くに着くと歓声や悲鳴が聞こえてくる。黒江はかなり驚いている。

「あんな高い所から落ちるんですか？」

「まあな、でも落ちる時は結構気持ちいいぞ。落ちる所以外はゆつくりだし」

落ちる所以外は凄いノンビリとしたアトラクションだしな。中に入ると洞窟の様になっていて相変わらず雰囲気があるな。黒江は周りを見渡してるし楽しそうだ。

暫く待っているると漸く俺達の番だから船に乗る。すると直ぐにア
ナウンスが始まり船が動き出す。

ゆつくりと進みながら景色が変わる。水場ではカエルが飛び回り、
暗くなったと思えば鳥が不吉な言葉を話す。前から光が見えたと
思ったら浮遊感が襲う。一回目の落下だな。

「キヤアアア！」

隣では黒江が叫んでいる。叫び終わると同時に水飛沫が跳んだ。

「落下ってあの大きいのだけじゃないんですか?!」

「ん？ああ、確か3回あったぞ」

「早く言ってく下さいよ」

「悪い悪い」

謝りながらふと横をみるとディスプレイの火山が光を放つ
ていながら煙を上げている。

「綺麗ですね」

「そうだな。来て良かったか？」

「はい、ありがとうございます。次はシーの方に一緒に行きませんか
？」

そんな事を聞いてくるが……

「俺は構わないがお前は俺と一緒にいいのか？」

そう話しているともう一度浮遊感が襲う。二回目の落下だ。

二回目の落下をしたら周りは凄く暗くなり船はカタカタ鳴りなが
ら上に登り始めた。登っている途中に黒江が

「はい。今日は凄く楽しかったのでまた八幡先輩と行きたいです」

笑いながら言ってくる。そうか、なら仕方ないな。

「わかったよ、また今度行こうぜ」

「はいー」

黒江の返事に苦笑していると船が止まり、水平になる。前を見ると、近くにはホテルの光が、遠くには新都心の夜景が見える。景色に気を向けていると黒江が手を繋いできた。こいつまさか……

「折角ですので両手をあげましょうっ！」

まあスプライドは両手をあげてナンボだからな。俺は軽く頷き右手が黒江の左手と繋いだまま左手を上げる。

それと同時に船は前に傾き、さつきまでとは桁違いの浮遊感が訪れる。

「ギャアアアアアアアアアア！」

黒江は歓声を上げている。本当に楽しそうで見ている俺も楽しい。そう思っていると水しぶきが俺たちを襲った。

落下も全部終わり後はゴールまでゆっくり進むだけだ。

「凄い楽しかったです」

「まあな、落ちる時のお前の声楽しそうだったし」

「はいー」

お互いに笑顔を見せ合っているとアナウンスが流れ到着した。

スプライドマウンテンを出て俺達は花火を見る為白亜の城へ向けて歩き出した。パレードが終わった為か歩きやすい。広場に着くと同時に周りの街灯や電飾が落とされ、クラシカルな音楽がかかり始めた。

白亜の城上空辺りを見ると、色とりどりの光輪が咲き乱れる。花火と言えば夏が相場だが秋の終わりに見るのも中々良いな。

「綺麗ですね……」

「ああ、そうだな」

黒江は楽しそうに見ている。そろそろ渡すか。

「なあ黒江」

「はい、何ですか？」

聞かれるとかなり恥ずかしくなってきたが、ここは我慢だ。心に蓋をしてカバンから箱を取り出した。

「……その、何だ、今日お前の誕生日だろ？おめでとう」

そう言っつて黒江に箱を渡す。黒江はポカンとしている。

「……え？私にですか？」

「ああ。お前さえ良ければ受け取ってくれ」

黒江は俺のプレゼントを受け取り俯いた。

「黒江？」

少し不安になつて黒江に話しかけると、黒江は目に微かな涙を浮かばせ笑ってくる。

「ありがとうございます！すごく嬉しいです！開けてもいいですか？」

そこまでのリアクションをしてくれるとは予想外で驚いた。そしてそれと同時にそこまで喜んでくれて凄いい嬉しかった。用意した甲斐があつた。

「もうお前のだ。好きにしろ」

俺がそう返すと黒江は包みを開ける。

「……これっつてうちの隊のエンブレムの……」

「ああ。モデルはそれだ」

俺があげたのは紫色の蝶のネックレスだ。以前黒江は加古隊のエンブレムが凄いい好きと言っていたから加古隊に合いそうな装飾品を探しだした。

すると黒江はネックレスをかけて俺に見せてきた。

「どうですか？似合ってますか？」

「ああ、似合ってる。良いと思うぞ」

「そうですね。ありがとうございます」

黒江の笑顔に照れているとゴールデンシャワーが夜空に降り注ぎ、広場が明るく照らされた。

それと同時に音楽が止まり、また一際アトラクションの輝きと設置された街灯の明かりが戻る。

「……そろそろ帰るか」

俺がそう口にするると黒江も頷く。

「じゃあ混む前に帰ろうぜ」

帰りの電車で混んでたら更に疲れるだろうしな。明日は学校もあるし。

「そうですね。でもその前にお願ひがあるんですけど」

「お願ひ？何だよ？」

「はい。何も言わずに目を瞑ってくれませんか？」

目を瞑る？よくわからんお願ひだな。まあ害はなさそうだし構わないけど。

そう判断して目を閉じると、黒江が近づいてくる気配を感じたので薄っすら目を開けようとした時だった。

ちゅっ……

頬に柔らかい感触を感じたので目を開けると黒江が俺の左頬にキスをしていた。

再び頬にキスをされた事に驚いていると黒江と目が合った。黒江は赤くなりながらも笑顔を見せてくる。

「……今はこれくらいしかお礼は出来ませんが、八幡先輩の誕生日には私も素敵なおプレゼントを用意しますね。……それじゃあ帰りましょう」

黒江はそう言って歩き出したので俺も慌てて歩き出した。

正直言って凄く恥ずかしい。ただ恥ずかしい以外にも、黒江に対して何か他の感情がある事がわかった。しかし何の感情か分からないまま歩き出した。

この感情がわかるのは数ヶ月後だという事は今の俺には知りえない事だ。

聖夜の夜に黒江双葉は動き出す。

クリスマス。それは本来、キリストの生誕を祝う祭りである。サンタクロース。それは本来、貧しい者に施しをした聖者であった。

しかしいつからかクリスマスはリア充たちが飲めや歌えやのバカ騒ぎをしては世間様に迷惑を掛ける日に成り下がった。毎年その類のニュースが流れて嘆かわしく思う。

サンタクロースも本来は貧困に対する救済をする存在からいう目的から高いおもちゃを親が子に買って与えるだけのものになってしまった。

こんなのは間違っている筈だ。本来の物と大きく変わった物を正しいと思うのは間違っている。

結論を言おう。

「やはりリア充どもは害悪でしかない。絶対に爆発させないといけな
い」

「……お前は何をいきなりテロ的な発言をしてるんだ？」

隣で出水が呆れていた。いや、だって……

「イラついてんだよ。お前は違うのか？」

俺がそう聞くと苦い顔をして頷く。

「そりゃ、まあイラついてるがな。何だったて……」

出水はため息を吐いて一区切りついでから口を開ける。

「クリスマスに上司のレポート課題をやってるんだしな」

そう、俺と出水は上司の太刀川さんのレポートをやっている。

理由は単純だ。太刀川さんがレポートを溜め込み過ぎたからだ。余りの溜め込みっぷりに大学から太刀川さんに冬季休暇が始まる12月27日までに提出をしなければ単位を取得出来ないって連絡が来たからだ。

本来なら同じ大学生がやるべきだが、風間さんは自業自得と切り捨て、諏訪さんと堤さんは防衛任務、木崎さんと来馬さんは自分が所属している支部でクリスマスパーティー、加古さんは自分の誕生日会に出ている黒江もそれに参加している。二宮さんに至っては物凄い冷たい目で太刀川さんを睨んで「留年しろ」と言って去って行った。

俺と出水も高1組でクリスマスパーティーに参加する予定だったが太刀川さんに泣き付かれながら拉致された。その際米屋と仁礼は大爆笑しながら敬礼をしてきたが、あの2人いつかブチ殺す。

国近先輩は「私は成績が悪いから無理だなく」とか言って高2組のクリスマスパーティーに参加しに行ってしまった。

唯我は家の用事で企業のクリスマスパーティーに参加していない。結論を言うと俺は現在太刀川隊作戦室で男2人とレポートを黙々とやっている。何でクリスマスにこんな事やってんだ？

投げやりになりかけながらレポートをやっていると俺と出水の携帯が同時に鳴るので見ると米屋からのメールだった。

メールの内容は『クリスマスケーキ、いただきます♡』と書かれて高1組がケーキがのった皿を持っている写真が添付されていた。

「あの槍バカ……！」

隣では出水が歯ぎしりをしているが同感だ。凄く楽しそうで羨ましい。

「悪かったって、留年回避出来たら何か奢るから」

太刀川さんが申し訳なさそうに謝ってくるが奢るよりも、反省して欲しいんだが……

「んじや、俺は高級焼肉店で」

出水が即答する。まあ奢って貰えるなら喜んで承諾するがな。

「じゃあ俺は銀座の高級寿司でお願いします」

「お前ら随分容赦ないな」

「いやいや、クリスマスにレポート頼む人の方が容赦ないですから」
俺と出水が一字一句違わずにハモった。それを聞いて太刀川さんも謝り再び作業を続けた。

あれから3時間、時刻は夜の10時を回りようやく全てのレポートが終わった。

「いやー、助かった。俺はいい部下に恵まれたな」

「約束の焼肉、忘れないでくださいよ」

「寿司ですよ」

「わかってるわかってる、じゃあ俺はこれで」

「あれ？太刀川さんは何処に行くんですか？」

「俺？俺は諏訪隊の防衛任務が終わり次第諏訪さんと冬島さんと東さんで麻雀大会だな」

マジかよ？遊ぶ相手いるのかよ？米屋達は既にお開きしたからな。白状な連中だ。

「まあお疲れ様っす」

「おう、今日はありがとな」

そう言って太刀川さんは作戦室から出て行った。

「で、比企谷？お前はどうする？」

「どうするも何も帰るしかないだろ？パーティーは終わったみたいだし」

「だよなあ……」

俺と出水もため息を吐いて作戦室を出た。

作戦室を出て出口へ歩いていくと、

「八幡先輩に出水先輩、お疲れ様です」

後ろから声が聞こえたので振り向くと愛弟子がいた。

「よーつす、黒江ちゃん。誕生日会は終わったのか？」

「はい。今から帰る所です。お二人は」

「俺らも帰る所だ。送るぞ」

流石にこんな時間に小学生を1人にするのはマズイからな。

「じゃあお願いしていいですか？」

黒江が頼むと出水はウンウン唸りやがてハツとした顔になる。

「あー、悪いな。俺、用事があったの忘れてたから無理だわ。黒江ちゃんには比企谷に送ってもらいな」

「は？」

「出水先輩?!」

俺は素っ頓狂な声が、黒江は驚いた声を出した。

「じゃ、そういう事で。じゃあな」

出水は俺の返事を聞かずに走り去ってしまい、この場は俺と黒江の2人きりだ。

「あ、あの……」

黒江がモジモジし始める。それを見てドキドキしながらも口を開ける。

「とりあえず行くこうぜ。これ以上遅くなるのもアレだしな」

「あ、はい」

黒江も元の調子に戻ったので歩き始めた。

黒江と一緒に歩いていると街からはクリスマスソングが流れている。

「いやー、少しでもクリスマス気分を味わえてよかった」

「本当にお疲れ様でした」

黒江が労うように笑い、俺もその笑いに苦笑しながらMAXコーヒーを飲む。黒江は俺の影響がよくMAXコーヒーを飲んでいる。出水は悪い事を教えるなどか言っていたが全国のMAXコーヒー愛好者に謝りやがれ。

出水にキレていると

「八幡先輩」

黒江が呼びかけてくる。

「どうした?」

「少し寄り道しませんか?イルミネーションを見に行つて更にクリスマス気分を味わいませんか?」

随分気を遣つてくれる弟子だなあ……

「いいのか?」

「はい」

「じゃあ寄り道しようぜ」

黒江は頷いて俺の手を引っ張りながら歩き始めた。その仕草に若干ドキドキしながらも歩き出した。

黒江が案内してくれたのは巨大ショッピングモールの近くにある広場だった。広場には薄い青色のイルミネーションが綺麗に輝いていて、プレゼントをモチーフにしたオーナメントが飾られている。そ

して近くの店からは静かなクリスマスソングが流れている。

「どうですか？八幡先輩は騒がしいの好きじゃないでしょうし」

黒江が聞いてくるが中々良い場所だ。

「ああ、気に入ったよ」

「なら良かったです。少し座りませんか？」

黒江はベンチを指している。まあ折角だしゆっくり休みたいからいいか。……と、その前に

「それは構わないが……ほれ。寒いだろ？」

黒江に俺が巻いているマフラーを巻きつける。

「……え？」

黒江がキョトンとしている。

「今、震えてるのが見えてな。気付くのが遅くて悪かったな」

「い、いえ！元はと言えばマフラーを巻かなかった私が悪いんですから！」

そう言つてマフラーを外そうとするが「いいから巻いとけ」と言つて巻かせる。

やがて黒江は頭を下げてマフラー外そうとするのを止めてベンチに座った。それを確認して俺もベンチに座った。

「すみません。八幡先輩も寒いですよね？震えてますよ」

「気にするな。後輩が寒がつてるからな」

確かに寒いが弟子が寒くない思いが出来るなら我慢出来るしな。そう思っている時だった。

俺の首にマフラーが巻かれたので黒江の方を向くと、

「こ、これなら2人とも寒くないですよ……」

黒江が寄りかかってきて2人で1つのマフラーを使っている。

（待てやコラ。これアレだろ？恋人同士でやる事だろ？メチャクチャ恥ずかしいんだが！）

まあ寒くないのは事実だけどよ。初めは外そうとしたが、外しても

どうせ直ぐに巻かせるだろうと判断して諦めた。

お互いに寄り添ったまま音楽を聴きながらイルミネーションを見る。疲れた身体を癒してくれて気力が少し回復する。

「……綺麗ですね」

「……そうだな」

お互いに一言ずつ交わして暫くの間この光景を眺め続けた。

流れているクリスマスソングが一周した辺りで

「そろそろ行きます?」

黒江が聞いてくる。

「そうだな。大分寒くなったしな」

了承して立ち上がる。そしてマフラーを外す。

「家に着くまでつけとけよ」

そう言つて半ば強引に黒江の首に巻きつけた。こうでもしないと絶対に遠慮するからな。

「わ、わかりました」

黒江は了承しながら歩き出すので俺もそれに付いていく。広場の真ん中辺りで黒江が

「あの、八幡先輩……、その八幡先輩は満足しましたか?」

不安そうに聞いてくる。

「そんな顔をするな。俺は満足だぞ。お前こそどうなんだ?」

「私ですか? 私は満足ですよ。八幡先輩と見られて幸せです」

笑顔で言ってくるので顔が熱くなるのがわかってきた。マセてる奴だな。だが1つ言つとかないな。

「黒江。気持ちは嬉しいがそういう事は好きな奴にだけ言うべきだぞ」

大抵の奴は絶対に勘違いするだろうしな。

「……やっぱりハッキリ言わないとダメか」

そう思っていると黒江が何か小さい声でゴニョゴニョ言っているがどうしたんだ？

「おい、黒江？」

黒江に話しかけると黒江は赤らめながらも決意を固めた様な顔を向けてくる。その顔を見た俺は心臓が熱くなるのを感じた。

「八幡先輩、八幡先輩はさつきそういう事は好きな人に言えつて言いましたね？」

「あ、ああ……それがどうかしたか？」

「……それなら私にとつてさつきの発言は八幡先輩に言うべきです」

黒江がそう言ってきて俺は一瞬思考が止まってしまった。俺に言うべきだと？

「おい、それって……」

最後まででは言えなかつた。黒江が深呼吸をして美しい視線を向けて口を開けてきたからだ。

「はい。私は八幡先輩の事を異性として愛しています」

黒江が俺に告白をしてきた。

「く、黒江……俺は、その」

俺は言葉が出なく曖昧な返事しか出来ていない。

早く返事をしなきゃいけない。それは分かっている。分かっているが、その先を言えない。

俺もバカではない。黒江の告白は本気である事が分かる。罰ゲーム告白なんて黒江がする訳ないだろうし。

早く返事をしないと黒江に対しても失礼だ。それも分かっているが……

暫くの間返事が出来ずに自分自身にイライラしている時だった。

「落ち着いてください。何も今返事が欲しい訳じゃありません」

黒江が優しい目を向けながら俺の手を握ってくる。それによってイライラが収まってきた。

「今、無理矢理結論を出してもそれが正しいとは限りませんから。ゆっくりでも構いません。しっかりと考えて返事をください。私は待っていますから」

そう言ってくる黒江のおかげで大分落ち着きを取り戻した。

「すまない黒江。もう落ち着いた」

「良かったです」

笑いながら手を離してくる。

「黒江、済まないがお前の家はもう近いし送るのはここまででいいか？」

正直今の俺は黒江の事をマトモに見れないだろうし。

「わかりました。では私はこれで失礼します」
そう言つて黒江は歩き出した。おそらく俺に気を遣つてくれる
のだろう。1人してくれるのはありがたい。

だがその前に黒江に言わなきやいけない事がある。

「黒江」

呼びかけると黒江が振り向いてくるので深呼吸をして口を開ける。

「……直ぐに返事を出来るかはわからない。でも真剣に考えて必ず返
事をする。だから待つててくれないか？」
すると

「もちろんです」

笑いながら首を縦に振ってくる。それともう一つだ。

「それとだな、黒江……。お前の気持ちは本当に嬉しかった。……あ
りがとな」

黒江の告白を受け入れるか拒否するかは今の俺にはわからない。
でも信頼している愛弟子に告げられた想いは本当に嬉しかった。こ
れについては嘘偽りない事実だ。

黒江を見ると目から涙を流していた。

「……それを聞けて幸せです。……良い返事期待してますね」

黒江は頭を下げて一礼して歩き出した。俺は黒江が視界から消え
るまですつと黒江を見守り続けた。

黒江が見えなくなつてからホツと息を吐いた。もう一度ベンチに
座り、黒江について考えだした。

好きか嫌いなら間違いなく好きだ。礼儀正しいし、優しいし、可愛
いしな。本当に優れた弟子で一緒に稽古をしたりすると凄く楽しく
もある。

けどこれが恋愛感情かはわからない。実際に中学時代に気になる相手はいたが、告白する前に大規模侵攻が起こった。侵攻によって両親が死んでからはそれどころじゃなくなり興味を失ったしな。

よって恋するってどんな事なのかよく分からない。

(……どうすりゃいいんだよ?)

黒江は待つてくれると言っていたが余り待たせたくない。待たせるのは黒江に失礼だしな。

色々悩んだ末立ち上がった。

「……帰って寝るか」

太刀川さんのレポートをした後に黒江の告白だ。今の俺は精神的にかなり疲れている。今考えたところで碌な案が出ないのは自明の理だ。

そう判断した俺は早歩きで家に向かった。

その日俺は帰ってからも頭の中で黒江の告白がリフレインして全く眠れなかったのは当然だろう。

比企谷八幡は出水公平に背中を押され一歩踏み出す。

『10本勝負終了、勝者米屋陽介』

アナウンスが聞こえると同時にランク戦ブースに戻される。ため息を1つ吐いてブースから出ると同じくタイミングで米屋もブースから出てくる。

ベンチからは三輪もやってきた。

「どうしたんだよハッチ？最近調子悪くね？」

「そうだな。俺に続いて陽介にも負けるなんて不調としか思えない」

今、俺は三輪と米屋と10本勝負で個人ランク戦をやったが、三輪には3-1で、米屋には4-6で負けた。この2人に負ける事はあるが殆どは俺が勝ってるから不調と思われても仕方ない。

そして不調の理由はもちろん分かっている。だがそれは言えなかった。

「……すまん。調子が悪いのはわかってんだけどよ……」

言葉を濁すくらいしか今の俺には出来ない。

「まあハッチが言わないなら無理には聞かないけどよ」

「まあそうだな。それより俺達は今から防衛任務だ。行くぞ陽介」

「そうだった！じゃあなハッチ！次戦う時までには調子なおしとけよ！」

そう言って去って行く三輪と米屋に手を振って俺はラウンジへ歩き出した。

ラウンジに着いて自販機でマッ缶を買い一息つく。

不調の理由なんてわかってる。黒江の告白だけだ。

……私は八幡先輩の事を異性として愛しています……
あれが頭の中でリフレインしていて気が散ってしまう。それに加えて返事を早くしなくちゃと焦っている自分がいる事がわかっている。

(……俺はどうすりやいいんだ?)

ため息を1つ吐いた時だった。

「よう比企谷、隣座っていいか?」

上から話しかけられたので顔を上げると同じ年のチームメイトがいた。

「何の用だ出水?」

「まあまあ、とりあえず座らせてもらおうぜ」

出水はそう言っただけで返事をしないで座り出した。一言文句を言いたかったが言っても意味ない事は長い付き合いからわかっているのもう一度ため息を1つ吐いた。

出水はのんびりとブラックコーヒーを飲んでいるが何の用だ?

口を開けようとした瞬間だった。

「お前、最近黒江ちゃんとかあったの?」

いきなり核心を突かれて反応が出来なかった。俺を見た出水は納得とばかりに頷いている。

「やっぱり黒江ちゃんの事か」

「……なんでわかった?」

「いや、唯お前がここまで悩むとしたら小町ちゃんか黒江ちゃん関係のどちらかと思ったからな。そこでさつき基地に来る時に小町ちゃんと会ったけど小町ちゃんはいつも通りだった。だから消去法で黒

江ちゃんと思っただけだ」

よくわかったな。伊達に付き合いは長いしな。

「で、何があつたんだよ？さつき三輪と槍バカに会つたら明らかに集中力がないって言つてたぜ。黒江ちゃんと喧嘩でもしたのか？」

「…………いや、喧嘩はしてない」

「じゃあ何だよ？防衛任務でも調子悪かつたし早めに治すべきだぞ」

珍しく心配そうな顔をしている同僚を見て少し悪いと思つた。仕方ない話すか。チームに迷惑かけたら悪いし。

「実はだな…………」

「…………なるほどな。事情はわかつた」

結局出水に黒江に告白された事、直ぐに返事は出さなくていい事、俺が黒江に恋愛感情を持っているか分からない事、全て話した。

「それで早く返事を出そうと焦つてな…………」

「まあ確かにいくら向こうが待つと言つても、できるだけ早く返事はするべきだな」

出水が首肯する。

「それはわかつててもだな…………、恋をした事ないから黒江にどんな感情を持つているか分からないんだよ」

出水はふーむとか言つて考えている。

「んじゃ比企谷、1つ聞きたい事があるんだがいいか？」

「何だよ？」

俺がマッ缶を飲みながら出水を促すと

「比企谷は黒江ちゃんとキスをしたと思うか？」

爆弾を投下してきた。

「ゲフオ、ゴホツ!!」

思いつきり噎せた俺は絶対に悪くない。

「比企谷？大丈夫か？」

「誰のせいだ、誰の？」

「悪い悪い。で、結局黒江ちゃんとキスをしたいのか？」

黒江とキスだど？頬に2回された事はあるが、唇を合わせる事は

……

……八幡先輩、愛しています……

上目遣いでキスをしようとしてくる黒江を一瞬想像してしまった

……

……悪くない。というかいくら小学生とはいえ黒江みたいな可愛い女の子とキスしたいと思うのは当然だろう。

「……興味はあるな。だが男子なら可愛い女の子とキスしたいって気持ちは当然の様な気がするんだが……」

「……まあ、そうだな。じゃあ恋愛感情を持っているっていう根拠としては弱いつて事か？」

「そうなるな」

「うーむ……」

出水は悩んでいるがこれは難しい問題だからなあ……

「……あー！じゃあもう一度質問していいか？」

「何か良い案が思いついたのか？」

「ああ、これなら比企谷が黒江ちゃんに向けてる感情がわかるぜ」

マジか?!是非お願いします!……でも1発でわかる事なんて本当
に出来るのか?半信半疑の状態で出水に話しかける。

「で、どんな考えだ?」

俺が聞くと出水が口を開ける。

「もしも、もしもだぞ。黒江ちゃんが槍バカと付き合ってキスをして
たらどう思う?」

……は?

黒江と米屋が?余り想像出来ないな。米屋の恋人ってランク戦だ
し。

でも黒江と米屋がキスをしているだと言っていたが、これは……

(……なんか凄いイラついてきたな)

黒江が誰かと付き合うのは黒江の自由だ。それはわかっているが、
何となくその光景を見たくない自分がある。

(……これってまさか……)

この感情の正体に気付きかけた時だった。

「大丈夫か?怒りが顔に出たぞ」

出水に言われて考えるのを止まった。

「あ、ああ。すまない」

「いやそれはいいけど怒りが顔に出てたって事はよ、嫉妬してたんだろ?。」

はつきりと出水にそう言われて、想像の世界の米屋に嫉妬していた事を自覚する。

「ああ、してた」

素直に肯定すると出水が笑ってくる。

「なら決まりだな。お前は黒江ちゃんに恋愛感情を持つてるって事だな。もしも持ってなかったら普通は祝福するだろうしな」

そうか……俺は黒江の事が好きだったんだな。そう思うとディスプレイでキスされた時恥ずかしい以外の感情があつた事を思い出した。あれは嬉しかったんだな。

そうと分かつたらやる事は1つだな。俺は立ち上がった。

「出水、俺ちよつと出かけてくる」

「おう、頑張れよ」

「サンキューな。今度飯奢る」

そう言つて歩き出すと後ろから「比企谷が奢る?!明日は嵐か?!」とか聞こえてるがお前は俺を何だと思ってるんだよ?

若干呆れながら俺は黒江がいると思われる加古隊作戦室へ向けて歩き出した。

加古隊作戦室へ向かつて走っていると

「あら、比企谷君」

横から声をかけられて振り向くと加古さんがいた。その横には

「こ、こんにちはは八幡先輩」

若干顔を赤くした黒江もいた。好きだとわかつて改めて見るとこちらも顔が赤くなってくる。

「どうもっす。……加古さん」

「なにかしら」

「すみませんが黒江を借りてもよろしいですか？」

俺が聞くと黒江は驚いた顔になり、加古さんは黒江を興味深そうに見ている。

「いいわよ、ちょうど防衛任務が終わって暇だから」

加古さんが了承するので黒江を見る。

「黒江、少しいいか？」

黒江は真っ赤になりながらも頷く。

「じゃあ行こうぜ」

そう言って歩き出す。後ろから黒江が付いてくる気配を感じながら。途中で加古さんは黒江に「いい返事だといいわね」と囁いているのが聞こえた。どうやら加古さんも知っているようだな。結構知られると恥ずかしいな。

黒江を連れて行った場所はボーダー基地の屋上だった。

「こんな所があるんですね」

「まあな。1人になりたい時や人に聞かせたくない話をする時に便利だぜ」

適当に返しながら三門市が一望出来る屋上の中心あたりで止まり黒江を見る。黒江はモジモジしながらも口を開ける。

「そ、それで、話って……」

「ああ、わかっていると思うがこの前の返事についてな」

「は、はい」

そう言って黒江は俯く。ヤベエ、今更だが緊張してきたな。でもこれ以上黒江を待たせる訳にはいかない。

そう判断して口を開いた。

「黒江、俺もお前が好きだ」

すると黒江は驚いた顔で俺を見てくる。

「……………?!それって……………」

黒江が喋ろうとしているのを遮る。

「ああ。俺なんかよければ付き合ってもらえないか?」

すると黒江は急に俺に抱きついてきた。慌てて黒江を見ると涙目で俺を見上げてきた。

「ど、どうしたんだよ?」

「その、振られるのかと思って怖かったので……………」

「安心しろ。振るつもりはない」

そう言つて優しく抱き返す。正直恥ずかしいが黒江の涙は見たくないから我慢だな。

俺達は暫くの間抱き合っていた。

10分程抱き合つて漸く黒江の目から涙が消えたので黒江から離れる。黒江は名残惜しそうな表情で見えてくるが我慢だ。

「あの、八幡先輩……その、八幡先輩は本当に私でいいんですか？」

黒江が不安そうに聞いてくる。

「ん？いきなりどうした？」

「そ、その、ボーダーには素敵な女性が沢山いますので……」

何言ってるんだ？俺は黒江に近づいて頭を撫でる。

「確かにボーダーには凄い良い女は沢山いる。……だがな、俺からすればお前もその1人だぞ」

そう言ってるワシヤワシヤしていると黒江は安心した様な笑顔を見せてくる。

「あ、ありがとうございます」

「気にするな。事実を言っただけだ」

黒江の笑顔にドキドキしながら目を逸らし口を開ける。

すると黒江は目を逸らした先にやってきて、

「八幡先輩、私黒江双葉は比企谷八幡先輩を一生愛してみせます」

ちゅっ……

俺の唇を奪ってきた。

軽く、本当に触れるだけのキスだった。しかし俺の顔はかつてない程に真っ赤になっているのがわかる。

(ヤバイ、頬にされた時より遥かに恥ずかしい！)

この状況を作った本人は真っ赤になりながらも笑顔に向けて俺から離れる。

「次からは八幡先輩からしてくださいね」

黒江にそう言われて俺は1つの覚悟を決めた。

「ああ、わかった」

そう言って黒江に近づいた。すると黒江が急にテンパリだった。

「あ、あの八幡先輩?! その、何を……?!」

何となく予想している様だが当たりだ。俺も黒江にキスするつもりだ。黒江は自分の想いを伝えたキスをした。なら俺も自分の想いを伝えるべきだ。

俺は黒江の肩を掴み口を開ける。

「…俺も一生お前を愛してみせる。そしてお前を絶対に幸せにしてみせる」

そう言って俺は顔を近づけ唇を重ねる。

「ん…っ…」

時間にして30秒程度のキス。それでも俺にとっては永遠のように感じた。

唇を離すとお互いの唇から糸が一つと垂れる。

黒江はトロンとした表情で俺を見てくる。その姿にドキドキしていると黒江は再び抱きついてくる。

「これからよろしくな、黒江」

俺が改めて挨拶をすると

「……双葉」

黒江が上目遣いで見ながら喋りだした。

「ん? どうした?」

「そ、その…:…せっかく恋人になったんですから双葉って呼んでください」

真っ赤になりながらも軽く睨みながら言ってくるのを見て苦笑が湧いてきた。

「わかったよ。これからよろしくな。……双葉」
初めて名前で呼ぶと双葉は

「はい!!」

とびきりの笑顔で頷いてきた。

その笑顔を見て思った。こいつから笑顔を絶対に奪わせない、双葉を悲しませる存在は絶対に排除する。

胸に強い決心を秘めながら双葉を優しく抱き返した。

比企谷八幡は中学生となった黒江双葉との未来に希望を持つ

春になり俺は高校2年生になった。

俺は今、太刀川隊作戦室で学校の課題をやっている。しかし何とも難しいな。俺高校で授業を受ける以外思い出ないし。

そう思いながら唸っていると

「ういーす、……って比企谷だけ？てか何やってんの？」

出水が入ってきた。

「ん？学校の課題」

「課題？どんな？」

「作文だ。お題は高校生活を振り返って、だ」

「へえー、見せろよ……って短っ!!」

出水は俺の作文をひったくる様に取り、見た瞬間に叫びだした。

「ほっとけ。事実を書いただけだ」

出水は驚いているが気持ちはわかる。書いた俺もそう思ってるしな。

ちなみに内容は

高校生活を振り返って

2年F組 比企谷 八幡

高校生活を振り返ってみた結果、特に記述するべき出来事がなかった。

一文で終わっちゃった。何だろう、素早く課題を片付けられたことを喜ぶべきはずなのに全く達成感が沸かない。

まあ仕方ないだろう。俺は学校という集団に期待を一切していないからな。

トップカーストの言うことが全てで、カースト最下層の意見が正しい事を言っても全部無視されるその空間。そんな空間にカースト最下層の俺が期待なんてするはずもない。

「いや、だからってこれは……」

出水が呆れた様に見てくる。

「じゃあ、こつちとどつちがマシだ？」

俺が鞆からもう一枚紙を出す。

「あれ？もう一枚あんのか？」

そう言ってくる出水に渡すと出水の顔はドンドン曇ってくる。

ちなみにこちらの作文の内容は

高校生活を振り返って

2年F組 比企谷八幡

青春とは嘘であり、悪である。

青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境全てを肯定的に捉える。彼らは青春の二文字の前にはどんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げてみせる。

彼らにかかれば、嘘や秘密も、失敗な罪科もネイバーから攻められているこの状況も青春におけるスパイスでしかないのだ。

仮に失敗する事が青春と言うならば、友達作りに失敗したことも青春の証だろう。

しかし彼らはそれを青春と認めないだろう。

所詮全て彼らのご都合主義でしかないのだ

結論を言おう。

青春を楽しむ愚か者共

砕け散れ

って感じた。書いた俺が言うのもアレだが、俺にはテロリストの才能があるようだ。

「…お前極端過ぎだろ。こんなん出したら呼び出しくらうぞ」

「だろ？そつちは提出したら間違ひなく呼ばれるな」

「つーかお前黒江ちゃんと付き合ってるんだし、お前も青春を楽しんでんじゃん」

あー、確かにそうだ。今の俺は確かに青春を楽しんでんいるな。双葉と付き合う事になってから毎日が楽しいしな。そういや今日は双葉の中学の入学式だったな。双葉の制服見たいな。

「おーい、比企谷。戻ってこい」

出水に頬をペチペチ叩かれて現実に引き戻される。しまった、完全に妄想に耽っていた。

「悪い悪い」

「別に怒ってないけどよ……。でもよかったじゃん。黒江ちゃんも中学生になったんだし、少しはデート場所のバリエーションも増やせるんじゃない？」

そう、俺と双葉は恋人関係にあるが、殆どデートをした事がない。何せ目の腐った高校生と小学生のカップルだ。端から見れば完全に犯罪の匂いがする。だから双葉と過ごすのは修行が終わってからボーダー基地の屋上でキスし合うくらいだ。

キスし合う光景を見られたら間違ひなくロリコンって呼ばれるので必ず屋上に人がいないか15分チェックをしてからキスをしている。

しかし今日から双葉も中学生だ。高校生と中学生のカップルは珍しくないし双葉が制服なら特に問題ないだろう。

ちなみに俺と双葉が付き合ってるのを知ってる人はボーダーでも

かなり少ない。

知ってるのは太刀川隊と加古隊の人くらいだ。太刀川さんはロリコンと笑いながら言ってきてイラついた。イラついたからクリスマスのレポート事情を忍田本部長にチクると言ったら土下座をしてきてビビった。どんだけ忍田本部長怖いんだよ？

閑話休題……

「とりあえず、砕け散れって書いた方は提出しないでおく」

「そうしろそうしろ。っーか適当にでっち上げろよ。槍バカなんて嘘しか書いてなかったぜ」

出水はそう言うが適当にでっち上げるのも割と面倒なんだよな。それ以前に教師に呼び出されても適当に謝れば済むだろうしな。

「ん？お前の学校も作文が出たのか？」

「まあな。同じお題でな。その時に槍バカの書いたヤツ見たんだけど、あいつはお前の真逆で嘘しか書いてなかったぜ」

嘘しか書いていない？何だそれ？凄い興味が湧いてきたんだけど

「何？そんなにヤバかったの？」

「見るか？」

出水はそう言ってスマホを出して俺に渡してくる。どうやら写真に収めたようだ。

高校生活を振り返って

2-1B 米屋陽介

高校生になってから勉強内容が中学に比べて非常に難しい事を実感したり、将来についてより深く考える機会が増えた事がわかった。

このままダラダラ過ごすのは実にもったいないと思う。一度しかない高校生活だから時間を無駄にしないで将来何になりたいかを考えるつもりだ。

その為にもしつかりと勉強をしたいと思う。

読んで思った。

「嘘だらけだな」

「だろ？」

何がしつかりと勉強だコラ。お前中間と期末以外一切勉強してないだろうが。それも三輪や奈良坂に言われなかつたら絶対にやらないし。

呆れて溜息をついている時だった。作戦室の扉が開いたので入り口を見ると

「八幡先輩こんにちは！」

中学生の制服を着た双葉が可愛い笑顔で俺に近寄ってくる。

「よう双葉」

「黒江ちゃん入学おめでとさん」

「ありがとうございます！」

「いやいや、ところで比企谷、黒江ちゃんの制服の感想は？」

「い、出水先輩！いきなり何を言ってるんですか?!」

出水がニヤつきながら俺に聞いてきて双葉は真っ赤になりながら出水に詰め寄っている。それにしても感想か……

改めて双葉を見ると制服を着ているのか可愛さだけでなく綺麗さも見てとれる。中学1年でこのレベルなら高校、大学に進学するにつれてどんどん綺麗になっていくのだろう。大学を卒業するくらいには可愛さと美しさを完璧に兼ね備えた双葉がいるのだろう。是非結婚したい」

……と、今は制服の感想だったな。うん、やっぱり可愛いな。初めて小町の制服を見た時と同じ気持ちだな。

そう判断して双葉の顔を見るとかつてない程真っ赤になっていて、出水は俺の事を尊敬している様な眼差しを向けている。何だコレ？

疑問に思っていると出水が肩を叩いてくる。

「お前がそこまで黒江ちゃんを想っているとはな……。式には俺も呼んでくれよ」

……え？式？

ちよつと待て！ちよつと待て！もしかして心の声が出ていたのか?! だとしたら恥ずい。結婚したいなんて思ってたからソレも口に出ていたのだろう。

「あゝ、そのだな……」

双葉に話しかけようとするのと双葉が真っ赤な顔で

「……八幡先輩。そ、その私も八幡先輩とけ、結婚したいです」

爆弾を投下してきた。お前も随分な爆弾を落とすなオイ！ 凄い顔が熱いんですけど!!

お互いに真っ赤になりながら俯いている時だった。

「あ、俺用事あるの忘れてたな」

出水が棒読みでそんな事を呟いた。こいつまさか?!

「お、おい出水……!」

「じゃ、俺用事を済ませなきゃいけないから」

そう言っ作戦室を出ようとしている。待てコラ！ この状況で双葉と2人きりにさせようとするな!!

慌てて叫ぼうとするも

「じゃあ2人とも……! ゆっくり」

最後に良い笑顔を見せて作戦室を出て行った。あの野郎……

出水に怒りを感じていると

「あ、あの八幡先輩……」

双葉が真っ赤になりながら俺を呼んでくる。凄い気まずい。無意識とは言え結婚したいなんて発言したからな。

「……何だよ?」

心に蓋をして話しかける。

「……そ、そのさつき言った事は本当ですか？」

恥ずかしがりながらも聞いてくる。凄く恥ずかしいから答えたくないがここで答えないと双葉は悲しむだろう。それは避けられない。けない。

「……ああ、本当だ」

小さい声でそう返すと双葉も真っ赤になりながら笑顔を見せてくる。

「……あ、ありがとうございます。嬉しいです」

そう言ってくる双葉を見てこちらも笑みを浮かべ頭を撫でる。暫くの間俺は双葉の頭を撫でる存在と化した。

撫でる事10分、俺と双葉はぼんやりと昼のニユースを見ている。俺がソファーに座り双葉が俺の膝の上に座って手を握ってくれている。その際双葉の頭はちょうど俺の鼻の近くにあり凄く良い匂いが俺の理性を刺激してくる。

舌を噛んで理性を抑えていると、

「あの、八幡先輩。これは……」

双葉が机の上にあった例の作文をヒラヒラさせている。

「学校の課題だ」

「それはわかりますが……短過ぎませんか？」

「んな事言われても実際に振り返った結果がそれなんだよ。お題が高校1年生を振り返って、だったらかなり書けるけどな」

「……？？？どういう意味ですか？」

「ん？そのプリントのお題はあくまで総武高での生活を振り返る事だ。俺が言ったのは高校1年生の時ボーダーで過ごした時間を振り返ったらかなり書けるって事だ。……まあ殆どお前の事だけだな」

まさか助けた女の子が入隊して俺の弟子になり、終いには恋人にな

るなんて助けた時には全く思わなかった。

「……そうですか。私も昨年度は八幡先輩との思い出でいっぱいです」

「そう言つて貰えると嬉しいな。ま、今年度もよろしくな」

「はい。それで八幡先輩さえ良ければゴールデンウィークや夏休みに2人で旅行に行きませんか？」

双葉と2人きりの旅行だ?! 犯罪の匂いはするが是非行きたいな。というかマジで眼鏡やコンタクトで目の腐りを誤魔化した方がいいかもな。

「わかった、行こうぜ」

「はい」

2人で先の事を話しているといつの間にかニュースは終わつていて昼ドラがやっていた。その昼ドラで男性が自分の膝の上に座っている女性とキスしている映像が流れている。

「……」

すると俺の膝の上に座っている双葉が真っ赤になりながら俺を見ってくる。……これはアレか? キスしろって事か? どうすりゃいいんだ?

悩んでいる時だった。

「……八幡先輩」

双葉が目を瞑つて唇を寄せてきた。ああ、もうわかったよ! しますよ!

息を吐いて双葉の顔に自分の顔を近づける。

そして……

ちゅっ……

双葉の唇を奪った。

「…………んっ、ちゆる…………」

双葉は腕を俺の首に絡めてキスをねだってくる。それを見て苦笑しながら双葉の期待に応えるべく唇を合わせる。

「ちゅっ…………愛しています」

更にキスをねだってくる双葉を拒絶は出来なかった。

「…………すみません。私がねだった所為で」

「気にするな。断らなかつた俺も悪い」

結局俺達は誰も作戦室に來ないのを良い事に1時間近くキスをした挙句、ソファで一緒に寝てしまった。起きた時には夜の7時を回っていて今日の訓練は中止となった。

現在俺は双葉を家に送っている。

「…………と、着いたな」

歩いていると双葉の家に着いた。

「はい。送っていただいてありがとうございます」

「気にするな。明日こそは訓練するぞ」

「はい。よろしくお願いします」

「おう、じゃあな」

そう言つて踵を返すと

「八幡先輩！」

いきなり双葉に呼ばれ振り向いた時だつた。

ちゅっ…

いきなり触れるだけのキスをされた。慌てて双葉を見ると笑顔を見せて頭を下げてくる。

「お休みなさい」

そう言つて家に入つて行つた。……せめて返事くらいさせろ。

「ああ、お休み双葉。また明日」

今日は双葉とキスしまくつて本当に幸せだった。帰つたら小町に癒して貰えば更に幸せだ。どうやら俺はかなり持っていると思える。

「明日からも幸せが続けばいいな」

そう呟いて家に向かい歩き出した。こんな幸せがずっと続いて欲しい。その願いが俺の胸に秘めていた。

「さて、比企谷。このふざけた文章に対する言い訳を聞こうか？」

……まさかこの願いが1日で砕け散るのを誰が予想出来るだろうか？

比企谷八幡はいきなりの罵倒により怒りが頂点に達する。

「さて、比企谷。このふざけた文章に対する言い訳を聞こうか？」

「ここは放課後の職員室、現在俺比企谷八幡は国語教師且つ生活指導の平塚静教諭に呼び出されていた。

「はあ、高校生活を振り返ってと言うお題の作文だと思えますが？」

「そうだな、それで何故君はこんな舐めた作文を書き上げたんだ？」

平塚先生は頭に青筋を浮かべながら俺の書いた作文を見せ付けてきた

「いや実際俺はボーダーを重視していますから学校に思い入れはないので一文で終わりました。……別に俺は赤点を取ってないし、問題も起こしてないのでどんな学校生活を送ろうと他人にどうこう言われる筋合いはないと思います……」

「小僧、屁理屈を言うな」

「そうですね、先生の歳からすれば俺は小僧ですよね」

その瞬間俺の顔の横に風が吹いた。

「女性に年齢の話を厳禁だと習わなかったのか？ 次は当てろぞ」

平塚先生はそう脅すが

「ならば避けます。痛いのは嫌なので」

だが甘い。常日頃からスピード系攻撃手の風間さんや緑川と戦ってる俺からすれば簡単に見切れる速さだ。とは言えかなり速いな。この人トリオン体じゃね？

「ほう、面白い」

いやなんで其処で笑うんですか？普通怒る所でしょ？まあ、適当に謝って書き直せばいいか。

「すみませんでした、書き直します」

「何だ、その適当な返事は……別に私は怒っている訳ではないぞ」

怒っている訳ではない。その台詞を言って怒らなかつた人なんて

来馬さんくらいだろう。あの人が別役に熱帯魚を茹で蛸にされても許していたし。あの人がマジで菩薩。俺鈴鳴じゃないけどあの人は本当に尊敬している。太刀川さんのレポートを手伝ってくれるし。

俺が内心で来馬さんをリスペクトしていると平塚先生が話しかけてくる。

「その、何だ……友達はいろのか？」

「友達かどうかは分かりませんが仲のいい人なら、まあそこそこ」

一応総武高はボーダーとの提携高だ。だから俺と同学年の辻、奈良坂、綾辻、三上、宇佐美、氷見とは比較的よく話すし、仲はどちらかと言えばいいと思う。えっ。友達じゃないかって？ ボーダー入るまでぼっちだったから友達の定義なんて知らねーよ。

「……それはボーダーの人か？」

「……そうなんですがいいじゃないですか？まさかと思いますがボーダーの人はカウントしないとかじゃないですよ？」

軽く睨むと若干平塚先生は焦った様に口を開ける。

「……いや、そういう訳じゃないんだが……。そ、それはそうと！彼女とかいるのか？」

このアラサー明らかに分が悪いからって話を逸らしやがったな？ふざけやがって……

「先生には彼氏がいるんだ」

投げやりに返事をしたその瞬間俺の腹の前に来た拳を受け止めた。おい、マジで殴るとは思わなかったぞ。当たったらマジでゲロ吐いたかもな。次から平塚先生の所へ行く時はトリオン体で行こう。

「よし、レポートは再提出だ。」

まあ妥当だな。適当にでっちあげるか。しかしレポートの再提出とは太刀川さんの事を悪く言えなくなったぞ。

「そして、君には罰を与える。付いてきたまえ。」

……最後の言葉は予想外だったが。

「聞こえているかしら比企谷君？　あなた目だけではなく脳みそまで腐っているから碌に受け答えも出来ないのね、ごめんなさいね貴方の程度の低さを計算できなかった私の責任だわ」
「なんでいきなり罵倒されてんだ？」

遡る事10分、いきなり特別校舎に連れてこられたと思ったらあの暴力教師に奉仕活動をしろと言われ其処にいた女には俺の更生を頼んだと思つたらいきなり何処へ行つてしまった。

2年J組　雪ノ下雪乃

平塚先生が俺の更生を依頼した人物である。帰国子女や留学志望者といった普通クラスとは偏差値3程違う国際教養科でも、特に有名な人物。定期考査では常に学年一位の座を守り続ける実力の持ち主で、類稀なる容姿の持ち主だ。よつて殆どの生徒の憧れである。

まあ黒江双葉という最愛の恋人がいる俺からすればどうでもいい存在だ。

それにこいつの口の悪さを知った俺からすれば綾辻、氷見、宇佐美や三上の方が絶対に良いと思う。あいつら目の腐った俺にも優しく接してくれるし。目の前の女なんて目が腐つてるだけで脳も腐っているみたいな戯言ほざいてるし。

閑話休題・・・

「奉仕部ねえ・・・」

「そうよ。持つ者が持たざる者に慈悲の心を持って与える。途上国に

はODAを、ホームレスには炊き出しを、ぬぼーつとした人には裁きを、困っている人に救いの手を差し伸べる。それがこの部の活動よ」

「最後の例えに悪意を感じるんだが・・・」

こいつ会って数分でここまで罵倒するとは俺に何か恨みでもあるのか？

「平塚先生曰く、優れた人間は憐れな者を救う義務がある、のだですよ。頼まれた以上責任は果たすわ。あなたの問題を解決してあげる。感謝なさい」

「はいはい。頑張れ頑張れ。」

ノブレスオブリージュを信条としているみたいだが俺は悩みを持ってないから関係ないな。俺の悩みなんて太刀川さんのレポート事情くらいだし。

「他人事のようにだけど貴方は自分の問題を理解している？」

雪ノ下は俺に咎めるような視線を向けてくる。何だその俺が悪いみたいな目は？初っ端から罵倒してくるお前の方が悪いからな。

「興味ないな。それにこっちも暇じゃないので勝手な入部はゴメンですよ。平塚先生」

俺がそう言うのとドアが開き平塚先生が現れた。やっぱりいたか。気配で丸分かりだ。

「気付いていたのか？」

「雪ノ下は気付かなかったから上手く隠れていたと思いますよ。話を戻しますと俺はそこまで問題ないと思いますよ」

「何を言ってるの？貴方の問題は変わらないとまずいレベルよ。だから私には解決する義務があるの」

まだ言うのかよ？

「そうかい。だったらこんな実績のないだろう部活なんかよりスクールカウンセラーに相談するよ。それなら文句ないだろ？」

「貴方私の話を聞いていたのかしら？私は平塚先生に頼まれたの。だから私が解決するの」

何で実績のない奴に解決されなきゃいけないんだよ？こんな奴に解決されるくらいなら免許を持つてるだろうカウンセラーに相談した方が断然いいだろ？

すると平塚先生が口を挟んでくる。

「雪ノ下、どうやら比企谷の更正に手間取っているようだな」

「本人が問題を自覚していないせいです」

さつきから本当に好き勝手言いやがるなこいつ。もう我慢の限界だ。

「ちげえよ。変わるだの変われだの、他人におれの自分のことを語られたくないんだっつもの」

「あなたのそれは逃げでしょ？」

「変わるっつーのも現状からの逃げだろ？どうして過去や今の自分を肯定してやれないんだよ？」

「……それじゃあ悩みは解決しないし、誰も救われないじゃない！」

救われない。そう口にしたときの雪ノ下には鬼気迫るものがあつた。高校生で救うなんて言葉を使うとは意外だ。普通の高校生なら気圧されて黙るだろう。

まあ俺は気圧されないけどな。

「生憎と俺は悩んでいないからな。大体そんなに誰かを救いたいなら今すぐ発展途上国の国々に行つて救われるべき人を救つてこいよ。救いを求めている人が沢山いると思うぜ？」

俺がそう返すと射殺するような視線で見ってくる。何だよ？事実を言っただけでキレるのかよ？やっぱりこいつの方が問題あるだろ？

「其処までだ、二人とも落ち着け。」

此処で平塚先生の制止が入る。

「いいぞ、いいぞ。私の好みの展開になって来たぞ。」

どンドン平塚先生が興奮してきている。

「それではこうしよう。これから君達は自らの主義主張を賭けて戦ってもらおう。そして私はこれから君達へ悩める生徒を連れて来るので、彼ら彼女らを自分のやり方で救ってみたまえ。そして自らの手で自分の正義を示したまえ!!レディー、ファイテ」

p r r r . . .

「あ、すみませんメールが来たので少し失礼します。」

そう言って俺は廊下に出てメールを確認する。メールを見ると差出人は双葉だった。内容は女子の身体検査は午後にあるから訓練の時間を遅らしてくれと書いてあった。

とりあえず了解と返信をして教室に入ると平塚先生が涙目で此方を見ていて、雪ノ下が冷めた目で先生を見ていた。

「何ですか?この状況?」

「最後まで言わせてくれ!」

おい、マジで泣いてるじゃねーか。情けないな。

「平塚先生みつともないです」

雪ノ下にはバカにされている。こいつ教師にも容赦ねーな。

「と、とにかくっ!自らの正義を証明するのは己の行動だけだ!勝負しろといったら勝負しろ。君達に拒否権はない」

この人アラサーの癖に精神年齢ガキ過ぎだろ。あと少年漫画の読み過ぎだろ多分。俺もよく読んでるからな。

「勝った方が負けた方になんでも命令できる、という条件をつけるのはどうだ?」

王道過ぎだろこの展開。実際こいつに命令したい事なんてないけど。

「お断りします。この男が相手だと貞操の危険を感じます。」

口の悪い上貧乳に誰が欲情するか。……いや待てよ。

「安心しろ。俺がお前にしたい要求はその類じゃない」

俺がそう口にすると平塚先生は興味深そうに俺を見てくる。

「……ほう。ならば比企谷、君は雪ノ下に何て命令したいんだ?」

そう聞いてくるので俺は口を開ける。

「はい。じゃあ雪ノ下。もしも俺が勝ったらお前は自分の両の目をくり抜いて俺に差し出せ」

俺がそう口にすると平塚先生と雪ノ下は呆気にとられた表情をしている。まあ自分でもアレだと思ったけど。

暫くすると平塚先生が再起動する。

「そんな事を認められる訳がないだろ！」

平塚先生が俺に怒っているがいきなりどうしたんだ？

「何故ですか？平塚先生は何でも命令出来ると言っただと思えますが。何でもと言った以上俺が雪ノ下の両目を要求しても構わない筈では？」

俺がそう口にするると平塚先生は黙る。平塚先生が黙った以上ここにいる意味はないな。俺としては雪ノ下の両目なんて興味ないしな。適当に脅したら黙らせれたし結果オーライだろう。

「俺を入部させたかったら俺の要求を呑んでください。……まあその要求を了承した所で勝負を有耶無耶にして要求をなかった事にするのは目に見えています。……ですから」

俺は一つ区切り口を開ける。

「了承する場合はその証拠として雪ノ下の指を1本俺に差し出してください」

今度こそ平塚先生は完全に黙る。言うまでもなく嘘だ。んな事したら警察沙汰になって俺もヤバいからな。捕まったりしたら小町に迷惑がかかるしな。

「んじや俺は用事があるからこれで」

まあここまで脅せば俺を入部させようとしないだろう。正直ここまで脅すつもりはなかったが雪ノ下の罵倒に怒りを感じた俺としては特に後悔していない。

そんな事を考えながら昇降口へ歩き出した。

比企谷八幡は逃げ切る事に成功する。

学校で独神教師と毒舌女に絡まれた放課後、俺は作戦室である物を
書いている。

すると作戦室に国近先輩が入ってきて、その後に綾辻と三上、宇佐
美が入ってきた。

「おやく？比企谷君だけかい？」

「どうもつす国近先輩。もしかして今から女子会ですか？」

「うん。そうだよ」

「んじゃこれ書いたら出て行くんで後2分くらい待つてください」

「比企谷君は何を書いているの？」

綾辻が聞いてくるので書いている物を見せる。絶対に驚くだろう
な。

「……え?!嘘だよね?!」

予想通り綾辻が驚いた。すると他の3人も興味が湧いたようで紙
を覗き見る。そして全員が驚いている。

「比企谷君本気?!」

「ハッチ君何でこんな急に?!」

「何かあったの?」

珍しく国近先輩も驚いていた。国近先輩はいつもおっとりしてる
から驚いた顔は新鮮だ。まあこいつらなら話していいか……

「実はだな……」

「そんな事があつたんだ……」

「雪ノ下さんがそんな人とは思わなかったなあ」

俺は今日あつた事、作文の件で呼び出され変な部活に連行され雪ノ下に罵倒された事や、変な勝負をやれと言われてその代価として指を寄越せと言つた事、全部話した。

すると

「でもハッチ君ならそんなの無視するんじゃない？だからソレを書く必要はないと思うんだけど」

宇佐美がそう言つて国近先輩、綾辻、三上も頷く。まあ正論だな。

「確かに俺のメンタルなら気にしない。だけど平塚先生は多分俺の入部を諦めてないだろう。これは降りかかる火の粉を払う為の脅し道具だ」

「という事はソレは提出する気はないって事？」

「その通りだ綾辻。あくまで諦めないなら出すって脅すだけだ」

これを出すのはこちらとしても避けたいからな。リスクがデカい。

「……ところで比企谷君」

「何だ三上？」

「その作文つて高校生活を振り返つて、だよな？比企谷君は何て書いたの？」

まあ普通気になるよな。わざわざ呼ばれた挙句部活に入れて強要されてんだしな。

「それはだな……。特に振り返る事はないって書いた」

そう返すと全員が苦笑いしてくる。

「何というか……比企谷君らしいね」

三上がそう言うのと全員が頷いてくる。

「うるせーな。大体三上、お前去年俺と同じクラスだったから理解出来るだろ？俺基本1人だったし」

そう、実は三上とは高1の時は同じクラスだった。まあ接点はなかったが。そして宇佐美の後任と知つた時はかなり驚いた。つーか

その時までボーダーって知らなかったしな。

「まあ確かに比企谷君はいつも寝ているイメージだったなあ」

基本的に俺は授業と飯食う時以外は寝てるしな。学校も直ぐに帰ってるし、そんな奴が高校生活を振り返っても特に何も思わないだろう。

「まあそういう事だ。話を戻すと多分ソレは提出しないな」

「それがいいと思うよ」

国近先輩がそう言っただけの奴らも頷いてくる。……つとこれで記入したな。

「んじや書いたんで俺はこれで。どうぞごゆっくり」

そう言っただけで作戦室から出て行った。

翌日、放課後になり授業が全て終わりを告げるチャイムが鳴った。ホームルームが終わりそのまま部活へ行く生徒やそのまま友達と一緒に帰る生徒などと色々な行動を取り始める。そんな中俺は防衛任務が今日はないのでそのまま家に帰るかボーダー本部へ行き双葉とイチャイチャするか悩みながら教室を出た。

「部室はそっちの方向じゃないぞ」

横から声がしたので振り向くと平塚先生が仁王立ちしていた。やっぱり来たか。予想通りだが問題ない。対策は出来ている。

「何か用ですか？平塚先生」

適当に惚けみせると平塚先生は額に青筋を浮かべてくる。短気過ぎだろ？マツ缶を飲むのはいかがですか？

「奉仕部の部員として、部活には出るべきだろう」

まさか昨日あれだけ脅したのに諦めてないとはな。

「言った筈です。俺をあの部に入部させて勝負に参加させるには雪ノ下の指を寄越せと。雪ノ下の指を渡さないなら俺は入部しません」

俺がそう口にすると思んでくる。

「そんな条件が呑める訳ないだろう。君の入部は強制だ。だからその条件を呑む必要はない」

ちっ、やつぱりそう来たか。まあ当然だ。俺も本気で雪ノ下の指を要求するつもりはない。

「嫌です。あそこに行くメリットがないです」

「私は君の心配をしているんだ。このままだと君は社会に出て困る。君の捻くれが治るかもしれないぞ?」

なんで俺が性格改変したいと思ってる感じにまとめようとしてんだよ。

「いや別に治して欲しいとか思っていないです。勝手に人を変えようとするな。俺は今の俺で満足してますので」

「なら無理やり連れていくぞ?」

「別に構いませんが、先生じゃ俺には勝てませんよ。これでも2年以上ボーダーで鍛えてますので」

こっちは玉狛の木崎さんの筋トレに付き合ってるんだ。少し力のある独神なんぞに遅れはとらん。

「なら、3年で卒業できると思うなよ?」

安い脅し文句だな。そんなの嘘だということは簡単に見抜ける。一教師がそんな曖昧な理由で留年にできるわけがないからな。嘘をつくならバレない嘘をつけ。

そんな安い嘘を吐いてまで入部させようとするとは……

やはり俺もカードを切るか。

「そうですね。では俺はこれを提出してから部室に行きます」

そう言っつて鞆から一枚の紙を出して平塚先生に見せつける。すると平塚先生は目を見開いて紙を引いたくってくる。まあ気持ちはわかるがな。

俺が渡したモノは

退学届 平成××年4月14日

21F 比企谷八幡

退学希望年月日 平成××年4月15日

退学理由

平塚教諭による言動に苦痛に感じて学校に行くのが嫌になったか
ら

そう、退学届だ。

これを見た平塚先生は青ざめている。当然だ。これが校長に渡つたら平塚先生は教師として終わるだろうしな。

「比企谷！君は本気か?!」

「はい。もし入部させるといふなら校長に提出します」

「高校を中退なんてしたらそれこそ社会に出て困るぞ！」

まあ普通ならそうだよな。しかしそれも予想通りだ。

「問題ありません。中退ではなく転校です。もう一つの提携校の三門市立第一高等学校に転校するつもりです」

あつちにはチームメイトの出水や国近先輩もいるから、総武にいるよりは苦痛に感じないだろう。

それにもし仮に転校しなくても迅さんの様にボーダーに就職するのも一つの手だ。ボーダーに就職したらギリギリまで現役で働いて、その後に開発室か中央オペレーターに転属でもすればいい話だ。それで食っていけるだろうしな。

改めて平塚先生の顔を見ると苦い顔をしている。やっと諦めたか？そう思っていると

「……いや、しかしだな、それは君の為に……」

まだ諦めてないのかよ?!しつこいにも程がある。トドメを刺してやるか。

「別にいいでしょう。両親がいない俺は自分で稼いだ金で通ってるんです。俺が総武に学費を払わなくても文句を言われる筋合いはない筈です。もしも入部させたいなら月毎に稼いだ給料の50%を払ってください。ちなみに俺の年収は1000万を越える時もありますから」

もしも払ってくれるなら喜んで入部してやる。あんな女の罵倒を我慢するだけで年間500万近く貰えるし。

まあそんな条件を呑むとは思えないがな。

平塚先生を見ると顔は死んだ様になっている。少しやり過ぎたか？

「その様子じゃ金を払うとは思えないので入部はしませんがよろしいですね」

「……………ああ」

平塚先生は物凄い苦い顔をして頷く。当然だな。ここで俺を入部させようものなら平塚先生は終わるからな。

「んじや退学届は提出しませんね。あ、それと雪ノ下には依頼中止を言っついて下さいね」

平塚先生の返事を聞かないまま俺は昇降口へ向かって走り出した。その際にホッと息を吐く。

ここまで言えば今後入部しろと言われまいだろう。これで俺の学校生活は平穏だ。

(まあ、もしまた言ってきたら今度は問答無用で退学してやる)

そう思いながら靴を履き替えてボーダー本部へ向かって走り出した。

「……そんな事があつたんですね」

「まあな。まあこれで平穏な学校生活を送れるよ」

現在俺はボーダー基地の屋上で双葉とイチャイチャしている。双葉を膝の上に乗せて頭を撫でている。平塚先生によって生み出されたストレスがみるみる無くなっている。

「……でも酷くないですか？確かに八幡先輩の作文は問題がありましたけど、それだけで本人の意思を無視して強制入部させようとするのは違うと思います。普通は再提出だけですよ」

まあそれが普通だよな。大体俺より雪ノ下の方が社会に出て困るだろうが。あいつ、俺が目が腐ってるからって脳も腐ってるとか言ってる奴だし。

「いいんだよ。もう終わった話だしな」

「そうですか。……八幡先輩」

双葉を見ると真っ赤になりながらも唇を寄せてくる。そういや今日はまだキスしてないな。

双葉と唇を合わせようと自身の唇を寄せる。

そして合わさろうとしたその時……

p r r r ……

俺の鞆に入っている携帯が鳴ったので慌てて双葉から離れる。双葉は名残惜しそうな顔をしているが俺も同感だ。誰だ俺と双葉のキスを邪魔したのは？

苛立ちながらメールを見ると忍田本部長からだった。内容は昨日の防衛任務の俺の報告書がまだ提出されてないから早急に提出しろとの事だった。そういや出してなかったな。今回は俺が悪いな。

そう思いながら鞆を漁るも報告書がない。アレ？どこ行つた？

(そうだ。今日学校で書いてたから学校にあるな)

罪悪感を抱きながら双葉の方を向く。

「すまない双葉。俺今から学校に報告書を取りに行かなきゃいけないんだ」

「……そうですか。なら仕方ないですね。気をつけて」

軽く笑いながら言ってくる双葉に軽く頭を下げて歩き出そうとした時だった。

ちゅっ…

いきなり双葉に唇を奪われたので見ると

「い、行ってらっしやい。……あ、あなた」

真っ赤になりながらそう言ってきた。まるで妻の見送りみたいで
恥ずかしいんだが……

まあ嬉しかったしお返しをするか。

俺は双葉を引き寄せて

「んっ、ちゅっ…」

唇を奪い耳元で囁く。

「行ってきます。ハニー」

そう言って走り出した。何か後ろで「ふにやあ……」とか聞こえた
が気のせいだろう。多分

学校に着き急いで教室に入り机を漁る。

「おっ、あったあった」

報告書を見るとちゃんと全部書いてあったので安堵の息を吐く。
急いで戻らなきゃな。

そう思いながら教室を出た。

教室を出て昇降口へ走っている時だった。

「あの……ヒツキー……」

あん？何か背後から声を掛けられた気がするが気のせいだろう。俺ヒツキーなんて呼ばれた事ないし。

そう判断して走り出そうとした時だった。

「ま、待ってー！」

いきなり腕を掴まれたので振り返ると同じクラスの奴がいた。何で知ってるのかって？いつも教室で煩いグループのメンバーだからな。嫌でも覚えてしまう。まあ名前知らないけど。

つかヒツキーって俺の事かよ。ハチとかハッチって呼ばれた事はあるがヒツキーはないからな。

「……何だよ？」

俺が尋ねると女は口をモゴモゴして喋らない。

暫く時間が経過すると

「こ、これ……お、お礼に……」

唐突に何かの入った包みを手渡してくる。中身は……お菓子か？いや、これはお菓子じゃない。おそらく末元物質だ。この世に存在しない物質だ。

それ以前にお礼ってなんだ？俺は何もしていない。クラスだって今年初めて同じになったのだ、それ以前に関わった覚えはない。

俺がそう口にしようとした時だった。

「じゃ、じゃあ!!」

そう言って走り去って行った。

俺の手元にはクッキー？が入った包みがある。この光景を見て思った。

「……何だったんだ？」

そう呟いた俺は悪くないと思う。

「……なあ比企谷」

出水が話しかけてくる。

「何だよ？」

「……それ何だ？」

太刀川さんが指差したのはさつき貰ったクッキー？だ。

「いや、さつき学校に報告書を取りに行った際にお礼とか言ってもらいました」

「いや、それ絶対お礼じゃなくて嫌がらせだろ？加古のハズレ炒飯と同じ雰囲気があるんだが」

まあ同感だ。あの女を見る限り嫌がらせとは考えにくいが、このクッキー？を見る限りじゃ嫌がらせに思えてしまう。

「……一応食べます。食物は粗末にしない主義なんで」

俺がそう言うと

「じゃあ俺も食べるぞ」

太刀川さんがそう言うてくるので見ると男らしい笑みを浮かべている。

「部下が1人で死地に向かおうとしているのを隊長としては見逃せないからな」

ヤバい！太刀川さんが輝いて見える!!

すると出水も

「俺も食べるぜ。隊長とチームメイトを見殺しには出来ないしな」

「2人とも……ありがとうございます」

俺が頭を下げると2人とも笑いながら手を振ってくる。

「気にするな。……それより食べるぞ」

「了解」

そう言っつて真っ黒のクッキーを手取る。改めて見るとヤバいな

……

「じゃあいただきます」

「いただきます」

そう言っつて口の中に入れた。

(何だコレ?!)

不味い。しかも口の中の感触がどんどんわからなくなってきた。

そう思うと同時に俺は意識を失っていた。

気が付いたら俺は医務室にいて、その横には太刀川さんと出水が意識を失っていた。

2人が目覚めたのは俺が目覚めて1時間経ってからだった。

比企谷八幡は戸塚彩加の練習に付き合う

「お前ら！二人組作れ！」

体育の授業、担当の厚木はそう声を上げると他の奴らはすぐにペアを組む。俺のクラスにはボーダー隊員がないので当然の如く俺はぼっちだ。だが問題ない、ボーダーに入る前はプロのぼっちだった俺は対処法を熟知している。

「体調が悪いし壁打ちしてていいですか？相方に迷惑かけるのも悪いしですし」

そう言えば、向こうも強くは言えない。先生の返事を聞く前に壁の方へ歩いていく。

壁打ちを初めて数分経つがボールを一度もこぼさない。

俺はテニスを碌に経験していないが、孤月を振っている為鍛えられている。場合によってはアステロイドを斬り落とす時もあるし。それに加えて身体能力も割と高いから下手な経験者より自信がある。

まあ、一緒に球技をする相手がいないからアレだけ。

するとこちらにボールが飛んで来たのでそれを拾い相手に投げる。

すると向こうは、

「ありがとう、ヒキタニ君。」

笑いながら言ってきた。誰だよヒキタニって？俺は比企谷だからな？溜息を吐いて壁に向き直った。

昼休みになりベストプレイスで飯を食べている。

するといきなり

「比企谷君？」

いきなり名前を呼ばれたので振り向くとジャージ姿でラケットを持った可愛らしい顔の生徒がいた。

「ん？俺を知ってるようだが誰だ？」

するとその少女は苦笑いをしている。

「あはは……。クラスメートの戸塚彩加です。よろしくね、比企谷君」

マジかよ?!こりや悪い事をしたな。

「そいつはすまなかった。俺クラスじゃ基本寝てるからな。ところで何で俺を知ってるんだ？」

「だって比企谷君、体育の授業で凄いテニスが上手いから」

マジか。あの壁打ちを見られているとは思わなかったな。ステルスヒツキーを見破るとはこいつ只者じゃないな。……ん？ちよつと待てよ

「あれ？何で女子のお前が俺のテニスの実力を知ってるんだ？」

総武校の体育の授業は男女別々だからな。男子が女子の授業を見る事は出来ないし、その逆もわかりだ。

だが目の前の少女の返答は予想外だった。

「あ、僕男の子です」

……………は？

次の日の体育もテニスだったので再び一人で壁打ちを行う。しばらく続けて一休みをしようとする肩を叩かれたので振り向くと頬に指が当たった。

「あははっ、引っかかった」

よく見ると戸塚だった。コロコロと笑っているがこいつ本当に男か？

今の笑い方女としても通用するぞ。

「何か用か？」

「えっと、良かったら僕と組まない？」

「ああ、おれも一人だしいいぞ…」

正直今キョドリかけた。可愛いなおい。いかんいかん、俺には双葉がいるんだ。浮気はダメだ！

「いいの?! やったあ！」

ここまで喜ばれるとは思わなかった。守りたい、この笑顔。うん、守るだけだから浮気じゃないな。ハチマンうそつかない。

しばらく打ち合っていると

「ちよっと休もうか」

おれはまだ体力はあるが戸塚は疲れているのか汗が流れている。戸塚は汗を拭いているがなんかエロい。

「やっぱり比企谷くん上手だね」

おい待て、近寄り過ぎだろ。少し離れろ。

「…あのね、実は比企谷くん相談があるんだけど」

「何だ？」

「実はうちのテニス部凄く弱くてね、3年が次の大会で引退するから多分また弱くなっちゃうと思うんだ。」

「なるほどな…」

テニス部が活躍しているという話は聞いたことない。まあ学校に興味がない俺だから知らないのかもしれないが。

「それで、比企谷くんさえ良ければ、テニス部に入ってくれないかな？」

「成る程」

戸塚可愛いし大抵の頼みならokしたいが

「済まない戸塚。家計の為のバイトで忙しいから無理なんだ。本当に悪い」

「そっか、それじゃあしようがないね」

しゅんと肩を落としている。やばい凄い罪悪感。少し慰めたい。

「あー、戸塚。入部は無理だしその代わりになるかわからないが、お前さえ良ければこれからの授業でも一緒に組まないか？役に立つかわからんが少しでも力になりたいし」

1人で壁打ちより可愛い戸塚と組んだ方が俺としても良さそうだしな。

すると戸塚は顔を上げて笑顔を見せてくる。

「……比企谷君優しいね。僕さえ良ければ組みたいな」

ヤバい、凄い可愛い。小町や双葉に届き得る笑みだぞ。

「そ、そうか。じゃあよろしくな」

「うん！」

戸塚の笑顔に癒されながら休憩を終わらせた。

体育の授業が終わり俺は戸塚と教室に戻っている。

「比企谷君、僕より上手いよ。もしかして経験者？」

「いや、運動はしてるがテニスはした事ないな」

俺がしてるのはトリオン兵を殺す運動だけだ。……青春の欠片もない運動だな。

そう思っていると戸塚がモジモジしてくるがどうしたんだ？男のモジモジなのにときめいているのは俺が変なのか？

「あ、あのさ比企谷君、比企谷君が暇な時でいいから昼休みにテニスしない？比企谷君強いから勉強になるし、比企谷君と一緒にやりたいし……」

何でこんなに可愛いんだよ?!こいつマジで女じゃね？

閑話休題……

しかし昼休みにテニスか……

悪くない話だ。学校は凄く詰まらないから戸塚と過ごして癒されるのもいいな。そして放課後は双葉に癒され、家に帰ったら小町に癒される。

………最高だ

「いいぜ。暇だしな」

即答した俺は悪くない。

「本当？嬉しいな」

戸塚は笑っているが俺も嬉しい。もしかしたらストレッチをする場合には戸塚の身体に触れ……

ゾクツ……

………何だ？今寒気がしたが、気の所為か？

「比企谷君?」

戸塚に呼ばれて我に返った。

「あ、ああ。すまない。大丈夫だ」

そう言っつて教室へ向かって歩き出した。

放課後になりボーダー基地に向かう。

基地に入り作戦室に入ると双葉がいたので話しかける。

「よう双葉」

呼びかけると双葉は何故か悲しそうな顔をしている。何だこの顔は?

すると双葉がいきなり抱きついてきた。俺は慌てて抱き返す。いきなりどうしたんだよ?

「……双葉?」

「八幡先輩、私を嫌いにならないでください!」

「は?!」

いきなりどうしたんだよ?!俺が双葉を嫌いになるだど?!そんな事太刀川さんが真面目にレポートに取り組むくらいあり得ないからな!

とりあえず事情を聞くか。双葉を軽く抱きしめて口を開ける。

「……何かあったのか?」

そう聞くと

「……その、午後の授業で寝ちやっただんですけど、八幡先輩に別れを切り出されて八幡先輩が違う人と付き合っている夢を見てしまって」

ん?!何だと?!午後の授業?もしかして戸塚にときめいた事が関係しているのか?だとしたら問題ない。戸塚は可愛いがどんなに仲良

くなくても親愛感情しか湧かないだろうしな。
俺が恋愛感情を抱いている相手は黒江双葉だけだ。

「安心しろ双葉。俺がお前を嫌いになる事は絶対にならない。だから泣くな」

そう言っつて双葉の涙を拭く。

「……はい！」

そう言っつて双葉は泣き笑いをしている。

「すうー、すうー……」

泣いたのが原因か双葉は今俺の膝の上に頭を乗せて寝ている。俺は双葉の頭を撫でている。

撫でているんだが……

「ほうほう」

「やるなーハッチ」

「……」

目の前では出水、米屋、三輪がいて俺を見ている。出水は優しい笑みを、米屋はニヤニヤ笑いを、三輪は無表情で俺を見ている。まあ俺も三輪の立場なら気持ちはよくわかるがな。

結論、三輪と米屋に双葉と交際しているのがバレました。

発端はこうだ。作戦室で双葉の頭を膝の上に乗せていると出水が三輪と米屋を連れてやってきた。当初は驚かれたが、俺が双葉が疲れたらしくいきなり膝の上で寝たと言ったら納得してくれた。

しかし双葉が

「……八幡、先輩。私も大好きです。……ずっと一緒に……」

いきなりこんな寝言を言ってきて作戦室の空気が凍った。あの時は液体窒素の中に入れられた気分だった。その後何やかんやでバレてしまった。

閑話休題…

「ところでハッチは黒江ちゃんといつから付き合ってたの？」

槍バカが興奮しながら聞いてくる。テンション高過ぎだろ？

「去年の暮れあたりだ」

「マジで?!全然気がつかなかったぜ」

まあそうだろうな。バレないように細心の注意を払ってたしな。

「そりゃバレたらヤバいからな。三輪の様に無表情になる奴がいてもおかしくない」

片や目の腐った高校生、片や小学生、明らかにアウトだしな。

「まあそうだな。お前に限ってないと思うがハメを外し過ぎるなよ」

三輪に軽く睨まれるので頷く。流石に双葉が高校生になるまではキス以上の事はしないだろう多分。双葉可愛いから分らないけど。

「多分大丈夫だ」

「そこは断言しろ……」

三輪は呆れているがこればかりはわからないからなあ。

「まあとりあえずおめでとさん」

米屋がそう言って祝ってくるので礼の返事をしようとした時だった。

「……………んっ、ちゅっ…、八幡、先輩……………もつと、激しく……………!」

双葉が再び言った寝言によって作戦室の空気が再び凍りついた。ねえ、お前は俺を社会的に殺したいの?周りを見ると3人共凍り付いている。とりあえず弁解しないとヤバい。

「いや、待ってくれ。双葉のコレは……」
慌てて弁明しようと口を開けると3人が再起動する。

「おいおい。洒落になってないぞ」

「ハッチ……流石にこれは……」

「……」

前から双葉と付き合っている事を知っている出水と大抵の事を笑って済ませる米屋ですら引き攣った笑みを浮かべようとしている。しかし上手く表現出来ていない事から俺に物凄いドン引きしているのがわかる。

三輪に至ってはゴミを見るような目で俺を見ている。あのー、三輪さん？気持ちはわかりますがその目で見られ続けられるとメンタルが死んでしまうので止めてくれませんか？

「頼む誤解だ。話を聞いてくださいお願いします」

そう言っって頭を下げる。もしも双葉が膝の上になかったら間違はなく土下座をしているな。

「いや、そうは言ってもな……」

「ハッチ、中1相手と大人の階段を上るなんて、アレだぞ？」

「だから話を聞いてくれ。俺はまだ双葉を抱いてない。経験から言っって多分双葉は夢の中でキスを強請ってるんだよ」

双葉はいつもキスする時に必ず激しくしてくれと強請るからな。大体日本の法律だと12歳は完全に犯罪だからな？

「本当か？」

「本当だ」

即答すると3人に睨まれるが事実なら逸らす必要はない。そう判断して睨み返すと向こうが息を吐く。

「……まあハッチだしな。信じるぜ」

米屋が一つ頷き、出水と三輪も息を一つ吐く。日頃の行いだな。

「すまん」

「別に構わないがマジでハメを外し過ぎるなよ。ハッチが豚箱に入るのを見たくないしな」

「安心しろ。俺も入るつもりはない」

「ならいいけど、……あ！そろそろ防衛任務だ！秀次行こうぜ！」

「わかった。……精神的に疲れた状態で防衛任務か」

「すみませんでした」

間違いない俺の所為だな。本当に申し訳ない。今度飯を奢るか
らな。

「あ、それとこの件は黙っててくれるとありがたい」

「わーったよ。じゃあな」

そう言つて2人は去つて出水はソファアに座る。

「ついにバレたな」

「まあ仕方がない。遅かれ早かれバレるだろうしな」

「犬飼先輩と当真さんが撮った写真もあるしな」

そうだった。去年双葉とテイステイニーに行つた際に写真を撮られたんだつた。アレの所為で一時期かなり噂されたからな。今は噂がなくなつているが、次にデートしてる所を撮られたら噂は事実と思
われるだろうしな。

まあバレた所で別れるつもりはないけど。

そう思いながらスヤスヤと寝息をたてている双葉の頭を撫でるの
を再開した。

翌日、午前の授業を終え、昼休みになる。

俺は今惣菜パンを一つ食べてテニスコートに向かっている。戸塚と約束した手前初日から休むつもりはない。偶には近界民を殺す運動以外もしたいしな。

テニスコートに着くと、戸塚がいて手を振ってくる。

「あ、比企谷君。本当に来てくれたんだ。嬉しいな」

笑顔を見せてくる。まさか今の世の中にこんなマトモな高校生がいるとは……。ウチのクラスなんてバカ騒ぎする奴が殆どだし、良い清涼剤だ。

「気にするな。じゃあ早速やるのか？」

「うん。……あ、それと今日から比企谷君以外にも手伝ってくれる人がいるんだ」

マジかよ?!俺コミュ障だけど大丈夫か?まあわざわざ外部から手伝ってくれる人だろうから悪い人じゃないと思う。

いざとなったらその人の相手は戸塚に任せ、俺は無言で練習に付き合えばいいだけだ。

俺と戸塚の練習が始まった。今は試合形式で軽く練習をしている。技術は向こうが上だが、身体能力は圧倒的な差で俺が上回っている。それを活かした短期決戦スタイルで攻めている。

今更だがテニスでも太刀川さんの影響を受けているような……

そう思いながらサーブを打とうとした時だった。

「あ、他のお手伝いさんも来てくれたし一旦中止でいいかな?」

なら仕方ないな。とりあえず同じ戸塚の為に練習をする者として一言くらい挨拶しとくか。

そう判断して後ろを向いた時だった。

……は？何であの2人？

そこにいたのは平塚先生が俺を入部させようとした部の部長とA級1位部隊の精鋭3人を医務室送りにした女がいた。

……何か面倒な予感がしてきたな。

比企谷八幡は戸塚彩加の為に試合をする

時間が止まっていた。何でこいつらがここに？そう思っていると
いち早く向こうの時間が動いた。

「な、何でヒツキーがここにいるし?!」

末元物質の製作者はいきなり指をさしてきた。何でこいつはいき
なり人に指をさしてんだよ？

「つーかヒツキーって俺かよ？その渾名何か嫌だからやめろ」

「はあ？ヒツキーはヒツキーじゃん?!」

ダメだこいつ。自分が良ければいいタイプだ。面倒くさい奴だな。
溜息を吐いていると

「何故貴方がここにいるのかしら？逃げ谷君」

雪ノ下が突っかかってくる。こいつもこいつで面倒くさいな。

「俺は戸塚に付き合ってるだけだ。後逃げ谷って何だよ？」

「あら？勝負に負けるのが怖くて逃げたのじゃないの？」

「違うね。面倒くさいから拒否しただけだ。仮に怖かったとしても怖
い物から逃げて何が悪い？」

「あら情けないわね」

こいつ本当にムカつくな。逃げる事が悪いだと？

「ふーん、じゃあ聞くがもしもお前の目の前に近界民が現れても逃げ
ないんだな。お前さつき怖い物から逃げる事を情けないって言った
んだし当然逃げないよな？」

こいつはボーダー隊員じゃないし戦う術がない。とはいえ逃げる
事を情けないって言ったんだし逃げないだろう。

皮肉たつぷりの笑みでそう返すと射殺す様な視線で睨んでくる。

「睨んでないで答えろよ。お前は目の前に近界民が現れても逃げない
ヒツキー、言い過ぎー！」

更に責めようとする毒物生産女が止めにかかる。

「あ？先に喧嘩売ってきたのはこいつだぞ。つーか何でお前らがある
んだよ？こっちは戸塚の練習に付き合ってるんだ。邪魔するなら消

えろ」

「ん？奉仕部でさいちゃんのテニスの技術上昇を依頼されたから」

何だそりゃ？雪ノ下の奴暇人だろうな。

「ふーん。で、どんな練習にするんだ？」

「決まってるじゃない。死ぬまで走らせて、死ぬまで素振り、死ぬまで練習かしらね」

横暴だなこいつ大体死ぬまでやつちやダメだろ。普通に死ぬ直前までだろ。

「あつそ。んじゃ戸塚試合再開しようせ」

もう関わりたくないので適当にあしらい戸塚に話しかけてサーブを打つ。

何か後ろから睨まれてるが具体性のないメニューを示す奴は居ても意味ないからスルーだ。

翌日の昼休み、生徒会とテニス部顧問から正式に許可を得てテニスコートに入る。余談だが生徒会に許可を貰いに行った時綾辻に物凄い驚かれ軽くキレた。これが米屋とかだったら殴り飛ばしてたな。

ジャージに着替え終わりテニスコートに入ると早速雪ノ下の指導が始まった。始めに基礎能力を高めると言う事で腕立て伏せや腹筋、軽いマラソンを中心に戸塚を鍛える。毒物生産女こと由比ヶ浜は自分から参加している。しかし何故か俺もやらされている。

まあ生身を鍛えるとトリオン体の動きも高まりやすくなるから修行と思えばそこまで面倒とは思わない。今でも毎朝走りこんでるしな。

最近じゃ双葉と一緒に走る事もある。そしてストレッチをする際双葉の身体がぶつかつたりすることが多く朝からテンションが上が

る。……いかんマジでロリコンって呼ばれそうだ。

ちなみに雪ノ下にお前はやらないのかと聞いたら、さりげなく目を逸らしながら、指導役が必要だとか言ってたが、お前絶対体力ないだろ。昨日散々逃げるのが情けないとか言ってた癖に自分は体力のない事実から逃げてるだろうが。

閑話休題……

様子を見る限り戸塚は本気でテニスに取り組もうとしているのが見て取れる。先は長いかもしれないがこれからしっかりと鍛えれば強くなれるだろう。

更に次の日の昼休み、再びテニスコートに集まった。

基礎練のこなし方はマスターしたので、ラケットを使って実践練習が始まる。

基本は壁打ちを中心に行い、偶に俺がボールは決められた所に打ち戸塚がそれを打ち返すというメニューだ。実戦的でかなり良いメニューだ。

始め俺はそこそこ雪ノ下の指示通りのコースに打ち込む。

雪ノ下の指示したコースは嫌らしいが対処が不可能ではないコースだ。これならきついが実戦的で試合の役に立つ。

暫くの間続けていると問題が起こった。

「うわっ、さいちゃん、大丈夫?!」

見ると戸塚は膝を擦りむき血が出ていた。何て事だ! 戸塚の綺麗な脚に血が付いただど?!

「うん、僕は大丈夫だから、続けて」

俺が内心焦っている中、戸塚が返した。

「無理はするな。俺が保健室に行つて救急セットを借りてくるからその間休んでろ」

俺はそう言つて戸塚の返事を聞かずに保健室へ向かった。待つてろよ戸塚！

保健室で救急セットを借りた俺はテニスコートへ走っている。本来ならとつくに治療を終えて練習を再開している筈だったが、養護教諭が席を外していて10分ちよい待つてしまった。

(待つてろよ戸塚。直ぐに戻るからな)

そう思いながらテニスコートへ走っていると、テニスコートから騒ぎ声が聞こえてきた。

不審に思い足を速めるとテニスコートの周辺には大量の人がいた。生徒を押しよせのけテニスコートに入ると意外な光景を目の当たりにした。

テニスコートの中で雪ノ下が疲労困憊になっていて由比ヶ浜がその横で悔しそうな顔をしている。

対面にはクラスのスクールカーストのトップの金髪コンビが佇んでいる。

……何だこの状況？

とりあえず事情を聞く為に審判をしている戸塚の元へ歩き出す。すると戸塚は悲しそうな顔をして見てくる。

「戸塚、何だこの状況は？」

「あ、比企谷君。実は……」

「なるほどな……」

戸塚に聞いた所、

← 3人が練習中

← クラスのリア充グループやって来てコート使わせろと要求

←

← 雪ノ下反撃

← 縦ロールキレる

← 金髪コートを賭けて勝負と提案

← 雪ノ下拒否

← 縦ロール負けるのが怖いのか?、と挑発

← 雪ノ下挑発に乗る

← 試合開始

← 雪ノ下体力切れ、由比ヶ浜下手くそ

← 大ピンチ

という状況だ。

とりあえず一言、雪ノ下お前挑発に乗るな。由比ヶ浜、お前練習を見る限り下手だったし絶対に足を引っ張っただろう？

「比企谷君、どうにか出来ないかな？」

不安そうな戸塚を見ると何とかしたくなる。

「わかった。俺が出る。但し一つだけ約束しろ」

「何？」

「話を聞いている限りじゃ向こうは顧問や生徒会から許可を貰ってない

んだから今後ははつきりと断れ。でないとならぬもつけあがるぞ」

あの類の連中は上からの権力を使わないと黙らせられないからな。確かあの金髪はサッカー部部长だったな。もしも試合に負けたら匿名でサッカー部部长がテニス部の活動を妨害したとサッカー部顧問と教員にチクろう。

「う、うん」

「わかったならいい。ところで勝敗のルールは？」

「あ、先に1-1ポイント決めた方の勝ちだよ。両チーム10点になったら2点差がつくまで続ける」

「卓球と同じか。今のポイント差は？」

「9-7で雪ノ下さん達が負けてるよ。始めはリードしてたんだけど雪ノ下さんが体力切れしてから……」

一気に詰められた訳だな。つーか約20分で体力切れとかどんだけ体力ないんだよ？ 那須までとは言わないがボーダーだと最下位クラスだろ？

「わかった。とりあえず俺が出るからお前は2人に治療してもらえ」

戸塚に救急セットを差し出して2人の元へ歩き出した。テニスコート中央に行くと全員が見てくる。その視線を無視して雪ノ下と由比ヶ浜に話しかける。

「事情は聞いた。お前らは戸塚の治療をしろ。後は俺がやる」

「あなたが勝てる筈ないじゃない。本気で言ってるの？」

随分偉そうだが、そんな息を切らしてる奴が言っても偉そうに見えるな。

「少なくともお前よりマシだ。大体お前何で試合を受けたんだ？ 道理はテニス部顧問と生徒会の許可を貰っている俺達にあるんだぞ」

そう返すと雪ノ下は苦い顔をして俯く。

「お前が挑発に乗った事は知っている。お前が挑発に乗るのは自由だがな、今回は戸塚のテニスコートがかかってんだぞ？ お前のプライドなんかの為に他人に迷惑をかけてんじゃねえよ。それが分かったら

コートから出る。邪魔だ」

そう言つて雪ノ下をほつといて対戦相手の2人に話しかける。

「選手交代だ。悪いな。時間をとらせた」

「ふーん、次はあんた？悪いけどあーし手加減しないから」

「わかった。ところでサブ権はどうなってるんだ？」

「一球毎に交代。次のサブ権はあんただから。はいボール」

縦ロールは俺にボールを投げてきたので受け取り後ろに下がる。

すると由比ヶ浜は横に立つので話しかける。

「お前もだ由比ヶ浜。怪我人が出るな」

足擦りむいてるし。

「ちよー！ヒツキー！人じゃ勝てないでしょー！優美子中学時代県選抜だし！」

「ぶつちやけお前がいた方が勝てない。さっきまでの練習を見る限りじゃ足手纏いになるのが目に見える」

由比ヶ浜はそ、そうだけど……と言つて黙りコートから出て行く。
すると

「何？もしかして見捨てられた？」

縦ロールが鼻を鳴らしながら挑発してくる。こつちも挑発仕返してキレさせるのも悪くないが今回は空回りさせてやる。

「アホか。体力切れてる奴と怪我人を無理に出せる訳ないだろ。万が一後遺症になったらどうすんだよ？」

俺がそう返すと相手2人が驚いた顔で見ってくる。まあ嘘だけどな。

由比ヶ浜はともかく雪ノ下は後遺症が残つても何とも思わないだらうし。

とりあえず目の前の2人を再起動させるか。

「おい。そろそろ始めていいか？」

「あ、ああ、すまないヒキタ二君」

だから比企谷だからな。まあうちの隊長は昔100回はヒキタ二って呼んでたから特に怒らないけどな。

そんな事を呑気に考えながらボールを上げて

「フッ!!」

力の限りラケットに当たった。打ったボールは金髪の足元で跳ねてそのままフェンスに引つかかる。

すると観客の周りに沈黙が漂う。大方目の腐った奴がりア充にサーブを決められて驚いているのだろう。とりあえずこれで9ー8だ。前を見ると2人がポカンとしている。

「おい。次はお前らのサーブ権だろ?」

そう言うのと金髪がボールを手に取りサーブをしてくる。だが見切れる速さだな。

俺は全力に前に走りボールを打ち返す。狙いは2人の中間地点だ。すると2人が同時に走り打とうとする。しかしどっちが打つべきか悩んだのか両者とも打たずに通り抜ける。これで9ー9で同点だ。

次は俺がサーブ権を得る。ちなみにこれからの順番は俺↓縦ロール↓俺↓金髪↓俺って感じだ。俺1人だし当然か。

俺は再び全力で金髪の足元を狙う。しかし金髪も一度失敗したのだからに跳んで打ち返そうとする。サーブ権がある時に落とす訳にはいかないな。

そう判断した俺は金髪が打ち返す前にネットに張り付くために走り出す。それと同時に金髪が打ち返す。ナイスショットだ。俺の真正面に来たし。

俺はそれをドロップショットで打ち返す。軽く跳ねたボールはネットを軽く越えて相手コートに入る。これで俺のマッチポイントだ。

周りを見るとザワザワしている。中では「あんな腐り目が……」と聞こえるが無視だ。

するとポーンポーンと音がしたので音源の方向を向くと縦ロールがボールを地面についている。確か由比ヶ浜曰くあいつは県選抜らしいな。用心が必要だ。

気を引き締めて構えると縦ロールはボールを上げて

「フツ!!」

サーブを打ってきた。その速さには俺も驚いた。これは速いな。若干焦りながら打ち返すもサーブに押され緩い球になってしまう。しかも打った方向はよりにもよって縦ロールの間近だ。

当然そんな球は県選抜のプレイヤーにとつてはチャンスボール以外の何物でもない。

そう判断していると縦ロールは避けた。訝しげに思っているとボールはラインの外に出た。アウトかよ。縦ロールは分かっていたから避けていたのかよ?! やっぱり県選抜は伊達じゃない。これで10ー10と同点だ。これからは2点差をつけないと決着がつかないな。

覚悟を決めながらボールを向こうから受け取りに行く。

「あんた、結構上手いけど経験者?」

ボールを渡しに来た縦ロールが俺に質問をしてくる。

「運動はそこそこしてるがテニスは余りしないな」

俺がするのはトリオン兵を殺す運動だけだしな。青春の欠片もないな……

「ふーん、そ。まあ、あーし負けるつもりないから」

そう言つて元の位置に戻るの俺もそれに真似て自分の位置につく。生憎だが俺も負けるつもりはない。何せ戸塚のテニスコートがかかってるからな。

とりあえず作戦としては金髪を集中狙いだ。金髪は身体能力は高いがサッカー部故に足の運動はともかくラケットの扱いは拙いしな。それ以前に縦ロールの技術が予想以上だ。

とりあえず縦ロールのサーブは凌げない物として作戦を立てなくてはな……

頭の中で作戦を立てながらサーブを打った。

あれから20分……

「フッ！」

縦ロールが打ったサーブを何とか打ち返せた。そしてボールは金髪の方へ飛んでいった。あれから何発も縦ロールのサーブを打たれたが初めてマトモに返せたな。

金髪は返せないと思っていて油断したのか反応が遅れた。打ち返す事は出来たがタイミングが遅く、ネットにぶつかり相手のコートに落ちた。

これで19ー19でまた振り出した。今のは危なかった。もしも縦ロールのサーブを打ち返せなかったら俺の負けだったしな。

とは言えかなり疲れてきた。いくら食い付けても2対1だ。このまま行ったらスタミナ切れで負ける。やるなら短期決戦だ。次の俺のサーブ権でポイントを取り、金髪のサーブをブレイクするしかない。

一息吐いてサーブを打とうとした時だった。

キンコンカーンコン

校舎から予鈴が鳴り出した。ここまでみたいだな。そう判断して向こうの2人の方に行くと言こうも寄ってきた。

「予鈴が鳴ったしここままでいいかな？」

金髪が話しかけてくる。

「そうだな。……それで決着はどうするんだ？放課後にでも続きをするのか？」

だとしたら午後の授業は全部寝て体力を回復させないとな。そう思っていると縦ロールが予想外の返事をした。

「あー、それならいいや。あーし今の試合で満足したし」

マジかよ?!満足したから終わりかよ?!自分勝手過ぎだろ?まあ再戦しないならいいか。

「わかった。只一つだけ言っておく。もしも今後テニスコートを使いたいならテニス部の顧問と生徒会とかからちゃんと許可を取れ。でないと後で面倒になるかもしれないからな」

場合によっては他所の部活の妨害と思われるも仕方ないからな。

「……そうだな。それについては俺達が悪かった。すまないヒキタニ君」

謝るのはいいがヒキタニじゃないからな。と、ここで一つ疑問が生じた。

「ところでお前らが来た時にこの話を雪ノ下辺りから聞いてないのか？」

すると縦ロールが急に不機嫌な顔になり金髪は苦い顔になった。

あいつ何やらかしたんだ？

「実は……」

金髪曰く戸塚と縦ロールが話している時に雪ノ下が

「あら?いきなり現れてズケズケと自分の意見を押し通そうとするなんて人として恥ずかしくないのかしら?礼儀も知らない貴方達が来る場所じゃないわ」

とか言って縦ロールがキレたとの事だ。

……おかしい。確かに縦ロールの自分勝手さは問題だ。それはわかる。それはわかるが結果的には雪ノ下も悪く思えてしまう。

もしも雪ノ下がもつと優しく言えば勝負する事もなかっただろうに。本当、雪ノ下は悪い意味で将来が未恐ろしいな……

とりあえず2人にすまんと軽く謝り戸塚の元へ向かった。縦ロールは更衣室へ向かい、金髪は自分のグループと教室に戻って行った。「比企谷君ありがとう!! 凄いカッコ良かったよ!」

近い近い近いから! 少し落ち着こうね?

「気にするな。とりあえず勝負は引き分けだが向こうは満足したから大丈夫だ。ところであいつらは?」

「雪ノ下さん達なら着替える為に帰ったよ」

何だ雪ノ下の奴? 自分が蒔いた種を最後まで見届けないで帰るとは?」

あいつ、そんなんで人を救うつもりだったのか?

呆れながら俺は戸塚と一緒に教室へ向かった。

比企谷八幡は運が悪い

職場見学希望調査書

2年F組 比企谷八幡

希望する職業 専業主夫

希望する職場 自宅

古人云く、働いたら負けである。労働とはリスクを払い、リターンを得る行為である。よって俺の「働かずに家庭に入る」と言う選択肢は合理的且つ全くもって正当な物だ。したがって今回の職業見学においては専業主夫の職場である自宅を希望する。

「比企谷、私が何を言いたいか分かるか？」

職員室の応接スペースにて俺、比企谷八幡は暴力教師の平塚先生に呼び出されていた。

「……何で現国の平塚先生がそれ持ってるんですか？」

「私は生活指導でもある。故に君の担任に丸投げされた。……で、このふざけた希望書は何だ？」

「何と言われてもそれが俺の本心ですよ」

まあ双葉が家庭に入りたいなら働くけどな。いつそ共働きでもいいかもな。

「却下だ」

ですよねー。まあ当然か。俺が教師なら却下するだろうし。

「ところで君はこの前雪ノ下と一緒に戸塚を助けたらしいな」

「違います。助けたのは俺だけです。あいつは寧ろ戸塚に迷惑をかけたようとしてました。俺をここに呼んだ理由は希望書だけでなく奉仕部入部云々もあるでしょうけど、俺を入部させようとする暇があるならあいつの性格を直した方がいいですよ」

自分が挑発されてキレて戸塚のテニススコートを勝手に賭けた挙句負けそうになってたしな。あの時俺がいなかったらどう責任を取ったか少し気になるな。

「……そうか。非常に優秀な生徒なんだがな」

「それは成績だけでしよう。性格はただのクズとしか思えません」

俺が適当に返すと睨んでくるが事実だろ？会っていきなり罵倒するわ、テニス勝負じゃ自分のプライドの為に戦うわ、自分は疲労困憊の癖に俺に向かって勝てないとか見下すしな。雪ノ下がマトモなら世界中の人の内9割は菩薩の領域だ。来馬さんとか神として崇められそうだな。

「全く君は……奉仕部に入部出来ればその性格を直せると思うんだが……」

本気で言ってるのか？あんな部活に入ったら寧ろ悪化するぞ。

「お断りします。こちらも暇ではないので」

「はあ……まあいい兎に角職場見学希望調査書は再提出だ。それと今度の職場見学は三人一組だから好きなもの達と組んでもらうからそのつもりでいたまえ」

やはり再提出か、面倒臭いな。まあ見学先はみんな大人気のボーダー基地以外ならどこでもいいや。無難に出版社辺りって書いてくか。

好きな相手といったがどうせうちのクラスは30人だから割り切れる。

残った2人と組めばいいから大した問題じゃないし。俺はプロの

ぼっちだから慣れているし。

翌日……

「予鈴も鳴ったし教室に戻ろう八幡」

「はいよー」

俺は昼休み、戸塚とテニスの練習をしていた。リア充グループとのテニス勝負から2週間、あれから昼休みは毎日戸塚とテニスをしている。どうせ暇だし、双葉は中学生だから会えないから癒しを求めている俺からすれば結構楽しい。

にしても奉仕部の連中はリア充との試合以降1回も来ないなんて依頼を放棄したとしか思えない。普通はテニス部が実績を出すまで付き合おうのが依頼を受ける者の取るべき行動だろうが。

奉仕部に呆れながら教室へ戻ろうと歩き出す。

「そう言えば八幡は職場見学何処に希望したの？」

「まだ決めてないが出版社あたりかな。お前は？」

「僕？僕はボーダー基地かな」

やっぱりボーダーは人気だな。

「何だ？お前もボーダーに入りたいのか？」

「うん！実は僕、春休みにあのA級1位の太刀川慶さんに助けられて凄いい興味が湧いたんだ！」

太刀川さんが？そう言えば春休みに双葉の時みたいに警戒区域と市街地の境界辺りでトリオン兵が現れたとか言ってたな。本来なら俺が行く筈だったが唯我が足を引っ張ったせいでモールモッドに囲まれて動けなかったら太刀川さんが行った。その際に助けられたのが戸塚だった訳か。クソツ、俺が助けていれば……！

苦悶に満ちた表情をしていると携帯を見ている戸塚が悲しい顔をしている。

「どうしたんだ？そんな悲しい顔をして？」

俺が聞くと戸塚は携帯を見せてくる。

すると

『戸部はカラーギャングの仲間ゲーセンで西校狩り』

『大和は三股かけてる最低の屑野郎』

『大岡はラフプレーで相手校のエース潰し』

と書いてあった。

「チェーンメールかよ。未だにやってる奴いるんだな」

「……うん。何かクラスの人が悪く言われるの嫌だな」

「あ、そいつらうちのクラスなんだ」

「八幡知らなかったの?!」

「知らん。俺お前以外と余り話さないし」

「八幡らしいね……」

「まあな。ところでお前の悪口はないんだな？」

「え？あ、うん。僕はないよ」

良かった。もしあったら俺はそいつを草の根分けても探し出してブチ殺していたからな。

「でも何でいきなり起こるんだ？クラスを見る限り特に揉めてないし」

「そうだよな。あの3人特に揉めてる訳じゃないし」

「まあ犯人なんて見つからないだろ。そんなメールは直ぐに消して忘れろ」

「そうだね。あ、それぞれ戻らないと!」

時計を見るともう少して授業開始時間の為俺達は急いで教室へ向かった。

午後の授業が終わり席から立ち上がる。今日は防衛任務ないしど

うしよう？双葉とイチヤつきたいが自分から誘ってドン引きさせたら嫌だしな。

悩んでいるとメールが来たので見ると双葉からだった。

内容は中間テストが近いから今日暇だったら勉強教えてくれとの事だ。

まあいいか。双葉と会えるなら。俺は『了解、いつものファミレスで』と返信して教室を出た。

「んじや、今の公式でこれを解いてみろ」

「はい、やってみます」

現在サイズで双葉に勉強を教えている。しかしアレだな。米屋に比べてやる気を感じるからこちらとしても教えがいがあるな。あのバカの場合、先ずはやる気を出させる事から始めなきやいけないした。

ていうか双葉近い。近いからね。双葉の奴俺の隣に座ってくついているし。しかも質問してくると更に近くなる。いかん、周りの目がヤバ過ぎる。マジで訴えられそうだな。

そんな考えを振り払うように身体を動かすと鞆にぶつかり紙がひらりと落ちた。双葉がそれを拾うと渡してくる。

「サンキュー」

「いえ。ところで八幡先輩は何処に職場見学に行くんですか？」

双葉から渡された紙は白紙の職場見学希望調査書だった。そういやさつき再提出用に貰っていたな。

「多分出版社とかだな」

そう返すと驚いた顔で見てくる。

「そうなんですか？私はボーダー本部に行くかと」

「いや、俺目立つの嫌いだしな。ボーダー隊員ってバレたくない」

「八幡先輩らしいですね。八幡先輩は大学を卒業したらやつぱりボーダーに就職ですか？」

ふむ、大学を卒業したらか。専業主夫も考えているがどうしよう？
双葉に専業主夫志望って言ったら引かれそうだしなあ……

「まだわからん。そういうお前は？ボーダーに就職するのか？」

俺がそう返すと双葉は真っ赤になる。いきなりどうしたんだ？

「それも候補の一つとして考えていますけど……わ、私は、その……八幡先輩のお嫁さんになって八幡先輩を支えたいです」

……っ、ヤバい。顔が熱くなってきた。こいつ本当にはつきりと言えるな。

まあ双葉が家庭に入りたくないなら俺は双葉の為に働くだけだ。

「……わかったよ。じゃあ結婚したら俺を支えてくれ」

そう返すと笑顔を向けて

「はいー」

そう言ってきた。俺はその笑顔を見て軽く笑いながら頭を撫で続けた。

暫くして勉強を再開する。様子を見る限りこれなら赤点はないだろう。流石に弟子が赤点だったら嫌だな。

そんな事を考えていると

「八幡先輩、あれって小町さんですよね？」

双葉がいきなりそう言ったので双葉が指差した方向を見るとレジに俺の天使がいた。

笑顔を浮かべようとしたが、顔が凍りついた。

なんと横には男がいた。

俺が絶句しているとそのまま二人は店から出て行った。

「馬鹿な、何故あいつが男子とファミレスに……」

小町に手を出すだと？いい度胸してるじゃねえか。今日がてめえの命日だ」

「八幡先輩落ち着いてくださいー！」

双葉にゆさゆさ揺らせて正気に戻る。いかんいかん、つい殺意が……

そんな俺の様子を見た双葉が口を開ける。

「大丈夫ですよ。私を見る限り付き合ってる者同士の絡みではないと思います。もしも不安でしたら帰ってから聞いたらどうですか？」

「……そうだな。取り乱してすまなかった」

「いえ、気にしないでください」

そうだな。まずは事情を聞いてからだな。息を一つ吐いて双葉の勉強を再開した。

翌日……

俺は今小町を自転車の後ろに乗せて登校する。ちなみに昨日一緒にいた男について問い詰めると予備校の友人らしい。恋人じゃなくて何よりだ。小町の恋人は東さんクラスの男じゃなきや認めん。

「今日は小町いるから事故ならいでね」

小町が唐突に言い出した。

「俺一人の時はいいのか？」

つい聞いてしまう。

……いや、小町を巻き込む訳にはいかないし、事故が起こるなら俺一人の時にしてくれ。

そんな事を考えていると小町が口を開ける。

「そういえば、あの事故の後ワンちゃんの飼い主さんうちに来てお礼に来たよ。結構いいお菓子貰っちゃた」

「おい、俺食べてないからな？それ以前に本人の所に来いよ」

「え？同じ学校なんだから会ってないの？学校でお礼言うって言ってたよ？」

「おい、お前なんでもっと早く教ええないんだよ。名前とか聞いてないの？」

「えー？ 忘れちゃった、あはは」

「まったく忘れんなよ。にしても学校でお礼を言うねえ？あれから1年経っているがお礼を言われていない。別にどうでもいいが礼にしろ謝罪にしろ普通話しかけるだろうが。どんな思考回路してんだそいつ？」

「あー！もう学校だ！行ってくるであります！ありがとね、お兄ちゃん！」

小町の声を聞いて再起動すると小町は笑顔で校門へ向かって走り出した。相変わらずあざとい妹だな。可愛いから許すけど。

学校に着き直ぐに職員室へ入ろうとすると、そのタイミングで平塚先生が出てきた。

「ん？比企谷、職員室に何か用か？」

「いや職場見学希望調査書の再提出しに来ました」

そう返すと平塚先生は納得した様に頷く。

「ああ、アレか。書いて貰って悪いが提出する必要はないぞ」

「は？何ですか？」

提出する必要はない？という事は専業主夫でもOKって事か?!少しの希望を込めて平塚先生を見る。

しかしその希望は最悪の絶望へと変わった。

「朝のHRで説明があると思うがな、殆どの生徒がボーダー基地を志望してな。よって全員でボーダー基地に行く事になったんだよ」

はあああああ?!マジかよ?!

行ったらバレるから絶対にサボってやる!

「わかりました。そう言えば何時に見学に行くんですか?」

その日に防衛任務を入れてサボってやる。

「見学は6月8日だぞ」

「そうなんですか。ありがとうございます」

そう言って教室へ向かって歩き出した。

教室へ着いてシフトの確認をすると非番だった。学校が終わった
ら上層部にシフト変更を頼むか。

そう思っているとメールが届いたので見ると国近先輩からだった
のでメールを見る。

f r o m : 国近先輩

件名：ランク戦の日程決まったよ〜

次のA級ランク戦の日程と対戦相手が決まったから教えるね〜

6月8日（金） 昼の部

A級1位 太刀川隊

A級3位 風間隊

A級6位 加古隊

対戦相手に双葉ちゃんがいるけど手を抜いちやダメだよ〜

メールを見て絶句した。

何で職場見学当日なんだよ?! どんだけ運が悪いんだ俺!! しかも昼の部って事は総武の連中もランク戦を見るだろうから俺が太刀川隊に所属してんのもバレンのかよ?!

俺は余りのショックに机に突っ伏してしまった。

この日、俺は余りのショックに全ての授業を聞く事が出来なかった。

比企谷八幡はスーツを着てバーに行く

朝、起きると時間は11時を過ぎていた。

キッチンへ行くと飯と書き置きがあった。

『お兄ちゃんへ 小町は遅刻したくないので先行くね。 S. P朝ご飯はちゃんと食べるように!』

起こせよ。あと追伸はP. Sだバカ。時計を見ると11時を回っていた。完全に遅刻だ。もう、いいや。ゆっくり行こう。社会に出たら1分でも1時間でも遅刻に変わらないし。

「さて、比企谷。遅刻の言い訳を聞こうか」

教室に入ると休み時間で平塚先生が教室にいた。

「すみません、寝坊しました」

「それは防衛任務が関係しているのか?」

「いえ、防衛任務は関係ありません」

遅刻の理由? 昨日国近先輩に捕まって朝6時までゲームをやらされたからだ。家に帰って余りの眠さに少し寝たら寝過ぎたって訳だ。

「そうか。防衛任務が関係ないならこんな遅い遅刻は問題だから反省文を書いてもらうぞ。放課後までに私に持ってこい」

「わかりました」

まあ今回は完全に俺が悪いからな。仕方ない。悪いのは俺と国近先輩だ。

そう思っていると後ろで扉の開く音がした。

「全くこのクラスは問題児が多いな。」

振り向くと、明らかに不良っぽく制服を着崩した女子が入ってきた。

「川崎沙希、君も遅刻か？」

川崎と呼ばれた彼女はぺこりと頭を下げ自分の机に向かった。見る限り不機嫌なオーラを出している。イラついている時の影浦さんの様な雰囲気だな。まあ雰囲気は似ていても怖さは低いけどな。

放課後になり反省文を出した俺は夏期講習の資料集めをしに予備校を回った。俺は数学以外はかなり優秀なので数学だけ受講するつもりだ。余りうちの家計は裕福ではないが小町の塾代や俺の数学を受講できるくらいの金はある。つても余り余裕はないので、できるだけ安くてかなり分かりやすそうな授業を取らなくてはいけない。

「今日は非番だしカフェで勉強でもするか」

そんな事を呟いていると、前方に恋人がいたので話しかける。

「よう双葉。今帰りか」

そう尋ねると双葉は笑顔を見せてくる。ヤバい可愛い。

「はい。今日は非番ですからカフェで勉強するつもりです。八幡先輩は？」

「俺もただよよかったら一緒にするか？」

「はい！よろしくお願いします！」

双葉から了承を得たので行きつけのカフェに向かって歩き出した。

「やっぱり大学受験はは早めに始めた方がいいんですか？」

カフェに向かっている途中、俺が集めた夏期講習の資料を見た双葉がそんな事を聞いてくる。

「まあ、早めの方がいいだろうけどそこは人それぞれだな。部活あるやつとか夏休み後から始めるのもいるし。お前はまだ先だろうから今は目の前のテストをやっとけ」

「わかりました」

「頑張れよ、……つと着いたか」

いつの間にかカフェに着いたので店の中に入った時だった。

「うげ……」

変な声を出してしまった。それを聞いた双葉は訝しげに見てくる。

何とカフェの奥で雪ノ下と由比ヶ浜と戸塚がいて勉強していた。戸塚の元へ行きたいのは山々だが煩い女と毒舌悪魔がいるので今回は諦めよう。

「すまん双葉。店を変えていいか？」

そう言つて俺は双葉の返事を聞かずに外に出てカフェから離れた。双葉は後から追つてきた。

「どうしたんですか?」

「いやすまない。実はさつき店の中に学校のウザい奴がいたからな。顔を合わせたくなかつた」

「そうですか。なら仕方ないですね。でも意外ですね」

「あ?何が?」

「いえ、八幡先輩がウザいなんてハッキリと口にするととは思わなかつたので」

まあそうだな。ボーダーではそこまでウザい奴はいないしな。偶に唯我や米屋がウザい時はあるが雪ノ下は次元が違う。

「まあな。あいつはガチで嫌いだしな」

若干苛立つた声で言う。と双葉が驚いて見ている。少し言い過ぎたな。

「あー、詰まんない話して悪かつたな」

「いえ。大丈夫です。それよりあその店が嫌でしたら何処にします?」

「じゃあサイズでいいか?」

「大丈夫ですよ。それじゃあ行きましょう」

双葉にそう言われて歩き出そうとした時だった。

「あ、お兄ちゃんに双葉ちゃんだ」

いきなり呼ばれたので振り向くと天使がいた。

「小町?どうしてここに?」

「ん?大志君から相談を受けてた」

大志君?横を見ると一人の男がこちらを一礼した。……こいつが例の

「ほら、こないだ話した川崎大志君だよ。大志君のお姉ちゃんが不良になつたらしくてどうしたら元に戻るか相談受けてたんだ。大志君が頼んでも関係ないって言つて相手してくれないらしい」

「いや小町、他人の家庭に深入りは止めた方がいいぞ」
そう返すと男は申し訳なさそうに口を開ける。

「すいません。でもお兄さんしか頼れる人いなくて」

「お前にお兄さんと呼ばれる筋合いはない」

何で妹に手を出す奴の力にならなきゃいけないんだ。テメエこれ以上小町に近寄るなら俺の旋空がお前を真つ二つにするぞ

「ま、まあとりあえずあそこのカフェに行つてから!」

小町はそう言つてさつき入ろうとしたカフェを指差した。

「待て小町。話はサイゼですぞ」

「へ?どうして?」

「いいからサイゼにしろ。サイゼにしないならこいつの話は一切聞かないぞ」

「……まあいいけど。でもお兄ちゃんあそこの常連じゃん。何で嫌がるの?」

「色々だ。とにかくサイゼに行くぞ」

そう言つてサイゼに向かつて歩き出した。もしもカフェに言つたら雪ノ下と小町が鉢合わせになつて害があるかもしれないしな。しかもこの男の問題に首を突っ込むのが目に見える。

サイゼに着いてドリンクバーを注文してそれぞれ飲みたい物を持ってきた。

「初めまして。八幡先輩の恋人の黒江双葉です」

「俺は川崎大志。よろしく」

とりあえず双葉と川崎大志が自己紹介をし合う。すると小町がいきなり叫び出す。

「え?! 双葉ちゃん、お兄ちゃんと付き合ってるの?!」

「は、はい」

あ、そういうや小町には言っていなかったな。

「お兄ちゃん何で言ってくれないの?!」

「いや、別に話す必要ないと思って」

「あるよ! 小町はいつもお兄ちゃんの恋人を見つけようと頑張ってるんだし!」

お前そんな事をしてたのかよ? ボーダー連中にしてるなら謝つとかなないと。

「悪かったよ。それより本題に入れ」

「あ、うん。実は……」

そう言って小町は隣の席をチラリと見る。

「あつ、すみません。川崎大志です。姉ちゃんが総武の二年で、最近姉ちゃんが悪くなったっていうか、」

「それって川崎沙希の事か?」

確か俺と同じで遅刻した奴だ。

「それでお姉さんが不良化したのはいつだ?」

「高二になってからです。つい最近ですね。その頃から帰りも遅いし」

「帰りが遅い? 何時くらいだ?」

俺も深夜の防衛任務で夜3時に家に帰る事もある。まあ月に5回くらいだが。

「それが朝の5時とかなんですよ」

「一応聞くがお前の姉はボーダー隊員じゃないよな?」

ボーダー隊員なら朝帰りなんて珍しくないからな。

「いえ。姉ちゃんはボーダーじゃないです」

「マジかよ。親はどうした?」

「それが共働きの上、下の兄妹が多くて余りうるさくいわないですよ。……それに最近変なところから電話も来ますし」

「変な所？」

「それが、エンジェルなんかかっていう店から来るんすよ。エンジェルなんて絶対いかがわしい店ですよ」

「先ずは店を突き詰めるしかないな」

「ですが八幡先輩。突き詰めてどうするんですか？」

「先ずは向こうの事情の確認だな。……と、その前に言っておくぞ」

俺は川崎大志を軽く睨みながら口を開ける。

「もしも無理だと判断したら直ぐに手を引くからな」

他人の家庭の事情に必要以上踏み入ってもお互いに不幸になるだけだからな。

見ると川崎も頷いてくる。じゃあやりますか。面倒だが小町からの頼み事だしな。

「先ずは状況確認だ。姉が遅くなった時に何か変わったことがあったか？」

「そうっすね……。強いていうなら俺が塾に通い始めたくらいです。」

なるほど、大志が塾に通い始めたという事か。

「じゃあ姉は予備校とか塾に通ってるか？」

「いえ、家計にそこまで余裕が無いので通ってないです」

なるほど、そういうことか。謎が解けた。実に簡単だ。小学生探偵や魔人探偵なら一瞬で解決出来るレベルだ。

大志の姉ちゃん、川崎沙希がアルバイトしている理由は恐らく学費の問題だ。大志が塾に通い始めた時点で大志の学費の問題は解決している。生活に余裕が無いから川崎沙希は塾や予備校に通えない。だからバイトをして金を稼いでるってことだ。高校生向けの塾や予

備校は結構金を取られる。普通にバイトしてたら必要な金が貯まらない可能性があるから無理なバイトをしているのだろう。

解決法は既に思いついている。答えは俺がさつき集めた夏期講習の資料にある。

まあ俺が金を貸すって選択肢もあるがそれはしない。いくら小町の知り合いとはいえ、大金をそう簡単に貸すつもりはない。向こうも疑うだろうしな。

「とりあえず解決法はわかった」

「マジっすか?! 流石っすお兄さん!」

「ははっ、お兄さんっす言うな。殺すぞ」

「八幡先輩落ち着いてください」

双葉が慌てて俺の腕を掴んできた。まったく、双葉に感謝しろよ。

「……まあいい。いや良くないが。とりあえずエンジェルってついた店をさがすぞ」

言うや否や各自携帯を出して調べ始めた。

暫く探していると

「八幡先輩ありましたよ!」

双葉が携帯を見せてくるので見ると、えんじえるっているってメイド喫茶があった。

「よくやった双葉」

そう言っつて双葉の頭を撫でると嬉しそうに笑っている。その笑顔に癒されているとパシヤリと音がしたので見ると小町が写真を撮っていた。

軽く睨むとテヘペロしてきた。あざとい……。てか仕事しろ。

呆れながら調べると俺も見つけた。

エンジェル・ラダー天使の階、というホテルの最上階に位置するバーだ。

その後20分くらい調べたが三門市にはこの二軒しか該当した店がなかった。

バイト募集要項を見るとバーの方が遥かに高い。わざわざ朝まで働くんだし高い方だろうな。

「よし、今日の夜行ってみる」

「俺も行きます!」

「小町も!」

「私も行つていいですか?」

3人が手を上げてくる。赤の他人の双葉も本気で取り組んでいるのは嬉しいが無理だ。

「ダメだ。お前らは中学生だろうが。入店を断られる可能性がある」

俺なら目が腐っているから服装によっては大人に見えるだろう。

「でも大丈夫ですか?」

「何がだ双葉?」

「いえ。こういうお店はスーツとかドレスが必要な気がするので……」

「……あ」

確かにそうだな。ホテルの高級バーだし。しかし俺はスーツ持っていない。……いや待てよ。

俺は携帯を取り出してメールを打ち送信した。

「お兄ちゃん誰にメールしてるの?」

「ん?犬飼先輩」

「犬飼先輩?何で?」

「……なるほど」

双葉だけは納得している。まあボーダー隊員だしな。

「二宮隊の隊服は黒スーツなんだよ」

「へえ。スーツが隊服なんてあるんだ」

二宮さんはジャージ系の隊服を嫌ってスーツにしたらしい。しかし俺からすれば逆にスーツの方がコスプレっぽいような……

そんな事を考えていると返信が来たので見ると夜に防衛任務があるから無理との事だ。

仕方ない。国近先輩に頼んで隊服を一時的にスーツに変えてもら
うか。

「今返信が来たが二宮隊は夜に防衛任務があるから無理だ。だから俺
は今からボーダー本部に行つてトリガーをイジつてスーツの隊服に
変えてくる」

「わかった。よろしくね！」

「お願いします！お兄さん」

だからお兄さんじゃねえよ。次言つたらキレるぞ。

「とりあえず俺はもう行く。すまん双葉。勉強は見てやれないから
小町に見てもらつてくれ」

「小町はいいよ〜」

「……では、よろしくお願いします」

双葉が頼んでいるのを見ながら俺はサイズを出た。

。

「……か……」

現在午後10時、俺はバーがあるホテルの前に立ってホテルを見上
げる。ホテルはかなり大きく多分15階くらいある。

俺は今スーツを着ている。さつき国近先輩に頼んだら喜んで隊服を改造してくれた。しかしその際にチームメイト全員に写真を撮られたのは納得いかない。

ちなみにネクタイには太刀川隊のエンブレムがある。まあ犬飼先輩みたいに前は開けてないから他人には見えないけどな。

「…行くか」

俺は軽く深呼吸をしてからホテルに入りエレベーターで最上階へ向かう。ちーん、という音とともにエレベーターのドアが開くと、そこには高級感漂う空間が広がっていた。

「いらっしやいませ。こちらへどうぞ」

スーツを着た男が店の中に案内する。

そして店の中に入りカウンターを見るとそこには水色の髪の子がガラスのコップを磨いていた。俺の予想は当たってたみたいだ。

「よお」

俺は川崎に話しかける。川崎は俺の方を見ると一瞬驚いてすぐに平静に戻る。

「…あんだ、確か、比企谷…だっけ？」

「ん？俺を知ってんのか？」

こいつ俺の名前知ってんのかよ。なんなの？俺のこと好きなの？悪いけど俺は双葉一筋だからね？

「あんだ学校じゃ割と有名だしね」

「は？何だよ？」

「私も詳しくは知らないけど…私達のクラスの煩い奴らとテニス勝負をして2対1で互角に勝負したって聞いたよ？」

あく。そーいやあの時ギャラリー100人近くいたからな。マジかよ？まあ悪い意味で有名じゃないし我慢するか。マジ

「それはともかく……なにか飲む？」

「んじやMAXコーヒー」

俺が川崎にそう言うと、川崎は冷蔵庫の中から容器を取り出しガラスのコップに注いで俺の目の前の机に置いた。

一口飲んでみるとマジでMAXコーヒーだった。冗談で言ったが本当にあるとは思わなかった。

「まさかバーにMAXコーヒーがあるとはな」

「あるにはあるけど私の知ってる限り頼んだのはあんただけよ。……それでわざわざ何の用?」

川崎が聞いてくる。そうだった。MAXコーヒーの美味さに忘れかけてた。

「んじや単刀直入に言うぞ。お前の弟が心配してたぞ」

「…あんたには関係ないでしょ」

「まあな。だがあいつは俺の妹に頼ってきたんでな。わざわざ部外者にだぞ。見る限りかなり悩んでる顔してたし少しは家族を頼ってもいいんじゃないか?こんな無理なバイトしなくても」

俺が言うと川崎はバツが悪そうな顔をして俯く。

「…バイトをやめる気は無いから」

「そんなに学費が欲しいか?」

「っ!?!」

俺の言葉を聞いた川崎は明らかに動揺して顔を伏せる。やっぱり学費の件もビンゴだったらしい。

「川崎、一つ聞けど。もしも学費が何とか出来るなら無茶なバイトは止めるか?」

まわりくどいのは嫌いだから直ぐに本題に入る。

「…止めるに決まってる。家族に心配かけたくないし」

苦い顔をして俯く川崎を見る。どうやら本当に心配かけたくないみたいだ。

「……そうか。ならこれを見てみる」

そう言つて一枚の紙を靴から出して川崎に渡す。川崎はその紙を読み始めある一点を見て目を見開いている。

「……これって！」

「スカラシップ。成績が良ければ学費が免除される。この塾だと最大7割近く免除されるぞ」

「……こんなのがあったんだ」

「まあ俺は素人だからよくわからん。詳しくは予備校行って聞いてみる」

俺はコップの中のMAXコーヒを一気飲みし、コップを川崎に返しながらい言う。

「んじや俺は帰る。ほらよ代金」

金を払って立ち上がろうとした時だった。

「…ありがとう。少し考えてみる」

川崎が礼を言ってくる。

「別に構わない。……ただ、大志の奴には謝つとけよ。凄い心配してたんだしな」

「うん」

川崎から了承の返事を確認して俺はバーを出た。

翌日……

「あ、お兄ちゃん。さつき大志くんから連絡があつてお姉ちゃん事情を全部説明して大志くんに謝つたらしいよ」

「そうか」

朝のリビング。俺と小町は朝食を食べながら話しをする。いつもの光景だ。

「それで、お姉ちゃんはバイトは続けるらしいけど夜10時までには帰るって決めたらしいよ。スカラシップとかも狙ってみたいだし」

「そうか。良かったな」

「まあ、お兄ちゃんも双葉ちゃんみたいな可愛い彼女を手に入れて良

かったね」

小町がコーヒーを飲みながら言う。

「まあな」

「そう言えば昨日双葉ちゃんから色々聞いたんだけどお兄ちゃんは双葉の何処が好きになって告白を受け入れたの？」

……お前何処まで聞いたんだ？何か嫌な予感しかしないんだが

……

「まあ、その何だ。初めは悩んでたんだが出水に背中を押されてな……」

「ふーん。まあ幸せみたいだしいいけど」

まあ確かに幸せだ。両親が死んだ頃は絶望に吞まれていたが、小町や双葉によって大分立ち直れてるしな。

この幸せは絶対に失いたくない。

そう思いながら朝食を食べ続けた。

こうして職場見学が始まる

ボーダー本部大広間

ここは基本ボーダーの正式入隊日に集められるところだ。見た目はほとんど体育館だけだな。俺が初めてここに来た時もそうだったしな。

だが今は正式入隊日ではない。じゃあなんでここにいいのかって？

職場見学だ。

マジで帰りたい。だってどう考えてもおかしいでしょ。何が悲しくて職場に職場見学せにやなんのだ。俺に至ってはA級1位だぜ？それこそ無意味の極みだろ。いや本当に帰りたい。

ボーダー本部には総武高生徒全員がいる。普段お目にかかれないトリガーというテクノロジーに触れたいのか、はたまたボーダーに興味があるのか、それとも嵐山隊に会いたいのかは人それぞれだろう。当然ながら戸塚、葉山グループ、川越？、由比ヶ浜、雪ノ下がいる。やだ、本当に帰りたい。

と、そんなこんなでげんなりしていると、嵐山隊が出てくる。その瞬間に一部女子が色めき立つ。やっぱり嵐山さんはモテるな。気持ちよくわかる。

「総武高校のみんな、今日はよく来てくれた。君たちの職場見学を案内する嵐山隊長嵐山准だ！今日はよろしくな！」

嵐山さんの挨拶と同時に歓声が聞こえる。煩いな、大爆発とかしいかな。

「それじゃあ今回の職場見学の流れを説明していく。始めに訓練生になつてからの流れを説明して訓練の種類について説明する。訓練の際は実際に何人かには体験してもらおうのでそのつもりで」

それを聞いて生徒らが騒ぎ出す。まあトリガーに触れる機会なんてボーダーじゃなければ滅多にないからな。

「その後に昼食を挟んでA級部隊同士の試合、A級ランク戦の見学。最後に個人同士の試合、個人ランク戦を体験してもらおう」

そうなんだよな。A級ランク戦が無かったらサボれたのに……。しかも今日の解説槍バカと迅バカだしなあ。あの2人が解説の時絶対俺と出水をおちよくるし嫌だ。

そんな事を考えている間にも説明が始まった。

「まず始めにどうやったら防衛任務に就くことができる正隊員になれるのかを説明する」

そう言ううと嵐山さんは一番近い生徒にトリガーを渡し起動するよ
うに言う。その生徒がトリガーを起動するとC級の隊服を着ていた。
「ボーダー隊員の左手の甲には数字が出ている。その数字は自分の
使っているトリガーをどれだけ使いこなしているかを表す数字だ」

基本そうだが隊務規定違反をしてポイントダウンする人もいるの
で一概には言えない。カゲさんとか。

「始めの数字は1000だがその数字を4000まで上げる。それが
正隊員になる条件だ。ポイントを上げる方法は二つ。週二回の合同
訓練でいい成績を残すか、ランク戦でポイントを奪い合うかだ」

俺なんてC級時代のランク戦は殆ど出水としかやっていない。俺
の同期で俺と戦えたの出水だけだし。その所為で出水とばっかやっ
てB級に上がるの遅くなった。まあB級に上がった時には既に中位
クラスの實力を手に入れたから良しとしよう。

「まずは訓練の説明からするので付いて来てくれ」

そう言ううと、嵐山さんらは訓練室へ向かうので付いていく。
すると5分もしないで訓練室に到着した。

「さあ、着いたぞ。これが対近界民戦闘訓練だ。仮想戦闘モードの部
屋の中でボーダーの集積データから再現された近界民と戦う訓練だ」
いきなり戦闘訓練と聞いて生徒らはざわめく。これで大体ボー
ダーに向いてるか分かる。1分切れたらまあまあだ。

「今回、君達が体験するのは初心者レベルの大型近界民だ。攻撃力は

ないがその分硬いぞ。それじゃあ体験する生徒を選ぼうか。」
そう嵐山さんが締め括ると殆どの生徒が立候補する。

その結果うちのクラスからは川崎、三浦、由比ヶ浜が選ばれていた。横を見ると雪ノ下も選ばれていた。意外だな、目立つの嫌いそうなのに。と思っていたらJ組からは声援がした。どうやら推薦されたらしい。

「参加者は決まったみたいだな。制限時間は5分だ。それじゃあ初めてくれ」

こうして訓練は始まった。学校の連中は最前列で煩いので隅っこに行こうとすると知った顔がいた。

「よう。奈良坂、辻。お前らは前もここで見学か？」

話しかけると振り向いて会釈してくる。

「いや。あっちも騒がしいからな」

「お前も騒がしいからこっちに來たんだろ」

奈良坂の指摘に頷く。まあ俺の場合は嵐山さんに見つかると面倒だ。

「それにしてもだ意外だな」

唐突に辻が口を開けてくる。

「何がだ？」

「いや、お前あれだけボーダー隊員ってバレルのを避けてたからサボるかと思つた」

「それは俺も思つたな」

「当たり前だ。普通ならサボってたな。でも今日のランク戦は太刀川隊も出るからな」

「なるほどな」

そんな事を話している間にも訓練は続いている。

様子を見てみると川崎が丁度終わった所だ。記録は2分半。あまり優秀とは言えない。まあ初心者がレイガストなら仕方ないか？

次は由比ヶ浜だが使つてるトリガーはバイパーだ。しかし殆どが

トリオン兵に当たっていない。結果は時間切れだった。てか素人にバイパー使わせるなよ。

次は三浦で使うトリガーは槍孤月だった。それを見た奈良坂は意外そうな顔で見ている。まあ使う奴なんてあのバカくらいだと思っていたのだろう。三浦は今までの生徒を見て学習したのか目を集中して狙っている。その結果記録は45秒だった。こいつが初めての1分切れか。

「そう言えばお前と辻の時は何秒だったんだ？」

奈良坂が唐突に聞いてくる。

「あ？俺の時はこの訓練なかったから受けてない」

「俺もだ。この訓練が導入されたのは犬飼先輩が入隊した頃だしな」

「まあ俺も辻も怪物が隊長をしてる部隊でやっていけてるんだし、才能はあると思うぞ」

「比企谷、二宮さんを怪物呼ばわりするな」

「いやいや、近距離でNo.4攻撃手の俺をボコボコに出来る射手は怪物だからな？」

「まあ二宮さんが桁違いなのは事実だが……」

出水と戦う時は如何にして距離を詰めるかが課題だ。しかし二宮さんの場合は距離を詰めても普通に反撃してくるからな。普通中距離担当隊員と戦う時は近づくのが基本だからね？あの人はマジで規格外だ。

まあうちの隊長も怪物だけど。

そんなこんなで訓練が続いていくが三浦の記録を越えた奴はいない。

最後は雪ノ下の出番か。さてさてどうなるやら。

訓練室を見ると雪ノ下は孤月を使っていた。孤月はバランスのいいトリガーなので初心者にも使いやすい。ただ使う奴が多いので孤

月で上位に組み込むのはかなり難しい。太刀川さんなんて桁違いの化物だし。

そうしていると雪ノ下がバムスターの目を両断する。記録は24秒。かなり高いな。周りの連中も啞然としている。まさか三浦の記録を21秒も上回るとは思っていなかったのだろう。

嵐山さんが雪ノ下を褒めている。

「凄いじゃないか!」

「ありがとうございます。ところでボーダーにはもっと早い記録の人はいますよね。どのくらいの早さなのですか?」

「おいおい、ボーダーじゃないのに上の記録が気になるなんてどんだけ負けず嫌いなんだよ」

「上の記録?1番早かったのはA級4位草壁隊の緑川が4秒の記録を出してるな」

「4秒……」

何か悔しそうな顔をしているがどんだけだよ?

「まあ初めの記録は直ぐに覆せるさ。……ん?」

と、ここで嵐山さんと目が合った。何か嫌な予感……

予想通り嵐山さんは俺達の方に来た。

「比企谷に辻じゃないか!そう言えば比企谷と辻はこの訓練をやっていないだろ?時間もあるしやってみたらどうだ?」

そう言っただけで俺と辻は手を引かれる。

……何余計な事言っただこの人?!俺は目立つのが大嫌いですからね?!

隣の辻を見ると辻も諦めた様に溜息を吐いていた。まあこいつも俺程じゃないが目立つの避けたいだろうしな。後ろを見ると奈良坂が合掌していた。

「あの、嵐山さん」

「ん?どうしたんだい?」

「嵐山さんはそのそれと知り合いなのでしょうか?」

俺を指差しながら聞いてくる。人を指差してそれ呼ばわりか。いい性格だな。

「ああ、結構長い付き合いになる。なんていったって比企谷は…
やめてくれ！それ以上は！」

「ボーダー隊員だからな！」

こうして、俺の平穏なぼっちライフは終わりを告げた。

喧騒に包まれる訓練室。

目が点になつてる由比ヶ浜、素っ頓狂な顔した雪ノ下などなど完全にカオスな雰囲気になっている。

「誰あいつ？」

「あんなのいた？」

「あれじゃない？ほら、以前葉山君と三浦さんとテニス勝負をした……」

「あいつか！2対1で互角に戦ってた奴だろ？」

「ああ、例の体力バカか！」

総武の連中は騒めいているが体力バカだと？いつの間にそんな二つ名を付けられたんだ？体力には自信があるけどさ……

まあ結果的に予想以上に悪く言われてないので良しとするか。

「……あなたボーダー隊員だったの？」

「そうだ。そして比企谷はA級1位太刀川隊の隊員でボーダー屈指の実力者だ！」

止めて、それ以上俺の個人情報広めないで！嵐山さんの隣にいる木虎は同情じみた視線を向けてくる。

「A級？こんなのが？」

……あ？

「……どういう意味だ？」

「言葉通りよ。あなたみたいな目の腐った人でもA級になれるのね。」

何か卑怯なことでもしたのかしら?」

こいつ随分好き勝手言ってくれるな。俺じやなかったらキレてるぞ?

すると木虎が冷たい目をして雪ノ下に詰め寄ろうとしていたので腕を出して止める。

「落ち着け木虎。俺はキレてない」

「比企谷先輩はあれだけ好き勝手に言われて怒ってないのですか?」

「別に。世の中には人をバカにしないと気が済まない人間がいるんだしな。こいつもその類の人間なんだろう?」

そう返すと雪ノ下から睨まれる。いや事実だろ?俺お前が罵倒している所しかみてないし。

「……ですがあれだけ努力している比企谷先輩が悪く言われるのは納得いきません」

こいつ普段はツンツンしてるがやっぱりいい後輩だな。一部では評判は悪いが俺は結構尊敬している。

「言いたい奴には言わせとけ。……まあ俺の為に怒ろうとしたのはありがとうがとな」

正直凄い嬉しかった。マジで感謝だ。

「え?!ひ、比企谷先輩!!」

木虎に叫ばれて我に返った。すると俺は絶句した。

俺は無意識のうちに木虎の頭を撫でていたのだった。

ヤバイ?!何してんだ俺?!恐れを知らないな!!周りをみると嵐山さ

んはいつもの表情、辻は呆れ顔、雪ノ下は冷たい目で見ていた。総武の連中は唾然としてみた。いや由比ヶ浜は何かキレている。大方木虎のファンだからキレているのだろうか。

「あー、すまん。つい」

小町や双葉にしている癖が出てしまった。

「わ、分かりました。怒ってませんから手を離してください！」

そう言われて慌てて離す。木虎は軽く俺を睨んでいる。まあ今回は俺が悪かったな。木虎は俺なんかより烏丸にやって欲しいだろうし。まあ、そんな事言ったらぶっ殺されるけどな。

そう思っていた時だった。

ゾクリ……

突然寒気を感じた。何だこの空気？

恐怖の余り辺りを見回すとある一点で目が止まり言葉を失ってしまった。

視線の先には双葉がものすごく冷たい目で俺を見ていた。

(最悪だああああ！)

内心思い切り叫んでしまった。え？マジで？木虎の頭を撫でてる所見られたの？

俺の焦りを他所に双葉は冷たい目で一瞥して何処かへ行っちゃった。待つて待つて待つて待つてくください!!誤解を解かないと!!

焦っているとピリリリとアラームが鳴るので振り向くと嵐山さんが持つていたアラームが鳴っていた。

「お、もうこんな時間か！すまないが時間になったから比企谷と辻の訓練は中止だ！」

そう言われて俺と辻は元の場所に戻る。訓練をしないで済む事は出来たが今はどうでもいい。

そんな事を考えていると嵐山さんが生徒の前に立つ。

「これから1時間の休憩だ。1時間後にここに集合してくれ。それと比企谷と三上はランク戦の準備があるだろうから集合しなくていいからな。……では一時解散！」

言うや否や俺は全力ダッシュをした。後ろでは戸塚や由比ヶ浜などが俺の名前を呼んでいたが今はそれどころではない。俺はスルーして双葉がいると思われる場所に向かった。

先ず行こうと考えたのは加古隊作戦室だ。多分そこにいるだろう。

全力ダッシュを5分近くして漸く着いたのでノックをする。

「あら比企谷君？」

出てきたのは加古さんだった。

「どうしたの？まさか偵察かしら？」

悪戯地味た笑顔を見せてくるが偵察ではない。

「いえ違います。双葉はいますか？」

「双葉？いないわよ。あと30分くらいしたらミーティングがあるからその時には来るわよ」

「すみません。それじゃ遅いので失礼します」

「え？ちよつと……」

加古さんの声を背にして再び走り出した。加古隊作戦室にいないなら後思いつく場所は一つだ。そう考えながら予想している場所に向かつて走り出した。

ボタンと扉を開けると前方に俺が探している相手が見つかった。やっぱり屋上にいたか。

本人はビクリとしてこちらを見る。すると一瞬驚いた顔をしたが直ぐにそっぽを向いた。

俺は一瞬胸が痛くなるのを我慢してそいつに近寄る。

「双葉」

呼びかけると冷たい目で見てくる。

「何ですか？木虎先輩の頭を撫でてデレデレした八幡先輩」

うわあ、凄い怒ってるな。まあ完全に俺が悪いんだけど。

「双葉。お前が怒るのはわかる。でも話だけでも聞いてくれないか？頼む」

そう言って深く頭を下げる。すると双葉が

「は、八幡先輩?!話は聞きますから頭を上げてください!!流石に頭を下げられては困ります!」

焦った声を聞いて頭を上げる。どうやら本気で焦っているみたい

だ。

「聞いてくれるのか？」

「……まあ八幡先輩が理由もなくあんな事はしないとされていますので。……納得はしてませんが」

ムスツとしながら言った最後の一言を聞いて申し訳なく思いながら口を開けた。

「実はだな……」

「……なるほど。つまり八幡先輩は私や小町さんにする癖が出たって事ですね？」

「ああ」

俺はさつき雪ノ下に罵倒された事、それに対して木虎が言い返そうとした事、その時に感謝の余り頭を撫でた事、全てを話した。

双葉は暫く唸りやがて口を開ける。

「話は分かりました。今回は向こうが悪いのはわかるので八幡先輩が頭を撫でたのは分かりました。……でも、納得はしてないので八幡先輩に3つのお願いをしますがいいですか？」

「それをすれば許してくれるのか？」

「はい」

「わかった。何でも言ってくれ」

「では1つ目、これ以降私と小町さん以外の女子の頭を撫でないてください」

「わかった」

その程度ならお安い御用だ。問題は後2つだな……

「2つ目、次のデートの時は八幡先輩が全額デート代を出してください」

「お安い御用だ」

双葉とデートする時は基本的に買い物くらいでそんなに金がかからないから問題ない。

「それで3つ目は何だ？」

俺がそう聞くと双葉は真っ赤になりモジモジしだした。ハイもうわかりましたよ。

「そ、それは……ミーティングが始まるまで、その……キスしてください」

やっぱりな。双葉がモジモジすると大抵キスを要求してくるし。

「わかったよ」

そう言って双葉を優しく引き寄せ顔を近づける。すると双葉は真っ赤になったまま目を閉じる。

そしてドンドン近づいて遂に

「んっ、ちゅっ……」

双葉と唇を合わせた。すると双葉はいつも以上に激しくして舌を出してきたので負けじと舌を絡める。

屋上には唇が合わさる音だけが響き渡った。

「んっ、んむっ……くちゅ……ちゅっ」

あれから20分、未だに俺達はキスをし続けていた。既にどちらの口にどちらの唾液があるのか分からなくなってきた。

……今更だがこれ見られたら俺、間違いなく社会的に殺されるな。

そんな事を考えていると、

pipipipi

双葉の端末が鳴り出した。

「んっ…んむっ……ぷはっ!!」

唇を離し双葉は端末を見る。

「あ、ミーティングが始まるので私は行きます」

「んじゃ俺も行くか。途中まで一緒に行こうぜ」

「はいー」

そう言われていきなり手を掴まれた。双葉の手の柔らかさにドキドキしながら屋上を下りた。

「八幡先輩、負けませんかからね」

作戦室まで歩いてる途中双葉が宣戦布告してくる。

「悪いが俺も負けられないな」

「もしも鉢合わせしたらよろしくお願いします」

「おう。よろしくな……つと俺はここだから」

「はい。次はステージで」

そう言って双葉は去って行った。双葉が見えなくなるまで見送って俺は太刀川隊作戦室に入る。

「よーっす。来たか」

「これで全員揃ったな」

「遅いですよ。比企谷先輩」

「頑張ろうね〜」

チームメイトから挨拶を受けたのでそれを返しながら加古さんと双葉の試合の記録を見始めた。

復習する事30分。記録を見続けているとアナウンスが入る。

「間も無くA級ランク戦昼の部が開始されます。実況を務めます嵐山隊の綾辻です！解説席にはA級4位草壁隊攻撃手緑川隊員とA級7位三輪隊攻撃手米屋隊員にお越しいただきました」

「どうぞよろしく」

「どうもっす」

「今回加古隊が選んだステージは『郊外地区A』です。遮蔽となる建物が少なく広い場所があらゆる場所に点々としているステージですが、加古隊の意図は何だと思えますか?」

「そりゃ遮蔽物が多いと加古さんの射撃が通用しにくいからだな。それに対して弾バカはバイパーの使い方が一流だから遮蔽物が多いと撃ち合いで押されるしな」

「広い場所に喜多川先輩のトラップを仕掛けてそこを加古隊の陣地にするって事もあるかもね」

「そうなんだよな。喜多川はトラッパーだからかなり厄介だ。おそらく建物が密集している場所に隠れているだろうから出水のメテオラで建物毎破壊すればいい話だ。」

「風間隊は合流する前に1人落とせばこっちが負ける事はないだろうしな。」

「さあスタートまであと僅か！全部隊転送開始です！」

「さて、やるか」

「ふっ、A級1位の实力を見せる時が来たか」

「黙れお荷物」

「比企谷先輩も出水先輩も酷過ぎる!!」

「煩い奴だな。事実だろうが。」

「落ち着いて。始まるよ」

「国近先輩の言葉と同時に転送された。」

転送が完了する。

その瞬間俺は絶句した。

俺が転送されたのは数少ない建物の中だった。それは特に不思議じゃない。

問題は建物の外は物凄い吹雪いている事だった。

(天候『猛吹雪』だと?!こんなマップ選んだチーム初めて見るぞ!!)

俺が驚いている中猛吹雪の中でA級ランク戦が開幕された。

比企谷八幡は加古隊の選んだステージに苦勞する。

外の吹雪をチラ見してリーダーを起動すると表示されている隊員は7人だけだった。おそらく加古隊は全員バググワームをつけてるだろうな。

「国近先輩。視覚支援お願いします」

『ほ〜い』

そう聞くと同時に吹雪いている中先がよく見える様になった。

「加古隊の意図は何なんだ？」

『多分うちと風間隊を纏めて仕留めるつもりだろ？この猛吹雪じゃ風間隊は碌に連携をとれないだろうし、うちもグラスホッパーを使いにくいから動きを制限される』

『んじやどうします太刀川さん？先ずは合流すか？』

『そうだな。1人で居たら加古隊に潰されるな』

「じゃあ合流したら風間隊を叩きませんか？このフィールドでうちと風間隊がやり合えば確実にうちが勝ちますし。向こう近距離以外は怖くないですし」

何せこっちは射撃特化の出水がいるからな。歌川は射撃トリガーを入れてるがメインは接近戦だから大した脅威ではない。向こうはスコープオンの攻めが中心だから出水と唯我が射撃、俺と太刀川さんが離れた所から旋空を撃ちまくれば勝てるだろう。

『よしそれで行くぞ。全員バググワームをつけろ』

『比企谷、了解』

『出水、了解』

『ゆ、唯我、了解！』

俺達がバググワームを付けると同時に風間隊もリーダーから消えた。

こんな試合初めてだ。まさか全隊員がバググワームを付ける事になるとは……

そう思いながら建物を出た。

外に出ると雪が50センチくらい積もっていて移動の邪魔だ。それに加えてこの突風もあるから碌に歩けない。

そう判断した俺はグラスホッパーを起動して移動を始める。とはいえこの突風の所為で高速移動が出来ないからそんなに早くはない。(まあうちの隊はグラスホッパーを入れてるのが俺と太刀川さんの2人だから風間隊より早く合流出来るだろうな)

レーダーを見るとうちの隊のマーカ―しかない。1番近いのは……唯我かよ。あいつ別にいても戦力にならないだろ。まあ困くらいには使えるか。

「国近先輩、先ずは唯我と合流します。いい合流場所とそこまでのルートお願いします」

『ほーい、ここにどうかな?』

示された場所は建物がある程度ある場所だった。しかし周りには広い更地が多いから加古隊には気をつけないとな。

そう判断して合流地点へ向かった。

合流地点へ着くとまだ誰も来ていない。建物の屋上に上り周りを見渡す。

すると視界の隅に一瞬何か動いた様な気がしたので見直すと誰もいなかった。

気のせいか?だが嫌な予感がするな。

(もしかしてバググワームを白色にして迷彩としてるのか?)

だとしたら厄介だ。奇襲されたらひとたまりもないしな。

そう思っていると

『比企谷先輩!もう直ぐ着きます』

唯我からの通信が入るので見ると100メートルくらい先に唯我がフラフラしながら走っているのが見えた。よし、俺も向かうか。

そう思つて踏み出した時だった。

唯我の後ろにバツグワームを着た青い服を着た男が迫っていた。
しかも唯我は気づいてないみたいだな。

「おい、唯我……」

そう呼ぼうとした瞬間男の手からキューブが出て発射された。て事は歌川か。

発射されたキューブは歌川の存在に気づいてない唯我の足を穿った。唯我が転けたのを見て歌川はスコープオンを出して唯我に突っ込んだ。

それを確認した俺は孤月を出して何時でも抜ける様に構えをとった。

『ひ、比企谷先輩！助けてください！』

唯我から内部通信が来たので煩いと思いつながら孤月を持ち、

「旋空孤月」

そう呟いて剣を抜こうとした。

しかしその瞬間だった。

何と菊地原が俺がいる建物の屋上に上がってスコープオンを投げ
てきた。

何とか避けれたが、突然の奇襲に焦った俺は孤月を必要以上に振り抜いてしまい、旋空の攻撃範囲が広がってしまった。

あ、ヤベ……

結論、歌川だけでなく唯我も旋空に巻き込まれてしまった。

歌川と唯我は首と胴が泣き別れしてベイルアウトして空へ飛んで行った。……すまん唯我。

まあとりあえず先制点はうちだから良しとしよう」

『全然良くないですよ!!酷過ぎる!!』

通信から唯我の泣き声が聞こえてくる。

「悪かった悪かった。そんな事より国近先輩。出水と太刀川さんは？」

『そんな事って比企谷先輩酷』出水君は誰とも当たってないで比企谷君の所に向かっているよ。でももう少しかかるかな?太刀川さんは……今風間さんと当たったね』『国近先輩?!』

唯我の叫び声はどうでもいいが太刀川さんは風間さんと当たった

か。となると暫くは動けないな。とりあえず俺は出水が合流する前に菊地原を殺すか。

「了解しました」

そう言ってバググワームを解除して菊地原に向き直る。

「よう菊地原。お前の所為で唯我也殺しちゃまったじゃねえか」

すると菊地原もバググワームを解除してスコープオンを向けてくる。

「別にあいつ居ても居なくても変わらないでしょ」

まあ否定はしないがな。

苦笑いしながら菊地原に突っ込んだ。菊地原もそれを見て突っ込んでくる。

先手必勝とばかりに菊地原の首目掛けて袈裟斬りをする。簡単に避けられる。菊地原はお返しとばかりにスコープオンで俺の首を狙ってくるのでバックステップする。

しかし積もった雪の所為で足をとられてしまい体制を崩してしまった。それを見た菊地原は突っ込もうとしてくる。

(させねーよ。バカ野郎)

そう思い自分の前にキューブを出す。

「アステロイド」

そう眩き威力重視のアステロイドを撃ち込む。菊地原はシールドを出して簡単に防ぐが時間は稼げた。

急いで体制を整えて再び菊地原に突っ込こもうとしたが……

再び雪に足を取られて転びかけてしまった。もう嫌だ。何だよこのステージ。

菊地原を見るとシールドを構えながらこっちにやって来る。

(だが腹がガラ空きだな)

内心ほくそ笑みながら菊地原の腹目掛けてグラスホッパーを設置する。

急な戦法に止められなかったのかグラスホッパーは菊地原の腹に当たり吹っ飛んだ。それによって菊地原は建物の屋上から飛び出した。今がチャンスだ。

そう判断した俺は孤月を構える。すると向こうはスコピオンを消して両防御の構えをとってきた。

この距離なら菊地原を殺せる確率は五分五分だな。覚悟を決めて施空を起動しようとする。

その瞬間だった。

菊地原の真上に双葉がいきなり現れて菊地原の首を飛ばした。

俺が驚く中菊地原がベイルアウトした。

ベイルアウトの光で再起動すると双葉はバググワームを消して俺に向けてアステロイドを撃ってきた。慌ててシールドで防ぐと双葉はグラスホッパーを起動して地面に降りて行った。

(双葉め、テレポーターを入れているとはな……)

良い作戦だ。テレポーターならこんな天候でも移動に支障がないし、近くまで行かないと視線の向きが読めないから便利だ。

しかもバググワームは予想通り真っ白だった。ここで逃すとまた奇襲をされる。

そう判断した俺は建物から飛び降りてグラスホッパーを起動する。双葉を見ると双葉もこちらに気付き孤月を構えてくる。

俺は空中から滑空しながら双葉に斬りかかる。双葉は孤月をぶつけて首を飛ばされるのを防いだ。この距離なら双葉の目も見えるからテレポーターは使わないだろう。にしても改めて見ると凄い綺麗な目だな……

すると双葉が頬を染めてくる。

「あ、あの八幡先輩……。そんなに見られると、その……。恥ずかしいです」

「わ、悪いー!」

煩惱を断つように首を振って双葉から少し距離をとる。

クソツ、ランク戦の途中だぞ?!しかもこれ米屋とかも見てるから終わったら絶対に何か言われそうだ。

1つ深呼吸をして孤月を構えると双葉も孤月を構えてくる。

(狙うは短期決戦だ。長引かせると加古さんも来るからな)

そう判断してグラスホッパーを起動して一気に距離を詰める。本来ならメインとサブ両方のグラスホッパーを起動する所だが吹雪の所為で2つを使いこなせる自信がない。

だが双葉も俺と1000回以上戦ったことのある奴だ。この程度のスピードじゃ簡単に見切られるだろう。

双葉は俺の首目掛けて鋭い一撃を放ってくる。それを孤月で凌ぎ双葉の腹にグラスホッパーをぶつけて後ろに飛ばす。

「アステロイド」

そう呟いて弾速重視のアステロイドを撃ち込むがその瞬間双葉が目の前から消えた。またテレポーターかよ?!

レーザーを見ると双葉は広場の方に向かっていて。おそらく誘っているのだろう。広場みたいに隠れる場所が無ければこの吹雪と積

もった雪の中テレポーターとグラスホッパーを入れている双葉が有利だしな。

だがそう簡単には事は運ばないぞ。

「出水、俺だ。双葉を倒したいから俺が指示した場所の広場の積もった雪を吹き飛ばせ」

チームメイトの火力厨にそう告げた。レーダーを見ると俺が指示した広場には、出水、双葉、俺の順番で近い。双葉が広場に着く前に積もった雪を吹き飛ばせば双葉を挟み撃ちに出来て有利だ。

『はいよ。メテオラ!!』

返事を貰うと同時に爆撃の光が見えて激しい音が鳴り出した。

広場を見ると全体の半分くらいは雪がなくなっていた。

『これで大丈夫か?』

「助かる。今から双葉を挟み撃ちにするぞ。双葉はテレポーターを入れてるから気をつけろ」

『うわー、完全に吹雪対策してんだな。気をつける』

「はいよ。アステロイド」

そう言っただ広場の入口に入った双葉目掛けてアステロイドを撃ち込む。双葉はシールドで防ぎながら広場の中心へ走り出した。

「出水」

『任せろ。アステロイド!!』

すると俺と双葉の前方から大量のアステロイドが双葉に襲いかかった。

すると双葉が3度目のテレポーターの使用をしてきた。しかし今度は20メートル以上離れたので数秒はインターバルの為使用出来ないだろう。その上跳んだ場所は雪が積もっているから動きにくいだろう。

今がチャンスだ。

「施空孤月」

そう判断すると同時に施空を双葉目掛けて使用した。

殺った。そう判断した俺は悪くないだろう。

しかし俺の判断は間違った。

双葉は施空が当たる直前に消えて少し離れた所に現れた。

……は？何で？テレポーターは暫く使えない筈じゃなかったか？
(……まさか?!)

俺が結論付けた時だった。

「私達のテリトリーへようこそ、比企谷君に出水君」

横を見ると加古さんが白いバッグワームを付けて微笑んでいた。

「やっぱ双葉が最後にした回避は喜多川の仕業でしたか」

「ええ。2人をここに引き寄せられて良かったわ」

「……なるほど。だから双葉は積極的に攻めて来なかったんですね」

おかしいと思った。いつもの双葉だったら菊地原を殺して直ぐに俺に斬りかかっていたが、今回はアステロイドで牽制して直ぐに俺から離れたしな。

「その通り。この吹雪じゃ双葉を逃す選択肢はなかったでしょ？」

正にその通りだ。白いバッグワームを着てる奴を逃したら後で奇襲されると判断して追いかけた。

（その結果がトラップが仕掛けられた広場での戦いかよ……!）

『どうすんだ比企谷?!』

出水が内部通信で話しかけてくる。

「国近先輩、太刀川さんの状況は？」

『今のところ拮抗してるね。雪の所為で太刀川さんが攻めあぐねてるよ』

援軍は期待出来ないか……。仕方ない

「……出水、ここで加古さんと双葉を倒すぞ」

『マジかよ?!喜多川がいるから不利だろ!1回引いて太刀川さんと合流した方がいいだろ?!』

「ダメだ。白いバツグワームがあるから奇襲されたらヤバいぞ。それに、もしも喜多川がこの広場以外にトラップを仕掛けてたら、場合によつては太刀川さんにも迷惑がかかる」

喜多川がいる場所が俺と出水だけでなく太刀川さんも見える場所だったら、太刀川さんも罠にやられる可能性があるからな。

『わかったよ!』

「それでいい。国近先輩はトラップの場所が分かったら直ぐに視界にマーキングをお願いします」

『ほくい』

そう言われると同時にさつき双葉が使ったトラップの位置が視界に表示された。

「出水、俺が攻め込むからお前は援護しろ。ただしフルアタックはするな。もしもお前の後ろにワープしたら対処できない」

『マジか!!つまんねー!』

流石好きな物にフルアタックと言うだけあるな。この弾バカが。

「面白さを求めるな。行くぞ」

『へいへい』

出水から返事を聞いて加古さんと向き直る。

「あら、作戦会議は終わったの?」

「はい。ちょうど今」

「奇遇ね。私達も今終わったのよ」

そう言う加古さんの周りには球体のトリオンが浮かんでいる。いつ見ても独特だな。

そう思いながら俺も孤月を構え加古さんを見据える。

「悪いですけど長引かせる訳にはいきませんよ」

「負けないわよ」

1つ区切り口を開けようとすると思う向こうも口を開けてくる。

「戦闘開始だ（よ）」
そう言うと同時に戦端が開かれた。

現在のスコア

太刀川隊 1得点 1アウト

風間隊 0得点 2アウト

加古隊 1得点 0アウト

比企谷八幡は疲れ果てる

「戦闘開始だ(よ)」

そう呟くと同時に旋空を放つ。向こうもハウンドを撃ってきた。向こうはしゃがんで回避する。

俺は敢えて突っ込む事でハウンドの有効射程から逃れる。そしてしゃがんで反応が鈍った加古さんを斬り左肩を損傷させた。深く斬ったので左肩からはトリオンが漏れ出て使い物にならないだろう。

しかし攻撃手の双葉ならともかく射手の加古さんには余り意味はない。しかも加古さんが使うスコープピオンは腕が使えなくても問題なく戦えるし。

早めに殺すと判断した俺は首を跳ばす為首に袈裟斬りをする。

その瞬間加古は右をチラリと見た。……アレがくるな

そう判断した俺は袈裟斬りを途中で止める。すると案の定加古さんが消えたので右を見ると加古さんが現れた。

やつぱりテレポーターか。だが今は隙だらけだな。

「旋空孤月」

そう呟いて旋空を発動する。……やったか？

そんな淡い期待を込めて加古さんを見ると加古さんが消えた。今度は喜多川の仕業だな。……どこに跳んだ？

そう思った時だった。

目の前に加古さんがいきなり現れてスコープピオンを振ってきた。まさか俺の真前にトラップがあったのかよ?!
慌てて孤月でスコープピオンを防ぐと加古さんは今度は下を向いてきた。

下だと？下にレポートする意味はないだろう？ハツタリか？

すると次の瞬間、加古さんの腹からスコープオンが飛び出して俺の腹を削った。それにより脇腹からトリオンが漏れ出てきた。

(枝刃も使うってどんだけ感覚派なんだよ?!)

枝刃は体内でスコープオンを枝分かれさせ体外に出す技だが、まさか射手が使うとは完全に予想外だ。

焦る俺を他所に加古さんは更に斬り込んでくる。ヤバい、このままじゃ……

『比企谷、少し後ろに下がれ!!』

負ける。そう思った瞬間、出水が叫んできたので下がるとさっきまで俺がいた場所に大量の弾丸が降り注いだ。それによって加古さんは追撃を出来ず下がる事となった。

その隙を逃すつもりは毛頭ないので俺は孤月を構え回り込んで加古さんとの距離を詰めようとすると

「アステロイド！」

双葉がそう叫びアステロイドを飛ばしてくるので追撃を諦めて出水の場所まで下がる。

向こうを見ると加古さんと双葉も一列に並んでいた。

「すまん出水。助かった」

「気にするな。それよりもどうする?」

だよなあ。向こうはテレポーターと喜多川のワープで簡単に攻めたり逃げたりする事が出来る。

対して俺達は地面に雪がなくなつて動きやすいとはいえ機動力ではかなりの差がある。

「長引かせるところがちが不利だ。まずはトラップの位置を全て調べる。そしたら狙える方から叩くぞ」

「はいよ。じゃあ俺が2人を動かすから、動かしたらお前は旋空で攻撃しろ」

「わかった。行くぞ」

俺が返事をすると同時に向こうは俺と出水の間にアステロイドを撃ち込んできた。それにより俺達は左右に跳ぶしか選択肢はなかった。

そしたら跳んだ先に加古さんがテレポーターで現れた。つー事は出水の相手は双葉か。いくら出水でも普通の個人ランク戦ならともかく、テレポーターとトラップを使いこなす攻撃手の相手は厳しいだろう。

それに双葉は俺の弟子だから俺が双葉の癖を知っていると思っっているから双葉を出水に当てたのだろうな。

出水を助けない気持ちはあるが加古さん相手に余所見は厳禁だ。

速攻で倒す。

そう思いながら手からキューブを出すと向こうもボール状のトリオンを出してくる。

「アステロイド」

「ハウンド」

お互いにそう呟いて撃ち込んだ。まあお互いにシールドを張って防いだが。

(まあこんなんでは倒せるとは思ってないけどな)

俺はグラスホッパーを起動すると加古さんは手にスコープオン、周りには球体のトリオンを浮かばせている。

チャンスだ。今は2つのトリガーを使っているからテレポーターは使えない。しかも近くにさつき使われたトラップはあるが直ぐに踏める場所じゃない。

トラップは点在してことのトラップだ。いくら喜多川でもトラップの直ぐ近くに同じ効果のトラップを仕込む事はないだろう。

そう判断して突っ込んだ俺は間違っていないだろう。

普通なら。

俺があと少しで加古さんの斬れる範囲に踏み込めると思った瞬間の事だった。

いきなり雪が積もった地面からブレードが生えてきて俺の右足は斬り落とされた。

(……何でだ?! 加古さんの手にはスコープピオンが……まさか?! ……いや、考えるのは後だ。今は……)

俺は足を斬り落とされたのをそれ以上考えるのを止めて右手に孤月を、左手にアステロイドを出して更に踏み込んだ。

すると加古さんは俺が相討ち上等と考えているのを理解したのか笑みを消して弾丸をぶつけてきた。

それと同時にこちらでもアステロイドを放った。

お互いに放った弾丸はそれぞれの身体に当たり、俺の左肩と加古さんの右肩は同時に地面に落ちた。

その結果を確認せずに俺は孤月を、加古さんはスコープピオンを振りかざしお互いの刃をぶつけ合った。

暫くの間鏢迫り合いをしていると、

「アステロイド!!」

「旋空孤月」

右側からそんな声が聞こえたので後ろに下がるとさつきまで俺がいた場所に斬撃が飛んできた。

後ろに下がると出水が近くにやってきました。出水を見ると全身からトリオンが漏れ出ていた。一方の双葉は左肩と右足の一部からトリオンが漏れ出ている。双葉は俺と同じくらい損傷しているな。

「大丈夫か? お前かなりやられてんじゃん」

「すまん。加古さんのスコープピオンにやられた」

おそらく俺の足を斬り落としたのは枝刃ともぐら爪の複合技だろう。手にスコープピオンを持って防御用と見せかけて、実際は枝刃で地面にスコープピオンを差し込んででもぐら爪を仕掛けるとはな。しかもこの雪の所為で地面から奇襲がくるとは予想出来なかった。

「お前こそ全身からトリオン漏れてるが大丈夫か?」

「大丈夫だ。かすり傷だし、頭と心臓周辺は避けてある」

「なら良し。にしても随分トラップ仕込んでるな」

見るとトラップが10個以上仕込んであった。おそらく双葉は惜しみなくトラップを使い出水を攻め込んだんだろう。

「で、比企谷。どっちから狙う?」

「双葉からだ。加古さんは射手だから腕が腕げても戦えるが双葉はかなり戦闘力が落ちてるからな」

孤月の使い手が片手片足なのは明らかに弱いからな。まあ俺もその状態だけど。

「それはわかったがどうやって落とすんだ?」

「忘れたか? 空中にはトラップがないんだぜ?」

俺がそう返すと出水は一瞬唸りやがて顔を上げた。

「あくなるほど。いつものやり方か」

その顔はいつもの嫌らしい笑みだった。その笑みを見て苦笑しながら加古さんと双葉に向き直る。

「援護は任せるぞ出水」

「任せな」

一言交わしてグラスホッパーを起動して突っ込んだ。それと同時に双葉も俺に突っ込みお互いの孤月がぶつかり合う。

(今だ!)

そう呟いて双葉の腹にグラスホッパーを起動する。

すると双葉も俺の腹にグラスホッパーを起動してきた。どうやら考えている事は一緒のようだな。

苦笑いしながら俺と双葉は上空へ跳ばされた。ここからが勝負だ。

「出水!」

「加古さん!」

俺と双葉が同時に呟くと地表にいる2人の手からトリオンが現れた。

「アステロイド!!」

地表にいる2人はそう叫んで敵目掛けて撃ってきた。

落ち着け。今、俺がする事は加古さんの攻撃を防ぐ事じゃない。双葉から目を離さない事だ。

暫くの間双葉を見ると双葉は左側を見た。テレポーターが来るな。そう判断すると同時に双葉が消えたのでそれを追うべく俺もグラスホッパーを起動する。

しかし双葉の視線の向きを調べる為、移動にワンテンポ遅れた俺は加古さんのアステロイドを完全回避する事は不可能だ。

案の定グラスホッパーを踏むと同時に俺の下半身は吹き飛んだ。このままだと後10秒くらいでベイルアウトだ。

しかしグラスホッパーを踏んだのが早かったので下半身が吹き飛んでも勢いは止まらない。

双葉の方向へ跳ぶとテレポーターを使ったばかりだから俺に背を向けていた。しかも双葉は跳んだばかりで安心して居るのかゆっくりと振り向きかけている。

あの状況で俺がやられると判断するのは間違っていないが、俺がベイルアウトするまで気を抜くな。

内心そう呟き双葉の元へ跳んで行く。すると双葉はギョツとしているがもう遅い。

俺は双葉がシールドを展開する前に首を刎ねた。

そして双葉はベイルアウトした。その光に目を細めていると自分の身体に罅が入っているのがわかった。

『戦闘体活動限界、緊急脱出』

そのアナウンスを聞くと同時に俺は光に目を眩ませて、気が付いたらベッドに叩きつけられた。

ここで脱落か……

1つ息を吐いてオペレーター席に移動する。

「お、比企谷君。お疲れ〜」

国近先輩が笑いながら手を振ってくる。俺が一礼すると、

「比企谷先輩!!さっきは酷すぎますよ!!」

唯我が喚きながら突っ込んできた。全くこいつは……

「悪かった悪かった。あんまり煩いと蹴り入れるぞ」
適当に返すと唯我が更に喚く。

「人権侵害だ!! 弁護士を呼んでくれ!!」

泣き喚き始めた。マジで煩いな。もうほつといていいや。

そう思っていると綾辻の声が聞こえてきた。

『比企谷隊員と黒江隊員が落ちた事により広場での戦いは純粋な射撃戦に切り替わった!』

『となるといずみ先輩が有利だね』

『だな。お互いトリオンは残り少ないけど、弾バカはトラップの位置を殆ど把握してるしな』

モニターを見ると出水がバイパーで加古さんの動きを制限してメテオラの爆風で少しずつ削っている。こりや加古さんが落ちるのも時間の問題だな。

『そして太刀川隊長と風間隊長の一騎打ちにも変化が現れた!』

太刀川さんが見えるモニターを見ると既にお互いボロボロだった。

風間さんがもぐら爪で太刀川さんの左足を腕いで飛び掛る。

すると太刀川さんは風間さんの腹にグラスホッパーをぶつけて空中へ飛ばした。

『ここでグラスホッパー!! 比企谷隊員の得意技が炸裂か!!』

『あー。確かにハッチの十八番だな』

『ハッチ先輩ならいずみ先輩に追撃させるけど今は……』

太刀川さん一人だ。そうなると選択肢は唯一つ。

太刀川さんは上空の風間さん目掛けて旋空を放った。グラスホッパーで高く跳んだ風間さんにあの馬鹿げた威力の旋空を防ぐ事は無理だろう。

予想通り風間さんは真つ二つになりベイルアウトした。

『風間隊長緊急脱出!! これで風間隊は全滅だ!』

『こりや太刀川隊の勝ちだな』

『そうだね。いくらトラップの援護のある加古さんでもいずみん

先輩と太刀川さんの2人が相手じゃね』

出水の方を見ると加古さんはかなりダメージを負っている。そろそろ詰みか……

出水はアステロイドのフルアタックを撃ち込んだ。終わったな……

しかし加古さんの姿が消えた。

マジか?!まだトラップがあったのかよ?!最後の最後まで残していたのか?

『ここで加古隊長、遠く離れた場所にワープ!そしてバググワームを着たのかレーダーステルス状態となった!』

『もう負けとわかったからポイントを取られない為だな』

『非常用のトラップを仕込んでるなんていやらしいな』

俺達の見ているパソコンじゃわからないが、どうやら加古さんは遠くへ逃げたのだろう。懸命な判断だ。もう加古さんにポイントを取るのは無理だろうし。

暫くして太刀川さんと出水が合流してバググワームを着て見晴らしの良い場所を陣取った。一応加古さんと喜多川を探しているのだろう。

『試合は終わりだな。この吹雪じゃ加古隊を見つけるのは無理だし』
米屋の言うとおりでな。雪色迷彩のバググワームを着ている2人を見つけれらるなんて無理だしな。

更に5分経ち、

『試合終了!最終スコアは3対2対0。太刀川隊の勝利です!!そして

暫定順位が更新されます！太刀川隊は順位変わらず、風間隊は4位にダウン、加古隊は5位に上昇しました！』

綾辻がそう言うのと順位が表示された。

- 01 太刀川隊
- 02 冬島隊
- 03 草壁隊
- 04 風間隊
- 05 加古隊
- 06 嵐山隊
- 07 三輪隊
- 08 片桐隊

順位を見ると太刀川さんと出水が戻ってきた。

「お疲れっす」

「おお比企谷、よく2点取ってくれたな。唯我は……ドンマイ」

太刀川さんは唯我の肩を叩き出しても

「ドンマイ」

肩を叩きソファーに座った。唯我は俺に喚いているが無視だ。面倒臭いし。

唯我をスルーしていると総評が始まった。

『それでは試合が終了したので総評をお願いします』

『そうだな。今回は風間隊は運が悪いと言えないな』

『そうだね。風間隊の強みは3人による連携だけど、合流する前に2人やられたしね』

『まあ合流出来てもあの吹雪じゃ連携のレベルも下がるだろうしな。それと唯我は……ドンマイだな』

米屋にも言われたよ。チクショウ。

『確かに……比企谷隊員の旋空に巻き込まれた唯我隊員は不運としか言いようがないですね』

うるせえよ！わかったから唯我の話をするな！若干胸が痛むわ！

『でもまさか大吹雪の天候を選ぶとは思わなかったな』

『そうですね。私の知る限りこの天候を選ぶのは初めてですし。ではステージを選んだ加古隊についてはいかがでしょうか？』

『加古隊は黒江ちゃんのテレポーターといい、しっかりとステージの対策をしているのがわかったな。後加古さんのスコープオンの使い方が凄いい良かったな』

『それに喜多川先輩のトラップも合わさって凄いい嫌らしかったしね。うちの隊が参加しなくて良かったよ』

『加古隊に問題があるとすれば黒江ちゃんだな。最後ハッチに斬られる直前油断してる様に見えたな』

『多分双葉はハッチ先輩が加古さんに蜂の巣にされたと思ったんだと思うよ。もしも油断してなかったら多分ハッチ先輩は双葉を倒せずに太刀川隊は2点しか取れなかったね』

米屋と緑川はそう言っているが同感だ。ランク戦は作戦室に戻るまでがランク戦だ。

『次の訓練はメニューを少し増やすか』
「言うと思った」

出水が苦笑している。まあそこまで辛いメニューにはしないけどな。

すると同じ事を思ったのか、

『こりや黒江ちゃんは後でハッチから説教を受けるか訓練メニューを増やされるかもな』

『あー、ハッチ先輩ならありそう……。ハッチ先輩厳しいと思うし』
別にそこまで厳しくないと思うがな。体罰はしないし。

そう思った時だった。

『まあハッチも恋人相手に無茶なメニューはしないだろ』

『そうですね。恋人相手なら……。え？』

『……………は？』

『あん？綾辻に緑川もどうしたんだ？』

米屋のキョトンとした声が聞こえてくるが俺もキョトンとしている周りでは太刀川さんも出水も唯我也国近先輩もキョトンとしていた。

暫くの間キョトンとしていると

『あの……よねやん先輩?』

『何だよ緑川?』

『もしかしてハッチ先輩と双葉って……付き合ってるの?』

『……………あ、ヤベ』

あ、ヤベ、じゃねええええ!!! テメエ何堂々とバラしてんだよバカが?! ふざけんな!!

今までバレない様に頑張ったのにテメエの一言で台無しだろうが!! ぶっ殺すぞ!

内心ぶち切れている中綾辻が続く。

『ま、まあその衝撃の事実は置きまして、最後に太刀川隊についてはいかがでしょうか?』

この状況で本来の仕事をするとは綾辻やるな、と現実逃避しながらぼんやりと思った。

『そ、そうだね。太刀川隊は割といつも通りだったと思うな。ね、よねやん先輩?』

『あ、ああ。……ハッチすまん。太刀川さんは雪で動きにくいとはいえ決めるべき所で施空を決めてたし、ハッチと出水の連携もステージの割には高レベルだったしな』

途中で謝罪していたが今日がテメエの命日である事は決定事項だからな』

するといきなり出水に押さえつけられる。

「落ち着け比企谷。目がヤバいぞ!本気で槍バカを殺すつもりか?!

「ああ本気だ。今日あのバカの息の根を止める」

「だから落ち着けて!お前が殺人犯になったら小町ちゃんはどうなるか考えろ!」

そう言われてクールダウンした。そうだ、小町に迷惑をかける訳にはいかない。仕方ない半殺しにしとくか。

「もう大丈夫だ。離してくれ」

すると出水はホツとして息を吐き手を離した。深呼吸している中解説は続く。

『太刀川隊はいつも通りの戦い方をする事が出来て勝利をもぎ取りましたね』

『まあ太刀川隊を倒せるのは玉狛第一くらいだろ』

『でもいつかA級1位の座は草壁隊が貰うよ!』

『いやいやそれは三輪隊だからな』

『やはりA級1位の座はどのチームも狙っていますね。私が所属する嵐山隊も頑張つていきたいです。以上をもってA級ランク戦昼の部

を終了します。お二人共解説ありがとうございました』

『どうもっす』

『お疲れ〜。……………じゃ、俺逃げるから』

『あ、ちよつと！よねやん先輩?!』

緑川の驚いた声を最後にランク戦が終わった。

視線を感じて振り向くと全員が同情の眼差しで見ってくる。

「比企谷、今度焼肉奢ってやるから元気出せ」

太刀川さんが肩を叩いてくるので軽く頭を下げる。

「どうもっす。すみませんが俺、職場見学の途中ですから行きます」

「あ、ああ。お疲れ」

「ドンマイ比企谷」

「お疲れ様です」

「元気出してね〜」

チームメイトの励ましの言葉を聞きながら作戦室を出た。

足取りが重い……………

そう思いながらトボトボと集合場所に向かって歩き出した。

黒江双葉は恋人をバカにされ怒りが頂点に達する。

集合場所へ向かってトボトボ歩いていると三上と会った。

「あ、比企谷君。えーっと……」

何か気まずい顔をして口を濁している。その優しさは残酷だからな。

「すまん三上。言いたい事はわかる」

「あ、うん。とりあえず集合場所まで一緒に行かない？」

「ああ」

溜息をついて三上と一緒に歩き出した。

「今日の試合は残念だったなあ」

「まあ合流する前に落とされたからな。菊地原は双葉に文句を言っただらろ？」

「まあね。唯我君は……」

「その話はやめろ」

「ふふつ、ごめんね」

そんな話を話していると集合場所に着いた。集合場所に着くと綾辻がいなかった。大方実況の後処理だろう。木虎は信じられない顔をしていて時枝は無表情、佐鳥は笑いをこらえきれていない。

「比企谷に三上。お疲れ」

「うつつ」

「お疲れ様です」

「比企谷先輩!!」

俺と三上が挨拶をすると佐鳥がいきなり呼んできた。

「何だ？」

「比企谷先輩はいつから黒江ちゃんと……あがががが!!」

余計な事をほごこうとした佐鳥にアイアンクローをぶちかました。それを見ていた総武の生徒は

「おい見ろ！嵐山隊にアイアンクローをしてるぞあいつ！」

「A級1位は伊達じゃないって事か……!!」

何か戦慄しているが解せぬ。別にA級1位じゃなくても佐鳥をし
ばく事は出来るからな。佐鳥はそんな扱いが妥当だ。

「痛い!!痛いです!!」

「うるせーな。トリオン体だろうが」

呆れながら溜息を吐いて佐鳥の頭から手を離した。

「……疲れた。俺はクラスの方に戻る」

「お疲れ様です」

時枝にそう言われてクラスの場合に戻ると戸塚が笑顔で手を振っ
てきた。ああ、癒される……

戸塚に癒されていると視線を感じたので視線がある方をチラリと
見ると由比ヶ浜とその近くに雪ノ下がいた。雪ノ下はゴミを見る目
で、由比ヶ浜は怒った顔で見てくる。何か面倒な予感が……

2人をシカトして戸塚に近寄る。

「お疲れ八幡!はいこれ」

戸塚はMAXコーヒーを差し出してきた。マジか?!天使過ぎる。

「ありがとな。今金渡す」

「あ、いいよ。八幡頑張ってたから奢りで」

「いや。それは悪いし」

「うーん。……あ!じゃあ今度一緒に遊びに行こうよ!その時に飲み
物奢ってよ」

マジか?!戸塚と遊びに行くだ?!最高じゃねーか!飲み物どころ
か昼飯代も出してやる

「わかったよ。その時奢る」

「うん!」

戸塚の笑顔によって米屋に苛立っていた気分が良くなってきた。
少しずつストレスを無くしていると綾辻が戻ってきた。

「それじゃあ最後の個人ランク戦のステージに案内するから付いてきてくれ」

嵐山さんはそう言って歩き出し、他の生徒もそれに続く。俺としては目立つのが嫌なので最後尾につこうとした。

その時だった。

「ヒツキー!!」

何か後ろから呼ばれた。シカトしたいがすると更に面倒な気がするので振り向くと後ろには由比ヶ浜と雪ノ下がいた。

「……何だよ？手短にすませろ」

そう返すと由比ヶ浜はキレて雪ノ下は不愉快そうに目を細める。

「あら、随分な言い方ねロリ谷君。貴方どんな手段を使ったか知らないけどあんな小さい女の子を脅迫して恋人にさせようとするのは犯罪よ」

何で俺が脅迫した事前提なんだよ？流石にイラついたので言い返そうとした時だった。

「何考えてるの?!キモい！ヒツキーマジでキモい!!変態！ホントキモい！」

由比ヶ浜はキモいキモい言ってくる。こいつ完全に雪ノ下に毒されてるな。

この類の連中は適当にあしらうに限る。

「はいはい。どーせ俺はキモいですよ」

そう言って2人に背を向けると

「無視すんなし！」

とか言ってくるがちゃんと返事しただろうが。無視してないからな？

「あら？どうやら目だけでなく性根や耳まで腐ったみたいね」

……お前本当に罵倒しか出来ないみたいだな。こいつの方が社会に出て困るだろ？

溜息を吐いてこいつらから離れる為早歩きで歩き出した。

個人ランク戦のステージに入ると既にほとんどの生徒がいた。幸い学校では影が薄いので余り俺を知らない奴は多いがステージに入

るとC級及び一部の正隊員からざわめきが聞こえる。まあさつきままでランク戦してたしな。

「ここが個人ランク戦用のステージだ。個人ランク戦というのはボーター隊員どうしが一対一で戦ってポイントを奪い合うシステムだ。ポイントが高い相手に勝てば多くポイントを貰えるがポイントが低い相手だと貰えるポイントは少ない。また訓練生でも先を見据えて正隊員と戦う事ができる。それじゃあやりたい者は志願してくれ！」

それと同時に殆どの生徒が志願している。

うちのクラスからは天使の戸塚、葉山、相模とかいうクラスで割と騒がしい女だ。見ると雪ノ下も選ばれてクラスの連中にキヤーキヤー言われている。国際教養科には雪ノ下の性格を知ってる奴はいないのか？知ってるならあんなにキヤーキヤー言われないうしろしな。

そう思いながら戸塚を見ていると訓練隊員の隊服を着ていた。くそ可愛いな。しかも腰には孤月があるし。

「あ、八幡と同じ武器だよ！」

こつちを見て笑顔を向けてくる。

「そうだな。孤月は高いレベルでバランスが取れてるから初心者にも扱いやすいぞ」

「そうなんだ！頑張るね！」

「おお、頑張れ」

そう返すと

「比企谷先輩。鼻の下が伸びてますよ。双葉ちゃんと付き合っているならもう少ししっかりするべきです」

横で木虎がジト目で見てくる。

「いや、別に伸ばしてないからな」

「どうだが。余り双葉ちゃん以外の女の子に気を取られないでください」

あー、なるほど。こいつも俺と同じパターンか。

「木虎、戸塚は男だ。謝れよ」

「……………は？え、えっと本当ですか？」

木虎が信じられないように戸塚に聞いてくる。

「あ、うん。僕、男の子……です」

頬を掻きながら顔を赤くしている戸塚を見て少し顔が熱くなってきた。本当に男か？

「あ……す、すみませんでした!!」

木虎は慌てて頭を下げる。まあ気持ちは良く分かるがな。

「う、うん。気にしないでいいよ。じゃあ僕行くから見ててね八幡!」

「おう、行ってこい」

そう返すと笑顔を見せてブースへ入っていった。すると木虎が驚いた顔をして、

「比企谷先輩。彼は……本当に男性なんですか？」

そんな事を聞いてくる。

「信じられないが事実だ」

「男性なのに女子として負けてる気がします……」

何か木虎は落ち込んでいる。俺は何と励ませばいいのかわからないので呆然としている時だった。

「比企谷君」

いきなり後ろから呼ばれる。その声を聞いて面倒な予感がしてきた。た。

「何だ雪ノ下?」

後ろを見ると雪ノ下が訓練隊員の隊服を着てやってきた。隣では立ち直った木虎が冷たい目で雪ノ下を見てるし、もう嫌だこの空気。

そう思っていると雪ノ下が口を開ける。

「私とランク戦をしなさい」

……は?何で?隣では木虎も絶句してるし。

まあとりあえず返事はするか。

「断る。俺はさっきの試合で疲れてる。それ以前にやる理由がない」
なんで俺が戦わなきゃなんないんだよ。勝敗が決まってる勝負なんかやる必要ないだろ。つーかなんでそんなに上から目線なの？
「戦う理由ならあるわ。あなたが私より優れているなんて簡単に認められないわ。だからあなたを倒して私の方が優れてる事を証明するのよ」

「ただ負けず嫌いなんだよ？お前に認められなくてもいいし。
「それはお前にとつての戦う理由で俺にとつての戦う理由ではない。勝負したけりゃ俺にとつて戦う理由を示せ」

「あなたが私を倒せば私より優れてる。戦う理由としては充分じゃないかしら？」

「何で俺がお前より弱い前提なんだよ？呆れてモノも言えんわ。隣にいる木虎も溜息を吐いてるし。」

「面倒だから拒否しよう。そう判断して口を開けようとした時だった。」

「あ、八幡先輩!!」

いきなり呼ばれて口元が緩む。振り向くと恋人がこちらに走ってきた。

「よう双葉」

「はい。さっきはお疲れ様でした」

「やっぱり双葉の笑顔最高だな。双葉に癒されていると」

「お疲れ様、双葉ちゃん」

木虎がにこやかに挨拶をする。途端に双葉はジト目になり

「……………どうも」

素っ気なく返事をする。すると案の定木虎は固まった。つーかこ

ここまで木虎に冷たいって木虎は何をしたんだ？興味はあるが聞いてはいけない気がするんだが。

とりあえず話を逸らすように口を開ける。

「あ、お前はランク戦か？」

「はい。もし宜しければ付き合ってもいいですか？」

「別に構わない。さっきのランク戦で油断してたしな」

そう返すと双葉は目を逸らす。解説で言われて反省したみたいだな。

「別に怒ってないから気にするな」

そう言っ頭をわしゃわしゃすると双葉は目を細めている。隣では木虎が凄い目で俺を見ているが怖いからな？

そう思っていると

「あら比企谷君。まさか本当に犯罪に手を染めるとは思わなかったわ。今通報するから両手を括って待っていなさい」

隣では何か雪ノ下が携帯を弄っているがどうせ下らない脅しだろう。この程度で警察を呼んだら寧ろ雪ノ下が怒られるしな。

「通報したきやぐ自由。んじや双葉、俺は嵐山さんに許可を貰ってくるから待っててくれ」

そう言っ嵐山さんの所に行こうとすると

「待ちなさい。私との勝負が先でしょ？」

何か戯言を言ってるし。

「は？だから俺はお前との勝負はしないからな。さっきの理由じゃ勝負をする理由にならない。大体お前が俺に勝てる訳ないだろ？常識でモノを言え」

そう返すと睨んでくるが逆恨みだからな？

「あら？やってみないとわからないじゃない。どうせ貴方がA級1位なのも卑怯な手を使ったんでしょ？」

……………あ？

今のは俺の沸点が超えたな。ふざけるなよ。俺は太刀川さんに誘

わかれて以降A級1位の名を汚さないように凄い努力をしたんだ。何も知らない奴に好き勝手言われるのはいくら俺でも許せん。もういいや。2度とトリガーを使う気を起こさないくらいに叩き潰してやる。

そう判断して口を開けようとした時だった。

「ふざけないでください」

後ろから声が聞こえたので振り向くと双葉が物凄く冷たい目で雪ノ下を睨んでいた。余りの鋭い目に俺や木虎もビビっている。

「さっきから聞いていれば八幡先輩の事を犯罪者呼ばわり、卑怯な手を使ったなど色々言っていますが、部外者の貴方が八幡先輩の何を知っているのですか？何も知らないなら不愉快ですから黙ってください」

双葉がそう睨むと雪ノ下はしれつと言り返す。

「あら？こんな腐った目をした男よ？普通に考えたらそう思うけど」

「腐った目をしているのは悪い事なんですか？別に目が腐っていても性根が腐ってなかったら構わないでしょう？」

「性根が腐ってるから目も腐ってるに決まってるじゃない」

お前本当にさっきから好き勝手言ってくるな。そろそろキレていいか？

「可笑しいですね？その理論でしたらあなたも目が腐ってると思います」

「……………どういう意味かしら？」

雪ノ下が急に不機嫌な顔をして双葉を睨んでくる。

「だってそうじゃないですか。八幡先輩の事を碌に知らないで悪く言っているあなたの性根が腐っているのは間違いありません。それなのに目が腐ってないのは可笑しいと思っただけです」

「……あなた随分好き勝手言ってくれるわね」

「それはこちらのセリフです。あなたこそ八幡先輩の事を好き勝手言ってたじゃないですか」

怖い、怖いよ双葉。お前何でそんなにキレてるの？

「おい双葉……」

「双葉ちゃん、少し落ち着いて……」

俺と木虎が止めようとする

「お二人は黙っていてください」

一蹴してきた。

「あ、はい」

俺と木虎は双葉の声に黙ってしまった。マジで怖いんだけど。

周りを見ると総武の連中はハラハラした顔で見ている。モニターに映っているランク戦には見向きもしてない。何だこの状況？

疑問に思っていると双葉が口を開ける。

「さつき八幡先輩と勝負を求めていましたが、代わりに私と勝負しませんか？」

双葉がそう言うのと周りが騒めいてきた。

「どういう意味かしら？」

「私は八幡先輩の弟子ですから八幡先輩より弱いです。八幡先輩に勝てると思っているなら私にも勝てますよね？」

挑発的な目で雪ノ下を見ている。すると雪ノ下は鋭い目で睨んでいる。

「……いいわ。その安い挑発に乗るのは癪だけど受けて立つわ。やりましょう、ランク戦」

雪ノ下の返答を聞いて俺は吹き出しかけた。

やりましよう？こいつ双葉にも上から目線だが双葉に勝てると思っっているみたいだ。

本来なら俺がやる所だが双葉に任せるか。

「木虎、時間的に何本出来る？」

「……3本くらいだと思えますがやらせるんですか？」

「言っても止まらないだろうから諦めた」

「……わかりました。嵐山さんには私が言っておきます」

そう言つて木虎は嵐山さんの所へ行った。それを見送り再び2人を見ると既にブースへ向かつていた。

「雪ノ下さん、A級に挑むんだ！」

「勇気あるね〜」

総武の連中はテンションが上がっている。しかしボーダー隊員は呆れながらモニターを見ている。まあボーダー隊員からすれば結果はわかっているからな。

『ランク外対戦、3本勝負開始』

アナウンスが流れて試合が始まった。

さてどうなる事やら……

試合が始まりフィールドに転送される。

すると2人は初っ端から対面していた。

すると雪ノ下は先手必勝とばかりに走り孤月を振ってきた。始めて孤月を使うには上出来だが双葉には止まって見えるだろうな。

案の定双葉は焦らずに避けてすれ違いざまに雪ノ下の両腕を斬り落とした。それによって1本目は双葉の勝ちが確定した。スコープオンならともかく、両腕を斬り落とされた状態で孤月は振れないからな。

双葉はそれを確認するとゆっくりと振り返り孤月を振りかざす。雪ノ下は悔しそうな顔をしているのがモニターでもわかる。

しかし雪ノ下は何も出来ずに首を落とされた。これで1本目が終了した。

「八幡の恋人って強いね」

いつの間にか試合が終わったのか戸塚がいた。

「まあな。というか雪ノ下じゃ絶対に勝てない」

何せ雪ノ下は初めの訓練で20秒台だが双葉は11秒だ。その上双葉は半年以上孤月を振っているからな。つーか負けたら許さないからな。

まあ負ける心配なんて微塵もしてないがな。

あいつは俺が言った練習メニューを文句1つ言わずにこなし、終いにはもつとメニューを増やしてくれと頼む弟子だ。今日始めてトリガー使う奴に負けるはずがない。

そう思っていると騒めきが聞こえたので顔を上げると既に2戦目が始まっていた。

見ると雪ノ下が双葉にガンガン攻め込んでいた。しかし双葉は落ち着いた表情で捌き、隙が出来た瞬間に雪ノ下の孤月の横っ腹に自分の孤月を叩きつけて孤月を手から引き剥がした。

双葉は弾いた孤月を一瞥して再び雪ノ下の両腕を斬り落とした。これで双葉の勝ちが確定した。雪ノ下を見ると信じられない顔をしていたが、その瞬間に首を刎ねられた。

これで2本目も終了か。

周りを見ると総武の連中は呆気にとられていた。まさかA級の実力がここまであるとは思わなかったのだろう。

「ゆきのん……負けないで」

近くでは由比ヶ浜がそんな事を呟いているが雪ノ下に勝ちの目はないからな？

呆れていると最後の試合が始まった。

転送されると再び初っ端から対面していた。その距離10メートル。またカウンターで倒すのか？

そう思っていたが最後の試合は双葉がいきなり突っ込んだ。雪ノ下は迎撃しようと孤月を振るも、双葉は孤月を軽くぶつけていなして雪ノ下の足元へ踏み込んだ。雪ノ下は慌てて下がろうとするが双葉の方が1歩速い。

そして雪ノ下の両足は斬り落とされた。

雪ノ下が地面にぶつかろうとしているが双葉はもう一度孤月を振りかぶり両腕を斬り落とした。

雪ノ下はダルマの状態になり地面に這い蹲った。顔を見ると怒り、屈辱など色々な感情が見て取れた。その雪ノ下を見下ろしながら双葉は何かを喋っている。

一通り話し終えたのか、双葉は孤月を握り雪ノ下の首を刎ねた。

それと同時に

『3本勝負終了。勝者 黒江双葉』

アナウンスが流れて試合が終わった。

当然の結果だな。つか双葉怖すぎる。全試合両腕を斬り落としてから首を刎ねてたし。どんだけキレてんだよ？

ビビっていると双葉がブースから出てきて近寄ってきた。

「お疲れ」

そう言うと双葉は首を横に振った。

「いえ。全然疲れてないので大丈夫です」

「ならいいけどよ。……双葉」

「何ですか？」

「さつきは怒ってくれてありがとな」

俺なんかの為にあそこまで怒ってくれたのは驚きもあったが正直嬉しかった。

「気にしないでください。恋人が悪く言われたら我慢出来ませんよ」

笑いながら手を振っている双葉に癒されているとブースから雪ノ下が出てきて呆然とした表情で自分のクラスの所へ歩いて行った。

アイツあれだけ罵倒していて謝罪の1つもしないのかよ？マジでクズだな。明らかに人間性に問題あるだろ？本当あの部活に入らなくて良かったな。

そんな事を考えていると他の人のランク戦も終わったので双葉にランク戦はまた今度と言って初めの挨拶があった場所に移動し始めた。

「ヒツキーってボーダーだったんだね！なんで言ってくれなかったの!？」

由比ヶ浜がそう言ってくる。

何でこうなったんだ？

状況を見直そう。

ランク戦が終わり締めめの挨拶を受ける。

深夜に防衛任務があるから仮眠を取るため家に帰ろうとした

ゲートを出た所に由比ヶ浜がいた

向こうは俺に気づいて問い詰めてきた。

「なんでお前に言わなきゃならないんだよ。俺は目立つが嫌いなんだよ」

「それでも隠し事すんなし!!」

瞬間イラつときた。こいつは何を言ってるんだ？

「隠し事するなと言ったがお前こそ俺には言っていないことがあるだろ」

俺がそう言うと、由比ヶ浜は目を泳がせながら俯く。

「ヒツキー、覚えて、たの？」

「いや、覚えてないがお前が俺に隠し事をしている事は知っていた」

何せいきなりクツキーなんて貰ったからな。その瞬間由比ヶ浜は俺の知らない何かを知っていると判断した。

「お前が俺にどんな隠し事をしているか知らんが、隠し事をしているお前が俺に隠し事をするなって言うのは違うんじゃないのか？」

「そ、それは、その……」

テンパっている由比ヶ浜を見て溜息を一つ吐く。

「……まあお前の隠し事について問い詰めるつもりはないが、俺が隠し事をしようとお前が文句を言う筋合いはないという事は忘れるな」

そうやって俺は由比ヶ浜の横を通り過ぎた。

その時由比ヶ浜は

「やっぱり遅かったから、黒江ちゃんって子にヒツキーを……」

なんて言っていたが、由比ヶ浜の隠し事には双葉も関わっていたのか？

疑問に思いながら家に向かって歩き出した。

比企谷八幡と黒江双葉は久々にデートをする

職場見学から早1週間、俺は今駅前のロータリーで携帯を弄っている。

何故俺が駅前に1人でいるかって？

簡単な話だ。今日は双葉とデートするからだ。職場見学の際、木虎の頭を撫でた罰だ。よって今日は全額俺の奢りだ。まあそれだけで許してくれるし安いものだ。それにあの時はキスしまくったしな。いかん思い出す度に顔が緩んでしまう。

「お待たせしました八幡先輩!!」

双葉とのキスの心地良さを思い出していると正面から双葉が笑顔で走ってきた。

「よう双葉」

「はい。久しぶりに八幡先輩とのデートですから楽しみです!」

「俺もだよ。そんで何処行く?」

そう返すと双葉は顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうに口を開ける。

「……そ、その、下着を買いたいので、……八幡先輩に選んで欲しいんですけど」

………フア?!

いやいやいや、ちよつと待て! 双葉の下着を俺が選ぶだど?! マジで言ってるのか?!

「あ、あのだな双葉。下着を買いたかったら加古さん辺りに頼んだらどうだ?」

普通男子が選ぶ物じゃないからな!! 店に入るのも無理だから!

「私は八幡先輩に選んで欲しいんですけど……ダメですか?」

上目遣いで見上げる。

いつもならクソ可愛いとか思って頷くが、今回は頷きにくい。冗談抜きで店員に警察に訴えられそうだし。

マジでどうしよう?

「えっと、だな双葉。俺は……」

返事に悩んでいる時だった。

「クスツ……」

笑い声をしたので顔を上げると双葉は楽しそうに笑っていた。

「………双葉?」

「ふふつ。ごめんなさい。でも慌てている八幡先輩可愛かったです」

笑いながらそう言っているがもしかして……

「お前俺をからかったのか?」

そう聞くと双葉は頷く。この野郎、俺の純情を弄びやがって。しかし腑に落ちない点がある。

「でも何でいきなりからかったんだ?」

普段の双葉なら絶対にそんな冗談を言わない。だから何で双葉がからかったのか気になった。

「実は昨日加古さんに明日デートするって言ったら『だったら下着を

買うのに付き合ってくれて言ってみたら？比企谷君純情だからきつと可愛い反応が見れるわよ』と言われたので試してみました」

何してんですか加古さん？双葉に小悪魔属性を付けるつもりですか？俺小悪魔属性は弱点ですから勘弁してください。

溜息を吐いていると

「……もしかして怒ってますか？」

不安そうに見てくる。さっきの表情とはギャップがあって可愛い。「別に怒ってねーよ。ただ下着を買うのに付き合うのは勘弁してくれ、マジで」

それだけはマジで頼む。ボーダーの連中に見られたらガチでヤバい。二宮さんとかに見られたら死ぬ。

「大丈夫です。そ、その、私もまだ早いと思うので……」

どうやら冗談みたいなのでホッと息を吐く。良かった、冗談じゃなかったら全力で逃げた。

「なら良かった。というかそろそろ行こうぜ」

双葉と一緒にいるのは悪くないが本来の目的をするべきだ。

「あ、はいー」

そう言っ腕を絡めてくるので俺も腕を絡め駅に歩き出した。双葉とのデート、楽しみだぜ！

電車で二駅移動して大型ショッピングモールに到着した。でかいのはいいのだがでかすぎない？これ多分端から端まで移動すんのだけでも結構時間食うぞ。モール内に入ると休みの日だから結構人いる。ぼっちには辛い空間だな。

雑談しながらぶらぶらしていると

「八幡先輩、ここに入ってもいいですか？」

「ん？ああいいぞ」

双葉が示した場所は服屋だった。良かった。ランジェリーショップだったらマジで捕まってたぞ。

服屋に入ると双葉は早速服を手に取り始めた。それを暫く微笑ま

しくみていると

「八幡先輩、この2つだったらどっちがいいですか？」

見せてきたのは白いワンピースと水色のワンピースだった。うーん、どっちがいいんだ？両方似合うと思うが……

「白がいいな」

水色も悪くないが水色は清楚な人ってイメージだ。双葉は大人しいが元気な所もあるから白の方がいいと思った。

「そうですか。では白いワンピースにしますね」

「いいのか俺が決めたやつで？」

「はい。この2つから選ぶと決めたので」

「なるほど。じゃあレジに行くぞ」

そう言っレジに行くと直ぐに会計が出来た。値段は……5000円か。

財布を取り出した時だった。

「え?!私が出しますよ!」

慌てて言っているが何でだ?

「いやいや、今日のデート代は俺が全額出す約束だから気にするな」

「それはそうですけど……」

余り納得していない顔をしている双葉を見て頭をわしやわしやする。

「気にするな。それに歳下の彼女に奢らないのはアレだろ？」

そう言っ話を切り上げ財布から5000円札を取り出して店員に渡し、会計を済ませた。

店から出ると双葉は頭を下げてきた。

「ありがとうございます。大切にしますね」

「おう。んじや次何処に行く？」

「折角ですから八幡先輩も服を買ったらどうですか？」

「俺の?」

「はい。八幡先輩かっこいいですから服もかっこいいのにしたらどうでしょう?」

恋人にかっこいいと言われるのは嬉しいが……

「俺多分センスないぞ？」

着れば文句ないのが俺の motto だしな。強いて言うなら黒色が好きだけどこれ絶対に太刀川さんに影響されてるな。以前太刀川隊の隊服を着る事になった時内心、「かつけえー」と叫んだしな。まあ当時の俺は若干厨二病だったし。

「大丈夫ですよ。素材がいいですから少しかつこいい服を着るだけでも充分ですから」

あの一、双葉ちゃん。そう言ってくれるのは嬉しいけどそこまで言われると恥ずかしいんだが……

「わかったよ。折角だしお前が選んでくれよ」

「私ですか?!」

「ああ、お前が嫌じゃなかったら。少なくとも俺よりはセンスあるだろうし」

「は、はい！頑張ります」

双葉が了承したので服屋に入った。

服屋に入ると様々な色の服が売られていた。

「八幡先輩は何かこれがいいというのがありますか？」

「まあ、赤とか黄色みたいな派手なヤツは嫌だな」

俺には地味な色で充分だしな。

「でしたらこれはどうでしょうか？」

双葉が持ってきたのは深い蒼と黒色が混じったベストだった。

「何か色合いは風間隊みたいだな」

「まあそうですね。気に入らなかつたですか？」

「いや、割と気に入った。試着してくる」

そう言って試着室に入り着替える。

着替えて鏡を見る。ふーむ、悪くはないが主観的な意見だからな。

客観的な意見が欲しい。そう判断して試着室から出る。

「双葉どうだ？」

双葉に聞くと笑顔を見せてくる。

「はい。似合ってます。かつこいいです」

「マジで？じゃあこれにするわ」

「え？直ぐに決めていいんですか？」

「割と気に入ってるから大丈夫だ。それに恋人が選んでくれたモノだしな」

そう言っって着替えてレジに行く。

会計を済ませ店を出る。にしてもまさか俺が必要以上に服を買う事になるとはな……

「じゃあ双葉、次は何処に行きたい？」

「はい。実は行きたい場所があるんですけど……」

双葉はそう言っってマツプを指差す。指差す先はパフェやクレープで有名なスイーツ専門店だった。女性やカップル向けだから俺一人じゃ絶対に行かないが恋人がいるから今日は大丈夫だろう。

それにこの店のスイーツは美味いと評判で小町も絶賛していたから興味あつたし。

「いいぜ。俺も気になつたしな。行こうぜ」

双葉と腕を絡めて目的地へ向かい歩き出した。

スイーツ専門店に着くと直ぐに席に座る事が出来た。早速メニューを見ると美味しそうなスイーツの写真が大量にあつた。

「八幡先輩はどれにします？」

「正直悩んでる。このクレープかパフェのどっちかにするつもりだ」

俺が示したのはフルーツが盛りだくさんのクレープとチョコレート盛りだくさんのパフェだ。正直両方食いたいが流石にそれは多いからなあ。

そう思っっている時だった。

「でしたら八幡先輩はこっちのクレープを注文してください。私はこのパフェを頼むつもりですから少しずつ分けましょう」

なるほど。双葉も俺が食べたいパフェを頼むつもりだったようだ。

まあそれがベストな選択だろう。

「わかったよ。じゃあ俺はクレープを頼む」

そう言って店員を呼んで注文をする。店員は承って厨房へ行った。

待つ事10分した時だった。

「お待たせしました。ミックスフルーツクレープにジャンボチョコ
レートパフェでございます」

店員が頼んだ物を持ってきた。

「おおっ、美味そうだな」

「はい。後でそちらのクレープも一口くださいね」

「はいよ。じゃあいただきます」

「いただきます」

挨拶を交わして食べ始める。

「甘え……」

ただ一言、そう呟いた。クレープの生地とチョコクリームとフルーツがマツチしていてメチャクチャ美味しい。小町が良い店と言っただけの事はあるな。

「八幡先輩」

呼ばれて双葉を見ると笑顔でスプーンを差し出してくる。

「はい、あーん、です」

何で最後にですって敬語使ってたんだよ？別に敬語使わなくていいからね？

まあ双葉に食べさせられるのは慣れてるから問題ないな。

「んっ」

口を開けると双葉はスプーンを突っ込んできた。口の中はチョコレートの甘味で蹂躪された。甘い甘過ぎる。さっきのフルーツクレープより遥かに甘い。しかしそれがいい。

「っと、美味かった。ほれ。お返しだ」

そう言ってクレープを差し出すと双葉はクレープを口に入れては

むはむしている。何か小動物みたいで凄く可愛いんだけど」

「い、いきなり何を言ってるんですか?!」

双葉は真っ赤になってテンパっている。もしかして口に出していたか？ 恥ずかしいな。まあ事実だから撤回はしないけど。

「悪かったよ。でも可愛いと思ってるのは本当だ」

「ううっ……ありがとうございます」

照れながらも礼を言ってくる双葉を見て癒されながらクレープを食べるのを再開した。

暫く無言で食べ続けていると

「あの、八幡先輩、良かったらもう少し食べますか?」

双葉が唐突に口を開けてくる。確かにあのパフェは絶品だったからな。もう一口食べたい。

……いや、双葉にーんされたいからじゃないよ? ハチマンウソツカナイ。

「じゃあくれ」

そう返すと双葉は急に真っ赤になってモジモジし始めたがどうしたんだ?

疑問に思っていると、

「んっ……」

双葉はパフェにあったポツキーを啜えて俺に突き出してくる。俺はその意味を分かってしまった。え？マジで？いや、そりゃ出来るならやりたいけどさ……

「……いいのか？」

「……はい。そのこの前雑誌で恋人同士はポツキーゲームをするって……」

ポツキーゲーム

確かルールは、2人が向かい合って1本のポツキーの端を互いに食べ進んでいき、先に口を離れたほうが負けとなる。お互いが口を離さずに食べきった場合、その2人はキスをすることになる。

……だった気がする。

マジかよ。いや、俺も興味あるけどさ……。流石にそれは……

内心双葉にツツコミを入れている時だった。

「んっ……」

双葉はもう一回ポツキーを啜えてこちらに差し出している。拒否権はないようだ。仕方ない、覚悟を決めるか。

苦笑いしながら反対側を口にして食べ始める。双葉はポツキーの長さが半分くらいになると目を閉じた。

そしてどんどんポツキーがなくなり、遂に、

ちゅっ……

「んっ、ちゅ……」

俺と双葉の唇が重なった。既に何回もしているが双葉とキスをすると凄い気分が良くなってくる。この幸せは手放したくないな。

双葉との幸せを噛み締めていると

「ちゅ、くちゅ……」

双葉が舌を絡めてきたので驚きながらもこちらも舌を出して絡め合った。

5分ぐらいして唇を離すと双葉はトロンとした瞳で俺を見てくる。

「八幡先輩……愛しています」

その言葉を聞いた俺は愛おしく思い頭を優しく撫でる。こんな時間はずっと続いてくれるといいな。

そう思いながら双葉の頭を撫で続けた。

「死にたい」

「ううっ……」

現在、俺は暗い顔、双葉は真っ赤になっている。

理由だっ？

簡単な話だ。何で俺と双葉は店の中でポツキーゲームをした挙句にデーブキスをしたんだ？

頭を撫で終えて暫くしたら物凄い恥ずかしくなってしまった。マジで死にたい。

……まあ恥ずかしいとは思ったがしなきゃ良かったと後悔はしていない。双葉とのキスはあらゆる疲れを取り除く癒しの力があるしな。

「いつまでもこうしてるのもアレだし、そろそろ店を出ようぜ」

そう判断した俺は双葉に話しかける。すると双葉は真っ赤になりながらも謝ってくる。

「す、すみません。私があんな提案をした所為で……」

何か凄い申し訳なさそうな顔をしているがそんな必要はないからな？

「気にするな。その、何だ……嫌じゃなかったしな」

そう言っただけで会計をする為レジに向かった。今言った発言の所為で顔が熱くなり、その顔を双葉に見られたくなかった。

会計を済ませた頃には双葉もいつも通りの状態になっていた。

店を出て次はどこに行くか決めようとした時だった。

「あら？比企谷君に双葉？」

後ろから話しかけられたので振り向くと、

「どうもっす。加古さん」

そこには双葉の隊長の加古さんがいた。隣にはかなりの美人の人がいるが加古さんの友達か？

「2人はショッピングモールでデートしてたのね？」

「はい。加古さんは……」

「え？……ああ、私は友達と映画を見に来たの」

なるほどね。その隣の女性と映画を見に来た訳か。

「望、知り合い？」

すると隣の女性が加古さんに聞いてくる。

「ええ。そっちの女の子はボーダーの私のチームメイトで男の子の方はその彼氏なの」

「そうなんだ。そっちの彼もボーダーなの？」

「そうよ。A級1位太刀川隊の隊員よ」

「へえ、そんな凄いな」

そんな事を目の前で話しているが一応自己紹介はした方がいいのか？

「初めまして、黒江双葉です」

双葉はそう言って頭を下げる。それを見た俺はそれに続く。

「どうも、比企谷八幡っす」

俺と双葉が挨拶をするとその女性は笑いながら返事をする。

「私は雪ノ下陽乃。よろしくね」

……は？雪ノ下だと？

俺と双葉がキョトンとしていると雪ノ下さんは意外そうな顔で見
てくる。

「……あれ？どうしたの？」

そう言われて再起動する。

「いえ……、もしかして雪ノ下雪乃の……」

「雪乃ちゃんを知ってるんだ？うん、私は雪乃ちゃんの姉だよ」
マジかよ?!これがアレの姉だと?!全然似てないな!

初っ端から罵倒しないし、性格も全然違うし、本当に姉妹か?!

……しかも何か分からないが妹と違って不気味に感じる。勿論明確な理由はない。しかし何となく変な気分だ。

そう思っていると寒気を感じた。

寒気を感じた方向を見ると双葉は物凄い冷たい目で雪ノ下さんを見ている。この目はアレだ。職場見学の時に雪ノ下妹にキレた時と同じ目をしている。

「……双葉?」

加古さんは信じられないモノを見た様な顔をしている。加古さんのそんな顔を見るのは珍しいな。

「えーっと、私何かしたかな?」

雪ノ下さんも意外そうな顔で見ている。しかし双葉の眼光は微塵も衰えない。ヤバいな双葉の奴ぶち切れてるし。まずは落ち着かせるか。

「双葉、落ち着け」

そう言つて頭に軽くチョップをする。

「……八幡先輩」

「少し落ち着け。初対面の人に殺気をぶつけるな」

「……でもこの人は、あの女の……!」

「それはそうだ。だがな、だからと言って妹との因縁を姉のこの人にぶつけるのは筋が違うだろう?この人は無関係だから謝れ」

そう言うと双葉は納得はしていない様な顔をしているが素直に頭を下げる。

「……いきなり睨んだりしてすみませんでした」

雪ノ下さんは余り怒っていない様だが興味深そうに双葉と俺を見ている。

「別に怒ってないけど、君達雪乃ちゃんと何があつたか教えてくれな
いかな」

言葉だけなら緩やかな内容だが、この人、目が鋭いんですけど？怖
いな。

そう思いながら全てを話した。

「へえ、そんな事があつたんだ。雪乃ちゃんがごめんね」

結局全部話した。職場見学の時雪ノ下が俺に勝負を仕掛けた事、俺
がシカトしたら挑発した事、そして双葉がキレた事全部話した。

あの後引率の先生らは上層部に謝罪した。俺もその時呼ばれたが、
双葉が雪ノ下をしばいてスッキリしていたので特に大事にする気は
なかった。それを説明したら上層部も大事にする気はないみたい
だったのか、雪ノ下への注意を促して会議は終了した。

つーか何で家族のこの人が知らないんだ？

少し考えると答えが出た。

多分平塚先生が一枚噛んでるのだろう。あの人雪ノ下の事最良目
で見てるし。軽く注意して終わらせたのだろう。

「まあもう終わった事なんでどうでもいいです。俺達はデートの続き
をするので失礼します」

「あ、ちよつと待って。最後に聞きたいんだけど比企谷君は雪乃ちゃ
んと何か因縁でもあるの？でないといきなり挑発しないと思うけど」
「因縁？特にないですよ。強いて言うならあいつが所属している部活
に入れられそうになって拒絶したくらいです」

本当にそれだけだ。因縁というより向こうが突っかかってくるだ
けだしな。

「ふうん」

納得していない様な雪ノ下さんを見て何か寒気を感じた。何だこの人？妹より明るいのに遥かに恐ろしく感じるんだが……

何となくこの場にいたくない。そう判断した俺は加古さんに話しかける。

「んじや俺達はこれで。それと加古さん、純粋な双葉に色々吹き込まないでくださいね」

「あら？ごめんなさいね。それで双葉、比企谷君の反応はどうだったの？」

「はい、可愛かったです」

「そう。良かったわね」

2人で軽く笑っているが俺からすれば笑えないからな？

「可愛いって言わないでください。行くぞ双葉」

そう言つて双葉の手を引っ張り歩き出した。

後ろから感じる雪ノ下さんの視線から逃げる様に。

加古さん達から離れて双葉の手を離す。すると双葉は頭を下げた。きた。

「すみませんでした。八幡先輩の言う通りあの人を睨むのは間違ってますね」

「気にするな。反省してるならこの話は終わりだ。それより次は何処に行く？」

「え？うーん……」

双葉が悩んでる中雪ノ下さんの事を考える。

理由はないがあの人とは関わりたくない。ただ明るいだけの人にあの鋭い目つきは出せないからな。おそらくアレは本当の雪ノ下さんじゃない。それが正直怖い。

そして何となくだが、いずれまた何処かで会うと思う。

そんな事を考えながら何処に行くか悩んでる双葉を見つめ続けた。

あれから双葉と一緒に本屋やゲーセンに行って満足した俺は帰路についている。

双葉と手を繋いでいると双葉の家が見えた。

「あ、ここで大丈夫です。送ってくれてありがとうございます」

「そうか。じゃあまた明日な」

「はい。じゃあ最後に……」

そう言つて目を閉じてくる。はあ、またかよ……

「あんな双葉。偶には勘弁してくれ。毎回毎回緊張するんだが……」

「……ダメですか？嫌なら無理強いはしません……」

「わかった、わかったからその顔は止めろ」

悲しそうな双葉を見ると拒否が出来ない。そんな俺を考えると溜息が出てくる。

溜息を一つ吐いて双葉の肩を掴む。そして優しく双葉を引き寄せ
……

「んっ……」

双葉の唇を奪った。

そう、双葉と付き合つて以降別れの際は必ず俺が双葉にキスをする
ルールが出来た。双葉がこのルールを提案した時は真っ先に断つた

が双葉が涙目の上目遣いで見てきたので即座に撤回してしまった。
俺双葉に弱すぎだろ？

暫くキスを続け唇を離すと笑顔で

「おやすみなさい八幡先輩」

家に向かって歩き出した。俺は双葉が見えなくなるまで見送り見えなくなったのを確認して小町がいる我が家へ歩き出した。

比企谷八幡は妹や仲間、恋人と一緒に旅行へ行く事になった

夏休みに入りかなり暑くなってきた。暑いのは嫌だが学校が休みなのは最高だ。

そんな中俺達は何をしてるのかというと、

「だから沖縄にしようよ！」

「いっそハワイに行こうぜ！」

「待て槍バカ。パスポート持ってねえよ」

「どうか米屋はパスポートって知ってるか？」

「おいハッチ。俺を何だと思ってるんだ？」

「筋金入りのバカ」

「待てやコラ！」

「え？いずみん先輩、よねやん先輩ってバカじゃないの？」

「バカだろ？」

「バカだな」

「お前らなあゝ」

現在俺は太刀川隊作戦室にてA級3バカと一緒に夏休みの旅行の計画を立てている。……が、中々決定していない。

ちなみに俺は温泉でのんびり過ごして日頃の疲れを癒したいと言ったら、年寄りかっ！とか言われて反対された。解せぬ。

「大体俺達の休みが被ってるのは3日だけだぞ？たった3日だけハワイや沖縄に行って楽しいか？」

「「あつ……」」

俺がそう口にすると3人が黙った。この場にいるメンバーで休みが被っているのは3日だけだ。3日だけハワイや沖縄に行っても殆ど回れないだろう。

そんな事を考えながら色々なパンフレットや雑誌を読み漁るが中々良い場所が見つからない。

暫くの間雑誌を読んでいる時だった。

「あ、ここはどうだ？」

米屋が指差した部分を見て目を細める。

「……高原千葉村？何でまた？中学時代に行かなかったのか？」

米屋が示したのは高原千葉村だったが、俺は中学の時に行った。つーか米屋とは中学違うが中学時代行かなかったのか？

「あー、あるにはあったが俺の年は千葉村に行く時期に大規模侵攻があつて中止になつて行つてねーんだよ。だからこれ見て興味が湧いてな」

「槍バカは行つてねえのか？別に俺は構わないぜ」

「俺もいいよ。ハッチ先輩は？」

千葉村か……。昔行つたが碌な思い出はなかったな。またこいつらとなら楽しめるだろう。

「わかった。千葉村でいい」

「よし。じゃあ決まりだな」

出水が頷くと作戦室のドアが開いた。

「柚宇さんに黒江ちゃんじゃん。もう訓練の時間かよ？」

時計を見ると後少しで訓練の時間だった。

「はい。八幡先輩達は何を話していたのですか？」

「ん？8月に入って直ぐにある休みに行くつもり旅行計画。そんで千葉村に行く事になった」

「それっていつ何ですか？」

「確か3日から5日の二泊三日」

「そうなんですか」

そう言って双葉はメモ帳をパラパラ捲り暫くしてから顔を上げる。
「あの……その3日間はうちの隊も非番ですから私も行ってもいいですか？」

マジかよ?! 双葉も非番だと?!

「いいぜ。行こうぜ」

「うわ、即答……」

何か米屋が呆れているが無視だ。双葉も旅行に参加するとは実に楽しそうだ。

「もし良かったら柚宇さんも行きませんか？女子が黒江ちゃん1人つてのもアレですから」

「うくん、じゃあ私も行こうかな」

「出水、小町も呼んでいいか？」

「もちろんいいぜ」

「じゃあ双葉ちゃん。週末に小町ちゃんと一緒に水着を買いに行こうね」

「はい。よろしくお願いします」

「小町をよろしくお願いします」

「任せて。それで双葉ちゃんには比企谷君が喜びそうな水着を選んであげるね」

国近先輩がそう口にするのと口に含んでいたMAXコーヒを吹き出してしまった。いきなり何を言ってるんだよ?! 後3バカは笑うな!

「あ、あの国近先輩……。……よ、よろしくお願いします」

双葉! お前も真っ赤になって了承するな! こっちも顔が熱くなってきたわ!!

「ほくい。比企谷君も楽しみにしててね」

国近先輩は笑顔でこちらを見てくる。照れ臭くなった俺は視線を逸らす。すると3バカは

「「「ビュービュー」」」

とか言っているいい笑顔を見せてくる。ウゼエ。

「げほっ!!」

あまりにイラついたので米屋の腹に蹴りをいれて弾バカと迅バカを見る。

「……で、何がヒューヒューだ?」

「すみませんでした」

2人が頭を下げてくるので溜息を吐いてMAXコーヒを飲み干した。

何か米屋は「何で俺だけ蹴られたんだよ?!」とか喚いていたが俺はまだテメエが沢山の人がいる中で双葉との関係をバラした事を許してないからな?

呆れながら双葉との訓練を始める為立ち上がった。

訓練を終えて家に着くと小町が迎えてくれる。

「おかえり、お兄ちゃん」

笑顔で迎えてくれるとはやはり俺の妹は天使だ。

「ただいま。そっぴや小町、俺8月3日から二泊三日で千葉村行くんだけどお前も来るか?」

「千葉村? 誰が来るの?」

「俺、出水、国近先輩、緑川、米屋、双葉だな。他の連中は防衛任務だの夏期講習だの家族旅行で無理らしい」

「面白そう! 小町も行く!」

小町が頷くと小町の携帯が鳴り出した。小町がそれを見るとニヤニヤ笑いで俺を見てくる。

「今柚宇さんから連絡来たけど、週末に柚宇さんと双葉ちゃんと一緒に水着を買ってくるね。双葉ちゃんに可愛い水着選ばないとね」

「お前もそのネタだからかうな。俺は疲れたから寝る」

「うん。あ！最後に1つ！」

「何だよ？」

「うん。お兄ちゃんとしては双葉ちゃんが着る水着は可愛い系かセクシー系どっちが「それは双葉に任せる！」……あ、ちよつとお兄ちゃん?!」

小町の制止を振り切り二階へ逃げた。んなもん言わせるな馬鹿野郎。

……にしても双葉の水着か……

(いかんいかん！考え過ぎない方がいい！)

俺は煩惱を振り払うように首を振ってベッドに倒れこんだ

千葉村出発当日

小町と雑談をしながら集合場所の海浜幕張駅前に向かうと一番乗りではなかった。

「随分と早いなお前ら」

そこには3バカが既にいた。

「よーっすハッチ。小町ちゃんも久しぶりだな」

「あ、はい。お久しぶりです！いつも愚兄がお世話になってます」

愚兄って何だ愚兄って？

「待て小町。俺は寧ろいつも米屋の世話をしてるからな？」

「そうだな」

「まあハッチ先輩はいつも苦労してるね」

「お前は生意気だなあ緑川」

「痛い！痛いよよねやん先輩！」

米屋が緑川にヘッドロックをかけている。アレは痛いからな。荒船さんのなんてメチャクチャ痛いし。

そんな事を考えていると、

「おく、皆来てるね」

「おはようございます」

国近先輩と双葉がやってきた。これで全員集合か。

「んじゃ全員来たし行こうぜ！」

「行くなら離してよ！」

米屋が緑川にヘッドロックしたまま叫び緑川は苦しんでいる。憐れ緑川、強く生きろ。

海浜幕張駅を出てから30分、俺達は今東京駅に着いた。これから新幹線に乗って1時間ちよい経てば千葉村の最寄り駅に着く。

新幹線は指定席ではなく自由席だが幸い空いていたので簡単に座れた。

そんな中俺達は、

「よっしゃ！ハッチがババ引いた！」

「うっわ、最悪！引きたくないなあ！」

「おいバカ。テメエはバラすな」

「俺は緑川が引かなきゃ大丈夫だな」

呑気にババ抜きをしていた。クソツ、これで2回目のババだぞ。どんだけ運が悪いんだ？

「ところで千葉村ではどう過ごすんだ？」

「まあハイキングしたり球技したり川で泳いだりだろ？」

「おいハッチ。黒江ちゃんの水着見て興奮すんなよ。端から見たら口リコンに見えあぎや!!」

余計な一言を言った米屋に腹パンをして黙らせる。全くこいつは……

米屋の学習能力の低さに呆れていると

「双葉ちゃんの水着だけど多分比企谷君の好みだと思うよ」

前の座席でガールズトークをしていた国近先輩がそう言ってきた。

「そうなんすか？じゃあ楽しみにしときます」

「え?!ハッチ先輩が素直?!」

「嘘でしょお兄ちゃん?!」

「お前本当に比企谷か?!」

緑川、小町、出水か戦慄の声をあげているがお前ら俺の事何だと思ってるの？

「うるせえな、ほっとけ」

呆れていると双葉がひよつこりと出てきた。

「そ、その八幡先輩の好みはわかりませんが喜んでくれたら……嬉しいです」

真つ赤になりながらもそう言ってくる。クソ可愛いんだけど？マジで天使。

「大丈夫だ。多分喜ぶ」

つーか恋人と旅行に行く時点で喜んでるからな？これから3日、このメンバーで過ごす旅行が楽しみで仕方がない。

そんな事何だと考えながら緑川にトランプを向けた。頼むからババを引いてくれよ？

俺の願いが叶ったのか緑川はババを引いて物凄い悔しがっていた。ざまあみやがれ。

あれから1時間ちよい、最寄り駅に着いた俺達は電車から降りて駅を出ると風が気持ちよかった。

「うおつ、気持ちいいな!」

「自然も多いし良いね」

「山なんて久々に見たな」

「私と駿は分校にいたから珍しくないですけど」

「そうなの？双葉ちゃんに駿君？」

「あれ？小町ちゃんはハッチ先輩から聞いてないの？俺と双葉は昔山奥の分校にいたんだ」

「へエ〜、そうなんだ」

「まあお前と双葉はともかく俺らはあんまり三門市から出ないしな。山を近くで見る機会はないんだよ。……つとアレが千葉村行きバスだな」

見ると送迎バスが見えたのでそれに向けて歩き出した。

バスに乗る事数十分経ち漸く千葉村に着いた。

車を降りると草の匂いがして空気が上手い気がする。

「あー、疲れた」

「そうだね〜。まだ朝なのに疲れちゃった」

「そう言えば八幡先輩と出水先輩は中学時代に行ったんですよね？」

「まあな。まああの時は友達いなかったからクソつまんなかったけど」

「……前から思ってたんですけど、どうして八幡先輩ってボーダーだと友達がいるのに学校ではないんですか？」

「いない訳じゃねーよ。一応少ないけどいるからな」

戸塚とか戸塚とか戸塚とか。アレ？戸塚しかいないじゃん？まあいつか。

「とりあえず市民ロτζジに行って荷物を宿泊室に置くぞ」

「そうだな。ところで部屋割りは？」

「あ？普通に男女別々だろ。何だ出水、お前国近先輩と同じ部屋で泊まりたいのか？」

「そうなの出水君？」

国近先輩が悪戯じみた笑顔を見せると出水は焦りだした。

「バツ！違えよ！」

……あ？

「……出水、違うって事はお前、小町か双葉と同じ部屋で寝たいのか？」

だとしたら今日がお前の命日だ。小町と双葉に手を出してみろ。その瞬間アレを握ぐからな。

「そういう意味じゃねーよ！俺が言ってるのは一部屋何人かって話だよ！」

「何だそういう意味か。安心しろ。3人から5人入れる部屋を2つ頼んだから誰が1人ハブられるってのはないからな」

「わ、わかった。わかったからな」

出水が焦りながら喋っているのを尻目に市民ロτζジに向かって歩き出した。

暫く歩いているとワンボックスカーが近くにやってきた。一般客か？千葉村は公共施設だから安いし。案外隠れた穴場かもしれないな。

そう思っていると車のドアが開いて人が降りてくる。

そこで俺の時間が止まった。

車からは見知った顔がいた。向こうも俺をみて止まる。

「比企谷？」

「ヒツキー？」

「比企谷君？」

「八幡？」

そこには奉仕部の部員と顧問、そして天使がいた。何でここに？平塚先生がいるって事は奉仕部の活動か？何か面倒な予感が……

「ハツチ知り合いか？」

米屋が肩を揺する中、俺はあいつらと関わらない方法を考えている。理由としては明らかに面倒な予感しかしないからだ。

それに、

「……………」

物凄い冷たい眼をして雪ノ下を睨んでいる双葉に害がありそうだしな。

……とりあえず双葉、頼むからその眼はやめてくれ。ボーダー組もメチャクチャビビってるし。

比企谷八幡は面倒事を感じとり頭を痛める

暫くの間無言が続く中、由比ヶ浜が口を開ける。

「な、何でヒツキーがここにいるし?!」

そう言っ指をさしてくる。だからヒツキー言うな。そして指をさすな。

「俺は妹とボーダーの仲間と恋人と一緒に遊びに来ただけだ」

適当に返すと

「八幡!!」

天使が笑顔で近づいて来た。ヤバイ。久しぶりに見たが凄く可愛いな。

「よう戸塚。久しぶりだな。お前らは何しに来たんだ?」

「僕達は奉仕部のボランティアで来たんだ。久しぶりに八幡と会えて嬉しいよ!」

嬉しいだつて? ヤバイ俺も嬉しくなってきた。

内心笑っている時だった。

「痛つ!!」

背中に痛みを感じたので振り向くと双葉が俺の背中を抓っていた。

「いきなり何すんだよ?」

双葉にそう聞くと冷たい眼をして何も喋らない。お前その眼怖いからね?

「何考えてるの? ごみいちゃん?! 双葉ちゃんがいるのに他の女の子に手を出すなんて小町的にポイント低いよ!!」

ポイント低いって何だよ? つか他の連中もジト目で見てくる。今の話からしてこいつら俺が浮気していると思っっているみたいだ。

「勘違いするな。戸塚は男だ」

俺がそう返すと全員が固まった。

「……は? ハツチ今なんつった?」

米屋が驚きながらも口にする。

「だから戸塚は男だ。なあ戸塚？」

「あ、うん。僕……男の子です」

戸塚が照れながら返すと全員が絶句している。後ろで出水が「俺のトキメキを返してくれ！」とか言ってるが気持ちは良く分かる。俺も初めはトキメいたしな。

「マジか。それは悪かったな。……あ！俺はハッチの友人の「バカだ」うおいハッチ！せめて槍を付けろ！」

槍を付ければいいのかよ？

「比企谷のチームメイトの出水公平だ」

「あ、この前職場見学で見たランク戦凄いカッコ良かったよ！」

「お、おう。サンキューな」

出水の奴若干顔が赤くなってるぞ？まああんな笑顔で顔を近づけられたら仕方ないだろうな。

「どうも初めまして。お兄ちゃんの妹の比企谷小町です。いつも愚兄がお世話に「こいつらにはお世話になってないからな。後愚兄呼ばわりするな」えー」

お前は自己紹介の際に俺をdisらないと気が済まないのか？

「あ、初めまして。ヒッキーのクラスメイトの由比ヶ浜結衣」

「「ぶっ……」」

それを聞いた3バカは吹き出している。ムカつくので弾と槍の頭にアイアンクローをぶちかました。

「待て比企谷！俺達が悪かった！」

「頼むから離してくれ！」

そう言われて渋々離す。まったくこいつらは……
呆れていると

「あ、どうも。始めま、ん？」

小町は由比ヶ浜に挨拶をしようとするやと唐突に由比ヶ浜を見つめ、由比ヶ浜は目を逸らす。何だいきなり？

「どうした？小町顔見知りか？」

「んー、どっかで見た事があるような……どこで会ったっけ？」
「……………」

小町がうんうん唸っていると由比ヶ浜は苦い顔をしている。何があつたんだ？まあ思い出せないって事は大した事じゃないだろう。そう思っていると

「もういいかしら？始めまして。雪ノ下雪乃です。比企谷君の……何かしら？クラスメートでもないし、友達でもないし、誠に遺憾ながら、知り合い？」

雪ノ下が割ってくる。一々喧嘩を売る奴だな。

「知り合いじゃねーよ。お前と知り合いなんて真つ平ごめんだ」

「そうね。あなたみたいなのロクデナシと知り合いなんてごめんだわ」
本当にこいつはアレだな。場の空気を悪くする天才だな。

そう思っている時だった。

「どつちがロクデナシなんだか……」

隣にいる双葉がボソツと呟く。それが聞こえたのか雪ノ下は双葉を睨む。

「……どういう意味かしら？」

すると双葉も冷たい眼をして迎え撃つ。

「言葉通りです。あれだけ八幡先輩の弟子の私に負けたのに、未だに八幡先輩の事を悪く言うあなたをロクデナシ呼ばわりする事は変ですか？」

双葉の発言を聞いて雪ノ下は更に眼を細める。

「ねえ、ハッチ先輩。負けたって何の話？」

緑川は俺のズボンを引っ張って聞いてくる。他の連中も興味深そうに見てくる。

「後でな」

「えー」

緑川の不満そうな声を聞いていると双葉が更に攻める。

「もしかして自分がした問題が家族に知られてないから八幡先輩を悪く言っても大丈夫だと思っっているんですか？」

双葉がそう口になると雪ノ下は鋭い眼から驚いた眼に変わる。と
いうか雪ノ下の反応からして雪ノ下さんは家に報告してないみたいだ。それを無視して双葉は続ける。

「随分と前ですが貴女の姉に会いましたが、その際あの人は貴女の愚行を知らないと言っていましたよ。それ以前に普通アレだけの事をしたのによく保護者の耳に入りませんね」

ねえ、双葉。少し落ち着いて。お願いだから。皆ビビってるし、緑川なんて涙目だよ？

すると平塚先生が口を挟む。

「それは……ボーダーも大事にしないと云ったし、雪ノ下も反省してると思ってた……」

「反省？反省してるなら八幡先輩に謝罪をしたんですか？まあいきなり八幡先輩を悪く言うんですからしてないのは明白ですけど」

平塚先生は苦い顔で黙る。まあ普通ならその場で謝罪をするしな。

しかしそろそろ双葉を止めた方がいいな。ボーダー組やボラントイア組の空気も悪くなってきたし。

「おい双葉。その辺りにしとけ」

俺がそう口にするると双葉は不満そうな顔で見ってくる。

「ですが……あれだけ八幡先輩を悪く言っておきな……！」

「いいから落ち着け。俺達は何をしに来たか忘れたか？」

「……え？それは旅行ですけど？」

「折角の旅行なんだ。下らない揉め事をして気分が悪くなったら嫌だしな。それに多分お前はこいつとはこれ以降関わらないだろうしな」
多分じゃなくて絶対だけどな。

実は俺、大事にはしなくて構わないと言ったが発言に問題があつてイラついたから、雪ノ下をボーダーに入れないでくれと頼んだら了承してくれた。今後雪ノ下がボーダー入りを志願してもトリオン不足って事で落とされるな。

「……わかりました。まだ言いたい事はありますが終わりにしますね」

双葉が渋々ながら了承したのを確認して1つ頷きボラントイア組を見る。

「んじや、俺らは荷物を置きに行かなきゃいけないのでこれで失礼します」

「待ちたまえ、比企谷」

歩き出そうとしたら平塚先生に呼び止められる。

「何すか？」

「折角会ったんだ。君も林間学校サポートスタッフとして働きたまえ」

林間学校のサポートスタッフとして来たのか。そういや俺ん時も大学生がサポートスタッフとして来てたな。

「お断りします。金にならない仕事はしない主義です。……行くぞお前ら」

そう言っただけで歩き出した。後ろでは由比ヶ浜や平塚先生が何か言ってるがどうでもいい。

1秒でもこの場に居たくない俺は早歩きで歩き出した。

「ねえねえハッチ先輩。さっきの負けたとかどうこう言ってたのって何？」

ある程度歩いていると緑川が聞いてくる。

「あ！それは俺も気になる！」

「あの黒髪の女の子と比企谷に何かあったんだよ？」

米屋と出水も聞いてくる。見ると双葉は不機嫌な顔をして、小町と国近先輩は興味深そうな顔をしている。

仕方ない話すか……

「実はだな……」

「うっわ！身の程知らず！」

緑川が叫ぶ。お前随分と遠慮ないな。

あれから約3分、職場見学で雪ノ下にランク戦しろと命令された事、戦う理由はないと断った事、そしたら俺より優れている事を証明する為と言った事全て話した。

「それを聞いた私が苛立ったので八幡先輩の代わりにランク戦をして完膚なきまで叩きました」

そう。あの時の双葉は超怖かった。ビビりまくったし。

「事情はわかったが、ハッチお前あの女子と因縁でもあるのか？あの口の悪さは明らかに何かあったとしか思えないぞ」

「お前の疑問はもつともだがあいつとの因縁はねーんだよ」

「マジかよ?!それであるの口の悪さかよ?!」

出水はビビってるが同感だ。あんな奴がボランティアなんて無理だろ？

「おっと、市民ロツジが見えてきたな」

「ところで荷物を置いたらどうするの〜？」

「そうですね……。俺が千葉村行った時はオリエンテリングとか川遊びくらいでしたね。するとしたら今の2つやハイキング、ゴルフなどの球技あたりですね」

「俺ん時はそれプラス肝試しやキャンプファイアーもやったぜ」

「なあハッチ。オリエンテリングって何だ？」

「オリエンテリングってのは地図とコンパスを使ってフィールドに

設置されたポイントを指定された順序で通過して、ゴールまでの所要時間を競う野外スポーツの一種だ。元々は何処かの軍が訓練として始めたんだった気がする」

「つまりボーダーの探知追跡訓練みたいなやつか？」

「まあ当たらずとも遠からずだな。つても今比企谷が説明したのはあくまでスポーツとしてだ。俺が中学時代でやったのは数人のグループで地図上に書かれたチェックポイントのクイズに答えるレクリエーションみたいだったな」

「出水の学校でもか？俺ん時もそうだったぜ」

それで俺がやったオリエンテーリングなんてグループのメンバーがアホばっかで解答がボロボロだった。俺が正解を言っても採用されず、最終的にはみんな「あーあ……」みたいな空気になったし。

昔の黒歴史について思い出しているとワンボックスカーがやって来て近くに止まった。人を降ろすと車は去っていった。こっちにやって来たのは男女4人組。そのうちの1人は手を上げてきた。

「や、ヒキタニくん」

そこにいたのはクラスのリーダー葉山だった。後ろからは三浦、金髪、メガネの女子がいた。

「あ？お前らもボランティアか？平塚先生ならあっちにいるぞ」

さつきまで俺達がいいた場所を指差す。

「ん？君は違うのか？」

「ああ、俺達は旅行に来たんだ。お前らと会ったのは完全な偶然なんだよ」

「そうなのか？こんな場所で奇遇だな」

「そうかもな。つと俺達は荷物を置きに行くからじゃあな」

適当に挨拶をして葉山達の横を通り過ぎた。

「ハッチ知り合い？」

「同じクラスの奴等だ」

「ふーん。でもハッチ先輩があんな派手なグループの人と知り合いな

んて意外だね」

まあ否定はしないがな……

そうこうしている内に市民ロッジに着いた。先ずはロビーに行つて鍵を借りて宿泊室に荷物を置いてからだ。

今日から二泊三日、願わくば楽しい旅行になる事を祈る。

頼むから奉仕部連中は絡んでこないでくれ。いや、マジで。

あれ？これフラグじゃね？

比企谷八幡は色々楽しみ最後の最後で嫌な予感に襲われる。

「ふぉー！疲れたあ！」

「畳の上は最高だな！」

「お前ら……まだ着いたばかりか？」

呆れている俺の視線の先では弾バカと槍バカが宿泊室の畳の上で寝転がっている。本当に楽しそうだな。

チエックインして女子と別れ部屋に入った瞬間、こうなった。

「よねやん先輩もいずみ先輩もジジ臭いよ。これから何して遊ぶか決めないの？」

「んだと緑川！」

出水がキレるが俺も同意見だからな？

「まあ緑川に同感だな。行く場所決めて行動に移そうぜ」

「あ！じゃあハッチがさつき言ってたオリエンテーションやろうぜ！」

「オリエンターリングだバカ。何で遊びに来てまでオリエンテーションを受けなきゃいけないんだよ？」

「……か何のオリエンテーションって話だからね？」

「あ、悪い悪い」

「……まあいい。じゃあ俺はフロントに行つて予約してくる」

「よろしく」

「俺ら寝てるからハッチよろ！」

「ハッチ先輩、俺も行つていい？」

「別に構わない。つたく中2の緑川がこうなのに、このものぐさコンビは……」

「いやいや、比企谷（ハッチ）にもものぐさ呼ばわりされたくないんだが」

うわ、こいつらハモリやがったな。内心文句を言っている

「だってハッチ働いたら負けつてよく言つてんじゃん」

「将来の夢は専業主夫だしな」

「ハッチ先輩専業主夫志望なんだ……」

緑川は呆れている。まあ高校生の将来の夢で専業主夫は珍しいかもな。

しかし訂正を要求しなきゃいけない。

「あ、それなんだが、俺、専業主夫志望は止めたんだ」

俺がそう言うのとゴロゴロ転がっていた出水と米屋がピタリと止まって俺の方を見てくる。

「……は？」

「比企谷、お前今何て言った？」

2人の顔はキョトンとしている。どんだけありえないと思ってるんだ？

「だから専業主夫志望は止めたんだよ」

改めてそう口にすると2人はお互いの顔を見合わせてもう一度俺を見てくる。

そして……

「はああああああああああ?!」

大声で叫び出した。煩いな。余りの煩さに俺と緑川は耳を押さえ
る。

暫くして耳から手を外すと2人が起き上がり詰め寄ってくる。

「どうしたんだよ?!七夕や初詣で専業主夫になりたいと願っていたお
前が急に目指すのを止めるなんて?!」

「いや待て。お前本当に比企谷か?!専業主夫志望じゃない比企谷なん
て比企谷じゃないぞ!!」

「お前ら随分好き勝手言ってくるな」

専業主夫志望じゃない比企谷は比企谷じゃないって何だよ?完全
にヤバい人間だからねそれ?

「で、何で比企谷は専業主夫志望を止めたんだ?」

「あーそれは俺も知りたい!教えろハッチ!」

「絶対嫌だ」

何せ理由は双葉が家庭に入りたいと言ったからだ。そんな事を
言ったら間違いなくからかわれるのが目に見える。正面ではバカ2
人がブーイングしているがこれだけは絶対に言えないからな?

そう思っていると

「もしかして双葉が主婦になるから?」

緑川がそう口にする俺は固まった。ビンゴ、ビンゴだよ!何でわ

かったんだよ?!普段はバカなのに今回は何でそんなに頭がキレるんだよ?!

「マジかハッチ?!」

米屋が聞いてくる。隣では出水も興味深そうに頷いているが、急いで否定をしなきゃいけない怪しまれる。

そう判断して口を開ける。

「ち、違いまちゆよ」

噛んだ、噛んでしまった。俺のバカ野郎!!

自分自身にキレていると目の前の3バカがニヤニヤしてくる。

「二ほうほう」

そう言つて頷いてくる3人の顔面に拳を叩き込みたいな。

「いやー、まさかあのハッチが専業主夫志望を止める理由が黒江ちゃんとはなあ」

「まあ良い方向に進んでるっぽいし良い事だろ?」

「どうかハッチ先輩の専業主夫志望は間違ってるよ」

「うるせえなほっとけ。つーかお前ら起きたんだしロビーに行くぞ」

俺は逃げるように廊下に出ると、ちょうど同じタイミングで女子組も出てきた。

「おー、比企谷君達はやりたい物決まったのかな?」

「米屋がオリエンテーリングをやりたいと言っていましたね。そっちはどうですか？」

「私達はそのオリエンテーリングと色々な球技をやりたいって方針になったよ」

「でしたら午前中に一致しているオリエンテーリングをやって、午後には球技をするのはどうでしょう？」

「うんいいよ。小町ちゃんと双葉ちゃんもそれでいいかな？」

「小町はそれでいいですよ」

「私も大丈夫です」

「んじや決定って事で。今からロビーに行きましょう」

「そうだね。……あ、他の3人も来たね」

後ろを見ると3バカも部屋から出てきたので全員でロビーに向かって歩き出した。

「申し訳ございません。オリエンテーリングに必要なコンパスが現在団体に貸し出しておりまして、午前中はご利用できません」

あー、もしかしてアレか。総武の連中がボランテニアとして参加している林間学校で使われてるのか？

「……だよ。じゃあ球技にするがどれにする？」

「うーん、じゃあテニスしてからゴルフやろうぜ」

「出水はこう言ってるがそれでいいか？」

全員が頷くのでスタッフにテニスコートのコートを1時間使用申請した。ボールとラケットを借りてテニスコートへ歩き出した。

テニスを初めて20分、俺は今出水と組んで米屋、国近先輩コンビとダブルスをしているが、

「だーっ!!何でハッチこんなに上手いんだよ?!

「はあ、はあ、強過ぎだよ」

圧倒的差で勝っている。こちらはまだ1ゲームも落としていない。

「はっはっはっ」

ドヤ顔で笑っていると出水に小突かれる。

「マジで強いな!お前経験者?」

「うーん、一応経験者?」

「いや何で疑問系?」

「いや学校で昼休みに戸塚とテニスはしてるが部活には所属してないから経験者と言えるか判断がつかない」

葉山、三浦コンビと試合をして以降昼休みは毎日戸塚とテニスをしているからな。かなり実力はついていていると思う。

「戸塚ってあのさっきの可愛い奴だよな?」

「そうそう、俺の三大天使の一角」

あの純粹無垢な笑顔を見るとみるみる疲れが取れてくる。

「……ちなみに残りの2人は?」

「小町と双葉」

「だよな……。後今思ったんだが、知らない人からすればお前ってシスコン、ロリコン、男の娘好きって事でかなり危ないぞ」

「ぐっ……」

確かにそうだな。妹を溺愛していて、恋人は中学生になったばかりの12歳、男の娘にトキメキを感じている。

結論、明らかに犯罪の匂いがします。

「……そうだな。余り表に出さないよう気をつける」

「そうしろそうしろ。……っと、次は柚宇さんのサーブか」

そう言つて出水は国近先輩にボールを渡す。国近先輩はわたわたしながらもボールを掴み、

「え〜い」

のんびりした口調でサーブを放つ。その口調に合った遅いサーブだ。今は俺が前にいるが、後ろにいる出水なら簡単に打ち返せるだろう。

そう思い後ろを軽く見ると何故か出水はスルーしていた。

「15-0!」

小町がそう叫び出水は再起動した。何だ?この暑さで見逃したのか?

「出水、大丈夫か?」

「へ?!あ、ああ!すまない!」

「いや別に怒つてはないが顔が赤いぞ。暑いなら休むか?」

「いや暑さが原因じゃないんだ!」

「は?」

「い、いや何でもない!!それより前に行け!」

出水がそう言つてましたね前に押してくるので前方に進む。まあ次こそは大丈夫だろう。

そう思い国近先輩を見るとボールを掴んでいたので構えをとる。

「え〜い」

緩い声で再び緩いサーブがくる。やっぱり国近先輩は余り運動神経が良くないようだな。

そう思い後ろを見ると何故か出水は再びスルーしていた。何だあいつ?」

「30-0!」

小町がそう言つると同時に出水に詰め寄る。

「やっぱお前体調悪いだろ?無理しないでコートから出ろ」

「いや体調は悪くねーよ」

「じゃあ何であんな緩いサーブを2球もスルーすんだよ?変な方向に打つならともかくスルーするのは異常だぞ?」

そう聞くと出水は更に顔を赤くして口を開ける。

「だったら柚宇さんがサーブを打つ時、柚宇さんをよく見てみな」
「……は？まあわかった」

国近先輩をよく見ろだと？よくわからんが言われた通り国近先輩を見る。それと同時に国近先輩の3球目のサーブが放たれる。

「え〜い」

緩い声で再びサーブが打たれる。

……こ、これは?!

絶句していると出水は漸く打ち返すが、思いつきり高く打ち上げだ。明らかにアウトだな。

「40-0!」

そう言われながら出水の方に歩く。

「……出水、俺が悪かった。アレは仕方ない」

「だろ?にしても、……デカくね?」

「……ああ、まさかあんなに揺れるとは……」

そう、国近先輩がサーブをする際、あの2つのエベレストが大きく揺れ動いているのだ。参ったな。正直目が離せない。意識して視線を上によらないと自然と目が引き寄せられてしまう。これが万乳引力の法則か……。

そんな事をしじみみ考えている時だった。

ゾクリ……

急な寒気を感じたので周りを見渡す。

すると双葉が冷たい眼で俺を見ていた。ヤバい!もしかして興奮しているのがバレたか?!何かさつきまで暑かったのに今は凄く寒いんですけど……

「……比企谷？大丈夫か？顔が青いぞ？」

出水が心配そうに聞いてくるので慌てて首を振る。

「だ、大丈夫だ。それより国近先輩のサーブはまだあるから気を引き締めるぞ」

出水の返事を聞かずに前に行く。視線は米屋の方を向いて国近先輩を視界に入らないように心がける。

「えいや〜」

国近先輩の緩いサーブを打ってくる。国近先輩を見ずにボールだけ見ると出水は再び変な方向に打っている。これで1ゲーム落としたな。

「悪い、比企谷」

「気にするな。国近先輩にサーブ権が来る前に終らせるぞ」

そう言つて俺がボールを持つ。次は俺のサーブ権だ。速攻でカタをつける。

そう判断してボールを投げて力の限りサーブを打つ。

結果、俺達は国近先輩にサーブ権が来る前に勝つ事が出来たのでホッとした。試合を終えてコートから出ると米屋が話しかけてくる。「くっそ〜。負けたぜ！〜ところで何で弾バカは途中でミスしまくったんだ？」

まああれだけの失態をかましたら聞くよな。

「いや、アレだ。暑くてボーツとしちまって……」

「ふーん。暑いんだし水分補給はしとけよ」

どうやら米屋は納得したみたいなので安堵の息を吐く。

「んじや次は誰が試合を」……八幡先輩」……何だ双葉？」

俺のセリフを遮り双葉は俺に近づいてくる。その眼の冷たさに周りもビビっている。双葉は周りを気にしないかのように口を開ける。

「お話がありますので付いてきてください」

「……はい」

「では行きましょう。それと駿、私は今から八幡先輩とお話があるから小町さんと試合をしてて」

「……あ、うん。じゃ、じゃあ小町ちゃん、やろつか？」

「そ、そうだね。じゃあ2人ともごゆっくり。……骨は拾ってあげるね」

小町は俺の横を通り過ぎる時に小さい声でそう言ってくるが死なないからね？

現実逃避しながら歩き出した。

テニスコートから200メートルくらい離れた林に着いた所で双葉の足が止まった。そして冷たい眼を向けながら口を開ける。

「呼ばれた理由は知っていますね」

「はい。わかっています。国近先輩相手に鼻の下をのばしたからです」

それ以外考えにくい。つか出水があんな事を言わなかったら怒られないで済んだのに。

「分かっているみたいですね。……それで何か言い訳はありますか？」

双葉は怒っている。こういう時は誠心誠意を込めて謝るべきだ。

「いや、言い訳はない。お前という恋人がいるにもかかわらず……、本当に済まなかった」

そう言つて頭を下げる。もしも許してくれないなら土下座も視野に入れてみる。

「……八幡先輩は卑怯です。好きな人に頭を下げられたら強く言えませんよ」

双葉がブツブツ言っているが別に狙ってないからね？

暫くの間頭を下げ続けていると頭上から溜息が聞こえ、

「……頭を上げてください」

そう言つて頭を上げると冷たい眼はしていないがジト目で見てい

る。「許してあげますから1つだけ条件を守ってください」

「何だよ？俺が出来る事なら構わない」

そう返すと双葉の顔はほんのりと赤くなる。このタイミングで赤くなるって事はまさかのキスか？キスなら大歓迎だが。というかキスにしてください。

しかし俺の予想は外れた。

「そ、その、後で2人きりで散歩してください」

「散歩？別に構わないが何で散歩？」

「皆と過ごす時間は本当に楽しいです。……でも八幡先輩と2人きりの時間も少しは欲しいです」

そう言つて俯く双葉を見て苦笑が湧いてくる。本当に可愛い恋人だ。

そう思いながら双葉の頭を撫でる。

「わかったよ。実は俺もお前と2人きりで過ごすの少し期待してたし」

「そ、そうなんですか？嬉しいです」

顔を上げて頬を染めた双葉の頭を俺は暫くの間撫で続けた。

頭を撫でること5分、頭から手を離すと双葉は俺の手を握ってくる。

「では戻りましょう。それと次からはむやみに鼻の下をのばさないでくださいね」

「わかっている。済まなかった」

「わかっているなら話は終わりです。行きましょう」

そう言つて双葉は俺を引つ張るので俺は転ばないように早歩きで双葉に続いた。

戻ってきた時に試合を見ていた米屋と出水と国近先輩が俺と双葉が手を繋いでいるのを見てニヤニヤしてきた。ムカついたので出水をしばき倒した。元はと言えば出水があんな事を言わなかったら鼻の下をのばさずに済んだんだしな。

あれから2時間、テニスやゴルフをやつてひと汗かいた俺達は、現在食堂にいる。

頼んだモノは全員カレーだった。何かこういう場所で飯を食うならカレーがバーベキューだろう。

カレーは相手にハフハフしている中、小町が口を開ける。

「そういえばお兄ちゃんと双葉ちゃんはさつき何を話したの？話す前

は双葉ちゃん怒ってたけど、帰ってきた時は手を繋いでいて楽しそうだったよね？」

小町がそう口にするると双葉と出水を除いた3人が詰め寄ってくる。出水は理由を知ってるから引き攣った笑みを浮かべている。

「確かに気になるね〜」

「ハツチ先輩、何で何で?!」

「そうそう。帰ってきたらラブラブになってたしビビったぜ！」

「別に何でもねーよ。冷めるからさっさと食え」

適当に手を払い食事を再開する。3人はちえー、とか言いつつ食事を再開する。双葉を見ると若干顔が赤くなっている。まあ話した内容は2人きりで散歩する事だから知られたら絶対にからかわれるのは間違いないしな。特に米屋にバレたらヤバすぎる。

そう思いながらカレーを食べるのを再開した。

食事を済ませて次はオリエンテーリングだ。ロビーに行くとは貸し出しされていたコンパスは返却されていた。まあ俺達がやるのは山の中を回り、チェックポイントのクイズに答えその正解数を競う簡易版だ。

だが……………

「だからこつちで正解だろ?!」

「いや、こつちだー！」

「ちよつと待ってよー！それ以前にここ目指してるチェックポイントじゃないよー！地図の見間違いだよー！」

「マジか緑川……………」

と色々トラブっている。ボーダー隊員としてリーダーに慣れてしまったのか、紙の地図とコンパスの扱いに手こずっている。

そして米屋、そのなぞなぞは出水が合ってるからな？

「とりあえず正しいチェックポイントに行きましょう！」

小町がそう口にするると3バカは渋々ながら喧嘩を止めて正しいチェックポイントへ向けて歩き出した。

暫く歩いている時だった。

「おっ、カレーの匂いがするな」

米屋がそう言ったので匂いを嗅いでみる。するとカレーのルーの匂いが鼻を刺激する。

「おっ、いい匂いだね。カレーが食べたくなってきたな」

「いや、国近先輩。さっき食べましたよ？」

国近先輩を呆れながら見ていると、

「お！あれ見ろよ！」

言われた方向を見てみると炊事場があり、そこで沢山の小学生が見えた。

「やっぱり学校の行事で千葉村行くとカレーを作るんだな」

出水の言う通り、俺の時もカレーを作ったな。まあ碌な思い出じやなかったけど。

「あ！さっきのお兄ちゃん知り合いもいるよ!!」

見ると炊事場からチラリと葉山と三浦、戸塚が見えた。

「ふーん、カレー作る手伝いもあるんだ。ご苦労な事だ」

「そういえば比企谷君はさっき参加しろって言われたね」

「ん？あ、はい。つても俺は思い出作りをする為に来たんです。ボランティアをしに来たわけじゃないですよ」

「いや、お前さっき金にならない仕事はしないって言ってたけどそっちが本音だろ？」

出水が呆れながら言うてくるが両方本音だ。金にならない仕事はしたくないし、こいつらとの旅行とボランティアだったら前者を取る。両方俺の本心だ。

「そもそも事前に頼んだならともかく、偶然会っただけでボランティアを手伝えって言う方がおかしいです」

双葉はツンツンしながら言ってくる。他の連中は双葉がまたキレるのか?、と若干ビビっているが、雪ノ下と会わなければキレないだろう。

そう思いながら炊事場を見ると少し離れたところで雪ノ下と由比ヶ浜が1人の小学生と話しているのが見えた。何やってんだが? まあどうせ面倒な事だろうけど。

それより双葉が雪ノ下を視界に入れたら間違いなく不機嫌になるだろうから急いでここから離れる事が最優先だ。

「まあそうだな。それより立ち止まると汗が出てくるから早く次のチェックポイントに行こうぜ」

「比企谷の言う通りだな。急ごうぜ」

「よっしゃ! 弾バカ! 次のチェックポイントまで競争な!」

言うや否や米屋は走り出す。

「あ! 待て槍バカ!」

そうやって出水も走り出す。お前ら元気だな。

残ったメンバーはそんな2人を見て苦笑しながら歩き出した。

結局競争の結果は米屋が再び地図の見間違いをしたので出水が勝ったが、あの時の出水の顔は本当にいやらしかった。

オリエンテーリングも無事終わり市民ロτζジに戻ると既に夕方になっていて夕日が綺麗だ。

コンパスを返却して食堂に行くと事前に予約していた料理が目の前に現れる。

折角だから珍しいモノが食いたいと思い馬肉や鹿肉を食うが中々美味い。1日の疲れは肉を取り回復させよう。そんな事を考えながら肉を食っていると3バカも似たように自分が注文した料理をがついている。何か女子組は微笑ましく見ているが若干恥ずかしいな。

「ふうー、ぐちそうさま」

「「「「ぐちそうさま」」」」」

米屋の挨拶に全員が続いた。

「食後はどうする?」

「さつきパンフレットを見たら卓球が出来るって書いてあったよ」

「柚宇さんが言った通り卓球にするか?」

「ちよつと待ってよいずみ先輩!俺まだお腹いっぱいだよ!」

「卓球はお風呂から出てからが良いと思います」

「小町も双葉ちゃんに賛成です!ですから部屋で少し休んでからお風呂に行くのはどうでしょう?」

「じゃあ決定だな。ハッチもそれでいいか?」

米屋に言われると全員が俺を見てくる。さて、どうしようか?

「うーん、卓球を風呂の後にやるのは賛成だな。でも、悪いが俺は少し散歩がしたいから部屋にはいなくていいか?」

後で隙を見て双葉を誘う。そうすりゃ双葉との約束を守れるな。

そう思った時だった。

「もしかして黒江ちゃんと散歩するの?」

出水がいきなり核心を突いてきて身体が硬直してしまった。隣では双葉が

「……あう」

可愛い声を出して顔を俯かせる。真っ赤になっていて可愛いです。周りを見ると全員がニヤニヤしている。

「そっか。じゃあ仕方ないね。2人ともごゆっくり」

「いや待て。お前ら絶対に尾行しそうだしやめとく」

「大丈夫だよお兄ちゃん!双葉ちゃんとの2人きりの時間は小町が邪魔させないから!」

そう言つて小町は米屋と出水を見ている。小町ちゃん、目が笑つてないですよ?」

「わ、わかった。尾行はしないからその目は止めてくれ」

出水がそう言うのと小町は大人しくなったので安堵の息を吐いた。よかった、あんな目をした小町は見たくないしな。

高原の夜は夏とはいえかなり涼しく夜風が気持ちいい。まだ真つ暗ではないが時計は7時を回っている。

現在、俺は双葉と2人きりで散歩している。小町のお陰で尾行はない。不安だから念の為何度か確認したが尾行はされてない。

後の問題は、

「双葉？近いんだけど？」

双葉が俺の腕にくっついていている事だけだ。凄いい匂いが鼻腔をくすぐるし、腕には僅かな膨らみが当たっている。ヤバい理性の壁が崩れてきた。

「……ダメですか？」

上目遣いで見てくる双葉を見て更に興奮してくる。しかも無自覚だからタチが悪い。

対策として舌を噛み理性の壁の強度を高めた。

「大丈夫だ。……お、川だぜ」

見ると綺麗な水が流れている川が見えた。

「……綺麗ですね。明日が楽しみです」

「そうだな。明日も楽しもうぜ」

今日はかなり満足したからな。明日も満足して最高の旅行にした
いものだ。

「はい、……私が買った水着、八幡先輩に喜んで欲しいです」

真っ赤になりながらもそう言うてくる双葉を見て俺も真っ赤に
なってきた。

「そ、そうか」

「……はい」

お互い口数が少なくなり見つめ合っている状態となっている。こ
んな沈黙はくすぐったくて苦手だ。

そう思った時だった。

「んっ……」

双葉が無言で唇を突き出してきた。……マジですか？

俺は引き攣った笑みを浮かべて双葉の両肩を掴み、

ちゅ……

「んっ……」

優しく双葉の唇にキスをする。双葉は真っ赤になりながらも拒絶
せずに俺の首に腕を絡め、キスの雨を降らせてくる。やっぱり疲れた
時に双葉のキスは癒されるな。

一旦休憩と唇を離すと双葉はトロンとした表情で見ってくる。その
表情を見てドキドキしていると、

「……もつと、キスしてください」

おねだりをしてくる。甘えん坊な奴だな。俺は苦笑して双葉とのキスを再開した。

「20分近くキスをするると双葉は満足した表情で俺から離れた。
「もういいか？」

「はい。満足しました。そろそろ散歩に戻りましょう」

そう言つて腕を絡めて歩き出したので俺も足を速めた。さつきまでは腕を絡めてドキドキしていたがあれだけキスをしたお陰か今は余りドキドキしていない。その事に安堵しながら歩き出した。

暫くの間歩き続けているときつきまで小学生がカレーを作つていた炊事場に見えてきた。

「八幡先輩、少し寄つてみていいですか？」

「もちろんだ。余り見たことないのか？」

「はい。興味があります」

双葉が興味があるなら付き合うだけだ。そう判断して炊事場に足を運んだ。どうせ誰もいないだろうしな。

炊事場に着くと足が止まった。何であいつらがまだ居るんだよ？
正面には総武の連中と平塚先生がいた。隣を見ると双葉も呆気にとられている。

暫く呆然としていると向こうも俺らに気付いたようだ。

葉山グループは意外そうな顔で俺らを見ている。戸塚は笑顔で手を振ってきた。嗚呼、やはり戸塚は天使だ。

しかし雪ノ下はこちらを蔑んだ瞳で見えてきて双葉が睨み返している。こいつらが仲良くなれるのは迅さんと三輪が仲良くなる確率くらい低いな……

由比ヶ浜に至っては何故か俺と双葉を睨んでいるがお前に関しては理解出来ないな。

そして平塚先生は何を考えたのか俺達を手招きしている。面倒な予感がするから逃げたいが逃げると更に面倒な予感がする。

俺は双葉とアイコンタクトを交わして溜息を一つ吐いて平塚先生の所へ向かって歩き出した。

比企谷八幡は話し合いに参加する

平塚先生に手招きされて渋々双葉と歩き出した。何か面倒な予感しかしらないんだが……

溜息を吐くと双葉が腕にギュツと抱きついてくる。

「……大丈夫です。私は八幡先輩の味方ですから困ったら助けます」
笑顔を見せてきて少しだけ嫌な気分がなくなってきた。双葉の頭を撫でて再び歩き出した。

「……で、何か用ですか？」

投げやりに話しかける。

「ああ、実はボランティアの最中に心配事があったらしくてな。今からその事を聞くんだが、君も参加したまえ」

「いやいや、俺は参加してないから何があつたか知らないですよ？
そんな奴がいても邪魔になるだけかと」

「それでもアドバイスくらいは出来るだろう？いいから座りたまえ」

うわ、面倒くせえ。でもここで逃げると市民ロツジまでやってきそ
うだし諦めるか。

「双葉、先に帰ってろ」

双葉を巻き込むつもりはないからな。そう言ったものの双葉は首
を横に振る。

「いえ。私も一緒にいます。八幡先輩を支えるのが恋人としての仕事
ですから」

帰る気はないみたいだな。仕方ない。

「わかったよ。ありがとな。愛してる」

「はい。私も愛しています」

双葉の頭を撫でて椅子に座る。何か正面では由比ヶ浜が睨んでい
るが無視だ。俺何も悪い事してないしな。暫くすると戸塚が話しか
けてくる。

「来てくれて嬉しいよ！あ、でも八幡は現状を知らないから無理はしないよね？」

何この天使？凄く可愛いんですけど。いやいや！俺には双葉がいるんだ！右には戸塚、左には双葉がいて幸せだ。これで後ろに小町がいればそこは完全に天国だな！

「別に無理はしない。んでその心配事って何なんだ？」

それを聞かないと何も出来ない。

「ちよっと孤立しちゃってる生徒が1人いるんだよ」

「可哀想だよねー」

葉山が言つて三浦が相槌をうつ。

「……は？いや別に孤立してても問題ないだろ？そいつが虐められてるなら別だけど」

悪意によつて孤立させられてるならともかく、孤立すること自体は悪くない。1人でいるのが好きな奴だっているし。俺とか。

「それがね八幡、実は……」

戸塚が言うにはその小学生の間では誰か1人選んでそいつをシカトするブームが流行っているとの事だ。実にくだらないな。

「それで君たちはどうしたい？」

平塚先生が問われて、みんなが黙る。どうしたい？別にどうもしたくない。ただその事について話してみただけだ。恐らく全員、本気で何かをするわけでも何かができるわけでもないからな。力がない事を言い訳にしながら、それでも自らに優しい心根があることを自覚しただけだ。ただそれを口に出来ないだけだ。

そう思っている時だった。

「俺は可能な範囲で何とかしてあげたいと思います」

葉山がそう言い出した。希望だけちらつかせて、迂遠な言い方で絶望を内包させる。出来ない可能性も暗に匂わせて、全員に釈明の余地を与えているな。

「あなたでは無理よ。そうだったでしょう?」

すると雪ノ下が唐突に言い出して葉山を睨む。確定しているような言い方だ。過去に何かあったのか? まあどうでもいいか?

葉山は苦い顔をしながら

「そうだったかもな。…でも今は違う」

と言うが、

「どうかしらね?」

雪ノ下は冷たくあしらう。

予想外のやりとりを目にして再び重い空気になる。別にお前らがどんな関係だろうとどうでもいいから俺がいる時に嫌な空気は作るな。マジで。

「やれやれ。雪ノ下、君は?」

平塚先生が間を持たせるように、雪ノ下に問う。

「平塚先生、これは奉仕部の合宿も兼ねていると仰いましたが、彼女の案件も活動内容に含まれますか?」

「林間学校のサポートをボランティア活動と位置づけた上で部活の一環とした訳だ。原理原則から言えばその範疇にいれてもよからう」

「そうですか。私は、彼女が助けを求めるなら、あらゆる手段を持って解決に努めます」

雪ノ下は決然と、確かに宣言した。いやいや直ぐに罵倒したり、偉そうな口を叩いて双葉に痛い目に遭って逃げたお前じや無理だろ? 明らかに常識知らずだしな。

「で、助けは求められているのかね?」

「それは、分かりません。」

んだよ頼まれてないのかよ？先ずは本人の意志を確認してからだろ？そいつが余計なお世話と言ったらそれまでだ。

「ゆきのん、あの子さ、言いたくても言えないんじゃない？」

由比ヶ浜が雪ノ下に声を掛ける。

「どういう事、由比ヶ浜さん？」

「留美ちゃん言ってたじゃん。自分も同じことしてたんだって。だから自分だけ助けてもらうのは許せないんじゃないかな？みんな多分そう……、話しかけたくても仲良くしたくてもそうできない環境ってあるんだよ……」

確かに由比ヶ浜の言う通りだ、話しかけたくても出来ない環境と言うものは確かにある。だが本当に言いたい事があるなら周りの環境を気にせず、恥も外聞も捨てて話しかけるべきだ。それにそれが正しくても俺達がそうだと勝手に決めてはいけない事だ。大事なのは本人の考えをしつかり聞くことだ。

そう思っていると

「分かった、雪ノ下の意見に反対の者はいるか？」

平塚先生が問いながら反応を確認する。まあみんな差をあるにしてろ、その留美って奴の環境については考えているだろう。

正直俺は反対だ。下手な事をして余計酷い目に遭う可能性もあるからな。つても一度話を聞いた手前断れないだろうな。断ると独身や毒舌女がうるさそうだ。まあ変な案が出たら平塚先生が止めるだろうから大丈夫か？

とりあえず静観していると平塚先生は立ち上がりとんでもない事を口にした。

「よろしい。では、どうしたらいいか君達で考えたまえ」

そう言っつて平塚先生は歩き出したので俺は慌てて止める。

「平塚先生は何処に行くんですか？」

そう聞くと平塚先生は何事も無いように、

「眠いから寝る」

爆弾発言をしてきたが本気か？!

「いやいや、居なくていいんですか？」

「君達が考えて行動したまえ」

そう言つて平塚先生は歩き出した。何て無責任なんだあの独身！
下手すりゃ監督不届きになって問題になるのが分からないのか?!
こんな問題を生徒にやらせるなよ!!

マジで旋空でぶつた斬りたい。そう思いながら正面を向いた。

平塚先生が去ってから数分後話し合いは早くもカオスになつてい
る。

最初に口火を切つたのは三浦だった。

「つーかさー、あの子、結構可愛いし、他の子とつるめばよくない？ 試
しに話しかけてみんじゃん、で、仲良くなるじゃん。余裕じゃん？」

「それだわー。優美子冴えてるわー」

「ふっ、でしょー」

それ絶対に強者の理論だな。

「それは優美子だから出来るんだよ」

由比ヶ浜は反対する。まあ同感だ。そんな事が出来るならそもそも
も孤立してないだろうしな。

「言葉は悪いけど足掛かりを作るって意味では優美子の言っている事
は正しいな。けど今の状況だとそもそも話しかけるハードルが高い
かもしれない」

葉山もフォローしながらやんわりと否定する。三浦も特に文句を
言わずに引き下がる。

再び案を模索しているとメガネの女子が自信に満ちた表情で手を
挙げた。

「姫菜、言ってみて」

葉山が促すと姫菜と呼ばれた女子は落ち着いた表情で話す。

「大丈夫。趣味に生きればいいんだよ。趣味に打ち込むと、イベントとか行くようになっていろいろ交友広がるでしょ。きつと本場の居場所みたいのが見つかると思うんだ。学校だけが全てじゃないんだし。それに気づいたら留美ちゃんも色々な事が楽しくなってくると思うな」

予想以上の回答で正直驚いた。確かに俺も学校に重点を置いてないしな。小学生は基本的に自分の世界は学校と家庭しかない。だからそこで否定されてしまうと、世界そのものに拒絶されたように感じてしまう。しかし海老名さんは学校以外に自分が胸を張って前を向ける場所を探せばいいと言っているのだ。正直凄い感心した。

海老名さんはなおも話を続ける。

「私はBLで友達ができました！ホモが嫌いな女子なんていません！だから雪ノ下さんや黒江ちゃんだっけ？2人も私と一緒に新天地の開拓を」

「優美子、姫菜と一緒にお茶取ってきて」

葉山が打ち切る。よくやった葉山。

「おっけー、ほら海老名行くよ」

「ああっ！まだ布教の途中なのに！」

抵抗したものの、海老名さんは引き摺られていく。

その去り際の姿をみていると、

「海老名さんは私に何を勧めようとしてたのかしら？」

「ゆきのんは知らなくていいよ」

雪ノ下と由比ヶ浜が話しているのを聞いた。由比ヶ浜の顔から察するにこいつは布教されたのだろう。ご愁傷様だ。

「あの、八幡先輩……」

「双葉、あの女子の話はシカトしろ。いいな」

「は、はい」

双葉にBLなんて覚えさせてたまるか。それが原因で別れたりしたら嫌だぞ？

その後もポツポツと意見が出るものの、現実的な案は出ない。

再び沈黙した一瞬、葉山が

「やっぱりみんなで仲良くする方法を考えないとダメか」

みんな仲良くねえ？やはりこいつは本当の意味で問題を理解していない。みんな仲良くなんて言葉は強要しているだけだ。ギアスだ。大体どんな人間でも性格が合わない奴もいる。そんな奴と仲良くしろと他人から言われても絶対に無理だ。はつきりと「嫌い」や「関わりたくない」と言えばまだ発展の可能性がある。改善の可能性や交渉の余地もあるだろう。しかし押し殺して上部だけ取り繕うから無理が出る。

そう思っているのは俺だけではなかったようだな。

「そんなことは不可能よ。ひとかけらの可能性もありはしないわ」

雪ノ下が冷徹な言葉で葉山の言葉を粉碎した。葉山はため息を吐き目を逸らす。それを目にした三浦が吠えた。

「ちよつと、雪ノ下さん？あんた、何？」

「何が？」

「その態度。せつかくみんなで仲良くやろうとしているのになんでそういう事言ってる訳？別にあーし、あんたのこと好きじゃないけど、楽

しい旅行だからって我慢してんじやん」

三浦よ、我慢は身体に良くないぞ。後雪ノ下はシカトした方がいいぞマジで。

「まあまあ、優美子落ち着いて」

由比ヶ浜がフオローするが雪ノ下も納める気がないらしく、

「あら、意外に好印象だったのね。私はあなたのこと嫌いだけど」

こいつは本当に空気を読まない奴だな。

「ゆきのんも抑えて抑えて」

由比ヶ浜は今度は雪ノ下を抑えようとするがそれは悪手だ。

「ちよつと、ユイー？」

「あなたはどちらの味方なのかしら？」

2人に問い詰められる。由比ヶ浜は悲鳴をあげて縮こまり、カタカタ震えている。

2人が睨み合っている中、戸塚が口を開ける。

「でも留美ちゃんは周り比べて大人っぽいから小学生の女子グループの中だと溶け込むのは難しいと思うな」

ふーん。そんな性格なんだ。すると葉山は納得したように頷く。

「確かにちよつと冷たいというか冷めてる感じはあるな」

「冷たいっつーか、超上から目線なだけなんじゃないの？周り見下してるような態度とつてつからハブられんでしょ。誰かさんみたいに」

三浦が雪ノ下を見て挑発的に笑う。そう思っていると雪ノ下は淡々と答える。

「それはあなたたちの被害妄想よ。劣っているという自覚があるから見下されていると感じるのではなくて？」

「っ！あんさー、そういう事言っつから」

「優美子、やめろ」

三浦が激昂しかけると葉山が低い声で押し留める。

「隼人……。ふんっ！」

三浦も一瞬驚いていたようだが、おとなしく引き下がり喋らなくなる。

座にも重苦しい沈黙が流れる。そろそろ潮時か……

そう判断した俺は立ち上がる。すると全員が見てくるが気にせず双葉に話しかける。

「帰るぞ双葉」

「え？は、はい」

双葉は慌てて立ち上がる。それを確認して歩き出そうとすると、

「ちよっと待っしー！」

由比ヶ浜に呼び止められるので振り向くと何か怒っていた。

「何だよ？」

「まだ話は終わってないじゃん！だから座るしー！」

「いや今日はこれ以上話し合いしても無理だろ？何せ三浦は冷静さを失ってるし、雪ノ下はやる気がないんだし」

そう言っつて踵を返し歩き出そうとすると、

「待ちなさい。やる気がないってどういう意味かしら？」

雪ノ下が呼び止めてくるので振り向くと睨んでいる。何でお前がキレてるの？

「いやだつてお前さ、人の意見否定してるだけじゃん？人の意見を否定するのなら、自分の意見を言うか何で反対かはつきりと説明するだろうが。ただ否定するのは小学生でも出来るぞ」

「あら？全く何もしていないあなたこそやる気がないじゃない？」

まあ実際そこまでやる気はないけどな。それを口にするのと絶対に誰かが突っかかってきそうだから言わないけど。まあここではつきり言っつてこいつよりやる気を見せるのも悪くないな

「わかったよ。んじや説明するか」

「まあ碌な考えじゃなさそうね」

雪ノ下がそう口にするると双葉が一步前に出ようとしたので首根っこを掴んで引き戻す。

「落ち着け双葉。あいつはほっとけ」

双葉は納得いかない表情をしているが無言で一步下がる。それを確認して改めて椅子に座る。

「んじや言わせてもらうぞ。先ずは葉山、俺はお前の意見には反対だ」俺がそう口にするると三浦がキレて立ち上がるうとするので慌てて

口を開ける。

「少し待て。俺はちゃんと理由を説明する。だから怒るのは全て聞いてからにしてくれ」

「ふーん、じゃあ隼人に反対した理由聞かせて貰おうじゃん？」

そう言つて睨んでくる三浦を見返して口を開ける。

「んじゃ話すぞ。例え話だが、俺達がこのキャンプに参加している小生だとするぞ」

そう言つて周りを見渡すと全員が頷いたので口を開ける。

「そこで三浦に質問するぞ？もしもボランティアの高校生がお前に雪ノ下と仲良くしろと言つて仲良くさせようとしてきたら仲良く出来るか？」

「はあ?!雪ノ下さんと仲良くなんて出来るわけが……あ！」

話してる途中で気が付いたみたいだな。

「そういう事だ。殆ど他人同然の相手に仲良くしろって言われても煩わしく思うだけだ」

俺がそう口になると葉山の苦い顔が目に入った。やつぱりこいつは少し可笑しい。俺の意見に納得してないみたいだが、どうしても仲良く出来ない相手は絶対にいるだろうに？

「そんで対策についてだが……俺としては海老名さんだったか？彼女と同じ様に別のコミュニティに入るって意見だな」

「ほら!!やつぱりBLは友情を育むん「海老名、擬態しろし」むぐぐうう！」

テンションが上がった海老名さんの口を三浦が防いだ。よくやつたぞ三浦。海老名さんには口を開かせるな。後俺はBLとは言つてないからね？

呆れている中口を開けるのに大分時間がかかってしまった。

「その理由についてだが、1番の理由はその留美って奴が小学校に居場所を作れない可能性があるからだ」

俺がそう口にすると全員が絶句して俺を見てくる。

「八幡先輩、どういう事ですか？」

双葉がおそるおそる聞いてくる。

「良く考えてみる双葉。悪ノリでシカトってイジメをする連中だけ？留美がそいつらと仲良くしようとしても心の中じやまた虐められる可能性があるって思うぞ。そう思ってる中で本当の居場所を作れると思うか？」

そう口にすると空気が凄く重くなった。ヤバい少し言い過ぎたか？まあ覆水盆に返らずだ。

「……とりあえず俺の意見はこれで終わりだ。どう判断するかはお前らが決めろ」

俺がそう口にして暫く経った時だった。

「……私はヒキタニ君の意見に賛成かな」

海老名さんが口を開ける。まあ対策については同じ意見だしな。

「べー、じゃあ俺も賛成だべー！」

お調子者が賛成をするがお前絶対に海老名さんに便乗しただろ？じゃあって何だ？じゃあって。

「僕も賛成かな？もしも八幡の言ってる事が正しかったら無理して小學校で居場所を作る必要はないと思うな」

戸塚も賛成してくれるが真面目な戸塚の顔も可愛いな。いかんいかん！双葉は勘が鋭いから浮気と思われる可能性があるから心を無にしなければ！

「俺は……皆で仲良くする事もできると思う。きっと皆根はいい子達だろうから」

いやいや、悪ノリで虐めやってる奴らが根がいい訳ないからね？どんだけお人好しなんだよ？

「まあそれを決めるのは留美自身だ。本人が助けを求めるならアドバイスするだけだ」

「だからヒツキー、留美ちゃんは言いたくても言えないんだよ」

「それはお前の意見だろ？留美自身がこのままでいいと思ってるかもしれない。大事なのは本人の意見だ。仮に言いたくても言えないんだとしても行動を起こす前に本人に許可を取るのが自然だと思うが？」

「そ、それは……」

由比ヶ浜が苦い顔をして黙る。今度こそ潮時か。

そう思っていると携帯が鳴ったので見ると米屋からそろそろ風呂に行くから散歩から帰ってこいよ、との事だった。

「さて、俺達は呼び出されたしもう行く。行くぞ双葉」

「あ、はい」

俺は双葉と立ち上がり歩き出した。

「ありがとう八幡！やっぱり八幡は頼りになるよ！」

「お、おう。またな」

若干照れながら歩き出した。

そんな中チラリと後ろを見ると、葉山と由比ヶ浜の苦い顔、雪ノ下の睨みが印象的だった。

旅行中、黒江双葉は大胆になる

話し合いが終わり市民ロτζジに戻ると入り口に全員居た。見ると全員タオルや手拭いを持っていた。

「何だお前ら、待ってたのか？」

「まあな。待つてるからお前らは着替えとか用意しな」

「わかりました」

出水に促され俺と双葉は各自の部屋に行き、着替えやタオルなどを準備した。

ロビーに戻り、大浴場へ歩き出す。

「んじやまた後で。上がったらロビーに集合な」

「わかった。またね」

「了解す」

挨拶を交わし脱衣所に入り服を脱ぎ始める。

「にしてもハツチ凄い筋肉だなあ」

「あ、本当だ！ハツチ先輩って着痩せするタイプなんだ！」

「まあな。これでも昔は落ち着いた筋肉と一緒に筋トレをしてたしな」

生身の能力ならボーダーでもかなり高い自負がある。

「俺は射手だからそんな生身の鍛錬はしてないな」

「俺は小学校の時、山で魚を獲ったりしたりキノコを探してたりしたら自然と鍛えられたよ」

そんな事を話しながら浴場に入る。

「うおっ！結構広いな」

出水の言う通り予想以上に広かった。

「こんだけ広けりやはしゃげるな」

「黙れ米屋、浴場で遊ぶな」

投げやりに突っ込みながら身体を洗う為シャワーがある所へ歩き出した。

双葉side

八幡先輩達男子組と別れ女湯の脱衣所に入り服を脱ごうとすると小町さんがいきなり、

「ところで双葉ちゃん。双葉ちゃんはさっきお兄ちゃんと散歩してどうだったの?」

ニヤニヤしながら聞いてくる。いきなり何ですか?!

「私も気になるな」

国近先輩も笑いながら近寄ってくる。2人に恐怖を感じた私は後ずさりするも壁に追い詰められる。

絶対に言いたくない。何故なら川のほとりで沢山キスした事なんて言うの恥ずかしいし。

話せるとしたら八幡先輩の学校の人達に捕まった事くらいだろう。と言つてもアレはわざわざ話す必要はないと思う。というより話すといつも八幡先輩を侮辱するあの女の事を思い出しそうだし。

「べ、別に普通に散歩しただけです。それよりも早く入りましょう」

そう言つて服を脱ぎ始めると2人はちえー、と言つて服を脱ぎ始めた。

今更だけど八幡先輩と小町さんって兄妹なのに余り似てないな……

八幡先輩はクールだけど小町さんは小悪魔ってイメージがある。そんな事を考えていると、

「わく。双葉ちゃん、セクシーな下着だね」

国近先輩が驚いた様に言ってくる。まあ、黒色の下着ですから否定はしませんけど……

「は、はい。以前加古さんが選んでくれました」

そう答えると小町さんが爆弾を投下してきた。

「双葉ちゃん！今度その下着でお兄ちゃんに迫りなよ！抱きついたりしたらお兄ちゃん絶対喜ぶよー！」

その瞬間私は自分の顔が熱くなるのがわかった。

八幡先輩に下着姿で迫る?! 凄い恥ずかしいですからそんな事言わないでください!!

……でも、もし、そうしたら……その、八幡先輩はもつと愛してくれるかな? いや、八幡先輩だからそうなるとは考えにくいな……

でも、もしかしたら……

『双葉、凄い可愛いよ』

『あ、ありがとうございます。八幡先輩にそう言って貰えて嬉しいです……』

『なら良かった。でも双葉、俺はお前の全てが見たいんだ』

『は、八幡先輩?! そ、それって……』

『ああ。ソレ、外していいか?』

そう言っつてブラジャーに手をかける八幡先輩。

『は、はい。その代わり……』

『その代わり? 何だ?』

『そ、その……私の事を、もつと愛してください』

『ふーん。お前、意味わかってるよな?』

イジワルそうに笑ってくる八幡先輩を見て更に真っ赤になる私……

『は、はい』

『いい子だ。じゃ遠慮なく……』

そう言っつて八幡先輩は右手で私を引き寄せ、左手を後ろに回しブラジャーのホックに触れてきた。

そして顔を私の顔に近づけて唇を……

何て事になったらどうしよう?!

流石にそれはないだろう。八幡先輩らしくないし。

……でも私の中ではそんな八幡先輩も良いなって考えている自分がいる。私の身体と心は八幡先輩の物だから八幡先輩になら全てを捧げてもいい

そう考えていると更に顔が熱くなるのがわかった。どうしよう……

「おーい、双葉ちゃん。戻っつておいでー」

頬に痛みを感じたので前を向くと小町さんが呆れながら私の頬を

引っ張っていた。となりでは国近先輩がニコニコしていた。

「双葉ちゃん乙女だね〜」

国近先輩は普通にそう言っているが私にとっては聞き捨てならぬい。

「…もしかして口にしてました?」

「うん。お兄ちゃんに全てを捧げたいって思ってるなんて小町嬉しいよ」

「比企谷君の彼女が双葉ちゃんで良かった〜」

2人は優しい目で見えてくるが私としては凄く恥ずかしい……

「あう……」

もうダメだ。凄く恥ずかしいよ。まさか口にしちゃうなんて……顔が熱くて仕方ないよ……

「あー、ちよつとからかいすぎたかな〜?」

「そうですね。ごめんね双葉ちゃん」

「い、いえ……恥ずかしいだけで別に怒っている訳では……」

「そう?なら良かった。つと、そろそろお風呂に入りましょうよ!」

そうだった。いつまでも脱衣所で下着姿で話しているのもどうだろうか?そう判断して下着を脱ぎ始めた。

全部脱いで身体にバスタオルを巻くと小町さんが話しかけてくる。

「よーしー!レッツゴー!」

小町さんがそう言うので浴場への入り口の方を見る。

すると私と小町さんは絶句してしまった。

視線の先では国近先輩が下着を脱ぎ終えて身体にバスタオルを巻こうとしている。そこまではいい。

「あれ〜。2人ともどした〜？」

国近先輩はいつもの緩やかな口調で聞いてきて私と小町さんは再起動した。

「い、いえ。何でもありません」

「そ、そうです！ 柚宇さんは気にしないでください」

「ん〜？ よくわからないけど先に行くね〜」

国近先輩はそう言っただけで浴場に入って行った。暫くして小町さんが口を開ける。

「……双葉ちゃん。今、見た？」

「……はい」

見てしまった。

「……柚宇さんの胸、大きいね」

「……大きいですね」

大きいのは知っていたが生で見ると私が思っていたよりも遥かに大きかった。

「……小町達も高3になったらあんなに大きくなるかな？」

「分かりませんが、可能性は高くないと思います」

ボーダーでもあそこまで大きい人は殆どいないし。しかし問題はそこではない。

「……小町さん、八幡先輩もやっぱり大きいのが好きだと思いますか？」

昼のテニスをした時、八幡先輩は鼻の下をのぼしていた。男の子だからそういうのに興味がある事は理解出来る。理解は出来るけど、八幡先輩が私以外に興味を持つのは嫌だ。これが私の自分勝手な気持ちなのは分かっている。でも……

そう思っていると小町さんが私の頭を撫でてくる。兄妹だからか

撫で方が八幡先輩にそっくりで心の中のモヤモヤが薄くなってきた。

顔を上げると小町さんは優しい笑顔を向けてくる。

「……大ききなんて気にしなくても大丈夫だよ。普段は捻くれて素直じゃないお兄ちゃんだけど双葉ちゃんの事は間違いなく好きだから」

「……本当ですか？」

「うん。だってお兄ちゃん家で小町と話す時、話す内容の半分は双葉ちゃんの事だしね」

それを聞いて正直驚いた。まさかそこまで八幡先輩が話しているなんて……。ちなみに八幡先輩が私と話す時は、話す内容の半分は小町さんの事だったりする。

「そうですか。……良かった」

心の内が全て漏れて息を一つ吐き、小町さんと向き合う。

「ありがとうございます。もう大丈夫ですから行きましょう」

「ほいさっさー、折角だし背中流してあげるね！」

「い、いえ。悪いですよ」

「人生の先輩の厚意は素直に受け取るんだよ。その代わり双葉ちゃんはお町の背中を流してね！」

「は、はい」

「ならよしーそれじゃ柚宇さんに続こうー！」

そう言っつて小町さんは私の手を引いて浴場へ歩き出した。余りのテンションの高さに少し気後れしたが、さっきまでのモヤモヤはもう完全に無くなっていた。

(小町さん、ありがとうございます)

心の内でもう一度礼をして私も浴場に入った。

先ずは小町さんの背中を流してあげないと……

まずは身体を洗う為に椅子に座り身体にボディソープをつけ始めた。

すると横では、

「緑川ー、背中流せー」

「えー、何で？」

「後輩はお世話になってる先輩の背中を流すもんなんだよ」

「えー、でも俺、ハッチ先輩は勉強教えてもらったりしてお世話になってるけど、よねやん先輩にはお世話になってないんだけど」

「相変わらず生意気だなあ」

「痛い痛いよ！風呂場では止めてよ」

槍バカと迅バカが何か揉めている。……お前ら何やってんの？俺と出水は呆れながら身体を洗う。

「そーいや比企谷、いくら黒江ちゃんといちやいちやしたからって妙に散歩の時間長かったような気がするんだが、気のせいかな？」

頭を洗っていると出水が唐突に話しかけてくる。てか米屋と緑川は暴れるな。つーか、

「いちやいちやしてるのは決定事項かよ……」

「ん？いちやいちやしなかったのか？」

「いや、したけどよ……」

「ほらな。話を戻すとかなり遅かったからいちやいちや以外も何かしたのかと思っただけだ」

「随分と洞察力があるな。まあ色々あったんだよ」

「色々？もしかしてアレか？ボランティアの知り合いと何かあったのか？」

「よくわかったな。ボランティアの途中で問題があったらしくて、それを解決するのに力を貸させてさ」

「ふーん。どんな問題なんだ？」

「実はだな……」

「……いや、そんなデリケートな問題を生徒にやらせちゃダメだろ？」
全部話すと、出水が呆れているが同感だ。あんなのボランティアの範疇から外れてるからな？しかも監督役は放置してどっか行つたし。「まあな。だから適当に違うコミュニティに入ればいいって言つた」

「まあ生徒が出来る選択じゃそれがベストだな。つーかそれ以前にボランティアに参加してないで現状を見てない比企谷に協力を求めるなよ」

「だよなー。まあそんな事があつて俺は疲れた」

「お疲れさん。疲れてるだろうし背中流してやるよ」

言うや否や出水は俺の背中に回りタオルで擦つてくる。

「サンキュー。あ、もっと強く頼む」

「はいはい。っとこれくらいでいいか？」

「そうそう。いい感じ。あー、気持ちいい」

「お前は年寄りかよ？」

そんな他愛もない雑談をしながら背中を流してもらい身体を洗うのが終わった。振り向くとバカ2人は未だにふざけている。いつまでも暴れていると邪魔なので2人の頭にチョップをする。

「痛っ！」

「ひでーな、おい」

「風呂で遊ぶな。さっさと身体を洗え。俺と出水は洗い終わったぞ」

「うおっ！マジか?!じゃあ俺も洗おつと」

米屋はそう言つてシャワーを浴び始め、緑川もそれに続いた。それを確認して湯船に浸かる。

「あー、生き返る」

「まあ確かに今日は疲れたな」

「暑かったからな。まあ明日は川遊びだから涼しいだろ」

「そうだな。川を見る限り凄い綺麗だったしな。まあお前にとつちや泳ぐより黒江ちゃんの水着を見る方が楽しみだろ？」

「待て出水。否定はしないがその言い方だと俺がロリコンみたいじゃねーか」

シスコンは認めてるがまだロリコンは認めてないからね？

「否定はしないのかよ……」

出水に呆れられていると米屋と緑川も湯船に入ってくる。

「あー、気持ちいい！」

「しかも俺らしかいないし思いっきり足を伸ばせるな。おりゃ！」

「槍バカ、やってくれるな。お返しだ！」

3人で水をかけあってるがお前らガキかよ？呆れていると俺の顔にもかかり、その際に鼻にも入り苦しい思いをした。

よろしい、戦争だ。

内心そう呟き、俺は全力で他人に水をかける存在と化して3人をコテンパンに叩き潰した。

結局あれから1時間近くお湯をかけあつた挙句、水の中で取っ組み合いをしてしまった。……俺は何をやっていたんだ？

その結果緑川がのぼせた為卓球は中止になり、現在は各自の部屋にいる。

「ほら、茶買ってきたから飲め」

「うゝ、ハッチ先輩ありがとう」

「ほら、ゆつくり飲め」

「はゝい」

緑川がちびちび飲むのを見て一息つく。

「やるなハッチ」

「まるでお母さんみたいだぜ」

「まあ元・専業主夫志望だからな。これくらい出来ないって話だ」

「あー」

何でそこで呆れるんだよ？前から専業主夫志望とは言ってたからね？

「つーかもう遅いし寝ようぜ」

「それもそうだ」

「んじやおやすみー」

俺が布団に入ろうとした瞬間だった。

トン、トン……

ドアをノックする音が聞こえてきた。

「誰だ？」

「女子組の誰かだろ？ハッチ応対よろしく」

まあまだ布団に入っていないの俺だけだからいいけどさ……

溜息を吐いてドアを開けると、

「は、八幡先輩。いきなりごめんなさい」

外には双葉がいた。悪くはないがどうしたんだ？

「気にするな。何か用か？」

ドアを閉めて廊下に出ると双葉がモジモジしてくる。

「そ、その、おやすみのキスをして欲しくて……」

ふあ?!

「お、お前……。そ、それは……」

してやりたい気持ちは山々だが、何というか……おやすみのキスって響きは恥ずかしいな……

「……お願いします」

双葉は上目遣いで見てくる。いつもは「ダメですか?」と言っているが、今回ははつきりとお願いますって頼んでくる事から本気で頼んでいるのだろう。

なら彼氏として、その期待に応えなきゃいけない。

「わかったよ。ほら」

そう言っつて双葉を引き寄せて

「んっ、ちゅっ……」

双葉の唇に優しくキスをする。双葉を見ると笑顔を見せてくる。

「ありがとうございます。……じゃあ今度は……」

すると双葉は俺に近付き

ちゅっ……

俺の唇を奪ってきた。頼むからいきなりの不意打ちは止めてくれ!! 顔が熱くなるからな!!

俺の内心をよそに双葉は、

「おやすみなさい八幡先輩。……また明日」

そう言っつて女子組の部屋に戻っていった。俺は暫くの間動く事が出来なかった。

双葉side

八幡先輩におやすみのキスをして貰い部屋に戻ると、小町さんと国近先輩が迎えてくれた。

「あ！双葉ちゃんおかえり！」

「それでどうだった？」

2人が興味津々な顔をして聞いてくる。2人が少し怖いな……

「えっと、その、してもらいました」

小さい声でそう口にするのと2人が我が事のように喜びだした。

「良かったね！双葉ちゃん」

「これでしてなかったら小町お兄ちゃんの部屋に乗り込みに行ってたよ」

小町さんが少し怖いです……

「じゃあ明日の予定を決めないとね」

「そうですね！どうやってお兄ちゃんが双葉ちゃんにメロメロになるかを考えないと！」

「あの、お二人共……別に無理しなくても……」

「うん、大丈夫だよ！お互い不愉快にならない様に無理やり感を出さないから」

いやそういう意味じゃなくてそんな状況そのものに持ち込まなくてもいいって意味ですからね！

内心突っ込んでいる間も2人は話している。すると小町さんが唐突に口を開けた。

「小町ヒラメキ!!えーっと、あれは何処にいったかな？」

小町さんが自分の鞆を弄っている。何を探してるんだろう？

「あったあった！」

小町さんは叫び出し私達の目の前にあるモノを出してきた。

「小町ちゃん。これどうするの？」

「ふっふっふっ。決まってるじゃないですか。お兄ちゃんにはこれを使って貰います」

八幡先輩に?.....まさか?!

国近先輩も分かったみたいで小町さんに拍手を送る。

「おっ、やるね〜小町ちゃん」

国近先輩はノリノリだが私としては賛成出来ない。

「ちよ、ちよつと待つてください!流石にそれは.....!!」

いくら何でも恥ずかしい!考えるだけで顔が熱くなってくる。

「まあ確かに恥ずかしいから無理強いはしないよ。とりあえず渡しとくね」

小町さんは私にアレを手渡してきた。使うべきか悩んでいると、

「そろそろ寝よ〜」

「ほいさっさー。じゃあ双葉ちゃんはどうするか考えてね!じゃあおやすみ」

そう言っつて小町さんも国近先輩も布団に入ったのでとりあえず私も布団に入る。

アレを使うか使わないか、どっちにするか悩んでいるが明日までに決めよう。

そう思うと睡魔がやって来たので私はそれに逆らわずゆっくりと目を閉じた。

比企谷八幡はロリコンの気があると思われる。

ふとした拍子に目が覚め、時計を見るとまだ4時半だ。窓からは朝の光が余りない。

周りを見ると周りの奴らは全員寝ている。というか出水お前俺の布団に侵攻し過ぎだ。俺が起きたのお前のせいかな？

一人でここにいるのもアレだし散歩でも行くか。そう判断した俺は上着を着て外に出た。

外はほんの少し暗くて風が気持ちいい。あと一時間もしないで明るくなるだろうな。それまで森林浴でもするか。

そう思っていると、

「八幡先輩？」

後ろから声をかけられたので振り向くと双葉がいた。

「よう」

「はい。おはようございます」

朝からこんな可愛い笑顔を見れるなんて今日は良い1日になりそうだ。

「何？お前も散歩？」

「はい、急に目が覚めてしまつて……。八幡先輩さえ良ければ一緒に日の出を見ませんか？」

日の出か……。後30分くらいだと思う。恋人と2人きりで見るとも悪くなさそうだ。

「別にいいぞ」

「ありがとうございます。……では」

そうやって腕を絡めてくる双葉にドキドキしながら歩き出した。双葉の奴、無意識かもしれないがドンドン大胆になってきてるな。

「やっぱりこの時間は涼しいですね」

「まあ高原だからな。っと、あれが高台か？」

今俺たちは見晴らしの良い高台に向かっている。双葉は日の出が見たいと言ってきたのでその誘いに乗り一緒に見る事になった。まさか俺が女子と二人で日の出を見る事となるとはな。ボーダー入る前の俺じゃ想像できん。

昔を懐かしんでいると高台に着いた。前を見ると既に日はまだ見えていない。ギリギリセーフだな。

「よかったです。まだ日は上がっていませんね」

双葉が安堵していると東の空が明るくなり地平線からは太陽がチラリと見え始めた。日の出だな。正直に言って綺麗だ。早朝の涼しい風もあり気分はかなりいい。今日の始まりを感じる。

太陽の光に目を細めているとズボンの裾を引っ張られたので双葉の方を向くと、

ちゅっ……

いきなり唇を奪われた。

いきなりの不意打ちにドキドキしていると双葉は更に唇を求めた。偶には主導権を双葉に握らせるのも悪くない。

そう判断した俺は双葉に身を任せる。すると双葉は更にキスをしてくる。その姿に苦笑しながら双葉にキスをされ続けた。

暫くの間キスをされていると双葉は唇を離してくる。

「珍しいな。お前からするの」

いつもなら双葉がしてくれて頼んで俺からしているし。

「は、はい。すみませんでした」

「いや、別に怒ってる訳じゃないんだが……」

「その、偶には私からしたくて……」

「そうかよ。じゃあまた頼む」

「……はい！」

「つと、そろそろ戻ろうぜ」

そう言っただ葉の手をつないで一緒に市民ロτζジに向かって歩き出した。

市民ロτζジに戻り女子組の部屋の前に着いた。

「じゃあまた後でな」

「はい。おやすみなさい」

「寝るかはわからんがまたな」

そう返すと双葉苦笑しながら顔を近づけてくる。

「もしかして……」

「……はい、おやすみのキスを……」

「わかったよ」

溜息を吐くと同時に双葉を引き寄せて

「んっ、ちゅっ……」

触れるだけのキスを交わす。直ぐに唇を離すと双葉は頭を下げて部屋に入っていた。

ドアが閉まるのを確認して俺も自分の部屋に入った。中ではまだ全員寝ていたので俺も布団に入り眠りについた。

「……先輩、……ツチ先輩」

身体を揺らされている感触に襲われたので目を開けると、

「あーやっとなきたー！」

目の前には緑川がいた。周りを見ると米屋と出水は着替え終わっていた。どうやら俺は二度寝した際に1番起きるのが遅かったのだから。

「お！比企谷起きたか！」

「おせーぞー！早く着替えろ」

そう指摘されて頭が働かないままパジャマを脱いで着替え始めた。やっぱり俺が二度寝するのは間違っている。

食堂に着くと既に女子組は座っていた。

「八幡先輩、おはようございます」

「よう。さつきぶりだな」

「はい」

お互いに挨拶を交わすと、

「お兄ちゃん、さっきぶりってどういう事?!」

妹が興奮しながら聞いてくる。朝からうるさい奴だな。可愛いから許すけど。周りを見ると全員が興味津々な顔をして見てくる。こりや誤魔化すのは無理だな。

「いや、日が昇る前に目が覚めたから散歩してたら偶然と会ったんだよ。それで一緒に日の出を見ようと誘われたから一緒に見たんだよ」
そう返すと全員が興奮してきた。

「ほうほう。それでキスは……したよね、うん」

「待てやコラ。勝手に決め付けるな」

「いやだって双葉ちゃん顔真っ赤だし、したでしょ?」

双葉を見ると小町の言う通り顔が真っ赤になっていた。こりやバレるわな。

「まあ、したけど」

「」「熱々だね」「」

俺と双葉以外の5人がハモった。何で全員でハモるんだよ? つかそのニヤニヤ笑いは止めてくれ。いや、止めてくださいお願いします。

「ううう……! い、いただきます!」

双葉は真っ赤になりながら逃げるように朝食を取り始めた。

「あく、ちよつとからかい過ぎたな」

「黒江ちゃんは純粹だからな。次からは黒江ちゃんがない時にハツチを弄ろう」

米屋の奴とんでもない事を言ってくるな。そんな事したら俺の施空が唸るぞ?」

暫くの間食事を続けていると、小町が唐突に

「そういうえばお兄ちゃん。もしボーダーに入りたいたんだけど、ボーダーに入りたいたって言ったら反対？」

結構デカイ爆弾を落としてきた。俺が返事をしようとするとも米屋が先んじて口を開ける。

「マジで?!入ったらバトロウぜ！」

「いやよねん先輩、入る前から誘わなくても……」

テンション高いなおい。どんだけ戦いたいたんだよ……

「バカはほつとくぞ。大方国近先輩や双葉、後は……日浦あたりか？そのあたりにボーダーについて聞いたんだろ？俺の意見としてはお前が望むなら好きにしろと思ってる。初めは金稼ぎの為に入って楽しくなかったけど太刀川隊に入って生活に余裕が出来てからは割と楽しいしな」

小町が入隊したいなら無理に止めるつもりはない。ボーダーのトリガーにはベイルアウト機能も付いてるから大丈夫だろう。

「すみません。昨日の夜、私が話したからです」

双葉が謝ってくるが別に怒ってないからね？

「気にするな。んで小町、入隊したいなら俺は止めない。但しチームに入る場合はガールズチームか女にそこまで興味がない影浦隊や東隊あたりにしろ」

俺がそう口にするのと全員が呆れた顔をしてくる。だって小町に変な虫が付いて欲しくないんだもん！その点、女子に興味がないカゲさんや東さんみたいに小町を任せてもいいと思える人がいるチームなら問題ないだろうし。

「いやあ、そのシスコンぶりはちよつとキモいけど……」

妹にドン引きされた。解せぬ。

「まあ比企谷君は了承したんだし試験は受けたら？もしも落ちたら一緒にオペレーターやろうよ〜？」

小町のオペレーター服だと?!何それ見たいんですけど!!
そんな風に頭に煩惱を抱えながら食事を再開した。
とりあえず旅行から帰ったら試験は受ける事となりました。

朝食を食べ終えて俺達は各々の部屋に戻り水着の準備をした。

準備を済ませ市民ロτζジの外に出て更衣室へ向かって歩き出した。

途中の森林部では……

「おつ、小学生もいるけど楽しそうじゃん」

「あゝ、本当だゝ」

見ると沢山の小学生が追いかけてっこをしたり、川で水をかけあつていた。

「そうだな。今日は暑いし早く川に行つて涼みたいな」

俺がそんな事をぼんやりと口にするると緑川が、

「ハツチ先輩は涼みたいって理由より双葉の水着を見たいって理由じゃ……Pardon?」あがががががつ!!」

ふざけた事を言ったのでアイアンクローをぶちかました。え?暴力?違う違う。単純に後輩への指導だからね?

「お兄ちゃんやり過ぎだよ……」

小町がそう言ったので離す。命拾いしたな緑川。

そんなバカをやりながら更衣室へ歩いている時だった。

前方から1人の女の子が歩いてきた。1人?珍しいな

そう思っているとき近くで石に躓いて転んでいた。

「おい大丈夫か?」

そう言つて女子に話しかけて手を出す。どうやら小町によって培われたお兄ちゃんスキルが発動してしまったよう話しかけてしまった。

「あつ、どうも……」

その女子は俺の手を掴んでくるのでゆっくりと引き起こす。

「んで、怪我はないか？」

「うん……大丈夫」

足を見ると地面には葉っぱが散っていてそれがクッションとなつたようで血は出ていない。

すると米屋が話しかける。

「ここに1人でいるって事は迷子か？だとしたら連れを探すの手伝うぜ？」

すると少女は首を横に振る。

「……いい。今日は自由行動なんだけど、朝ごはん食べ終わって部屋に戻ったら誰もいなくて暇だから散歩してただけ」

え、えげつねえ……

他の連中ドン引きしてるし。

俺も授業中居眠りしてて起きたら誰もいなくてビビった事があるしな。まあ唯の移動教室だったけど。

……ん？1人だと？こいつもしかして……

すると双葉が

「……もしかして、あなた、留美って名前？」

そう聞くと女の子は驚いた顔で見ってくる。ビンゴだな……

「そうだけど、何で知って……ああ、ボランティアの人？でも昨日はいなかったような……」

「ああ、違う違う。俺達はボランティアじゃない。俺は一応ボランティアに來た奴らとは同じ学校だけど俺達は遊びに來ただけだ。そんでお前の話を聞いただけだ」

「ふーん、そ」

留美はそう言ってツカツカと離れて行った。話には聞いていたが本当に冷めてんな。

留美が見えなくなるまで見送ると米屋が肩を叩いてくる。

「おいハツチ、知り合いか？」

「知り合いじゃない。俺と双葉が一方的に知ってるだけだ」

「あ、もしかして昨日の……」

出水は納得したように手をポンと叩く。

「出水君も知ってるの？何の話？」

「まあ、あんまり愉快な話じゃないんで」

出水はそう言って歩き出したので俺もそれに続いた。同感だ。あまり大っぴらにする事じゃないし、沢山の人が知っていても解決出来るとは限らないしな。

後ろでは他の連中はぶーぶー言っていたが深入りはしてこなかった。それに安堵しながら更衣室へ向かった。

更衣室で着替え終えて川に向かうと小町がやって来た。

「やっぱ男子は早いね」

「お前、女子なのに早過ぎだろ。何？下に着てたの？」

「着てないよー。そんな事より！ほらほら新しい水着だよ！」

そう言つて小町はなんだかよく分からんポーズをとっている。小町が着ているのはイエロービキニでふちがフリルで彩られ、南国なトロピカルな雰囲気を出していた。色々なポーズをとった後にこちらを見てくる。

「はい、感想は？」

「ん、ああ。そうだな。世界一可愛いよ」

「わあー、適当だなー」

「いやだって、お前家でもそんな格好じゃん」

基本夏になると下着で過ごしてるだろ？

「まあまあ。俺は似合ってると思うぜ」

「あ、どうもありがとうございます。お兄ちゃんも出水さんみたいに言つてよね。小町的にポイント低いよ」

「はいはい」

「ところでハッチ。前から思っていたが小町ちゃんのポイントって何なんだ？」

「知らん。いつの間にか使ってるようになった」

何かいきなり使われた時はかなりビビったからね？溜まると何か貰えるのか？

長年の疑問点に頭を捻っていると

「お待たせ〜」

「お、お待たせしました」

後ろから声がかかり振り向くと国近先輩と双葉がいて絶句してしまった。

横では出水も絶句していて米屋と緑川は興味深そうに見ている。

「どうかなあ？似合ってる？」

国近先輩が近づいてくるので目をそらす。国近先輩が着ている水着は薄いピンクのビキニだった。腰にはふわふわしたスカートがはためいている。

そして何より豊かな胸を惜しげもなく披露していて凄いエロい。本人はゆるふわな空気を出しているが、それはそれで妙な色気を感じる。

「は、はい。似合ってまちゅよ」

噛んだ、噛んでしまった。恥ずかしい。見ると国近先輩はクスクス笑っている。

「比企谷君、噛んじゃったね〜」

「わざわざ言わなくて結構です。……ところで双葉は……」

「ああ、そうだった。双葉ちゃん。恥ずかしがらずにタオルとったら〜？」

国近先輩の指摘通り双葉は身体にタオルを巻いていてどんな水着を着ているか全くわからない状態だ。

「そ、その……いざ八幡先輩に見せるとなると……急に……」

真っ赤になりながらタオルを掴んでいる双葉。これはこれで中々可愛いな。しかし小町は納得してないようで、

「じれったいなく。……えーい!!」

「あ、ちよつと！小町さん?!」

しびれを切らした小町が双葉が巻いていたタオルを剥ぎ取った。

その瞬間、再び俺は絶句してしまった。

双葉が着ていたのは小町や国近先輩と同じようなビキニだった。しかし俺が絶句した理由は色にある。

双葉のビキニの色は何と紫と黒の2色だった。全体的に紫色で一部の要所に黒色が散りばめられていた。おそらくモデルは加古隊の隊服だろう。何であの隊のモデルはセクシーなイメージなんだよ？

いつものクールな双葉には似合う水着と思っただが、年相応に恥ずかしがっている双葉にも中々似合っている。

正直に言おう。メチャクチャ好みだ」

そんな事を考えていると視線を感じたので見ると全員が俺を優しい目で見てくる。いや、双葉は俯いているけど。

「ううっ、ありがとうございます。その、八幡先輩にそう言って貰えて嬉しいです」

そう言っ貰えて？今何か言ったか？

もしかして……

「今、声に出してた?」

そう聞くと全員が頷く。

マジかよ?! うあああ! 死にたい! 死にたいよおお! あんなの俺のキャラじゃねーよ! 馬鹿じゃねーの! バーカバーカ!

心中で叫びまくり、唸りながら口を開ける。

「死にたい」

「まあまあ。仲良きことは美しきかなっていうじゃん?」

そう言ってるが小町よ。そのニヤニヤ笑いを消してから言えよな? 明らかに面白がってるだろ?

「そうそう。お前らが仲良いのは今更だろ? それより泳ごうぜ!」

まあ同感だ。正直言つて暑いしな。早く入りたい。

「んじゃ、行こうぜ」

「よっしゃ! ハッチを沈めるぞ!!」

「やってみろよ。その前に沈めてやる」

「じゃあ俺はいずみん先輩は沈めよつと」

「お前は生意気だな。返り討ちにしてやるよ」

そう話しながら川に入ろうとした時だった。

「あ、あの……八幡先輩!」

いきなり双葉に呼ばれて振り向くと双葉は深呼吸している。何だ? 準備運動でもしろと?

「そ、その15分くらいいいので、ちよつと付いてきてくれませんか?」

15分? 随分曖昧な時間だな? まあそこまでヤバイ問題じゃないだろう。

「わかった。すまんが米屋、先に遊んでてくれ」

「あいよ。んじゃ弾バカと一緒に緑川を沈めるか」

「ちよつと?! 2人がかり?!」

緑川は若干涙目だ。哀れなり緑川。

「じゃ、じゃあ行きましよう」

双葉は俺の手を引っ張ってくる。途中で小町と国近先輩が「覚悟決めたんだ!」とか「頑張れ双葉ちゃん」と言ったのが印象的だった。

他の連中から200メートル以上離れて双葉はようやく止まった。

「んで、何か用か?」

「は、はい。実は八幡先輩にお願いがあつて……」

そう言つて双葉は持つてきた小さいカバンをゴソゴソいじりある容器を出してきた。

「何だそりゃ?……サンオイル?」

そこにあつたのはサンオイルだった。すると双葉は深呼吸をして顔を真っ赤にしながら口を開けた。

「……そ、そのサンオイル、八幡先輩が私の身体に塗ってくれないか?」

……Really?

比企谷八幡は遂にシスコンとロリコンを両立する男となった。

「……そ、その、サンオイル、八幡先輩が私の身体に塗ってくれませんか？」

……えーつと、状況を整理しよう。

双葉のビキニに見惚れていたら少しだけ時間をとらせてくれと頼まれて2人きりになった。そしたらカバンからサンオイルを出してきて塗ってくれと頼んできた。

状況は把握した。しかしどうしてそうなつかを知りたい。

「……双葉、理由を聞いていいか？」

そう聞くと双葉は真っ赤になりながら口を開ける。

「そ、その……昨日小町さんに『これ使ってお兄ちゃんに大胆に迫りなよ！それでお兄ちゃんを双葉ちゃんにメロメロにしちゃいなよ!!』って言われて……」

小町いいいいいい!!お前は12歳の女の子に何て事を吹き込んでんだよ馬鹿野郎?!

内心小町に文句を言っていると双葉が抱きついてきた。お互いに水着なので俺の肌に双葉の肌が直接当たり凄い熱くなってきた。しかも腹のあたりには双葉の僅かな、しかし確かな膨らみが当たってるし。

慌てて舌を噛んで理性の壁の崩壊を防いでいると双葉は上目遣いで見てくる。

「……………ですから、その……………わ、私に、め、メロメロになって欲しくて……………」

ぐほっ…………

マジで吐血するかと思った。クソ可愛い。マジで可愛い。つーかこの時点でメロメロになってるんだけど?!

俺もうロリコンって呼ばれてもいいや。ロリコン上等!!

とりあえず話を戻すか……

「わかったよ。塗るよ」

俺がそう返すと双葉はパアツと明るく笑みを浮かべ更に強く抱きついてくる。離れろ双葉!!胸がビキニ越してふにゅんと当たってるから!!

更に舌を強く噛みさりげなく双葉を離す。双葉は名残惜しそうな顔をしながらもカバンからシートを出して地面に敷く。

「じゃ、じゃあお願いします」

そう言つて双葉はシートの上に転がる。一度了承した手前仕方ない。覚悟を決めるか。そう思いサンオイルを手につけようとした時だった。

「は、八幡先輩。……その前に、その、後ろの紐、解いてくれませんか？」

「フア?!マジかよ?!俺が?!」

まあ今の双葉の体制じゃ解くの難しそうだから仕方ないな、うん。仕方ないから解くだけだ。それ以外に理由なんてないなハチマンウソツカナイ。

溜息をつき双葉のビキニの紐に手をかける。そして、

シユル……

紐を解いた。それを確認して改めて双葉の背中を見ると絶句してしまった。

穢れのない背中。この暑さによって生まれた汗によって若干光っている。

「……綺麗だ」

思わず呟いてしまった。それほどまでに綺麗で見惚れてしまった。

「あ、ありがとうございます。……嬉しいです」

双葉から礼を受けながら手にサンオイルをつける。

「じゃあ双葉、塗るぞ」

「は、はい」

双葉から最後の確認をとったので遂に双葉の背中に手をかけて

……

ピトツ……

「んっ……」

背中に軽く触れると双葉は細い声をあげる。随分と良い触り心地だな。そう思いながら広げるように双葉の背中を触る。

「んっ、はあっ……」

双葉の色っぽい声にドキドキしながら背中一面にオイルをつける。背中全体につけると隙間を縫うように濡れてない箇所を塗り出す。

「あっ……八幡先輩……そこっ」

そう言われて双葉が指摘した場所を塗る。これで背中全部塗り終わったから俺の仕事は終わりだな。

「終わったぞ」

俺がそう口にするると双葉は予想外のセリフを口にしてきた。

「あ、あの……八幡先輩が嫌じゃなかったら前も塗ってくれませんか？」

………は?!

双葉の爆弾発言に俺はメチャクチャ動揺してしまった。

「いやいや、前は自分で出来るだろ？」

慌てて遠回しな拒否をする。

「そ、その……私は、八幡先輩に塗って欲しいんです。……ダメですか？」

物欲しそうな声で質問をしてくる。

いつも思う。双葉は卑怯だ。こんな可愛い声で頼んできたら断れる訳ないだろ？しかも本人は狙ってやってないからタチが悪い。

「わかったよ。んじや塗る前に紐を結ぶぞ」

「あ、はい。よろしくお願いします」

双葉から了承を得たのでビキニの紐を掴みしつかりと結ぶ。もうロリコンと呼ばれるのは構わないが、端から見るとかなり危ない絵面だな……。もしも写真とか取られたらガチでヤバイ。

閑話休題…

ビキニの紐を結び終わった。緊張した為に予想以上に時間がかってしまった。

「じゃあ双葉、仰向けになってくれ」

「は、はい」

そう言って双葉は転がって仰向けになった。

……ヤバイ、余りの可愛さに声が出ない。まあ目の前で最愛の恋人が露出のある水着で寝転がりながら俺を見てるし当然か。

暫くこの状態が続いていると、双葉がモジモジしながら自分の身体を隠すように両腕を胸の辺りでクロスさせた。

「あ、あんまり見ないでください。……恥ずかしいです」

「あ、悪い。見惚れてた」

「………見惚れてたんですか？」

あ、ヤベ。また口に出してたか？

「いや、まあ、そのだな……」

「………よかった」

「はっ」

思わず素で聞き返しちまった…。

「だって私、スタイル良くないし…胸だって大きくないですから」
少し悲しそうに言う双葉。それを見て俺は思った。

「アホか」

「……え？」

双葉はキョトンとしているのを無視して口を開ける。

「俺は胸だのスタイルの良し悪しでお前と付き合った訳じゃねーよ。
大体お前まだ中1だろうが。これから成長すりゃいいだろ？」

つーか中1で国近先輩みたいな巨乳とかだったら逆に怖いからな。
呆れながらそう返すと双葉は悲しそうな顔を引っ込めた。

「……そうですね。八幡先輩は見た目とか気にしなそうですし、これ
から成長すれば……」

何かぶつぶつ言っているがまあ悲しみはなくなったみたいだし良
しとしよう。

「ありがとうございます。八幡先輩のおかげで気が晴れました」

「そうか」

「はい。……じゃ、じゃあお願いします」

真っ赤になりながら腕を広げる。改めて見るとやっぱり綺麗な身
体だな……

「やるのは手足でいいのか？」

「それと、お腹と脇を……」

「……え？マジで？」

冗談だよな？そりゃ恋人同士なら男が女の全身を塗るのはあるけ
ど……

まあ一度了承した手前断れないけど。

「わかったよ。但し胸と尻は塗らないからな」

そんな場所を塗ってみろ。間違いなく理性の壁が壊れて警察のお
世話になるからな。

「は、はい。そちらは……もう少し大人になってから」

最後ボソボソ言っていたけど聞こえてたからね？もしかして双葉

が高校生ぐらいになったらしろって事か？

……よし、今は聞かなかった事にしよう。

「んじゃ塗るぞ」

「お、お願いします」

唾をゴクリと呑んで深呼吸をする。

そして双葉の足に手を伸ばした。

「んっ……あっ……んくっ……くすぐりたい」

……さつきから双葉の声の色っぽいんだが。

あれから3分、俺は今双葉の腹にサンオイルを塗っている。手足については双葉が静かだった為そこまで問題はなかったが、腹に塗り始めた瞬間に双葉は色っぽい喘ぎ声を出し始めた。しかも腹がメチャクチャ柔らかくてこっちも緊張しぱなっしだ。

だが何とか終わる事が出来た。後は……

「じゃ、じゃあ最後に……」

そう、最後に脇があるんだよなあ……覚悟を決めるか。

そう思い双葉の脇に触れる。すると……

「ひゃあっ!!」

さつきより大きな声を出してくる。っーか動くな。あんなま激しく動くど手の位置が脇から胸に動くから動くな!!こうなりや短期決戦だ。

そう判断した俺は少し早く手を動かす。

「ふえっ?!……んんっー……あんっー!」

双葉は真っ赤になりながら激しく動くので慌てて双葉の身体から手を離す。こいつの喘ぎ声マジでエロいな……

双葉が落ち着いたのを確認して反対の脇に触れる。

「ふあっ………あっ、……き、気持ちいい……」

そう言ってくれるのは嬉しいが余り声を出さないでくれ。もしも他人に聞かれたらヤバイからね。

そう思い広げるように塗り出す。

「あっ、あっ………あんっ！んっ………あっ………んんっ！」

一際大きな声を聞いて漸く塗り終わった。

「ふう………」

時間は殆ど経ってないが精神的にかなり疲れたな。サンオイル恐るべし！

そう思った時だった。

「八幡先輩」

双葉に呼ばれたので振り向くと、

「お礼です」

ちゅっ………

俺の唇にキスをしてきた。いきなり不意打ちかよ?!

俺が驚いている間にも双葉はガンガンキスをしてくる。

「んっ………ちゅるっ………んんっ、ちゅっ」

随分と可愛い奴だ。俺は苦笑しながら双葉からのキスを優しく受

け止めた。

あれから5分、キスを済ませた俺は木陰の方に移動した。
「ふふっ」

そして俺の膝の上に乗って抱きついていている双葉は楽しそうだ。

「どうした双葉？」

「いえ、八幡先輩の膝の上が気持ちよくて……」

「まったく甘えん坊だな」

「す、すみません。……八幡先輩に甘えたくて」

「怒ってないから気にするな。何ならもつと甘えてもいいぞ」

「……はい。ありがとうございます。……ちゅっ……」

礼を言いながらキスをしてくる。やれやれだぜ。

双葉と唇を離し苦笑している時だった。

脇の小道から足音がしたので振り向くとさっきの留美って少女がいた。

「よう」

適当に挨拶をすると留美も1つ頷き、俺と双葉の横に腰掛けた。

暫くの間、川を見ていると留美が口を開ける。

「ねえ、2人は友達の所に行かないの？」

「八幡先輩と過ごしてたら随分時間が経っちゃったみたいなんだ。

……あ、私は黒江双葉」

双葉が自己紹介をしている。俺も自己紹介しとくか。

「俺は比企谷八幡だ」

「……鶴見留美。ところで2人は恋人関係なの？」

「うん、そうだよ」

「ふーん、楽しそうだね」

「うん。八幡先輩といると幸せだよ」

お前は俺がいるところで言うな。恥ずかしいからね？

「いいなあ……」

「何が？」

「そんな風と一緒に居て心から楽しいって思える人が居て」

「留美はいいなの？昨日留美の事情を少し聞いたけど1人くらいいいいの？」

「まあね。周りは皆ガキなんだもん。だから1人でも別にいつかなって」

「別に周りがガキだと思うなら無理に関わらなくていいだろ？」

俺が投げやりに言うのと留美は驚いた顔で見てくる。

「何だ？俺変な事言ったか？」

「え？ううん。昨日由比ヶ浜って人は小学校の友達とか思い出って大事とか言ってたから」

「それはあいつにとつての話だ。あいつにとつて大事でも他の人は違うってのはあるだろ？俺は小学校の思い出とかいららないと思ってるしな。んな思い出あってもボーダーじゃ役に立たないし」

思い出あれば個人総合ランクを上がるとかなら思い出作るけどな。

「……八幡先輩、それは極端過ぎます」

双葉は呆れているが極端過ぎたか？

「八幡ってボーダーなんだ？」

呼び捨てかよ？まあいいけど。

「まあな。双葉もボーダーだ」

「……まあ同じグループにいなきや八幡と双葉の接点つてなさそうだしね」

まあ確かにな。出会った当初は、片や目の腐った高校生で片や小学生だしな。普通に考えたらありえない組み合わせだ。

「そうだね。私は八幡先輩に助けられて知り合ったんだ」

「ふーん」

そんな風に他愛ない会話をしていると米屋達がいる方向とは反対方面から気配を感じたので視線を向けると水着を着た由比ヶ浜と雪ノ下がこつちに歩いてきた。

俺が2人の方向を見て気になったのか双葉も視線を向けると急に不機嫌な顔になり始めた。ヤバい、面倒事の予感が……

嫌な予感に胃を痛めていると向こうも俺と双葉に気が付いたようだ。

すると由比ヶ浜は何かキレた顔でこちらに早歩きをしてきて、雪ノ下は俺と双葉を睨みながら由比ヶ浜に続いて来た。

この状況に留美はキョトンとしていた。状況をわかっていない留美の顔は可愛く見えた。今の俺にとってお前が1番のオアシスだからお前はそのままできてくれよ。

そう思っている間にも2人がドンドン近づいてきて、嫌な予感が確信に変わった事を現実逃避気味に理解した俺だった。

黒江双葉は鶴見留美の話聞く

絶対に嫌な予感がする。

そう思った俺の予想は的中した。

由比ヶ浜は俺達の目の前に立ち、いきなり怒鳴ってきた。

「ちよつとヒツキー！何してるし?!」

煩いな。少し声のボリューム落とせ。双葉と留美も煩そうにしてるからな？人の迷惑を考えろ。いくら山の中とはいえ響くからな？

「何してるって普通に他愛ない会話だけど？」

事実を告げるも由比ヶ浜は睨んだままだ。

「そうじゃなくて、何で膝に女の子をのせてるし!!」

「煩いな。別にいいだろ？俺達は恋人同士なんだし」

そう返すと由比ヶ浜は双葉を睨んでくる。双葉は睨まれる覚えがないのかキョトンとしてるけど。

すると

「あら？どうせ弱味を握って脅したのでしよう？そうでなきや目の腐った貴方に恋人なんて出来るはずないわよ」

雪ノ下が後ろからやって来て喧嘩を売ってくる。何で俺が脅迫した事前提なんだよ？流石にイラついたので言い返そうとした時だった。

「何考えてるの?!キモい！ヒツキーマジでキモい!!変態！ホントキモい！最低!!ホントキモ過ぎだから!!」

由比ヶ浜が喚いてくる。何でここまで罵倒されてんだ？溜息を1つ吐こうとした時だった。

「だったら八幡先輩に関わらなければいいじゃないですか」

俺の膝の上に座っている双葉が由比ヶ浜にそう言うのと由比ヶ浜は双葉を睨んでくる。双葉はそれを無視して話し続ける。

「何ですかその眼？だってそうじゃないですか。八幡先輩の事を気持ち悪いと思うなら八幡先輩に関わらなければいい話です。そうすれば貴方は嫌な思いをしませんし、私も八幡先輩の侮辱を聞かないで済みますし両者共にお得ですよ」

双葉がそう返すと由比ヶ浜は呆気にとられている。俺も同感だ。確かに双葉の言う通りだな。俺もキモいキモい言われるの疲れるし。「そうだな。おい由比ヶ浜、俺の事をキモいと思うのは構わないが、それだったら双葉の言う通り関わらないでくれ」

「ち、違うよヒツキー!!そんなつもりじゃなくて……」

「じゃあどんなつもりだよ？」

「……だ、だから女の子を膝の上に乗せるなんて、そういうのよくないし……だからキモいって言ったのは軽い冗談のつもりで……」

「……冗談？」

何か俺の膝の上から殺気がするんですけど……。これはアレだ。職場見学で雪ノ下に向けた殺意と同じ匂いだ。留美もビビってるし少し落ち着け

ビビってる中双葉の口が開く。

「軽い冗談のつもりで人を貶めるんですか?……それって留美のクラスの人達と同じ事をしてませんか?」

待てコラ!!お前はどんだけデカイ爆弾を投下するんだ?!今のは正直ビビったぞ。

双葉がそう言うのと留美は驚いた顔をして由比ヶ浜の顔はドンドン青くなってきている。んで雪ノ下は双葉に強い視線を向けている。

「……あなたねえ。由比ヶ浜さんは事実を言っただけじゃない。比企谷君を気持ち悪いと言って何が悪いのかしら?」

「お前随分好き勝手言ってくれるな雪ノ下。言っている事と悪い事があるだろうか」

「あら?私は事実を言っただけよロリ谷君」

こいつは本当にムカつくな。マジでトリガー起動したいんだけど。

「……八幡先輩の苗字は比企谷です。いい加減八幡先輩を侮辱するの止めてくれませんか?」

「事実を言っただけよ。侮辱じゃないわ」

まあロリコンは否定しないから侮辱じゃないな。つても雪ノ下に言われると凄いムカつくな。

「……つまり貴女は事実なら何を言ってもいいと?」

「ええ。私虚言は言わないもの」

暴言とかはよく言ってるけどな。

そう思っていると双葉はとんでもない爆弾を投下してきた。

「そうですか。なら私も好きに言っても構いませんね？私に手も足も出ずに呆気なくやられた雑魚ノ下さん？」

双葉が爆弾を投下すると雪ノ下は射殺するような視線を双葉に向けてきた。当の双葉は涼しい顔をしている。

「何で睨むんですか？貴女は事実なら何を言ってもいいと言ったじゃないですか？ですから私も事実を言っただけですけど」

まあ確かに雪ノ下は双葉に手も足も出ずにやられたからな。双葉の言ってる事は紛れもない事実だ。当の雪ノ下もブーメランになるとは予想外だったのだろう。苦い顔をして睨んでくる。

双葉はそれを蔑んだ眼で見ながら口を開けようとする。正直このままだと俺の胃が痛くないそうさ。

そう判断した俺は双葉の頭に軽いチョップをする。

「落ち着け双葉。一々突っ掛かるな」

でないと言った面倒な事にしかならないからな。雪ノ下と関わると碌な事にならないし。

「……ですが」

「いいからほっとけ。お前らも留美に何か用があるんだろ？話さなくていいのか？」

「ヒッキー……」

何か由比ヶ浜は俺の事を味方みたいな眼で見てるが俺はお前の味方じゃないからな？

今回は俺がバカにされたからそこまで怒ってないだけだ。もし由比ヶ浜が双葉に一回でもキモいと侮辱したら、その瞬間俺は容赦なく由比ヶ浜を半殺しにしていたらどうしな。

「さっさと済ませろ。……まさかと思うが俺をバカにしに来ただけじゃないよな？」

「ち、違うよ！話を戻すよ。……留美ちゃんも一緒に遊ばない？」

よかった。もし俺をバカにするだけだったら双葉がブチ切れただろうし。つーかそれを言うだけであんなに揉めたのかよ?! 本当頭痛くなってきた……

由比ヶ浜はそう言うのと鶴見に手を出してくる。すると鶴見は目を合わせずに首を横に振る。

「だから言ったじゃない」

雪ノ下が声を掛ける。誘われたら断る、ぼっちの安定行動だ。普通何か裏があると思ってしまう。

すると鶴見はこっちを見ながら話してくる。

「ところで八幡。八幡は小学生の時の友達っている？」

「いないな、必要性もないし。普通なら高校に上がっても小学校時代の縁があるのなんてほんの数人だろうし」

「うん。私は今中1だけど既に友達の半分くらいは会わないし」

「そういう事だ。だから別に小学校時代に友達がいなくても悪い事じゃない。高校生になったら高校の友達の方が優先順位高いしな」

「うん、でもお母さんが納得しない。林間学校で沢山写真を撮りなさいって、デジカメ……」

なるほど、その為を買ったのか。随分気合いが入っているな。

そう思っていると、鶴見が口を開く。

「私の状況も今の嫌な遊びも高校生になれば変わるのかな？」

「少なくとも、今のままなら絶対に変わらないわね」

雪ノ下の鋭い声が響く。まあ同感だな。嫌な遊びは周りの空気があるから1人じゃどうしようもないが、鶴見の状況は何か明確な変化

がないと変わらないだろう。

「でも留美ちゃんは今が辛いんだからどうかしなと……」

いや、どうにかしなとって……無理だろ？ 由比ヶ浜が話すと鶴見は困った表情になる。

「辛いつていうか、惨めっぽくて嫌だな。シカトされると自分が一番下だと感じちゃう。でももうどうしようもないし」

「何故？」

雪ノ下が質問すると鶴見はいくらか話しづらそうだったが、ちゃんと言葉にする。

「私……見捨てちゃったし、もう仲良くできない。仲良くしてても、またいつかこうなるか分かんないし。同じ事になるなら、このままでもいいかなって」

成る程な、こいつはもう見限ったのか、自分とその周囲を。リア充はリア充としての行動を求められ、ぼっちはぼっちである事を義務付けられる。カーストが高い者が下に理解を示す事は認められるがその逆は許されない。それが子供の国の、腐ったルールだ。実にくだらない。

「だったら無理に関わらなくてもいいと思うよ」

双葉がそう言うのと留美は驚いた顔で見てくる。

「……でもお母さんが……」

「重要なのは留美自身の考えだよ？ 留美が学校の人と関わりたくないならお母さんが納得しない結果になってもいいと思う」

双葉がそう口にするのと留美は黙る。双葉は更に質問をする。

「ねえ留美。さつき惨めなのは嫌だって言ってたけど、学校でシカト

されるのが嫌なの?」

「……うん」

ぐっと嗚咽を堪えるように留美は頷く。悔しいのか今にも涙が落ちそうだ。

「なら逃げなよ。そんな場所にしても辛いだけだよ? 違う場所に身を置いた方が良いよ」

昨日俺と海老名さんが言った別のコミュニティに逃げろって案か。まあ俺達が出来る手段ではベストに近い手段だろう。

「待ちなさい。それじゃあ根本的な解決にならないわ」

すると雪ノ下が睨みながら口を挟んでくる。双葉は雪ノ下を睨み返し口を開ける。

「別に根本的な解決にならなくてもいいんじゃないですか? 重要なのは留美自身が納得するかどうかですから」

「だとしてもそれは逃げよ。逃げた先で同じ目に遭ったとしてもまた逃げるのかしら?」

「その何処が悪いんですか? 逃げる事は悪くないと思います。……それに根本的な解決と言いましたが、どうやって解決するんですか?」

この手の問題は難しいと思いますが」

「彼女自身が強くなって舐められない様になればいいじゃない? 私も嫌がらせしてきた相手は返り討ちにしたわ」

「留美は貴女じゃないです。貴女が出来たからって留美が出来るとは言えません」

2人の間に火花が飛んでいる。とりあえず落ち着かせるか。

「おい、お前ら2人で話を進めるな。大事なのは留美自身の意見だ。……で、留美。お前はどうか考えてるんだ?」

留美に向けて話しかけると留美は双葉を見てくる。その眼には涙は無くなっていた。

「ねえ双葉」

「何?」

「さつき双葉は違う場所に身を置いた方がいいって言っていたけどさ。何処に逃げればいいの?」

そうだ。良く考えたらそこが1番の問題だ。仮にこの案を実行しても違う場所で留美の居場所を作れるかが問題だ。作れなかったら更に辛い眼に遭う可能性もあるし、そうなったらまた違う場所に逃げないといけないしな。

すると双葉は1つ頷き口を開ける。

「うん。留美さ、ボーダーに入らない？」

双葉の発言にこの場にいる全員が絶句してしまった。

黒江双葉と鶴見留美は友達になる。

「うん。留美さ、ボーダーに入らない？」

双葉の発言にこの場にいる全員が絶句してしまった。その中でいち早く再起動したのは留美本人だった。

「……え？ボーダー？」

「うん、そうだよ」

「ボーダーって八幡と双葉がいる所だよね？そっちの2人も？」

「ううん。私と八幡先輩とさつきまで私達と一緒に居た人達。そっちの2人は違うよ」

「そうなんだ。……でも何でボーダーなの？」

留美は不思議そうに聞いてくる。

「それはね、ボーダーにはいくらでも遊び相手がいて楽しいからだよ」

「……遊び相手？ボーダーって近界民を倒す職業で、遊んだりして楽しいってイメージないんだけど？」

「……もしかして留美、ボーダー基地に職場見学した事ない？」

「……うん」

「まあ学校によつては職場見学をしない場所もあるからな」

「まあそうですね。八幡先輩の学校はしたとしても他がそうとは限らないですね」

「お前の学校では見学あったのか？」

「いえ、私の学校は中学2年になってからあります。私は楽しさを求める為ではなく、八幡先輩に会いたくて入隊しました」

お前は笑顔でそんな事を堂々と言うな。顔が熱くなって仕方ないんですけど?!

「……それで何で楽しいの？」

留美が呆れた顔をしている。しまった。双葉の可愛さに周りが見えなくなってしまった。

「うん。ボーダーでは防衛任務以外にランク戦というのがあってボーダー隊員同士がトリガーを使って戦う訓練があるんだけどそれが凄く楽しいんだよ」

「そんな訓練があるんだ。……でも訓練を楽しんでいて思いながらしていいの？」

「普通はダメだけど、ランク戦は沢山やればやるほど力になるから前向きにやった方がいいと思うな。趣味にランク戦って言う人もいるし」

太刀川さんとか緑川とか米屋だな。……今更だがランク戦を趣味と言っている人はバカだらけのような……

「そうなんだ」

「うん。私もあんまり社交的じゃないけどボーダーで色々な人とランク戦したり防衛任務をしたら普通に話す相手が出来たよ」

留美は双葉の話に興味を向けている。俺としても留美がボーダー入りするのは賛成だ。理由としては……

「まあそうだな。何せ小学校時代友達が一人もいなかった俺でも結構仲が良い相手を作れたしな」

「……八幡先輩、自虐はやめてください」

「自虐じゃない。事実を言ったただけだ。まあそれは置いとくぞ。……で、お前は どうする？」

留美に話しかけると留美は訝しげに見てくる。

「いやお前の答えだよ。お前は どうしたい？ 双葉が言ったようにボーダーで新しい居場所を作るか、雪ノ下が言ったように強くなって舐められないようにするか、どっちにするんだ？」

「後者に決まってるでしょう？ 新しい居場所を作るなんてただの逃げ。情けないわ」

後ろで雪ノ下が話しかけてくる。……まったくお前は……

「それを決めるのはお前じゃない。留美本人だ。お前が動くのは留美が助けを求めた場合の筈だ。留美が助けを求めているかわからない以上は口を挟むのは違うからな?……で、留美どうするんだ?」

留美に話しかけると留美は暫く何かを考えているみたいだ。1分程すると、

「ねえ八幡」

「何だよ?」

留美が俺に話しかけてくるので返事をする。

「ボーダーに入ったら友達、出来るかな?」

縋るような目を向けてくる。普通なら出来るよと言うべきだが俺は甘くないんでな。

「それはお前次第だ。お前の行動次第じゃ出来ない事もある」

俺ははつきりと告げた。曖昧に誤魔化すよりそっちの方がいいだらう。

「やっぱりそうなん「でも」……え?」

留美の言葉を遮った。

「俺は少なくとも既に双葉とは仲良くなってると思う。その時点でボーダーに友達がいるぜ?」

俺がそう口にするると双葉と留美は驚いた顔をして見てくる。

「何だよその眼?俺の見る限りじゃ双葉も留美もさつきから仲良さそうに話してたぜ?」

クールだと思っていた留美は双葉にはペラペラ喋ってたし、双葉も留美の悩みについて真剣に考えてボーダーに入隊する事を提案したし仲良いだろ?」

「ねえ留美」

双葉が呼びかけると留美は顔を上げる。双葉は優しい笑みを浮かべて留美に話しかける。

「私は留美と一緒にランク戦したいし、もっと仲良くなりたいな。留美は?」

留美は信じられない顔をしている。まあ今までハブられてたし疑

心暗鬼になるのは仕方ないな。

「……私なんかでいいの?」

不安そうに聞いてくる留美を見て双葉は、

「もちろん」

笑顔を浮かべ俺の膝から立ち上がり手を差し出して来る。留美はおずおずと手を出す。

「……じゃ、じゃあ、よ、よろしく双葉」

「うん。こちらこそよろしくね。留美」

言葉を交わして握手をする2人。双葉は笑顔を見せて留美もぎこちないが笑みを浮かべている。ヤバイ、天使2人の握手……。ここは天国か? 凄い癒されるんですけど!!

2人に癒されていると留美は俺を見てくる。

「ねえ八幡」

「何だ?」

「ボーダーってどうやってたなら入れるの?」

「決めたんだな?」

「うん。私、ボーダーに入りたい。双葉ともっと仲良くなりたい」

「留美……」

「そうか……。入隊についてはボーダーのホームページを調べてみる。簡単にわかる」

「うんわかった」

「待ってるよ」

双葉が笑っているとピピピツと音が鳴り出した。見ると留美の服のポケットから音が鳴っている。留美は服のポケットから携帯を出してきた。

「あ、お昼ご飯の時間だから私行くね」

「……あ！じゃあ私の番号とアドレス教えた方がいい？」

「うんお願い」

「わかった。……はい」

「もらったよ。ありがとう」

「じゃあこれで問題は解決か……」

溜息を一つ吐くと留美がこちらを見てくる。

「問題？」

「あー、その、何だ……、昨日ボランティアの連中はお前の環境をどうにかしたいって事で議論したんだよ」

「ふーん。でも双葉と友達になれたし満足だよ。だから問題は解決したよ」

本人が言っているので問題は解決されたのだろう。そう思っていると留美が口を開ける。

「あ、お願いがあるんだけど」

「お願い？何だ言ってみろ？」

「その雪ノ下さんと葉山さんにはこれ以上何もさせないで。雪ノ下さんのやり方は私には無理だし、葉山さんが何か行動しようとしたら多分よくないことが起きると思うから」

それを聞いた雪ノ下は留美を睨んでいるがお前自分のやり方じゃないと納得しないのかよ？それは助けじゃなくて自己満足だからな？

まあそれより気になる点がある。

「葉山？あいつ何をやったんだ？」

「うん、実は……」

留美は葉山がやった事を話し出した。

「あいつバカか……?」

そう呟いた俺は悪くない。何せ葉山のやった事なんて皆仲良くを地で行くように留美をハブっている連中の中に入れたり、皆が見ている前で平然と話しかけたらしい。

呆れて何も言えん。

ぼっちに話しかけるのは秘密裏にしないではいけない。でない日晒し者になる。葉山が動くと周りも動く。つまり高校生が動く小学生も動く。小学生の心境を忖度するなら、なんであいつが高校生に話しかけられてるの?といった所だろう。

好意的に返すと「調子に乗っている」となり、すげなく返すと「何様な訳?」となる。どのみちマイナス評価だ。だからボツチに話しかける時は誰も見てない所でさりげなく話しかけるがベストな選択だ

あいつは孤独の本質を理解してるのか?

「あいつに頼るのは間違いだな。おい由比ヶ浜」

「な、何?!」

「今の話聞いてたよな? 葉山に伝えとけよ」

「え?! そ、それは……」

何か言いたそうだな……

「留美自身が拒絶してるんだぞ? ならばつきりとやるなって言うのが当然だと思うが?」

「そ、それはそうだけど……」

だから何だよ? その何か言いたそうな声は?

「まあいい。おい留美。いぎとなったら俺が葉山の元にお前を連れてく。そんではつきりと何もするなって言え」

「……わかった」

「よし。じゃあ行け」

「うん。……あ、双葉、最後に1ついい?」

「何?」

双葉が聞くと留美は恥ずかしそうにカメラを出してくる。

「そ、その……一緒に写真撮ってくれない?」

どうやら留美は双葉と思い出を残したいみたいだ。少し前に進んだみたいで何よりだ。双葉も笑顔で頷いている。

「いいよ。八幡先輩、撮ってくれませんか？」

「わかった。留美、カメラ超越せ」

そう言つて留美からカメラを貰い2人に向ける。2人はかなり近付いて軽い笑顔を見せている。この一枚は唯一無二の一枚也。一写入魂。最高の写真を撮るぞ!!

内心そう叫びシャッターを切った。念の為もう一枚つと。

写真を撮り留美に返す。留美は写真を見て嬉しそうな笑顔を浮かべている。

「ありがとう。八幡、双葉」

「気にするな。満足して何よりだ。それより昼飯の時間は大丈夫か？」

アラームが鳴つてから大分時間が経つてるしな。

「あ、本当だ。じゃあ私行くね」

「またね留美。もし良かったらご飯食べ終わったら一緒に遊ばない？」

「……考えとく」

そう言つて留美はロッジがある方へ向かつて歩き出した。俺と双葉は留美が見えなくなるまで見送り、顔を見合わせる。まあ直ぐに拒否しないだけ双葉を信頼している様で何よりだ。

そんな事を考えていると重要な事を思い出した。

「ヤバい。出水達の事忘れてた」

「……あ」

双葉も気付いたのかポカンと呟いた。どうやら双葉も忘れてたようだ。しかも向こうからすれば長時間イチャイチャしてると思われてるだろうし、「面倒臭い……」

「とりあえず戻ろうぜ」

「はい」

そう言つて双葉と歩き出そうとすると、

「ちよつ！ちよつとヒッキーー！」

由比ヶ浜が呼んでくるので振り向く。

「何だよ？お前らの目的は留美に遊びの誘いをする事だろ？留美がない以上話は終わりだろ？」

そう返すと由比ヶ浜は

「そうだけど!!あれ？それならいいの？」

何かアホな事を言っている。よくわからんヤツだ。

「まあいい。とりあえずお前も問題は解決したんだし他の奴等の所に戻れ。何か見てるぞ」

向こうからは幾らかの視線を感じるし。

「あ、ホントだ」

「わかったみたいだな。じゃあ俺らも連れを待たしてるから行く。お前らは葉山に伝えとけよ。んで雪ノ下は何もするなよ」

そう口にするると今まで黙っていた雪ノ下は不満がありそうな顔で見ってくる。

「お前、留美が助けを求めるなら解決に努めるって言ったよな？留美はお前の助けを望んでいない。だからこれ以上動くのは違うよな？」

そう口にするると雪ノ下は下唇を噛んで睨んでくる。睨んでるが留美がお前の協力を断らなくてもお前じゃ無理だと思っぜ？だってお前自分の考えは全て正しくて相手が間違ってると思ってるだろうし。

「ちよつとヒツキー!!言い過ぎだよ!!」

「は？いや昨日雪ノ下が言った事をそのまま言っただけだぜ？言い過ぎも何もないだろ？」

そう返すと由比ヶ浜も黙る。ホントこいつらといると疲れるな……。まあ話は終わったしどうでもいいか。

「双葉行くぞ」

溜息を吐きながら俺は双葉の手を引いて出水達の所へ歩き出した。

比企谷八幡は新しい面倒事に頭を痛める

双葉と2人で出水達の所へ到着すると、全員がニヤニヤした顔で見
てくる。凄いウザい。双葉も溜息を吐いてるし。

「悪い、遅くなった」

「気にするなハッチ。……で、どうだった？」

「何がだよ？」

嫌な予感しかしないがとりあえず質問をすると米屋はわかっ
とばかりに肩を叩いてくる。

「隠すなつて。黒江ちゃんと大人の階段を上った感想を聞かゲフオ
!!」

余りに苛立ったので米屋の腹にパンチをうちこんだ。米屋は悶絶
しているが『僕は悪くない』

「アホか。双葉は12歳だぞ？手を出したら冗談抜きで捕まるから
な。手を出すとしたら13歳になってからだ」

日本だと同意があつても13歳未満の女子に手を出すのは犯罪だ
からな。

「じゃあ黒江ちゃんが13歳になったら直ぐに手を出ガハツ!!」

次は出水の腹にパンチをうちこむ。こいつら本当のバカか？

「黙れ。そういうのはもつと手順を踏んでからだ。大体直ぐに手を出
すなんて身体目的で付き合ってるみたいじゃねえか」

俺は双葉の優しさに触れて好きだとわかったんだ。見た目など二
の次だ。

「でもイチャイチャしてるとしたら長過ぎだよ。何かあつた？」

珍しく小町が心配そうな顔をしている。そんな顔は見たくないか
ら話すべきか？

「まあそれについては飯の時に話すよ」

「じゃあ早速食べに行こうよー？泳いだら疲れちゃった」

マジか?!俺達が留美と話してる間に遊び倒したのかよ?!

「んじや他の連中は国近先輩の意見に賛成か？」

「うん！俺腹へったし！」

緑川が真っ先に賛成して他のみんなも頷いたので俺達は市民ロツジに足を向けた。

市民ロツジに着き飯を食べ始めると小町が口を開ける。

「それでお兄ちゃん。さつき双葉ちゃんと何かあったの？」

皆が興味深そうな顔をして頷いてくる。

「ああ、お前らさっきの小学生を覚えてるか？」

「えーつと確か留美ちゃん？だっけ？」

「そうそれ。実は留美についてなんだが……」

「マジか?!そいつとバトするのも楽しみな!!」

「いや、よねやん先輩、初めの一言がそれ？」

あれから3分、結局留美がクラスでハブられてる事、問題について話した事、双葉が解決案としてボーダーに入らないかと提案して留美が賛成した事全て話した。

全て話すと米屋がテンションを上げながらそう言ってきて全員が呆れた。

「でも良い考えだと思うよ。我慢するよりは逃げる方が楽だしね」

「やるな比企谷。俺は昨日話を聞いた時は無理ゲーと思ったしな」

「まあ考えたのは双葉だけだ。俺は何もしてないな」

「双葉が？へエ〜」

「……何よ駿、その目やめてくれない？」

「べつつにく〜」

緑川が双葉にニヤニヤ笑いを浮かべ双葉は真っ赤になって緑川に突っかかっている。

「ま、まあ問題は解決したんだ。これで何も気にせずに遊べるな」

「そうだな。ところでハッチ、もしその子が試験に落ちたらどうすんだ？」

「したらオペレーターを推奨してみるよ」

「おう、したら私が教えてあげるね〜」

「あざす。そういや小町はどのポジションをやりたいんだ？」

「うーん。小町はどれもやりたいな〜」

どうやらまだ決めてないようだ。まあ焦る事はないだろう。

「攻撃手なら比企谷が教えてやれよ」

「俺？別に構わないが孤月特化の攻撃手を目指す場合ならな。スコールピオン特化の攻撃手なら風間さんやカゲさん、孤月使った万能手目指すなら烏丸あたりがいいだろ？ま、そんな時は俺が頼んでおくから安心してしろ」

「おう、流石お兄ちゃん。ボーダー隊員としては頼りになるうー!!」

「待てコラ。まるで俺がボーダー隊員以外じゃ頼りにならないみたいじゃねーか」

「いやいや、専業主夫志望で働いたら負けとか言ってるお兄ちゃんだよ?」

グツ、否定が出来ん。確かにそうだ。小町は昔から俺が専業主夫志望である事を知ってるしな。

「いや待て小町。俺は専業主夫志望は止めたんだ」

そう口にする和小町は絶句している。そして……

「……え?!嘘だよ?!専業主夫志望じゃないお兄ちゃんなんて小町のお兄ちゃんじゃないよ!!」

やかましいわ!!出水と同じ事言って驚くな。

「嘘じゃないよ。双葉はハッチ先輩と結婚したら家庭に入りたいて

言ったんだ。だからハッチ先輩は働きに出るって決めただよ」
「駿!!」

すると緑川が唐突に口を開けて、それを聞いた双葉は緑川を揺さぶっている。その光景を見てると小町が双葉の肩を掴む。

「双葉ちゃん!!お兄ちゃんを更生してくれてありがとう!!これからもお兄ちゃんをマトモにしてあげてね」

「「ぷっ」」

小町は涙目で双葉に礼を言っているがお前は俺を何だと思ってるんだ?あと3バカは笑ってんじゃねえよ!殺すぞ?

「まあまあ。食事中は静かにだよ?」

「は、はい」

国近先輩が場を収めるように笑顔で小町と双葉の頭を撫でる。あのゆるふわな雰囲気を出した国近先輩の頭撫では逆らえないからなあ……。俺も何度かされたがあれはリラックス出来る。

2人も落ち着いたので食事を再開する。

「そう言えばハッチ先輩は万能手は目指さないの?」

食事を再開して暫くすると緑川が聞いてきた。

「何だ?藪から棒に」

「いやハッチ先輩よくアステロイド使ってるからポイントは増やさないのかなーって」

まあ一応アステロイドは入れてるけど基本は牽制用だしな。

「いや、比企谷は昔万能手を目指してたぜ」

出水がそう口にするると当時入隊していない、米屋、緑川、双葉は驚

いた顔で見ってくる。

「え？ハッチマジ?!」

「昔だ昔。一応嵐山さんから突撃銃の手解きは軽く受けてた」

「じゃあ何で止めちやっただの?!」

「気まぐれだよ」

嘘だけどな。一応理由はあるが言いたくない。

「八幡先輩、教えてくれませんか？私、八幡先輩の全てが知りたいんです。……ダメですか？」

俺の服の裾を掴み上目遣いで見ってくる。だからその眼は止めてくれよ……

「わかった。話すよ」

「比企谷君は小町ちゃんとか双葉ちゃんには弱いね」

「まあ否定はしません。それで理由は……」

「理由は？」

双葉が繰り返し聞いてきたので深呼吸をして口を開ける。

「俺、銃で点取るより、孤月で暴れる方が性に合ってる事がわかったんだよ。だからアステロイドで牽制して、孤月で止めつつスタイルにしたんだよ」

俺がそう口にするのと米屋が

「……それ、間違いなく太刀川さんの影響を受けてね？」

そう言われて頷く。実際太刀川さんの影響を受けたのか銃で点を取るスタイルが余りに好きになれなかった。

……けど、あのダンガー隊長の影響を受けたってのは何となく言いたくなかった。

すると国近先輩は

「戦闘スタイルはともかく、それ以外は影響を受けないようにね」と言ってくるのでしつかりと頷いた。横を見ると出水も頷いていた。あの人からレポート関係で被害を被っている太刀川隊メンバーからすればその言葉はしつかり胸に刻む必要があるからな。

周りでは小町以外は納得していた。当の小町はキョトンとしているけど。

「…ねえお兄ちゃん。太刀川さんってそんなにダメな人なの？」

「ダメな人だな」

「ダメだな」

「ダメだね」

「ヤバい人だね」

「戦闘以外は学んじやいけないぞ」

「えっと……少し問題はありますけど……悪い人じゃないですよ？」

双葉随分オブラートに包んでるな。俺の恋人は優しい奴だ。後米屋、お前さつき戦闘以外は学んじやいけないと言っていたがお前も同レベルだからな？

「あ、あはは……」

小町は苦笑いしながら全員を見渡してくる。お前も太刀川さんの影響は受けるなよ？頼むから。

小町に太刀川さんの影響を受けない事を祈りながらした食事を済ませ、俺達は再度川に行つて遊んだりなど色々な事をして遊び倒した。

尚途中で留美やって来たので双葉が誘った。留美は戸惑いながらも一緒に遊んだ。その際に米屋が入隊したら勝負と言つてきて留美がビビったので、川に突き落としたりなど色々な事があつた。

そんなこんなで遊んでいると日が暮れてかなり夕日が見えてきた。

「……私、夕食があるから行くね」

「おー、次会う時はボーダー基地で会おうぜ！」

「は、はあ……」

「やめんか槍バカ」

「またね留美」

「うん。またね双葉」

双葉に笑顔を見せて留美は去っていったので俺達も夕食を食べに市民ロτζジへ歩き出した。

「いやー、あの子可愛いね〜」

「まあそうですね」

「え？ハッチ、ロリコン？」

「お前黙れ」

もうロリコンである事は否定しないが他人に言われると凄いムカつくな。

そう思いながらポケットに手を突っ込むとある事に気が付いた。

「やべ、更衣室に携帯忘れた。取りに戻るから先飯食ってろ」

「あ、じゃあ私も行きます」

「おっ、当然のようにハッチに付いていくなんてまるで夫婦みたゲホッ!!」

米屋の言葉を耳に入れながら走り出した。何か後ろで呻き声が聞こえたけど気のせいだろう。走る時に足を思い切り上げた以外何もしてないし？

更衣室に入り携帯を確認したのでポケットに入れる。

更衣室から出ると双葉が抱きついてきた。いい匂いにドキドキしながら口を開ける。

「どうした双葉？」

すると双葉がモジモジし始める。

「そ、その……八幡先輩の唇が恋しくなっちゃって……」

「……なるほど。だから俺に付いてきた、と？」

「……は、はい」

やれやれ可愛い奴だな。苦笑をしながら近くの岩に座ってそつと双葉を抱きしめる。すると双葉も優しく抱き返してくる。

「5分だけだぞ?」

「……はい」

双葉から了承を得たので双葉を優しく引き寄せて顔を近づける。
そして……

ちゅっ……

俺は自分の唇を双葉の唇に当てる。

「ん……ん……」

双葉から気持ちよさそうな声が漏れる。暫くの間キスを続けていると、

「んむっ……んちゅ……ちゅるっ……」

双葉が小さい舌を俺の口内にそっと入れてきた。まったく今更だが中1とティープキスしてる俺って……

自分に悪態をつきながら俺も舌を出して双葉のそれと絡める。

「ん、んむっ……んちゅる、んあ、っん……っ」

双葉は一瞬驚いた顔をしたが直ぐに舌を激しく絡めてきた。周りにはぴちゅ、ちゅるっ、くちゅ、と卑猥な音が響きわたる。

「ちゅるちゅる……好きです、大好きなんです……」

俺達はどっちの口にどっちの唾液があるか分からなくなるまで舌を絡め続けた。

「……すみません、約束を破ってしまっ」

「気にするな。後半は俺も夢中になったしな」

結局5分の約束の筈が10分以上してしまった。こりや帰ったら出水達にからかわれるな。

そう思いながら俺達は手をつないで市民ロτζジへ歩き出した。

そう、今の俺達は10分以上デイープキスをした事を後悔していた。

しかし後になって、5分以上キスして良かったと思う様になるとは、この時には夢にも思わなかった。

市民ロツジへ歩く事3分、明かりが見えてきた所で双葉が横を見て
声を出した。

「……あれ？」

「どうした双葉？」

「い、いえ。あそこに留美がいた様な……」

見ると薄い暗闇の中に小さな人影と大きな人影があった。大きな
人影は誰だか分からないが、小さな人影は留美の様な気がする。

「……行ってみるか？」

「はい」

双葉も頷きそちらの方向へ歩き出した。

暫く歩くと人影が誰だかわかってきた。

「あ！留美だ！」

双葉がそう言つて早歩きになるので俺もそれに続いた。

「留美!!」

双葉が話しかけると小さな人影がこちらにやって来た。どうやら
本当に留美の様だ。

「双葉」

「こんな所でどうしたの？」

「うん。ちよつとね……。でも双葉も八幡も来てくれて助かったよ」

助かった？ どういう事だ？

疑問符を浮かべているとザツ、ザツ、と足音が聞こえたので振り向
くと大きな人影がこちらにやって来た。

人影の正体がわかった俺は訝しげに口を開けた。

「お前……何をしてるんだ？………葉山？」
そこにはクラスのリア充グループのトップ、葉山隼人がいた。

……何か嫌な予感がしてきて頭が痛くなってきた

こうして旅行は終わる

「何でここにいるんだ、葉山？」

とりあえず思った事を聞いてみる。現在、市民ロジの近くで葉山が留美に話しかけていた。留美の助かった発言から余り愉快的話ではないのだろう。

「やあヒキタニ君。実はさっき話し合った結果、留美ちゃんが皆と話し合いをしようって事になってね。今留美ちゃんに来るように頼んだだけだ」

……は？

「待て。お前そんな事したら留美が皆に責められるからな？」

そんな事をしてみる。間違はなく留美に『高校生に縋った卑怯者』って肩書きが付いちやうからな？

「いや、あの子達は根は悪くないと思う。だから俺はその可能性に賭けたいんだ」

こいつ頭沸いてるのか？そんな可能性はないからな。まあこいつに言っても無駄だろうから違う事を言うだけだ。

「お前の話はわかった。だがそれは留美の了承を得たらの話だ。留美が嫌がっているならやるべきじゃないだろ？」

「……八幡の言う通り結構ですから」

留美が便乗した様に言ってくる。すると葉山は苦い顔をして口を開ける。

「……でもそれじゃあ問題が解決しない」

「……は？」

ちよつと待て。この問題は既に双葉によって解決してるだろ。何言ってるんだこいつは？

……ん？まさか……

「おい葉山」

「何だい？」

「……お前、由比ヶ浜から留美の問題について何も聞いてないのか？」

俺の考えを口にする。

すると葉山は

「結衣? いや、特に何も聞いてないけど?」

「……あー、なるほど。わかったわかった」

あのバカ何を考えてるんだ? 問題は解決したのに何で言わないんだ? ふぎけるのも大概にしろよ。

まあいい。今は葉山だ。

「じゃあ教えるぞ。留美の問題については既に双葉が解決したんだよ」

すると葉山は驚いた顔で見ってくる。

「……本当かい?」

「ああ、留美はボーダーに入るって事で居場所を作る事に決めた。だからもうお前らは問題に関わらなくていいんだよ」

「でもそれじゃあ根本的な解決には……」

「まあそうかもな。けど重要なのは留美の意見だ。留美は自分の意思で答えを出したんだ。なら部外者の俺達がとやかく言う筋合いはないと思うが?」

そう口にするると留美は俺の前に出てきて葉山に頭を下げる。

「さっきから言ってますけど、もう貴方達は私に関わらないでください。私は双葉に助けられたんです。お願いします」

そう言っつて留美は頭を下げ続ける。葉山は苦い顔をして下唇を噛んでいる。

「……留美本人が嫌がってるんですよ? なら関わらないのが当然だと思いますけど?」

双葉は便乗しながら強い眼で見ってくる。それを見た葉山はビビっている。まあ双葉の怖さは職場見学で見ているからな。

「っー事だ。本人が助けを求めてないからお前らは動くなよ」

「……わかった」

葉山は苦い顔のまま去って行った。これで大丈夫だろう。

ホッと息を吐くと

「2人ともありがとう。あの人結構しつこかったから助かったよ」

「どういたしまして」

「つーか由比ヶ浜も問題だが葉山も葉山だろ？本人が嫌がつているなら止めろよ？」

「まああれだけ言っても諦めないなら大声で助けを求めろ。そうすりやお前は被害者つて事になるからな」

「……うん」

「ところで留美はこれからどうするの？」

「もう直ぐ肝試しだから行かないと……」

「そうか。じゃあ適当にやり過ごせよ」

「わかった。またね八幡、双葉」

「うん。またね」

「じゃあな」

挨拶を交わし留美は歩き出した。見えなくなるまで見送り俺達も歩き出す。

「いやー、危なかったな」

正直マジで危なかった。もしあそこで葉山の行動に気がつかなかったら留美は無理矢理連れられて話し合いに参加させられたかもしれない。そうだったらシカトから虐めになる事は簡単に予想が出来る。

「そうですね。あの時に5分以上キスして良かったです」

確かにそうだ。もしも予定通りキスを済ませていたら留美と会わなかったかもしれない。

「まあ……」

適当に言葉を濁す。事実は事実だがそこでうん、そうだねって言う程メンタルが強い訳じゃないので……

「それにしても……何である由比ヶ浜つて人は留美の事を言わなかったんだか……」

双葉は低い声でそう呟く。怖い、怖いからね？その声は止めてくれませんか？

まあ双葉の声はともかく意見には賛成だ。何であいつは言わなかったんだ？ちゃんと説明していたらあんな危ない事になりかける

事もなかったのに……。

雪ノ下は人の意見を否定するだけ、由比ヶ浜はやらなきゃならない仕事、しかも伝言っていう簡単な仕事ですら満足にこなせない。しかも顧問はあんなデリケートな問題を生徒にやらせて自分は放置。

今更だが奉仕部って本当にヤバイな。絶対に廃部にした方がいいだろ？今度匿名で校長や教育委員会に訴えた方がいいかもな。

そう思いながら俺と双葉は市民ロτζジへ歩き出した。

ちなみに帰ったら全員がからかってきたので米屋をしばき倒したのは言うまでもない事だった。

夕食を済ませて、俺達は風呂に入った。

俺は風呂から出て、ロビーでお茶を飲んでぐったりしていると市民ロτζジの入り口から双葉がやって来た。見ると何か不機嫌な顔をしていた。

気になった俺は双葉に近寄り話しかける。

「双葉どうした？散歩に行っていたようだがその様子じゃ何か嫌な事があったのか？」

双葉 side

苛立った状態で私は市民ロτζジに入った。すると直ぐに私の最愛の恋人が話しかけてきた。

「双葉どうした？散歩に行っていたようだがその様子じゃ何か嫌な事があったのか？」

八幡先輩は心配そうに話しかけてくる。この人は本気で心配してくれる本当に優しい人だ。

それなのに……あの女は……！

私が怒っているのが分かったのだろう。八幡先輩はそつと引き寄せて頭を撫でてくれた。

……やっぱり気持ちがいいな。

暫く癒されていると八幡先輩が口を開ける。

「……で、何があったんだ？」

そう言われて正直話していいか悩んだ。八幡先輩を苛立たせたくないから。

「……いい、いえ。虫が鬱陶しかったので」

咄嗟に嘘をついたが八幡先輩は疑いの目で見てくる。多分バレてるだろう。……でも話したくない。八幡先輩が不快になる可能性があるから……

これは今から30分程前にあった事だった。

夕食を済ませ、八幡先輩ら男子組が風呂に行くのを見送った後、私は1人になりたくて小町さんと国近先輩に一言断って外に出た。

夜風を浴びながら歩いていると広場から明かりが見えたので行ってみると小学生がキャンプファイアーの周りでフォークダンスを踊っていた。少し離れた場所でぼんやりと見ていると、

「……あれ？双葉？」

後ろから声をかけられたので振り向いた。

「あ、留美。さっきぶり」

今日友達になった留美がいた。留美は私の隣に座って話しかけてくる。

「双葉は1人？八幡や他の人は？」

「八幡先輩達男子組はお風呂、私は1人になりたくて外に出てきたの」

「そうなんだ」

「うん。ところでさ……」

私は気になる事があったので留美に質問をしようとする。

「どうしたの？」

「うん。その……肝試しは大丈夫だった？ボランティアの人達が余計な事をしなかった？」

私が気になっていたのはそれだ。さっき葉山って人にあれだけ言ったけど方が一介入してきたらどうしようかと不安が残っている。余りに気になったので留美に聞いてしまった。

「ううん。大丈夫だよ。普通に肝試しやって普通にハブられたまま終わったよ」

留美は笑いながら手を振ってきた。良かった。もしも余計な介入があつたらどうしようかと悩んでいたから留美の答えを聞いて安心した。

……でも1つ気になった事がある。

「……留美、今の発言八幡先輩みたいだったよ？」

あの自虐の仕方が妙に八幡先輩にそっくりだった。

「まあ一応、八幡みたいな言い方してみたけど……どう？」

「うーん。微妙だから止めた方がいいよ」

八幡先輩の自虐は真似をしちやいけない。八幡先輩の事は大好きだけど自虐は止めてほしいいつも思っている。私にとっては大切な人だ。先輩自身が言っているとはいえ止めてほしい。

「うん。そうするね」

「そうした方がいいよ」

留美を見ると眠そうに欠伸をしていた。まあ昼は結構遊んだしね。

「留美、もう寝なよ。眠そうだよ」

「……そうする。またね、双葉」

「うん。またね」

留美と笑顔を交わし留美が見えなくなるまで見送った。見送った後は暫くの間キャンプファイアーをぼんやりと眺めている。キャンプファイアーの火は煌々と周りを照らしていた。

暫くしてフォークダンスが終わった。すると小学生は線香花火を手に持ちキャンプファイアーの周りで遊び始めた。

それを見ていると夜風が身体に当たり少し震えてしまった。夏とはいえ高原だ。夜の風はかなり寒い。

(留美もないしそろそろ戻ろうかな……?)

そんな事を思いながら立ち上がり市民ロτζジへ向けて歩き出した。

歩き出して1分、既にキャンプファイアーの明かりが見えなくなってきた時だった。

正面から人の気配を感じたので相手の顔を見た時だった。

「あ」

お互いにハモった相手は由比ヶ浜って女子だった。それがわかると嫌な気分になってきた。何せ彼女は留美の問題が解決された事を話さなかったからだ。ちゃんと話してれば留美にあんな危険が迫らなかつたのに……!!

内心苛立ちながら横を通り過ぎた時だった。

「ちよつと待つし!!」

いきなり肩を掴まれた。呼ぶならそんな強く掴むのは止めてほしい。

溜息を一つ吐き振り向くと何か怒った顔で睨んでくる。私が睨むならともかく貴女に睨まれる筋合いはないと思うんですが……

「……何か用ですか？」

「ヒツキーと付き合ってるのは本当なの?!」

……そんな質問をするだけで肩を強く掴んだんですか? 全く……

「そうですが何か? 職場見学に来たなら知ってると思いますか?」

彼女が総武の生徒なら絶対に知っている筈だ。何せ米屋先輩が堂々とバラしたのを知ってるだろうし。

……思い出すとあの時の八幡先輩はとても怖かった。背後に阿修羅が見えていてその状態で米屋先輩と模擬戦300本をして終わった後に米屋先輩が土下座したのは伝説だ。ちなみに勝敗は285-15と圧倒的だった。何せ米屋先輩が勝つたびに八幡先輩が更にキレたのだから。

閑話休題……

すると彼女は更に鋭い目をして睨んでくるけど、私何かしたっけ?

「何でだし?!」

「……え?」

何でって言われても好きだから以外に理由はないんだけど……

そんな事を考えていると、

「だって、ヒツキーってぼっちだし目が腐ってるし猫背でキモいし!」
私が考えている間にガンガン八幡先輩の悪口を言ってきたので考えるのを止めた。

さつきから何でそこまで八幡先輩の悪口を言うの? 理解が出来ない。
い。

……まさか、この人八幡先輩の事が好き……?

だとしたら腑に落ちる。私に八幡先輩の悪口を言って八幡先輩に

失望させる作戦をしている事になるから。

冗談じゃない。八幡先輩は私の恋人だ。誰にも渡すつもりなんてない。この女にはここではつきりと言わなきゃいけない。

……とはいえ部外者が関わるなっではつきり拒絶しても面倒な事になるのは簡単に予想が出来る。

だから違う戦法をとるしかない。

「……つまり貴女は、八幡先輩と別れて私に寄越せ、そう言いたいんですね?」

「な、何言ってるし?!そ、そんなんじゃない!!」

「違うんですか?てつきり貴女は八幡先輩の事が好きかと」

「ち、違うし!何で私がヒツキーなんかと……!!」

「そうですか。なら八幡先輩が私と付き合っけていても問題ないですね?貴女は八幡先輩の事が好きじゃないみたいですし」

「……え?!そ、それは……」

さつきまでの勢いが無くなり下唇を噛みながら睨んでくる。予想通りだ。相手は素直じゃなかった。これによって八幡先輩の事が好きじゃないと言った手前邪魔するのは少なくなるだろう。

「……話は終わりですか?失礼します」

そう言って歩き出そうとすると

「待っし!!まだ終わってないし!!」

怒鳴ってくる。いい加減イライラしてきた。素直じゃないのに私と八幡先輩の関係に文句を言ってくる。その上八幡先輩の事をバカにしてばかり……

「何ですか?私と話す暇があるなら自分の行いについて反省したらいいかがですか?」

私がそう返すと意味がわからないとばかりにキョトンとしている。本当にわかってないの?

「……留美の件ですよ。何であなたは八幡先輩に問題は解決したから余計な事をするなと伝言を頼まれたのに伝えなかったんですか?」

そう言うのと彼女はさつきまでの勢いは失い青い顔をする。どうやら自覚はあったみたいだ。

「……あの後葉山って人が留美に話し合いをするように誘っていましたよ。貴女は何で伝言を伝えずに彼を止めなかったんですか?」

「わ、私だって言おうとしたよ……。でも隼人君が提案して優美子が賛成してやる空気になっちゃって……」

……つまり周りの空気を読んで見逃したって訳ですか?正直怒りが湧いてきた。それと同時にもしも留美が無理矢理話し合いに参加させられたらと考えるとゾツとしてきた。

「……もういいです。貴女が真剣に問題に取り組んでない事がわかりました」

「ち、違うし!!私も留美ちゃんの事を真剣に考えたよ!!」

「でしたら何で周りの空気を読んで、留美が出した答えを伝えなかったんですか?!!」

生まれて初めて私は本気で怒鳴った。彼女はビクツとしているがどうでもいい。

「……大事なのは当事者、留美の意見です。にもかかわらず留美の意見を伝えず、あんなリスクの高い方法をしようとするのを周りの空気に合わせて止めなかった。何処が真剣なんですか?」

「うううっ……ごめん」

「私に謝っても意味はありませんよ。これに懲りたら周りの空気に合わせる事や出しゃ張る事をやめてください。迷惑ですから」

私はそう言って彼女の返事を聞かずに歩き出した。

私は気分が悪いまま市民ロτζジへ到着した。

……そんな事があった。

八幡先輩は私の事を訝しげに見ている。やっぱり嘘って見抜かれてる？

そう思っていると八幡先輩は息を吐いて口を開ける。

「そうかわかった。お前も風呂に行つてこい」

風呂に行つてこいと言つてきた。

……おそらく嘘と見抜かれてるだろう。それでも聞いてこないのはありがたい。正直今はイラついているし。

「は、はい」

何かを言われる前に私は早歩きでお風呂へ向かつて歩き出した。

八幡side

双葉が風呂に行ったのを確認して息を吐く。

双葉は何かを隠してるのは1発でわかった。しかも割と重要な事だと思う。

(まあ、双葉が言わないなら無理に聞く必要はないか……)
そんな事を考えながら部屋に戻った。

部屋に戻ると3バカがラフな格好でトランプをしていた。

「おっ比企谷。お前もトランプやろうぜ」

「はいよー」

呼ばれたので俺も座りカードを受け取った。

「そーいや今回留美ちゃん助けたのは何で？」

米屋が唐突に聞いてきた。

「あん？何だ藪から棒に？」

「いや、いつものハッチならどうでもいいとばかりに関わらなそうだし」

「まあそうだな。つーか助けたのは俺じゃない。双葉だ」

「ふーん。双葉も優しいところあるんだ」

緑川は楽しそうに笑っている。やっぱり幼馴染だという行動をとるか把握してるのだろう。

「まあ留美ちゃんや小町ちゃんが入るのが今から楽しみだぜ！」

戦鬪狂の米屋がそう叫び俺達は苦笑しながらカードを出した。

米屋の言う通り留美と小町が入隊するのが楽しみだ。もしも攻撃手ならば是非戦ってみたいものだ。

……いかん。太刀川さんに毒されてるな。

嫌な考えを振り払うようにジョーカーを出す。

「はいスペ3！それで6であがり!!」

「ハッチ大貧民!!」

「ほれほれ、次のゲームで俺にカードな」

初っ端から大貧民かよ?! 幸先悪過ぎだろ?!

内心愚痴りながらシャツフルをする。夜はまだ始まったばかりだし勝負はこれからだ。

そう思いながら出水に強いカード2枚を渡した。次は負けん。

結局15試合やって8回大貧民だった。弱すぎだろ俺？

翌日、徹夜トランプで頭が痛いのを堪えて起き上がる。

何故か4人同時に起きたのでぼんやりしながらチェックアウトする為に荷物の整理を済ませる。

「あー、明日からまた防衛任務と夏休みの宿題地獄か」

「ハツチ俺の夏休みの宿題やってくれよ」

「一科目1万円ですってやる」

「マジで?!じゃあ払うからやってくれよ!」

「じゃあ俺も俺も!!ぶっちゃけ固定給貰ってもそんなに使い道ないし」

「はいはい」

「つーか比企谷、自分の宿題は大丈夫なのか?」

「あ?俺はもう終わってる」

「早っ!?!」

いやだつて面倒な事は早く済ませたいし。

「まあな。それより整理が終わったら外に出るぞ」

そう言うのと3人は慌てて整理の再開をした。

荷物の整理を済ませチェックアウトをする。バス停に歩いていると小学生の集団がいてその中に留美がいた。同じグループの4人は留美をハブいているが留美は笑顔で双葉に手を振っていた。それを見た双葉も小さく手を振り返した。うんうん。仲良き事は美しきだな。

2人の友情に癒されている時だった。

「比企谷」

後ろから話しかけられて振り向くと平塚先生が険しい顔で俺を見ていた。

「何すか？」

「話がある。ついてきたまえ」

「はいはい。悪いが先にバス停行つてろ」

連れにそう言うのと平塚先生の後に続いた。

「で、話って何ですか？」

少し離れた所に呼ばれたので質問をする。

「……昨日由比ヶ浜と何かあったか？」

「……は？」

昨日由比ヶ浜と何かあったかだつて？強いて言うなら昼あたりに余計な事をするなど伝えろと言ったくらいだ。まあ伝えなかつただけだ。

まあわざわざ話す事じゃないだろう。

「いえ特に何も」

「本当か？」

「何ですかいきなり？あいつ何かやったんすか？」

「いや、昨日肝試しが終わってから何故かずっと青い顔をしていたからな。由比ヶ浜に聞いても何でもないの一点張りだね。……もしかしたら君かと思っただけだよ」

「すみませんが知りませんね。俺夜にあいつと会ってないので」

「……わかった。ところで例の問題は君達が解決したんだよな？」

「俺じゃなくて双葉がですけど」

「雪ノ下達とは協力はしてないんだよな？」

「そんな事も知らないのに問題を丸投げしたのかよ?!マジで舐めとんのか?!」

「そうですが何か？」

「私はてつきり協力して問題に取り組むかと……」

「別にいいでしょ?問題は解決出来たんですし。解決法をとにかく言われる筋合いはない筈です。それと次から監督放棄はしないでください」

「あんな問題を未成年なやらせようとするなよ？」

「そ、それは……生徒の自主性に任せようかと……」

「それは唯の逃げです。バスの時間が近いので俺はこれで」

平塚先生の返事を聞かずに皆の元へ戻った。

バス停に着くと双葉が駆け寄ってきた。

「八幡先輩!大丈夫ですか?!」

「は?落ち着け双葉。特に何もなかったぞ」

「そうですか……良かった。さっきのあの人目が鋭かったので……」

まあ確かに教師がする目じゃなかったな。

「大丈夫だ。心配してくれてありがとな」

そう言つて軽く頭を撫でる。

「んっ……」

双葉はくすぐったそうに目を細める。双葉の笑顔に癒されていると後ろから呆れたような視線を感じたので見ると全員が呆れていた。いつものニヤニヤ笑いはウザいが呆れた顔も中々ウザいな。

あれから2時間、俺達は帰りの新幹線に乗っているが俺と小町以外全員寝ていた。

「小町、楽しかったか？」

「うん楽しかった!!また行きたいな！」

「じゃあ次は冬休みだな」

「そうだね。……あ！そういえば良かったね。ちゃんと会えて」

小町は唐突に何かを言い出した。

「なんのことだよ？」

「だからお菓子の人。会ったなら言ってくればいいのに。良かったね。骨折ったおかげで結衣さんみたいな可愛い人と知り合えて。あ！でも浮気はダメだよ!!」

……は？

由比ヶ浜がお菓子のひと？俺が庇った犬の飼い主だと？

「お兄ちゃん、どしたの？」

その事を考えていると小町が聞いてくる。

「いや、何でもない。悪いが俺も寝る」

「あ、うん。着いたら起こすね」

小町から了承を得たので目を瞑る。

まさか由比ヶ浜が犬の飼い主とはな……。まさか俺に関わってくる理由も関係あるのか？

……まあどうでもいいけど。

そう思いながら俺は意識を手放した。

比企谷八幡は祝ってもらった

千葉村から帰ってきて数日、家でのんびりゴロゴロしていると出水から電話がかかってきた。

『あ、比企谷。今から俺の家で遊ぼうぜ!』

「暑い。部屋から出たくない。パス」

『まあそう言うな。小町ちゃんも黒江ちゃんも来てるぞ』

「わかった。今から行く」

『即答かよ……。まあ早く来い』

「はいよ」

了承して電話を切り行く支度をし始める。にしても小町や双葉も呼ぶなんて珍しいな……

そんな事を考えながら支度を済ませ家の外に出た。

外に出て自転車を走らせること20分、出水の家に着した。汗を拭きながらインターフォンを鳴らすと直ぐに返事がきた。

『おー、来たか。鍵は開いてるから入ってくれ。リビングにいるから』
「はいはい」

言われた通りドアを開けてリビングに向かう。

リビングのドアを開けた時だった。

パンパンパンツ!!

大きな音がして紙吹雪が俺に大量に当たった。

呆気にとられながら周りを見ると小町、太刀川さん、出水、唯我、国近先輩、緑川、加古さん、双葉、三輪、米屋、月見さんがいた。……何だこのメンツ？

驚いている時だった。

『誕生日おめでとう(ご)ございます(！)！』

一斉に言われて俺はポンと手を叩く。

「あ、今日誕生日か」

俺がそう言うと一緒にはずっこけ他の連中は呆れた顔で見ってくる。

「お前は自分の誕生日も忘れてたのか?!

真っ先に立ち直った出水が突っ掛かる。

「悪かったな、素で忘れてた。まあありがとな」

「……つたく、そこで礼をすんのかよ。まあいい、座れよ」

出水に促され指定された座布団に座ると隣に座っている双葉をM AXコーヒーをコップに注いで差し出してきた。

「おつ、サンキュー」

「いえ。お誕生日おめでとう(ご)ございます」

「ありがとな」

「んじゃハッチ来たし食べようぜ」

米屋の一言で誕生日会が始まった。

「いやー、比企谷も17歳かー、早いな」

「何年寄りみたいに言ってるんですか？太刀川さんの誕生日は今月末ですよね？」

「おう。それで20歳になるから堂々と酒を飲めるぜ」

「いや、この前居酒屋で諏訪さんと飲んでましたよね？じゃんじゃんビール飲んでるの見ましたよ」

まあこの人の見た目なら成人で通じると思うがな。

そう思っていると、

「……ふうん。太刀川君未成年なのに飲んだんだ？」

太刀川さんの隣にいる月見さんが冷たい目で太刀川さんを見ている。すると太刀川さんは青い顔をして震えだした。相変わらず月見さんの尻に敷かれてるな……

「い、いや落ち着け月見。諏訪さんに無理矢理飲まされたんだよ」

「……比企谷君。本当？」

「まあ確かに諏訪さんがガンガン勧めてましたね」

途中からは太刀川さんもノリノリで飲んでいただけだけどそれは黙っておこう。バラして太刀川さんが月見さんにシバかれるのもかわいそうだし。

「……そう。なら信じるわ」

納得したような顔になりながら食事を再開する月見さんを見て太刀川さんは笑顔で親指を立ててくる。幸い月見さんには気づかれてないが三輪とか呆れてますよ？三輪の呆れ顔を見ていると双葉が服を引っ張ってくる。

「……ところで八幡先輩は未成年ですけど居酒屋に入っても大丈夫なんですか？」

「ん？ああ、大丈夫。酒は飲んでないから」

「……え？じゃあ何をしてたんですか？」

あー、こいつ居酒屋は酒しかないと思ってんのか。まあ中1なら仕方ないかもな。

「居酒屋っても酒以外もメニューはあるぞ。ラーメンとか焼き鳥とか炒飯とか」

「…そうなんですか？」

「ああ、中々美味しい物もあるぞ。今度行ってみるか？」

「ちよつと比企谷君。双葉に居酒屋はまだ早いわよ」

加古さんに止められる。まあ確かに仕事帰りの大人がいる中見た目小学生で通じる双葉がいるのは……

「まあそうですね。悪いな双葉」

「いえ。もうちよつと大人になったら連れてってください」

「はいよ。あ、そういや米屋、約束どおりお前の夏休みの宿題全部終わらせたから次の防衛任務の時に金を用意しとけよ」

「マジで?!頼んでから一週間も経ってないぞ?!」

「面倒なのは早く終わらせるに限る」

「オツケー!!用意しとく」

「小町の自由研究もよろしく!」

「ハッチ先輩、俺のは?!」

「小町のは半分くらい終わっている。緑川のは昨日始めたばかりだからまだだ。来週までにやっつく」

「ありがとう!」

緑川が手を上げながら頷いた時だった。

「……陽介」

三輪が鋭い目で米屋を睨んでガタガタ震えだした。あー、こりや悪い事をしたな。すまん米屋。

「いやいや落ち着け秀次!俺期末テストで赤点取りまくったからそっちの問題集もあるから忙しいんだよ」

「忙しいのはお前が悪いだろう?比企谷も次からは手伝うな。こいつは一度留年した方がいい」

「ちよつと待て秀次!冗談だよな?!」

「本気だ。いい加減同い年の連中に迷惑をかけるな」

「じゃあいいよ。ヤバくなったらボーダーに就職するし」

「あ!じゃあ俺も留年したらボーダーに就職するか!!」

米屋がそう言うと太刀川さんも笑顔で手を上げた。遂に出たな。その理論。まあ迅さんも大学行かないで実力派無職やつてるし問題

ないだろう。ぶつちやけこの2人は大学行くよりボーダーで働いてる方が合ってると思うし。

「よねやん先輩、それは……」

「……太刀川君」

緑川は呆れた顔を、月見さんは冷たい目をしているが、ここにいる全員2人と同じ気持ちだ。初めから辞める気であるよ……

「おっ、双葉。これ美味いぞ」

「……八幡先輩、関わりたくないからって逃げないでください」

2人が三輪と月見さんにしばかれているのを横目で見ながら食事を再開した。そしたら双葉に注意された。解せぬ。

分、米屋と太刀川さんが蔑んだ目で見られながら食事続ける事10

「ごちそうさま」

『ごちそうさま』

出水が言ったのを皮切りに皆がごちそうさまを言う。

食後の紅茶を飲んでいると、

「んじゃ、恒例に誕生日プレゼントだな。受け取りなハッチ」

米屋がそう言うと、太刀川さん、加古さん、三輪、緑川、小町、双葉がプレゼントを出してくる。

「じゃあ先ずはお前以外の太刀川隊からのプレゼントだ。開けてみな」

「あ、どうもありがとうございます」

促されて開けてみる。そして思った事を口にする。

「……カオスだ」

そう言った俺は悪くない。何せプレゼント箱の中には餅の詰め合わせ、ゲーム、話題の本、明らかに高級なアンティークな懐中時計が入ってあった。

餅は太刀川さん、ゲームは国近先輩、本は出水、時計は唯我だろう。唯我からは去年も懐中時計を貰ったが今回は実用品というより美術品に近いタイプだった。

「はっはっはっ」

「あー、俺もそう思ったぜ」

「このゲームは新学期に勝負しようね」

「蓋の裏には写真が入られるので是非黒江ちゃんとの写真を入れてください」

太刀川隊メンバーからは笑いながらそう言われる。後唯我からのプレゼントにはもちろん双葉との写真を入れるつもりだ。

「まあどうもっす」

俺がそう言って頭を下げると太刀川さんは笑いながら手を振ってくる。カオスとは言ったが感謝してるのは事実だ。本当にありがとうございます。

「じゃあ俺もあげるね!!」

そう言って緑川が出てきたプレゼントは俺が欲しい漫画だった。しかも俺が欲しがっていた作品がピンポイントで選ばれてるし。凄いラッキーだな。

「サンキュー。お前ん時は俺がプレゼントやるからな」

「うん！よろしくね」

内心後輩に感謝していると三輪がプレゼントを渡してきた。

「これはうちの隊全員からだ」

差し出されたプレゼントは万年筆と黒革の高級っぽいメモ帳だった。見ると一流の会社員が使っているような代物でかっこいい。

「いいなこれ。俺いつもスマホにメモしてるからメモ帳とか使った事

ないからな」

「俺は城戸司令から言われた事をメモ帳に記録してるからな。スマホも悪くないがメモ帳も便利だぞ」

「まあ専業主夫志望の比企谷君には使う機会は余りないと思うけど」

月見さんが笑いながらそう言うてくる。そういや月見さんや三輪はキャンプに来てないから知らないみたいだ。

「あれ？蓮さんは知らないんすか？ハッチは専業主夫志望を止めたんすよ」

瞬間時が止まった。事情を知らない太刀川さん、唯我、加古さん、三輪、月見さんが俺を見てきた。

「ひ、比企谷……お前、専業主夫志望を止めたのか？」

「嘘ですよ？比企谷先輩?!」

「熱でもあるのかしら？」

「……あの働いたら負けと言っていた比企谷が？」

「貴方本当に比企谷君？」

ねえ、何で俺が専業主夫志望止めたっただけでそこまで驚かれるの？ていうか月見さんは酷すぎますからね。本当に比企谷君？って何ですか？

余りの評価の低さに自己嫌悪に陥っている時だった。

「それはね。双葉はハッチ先輩と結婚したら家庭に入りたいからハッチ先輩が働く事になったんだよ!!」

迅バカが笑顔でバラしてきた。

「駿!!」

双葉は緑川の口を塞ぐも一足遅かった。見ると太刀川さんはニヤニヤ笑い、加古さんと月見さんは微笑んでいて、三輪と唯我は疲れた様な顔をしている。凄え恥ずかしいんだけど。しかも双葉がチラチラとこちらを見てきて恥ずかしいな。

「……まあ悪い方向に行かなくて良かったな」

三輪が溜息を吐きながら言うがまるで専業主夫志望が悪いみたいな言い方を止めろ。

「……いや、あんまり良いとは言えないぞ」

「心を読むな出水」

「いや、だってお前ってわかりやすいし」

何か今までも色々な人にそう言われたがそんなにわかりやすいか？ 解せぬ。

溜息を吐いていると空気を良くするように加古さんが口を開ける。

「じゃあ私のプレゼントもあげるわね。はいこれ」

差し出してきたのは

「……香水？」

メンズ用香水だった。香水は付けた事がないが何で香水？

「これはね、女性を惹きつける有名な香水なの。だから双葉とデートする時につけてみたら？」

「……まあせっかく貰ったんで次にデートする時つけてみます。あぎす」

「どういたしまして」

香水なんざつけた事はないが加古さんが選んだんだ。悪くない物だろうな。双葉が喜んでくれるならそれでいい。

「小町からはこれ!!」

差し出してきたのはブレスレットだった。

「これ真珠か？」

「うん！ パールって石なんだけど石言葉は健康とか長寿！ いつも小町の為に働いているから元気に過ごして欲しくて！」

ヤバい、ジワツときた。何て良い妹だ！流石可愛い、綺麗、器量良しと3K揃っているだけあるな。小さい頃は賢い可愛いコマーチカとか呼ばれていたもんだが今も変わってないようで嬉しい。

「小町、ありがとな。愛してるぜ」

「小町はそうでもないけどどういたしまして！」

いや、そこは嘘でも愛してるって言うてくれよ。周りの連中呆れるし。また小町もニヒヒツツて笑ってるから冗談のつもりだろう。

そう思っていると小町は、

「トリはやっぱり恋人の双葉ちゃんでしょ?!どーぞ双葉ちゃん!!」

双葉の肩を押している。

「ちよ、ちよつと小町さん?!」

「どーぞ黒江ちゃん（双葉）」

双葉がテンパる中A級3バカも悪ノリしている。こいつら後でしばく。

「駿!!米屋先輩も出水先輩もからかわないでください!!」

真つ赤になりながら3バカを睨んでいるが3バカは全く無視して双葉に手振りをしている。双葉はやがて諦めたように溜息を吐いて俺を見てプレゼントを差し出してくる。

「……あ、あの八幡先輩。お誕生日おめでとうございます。……開けてみてくださいませんか？」

そう言われたので開けてみるとそこには石がついてあるネックレスだった。

「ありがとな。つけてもいいか?」

「もちろんです」

了承を得たので首にかけてみる。うーん、似合ってるかよくわからないな。とりあえず双葉に聞いてみるか。

「似合ってますよ」

すると双葉が笑顔で言うてきたのでホツと息を吐く。改めて礼を言う為双葉を見るとある事に気が付いた。

「……………ん？お前も同じのつけてんのか？」

見ると双葉の首には同じ物がついていた。……………もしかしてペア
ルックか？

「……………はい」

俺がそう聞くと双葉は真っ赤になって口を開けた。何でそこまで
赤くなるんだ？

すると小町はニヤリと笑って双葉の肩を掴みだした。

「双葉ちゃん！その石って何て意味なの?!」

小町がそう聞くと双葉は更に真っ赤になった。まるで茹で蛸のよ
うだな。マジで何なんだ？

すると双葉が口を開けた。

「……………この石はムーンストーンって石なんですけど、……………そ、その
ペアで持つと、永遠で真実の愛をもたらすらしくて……………」

双葉にそう言われて俺も顔が熱くなってきた。ヤバイ凄いい嬉しい。
周りを見るといつもはニヤつきながらからからかう太刀川さんや3バカ
も優しい目で見えてきて凄いい恥ずかしいんですけど……………。女子組が優
しい目をしているのは予想していたが、三輪が穏やかな目で見えてくる
のは完全に予想外だ。止めて！そんな目で見ないで!!

まあとりあえず礼を言うか。

「そうか。じゃあ大切にするよ」

「……………はい!!」

双葉が笑顔で礼を言うのと全員が拍手をしてきた。すると小町が
「それじゃあお兄ちゃん！皆に一言お願いしますー！」

「は?!」

いきなり何を言ってるんだ?!ぼっちの俺にハードルの高い事を要
求するな!

文句を言おうとすると、

「オラオラハッチ！一言言えよ！」

「そうだぞ比企谷。一言一言！」

「頑張れ〜」

「さっさと言え」

……三輪怖い。何で睨まれてるの俺？周りを見ると表現は違うが皆早くしろって空気を出してるし。

……仕方ない。思った事を正直に言うか。深呼吸して口を開ける。

「えっと、今日は祝ってくれて本当に嬉しかったす。ありがとうございます
ございます」

そう言っって頭を下げると直ぐに

『どういたしまして』

と返答されて嬉しくなってきた。まさか俺が誰かに祝って貰えるなんて昔じゃ考えられないからな。

内心感謝している中誕生日会は続いたが俺は今日の事は一生忘れないだろう。

こうして入隊者が決まる

8月14日、炎天下の中、俺は今最愛の妹と一緒に歩いている。

「ここだ小町」

「ほえ〜」

俺と小町は今ボーダー入隊試験会場の前にいる。そう、今日は入隊試験日だ。確か今日の試験が9月に入隊する為の最後の試験だ。次の試験だと入隊時期が1月になってしまう。

「じゃあ俺は試験が終わる頃にここにいるからな。気楽に受けろ。確実に受かるから」

「うん！行ってくるでありますー！」

そう言つて小町は会場に入つていったが心配はしてない。おととい玉狛でトリオン測つたら俺と同じくらいだから落ちないだろう。

そんな事を考えていると、

「……八幡？」

いきなり名前を呼ばれたので振り向く。

「……戸塚？」

そこには3大天使の一角、戸塚彩加がいた。

「八幡だ！久しぶりだね！」

ヤバい、久しぶりに見たが可愛いな。もし俺が双葉と付き合つてなかつたら同性愛に目覚めていた可能性あり。

「久しぶりだな。お前がここにいるって事は……」

「うん！僕も試験受けに来たんだ！」

ほう。戸塚も受けるのか。

「そうか。がんばれよ」

「うん。八幡は留美ちゃんの見送り？」

あー、そういや戸塚もボランティアにいたな。大方由比ヶ浜か雪ノ下あたりから聞いたのだろう。

「いや違う。留美は双葉と一緒に来るらしい。俺は妹の見送りだ」

「えーっと、確か小町ちゃんだっけ？」

「そうそう。もしもお互い受かったら仲良くしてやってくれ」

「わかった。……あ！そろそろ行くね」

「おう。行ってこい」

戸塚は笑顔を見せながら会場に入っていった。戸塚もしよっちゅうテニスに付き合っている友人だ。出来る事なら受かってほしいな。

戸塚の笑顔に癒されていると最愛の恋人とその友人が歩いてきたので近寄って話しかける。

「よう双葉。留美も久しぶりだな」

「うん。久しぶり八幡」

「おはようございます八幡先輩」

「おはよう。留美も入隊試験受けるんだな」

「うん。初めは反対されたけど……」

まあ人によっては反対するだろうな。昔ベイルアウトがない頃は負け＝死だったし。

「でもここにいてるって事は大丈夫なんだろう？」

「……初めは友達に誘われたからって言ってたんだけどそれだけじゃダメって言われたの。だから双葉に話したら正直に自分の事を話してみたと言われて学校での事を話したの。そしたら許可を貰った」

「……そうか。良く話したな」

「……うん」

留美が笑っているからよかったが双葉には言わなきゃいけない事がある。

「双葉。お前に言っておくことがある」

「何ですか？」

「お前が留美の為に言ったのは分かる。だがな……そういう事を親に話すのは難しいんだ。今度からは少し考えて喋れよ」

親に話したら親は先ず心配してくれるだろう。しかし子供によっては心配をかけたら悪いと思う人もいるだろうしな。だから気軽に正直に話せと言うのは感心できない。

「……はい。ごめんね留美」

「……うん。気にしないで。親身になってくれて嬉しかったから」
「……ふう。まあ留美が許したからもう言わないが次からは気をつけろよ」

「はい。すみませんでした!」

「反省してるならそれでいい。……つともう直ぐ試験開始時間だ。留美は早く行け」

「あ、うん。じゃあまたね」

「頑張つてね留美」

「……ありがとう。頑張る」

留美は笑いながら会場に入って行った。留美が見えなくなると双葉が頭を下げてくる。

「……ごめんなさい。八幡先輩の言う通りでした。部外者の私が親に話したらって言う権利なんてないのに……」

それを見た俺は双葉の頭をわしゃわしゃする。

「留美が許したから俺はもう言わない。次からは気をつけろ」

「……はい」

双葉も反省したみたいだから手を離し息を吐く。その時だった。

「クククツ、まさかこんなところで出会うとは驚いたな。 久しいな、比企谷八幡!」

後ろから聞き覚えのある声が、しかし聞き覚えたく声が聞こえてき

た。……なんでコイツがここにいんだよ

「……八幡先輩、お知り合いですか？」

「知らない。こんな奴は知ってても知らない」

双葉に質問をされたので即答する。知らないものは知らない。

「まさかこの相棒の顔を忘れたとはな…見下げ果てたぞ、八幡！」

「相棒って言ってますけど…」

「違うからな」

何でこいつと相棒なんだよ。俺の相棒は出水だからな？

「それに相棒。貴様も覚えているだろう、あの地獄のような時間を共に駆け抜けた日々を…」

「体育でペア組まされただけじゃねえか…」

「ふん。あのような悪しき風習、地獄以外の何物でもない。好きな奴と組めだど？クツクツクツ、我はいつ果つるともわからぬ身、好ましく思う者など作らぬっ！」

相変わらず鬱陶しい奴だ。大体俺は最近戸塚と組んでるからな。するとこいつが俺と戸塚の間に入ってくるし仕方ないから3人で組む事がある。俺1人なら蹴り出す所だが戸塚は笑顔で接してるから俺は蹴り出していいない。

……で、

「何の用だ、材木座？」

「むっ、我が魂に刻まれた名を口にしたか。いかにも我が剣豪将軍・材木座義輝だ！」

そう言って高らかに手をあげる材木座。……今更だがこんな夏にロングコート着て暑くないのか？

「こいつは材木座義輝…。体育の時間、俺とペア組んでる奴だよ」
「そうなんですか？初めまして。黒江双葉です」

双葉はそう言って頭を下げるがこいつに頭を下げるなんて礼儀正しいにも程があるだろ？

「……ん？ああ、確か職場見学で雪ノ下氏を完膚なきまで叩きのめし

た八幡の恋人であるか？」

まあ確かなアレは有名だからな。総武に通っているなら知って
いて当然か。

「……何か問題でもあるんですか？」

若干不機嫌な顔をして材木座を睨む双葉。材木座は若干ビビりな
がら口を開ける。

「……いい、いや！黒江氏は正しい事をしただけだ！問題などあるまい
！」

「待て材木座。アレは完全に雪ノ下が悪いが双葉が正しいとは言えな
いからな」

双葉が雪ノ下をボコしたのは嬉しいが職場見学中に介入したのは
正しいとは言い難い。

「ハッ！八幡よ、昔から言うであろう！勝者だけが正義だと。よって
勝負に勝った黒江氏は正しいのだよ！」

何でだろう？ドレスローザ国王が言うならかつこいいけど、こいつ
が言っても全然かつこよくないな。

双葉はキョトンとしながら「……は、はあ。ありがとうございます」
と曖昧な礼をしている。

「つーかここにいてるって事は入隊試験受けたら？そろそろ始まるか
ら早く行け」

「うむ！そうであったな！ではさらばだ！」
そう言って材木座は会場に入って行った。

「……八幡先輩の知り合いって変わってますね」
「否定はしない」

まさかあいつとこんな所で会うとは完全に予想外だった。まあ普
段はウザいが悪い奴じゃない。小町や戸塚、留美に比べたら矮小であ
るが受かるように祈っておこう。

「さて、今から数時間は暇だな。お前は どうする？」

「……でしたら夏休みの宿題を手伝って貰ってもいいですか？」

「はいよ。じゃあ図書館行くか」

「はい！」

双葉が腕に抱きついてきた。相変わらず甘えん坊な奴だな。苦笑しながら図書館へ歩き出した。

図書館で勉強すること数時間、そろそろ時間か……
そう思いながら双葉と一緒に図書館を出て会場に歩き出した。

会場に戻ると意外な光景があった。

何とそこには小町、留美、戸塚、材木座と俺の知っているメンバーが揃って話をしていた。……何だこの状況は？

呆氣にとられていると小町が手を振ってくるのでこちらに向かう。

「よう。結果はどうだったんだ？」

「うん！小町も留美さんも戸塚さんも中2さんも全員受かったよ！」

なら良かった。つーか早速中2呼ばわりされてるよ材木座。哀れ過ぎる。

「そうか。まあお疲れ。とりあえず暑いからサイズに入ろうぜ」

俺の提案に反対する奴はいなかった。

サイズで全員がドリリンクを頼み飲み始める。

「ふむ、夏はやはりサイズのドリリンクバーだな」

材木座がそう言うのと全員が頷く。まあ夏じゃなくてもサイズと言ったらドリアとドリリンクバーだ。

「まあそうだな。ところでお前らの適正トリガーは何なんだ？」

「どゆことお兄ちゃん？」

「合格したら書類を貰っただろ？その中にそいつの適正トリガーとポジションが記されてんだよ」

ボーダー試験の合格基準はぶっちゃけトリオンだけだ。他は0点でも受かるだろう。米屋ですら受かったんだし。

試験官は受験者が試験を受けている間にトリオンを測り、合格者の適正トリガーとポジションを選んでいいる。後で変更は可能だが俺は適正トリガーは初めから孤月で今も使っている。

俺がそう言うのと4人が書類を出して確認し始める。

「えーつと、小町はバイパーでポジションは射手って書いてあるね」

それを聞いた俺と双葉は驚いた顔をした。まさかの適正トリガーがバイパーでポジションが射手だと?! つーことは小町の奴出水や那須みたいにバイパーの弾道をリアルタイムで設定出来る可能性があるって事か?! こいつは楽しみだな。

「我は孤月で攻撃手か！やはり剣豪將軍であるから当然か！」

まあこいつの見た目で射手は怖いからな。孤月はバランスタイプのトリガーで使いやすい。まあその代わり使用者同士の差がはつきりとわかる。

「僕はアステロイドで銃手だ。……あ！後ろに突撃銃型って書いてある」

戸塚は突撃銃型の銃手か。まあ何となくわかる。拳銃型の銃手は木虎とか三輪みたいに接近戦も得意なタイプが多い。戸塚が接近して暴れる所は想像出来ん。

「……私はスコーピオンで攻撃手」

なるほどな。空中戦だと軽い奴が有利だから小柄な身体を活かす

のも戦法の一つだ。グラスホッパーを極めれば良い攻撃手になりそう
うだ。

「にしても俺の知り合い全員が受かるとはな」

「……あれ？八幡は知らないの？」

ぼんやりと呟くと戸塚が意外そうな声でそう聞いてきたので、何が
？って質問しようとした時だった。

サイゼの窓から雪ノ下が不満そうな顔をして通り過ぎて行った。

「ん？雪ノ下か？何であいつキレてんだ？」

「……八幡は知らなかったんだ？雪ノ下さんもいたけど落ちたみた
い」

「あー我、雪ノ下氏が試験官の所に向かっているのを見たぞ！」

留美がそう言つて材木座が付け加えて説明をしてくる。なるほど
な。戸塚は雪ノ下が受験してるのを知らなかったのかって聞きた
かったのか。てか試験官の所に行つたって事は何で落ちたのかって
聞きに行つたのか？。どんだけ負けず嫌いなんだよ、あいつは？

後双葉、お前は笑顔でガッツポーズするな。気付いたの俺だけだか
ら良かったけどよ。

「でもどうして？雪ノ下さん職場見学の時凄い記録出したのにな？」

戸塚が不思議そうに聞いてくる。

「あー、それはアレだ。どういう訳か職場見学の時に俺を罵倒したの

が上層部に知られたらしくて、あいつボーダーのブラックリストに載せられたって聞いたぞ」

まあ実際は俺がボーダーに入れないでくれって頼んだんだけど、それを知られて小町や双葉や戸塚に引かれたくないので黙っておこう。

「ふーん。ところでお兄ちゃん、あの人と何があつたの?」

「いや。向こうが目が腐ってるからどうか言っつてしよっちゆう罵倒してくるだけだ。……まあ、あいつの事はどうでもいい。ところで何でお前ら4人が一緒にいるんだ?」

「うん。実は休み時間に材木座君と話したら小町ちゃんに話しかけられて、3人で話したら小町ちゃんが留美ちゃんを呼んで色々話してたんだ」

「……なるほど。つまり小町さんが社交的だという事がわかりました」

「まあ小町はお兄ちゃんと違ってコミュ障じゃないからね」

「やかましいわ」

「痛っ!何するのさ?!」

小町の頭にチョップをかますと俺と小町以外の全員が笑っている。何か恥ずかしいな。

「落ち着いてください八幡先輩」

双葉に止められたので手を離す。……それより本題に入るか。

「……ところでお前ら、入隊まで後1ヶ月あるが仮入隊するか?」

俺がそう言うのと留美を除いた3人が驚いた顔で見ってくる。まあ留美は双葉から聞いたんだろうな。

「お兄ちゃん、仮入隊って何?」

「言葉通りだ。正式入隊日までに訓練を受けれんだよ。そしてその成績に応じて正式入隊日にポイントが加算される」

確か最高は木虎の3600だったか?双葉と緑川は仮入隊してないから1000だったが仮入隊してりや3000は超えていただろう。

「使うトリガーによっては私や八幡先輩が教えますよ」

俺がやるのは決定事項かよ?まあ双葉の頼みなら仕方ないか。俺

が教えるとなると戸塚か材木座か。材木座はともかく、俺の突撃銃の
実力はB級下位クラスだから戸塚がB級に上がったら違う師匠を探
してやらないとな。ちつ、こんな事ならもう少し嵐山さんから銃の扱
い習つときや良かったな。

「じゃあお願い!」

「双葉、私もいい?」

「もちろん」

「八幡、僕は?」

「大歓迎だ」

「はちまーん!!我も我も!」

「わかったからその声ウザいから止めろ」

何で太った男の女らしさを出そうとしてる声を聞かなきやいけな
いんだよ?はつきり言つて殴り飛ばしたい。

「じゃあ4人申請しておくから申請が通ったら連絡する。後俺留美の
番号知らないから教えてくれ」

「お兄ちゃん、何時の間に女の子に番号くれなんて言えるようになって
たの?!浮気はダメだよ!」

何でそうなるんだよ……?呆れているとズボンを引つ張られたの
で見ると双葉が涙目でこちらを見てくる。

「……八幡先輩。お願いですから浮気しないでくださいね?」

「しねーよ。俺が異性として愛するのはお前だけだ。心配するな」

そう言つて優しく頭を撫でていると双葉は涙を少しずつ無くして
いきやがて可愛い笑顔を見せてくる。

「……はい。私も八幡先輩だけを愛しますね」

その笑顔に癒されていると視線を感じたので振り向くと、小町、留
美、材木座は呆れ顔をしていた。戸塚は苦笑いをしていたけど。

「……何だよ?」

「小町の発言が悪いとは思うけどこれは……」

「……バカップル」

「……あはは、仲が良いね」

「けっ、常日頃リア充爆発しろとか言ってるくせに貴様がリア充では

ないか」

何か色々言っているが一つだけ訂正を求めなきゃいけない。

「待て材木座。俺はリア充じゃないぞ」

「嘘だ（！）」

そう返すと戸塚を除いた3人が一斉にハモってきたが俺ってリア充か？リア充ってクラスでウエイウエイはしゃぐ事だろ？それこそ葉山とか由比ヶ浜みたいな奴だろ？解せぬ。

「……まあいい。俺は本部に申請しに行くならまたな」

「あ、私も行きます」

双葉がくつついてくるので腕を組んだ。

「じゃあお兄ちゃんよろしく！」

「……ありがとう」

「よろしくね！」

「感謝するぞ、我が相棒！」

たがら相棒じゃねえよ。

俺はため息を吐いて双葉と一緒に本部へ歩き出した。

4人は仮入隊して訓練をする

入隊試験から一週間、現在仮入隊参加者はロビーで説明を受けている。

俺と双葉は最後方でぼんやりと説明を聞いている。

「さて、あの4人はどれくらいのが才能があるんだか……」

「……まだ何とも言えませんね」

そんな事をのんびり考えていると本部長の話が終わって嵐山隊が代わりに壇上に上がった。その瞬間に周りが騒めくのは恒例の事だ。そこで毎回恒例のB級昇格条件の説明をして訓練室へ移動を始めたので俺と双葉も付いていく為歩き出した。

「さあ、着いたぞ。これが対近界民戦闘訓練だ。仮想戦闘モードの部屋の中でボードアの集積データから再現された近界民と戦う訓練だ」いきなり戦闘訓練と聞いてざわめく。これで大体ボードアに向いてるか分かる。1分切れたらまあまあだ。

「今回、君達が体験するのは初心者レベルの大型近界民だ。攻撃力はないがその分硬いぞ。制限時間は5分だ。それじゃあ初めてくれ」

嵐山さんがそう言うのと訓練室に仮入隊した隊員が並び始めた。全員で10人か。今回は多いな。毎回5人かそれ以下だし。

1人目はアステロイドの射手で2分くらい。微妙だな。まあ希望はあるだろう。

2人目はレイガストでかなりレイガストに振り回されている。記

録は3分20秒。武器変えた方が良くね？レイガスト上級者向けだし。

そう思っていると知ってる顔の中での一番手は材木座だった。開始のブザーが鳴ると材木座は孤月を手にかけて居合の様な構えを取って何か騒いでいる。いくら訓練室の音は他人に聞こえないからってこいつは本当にブレないな。

訓練室の外では他の仮入隊した隊員が馬鹿な事をやっている。嘲笑をされていて、木虎も呆れた顔をしている。恐らく俺も呆れた顔をしているだろう。

その瞬間だった。

材木座は見かけによらない跳躍をして鋭い一撃をバムスターの目に向けて放った。目には当たらなかったが、かなり近い。今のは惜しかったな。

その一撃を見た他の連中は嘲笑を止めて啞然とした表情で材木座を見ていた。木虎もあんぐりとしていて双葉も驚いている。

そんな中地面に着地した材木座は振り返りバムスターを視界に捉え、もう一度居合の構えを取り跳躍した。

今度は外さずバムスターの目を一閃した。

バムスターの動きが停止するとアナウンスが流れる。

『記録 30秒』

そう流れてさっきまで材木座をバカにしていた連中は騒めきだした。同感だ。まさか1分どころか30秒とか完全に予想外だ。

訓練室では嵐山さんが材木座に近寄り褒めているのだろう。材木座テンパってるし。つか見る限り普通の態度をとってるみたいだが、そんな態度をとれるなら俺の時も中2設定を使わないでくれ。呆れていると次の隊員が入って訓練が始まった。材木座は俺に近寄り高らかに声をあげる。

「はははっ！見たか八幡よ！我が必殺奥義、幻紅刃閃をひげぶっ!!」

余りにウザいから蹴りを入れた。

「……何で居合なのにカタカナ語なんですか？」

双葉が至極まっとうな疑問を呟いていた。まあそうだな。大体お前普段剣豪將軍って言うてるのに何でカタカナ語ってなるからな？

「酷いぞ八幡！怪我をしたらどうするのだ?！」

「うるせーな、トリオン体だろうが」

「心が痛むのだよー！」

うるせーな。大体そこまで強い蹴りじゃないから生身でも怪我しないからな？

「……何というか……才能のある唯我先輩みたいですね」

双葉が随分的を得た発言をしてきた。確かにそうだな。こいつの普段の言動は唯我みたいに鬱陶しいし。まあ30秒の記録なら間違いない才能はあるだろう。

「……だったら唯我追い出してこいつ入れた方がいいのか？」

そう言った瞬間、唯我の叫び声が聞こえた様な気がした。

同時刻、太刀川隊作戦室

「はっ！何か比企谷先輩に解雇通告を受けた気がっ!!」

「うるせーぞ唯我!!」

「出水先輩?!ちよつと待つひげぶっ!!」

再び訓練室……

うん。やっぱり唯我の叫び声した気がするな。

にしても材木座の奴、中々俊敏な動きをしてたな。ちゃんと攻撃のイメージ……いや、常日頃戦いがどうか言ってる奴だ。その際にイメトレでもしたのだろう。

そんな事をのんびり考えていると次は戸塚の番だった。戸塚の訓練服可愛すぎだろ？

開始のブザーが鳴ると戸塚は突撃銃を構えるも手の上でワタワタしている。頑張れと言いたい所だが可愛くて見惚れてしまう。

だが直ぐに立て直し、材木座を習って積極的に弱点の目にガンガン撃ち始めた。しかし弾は下からじゃ中々目に当てることが出来ていない。頑張れ戸塚。

「攻めろー！戸塚殿ー！」

……こういう時に応援出来る材木座は凄いな。

暫く撃ち続けて下からじゃ無理と判断したのかその場で垂直跳びをしてから弱点の目に撃つのを再開した。

それによって漸くバムスターが停止してアナウンスが流れる。

『記録、1分26秒』

アナウンスが流れて戸塚が訓練室を出てこちらにやって来る。

「お疲れ」

「あ、八幡。結構難しいね」

「別に初めの記録は強さじゃないから気にするな。これから強くなりやいいだろ？」

「……八幡。嬉しいよ！ありがとう！」

「お、おう」

守りたい、この笑顔。何て可愛い笑顔なんだ……って痛っ！

急に背中に痛みを感じたので振り向くと双葉がムスツとした顔で俺の背中を抓っていた。どうやら戸塚にデレデレしたのがばれたのだろう。後で罰として双葉の命令を聞くか……

反省をしていると次は最愛の妹、小町の番だった。頑張れ小町。

開始のブザーが鳴ると小町の手からトリオンキューブが現れて2×2×2の8分割されたキューブが現れた。小町は深呼吸をしてバイパーをバムスターの目を囲むように撃つ。しかし初めて使ったからか口に何発か当たっただけで肝心の目には1発も当たらなかった。小町はそれを何回も繰り返しているがバムスターも止まっている訳ではないので中々当たらない。

暫くして漸く目に当たりバムスターは動きを止めた。

『記録、56秒』

ギリギリ1分切れたか。まあ初心者がバイパーで1分切れたなら上出来か……

……にしても、小町の訓練服も凄く可愛いな。B級に上がったらどんな隊服になるか今から楽しみでしようがない。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！バイパーって難しいね！出水さんや玲さんどんだけ努力したの?!」

「まあ那須は知らんがバイパーは出水が俺に勝つ為に作ったトリガーだからな。作った本人だからだろ？」

「え?!そうなの?!」

「まあな」

そう、俺と出水がB級に昇格した頃はシールドの性能が余り高くなかった為、出水の両攻撃を防げずに出水が大幅に勝ち越していた。出水にムカついた俺は鬼怒田さんに土下座して、出水の攻撃を防ぐのではなく回避する為のトリガーの開発をしてくれるように頼んだ。そして鬼怒田さんの協力によりジャンプ台トリガーグラスホッパーが開発されて俺が大幅に勝ち越すようになった。

今度は出水がムカついて、自由に弾の軌道を設定出来ないかと考えバイパーを開発して、更に弾トリガーを合わせる事は出来るのかと思いついて、更には合成弾が出来た。ちなみにそれが原因であるが弾バカになった。出水がバイパーと合成弾を、俺がグラスホッパーを使うようになり互角になった。

あの頃は血の気がありまくったからな。金稼ぎと出水に負けたくない事しか考えられなかった。過去を振り返っていると、いいよ最後だ。トリが留美とはな。

「留美ちゃん！頑張れー！」

小町が手を振って応援しているのを確認した留美はこちらを一瞬見て恥ずかしそうに目を逸らした。うん、まあ、気持ちはよくわかる。留美に若干同情している中開始のブザーが鳴りバムスターが現れた。

それを確認した留美は走り出しある程度走った所で飛び上がった。ほう、C級にしてはかなり早いな。

感心している中留美はスコープピオンを手から出して斬りつける。しかし残念ながら目より若干高い所を斬り致命傷には至らない。

そう思っている留美は地面に着く前にスコープピオンをバムスターの口の横に突き刺して浮かんだ。……面白いな。

留美は勢い良く身体を捻りバムスターの頭の上に乗りがった。他の隊員が唾然としている中留美はバムスターから飛び降り、それと同時に目を斬りつけた。

今度はしっかりと当たりバムスターは動きを止めた。

『記録、17秒』

アナウンズが流れ隊員達からは歓声が聞こえてきた。まさか20秒を切るとはな。双葉以来の逸材だな。見ると木虎が目を輝かせて留美を見ている。おそらくは留美に慕われたいのだろう。双葉には嫌われてるし。

にしても今回初めから1分切れた奴が3人もいるとは……。多分仮入隊してない奴でもいるだろうから今回は割と豊作だろう。

そう思っていると嵐山さんが移動を始めたのでそれに続いた。

「お疲れ留美。早かったね」

「ありがとう双葉。そう言えば八幡と双葉は何秒だったの？」

「俺ん時はこの訓練がなかったから測ってない。んで双葉は11秒」

「むおっ?!早過ぎではないか?!」

材木座がそう言うのを筆頭に全員が驚いている。まあ俺も初めて見た時はかなり驚いたしな。

「まあ初めの記録なんざ気にするな。実際に後になって抜く事なんて良くあるし」

鈴鳴の村上さんは初めの記録は緑川より劣っていたが今では緑川より強いし。つーか最近じゃ俺も抜かされそうでビビっている。あのサイドエフェクトはチートだからな。おそらく今年の終わりあたりにもN.O. 4攻撃手の座から引きずり落とされるかもしれない。

閑話休題……

村上と差が縮まっている事にビクビクしていると目的地に到着した。次は地形踏破、隠密行動、探知追跡訓練か。どれもランク戦において重要な内容だ。しっかりと学んで欲しいな。

そう思いながら訓練が始まったのを双葉とゆっくりと眺めた。

感心している間にも訓練は続いて、ついに地形踏破、隠密行動、探知追跡訓練が終わった。

結論を言うと、小町と留美は地形踏破と隠密行動がトップクラスだった。戸塚はどれも中の上だった。材木座は地形踏破と隠密行動は最下位だったが探知追跡はぶっち切りでトップだった。本人に聞くとオンラインゲームで似たようなリーダーを使った事があるとの事だ。まあ何にせよ4人とも全く悪い成績でないならそれでいいか。

内心笑っているとC級ランク戦のロビーに着いた。

「それじゃあ最後にC級ランク戦のやり方を説明する。C級ランク戦は基本的に仮想戦場での個人戦だ。やり方は簡単だ。ブースの中にあるパネルにブースの番号と武器とポイントが出ている。それが現在ランク戦に参加している隊員だ。好きな相手を選んで押せば対戦が出来る。逆に向こうからも指名される場合もある。対戦をやめた時はブースから出ればいい。今回はポイントの変動はないから気にしないで戦ってくれ。それじゃあ2人組みになってランク戦をやってみよう！好きな相手と組んでくれ」

嵐山さんがそう言うのと各自でグループが出来始めるも誰も留美と材木座に話しかけなかった。まあこの2人はC級のレベルじゃないからな。

……何か双葉ん時もあつたな。あの時は俺が戦ったが今回は偶数だから2で割り切れる。よって留美と材木座が戦うのは決定だろう。ちなみに小町はメテオラ使いの射手、戸塚は孤月使いの女子との対決になった。

初めの勝負は留美と材木座の勝負となった。

「八幡先輩はどつちが勝つと思いますか？」

「わからん。単純な実力なら留美の方が僅かに上だけど材木座との差は気持ちや運で埋められるくらいだからな」

俺がそう返すと双葉も真面目な顔をしてモニターを見る。既に2人は転送されていて、手には孤月とスコープピオンがあった。

先に仕掛けたのは材木座だった。孤月を抜きその巨体からは考えられない速度で斬りかかる。しかし留美は平然と孤月の一撃を避けて材木座の脇をスコープピオンで斬りつけた。材木座はすぐさま孤月を横に振って留美を追い払ったが脇からは若干のトリオンが漏れていた。先手を取ったのは留美か。

留美は手にあるスコープピオンを見て構えをとる。すると材木座は孤月を鞘にしまい、さつきバムスターを倒した時の居合の構えを取った。

それを見た留美は若干眼を細めて距離を置いた。あれはバカに出来ないからな。暫くの間緊張が走る。

この沈黙を破ったのは留美だった。スコープピオンを右手に持ち飛び上がり空中から斬りかかった。そして留美が材木座の頭を斬ろうとした時だった。

材木座は振り下ろされる前に突っ込み留美の足を斬り落とした。それによって地面に着いた留美は体勢を崩した。

そのチャンスを逃さないとばかりに材木座は直ぐに振り返り留美に斬りかかった。留美はスコープピオンを出して受けたがスコープピオンは呆気なく碎けた。孤月とスコープピオンじゃ耐久性が違い過ぎる。スコープピオンで受け太刀はしてはいけない事だ。

留美のスコープピオンを砕いた材木座は止めと孤月を留美の腹にぶっ刺した。……端から見ると太った高校生が小学生を刺しているようでヤバイ絵面だった。まあそれはともかく今回は材木座の勝ちだろう。

そう思った時だった。

留美がいきなり左手を伸ばして材木座の孤月を持っている方の手を掴み出した。……成る程な。

材木座も留美が何をするかわかったのか慌てて手を振るが一足遅い。

留美はその隙を逃さずに右手からスコープオンを出して材木座の首を刎ねた。それによって材木座はベイルアウトして空に飛んで行った。留美の勝ちだ。仮入隊の隊員達からは歓声が上がって大盛り上がりだ。

暫くすると留美と材木座がブースから出てきてこちらにやって来た。

「留美初勝利おめでとう」

「ありがとう双葉」

「材木座は惜しかったな。お前最後に油断しただろ？」

油断してなかったら留美が材木座の手を掴んだ瞬間に対応出来て勝っていただろうし。

「……う、うむ。確かに我。留美嬢の腹に刺した瞬間勝ったと思った」
「ランク戦では道連れしてくる奴もいるんだ。相手がベイルアウトするまでは油断するな」

「承知した。次は負けぬぞ留美嬢」

「……中2には悪いけど次も私が勝つ」

まあ何だかんだライバル心が目覚めているみたいだな。つか小

学生に中2且つ呼び捨てでっただけ舐められてんだお前？

呆れている中訓練は進んでいった。ちなみに小町と戸塚は両者共に勝利を収めた。その際に小町が抱きついてきて双葉がムツとしていたのは割愛する。頼むから妹に嫉妬するな。

あれから1時間、訓練も終わり今日は解散となり俺は今小町と双葉の3人で歩いている。

「……小町はB級に上がれるかなあ？」

「Bには上がれると思うぜ。とりあえず4人がB級に上がるまでは訓練に付き合つてやるよ。ま、留美と材木座は既にB級下位とやり合えるだろうけどな」

とりあえず俺は材木座と戸塚に訓練を施す事になった。しかし材木座はともかく、俺は突撃銃の個人ポイントは5000くらいしかないので戸塚がB級に上がったら教えられる事は殆ど無くなる。その時は犬飼先輩や嵐山さん、ザキさんあたりに頼んでみるか。材木座にしてもスタイルによつては辻、生駒さん、王子先輩あたりと違う人に頼むかもしれない。

そんな事を考えていると小町の携帯が鳴りだした。小町はそれを見ると、

「あ、お兄ちゃん。小町来週に玲さん達と花火大会に行つてそのままお泊まり会する事になったから」

「わかった。気を付けろよ」

「ほいさっさー、ところでお兄ちゃんは双葉ちゃんとは行かないの？」

小町がキョトンとした顔で聞いてくる。すると双葉は真っ赤になつて頭を下げてきた。

「あ、あの……八幡先輩さえ良ければ一緒に行きませんか？」

双葉が頼んでくると小町が「断ったら殺す」とばかりに睨んでくる。怖いからその目止めろ。まあ断るなんて選択肢はないけどな。

「わかった。行こうぜ」

「……?!はい！ありがとうございます！」

双葉が礼を言ってくるると小町はニコニコして頷いている。すると……

「そうだ！その日小町いないんだし、双葉ちゃんうちに泊まりなよ！」
爆弾を投下してきた。双葉は物凄い勢いで真っ赤になった。

「こ、こ（こ）こ小町さん?!」

……こんなにテンパった双葉は初めて見るな。何か場違いだが新鮮に感じる。

「えー、いいじゃん。新婚生活の予行練習って事で……ね！」

そう言っただけで俺と双葉にウイंकをしてくる。……こいつは本当に……

小町に呆れていると

「うううううう……!!」

双葉は真っ赤になりながら走り去っていった。俺は双葉が見えなくなるまで見送って小町を軽く睨む。

「……まったくお前は……」

「てへっ」

舌を出して笑っている小町を見て俺はため息を一つ吐き出した。

比企谷八幡と黒江双葉は花火大会に行く

「ふんっ！」

材木座が振り下ろしてきた孤月をステップで躲して孤月で横振りをして反撃をする。材木座も慣れたのか直ぐに対応して孤月を上げて俺の攻撃を防ぐ。この短時間で俺の攻撃にある程度対処出来るようになったのは褒めてやる。

……だが、まだ甘いな。

口の中でそう呟きながら足払いをかけて体勢を崩させる。いきなりトリガーを使っていない攻撃を受けた材木座はバランスを大きく崩した。そんな隙を見逃すつもりは毛頭ない。

俺は孤月を軽く振って材木座にの両腕を斬り落とした。孤月しかもっていない材木座の勝ち目はなくなった。

そう判断した俺は材木座の顔に孤月を突きつける。

「残念だが詰みだ」

「……むふう。参った」

材木座の降参宣言を聞いて10本勝負が終了した。

「ふう……」

「比企谷君も中2君もお疲れ〜」

訓練を終えトレーニングステージから作戦室に戻ると国近先輩が労ってくれる。

「どうもっす。他の訓練はどうすか？」

国近先輩の後ろからモニターを見る。

そこには出水にバイパーを鍛えられている小町、双葉と戦ってかなり攻め込まれている留美、唯我と戦ってかなり互角な戸塚が映っていた。つか唯我よ。ボーダーに一年以上いてトリガー使い始めて間もない戸塚といい勝負ってお前……

呆れている中、双葉の鋭い一撃が留美の首を刎ねた映像が流れていた。

「……やっぱり双葉は強いね。勝てる気がしないよ」

「気にすんなよ留美。双葉は1年近く戦ってんだぞ？トリガー使つて間もないお前じゃ勝てないのが普通だ」

現在、全員が訓練を中断して休憩に入っている。あれから一週間、仮入隊した四人は合同訓練を除いた時間は太刀川隊作戦室で自主練習をしている。そこで太刀川隊メンバーもサポートしている。

小町は出水からバイパーを習って射撃の練習をして戸塚との模擬戦を繰り返している。戸塚は唯我との模擬戦をしてから小町との模擬戦をしている。とにかく実戦練習をしている。小町との模擬戦は大体6ー4か7ー3で小町が勝っている。まあバイパーは初心者じゃ防いだり避けたりするのは難しいからな。

材木座は基本的に俺と、留美は双葉と10本勝負をして使っているトリガーの腕を磨いている。その後2人で10本勝負をして反省会って流れた。実力は五分五分で中々良い勝負だ。

ちなみに偶に太刀川さんが俺や双葉の代わりに参加して2人をボコボコにしている。……頼みますから正式に入隊してない人の心を折らないでくださいね？

「むふう。ところで黒江殿は入隊してどれくらいで八幡から初勝利を奪えたのだ？」

「確か入隊して1ヶ月くらいでしたね」

「……我、全く八幡に勝てる気がしなくてのお」

「大丈夫ですよ。私も八幡先輩の弟子になった頃はそうおもっていましたから」

「あいわかった。それを聞いて安心した。覚悟しておけ八幡。いつか我が必殺奥義、幻紅刃閃で貴様を「黙れ」げふおう?!」

ウザいから腹に拳を叩き込んで黙らせる。

「……黒江ちゃんから聞いたけど本当に才能のある唯我だな。……なあ比企谷。今思ったんだけどさ、唯我追い出して材木座入れた方が良くね?」

「出水先輩?!」

「ああ、それは俺も前に思った」

「比企谷先輩も?!」

いやだつて既に材木座と留美は唯我より強いし。材木座は唯我相手に9割近くの勝率だし、留美に至ってはこの間10本勝負で完封勝ちしてたし。まあ唯我は一応スポンサーの息子だし追い出せないけど。

え? 留美は誘わないのだった? 馬鹿野郎、あんな純粹無垢な女子を太刀川隊という戦闘以外は残念な人間の巣窟に入れたら可哀想だろうが。

「それで小町と戸塚の様子はどうなんだ？」

「戸塚先輩なら問題ないですよ。何せこの僕が「んで戸塚、銃の扱いには慣れたか?」比企谷先輩?!」

「あはは……えーつと、止まってる的には走りながら撃つても余り外さなくなつたね。でも唯我君と戦ってわかつたけどお互いが動いていると中々当たらないね」

「まあ始めはそんなもんだ。けどお互いが動いている状態でも当てられるように早いうちから訓練はしとけ。マスタークラスの銃手になるとそれが当たり前のように出来るからな」

犬飼先輩とか嵐山さんとかは普通に出来るし。

「うんわかった。頑張るね！」

「おう。頑張れ。で、小町はどうだ？」

「とりあえず何回かバイパーを教えたら小町ちゃんは俺や那須と同じリアルタイムで弾道を引ける事がわかった」

「そうなんですか？それは楽しみですね」

「まあな。後はどっちにするかだな」

「出水先輩、どういう事ですか？」

「ん？だからお前の教育方針だよ小町ちゃん。バイパーを使うって言っても俺みたいに味方に点を獲らせるパターンと那須みたいに高い機動力を生かして自分で獲りに行くパターンがあるんだよ」

「まあ焦らなくてもいいだろ？先ずはリアルタイムで弾道を引けるんだし弾数を増やすのが最優先じゃね？」

まあ俺は攻撃手だからよくわからんが。

「つと、休憩はそろそろ終わりにするか」

「うむ。では留美嬢。いつもの10本勝負をやるぞ」

「……うん。負けない。国近先輩ステージ製作お願いします」

「ほーい」

「あ、留美。悪いんだけど明日は私と八幡先輩用事があるから訓練出来ないんだ」

「え？……ああ、八幡と花火大会行って新婚生活の予行練習するんだっけ？」

留美がそう言ったのを聞いて俺は飲んでいる紅茶を吹き出した。周りを見ると双葉は真つ赤になっていて、出水はびくりした後ニヤニヤしていて唯我は驚いた顔を向けてきて国近先輩もいつものゆるふわな笑みを浮かべていた。材木座と戸塚は知っていたようで驚いてはいないが、材木座は呆れた顔を、戸塚は微笑んでいた。……何か材木座に呆れた顔をされるとムカつくな。

この事を話したであろう小町を見るとテヘペロをして戸塚と一緒にトレーニングステージに入って行った。……うん。可愛いから許すか。

「大丈夫だよ。明日は中2との模擬戦の数を増やすから」
「私もそれで構わん」

そう言つて2人はトレーニングステージに入つて行つた。

「……なあ双葉。花火大会は構わないんだが……」

「……あ、あの八幡先輩さえ良ければ……その、予行練習をしたいです」
俺がやんわりと断ろうとすると双葉が真っ赤になりながらもお願いをしてくる。仕方ないか……

「……わかつたよ。明日花火大会終わつたらうちに来いよ」

「……?!はい!」

まあ正直恥ずかしいが双葉の笑顔が見れるなら安いものだ。

「あれ?明日の花火大会って事はポートタワーでやるやつですか?」

唯我が唐突に聞いてきた。

「ん?そうだがどうかしたか?」

「いえ、あの花火大会はうちの会社がメインのスポンサーなんですよ。もし良かったら2人分の貴賓席を準備しましょうか?有料エリアは静かですから良いムードが出ますよ」

ほう、中々良い提案だな。双葉と2人きりか……。

「で、唯我。その有料エリアっていくらなんだ?」

「無料で大丈夫ですよ。比企谷先輩にはお世話になってますので」

それはありがたいが高らかに言うな。

「ふーん。じゃあ頼むわ。あ、後静かと言っても出来るだけ周りに人が少ない場所にしてくれ」

「わかりました。では明日夜の8時に有料エリアの入口にいますので」

「サンキュー。つーことはお前も花火を見るのか?」

「僕は親と一緒に挨拶回りをするのが殆どですね」

やっぱり御曹司つてのは面倒そうだな。そんな事を考えながら4人の模擬戦をぼんやりと眺めた。

翌日、俺は今、花火大会の行われる会場の最寄り駅近くのコンビニの壁に寄りかかりつつ、ケータイを弄っている。時間を見ると、集合時間の10分前。いい感じの時間だな。

「お待たせしました」

呼ばれたので振り向くと浴衣を着た双葉がこちらにやって来た。

「別に待ってないぞ。第一、まだ集合時間になってないから平気だろ。……それと、何だ…浴衣可愛くて似合ってるぞ」

余りに可愛くてつい漏らしてしまった俺は悪くない。だってメチャクチャ可愛いからね。

「は、はい。ありがとうございます…。それじゃあ行きましょう」

そう言つて双葉は腕を絡めて手を繋いでくる。相変わらず柔らかなくて気持ちがいいな。俺は双葉の手を優しく握つて歩き出した。

会場に着くと屋台がずらつと並んでいた。

「唯我との待ち合わせまで後30分か。何か食うか？」

「そうですね。私は焼きそばが食べたいです。八幡先輩は？」

「そうだな…お好み焼きとか？」

「では、それぞれ食べたい店に行つて買ったらあそこの木の下に集合しませんか？」

「はいよ。また後で」

そう言つて、俺はお好み焼きを買う為に屋台に入った。すると見知った顔が何人もいた。

「ん？比企谷じゃねえか」

「あ？んだよハチじゃねえか」

「奇遇だな。1人か？」

そこには荒船さん、カゲさんに村上先輩がいた。カゲさんだけは店で働いていた。おそらくカゲさんの店が屋台に出張したのだろう。

「どうもつす。いや双葉と来たんすけどあいつは焼きそば買ってますね」

「なるほどな。そう言えば今期の仮入隊隊員で優秀な奴らを太刀川隊で鍛えてるっての本当なのか？」

「あ、はい。その優秀な奴ら4人は全員俺の知り合いですから」

「んでそんな中に強え奴はいるのか？」

「落ち着けカゲ」

カゲさんが好戦的な笑みを浮かべ村上先輩が止めている。

「そつすね。内2人は攻撃手ですけど既にB級下位のレベルを超えますね。来年になる頃にはカゲさんが楽しめるくらいにはなると思いますよ」

「ハッ！そんな時が楽しみだぜ！」

「俺も戦ってみたいな。その4人はチームを組むのか？」

「多分」

村上先輩がそんな質問をしたので適当に答える。以前戸塚と材木座はチームを組む云々言ってたし。小町も似たような事を言ってた気がする。

「って事は次回のランク戦に出てくるのか？」

「わかりませんね。唯、戦術もマトモに出来てないのにランク戦に出てもあんまり意味ないですからね。俺がそのチームの隊長だったら10月からのランク戦は参加しないで、しっかりと戦術を組み立てて相手チームの研究を済ませた状態で2月からのランク戦に出ますね」

確かに10月までには全員B級下位のレベルは上回ると思う。けど強いだけじゃランク戦は勝ち抜けない。B級中位になると部隊ごとに戦術が確立している。マトモな戦術がないんじやB級中位と下位を行ったり来たりするのがオチだ。

「んなもん実戦で鍛えりゃ身につくだろう」

カゲさんが俺の意見を一蹴した。まあそれも答えの1つだ。決して間違っではない。

「まあそれを決めるのはあいつらですから。それより豚玉1つ」

「あ？……ああ。まいど」

そうやってカゲさんは思い出したかのようにお好み焼きを焼き始める。その間にサクツと支払いを済ませる。

「あ、後最近テメエとも戦ってないから今度戦ろうぜ」

「まあいいっすけど」

「というかお前そろそろ鋼にポイント抜かされんじゃねーの？」

荒船さんの指摘に頷く。

「そっすね。今俺のポイントは10800ぐらいだったですね。村上先輩は？」

「後100ポイントあれば10000をこえるな」

「うわー、大分追いつかれたな。本当に抜かされるかも。」

「仕方ない。今度米屋と緑川から500ポイントずつ徴収するか」

「いや徴収ってお前……」

荒船さんが呆れた顔をして村上先輩も苦笑いしているがそんなに変な事を言ったか？

「おらよ。500円だ」

首を捻っていると頼んだお好み焼きが来たので金を渡す。

「はい。んじや俺はもう行きます」

「ああ、まいど」

「またな」

「俺ともランク戦しろよ」

挨拶を交わし集合場所の木の下に行くとき既に双葉かいた。

「すまん双葉。遅れた」

「いえ、気にしないでください。それよりも食べましょう」

まあそうだな。近くのベンチに座りパックを開ける。

「いただきます」

挨拶をして食べ始める。うん、やっぱりカゲさんの店のお好み焼きは最高だな。感心していると、

「八幡先輩、あーん、です」

言われて双葉を見ると焼きそばを俺に差し出してきたのでパクリ

と食べる。

「美味かった。こつちのお好み焼きも食べるか？」

「いいんですか？……じゃあ」

そう言つて双葉は口を開けてきた。……食べさせろつて事ですね、ハイ。

「ほらよ、あーん」

「んっ」

小動物のようにモグモグ食べている双葉を見ると癒やされるなあ……双葉を眺めながら食事を再開した。

食事を済ませると唯我との待ち合わせ時間10分前だったので立ち上がり歩き出した。

有料エリアの近くに着くと辺りにトラロープが張られ明らかに区切られていふ場所があつた。

この広場は全体が木々で囲まれていて花火が見にくい。しかし有料エリアの場所は小高い丘になっているので見晴らしが大変よろしい。

有料エリアの入口に行こうとした時だった。

目の前から由比ヶ浜がこちらの方に歩いてきた。何でこいつがここに？

向こうも俺達に気付いたのか由比ヶ浜がこちらにやってきた。すると殺気を感じたので見ると双葉が物凄い冷たい目で由比ヶ浜を睨んでいた。由比ヶ浜も殺気を感じたらしく双葉を見ると驚いた顔をしている。どうやら双葉に気づかなかつたらしい。つか何で双葉はこんなに殺気を出してんだ？雪ノ下に対する態度に似ているぞ。にしても本当に由比ヶ浜がお菓子の子なのか？

閑話休題：

とりあえず今双葉に口を開けさせるとヤバい気がするので俺が由比ヶ浜に話しかける。

「よう。1人か？」

「あ、うん。隼人君達と一緒に来たんだ。……ヒツキーはデート、なの？」

精一杯目を細めて、強張る口元を見せながら聞いてくる。すると双葉が俺の腕に抱きついて由比ヶ浜に話しかける。

「はい。デートです。ですから八幡先輩と2人きりにさせて貰いたいんですけど」

お前それ遠回しに消えろって言ってるぞ。つーかマジで由比ヶ浜と何があつたんだ？下手すりゃ雪ノ下以上に嫌ってる気がする

「双葉、由比ヶ浜と何があつたかは聞かないがその言い方は止めろ」
いくら最愛の恋人でもこれは聞き捨てならないからな。

「ですが……この人の所為で留美が危険な目に！」

あー、なるほどな。あの時葉山に伝えなかつた事か。まあ腹が立つ理由はわかつた。だからといって双葉の言い方を容認するつもりはない。

「落ち着け。だからといって言い方があるだろうが。それに留美は今を楽しんでるんだ。由比ヶ浜を許せとは言わないが少し冷静になれ」
「……はい」

双葉は不満がありそうな顔をしているが殺気を収めた。ホツと息を吐いて由比ヶ浜に向き合う。

「悪かつたな。双葉が迷惑をかけた」

「う、うん。ところで留美ちゃんは本当に大丈夫なの？」

「問題ない。今はボーダーで楽しくやっているぞ。……ん？おい、あそこに葉山達いるぞ」

指し示した場所には葉山、三浦、戸部、海老名さんと、誰だ？知らないのが3人いた。

「あ、本当だ。……ってさがみん？」

どうやら知り合いみたいだな。そう思っていると携帯のアラームが鳴り出した。ヤベ、唯我との集合5分前だ。

「探してる相手も見つかったみたいだし俺達はもう行く」

「…え?!ちよつとヒッキー?!せつかくだし一緒にまわろうよ?!」

「悪いが無理だ。唯我……知り合いを待たせている」

つーかお前がそれを望んでいても他の連中からすりゃ俺なんてお呼ばれじゃないだろうし。

「じゃあその人も一緒に」そろそろ行きましょう、八幡先輩「……っ?!」
由比ヶ浜の言葉を遮るように双葉は俺の手を引つ張り歩き出した。
「あ、おい！ったく……またな由比ヶ浜」
軽く挨拶をしながら引つ張られた。最後に由比ヶ浜が苦い顔を
して双葉を見ているのが印象的だった。

「……すみませんでした。ついカツとなつてしまつて」
ある程度離れると双葉が頭を下げてくる。まあ少しは落ち着いて
みたいだな。

「反省してるならこれ以上追求はしない。それより行くぞ」
「は、はい」

有料エリアの入口に歩き出すと入口に唯我がいた。
「すまん遅れた」

「珍しいですね。時間に正確な比企谷先輩が」
「予想以上に色々あつてな。案内して貰つてもいいか？」
「もちろんです。さあどうぞ」

唯我に案内されて有料エリアに入る。初めは警備員に睨まれたが
唯我がいた瞬間に頭を下げてきた。ボーダーではお荷物だがこう
言った場所では御曹司の風格が出ているな。

暫くして唯我が席を指し示した。
「ここです。この席なら他のVIPも来れない特等席ですから邪魔が
入らないと思います」

言われて周りを見ると他のVIP連中からは大分離れていた。こ
れなら確かに邪魔が入らないな。

「……あ！僕はこれから祝辞とかを近くで聞かなきゃいけないので失
礼します」

「そうか悪いな唯我」

「ありがとうございます」

「いやいや、同じ隊の先輩と可愛い後輩の為ですから」

そう言って唯我は去って行った。

「……唯我先輩って本当にお金持ちなんですね」

双葉がしみじみと呟いている。まあ普段の唯我はなよよしてる奴だしな。

そう思っていると少し離れた場所から声が聞こえてきた。おそろく偉い人の詰まんない話だろう。暫くしてその声が聞こえなくなると一発目の花火が打ち上がる。

音楽に乗せ、特大のスターマインが大量の花を咲かせる。

「綺麗ですね」

「……ああ」

花開く光輪はポトタワーの HALF ミラーガラスにも移り輝きを増す。これを皮切りに 8000 発の花火が続くとの事だ。双葉を見ると目を輝かして花火を見ていた。いつものクールな双葉も好きだが年相応の双葉もかなり好きだ。

笑いながら双葉を見ると双葉の唇が艶めいているのが見えた。その瞬間俺の中の何かがドクンと動いた。

「…… 双葉」

「はい？何ですか？」

双葉がキョトンとした顔で見えてきて更に顔が熱くなってきて内側から欲望が湧いてきた。ダメだ、もう我慢出来ん。

「その、なんだ……キスしてもいいか？」

望んだ事を口にしてしまった。双葉を見ると驚いた顔をしていて、暫くすると笑顔を見せてきた。

「……はい。いいですよ」

「本当か？」

つい確認をしてしまう。

「もちろんです。八幡先輩からキスを要求するのは初めてですし。……でも1つだけ条件があります。キスするなら八幡先輩がリードしてください。偶には八幡先輩にリードされたいので」

まあ俺からキスしたいと言ったんだ。受け入れるか。

「わかった。じゃあよろしくな」

「はい」

双葉から了承を得たので優しく引き寄せる。双葉は艶のある目で俺を見てくる。その姿にドキドキした俺は双葉に顔を近づけて、

ちゅっ……

色とりどりの花火が打ち上がる中双葉と唇を合わせた。

「んっ……ちゅっ」

双葉は目を瞑って俺の首に腕を絡めてきたので俺はお返しとばかりに双葉の唇に自身の唇を押し付けた。合わせた唇と唇の間からわずかに漏れたお互いの吐息がやけに色気づいていて恥ずかしいな。

やっぱり双葉とキスするのは幸せだ。そう思いながら閉じていた目を開ける。すると双葉も目を開けていて顔を真っ赤にしていた。おそらく俺も真っ赤だろうな。

内心苦笑いをしているとお互いの舌が軽くぶつかった。それを自覚した俺は自分の舌を優しく双葉の口内に入れた。

「んっ……んんっ!?!ん……はちみゃんしえん、ぱい……」

初めは驚いた顔をしていたが直ぐに無抵抗になった双葉の口内をゆっくり、ねっつりと舐め始める。

そして遂に俺の舌が双葉の舌を捉えた。

双葉は驚いた顔をして、自分の舌を奥の方へと逃がそうとしているが逃がすつもりはない。直ぐに双葉の舌を捕まえて舌の表面をゆっくりと丁寧に舐める。

「ふっ……んっ……」

すると双葉はいつの間にか抵抗を止めて俺の舌を受け入れてくれた。

「んっ……ちゅるっ……ぴちゅ……」

初めは優しく舌を吸い寄せて、直ぐに強く吸い付けたり、ゆっくりだったり急だったり、優しかったり激しかったり……色々な方法で双葉と舌を絡め続けた。

「んっ……ん！ はあん！」

どれぐらい舌を絡め合わせていたか、二人には分からないぐらいの時間をかけていた。双葉と唇を離すと双葉は思わずとばからに甘い声を出していた。

双葉を見るとトロンとした顔で見えて、お互いの唇と舌の間にはキラリと光る糸が伝う。

そしていつの間にか口内に溜まっていた俺か双葉のどちらか分からない唾液がわずかに俺の唇の端から顎を伝って零れ落ちた。

すると双葉は俺の顎を舐めて唾液を舐め取っていた。

それを見た俺は絶句してしまった。すると双葉は優しい笑顔を浮かべて

「大好きですよ。八幡先輩」

ちゅっ……

双葉から優しいキスをしてきた。双葉とのキスをしている背景では数十分続き最後に金色の幕が空に降りる。花火大会のラストを飾るゴールデンシヤワーか、周りから拍手が響く。俺にはそれがまるで俺達を祝福しているように見えた。

唇を離すと同時に花火が終わった。双葉を見ると笑顔を浮かべていた。

「八幡先輩……気持ち良かったです」

はつきりと言うな。照れるから。

「な、なら良かった。それより混む前に帰ろうぜ」

帰りの電車に遅れると面倒だしな。

双葉も頷いたので有料エリアから出た。

その時だった。

「あれー？比企谷君と双葉ちゃんじゃん」

いきなり名前を呼ばれて俺と双葉は辺りを見ると知っている人がやってきた。

「まさかこんな所で会うとは思いませんよ。雪ノ下さん」

そこには雪ノ下陽乃さんがいた。

「父親の名代で挨拶回りだね、こういう自治系のイベントでは強いのに」

そんな事を言いながらこっちに近づいてくる。

「何で2人は貴賓席にいるの？去年までは見てないし」

「唯我って知り合いが手配してくれたんすよ」

そう返すと雪ノ下さんは驚いた顔で見してきた。

「唯我って唯我グループの？比企谷君ってそんな大物と知り合いなんだ？」

「ええまあ。ボーダーでは知り合いですね」

「ふーん、そうなんだ。それより2人はもう帰るの?」

「はい、そのつもりですが」

「そっか駐車場まで一緒に行かない?」

「まあ構いませんが」

そう言つて3人揃つて歩き出した。駐車場まで出ると、スーツとハイヤーが近づいてくる。雪ノ下さんが連絡していたらしいハイヤーは俺らの歩く歩道に横付けされる。

……ん?この車どつかで見覚えがあるな。

つい凝視している時だった。

「そんなに見ても見える所に傷なんて残つてないよ」

雪ノ下さんはクスクスと笑う。

それを聞いた俺は言つてる事を理解して双葉はキョトンとしている。

「どうりで見覚えがあると思つたぜ」

独り言を小さく呟いたが雪ノ下さんには聞こえたようだ。

「え?もしかして雪乃ちゃんから聞いてなかつたんだ。悪い事しちゃつたかな?」

申し訳なさそうな声を出す。空気は重いままだ。

「八幡先輩、傷とか言つてたけどどういうことですか?」

「高校の入学式当日にこの車に撥ねられて入院したんだよ」

「えっ!!それつてあの女から聞いてないんですか?!!」

双葉が驚いている。まあ普通言うよな。しかもあいつの場合黙つているに加え散々俺の事罵倒してくるしイカれてるだろ?

「ああ、聞いていない」

その反応に意外だったのか雪ノ下さんが口に出す。

「あ、でも勘違いしないでね、雪乃ちゃんが悪い訳じゃないんだから、あの子はただ乗つてただけだし、何一つ悪い事はしていない。それでいいよね、比企谷君?」

確認するように聞いてくる。まあどうでもいいか。

「問題ありません。そんな事より車は弁償した方がいいですか?」

俺としては雪ノ下云々より車の弁償云々の方が重要だ。

「大丈夫だよ。入院してる時に、全ての費用はうちが負担するって約束したしね」

「そういやしたな。その代わりこの事故を大事にしないでくれって頼まれたな。」

「そうですか。なら良かった。んじゃ、俺らは帰るんで」

「うん、分かった。でも比企谷君は雪乃ちゃんに怒ってないの？」

「別にあいつに興味がないんで。唯一つ言うなら事故の事を黙っていた拳句散々人を見下すあいつは人間性がヤバいんで改善させた方がいいっすよ」

これはマジな話だ。別にあいつがどうなろうと構わないがそれでまわりに迷惑をかけたらヤバいしな。

すると雪ノ下は冷たい目で遠くを見ていた。

「ふうん。……やつぱり雪乃ちゃんは自由にさせすぎたのかなあ？」

自由にさせ過ぎ？という事だ？

疑問に思っていると雪ノ下さんはいつもの笑顔を見せてくる。

「とりあえず雪乃ちゃんが迷惑をかけてごめんね」

「別にどうでもいいですよ。俺らは疲れたから帰ります」

「そっか。じゃあまたねー」

そう言ったのを最後にハイヤーは走り出して直ぐに見えなくなつた。

息を吐くと双葉は不満そうな顔をしていたので頭を撫でる。

「お前の言いたい事は予想がつく。けど一々怒るなよ。雪ノ下にそんな価値はないんだし」

「あいつに関わると疲れるだけだし関わるだけ損だ。」

「……わかりました」

納得はしてない顔をしているが怒りを収めたようだ。俺は暫くの間双葉の頭をワシヤワシヤし続けた。

あれから1時間、俺達は今俺の家の近くにいる。

理由は簡単だ。双葉がうちに泊まるからだ。

「……じゃ、じゃあよろしくお願ひします」

一度家に帰って私服に着替えた双葉が真っ赤になって話しかけてくる。尚双葉は両親にはボーダーのオペレーターの友人の家に泊まると言っている。

「……ああ。よろしくな」

「…は、はい。……八幡先輩」

「何だよ？」

聞き返すと双葉は真っ赤な顔をして爆弾を投下した。

「……………、今夜は寝かせませんよ」

.....
フ
ア
?!

こうして2人きりの至福の一時が始まる。

風呂

それは体を洗って汚れを落としたり、疲れを取る為に存在するものである。俺は1日の終わりに風呂に入るのは大好きだ。ゆつくりと湯船に浸かって明日に備える、そんな何気ない時間は最高だ。

普段なら

「……どうしたの、八幡?」

「い、いや。何でもない」

しかし今は違う。いつもなら1人で湯船に浸かっているが、今日は双葉が一糸纏わぬ姿で俺の上に乗って抱きついている。

しかもそれが原因で桜色の先端が俺の身体に当たっていて凄いだキドキしている。てかこれ見方によってはヤツてるように見える気が……

双葉は大分恥じらいをなくしたようだが、俺はまだ緊張してしまっ

ている。

どうしてこうなった？

頭の中で疑問符を浮かべている時だった。

「……八幡」

ちゅっ……

双葉がキスをしてきて現実に引き戻される。双葉の艶めいた瞳、唇の柔らかさ、小ぶりな胸のふにゆんとした感触、それらが俺の脳を刺激してくる。

ドキドキしている中、双葉は更にキスをしてくる。

「んっ……ちゅっ……大好きだよ、八幡」

もう一度言う。どうしてこうなった?!

遡る事約1時間……

「こ、今夜は寝かせませんよ」

双葉の爆弾発言を聞いた俺はドキドキしながら家に歩いている。今夜は寝かせないだ?!それはアレか?!今日初夜を迎えるって事か?!いやいや流石にそれはマズイ!

「双葉、一応聞くが、それって今日やるって事か?」

だとしたらマジでヤバいんですけど……！一塁の希望を持って尋ねると双葉がキョトンとした顔をしてくる。

「……やる？何をやるんですか？」

ん？やるの意味を知らないのか？まあ中1だから知らなくても仕方がないかもしれないし、それならそれで構わないんだが……

「じゃあ双葉、何でお前は今夜は寝かせないなんて言ったんだ？」

「え？えっと、それは以前加古さんが『大人になって比企谷君と結婚したら夜に今夜は寝かせないって言ってみなさい。比企谷君に良い事をして貰えるから』って言ったんです。今回は新婚生活の予行練習ですから言ってみようかなと……。ところで良い事って何ですか？」

加古さん?!何12歳の女の子にそんな事を言っているんですか?!双葉の将来は加古さんみたいな小悪魔になりそうで怖すぎる……

「はあ、まあわかった。とりあえずその発言はするな。それは大人になっってから言え」

日本じゃ13歳未満の女子とやるのは犯罪だからな。予行練習とはいえそんな事を言わないでくれ。

「は、はあ……」

双葉はよくわからないと言った表情で俺を見てくるが話す事は出来ない。純粹無垢な双葉には早過ぎる。

そう思いながら双葉の手を引つ張り歩き出した。

歩く事3分、ようやく自宅に着いた。鍵を開けてドアを開けようとした時だった。

「あの、八幡先輩。お願いがあるんですけど」

双葉が唐突に口を開けてきた。ん？いきなり何だ？

「何だ？言ってみろ」

「は、はい。私が先に家に入っているいいですか？」

「……は？」

何だその願いは？

「別に構わないが……」

「本当ですか？」

「ああ。でも何で？」

「えっと、それは……」

真つ赤になりながら口をモゴモゴしている。余り言いにくい事なんだろうな。

「無理に言わなくていい。先に入るなら入ってくれ」

「す、すみません。では私が入ってから15秒経ってから入ってきてください」

そう言っつて双葉は自宅に入ってドアを閉めた。本当に何を考えているんだ？……つと、もう15秒経つたな。

ドアを開けた時だった。

「おかえりなさい、あなた」

ちゅっ……

そう言っつて笑顔で触れるだけのキスをしてきた。あー、なるほどな。おかえりのキスをしたかったのね？既に新婚生活の予行練習は始まっているって事か。

なら、俺も練習をするか。

「ただいま、双葉」

そう言っつてお返しとばかりに優しくキスを返す。

「ふえ?!は、八幡先輩?!」

双葉は真っ赤になってテンパリだした。可愛いなおい。軽く頭を撫でると双葉は抱きついてきたので優しく抱き返す。

俺達は5分近くお互いを抱きしめあった。

抱き合うのを止めた俺達はリビングに座り、食事をし始めた。やっぱり花火大会で食べたお好み焼きだけでは腹が膨れなかった。それは双葉も同感の様でモグモグ食べている。

「美味しいですね。ありがとうございます」

「気にすんな。……それでこれからどうすんだ?」

新婚生活の予行練習つても結婚してないからどういうモノかよく分からん。

すると双葉は恥ずかしそうに口を開ける。

「えつと……一緒に風呂に入ったり、寝たりですよね?」

……予想はしていた。まあ確かにそうだけど……

「えーつとだな、双葉。それは……」

口をモグモグしていると双葉がウルウルした瞳で

「……八幡先輩が嫌ならいいですよ」

て言ってくるが断言出来る。ここで断ったら絶対に双葉は悲しむ。それは絶対に許されない事だ。よって俺の返事は1つだけだ。

「わーつたよ。但し条件がある」

俺も双葉にして欲しい事があるのである提案をする。

「何ですか?」

「簡単な事だ。今日と明日だけでいいから俺に対して敬語を使うな」

礼儀正しい双葉も好きだが緑川に対してタメ口を聞いている双葉も凄く可愛い。一度双葉とは対等の立場で接して貰いたかったしな。

「そ、それは悪いですよー!」

やっぱりそう言うと思ったぜ。

「本人が良いって言ってるんだぞ?大体夫婦になったら対等な立場に

なるんだぞ」

「わ、わかりました」

双葉はそう言って一区切りして俯く。そして顔を上げて

「じゃあよろしくね。……八幡」

上目遣いでそう言ってきた。

ガハツ!!

最高だ！メチャクチャ可愛い！やっぱり俺ってロリコンだったんだな。

「双葉、予定変更だ。これからずっとタメ口にしてくれ」

「ええっ?!流石にそれは……」

双葉がテンパリだった。まあ真面目な双葉だ。そう簡単に了承するとは思ってなかった。

「まあ直ぐに言えとは言わない。でも明日まではタメ口な」

「う、うん。わかった」

「ならよし。とりあえず今日からよろしくな。双葉」

「うん。……じゃあ約束通り、お風呂……行こ？」

ついに来たか。俺の理性よ。頼むから耐えてくれよ。

内心そう呟いて脱衣所に歩き出した。

脱衣所に着くと胃が痛くなってきた。ヤバい緊張してきた。俺が頭を抱えている時だった。

シユルツ……

布ずれの音がしたので顔を上げると双葉が服を脱いで上半身は下

着だけになっていた。

(しかもピンクかよ?!)

普段のクールな双葉が着るとは考えにくい色の下着を見て顔が熱くなってきた。つい見てしまおう。

すると双葉はスカートをゆつくりと下ろして完全な下着姿になる。

……これ以上はヤバいな。

そう判断した俺は、パパッと服を脱いで全裸になる。幸い双葉は俺を見ていないしな。

「先に入るぞ」

そう言っただけで風呂に入った。割と汗をかいたのでまずはシャワーを浴びるか。

シャワーの温度を温くしてシャワーの浴びる。あー、気持ちいい。

シャワーに癒されている時だった。

ガラガラッ……

ドアの開く音がしたのでチラリと見た。

その瞬間俺は絶句してしまった。

そこには最愛の恋人がタオルを巻かず一糸纏わぬ姿でそこにいた。初めて髪を下ろした双葉を見たがツインテールとか違う味があつていいと思う。

そして何より双葉の双丘の美しさに見惚れてしまった。小ぶり、しかし確かに自己主張している双丘と桜色の先端は言葉に出来ないくらい綺麗だった。

しかしガン見して引かれるのは嫌なので急いで正面を向いてボ

デイリースープをとろうとした時だった。

「……八幡。私が八幡の体を洗うね」

そう言っただけで双葉はボディースープをとって俺の背中に持って行った。ボディースープの所有権が双葉にある以上、選択肢はないか……

「わかった。頼む」

「……うん」

双葉は了承すると後ろから深呼吸するのが聞こえてきた。何故に深呼吸？

双葉に理由を聞こうとした時だった。

ふにゆん……

いきなり背中に柔らかな感触を感じた。これってまさか……?!

「ふ、双葉！お前何で……?!」

間違いなく俺の背中には双葉の双丘が当たっている。だって今グニツとした感触があったし、おそらく桜色の先端だろう。

テンパっている俺に対して双葉は

「……今から洗うね。……んっ」

そう言っただけで双葉は自分の身体を上下に動かし始めた。ヤバイヤバい!!背中一面に柔らかな感触が襲ってきた!

「うおっ……くっ……ふ、双葉」

変な声を出した俺は悪くない。だってヤバ過ぎるからね？

「んっ……んっ……八幡、気持ち良い?」

「……いや、最高だけど」

「……良かった。じゃあもつと気持ち良くしてあげるね」

言うや否や双葉は俺の胸あたりに手を回して更に強く抱きついてくる。俺が突っ込みを入れる前に双葉は更に激しく動いてくる。

急いで舌を噛んで理性の崩壊を防ぎ始めた。俺は暫くの間双葉の胸の感触と戦うだけの存在となった。

2分後ようやく双葉の胸から解放されてシャワーで背中と両腕に付いたボディソープを洗い流した。安堵の息を吐いて双葉に話しかける。

「おい双葉。さっきの洗い方……」

「ご、ごめんね。実は以前インターネットで彼氏が彼女にして欲しい事について調べていたら……」

彼女が自分の身体で彼氏の身体を洗うって書いてあったとの事らしい。

「別に咎めている訳じゃないから気にするな」

実際怒ってないし、寧ろ俺なんかの為に色々調べてくれたんだと嬉しく思っている自分がいるのがわかる。

「う、うん。…じゃあ次にいくね」

……は？

「……次？次って何だよ？」

次って何だ？マジで分からん。頭を捻っている時だった。

「だから次は前を洗うね」

「……………は？前ってアレか？腹とかアレだよな？」

理解した俺は慌てて口を開ける。

「待て双葉、それは……………」

「さつきは良いって言ったよ？」

「え？」

さつきは良いって言った？そんな事言ったか？今までの双葉との会話を思い出す。

——八幡。私が八幡の体を洗うね——

——わかった。頼む——

アレか?!確かに双葉は体と言っていたな。背中だけとは言っていない。

「いや、双葉……………」

口をモゴモゴして小さく反論している時だった。

「じゃあ洗うね」

俺の返事が聞こえなかったのか双葉が俺の正面に来ていきなり胸を触りだした。

「ちよっ、待っ……………っあ!!」

俺の突っ込みを入れる前に変な声を出してしまった。双葉は笑いながら俺の体を洗うのを再開した。

「……死にたい」

そう呟いた俺は悪くない。理由は2つある。

1つ目の理由は、結局俺は双葉に全身を洗われた。アレを洗われた時なんて気持ち良かったけどマジで自殺したくなかったし。幸い双葉が純粹無垢だから特に何も言わなかったのが唯一の救いだ。

2つ目の理由は……

「んんっ……あっあっ……んんっ」

現在俺は双葉の背中を洗っているからだ。理由は簡単、俺の体を洗い終わったら今度は私の体を洗ってくれて頼まれたからだ。

初めはもちろん断ったが抱きつかれて上目遣いでおねだりされて承諾してしまった。

だって考えてみるよ？双葉みたいな可愛い子が全裸で抱きついてきて

「お願い……八幡」

って頼んでくるんだぜ？アレを断れる男がいるとしたらそいつは間違いなくホモだ。

まあそんな訳で今は双葉の背中を洗っている。余談だが双葉は初め前も洗ってくれと頼んできたが俺は土下座してそれは止めてくれと頼んだら了承してくれた。だって前なんて洗ったら間違いなく理性の壁が壊れて双葉を襲ってしまうだろう。そして双葉が中学生でママになるのが簡単に予想できるしな。

閑話休題……

そんな訳で俺は双葉の背中を洗っているんだが……

「んんっ！ひゃあん！あんっ！」

感度良過ぎだろ？正直凄いエロい。舌を噛みながらも何とか洗い終えて双葉の背中の中のボディソープを洗い流した。

背中を洗い終えて、双葉が自分で前を洗ったので俺は今双葉の頭を洗っている。

「にしてもツイントールも良いけど下ろした髪もいいな。今度遊びに行く時はその髪を見せてくれよ」

「良いよ。それにしても八幡の洗い方優しいね」

「なら良かった。にしてもお前の髪って凄いサラサラで気持ち良いな」

「うん。だって好きな人に喜んで貰いたくて……」

鏡には頬を染めた双葉が見えた。それを見た俺は少し顔が熱くなるのがわかった。

「そうか。なら俺もお前に喜んで貰えるように頑張るわ」

「別にわざわざ変えなくても大丈夫だよ。私は今の八幡と一緒に居られて凄い幸せだし」

「……双葉、ありがとな。俺もお前と一緒に居て幸せだ」

「……八幡」

双葉に感謝の念を込めて優しくシャンプーを洗い出した。

お互い体を洗うのを終わったので湯船に入る。うちの湯船は大きく最大2、3人入れるから窮屈な思いはしないだろう。

そう判断した俺はさっさと湯船に入る。あー、気持ち良い。疲れが取れるのが良きわかる。目を閉じて湯船の気持ち良さに浸っている時だった。

「じゃあ……入るね」

そんな声が聞こえたかと思っただけいきなり重みを感じたので目を開けた。

双葉は俺の上に乗って体を俺の方に向けていた。

既に双葉に抱きつかれたり、背中を洗った為、何とかパニックにはなっていないが凄い緊張はしているんですけど。

「……いきなりどうしたんだ？」

「……うん。八幡に触れていたいし」

ヤバい。健気過ぎて超可愛い。

「……好きにしろ」

「うん、わかった」

そう言っただけ双葉は俺に抱きついて胸板を触り始めた。しかも抱きついてる為桜色の先端が俺の身体に当たって凄いドキドキしている。てかこれ見方によっただけはヤツてるように見える気が……

「ちよつ、双葉」

「……凄い固いね」

「まあかなり鍛えてるしな。それより触り方……」

メチャクチャ優しい触り方でくすぐりたい。

「ところで八幡、脇腹の傷……これどうしたの？」

「それアレだ。大規模進行の時のだ」

「え?!大丈夫だったの?!」

「まあな。そんな時はショツピングモールにいたんだよ。そしたらバムスターがショツピングモールを破壊して、その際に瓦礫の一部が脇腹に刺さったんだよ。んで痛みで気絶した」

「……そんな事があったんだ」

「まあな。で目覚めたら病院に居てそんな時に泣き崩れた小町から両親の死を知った」

「……ごめん。私が余計な事を言ったから悲しい事を……」

双葉は申し訳なきように言っているが双葉には怒っていない。

「別にお前は悪くねーよ。それにあの時に一生分泣いて立ち直ったよ」

俺に対してクズを育てる英才教育を施した親父と放任主義のお袋でも大切な親だった。だから今俺がすべき事は小町や双葉など自分の命より大切な人を守る為に強くなる事だ」

すると

「……八幡」

ちゅっ……

双葉がキスをしてきて現実に取り戻される。

「……私も八幡の事を自分の命より大切な人だと思ってるよ。だから一緒に強くなって小町さんや大切な人、それから私と八幡でお互いに守り合おうね」

どうやら口に出していたようだ。正直恥ずかしいがそう言ってくる双葉の優しさに対して嬉しさが湧いてきた。

双葉に感謝していると現実に取り戻され、双葉の艶めいた瞳、唇の柔らかさ、小ぶりな胸のふにゆんとした感触、それらが俺の脳を刺激してきた。

ドキドキしている中、双葉は更にキスをしてくる。

「んっ……ちゅっ……大好きだよ、八幡」

そう言ってくるキスをしながら優しく胸板を触ってくる双葉を俺は優しく引き寄せて、お返しとばかりに双葉の胸に手を添えた。

「……………あつ」

ただ手を添えただけだ。動かしてもいないし揉んでもいない。理由は分からないが双葉の心臓の鼓動を感じたかった。

向こうもさするのを止めて俺の心臓がある位置に手を添えてきた。

「……………八幡の心臓、激しく動いてるね」

「お前の方こそ」

暫くの間お互いに見つめ合っていると笑いが込み上げてきた。

「クスツ」

お互いが同時に笑い出した。どうやら考えている事は一緒のようだ。……………となると双葉が次に要求してくる事は予想がつかない。

「んっ……………」

双葉が目を閉じて顔を近付けてくるので俺は双葉の心臓に触れていない手で双葉を優しく引き寄せる。

そして、

ちゅっ……………

お互いに唇を合わせた。

2人きりの至福の時間はまだ始まったばかりだ。

俺は今物凄く緊張している。

風呂での幸せな一時が終わり、俺達は今リビングでボンヤリとテレビを見ている。双葉は俺の横で寄りかかりながらテレビを見ている。そこまでは問題ない。

問題は双葉が物凄くエロいネグリジエを着ている事だ。

ネグリジエの色は黒色だが全体的に薄い色をしていて普通に下着が見える。しかも下着の色は紫色とそれもまたメチャクチャエロい。そんな双葉が俺に寄りかかっているんだから緊張しない方がおかしい話だ。

内心ドキドキしながらテレビを見ている時だった。

「八幡」

双葉に呼ばれたので振り向いた瞬間右頬に双葉の指が柔らかくいこんだ。むにつて音がした様な気がする。

「……双葉」

「ふふっ、可愛いよ八幡」

そう言ってコロコロ笑う双葉。可愛いとは思いますが俺はからかわれるのは大嫌いだ。よって仕返しをする。

「はむっ……」

「ふひゃあ!!?」

俺が双葉の耳をはむはむすると双葉は可愛らしく驚く。まだまだこれからだ。耳たぶを優しく甘噛みする。

「ひゃっ！ んっ、耳、なめちゃっ……んあっ！」

双葉が喘いだ瞬間俺の中のスイッチが入ってしまった。双葉の耳にふうつと息を吹きかける。

「ひゃあん!! やっ……く、くすぐりたいよお……」

ぴちゃぴちゃと音が出るように輪郭をなぞり、息を吹きかける。それを何度も何度も繰り返す。

「ひゃあっ！ あっ……や、止めて。身体が熱く……！」

すると双葉の身体が急に震え始めた。どうやらスイッチが入ったのかもしれない。深夜特有のテンションを持っている俺は双葉の耳の穴に舌を入れて上下に動かす。

「ちよっ、やめ……ひあっ！ 舌、いれ、んっ、んくっ……あっ！」

双葉が興奮し過ぎて暴れだした。少しやり過ぎたか？これ以上は可哀想だし。俺も歯止めがきかなそうだし止めるか。

そう判断した俺は双葉の耳から口を離れた。双葉は真っ赤になりながら息を乱している。呼吸が落ち着いた頃には真っ赤になりながら俺を睨んできた。

「……八幡のバカ。エッチ、スケベ……」

涙目になりながら胸板をポカポカ叩いてくる。痛くない子供っぽくて可愛いな。

そう思った時だった。

「んっ……ちゆるっ」

双葉が唐突に俺の首筋を舐めてきた。

「くおっ！……ふ、双葉！ 止めっ……うおっ」

「んっ……んむっ……ちゆるちゆる……」

止めろと言おうとしたら更に激しく舐めてきたので途中で変な声を出してしまった。ヤバイ凄いくすぐつたい。

「んむっ……んんっ……ちゅ……」

「んおっ……くあっ……双葉……頼むから止め」

「んむっ……ちゆるっ……嫌。んあっ……やられたら倍返し……ちゆるりっ……だよ」

双葉は小悪魔的な笑顔を浮かべながら俺の首筋を舐めるに舐めたり、キスをしたり甘噛みをしてくる。ヤバイ理性が……

よろしい、戦争だ。

俺は頭を下げて双葉の耳に顔を近づけてもう一度耳をはむはむする。

「ひゃあっーんんっ……負けない……ちゆるっ……」

双葉は初めは喘いだが直ぐに負けじと首筋に舌を使って擦ってきた。負けてたまるか。絶対に双葉を屈服させてやる。

俺は双葉の耳を、双葉は俺の首筋を暫くの間、唯攻め続けるだけの存在と化した。

「死にたい」

「ううっ……」

俺と双葉は真っ赤になって俯いている。あれから五分間お互いに舐め続けた結果、俺が競り勝った。その時の双葉はマジでエロくて興奮したが、興奮が冷めた瞬間、俺は何をやっていたんだ？と嘆いていた。何で12歳の少女の耳を舐めまくっていたんだ？

その結果双葉の耳はふやけて、俺の首筋は唾液塗れになってしまった。

隣では双葉もやり過ぎたと後悔していた。

暫くこうしていると

「ごめんね八幡。始めに私がかかったから……」

双葉が謝ってくるが双葉は悪くない。

「いや、俺もやり過ぎた。すまなかった」

「……じゃあ2人が悪いって事で仲直りしよう？」

まあそうだな。いつも謝る時は俺が悪い、私が悪いで揉めてるし、そんな時は2人が悪いって事で仲直りしている。

「……ああ」

「うん。……じゃあ」

そう言って双葉は顔を近づけてくるので俺は双葉を優しく引き寄せて……

ちゅっ……

仲直りのキスを交わす。毎回双葉と喧嘩した時は必ず仲直りのキスをするのが約束だ。

仲直りのキスは触れ合うだけのキスだ。双葉は唇を離し顔を耳元に近づけて

「八幡……大好きだよ」

優しい声で愛を囁いてきた。俺は双葉を抱き寄せて

「俺もだよ、双葉」

そう優しく返す。そしてお互いに顔を見合わせてクスリと笑い合う。やっぱり双葉とは直ぐに仲直りして笑い合うのが一番だな。

俺達は笑い合いながらテレビを見るのを再開した。

テレビを見る事1時間、時刻は既に11時を回っていた。横では双葉が欠伸をしている。俺も眠くなってきたしそろそろ寝るか。

「双葉、そろそろ寝るぞ」

「う、うん。……じゃあ一緒に」

俯きながら俺のパジャマの裾をつかんでくる。一緒に寝ろってことですね？まあ一緒に風呂に入るよりは遥かに緊張しないからいいか。

「わかったよ。じゃあ部屋に行くぞ」

「うん」

双葉の了承を得たので俺の部屋に案内する。

「ここだ」

「ここが八幡の部屋……。物は余り置いてないね」

「まあ私物は大体作戦室にあるからな」

うちの隊員はかなり作戦室に私物を置いてるからな。しかし俺以外は片付けが下手くそだ。だから俺が2週間に1回大掃除をやらせる。

ちなみに俺以外は全員始めはやる気がない。だから太刀川さんに

はレポート事情を忍田本部長にチクると脅し、国近先輩にはゲームをブックオフに売ると脅し、出水と唯我には関節技をかけて無理矢理やる気にさせている。(尚掃除が終わった瞬間国近先輩には「ゲームを人質にとるなんて許さくん」言われて首を絞められるのは恒例だ)

「それじゃ……寝よ?」

「ああ。電気消すぞ」

「あ、八幡さえ良ければ少しだけ電気をつけてくれない? 真っ暗だと寝れなくて」

「恥ずかしそうに言ってるが別に悪い事じゃない。人によつては真っ暗だと寝れない人もいるし。」

「わかったよ。ホレ。こんぐらいでいいか?」

「うん。大丈夫。ありがとう」

薄暗い部屋になったので寝るか。そう判断してベッドに横たわると双葉も俺の隣に横たわる。

薄暗いので双葉がよく見える。やっぱりネグリジエはマジでエロい。双葉はこちらをじっと見つめている。ヤバい凄いドキドキしてきた。

「ねえ八幡。今日は楽しかった?」

「双葉が唐突に不安そうに聞いてくる。」

「ああ、楽しかったよ」

「……本当?」

「ああ。まあ風呂は緊張したけど、その何だ……綺麗だったぞ」

「そう聞くと双葉は更に問い質してくる。」

「私は幼児体型なのに綺麗?」

「だから綺麗だって。俺は体型に拘りはないし触った時は幸せだった」

「すると双葉は上目遣いで口を開ける。」

「……じゃあもしまた触る事になったら触りたい?」

「もちろん」

「しまった。即答してしまった。これ双葉ドン引きすんじゃない?」

「すると双葉は深呼吸して口を開けた。」

「…………じゃ、じゃあ八幡さえ良ければ触っても…………いいよ」
…………は？

触ってもいいだと？え？嘘だろ？
確認の為双葉を見た時だった。

シユル……

何と双葉はネグリジエの前の結び目を解いて下着姿になっていた。
紫色のセクシーな下着に見惚れていると双葉は俺の右手を掴んで自
分の胸の近くに運んだ。

しかしまだ触れていない。本当に触れる直前だ。

「双葉………… お前」

「うん。八幡君さえ良ければ触ってもいいよ……」

爆弾を投下してきたので最終確認をする。

「いいんだな？」

「……うん、触って」

了承を得たので右手で双葉の胸を下着越しに軽く揉んだ。

「……あんっ！」

双葉はビクリと跳ね上がる。背中を洗った時にも思ったが軽く揉んだだけなのにこんな反応するなんて双葉の体って感度良すぎる。というか凄く柔らかくて気持ちがいいからもっと揉みたい。

そう思いながらさつきより少し強く双葉の胸を揉みしだく。

「あっ、うんっ、はあ、もっと……」

更に感じたみたいで激しく動いている。少し落ち着かせる為に双葉の唇に優しくキスをする。

「……んっ?! ……んあっ、ちゅっ……」

初めは一瞬驚いた顔をしていたが今は夢中にキスをしている。唇を離すとさつきまでの激しさはなくなっている。でも艶のある顔は変わっていない。

もうダメだ。もっと双葉を感じたい。

そう思った時には俺は既に双葉のブラジャーに手をかけていた。

双葉は真っ赤になりながらも俺を拒絶していない。

「双葉、……外すぞ」

「……いいよ。八幡の好きにして」

双葉から了承を得たので双葉の背中に手をまわしてホックを外した。するとブラジャーは重力に逆らわずにベッドに落下した。それを確認した俺は双葉の胸を見た。

その瞬間、俺は絶句してしまった。

サイズは年相応にかなり小さいが中学生になって成長したのか膨らみがある。形は凄く良くて小さくても柔らかさが見て取れる。そして胸の中心に位置する乳首は綺麗な薄桜色をしている。さつき風呂場では緊張して余り見てなかったが注視すると凄く美しかった。

それを確認すると同時に俺の手は双葉の胸を揉んでいた。ムニユムニユと柔らかい感触が俺の手に伝わっている。下着越しより遙かに興奮するな。

「…んっ、んあっ、は、八幡……そこはあ……だめえ……」

双葉は真っ赤になりながら身をよじるが今の俺は理性を失っている。逃がすつもりはない。逃げる気をなくす為に俺は右手の親指と人差し指で双葉の乳首を軽く摘んだ。

「やっ！あんっ！そこっ！もっ……ああん！」

双葉の喘ぎ声で更に興奮したので少し強くコリコリと摘む。

「は、八幡っ！それっ！そこっ！やあん！……んっ！……はあん!!」

上半身が跳ねたのを確認して指を離すと双葉はハアハア息を荒げていた。

そこで俺は再び双葉の身体に目を向ける。俺の理性の壁をぶち壊した艶かしい身体に更に興奮して俺の欲求は誰にも止まることは出

来ない。

そして俺の視線は未だにピンと立っている桜色の先端に向けられている。俺は目を逸らさずに自分の欲求を口にした。

「なあ、吸ってもいいか……う？」

双葉は一瞬驚いた表情を向けてきたが直ぐに笑顔を向けてきた。

「……いいよ。私の身体は八幡のモノだから。吸いたかったら吸っていいし、舐めたかったら舐めてもいいよ」

その言葉を聞いた瞬間、俺の中で理性が完全に崩壊した。

それを認識すると同時に俺は双葉の身体に覆い被さっていた。

そのまま顔を彼女の右胸へと近づける。双葉の顔を見て最終確認をすると双葉は笑いながら頷いていた。

それを確認した俺は口を小さく開けて、膨らんで自己主張をしている胸の突起、双葉の乳首を唇で啜えた。

「はっ、ああっ……ああん!!」

それと同時に双葉はビクンと反応するが啜えただけで留まる俺ではない。逃がすつもりはないので先端を優しく吸い出した。

「ひゃっ! あっ、やあっ……ああ……っっ!!」

激しくは吸っていないので苦しみによる喘ぎ声ではないだろう。乳首の味は特にしないが、声を上げて身体が跳ねている双葉を見るのは物凄い興奮してきた。双葉は身体をビクビク震わせながら、吐息と共に淫らな声を部屋中に響かせていた。

「はあ………ああっ!!」

乳首を舐められる感触は理解したのだろう。次に行くか。

俺は唇を先端から離し乳房を舐め始めた。ピチャピチャと音を立てて丁寧に舐める。

「あ、あんっ、んっ、あっ……!」

乳房の外側から段々乳首に近付き今は乳輪を舐めている。決して乳首には触れないようにゆっくりと舐める。暫く舐めていると双葉は急にモジモジしだした。

「どうした?」

「そこもいいけど、さ、先の方も舐めて……。さっき舐められた気持ち良さが忘れられないの……」

それを聞いた俺は嗜虐心が目覚めてきた。ヤバイ、いじめたい。

「先って?言ってくれないと解らないぞ」

俺が惚けると双葉涙目で睨んでくる。

「八幡のイジワル……。わかってるでしょ?」

「悪いがわからないな。先って何だよ?」

徹底的に惚けてやる。双葉の口から言わせたい。

暫くの間舐めるのを止めて双葉の顔を見ると、双葉は睨むのを止めて恥ずかしそうに口を開ける。

「……ち、乳首も舐めて。もう我慢出来ないよ……」

物凄い小さい声だがちゃんと聞こえた。ヤバイ、もつとイジメた

い。しかしイジメ過ぎると嫌われそうだから要望には答える。
「分かった」

言うや否や舌先で再び乳首をペロリと舐めた。

「んっ！ああっ！あんっ！」

ブラジャーを捲った時よりぷっくりと膨らんだ乳首を舐め回す。

「んんっ！あひっ、はあん！もっ！もっ！と激しくう！」

そしてもう一方の空いている方の乳首は指先でこねくり回す

「しよんな?!両方なんて無理っああん!!あっ、はあん！」

双葉はさつきよりビクビクと身体を揺らしている。更に軽く吸ったり、甘噛みをするたまます双葉は喘ぎ声をあげる。

「あっ、やああっ、はあああん！」

今まで聞いた事のない声色による双葉の声が部屋に響く。少しやり過ぎたか？そう判断した俺は双葉から少し離れる。

「ふああ…あ…はあん…ふう…あんっ…」

まるで既に果てたようにしている双葉がいる。

「双葉、大丈夫か？」

「う、うん。身体が凄く熱いよ。でも気持ち良いの。……八幡」

双葉は俺の名前を呼ぶと同時に引き寄せて

ちゅっ……

キスをしてくる。

「んっ、ちゅっ……だいしゅき……」

双葉はそう言って更に激しくキスをしてくるので俺もそれに応えるべくキスを返す。

こうして俺達は眠りにつくまで唇を合わせ続けた。

翌朝、朝日によつて目が覚めた。

「……う、うーん」

時計を見ると朝7時半だった。夏休みにしては早く起きたな。昨日双葉とあんなに……

ヤバイ。思い出すだけで恥ずかしくなってきた。俺は昨日何て事を……

とりあえず双葉に謝ろうと判断した俺は双葉の方を見た。しかし……

「アレ？いない？」

見ると双葉が居なかった。トイレか？

そう思っていると良い匂いが鼻を刺激してきた。

(もしかして朝飯を作ってるのか?)

だとしたら悪い事をしたな。いくら新婚生活の予行練習とはいえ家主が客にやらせるとは……

罪悪感を抱きながらリビングに入る。するとさつきより良い匂いがしたのでキッチンに入った時だった。

「おはよう双葉。朝飯を作ってもらって悪いn」

俺のセリフは最後まで言えなかった。

何故なら……

「…………お、おはよう。八幡」

双葉が身に着けている服は薄く白いエプロン1枚だけだったからだ。もう一度言うが、エプロン1枚だけである。

今の双葉の姿は、新婚の新妻が夫を迎える際にある所謂裸エプロンであった。

俺がその光景に絶句していると双葉は頬を赤く染め右手で胸を押しさえ、左手で裾を握り、上目遣いでこう言った。

「…………ご飯出来たから運ぶの手伝って」

そう言われて俺は再起動する事が出来た。

「お、おう」

双葉に言われて俺は双葉が作った料理を運びだした。双葉が作ってくれたのは豚の生姜焼き、卵焼き、野菜炒め、味噌汁の日本食だっ

た。小町は割と洋食を作る傾向があるから随分新鮮に感じるな。そう思いながら料理を全て運び終えて双葉に話しかける。

「運び終わったから着替えてこい」

「うん」

そう言つて双葉は俺の横を通り過ぎようとした所で止まった。

そして……

「おはよう。八幡」

ちゅっ…

おはようのキスをして着替えに行つた。俺はといえば朝から双葉とキスが出来て幸せな気分になっていた。

双葉も着替えが済んだので朝食をとる。

「いただきます」

そう言つて食事を始める。

「うん。美味しいな。ありがとな」

そう言つて双葉はほんのりと赤い顔をして頷いてくる。

「う、うん。八幡に喜んで貰えて嬉しいな」

「なら良かった。ところで今日はどうする？」

「うん。昨日は留美達の訓練に付き合えなかったから今日は付き合おうかな。……それより八幡」

双葉は1つ区切り上目遣いで見てくる。

「……そ、その、さっきの格好どうだった？」

さっきの格好とは裸エプロンの事だろう。俺の回答はただ1つだ。

「最高だった。結婚したら毎日頼む」

「……クスッ。八幡のエッチ」

「いやいや。男としてはこれが普通の反応」「昨日はあんなに私をいじめたのに?」「……すみませんでした」

「ほらね?八幡のエッチ」

からかうように言われる。確かに昨日はやり過ぎた。それは認め

る。それは認めるが……

「お前こそ凄いエロかったぞ」

大体俺があんなにいじめたのは双葉がエロかったからだ。だから『僕は悪くない』

双葉を見ると真っ赤になって俯いている。少し言い過ぎたか？そう判断した俺は双葉の頭を撫でる。

「ごめんな。お前が可愛かったからいじめたんだ。悪いのは俺だ。許してくれ」

「……八幡のバカ……。次からはいじめないでね」

拗ねながらも許してくれる双葉に苦笑しながら食事を再開した。

食事を済ませ俺達はボーダー基地の入口の前にいる。今からトリガーを認証させれば基地に入れる。

いざ基地に入ろうとした時だった。

「八幡」

「何だよ」

双葉が呼んだので返事をする。

「八幡は昨日タメ口で話してくれて言ったよね？」

「そうだな。それがどうしたか？」

「私は昨日今日八幡の事をタメ口で話したけど、私はやっぱり敬語を使いたい。だから私が八幡の事をタメ口で呼ぶのは八幡と結婚してからにしてくれない？結婚するまでは先輩って呼びたいし」

そう言われて少し考える。まあ確かに結婚するまでは先輩呼びされるのがいいかもな。

「わかった。じゃあ今から敬語に戻してくれ。そんじゃあ早く行こうぜ。あいつら待ってるだろうし」

そう言って手を差し出すと双葉は笑顔で手を握ってきた。

「はい!! 八幡先輩!」

こうして新学期が始まる

『記録、24秒』

アナウンスが聞こえると同時に訓練が終わった。最後に訓練をした友人がこちらにやってきた。

「八幡！遂に30秒切れたよ！」

戸塚が笑顔でこちらにやってきた。すると俺だけでなく双葉、小町、留美、材木座も笑顔を見せる。

「おめでとう。かなり成長したな。次は20秒を切れよ」

「うん！頑張るね！」

夏休み最終日、今ちょうど今日の仮入隊員の戦闘訓練が終わった所だ。

2週間で1分近くタイムを縮めたなら上出来だろう。ちなみに今回の訓練の記録は小町が20秒、留美が5秒、材木座が7秒だった。

全員2週間でかなり成長したが特に留美と材木座はかなり成長している。何せこの2週間、留美と材木座は俺や双葉がいない時も殆ど基地に来て訓練やC級ランク戦をしている。まあこの2人は学校じゃボツチだから遊ぶ相手がいなくてもいいかもしれないが。

その上材木座は、殆ど一日中訓練しているにもかかわらず小説を書いて俺に見せてくる。こいつバケモノか？と何度も思うくらいだ。

まあ小説はクソつまらないけどな。っーか小説書くの止めてその時間を訓練に費やせ。そうすりゃ10月までにマスタークラスの實力手に入るぞ多分。

「にしても随分強くなったな。鶴見ちゃんと材木座は初期ボーナス3000超えるぞ多分」

出水がそう言うのと戦闘員の俺と双葉と太刀川さんが頷く。訓練も終わり現在は太刀川隊作戦室でおやつを食べている。国近先輩は綾辻や三上と女子会、唯我は御曹司としてパーティとかでここにはいない。

「……双葉の教えがいいから」

「はっ！この剣豪將軍にかかれば実に容易く正隊員に昇格がかん」
「黙れ」へぼおえ！」

あまりのテンションにうざかったのか出水が蹴りをいれる。どうせトリオン体だから怪我はないだろうし。俺か出水が材木座に蹴りをいれる、いつもの光景だ。俺がこいつに蹴りをいれて良いと言ったら出水も蹴るようになった。すまん材木座。

閑話休題…

「ところでお前らは4人でチームを組むのか？」

太刀川さんがそう聞いてきた。

「一応そのつもりです。僕は材木座君と組むのは決まってる、その後小町ちゃんに誘われて、じゃあ留美ちゃんも入れて4人でチームを組もうってなりましたね」

「前衛2人に中衛2人か。類を見ないチームだな」

あのー太刀川さん？一応うち前衛2人に中衛2人のチームですよ？唯我が弱過ぎて気付きにくいですけど。

「となるとフォーメーションは材木座と小町次第で大きく変わりますね」

「比企谷の言う通りだな」

「どゆことお兄ちゃん？」

小町が聞いてくるので口を開ける。

「いいか？今まで4人を見てきたが留美は攻撃特化タイプで戸塚は援

護タイプ、ここまではわかるな?」

確認をすると仮入隊組は頷く。留美は攻撃特化のスコープオンを使ってるし、戸塚は今までの訓練を見ていると攻撃より援護のほうが向いていると思う。まあ中衛は基本援護タイプが多いしな。……え?二宮さん?アレは怪物だから別枠です。

「んで小町と材木座は使ってるしトリガー的に攻撃も援護も出来るんだよ。だから小町が攻撃で材木座が援護、もしくはその逆かで戦術は大きく変わる」

バイパーだと出水と那須じゃ大きく違うし、孤月にしろ太刀川さん、辻、熊谷と使い方が全く違うからな。

「じゃあ小町と中2さんが両方攻撃にまわるのは?」

「それだと戸塚の負担が大き過ぎるな。なあ比企谷?」

「出水の言う通りだな。3人纏めて援護出来るのは出水、時枝、東さんクラスじゃね?」

辻も優秀だが使っているトリガー的に1人の援護に向いてるだろうし。

「……じゃあ小町さんと中2が援護にまわるのはダメ?」

「悪くないが留美、お前が落とされたら不利になるぞ。はじめから援護タイプの奴は向こうの点取り屋と相対した時に不利になる」

そう返すと4人が唸っている。まあしつかり考えているみたいだし良い方向に成長するだろう。

「まあまだ時間はあるからゆっくり考えろ」

「うむ。我は早く正式入隊日になって訓練に励み隊を組みたいものだ」

「うん。小町も早くチームランク戦やりたいな」

材木座がそう言うのと他の仮入隊者は頷いている。是非頑張っ欲しいものだ。

「まあ多分10月からのランク戦は無理だろうな」

俺がそう言うのと全員が俺を見てくる。

「どうしてですか八幡先輩？この4人は既にB級の実力を持っていますよ」

双葉が不思議そうに聞いてくる。ああ、双葉は中1だから知らないのか。仕方ない、質問に答えるか。

「それはだな……俺達には文化祭の準備っていう面倒事があるからだ」

俺がそう言うのと文化祭を経験した事がない双葉と留美以外は納得の表情を浮かべている。

そんな中俺は小町に話しかける。

「特に小町だな。確か小町の学校の文化祭は10月中旬。しかもお前は生徒会役員だから実行委員があるだろう？」

「そうだった。あー、面倒くさい」

小町がグデーっとしている。

「まあそんな訳だ。戸塚にしろ材木座にしろクラスの準備があるだろう。そんなんじやB級に上がるだけなら兎も角チームの練習は碌に出来ないから10月のランク戦には間に合わないと思う」

そう返すと2人も納得したように頷く。こればかりは仕方がない。何せB級ランク戦は10月1日から、総武高の文化祭は確か9月の終わりだ。数日じゃチームの練習もクソもない。

「あー！そーういや太刀川さんをお願いがあるんすけど」

「何だ出水？」

「文化祭と言えば俺、友達と実行委員やるんで9月のシフト、放課後は

無しにしてくれませんか？」

「何だど？ 出水お前、金にならない仕事をするなんて正気か？」

「比企谷はどれだけ金好きなんだ？ まあいい。シフトについては午前を中心にに入れてやる。比企谷もそれでいいか？」

「あ、はい。授業を合法的に休めるんで大歓迎です」

「ならよし。俺も大学の授業を合法的に休めるからラッキーだな」

「うわー、ダメなコンビだなあ」

小町が呆れているが太刀川さんと同列にしないでくれ。俺は赤点を取ってないからね？

「……文化祭ですか。私は行った事もやった事もないのでうちのクラスは何をやるか楽しみです」

双葉は楽しそうに目を輝かせていてクソ可愛い。まあ双葉だしな。

「……じゃあうちの文化祭来いよ」

「え?! いいんですか?!」

「何で驚いてんだよ? うちの学校は小南や那須んとこ違ってチケツトはいらないからな?」

星輪女学院はお嬢様校だからチケツトが必要だ。去年は月見さんからチケツトを貰って米屋と出水と一緒に行って小南がメイド服を着て猫被りながら接客してるのを見て大爆笑してしまった。もちろんその後にはボコボコにされたけど。まあ今でも写真は携帯に保存して見て見る度に吹き出してしまう。

「…じゃ、じゃあ、その……八幡先輩とまわりたいです」

頬を染めて上目遣いで見てくる双葉を見て頭を撫でる。

「もちろんだ。一緒にまわろうぜ」

「……はい!!」

双葉は可愛い笑顔を浮かべて抱きついてくる。双葉の奴、この間うちに泊まってからどんどん大胆になっている。この前なんて廊下で抱きついてきて、それを見た木虎が般若の表情をして俺を睨んできたぜ。どれだけ双葉に慕わりたいんだよ?

苦笑しながら抱き返していると

「……はあく、お兄ちゃんも双葉ちゃんも……」

「……出水、俺は疲れたから風間さんあたりとランク戦してくるから後よろしく」

「我、ブラックコーヒーを淹れるが出水殿も飲むか？」

「悪りーな材木座。俺のも淹れてくれ」

「……バカツプル」

「あはは……仲が良いね」

何か呆れた目で見られているが俺は悪くないからな。いつも双葉から抱きついてくるんだ。そして双葉が可愛いから拒否出来ないんだ。

呆れた視線を全身に受けながら時間は過ぎて行つた。

翌日、いよいよ今日から学校が始まる。もうダメだ。初っ端から眠くて仕方がない。今日は防衛任務はないので帰ったら直ぐに寝よう。

そう思いながら階段を登り右に曲がれば……つと、いけね。職員室行つてシフトを出さないとな。

「とりあえずカバンを教室に置いてからだな」

そう呟いて一旦教室に向かった。

「あーおはよう八幡！」

教室に入って直ぐに戸塚に話しかけられる。

「うーっす。今日からまたよろしくな」

「うん。そう言えば正式入隊日って来週だよね？」

「ああ。6日後の日曜日だ。まあお前の実力ならB級昇格は心配ない

ぞ」

「……うん。でも、他の3人に比べたら弱いから……」

不安そうな顔をしている戸塚。俺はそんな戸塚の頭にチョップをする。

「気にすんな。お前にはお前の長所がある。長所つてのは敵を早く倒すだけじゃない。味方を動きやすくするのも、相手の逃げ道を防ぐのも長所だ。チームつてのは色々な長所を合わせて作るんだよ」

「……八幡」

頼むからそんなウルウルした目で見ないでくれ。メチャクチャ可愛くて緊張するから。

「と、とにかく気にするな。それより俺は職員室にシフトを出しに行かなきゃいけないからまた後でな」

「うん！ありがとう！」

戸塚の声を背中に受けながら俺は教室を出て走り出した。

(……まったく可愛いな、おい)

内心そう呟きながら走り出した。

職員室に向かうため階段を下り始めた。

一階について曲がり角を曲がろうとした時だった。早歩きをしていたので人にぶつかりかけた。

「あ、悪りい……っってお前かよ」

そこには雪ノ下雪乃がいた。向こうは俺を見ると何か目を見開いていた。俺何かしたか？

まあ今はそれどころじゃない。

「悪かったな。怪我は……してないみたいだな。じゃあな」

そう言っつて職員室へ行くこうとした時だった。

「待ちなさい」

いきなり雪ノ下に呼ばれている振り向くと苦い顔をしてこちらを見ている。……大体予想はついた。大方あの事故の事だろうな。

「……何だよ？」

「……あなた、花火大会の時に私の姉さんと会ったそうね？」

「ああ。それがどうかしたか？」

「……」

「はあ……どうせあの事故の事だろ？お前は乗っていたただけだからお前は悪くねーよ。俺はもう終わった事だと思ってるし、お前もそう思ってたんだろ？」

「……え？」

「……いや、え？って何だよ？終わった事だと思ってるならあれだけ理由もなく人を罵倒するとは思えないんだが？」

「……それは」

そう言ったきり雪ノ下は黙る。うわ、こいつ終わった事だと思っけないのに散々罵倒してきたのかよ？こいつマジで問題だろ？平塚先生は俺よりこいつを矯正した方がいいだろ？

「……まあいい。お前がどういう人間だろうと入院費を払ってくれたんだし特にどうこう言うつもりはない。……で、他に話はあるのか？」

「……っ、ないわ」

「あつそ。じゃあ俺は職員室に用事があるからこれで」

そう言っただけで俺は職員室にシフトを出しに行っただけ。後ろからは暫くの間動く気配がなく、俺が職員室を出ると同時に動き出した。

こうして2学期が始まった。

比企谷八幡はとことん運が悪い

2学期が始まり早3日、秋と言えば文化祭。文化祭といえばクラスが団結するためぼっちの俺にはかなり厳しい。

俺のクラスも新学期早々準備を始める中、演劇をやる事になり、題目を決めている中一つの候補が挙がった。

その演目は星の王子様だった。高校生が選ぶにはふさわしい世界的名作だ。

普通なら

ただ一つ違うのは脚本が海老名さんだった事だ。

配られたプロットには、初めから心が折れそうだった。キャラ設定とあらずじだけを読んだだけでプロットを投げ捨てたくなった。材木座の小説とは別ベクトルのヤバさだ。何とか頑張つて読むが「ワシの行った星は百八式まであるぞ!」とか「とある飛行士と変態王子」の文字が見えたところで諦めた。

何で新学期からこんなプロット読まなきゃいけないんだ? つーかここまで無駄に凝った設定つてことは海老名さん夏休みから案を練ってたな。本気で文化祭でやるつもりだぞ、あの女。

クラスの雰囲気はかなり重苦しい。

「そろそろいいかな？えっと、どうする？質問とか改善点とかあれば？」

葉山がそう言っているが改善点しかないぞ、これ。まともな部分が1つもない。

クラスの女子が手を挙げる。

「これ、女子は出ないの？」

「え？何で出るの？」

海老名さんはキョトンとしている。あなた何を言っているの？つて顔をしていて質問した女子も「あ、やっぱりいいや」と諦めて手を下す。それが正しい判断だな。

他からも質問がくる。

「公序良俗には大丈夫？」

「全年齢だから大丈夫！」

ダメだこりゃ。クラスの中で腐女子趣味に一定の理解がある人は苦笑い、それ以外はかなり困惑している。つーかこれキャストにもよるが客層が偏りそうだな。

そんな中はいはいはいはい！と物凄いウザい感じの挙手をする奴がいた。

「俺はいいと思うぜ！こういうの面白れえじゃん！普通に劇やるより受けると思っけど」

戸部が騒ぎ出したのでクラスメイトも少し考え始める。まあ確かに男子高校生が奇抜な衣装を着て愛を語るならそれはそれでコントに見えなくもない。

「うん、こんな方向性もありだと思う。それにガチなものなら文化祭で出せないし。私もそれくらいの区別はつくから！」

待て、あれで大分自重したのか？だとしたらこの女本気出すとヤバ過ぎるぞ。マジで鉛弾で動きを止めた方がいいかもしれない。

「とりあえず、キャラの設定は無視して、笑いの要素を強めるってことでいいかな？」

葉山が提案すると他からは反対が出ない。まあ、文化祭の出し物だ

し少し笑いを入れるのが妥当だろうな。

そう思っていると拍手が鳴り響く。どうやら決まったみたいだな。そう判断して席を立つ。

「なん・・・だと」

翌日の朝のロングホームルームでの事だった。昨日国近先輩と夜3時までゲームをやらされた為学校に着いたら直ぐに寝てしまった。目が覚めると黒板に俺の名前があった。その上には文化祭実行委員と書いてあった。ふざけんな。誰があんな金にならない事やらなきやならねーんだよ？

呆気に取られていると

「説明が必要かね？」

後ろに永遠の独神平塚先生がいた。

「……………どういふつもりですか？」

俺が低い声で話しかけると平塚先生はあつけらんとしながら口を開ける。

「もう次の授業だというのに、グダグダやっていたのでな。だから比企谷にしておいた。ロングホームルームに寝ている奴が悪い」

「いやいや俺防衛任務ありますし無理ですよ」

防衛任務を盾にすれば避けれるだろう。そう考えた俺は間違っていないだろう。

「君の9月のシフトは放課後に入ってなかったぞ？」

おい待て。マジか、そうきたか。そうだ、出水が実行委員をやるか

ら防衛任務は午前中に入れたんだったな。出水は悪くない。悪いのはこの独身だ。

「……だからと言って本人に確認をとらないのはどうかと思いますが？」

「決まった事につべこべ言うな。いいから諦めろ」

マジかよこの独神？いいから諦めろって何だよ？理不尽にも程があるからな。つーかあんたこそ結婚する事を諦めろよ。あんたを欲しいと思う男なんていないからな？このアラフォー」

俺が内心毒づいているとクラスから騒めきが聞こえてきた。ん？さつきまで静かだったのに何で騒めく。仮にも授業中だろ？

そう思っていると殺気を感じたので殺気がある方向を見ると平塚先生が般若のような顔をしてこちらを見ていた。

……え？もしかして口に出してた？

そう思っていると平塚先生は拳を構え、

「私はまだアラサーだ。歯を食い縛れ！」

拳を腹に突き出してくる。何つー速さだ。この人トリオン体か？

まあ、だからどうしたって話だけだな。

俺はするりと平塚先生の拳を避けた。見聞色の覇気はやっぱり便

利だな。

そして腕に武装色の覇気を纏い平塚先生の手首を思い切り握る。ぶつちやけ骨を折る勢いで握る。

「があっ!!止めろ!離せ比企谷!!」

平塚先生は呻き声をあげるがそれを無視して更に力を籠める。

「頼む比企谷!本当に折れる!」

「離して欲しければこんな理不尽な方法で実行委員を選ぶのは止めてください。Do you understand?」

「わかった!くじ引きにするから離してくれ!」

ほう、くじ引きか。まあそれなら平等だからいいだろう。

「わかりました。但し平塚先生はクジを作らないでくださいね?」

そう言つて腕を離す。平塚先生は腕を押さえながらこちらを睨んでくる。

「何ですか?先に殴ろうとしたのはそちらですよ?」

俺がそう返すと平塚先生は苦い顔をして俯く。自覚あったのに殴ろうとしたのかよ?本当にタチが悪いな。

「はい引いて」

「お、おう。ほらよ」

「えーっと、実行委員のクジじゃないね」

「よっしゃあ!」

現在平塚先生の授業はくじ引き大会になっている。ちなみにクジを作ったのはルーム長だ。ルールはクジを引いたらルーム長が確認をする至極単純なルールだ。

もちろん平塚先生には作らせなかった。あのアラフォーならイカ

サマしそうだし……つと次は俺か。

俺は立ち上がり教卓へ歩き出す。ルーム長はビクビクしながら箱を差し出してくる。少しやり過ぎたか？

そう思いながら箱から一枚クジを選びルーム長に渡す。

ルーム長は紙を開くと、

「ひいっ!!」

悲鳴をあげて震えだした。あー、何となく予想がついた。俺がルーム長から紙をひったくると紙には『実行委員』と書いてあった。うわあ、結局俺かよ。

「はあ、マジか……。で、これは今日からやるのか？」

ルーム長に尋ねるとメチャクチャビビってる。

「そ、そうだけど……お、怒ってないのかい？」

ガタガタ震えながら聞いてくる。

「違えよ。実行委員そのものが嫌なんじゃねえよ。理不尽に決められたのが嫌なんだよ。だからそんなにビビんな。クジで決まった以上文句は言わない」

そう言つて席に座るとルーム長はホッと息を吐く。やはり教室で教師の手首を粉碎しようとするのはやり過ぎたな、うん。

ちなみに女子の実行委員は相模つて奴に決まった。そいつは初めは「えー、うち無理い。誰か代わつて〜」とかほざいていたが、葉山が「相模さんならちゃんと言ってくれるから大丈夫だよ」とか言つたら納得した。チヨロ過ぎだろ？

放課後になり会議室に入ると既に人が何人かいた。割と早く来たみたいだ。……つと知つた顔も何人かいるな。

「よう、奈良坂に氷見、奇遇だな」

俺が話しかけると2人が振り向いて目を見開いている。クールな

2人のそんな表情は希少だ。

「……お前、比企谷か？」

「いや、俺の顔を忘れたのか？」

「だって比企谷君が実行委員が居るべき場所にいるんだよ？」

氷見、お前意外と失礼だなおい。

「くじ引きで実行委員になっちまったんだよ」

「なるほどな。納得した」

奈良坂がそう言うのと氷見も頷く。どんだけ俺はものぐさに思われてんだ？

呆れていると後ろから衝撃が走ってきたので振り向く。

「あれー？やっぱり比企谷ちゃんじゃん！」

後ろには犬飼先輩が飛びついていていた。

「どうもつす。俺はくじ引きで外れました」

「やっぱりね。でない同比企谷ちゃんがいるとは思えないし。……」

おっ！奈良坂ちゃんに氷見ちゃんもいるじゃん！やっほー！

犬飼先輩は俺から離れて奈良坂と氷見に手を振っていて2人は頭を下げている。相変わらずコミュ力高いな。俺とは本当に正反対の人だな。

そんなこんなで時間が経ち、人が増える度にどんどんうるさくなつていく。少し静かにしろ。内心愚痴っていると騒々しい雑談が一瞬止んだ。

水を打ったような静寂の中雪ノ下雪乃は足音も立てずに歩く。雪ノ下は一瞬俺を見ると苦い顔をして足を止める。だがすぐに視線を外し手頃な席に座った。

「ねえ、比企谷君。今雪ノ下さんが比企谷君を見てた様な気がしたけど知り合い？」

隣に座っている氷見が話しかけてくる。

「まあ顔見知りだ。悪い意味でな。職場見学を思い出せ」

「……ああ。わかった」

双葉が雪ノ下をボコボコにした。アレは総武高2年じゃ伝説だからな。

雪ノ下の登場で一時期静かになるが再びお喋りが再開される。時計の針は間も無く開始時間になるといったところだ。

ドタバタ音がしたかと思っただら会議室のドアが開く。プリントを抱え、連体感のある数人の生徒、に加えて、体育教師の厚木と俺を実行委員にさせようとしたアラフォーが入ってきた。生徒の中には知った顔もいる。

「あ、遙だ」

ボーダーのマドンナ綾辻遙もいるので生徒会のメンバーだろうな。生徒会のメンバーは前方に集まり、1人の女生徒を見る。するとそのほんわか系の女生徒は1つ頷くと1年生と思われる生徒がプリントを配り始める。

全員に行き渡ると女生徒は立ち上がる。

「それでは文化祭実行委員会を始めます。生徒会長の城廻めぐりです。それじゃ早速実行委員長の選出に移りたいと思います」

ん？生徒会長がやるんじゃないのか？周りのメンバーも疑問に思っているのか騒ついてるし。

「知ってると思うけど、実行委員長は2年生がやる事になってるんだ」なるほどな。3年はできないのか？

「それじゃあ立候補いますか？」

そう言っているが誰も立候補しない。まあ当然か。恐らく殆どの人間がじゃんけんに出たとかそんな理由でここにいるのだろうし。「なんじゃおい、お前らもつとやる気だぜ。文化祭はお前ら自身のイベントだぞ」

厚木が咳払いをしながら周りを見ると視線が雪ノ下の所で止まった

「お、お前、雪ノ下の妹か！あの時みたいな文化祭を期待してるけえの」

その言葉は言外に「当然、委員長やるんだよ」という意図が孕んでいるみたいだ。どうやら姉は教師にも印象を残しているようだ。

「実行委員として善処します」

若干不機嫌になつて返している。その冷たい反応に厚木も適当な返事をして黙る。それによつて場は騒めきが生じる。

「とうか綾辻がやれば誰も文句ないんじゃないかねえの？」

小さい声で氷見に聞いてみる。

「でも嵐山隊は正式入隊日もあつて今月は特に忙しいから無理だと思ふよ」

「あー、なるほどな。確かにそうだ」

氷見の意見に納得する。防衛任務、広報活動、正式入隊日の案内役、それに実行委員長の仕事が入ったら過労で倒れそうだな。

そんな事を考えていると氷見に話しかけられる。

「そう言えば比企谷君つてまた新しい弟子を取つたの？」

「ん？何だ藪から棒に？」

「知らないの？今期の仮入隊者の中で特に有望な隊員は太刀川隊で鍛えてるつて噂だよ」

「あー、一応鍛えてるな。つても正式な弟子じゃなくてB級上がるまでは面倒を見るつて感じだ。B級に上がったら自力で強くなるか違う人に鍛えてもらうだろうな」

「そうなんだ。その仮入隊者は強いのか？」

「まあ二宮さんも認めると思うぞ」

あの4人かなり才能あるし。

そんな事を話していると視線を感じたので周りを見るとアラフォーがこちらを睨んでいた。何だよメチャクチャ小さい声で喋つてたし違う人も喋つてるだろうがら？さっきの逆恨みか？

独神に毒づいている時だった。

「あの、みんなやりたがらないならうち、やってもいいですけど」

少し離れた所から声が聞こえて見ると俺のクラスの女子だった。

「本当？じゃあ自己紹介してもらえん？」

「あ、はい。2年F組相模南です。うちもこの文化祭を通して成長したいっていうか・・・、なんていうんですか？スキルアップだと思うんで頑張ります」

なんで赤の他人の成長を手伝わなきゃいけないんだ？まあ他の奴らは異存ないみたいだし決まりか。会議室内は拍手で満たされる。

会長はテンションを上げながら続きを始める。

「さ、じゃああとは各役割を決めます。議事録を読んでもください。5分したら希望を取ります」

議事録を見るとある仕事は宣伝広報、有志統制、物品管理、保健衛生、会計監査、記録雑務がある。

全部見ると1番楽なのは記録雑務だな。文化祭まで生徒会らと一緒に軽い書類作業で当日は写真を撮るだけ、本当に楽だ。周りの連中も大分決まったようだ。

「そろそろいいかなー？」

会長がそう言ったので前を向く。

「みんな何となく決めたかな。それじゃ、相模さん。これからよろしくっ」

「え、うちですか？」

「うん、ここからは委員長の仕事だと思うし」

「・・・はい」

そう言つて相模は生徒会の一団に紛れる形で中央に座る。

「そ、それじゃあ決めていきます」

さつきまでの相模とはまるで別人に見えた。

「ま、まずは・・・宣伝広報やりたい人」

どんどん萎んでいく声に挙がる手はない。

「はい宣伝広報だよ、宣伝」

会長が補佐するどちらほらと手が挙がる。ちょうど人数がピッタリ合ったので宣伝広報は決まった。

「じゃ、じゃあ有志統制」

有志は文化祭の花形のためかかなりの人数だった。その中には犬飼先輩もいた。まあコミュ力高いあの人なら上手くやれるだろう。

「え、え？」

相模が困っていると、すかさず会長がフォローに入る。

「多い多いよ！じゃんけんじゃんけん！」

と、こんな風によくわからない独自のノリで会長は場をさばいていった。それにより順調に取り回していた。

俺はちゃんと記録雑務におさまった。記録雑務にいる顔見知りはい氷見と雪ノ下だった。犬飼先輩は有志統制になり、奈良坂は会計監査となった。記録雑務の担当部部长は3年生に決まり、初めの会議は終わった。

「んじゃ氷見、同じ役職になったがよろしくな」

「こちらこそよろしく」

挨拶を交わしていると他の部署も担当部部长が決まったようで會長が立ち上がる。

「お疲れ様でした」

儀礼的な挨拶の後バラバラと解散していく。俺も会議室を後にしようとする会議室の隅で相模がしよげていた。大方最初の仕事で

しくじって気を病んでいるのだろう。まあ自分から立候補したんだし自業自得だろうな。その傍らに平塚先生と会長がいた。今後のことを話しているのだろう。

まあ俺に迷惑がかからなきゃどうでもいいや。

比企谷八幡でも嫌な事はある

文化祭まで一月を切り校舎の中は慌ただしい。
今日から準備のための教室残留が解禁される。他のクラスでは段ボールを運んだり、絵の具を用意したりと騒いでいる。

俺のクラスでも準備が進められている。現在葉山が教卓に立ちスタッフとキャストを書いている。

今のところ

監督 海老名姫菜

演出 海老名姫菜

脚本 海老名姫菜

制作進行 由比ヶ浜結衣

宣伝広報 三浦優美子

となっている。女子が出演しないから裏方の仕事は女子がやるのは当然だな。

問題はこれからだ。役者の配役を決めなくてはいけない、があの企画書を読んだ為誰もやりたがる奴はいない。

沈黙が続く中海老名さんが唐突に

「仕方ない」

そう言って教壇に立ちチョークを持った。騒つくクラスを無視して役目を書く。どうやら権力を使って勝手に決めるようだ。

まずは脇役から埋まっていく。

薔薇や王様、自惚れ屋などの役の下に名前が書かれる。

その度に「いやだあ!」「地理学者だけはやめてくれ!」「俺のマッターホルンが!」各所から断末魔が響く。まさに地獄絵図だな。

そしてメインキャストの発表だ。

王子様 葉山

葉山が固まり、女子は騒ぎ出す。まあ集客のある人間を使うのは正しいだろう。さて残るもう1人の主役だが

ぼく 比企谷

「いや、無理だつて」

名前を見た瞬間に呟く。

「え?!でも葉山×ヒキタニは薄い本ならマストバイだよ?!ていうかマストゲイだよ!」

何言つてんの、この人?

「やさぐれた感じの飛行士を王子様が純真無垢な温かい言葉で巧みに攻める、それがこの作品の魅力じゃない!」

違うからな、フランス人怒るぞ。

「いや、俺実行委員だし」

そう返すと海老名さんががっかりする。

「確かに実行委員だと稽古とか出来ないし厳しいな。だから1度全体的に考え直した方がいいんじゃないか、・・・王子様役とか」

それが目的か、こいつ。そう思っていると海老名さんが書き直す。

王子様 戸塚

ぼく 葉山

「俺は結局出なきやいけないんだな」

「お、そのやさぐれてる感じ、いいね」

海老名さんノリノリだな。だが王子様に戸塚はいい判断だな。しかし本人はキョトンとしている。

「これ、僕でいいの?」

「合ってると思うな」

というか戸塚が王子様やるなら俺ぼく役で出たいんだけど。戸塚なら大歓迎だし。

「そっか、分からない事多いし調べないと」

少なくともこの企画書は調べちゃダメだ。あれはアテにならない。

「調べるなら原作を読んだ方が理解しやすい。読むなら貸す」

「本当?ありがとう」

花咲くような笑顔を見せてくる。趣味が読書でよかった。そう思っていると戸塚は打ち合わせに呼ばれる。

「じゃあね八幡」

「ああ、またな」

戸塚を見送り俺は教室を出る。また今日も仕事かあ。

「おい氷見、その書類は俺がやるから寄越せ」

「うん。じゃあ私はそっちの報告書を精査するね」

「わかった。頼む」

仕事を開始して数十分、記録雑務の仕事は本番まではクソつまんない書類仕事だ。まあ割と楽な上、氷見という優秀な奴が同じ役職で隣で手伝ってくれているからメチャクチャ楽だ。マジでありがたい。

自身の仕事の楽っぷりに満足している時だった。

ガラガラと会議室の扉が開き相模と雪ノ下が入ってきた。そして会議室の中心に立ち相模が口を開ける。

「みなさーん。ちよつといいですかー？」

相模がそう言うのと全員が相模を見る。全員の視線を確認した相模は口を開ける。

「今日から雪ノ下さんは文化祭副実行委員長としてうちの補佐をする事になりますのでよろしくお願いしまーす」

相模は潑刺とした表情で話している。大方良い労働力が手に入ったくらいとした思っていないのだろう。多分相模は雪ノ下の事を利用するつもりなのだろうな。

しかし俺にとっては大した問題じゃない。

問題なのは……

「ヤバいぞ氷見。雪ノ下が抜けるって事は記録雑務の仕事が増えるぞ」

1人抜けるって事は雪ノ下の分の仕事を残った記録雑務がやるって事だ。つまり必然的に仕事は増える。

「……比企谷君らしいね」

何か呆れた顔をされたが解せぬ。

「でも比企谷君は何だかんだ最後はちゃんとやるよね」

「まあ否定はしない」

太刀川さんのレポートや米屋のテスト対策も文句を言いながら何だかんだ手伝ってしまっただよな俺。

つか実行委員長をやるのは嫌がっていたのに副実行委員長はやるのかよ？よくわからん奴だな。

疑問に思いながら書類仕事を再開した。業務は遅滞なく進んでいた。東にポスター掲示場所で悩んでいる宣伝広報あれば、地図上の動線と交通量を割り出し指示をして、西に有志団体が集まらず困っている有志統制あれば、地域賞を創設して商品を出す。とりあえずわかるのは雪ノ下が凄いい勢いで働いている事だけだった。

いずれも実行委員長の相模の名前でおふれが出ているが、殆ど雪ノ下がやっているであろう事は簡単に予想がつく。万事順調に回っているようで何よりだ。

翌日、今日は定例ミーティングだから全員強制参加だ。まあ今の所毎日来ているから文句はないが。

欠伸をしながら教室を出て廊下を歩いている時だった。

「ヒツキー！」

後ろから呼ばれたので振り向く。俺をヒツキーと呼ぶ奴なんて人しかない。

「何だよ由比ヶ浜？」

由比ヶ浜は俺の近くに來ると

「ヒツキー！お願い！ゆきのんを助けて！」

とか言ってきた。

……は？意味わからん。雪ノ下を助ける？

「……すまん。意味がわからないんだが……。別にあいつ実行委員で困ってないと思うぞ？」

「実は……」

「あー、なるほど。話は大体わかった」

由比ヶ浜によると昨日相模が奉仕部に助けてくれとか言ってきたらしい。話を聞くと相模は自分のした事のケツを拭って欲しいと思っているのだろう。そして何故か雪ノ下は引き受けたらしい。この前あれだけ実行委員長をやる気なかったのに副実行委員長をやる事になった理由がわかった。

「……いつものゆきのんならあんな依頼受けないよ。それに最近様子がおかしいし。……ヒツキー、ゆきのんに何かした？」

何で俺が悪いみたいない方なんだよ？訳がわからん。まあ話すくらいはいいだろう。

「そりやアレだ。以前俺がお前の犬助けた事があつただろ？」

俺がそう言うのと由比ヶ浜は驚いた顔で見ている。

「ヒツキー、覚えて、たの？」

「いや、覚えてないが一度うちに礼に来たらしいな。小町に聞いた」

「そか、小町ちゃんか」

と由比ヶ浜は笑いを浮かべて顔を伏せた。

「んで話を進めるぞ。俺をはねた車なんだがな……」

「……ヒツキーは私に怒ってないの？」

話そうとする由比ヶ浜が遮ってくる。

「別に終わった事だしどうでもいい。寧ろ感謝……いや、何でもない」

ある意味感謝はしている。何せ入院した為中止になった防衛任務は違う日にまわされた。そのうちの1日は双葉を助けた日の防衛任務だったしな。もしも入院しなかったら双葉が拉致されていたかもしれないし、双葉と恋人になる事もなかったかもしれないしな。

そういう意味じゃ入院する事になって感謝している。まあ当事者にそう言うのはアレだから言いかけて止めた。幸い由比ヶ浜には聞こえてないみたいだが。

「ヒツキー……」

……何か感動的な目で見ているがお前だから助けた訳じゃないからな。つーか罪恶感で気安く変なアダ名で呼んだり馴れ馴れしくしてるのか？だとしたら迷惑だから止めて欲しい。まあ俺は由比ヶ浜に興味ないしどうでもいいか。

「話を戻すぞ。俺をはねた車に雪ノ下が乗ってたんだよ。んで俺は夏休みにそれを知ったんだよ」

「……やっぱりあの車だったんだ」

「何だ。知ってたのか？」

「うん。千葉村から帰ってきた時その車を見て……ねえ。それを知つてからゆきのんに何か言つた？」

だから何で俺が悪いみたいなの言い方なんだよ？

「あの一件はもう終わったことだ。俺は気にしてない。そんなぐらいいか言ってるいな」

「そっか……でも、ゆきのんはなにかしら思ってるよね。でなきやさがみんの依頼受けてたりしないだろうし」

「だろうな。話を聞いてる限りあんなふざけた依頼を受けるとは考えにくい。」

「それにゆきのんがさがみんの依頼受けちゃうのも、なんかやだな。仲良くしようとするのも、いい感じじゃないし……」

「そこで言葉を切ると、納得したように顔を上げる。」

「あたし、思ってる以上にゆきのんのこと好きなのかも……」

「……………」

「こいつ、まさかガチ百合なのか……？海老名さんはBL好きといい、葉山グループがババくね？」

「い、いやー変な意味じゃなくて！」

「よかった。ゆるゆりなら兎も角ガチ百合は勘弁して欲しかったしな。安堵の息を吐くと由比ヶ浜が近づいてくる。」

「約束！ゆきのんが困ったら助けること！」

「近い。近いよ。もう少し離れろ。だがその表情は真剣そのものだ。こいつはこいつなりに雪ノ下のことを心配してるのだろう。」

「まあ俺の返事は決まっている。」

「断る」

俺は別に心配してないしな。そう言つて会議室に歩き出すと由比ヶ浜が止めにかかる。

「なんでだしー！」

「なんでもなにもねーだろ？何で俺が冷静な判断もできずに勝手に暴走したバカを助けなくちやいけねーんだ？」

そもそも悪いのはあんなふざけた依頼を受けた雪ノ下だし。

「でも！今のゆきのん絶対危ないよー！」

「知らねーよ。俺には関係ない」

「ゆきのんがこのままじゃ……お願いだよヒツキー！」

「嫌だ。断る」

「何でだし?!事故の事は気にしてないって……！」

「何でも何もねーだろ？事故の件は恨んでないぞ。でも俺は今まであいつに目が腐ってるから性根も腐ってるんだとか、A級に入れたのも卑怯な手を使ったとか言われたんだぜ？理由もなく罵倒してくる奴なんて助けたくないな」

そう返して再び歩き出すと由比ヶ浜は俺の服を掴んできた。ため息を吐いて振り向くと苦い顔をしながらも口を開けてくる。

「それは、そうだけど………お願いだよ。ヒツキー………」

本当にしつこいな。酷だか少し嫌な言い方をするか。

「……条件付きで助けてやる」

俺がそう言うのと由比ヶ浜は笑顔で詰め寄ってくる。

「本当?! 本当によきのんを助けてくれるの?!」

「こいつ本当に現金な奴だな。」

「言った筈だ。条件次第で助けてやる」

「その条件って何?!」

「簡単な話だ。雪ノ下が今まで俺にしてきた理不尽な罵倒について俺に謝ったら助けてやる」

俺がそう言うのと由比ヶ浜の笑顔は消えて苦い顔をしてくる。由比ヶ浜はわかっているのだろう。雪ノ下が謝る性格でない事を。俺もわかっているからそんな条件を出したんだ。はつきり言つてあいつを助けたくないし。

「その条件を満たしたら助けてやる。それでいいか?」

「……でもゆきのんは謝らないよ。……どうしても助けてくれないの?」

やっぱり雪ノ下が謝る性格じゃないのを知ってるのか。つーかそれでも助けさせようとするとはいい性格してるなお前。

「つまりアレか? 今まであいつが罵倒してきた事に対して我慢しながらあいつを助けるって言いたいのか?」

「……そ、それは」

「結衣! 打ち合わせするから早く来て!」

すると後ろから海老名さんの声が聞こえてきた。

「呼ばれてるぞ。早く行け。俺も仕事だから行く。言つとくがあいつが謝らなかつたら助けないからな」

「……あつ」

由比ヶ浜は俺を呼び止めようとしたがそれを無視して会議室へ歩き出した。後ろを見ると由比ヶ浜は海老名さんに引つ張られていた。つーか他人に頼る前に自分でどうにかするって思えよ。傍迷惑な奴だな。

由比ヶ浜との会話を済ませてから15分。

ミーティング開始は4時。現在3時50分と10分前だ。会議室には殆ど集まっている。まだ会長と相模と雪ノ下は来ていない。会長を除いた綾辻ら生徒会はもういるので3人は厚木と平塚先生と話しているのだろう。

「そう言えば明日は正式入隊日だな」

「まあそうだな。ちなみに奈良坂。狙撃手では有能な奴はいたか？」

「まだ何とも言えないな。少なくとも突出した奴はいなかった。まあ狙撃手は怠けなければB級に上がれるから問題ないだろ。お前達太刀川隊の弟子については陽介が楽しみにしてたぞ」

「流石バトルルマニア。まあ年が終わる頃にはあいつが満足する実力になってると思うぞ」

「明日の正式入隊日、二宮隊は非番だから二宮さんは見に行くらしいよ」

「俺は狙撃手のオリエンテーションに参加するから見れないが陽介は見る気満々だった」

「明日の正式入隊日について奈良坂と氷見と雑談していると3人が来たので会話をやめる。いよいよ定例ミーティングが始まりだ。」

「それでは、定例ミーティングを始めます」

相模が号令をかける。まずは各部署ごとの報告事項からだ。

「じゃあ宣伝広報、お願いします」

担当部長が現在の進行状況を報告すべく起立する。

「掲示予定の7割を消化し、ポスター制作についてもだいたい半分終わってます」

「そうですね、いい感じですね」

相模が満足げに頷く。

「いいえ。少し遅い」

予期しない声に室内が少しぎわめいた。声の主は雪ノ下雪乃だ。

「文化祭は3週間後。来客がスケジュール調整する時間を考慮に入ればこの時点で既に完了していないといけないはずです。刑事箇所
の交渉、HPホームページへのアップは既に済んでいますか？」

「まだです…」

「急いでください。社会人はともかく、受験志望の中学生やその保護
所はホームページを結構こまめにチェックしていますから」

「は、はい」

宣伝担当は気圧されてへたり込むようにその場に座った。

会議室に沈黙が降りる。横にいる相模も、今何が起きたのかよく理
解していないようだった。

「相模さん、続けて」

促されてようやく会議が再開する。

「あ、うん。じゃあ、有志統制、お願いします」

「…はい。有志参加団体は現在10団体」

遠慮がちに発言する有志担当。

「増えたね。地域賞のおかげかな。次は…」

「それは校内のみですか？地域の方々への打診は？例年、地域との繋
がり、という姿勢を掲げている以上、参加団体減少は避けないと。そ
れから、ステージの割り振りはもう済んでいますか？集客の見込みと
開演時のスタッフ内訳は？タイムテーブルを一覧にして提出をお願
いします」

先へ移ろうとするや否や手厳しい追求がやってくる。終始、そんな
調子で保健衛生、会計監査と定例ミーティングが進んでいく。

「次、記録雑務」

気づけば、議事進行も雪ノ下がやっている。

「特にないです」

記録担当はごく簡潔に述べた。まあ実際、俺たちの仕事は文化祭当
日の記録班が最大の仕事であり、この段階での仕事内容は少ない。

「じゃあ、今日はこんなところで…」

「記録は、当日のタイムスケジュールと機材申請、出しておくように」

「はい…」

相模が締めくくろうとすると雪ノ下が割って入る。3年の先輩が相手でも雪ノ下は遠慮なく申しつけていく。おかげで雰囲気は微妙だ。

「いやあ雪ノ下さんすごいね…。さすがはるさんの妹だ」

「…いえ、大したことは」

城廻先輩がぼつりと感想を漏らした。

定例報告と問題点の洗い出し、それへの対応策を協議した後、今後のスケジュールについての共有。その日話し合うべきことのほとんどが終わった。

誰しもが終了の空気を感じ取り、雰囲気は弛緩する。

途中から進行役を奪っていたことに気づいたのか、雪ノ下が相模に視線を向ける。

「では委員長」

「あ、うん。えっと、明日からもよろしくお願いします。お疲れ様でした」

そうして、定例ミーティングは終わった。

号令がかかり実行委員が口々にお疲れお疲れと言い合って席から離れていく。そんな中誰もが雪ノ下の辣腕を褒め称えた。

あまりにパワフルかつ、鮮烈だったためか、口さがない者は誰が委員長かわからないとまで言った。生徒会メンバーの一部は次期会長候補と言ってる奴もいた。

そしてこの中で1番きつかったのは相模だろう。

同じ条件である筈だった。同じ2年でいきなり議事進行をやる。

一方は後れを取り、もう一方はその遅れすら取り戻して見せた。雪ノ下が1人で剛腕を発揮するならともかく相模という比較対象がいる事で両者の差はより浮き彫りになる。誰の目にも明らかだ。雪ノ下を褒める事はそれそのまま相模を蔑むことに繋がる。

雪ノ下が残って作業をする中、3人連れだって逃げる様に教室を出て行く相模が見えた。実行委員は方向性が明確にされた事で効率化は進むだろう。雪ノ下の仕事ぶりは称賛に値する。

だがあいつは気づいてないようだ。アレは補佐ではない事を、実行委員長としては優秀だが、補佐としては間違っている事を。

予想通り4人は無双する

「……三門市、そして人類の未来は君達の双肩に掛かっている。日々研鑽し正隊員を目指してほしい。君達と共に戦える日を待っている」
今日は9月8日、ボーダー隊員正式入隊日だ。体育館のようなステージには沢山の白い隊服を着たC級隊員達が居て忍田本部長の話を受けている所を見ると懐かしさを感じる。

「もう1年も経つのか……」

ステージの高い所からC級隊員達を見ている私、黒江双葉はぼそりと呟く。今から丁度1年前には私もあそこにいた。

「あら双葉。懐かしんでるの?」

隣からからかう様な声で話しかけられたので振り向くと私の隊長の加古望さんがいた。

「はい。懐かしいです」

「ふふっ。憧れの人に会いたくて入隊した双葉にとっては感慨深いかもしれないわね」

そう言われて顔が熱くなるのがわかってくる。そうだ、私は命の恩人にもう1度会いたくて入隊した。そして今では最愛の恋人として一緒に戦っているのだから。

恥ずかしくなり加古さんから目を逸らしたら留美達と目が合った。すると留美は笑ってこちらを見てきて、戸塚先輩は胸元で手を振ってきて、材木座先輩はこちらを見て頷いていて、小町さんは大きく手を振ってきた。……小町さんは余り手を振らないでください。

「ふーん、留美ちゃんと小町ちゃんは知ってるけどあの2人は初めて見るわね」

加古さんは興味深そうに八幡先輩の友人2人を見ている。加古さんは才能のある人は気に入るから間違いなくあの2人も気に入られるだろうな。

そう思っていると

「あ！加古さんに黒江ちゃんじゃないですか」

呼ばれたので振り向くと見知った顔がいた。

「こんにちは犬飼先輩。犬飼先輩も見学なんですか？」

「そうそう。それと……」

犬飼先輩が後ろを向くと無愛想な顔をした男性がこちらにやって来た。

「あら二宮君、久しぶりね」

「……ふん」

二宮隊隊長、二宮匡貴さんは加古さんの挨拶に適当に返しながらステージの隊員を見ている。

「二宮君が正式入隊日に来るなんて珍しいじゃない。ひよつとして太刀川隊に弟子入りした4人に唾をつけるつもりかしら？」

「……下品な言い方を止めろ。使えろと判断したら勧誘するだけだ」

二宮さんは加古さんを軽く睨みながら話すと、加古さんは笑いながら二宮さんの睨みを受け流している。……そう言えば加古さんにはあの4人がチームを組むとは言ってなかったな。

「うーん。うちの隊長たちは仲がいいねえ」

犬飼先輩が私の髪をびよこびよこしながらそう言ってくる。まあ確かに東さんのチームにいた頃からの付き合いだし、口は悪くても仲の悪い訳ではないのだろう。

「あら犬飼君。あんまり双葉の髪で遊んでいると比企谷君に真つ二つにされるわよ？」

加古さんがそう言ってくる。

「そうですねー。以前比企谷ちゃんが凄い睨んできたんで以後気をつけます」

「そうなの？比企谷君って嫉妬したりするのね」

八幡先輩がヤキモチを焼いてくれる？……恋人としては嬉しいよ
うな……

そう思っていると歓声が聞こえてきたので下を見ると嵐山隊が壇上において新入隊員は騒いでいる。これは毎回恒例だ。

「そう言えば嵐山隊以外は入隊指導ってしないんですか？」

「そうね。一応嵐山隊以外もやるわよ。狙撃手の方だと佐鳥君と一緒に東さんがよくやってるし」

なるほど。まあ東さんは気さくで優しいから新入隊員から高評価だろうな。

「……でもA級1位の太刀川隊はやらないんですね？」

「それはそうよ。太刀川君に入隊指導なんてやらせたら終わりよ。ねえ二宮君？」

「当然だ。戦闘以外は取り柄なしの太刀川、目が腐っていて面倒臭がりな比企谷、雑魚の唯我、入隊指導をマトモにこなせるのは出歩くらいだろうな」

……まさかの即答ですか？まあ確かに。恋人である八幡先輩を悪く言うつもりはないが八幡先輩が入隊指導をしてる所は想像出来ない。

そう思っているあいだに説明が始まっていた。

「まず始めにどうやったたら防衛任務に就くことができる正隊員になれるのかを説明する。各自自分の左手の甲を見てくれ」

嵐山さんがそう言うといっせいに見ていた。それにつられて私も見ると手の甲には『9425』と表されていた。

「ボーダー隊員の左手の甲には数字が出ている。その数字は自分の使っているトリガーをどれだけ使いこなしているかを表す数字だ」

もうちよつとで10000の壁を突破できるから私も頑張ろう。

「始めの数字は10000だがその数字を4000まで上げる。それが正隊員になる条件だ」

私は仮入隊してないから始めは10000だった。でも入隊日当日から八幡先輩に鍛えられたからB級に上がるのは凄い簡単だった。

「殆どの人間は1000ポイントからのスタートだが、仮入隊の間に高い素質を認められた者はポイントが上乘せされてスタートする。当然その分即戦力としての期待がかかっているから、そのつもりで励んでくれ」

そう言えばあの4人はどのくらいポイントが上乘せされたんだろう？ 気になったので調べてみよう。そう思つて携帯端末を起動してアクセスしてみた。横を見ると3人も携帯端末を出していた。

「えーつと、戸塚彩加、アステロイドでポイントは2550で、小町ちゃんはバイパーでポイントは2900ね。そして……へえ」

加古さんは声を上げながら面白そうな笑みを浮かべていたので私も端末を見るとかなり驚いた。

「……材木座義輝、孤月で3700。鶴見留美、スコープオンで3850か。……中々優秀だな」

「ほんとつすね。まさか木虎ちゃんの記録を抜いた人が2人も現れるなんて」

あの辛口の二宮さんがはつきりと褒めるのは珍しいが私も同感だ。才能があるのは知っていたがここまでポイントが上乘せされるとは思わなかった。

「ところで双葉。留美ちゃんと材木座君にはどんな訓練をしたのかしら？」

加古さんが聞いてくるので素直に答える。

「基本的に留美は私と、材木座先輩は八幡先輩と模擬戦をして、その後2人で10本勝負をする。これの繰り返しですね」

まあ後は八幡先輩と一緒に走り込みをするぐらいだ。

「うわ。かなりスパルタだね。ちなみに小町ちゃんとあの戸塚つて子は？」

「小町さんは出水先輩に、戸塚先輩は八幡先輩と唯我先輩による指導を受けて、2人で模擬戦。その繰り返しです」

「それだけの訓練をやってるならあの数値は当然だな」

まあ確かにやり過ぎたかもしれない。それでも全員折れずに訓練に励んでいた。私も訓練生時代ここまで鍛えて貰ってないから恐れ入った。

「それにしても残念ね。あんな優秀なのに、4人とも頭文字が『K』じゃないなんて」

加古さんが本当に残念そうな顔で4人を見ていて二宮さんは呆れた様にため息を吐いていた。もし私が加古さんで、あの4人の頭文字が『K』なら間違いなく勧誘するところだ。

「どのみち無理ですよ。あの4人は4人でチームを組むつもりですし」

「あらそうなの？二宮君は勧誘出来なくて残念ね」

「……ふん」

加古さんが笑顔で話しかけ、二宮さんが仏頂面をする。いつもの光景だ。2人の対話に私と犬飼先輩が笑っている時だった。

「まずは訓練の方から体験してもらおう。付いて来てくれ」

そう言うと、嵐山さんらは訓練室へ向かうので私達もそれに付いていく。

八幡side

現在俺は今、ボーダー基地の廊下を走っている。今日の防衛任務はオリエンテーションが始まると同時に終わった。よって俺は初めの挨拶を聞けなかった。次にするのは戦闘訓練だろうから訓練室に向かって走っている。

(小町の初陣はこの目に焼き付けなきゃな……)

そう思いながら訓練室に入る。

訓練室を見るとまだ嵐山隊や新入隊員は来てなかった。どうやら間に合ったようだな。

安堵の息を吐きながら周りを見るとかなりの人が居て新入隊員が来るのを待っていた。

(えーつと来てるのは……B級下位からは茶野隊、間宮隊だな。中位からは那須隊と村上先輩か。んで上位には王子先輩にカゲさんとゾエさんがいるな。A級は風間隊に槍バカと迅バカか)

おそらく太刀川隊が鍛えた4人の見学だろう。面子を見る限りB級下位チームはスカウトだろうな。だが甘い。あいつらは4人で

チームを組むつもりだから無理だろう。特に間宮隊のスカウトは絶対に阻止してやる。間宮隊は全員射手だから小町をスカウトするだろう。あんな男3人がいる場所に小町はやらん。しつこいようなら全員ランク戦でボコボコにしてC級に降格させてやる。

それで那須隊は小町の見学だろう。小町はよく那須の家に泊まってるし。

他の面子は単純に自分の好奇心を満たす為だろうな。カゲさんとか米屋とか緑川とか。んでゾエさんと村上先輩はそれに付き合わされているのだろう。王子先輩は知らん。

風間隊は風間さんが毎回見物に来てるからその付き添いだろう。

……まあ時間はあるしとりあえず何人かには挨拶しとくか。そう思いながら歩き出した。

「どうもっす。カゲさん」

「ああ？……って八幡じゃねーか」

「やほー、ハチ君」

「お前は弟子の見学か」

「そうですね。ゾエさんと村上先輩はカゲさんの見張りですか」

「待てこら。テメエ、俺が問題起こしてるみたいない方してんじゃねーよ」

「いやいや、根付さん殴ってB級に降格した人が問題を起こしてない言い方はちよつと……」

内心呆れた視線でカゲさんを見ていると睨まれる。しまった、サイドエフエクトで俺が呆れの感情を向けているのを知られたようだ。

「そうだねー。しつかり見張っておくよー」

「うるせー！てめーは俺の保護者かゾエ！」

カゲさんとゾエさんが揉めあっている。まあ正確にはカゲさんがキレてるだけだ。

「お前ら落ち着け。比企谷はもう行け。巻き込まれるぞ」

「じゃあ村上先輩。後はよろしくお願いします」

「ああ」

村上先輩に礼をして歩き出した。後ろではまだ揉めているようだが仲が良いですね。

「どうもっす。王子先輩」

「ん？ああ、ハッチーか。久しぶりだね」

「相変わらずその呼び方ですか……」

付き合いは長いがこの人のネーミングセンスについては何とも言えない。

「どうしたんだいハッチー。頭を痛そうにしてるけど？」

「……いえ。ただ、ハッチーって呼び方は止めて欲しくて」

「ふーん。ハッチーは嫌だと……」

王子先輩は顎に手をあてて何かを考えているみたいだ。暫くその様子を見てみると笑顔で口を開けてきた。

「そうだ。じゃあヒツキーってのはどうかn「すみません。ハッチーでお願いします」即答だね」

ヒツキーは止めて欲しい。どつかのビツチは止めろって言ってるのに止めないし、これ以上ヒツキーって呼ばれたくない。つーか王子先輩がヒツキーって言ってる何か王子先輩の事を由比ヶ浜って呼びそうで怖い。それならハッチーの方がずっとマシだ。とりあえずこの話題はもう止めよう。

「王子先輩が正式入隊日に見学なんて珍しいっすね」

「ちようど今防衛任務が終わって暇だったしね。それに君達太刀川隊が目をかけている新人はまだ見た事がないから」

やはり4人はかなり有名みたいだな。頼むから目立ち過ぎないでくれよ小町。目立ち過ぎたらお前に近寄ってくる男が湧きそうだし。

「まあ退屈はしないっすよ。俺は他の人に挨拶行くんで失礼します」

「うん。またねハッチー」
だからアダ名じゃなくて苗字か名前で呼んで欲しいんですけど…
軽く溜息を吐いて次の人の所に向かって歩き出した。

色々な人に挨拶をし終わって今は一人で見物している。ボケーっ
てしながら待っていると遂に嵐山隊が新人を引き連れて訓練室に
やって来た。ようやくか…

軽く欠伸をしていると

「……八幡先輩！」

後ろから衝撃がきたので振り向くと双葉が笑顔で抱きついていた。
俺は双葉の方を向くと双葉も正面に来てもう一度抱きついてきた。

「よう双葉」

「はい！防衛任務お疲れ様です。これどうぞ！」

そう言われてマツ缶を差し出してきたので嬉しくなってきた。双
葉の頭を撫でるとくすぐったそうに目を細めて髪を揺らす。

「……あつ」

可愛い声を出している双葉に癒されていると

「相変わらず仲が良いのね」

加古さんが笑いながら近づいてきた。後ろを見ると二宮さんと犬
飼先輩もいた。

「お久しぶりです加古さん。二宮さんもお久しぶりです」

「そうだな」

「えー？俺には挨拶ないのー？」

「どうもつす。いやいや、最近は毎日会ってますよね？」

「そうだったねー」

「毎日？学校で何かあったの？」

「ええ。まあ一応同じ文化祭実行委員ですから」

俺がそう言うのと加古さんは驚いた顔をして俺を見てきた。横を見

ると二宮さんも目を見開いていた。

「……お前が実行委員だと？　どういう風の吹き回しだ？」

ねえ、何で俺が実行委員つてだけでそこまで驚かれるの？　俺は何だと思われてるんですか？

「いやいや、クジ引きの結果ですよ」

「でしようね。比企谷君が自分からそんな事する筈……あら。そろそろ始まるみたいね」

見ると嵐山さんが説明をしていた。

「さあ、着いたぞ。対近界民戦闘訓練だ。仮想戦闘モードの部屋の中でボーダーの集積データから再現された近界民と戦う訓練だ。仮入隊の間に体験した者もいると思うが仮想戦闘モードではトリオン切れはない。ケガもしないから思いっきり戦ってくれ」

見ると仮入隊した人を除いてかなり騒めいている。まあいきなり戦闘訓練だしな。だがこんなんでもビビっちゃいけない。何せこの訓練の結果で大体向いてるかわかるからな。

「今回、君達が体験するのは初心者レベルの大型近界民だ。攻撃力はないがその分硬いぞ。制限時間は1人5分で早く倒すほど評価点は高くなるから自信のある者は高得点を狙ってほしい。……説明は以上！　各部屋始めてくれ！」

嵐山さんがそう締めくくると訓練が始まった。

訓練室は3つあり、既に訓練が始まっていた。

大抵の奴は弱点が目である事をしらないので苦戦している。そんな中1人の少年が目に入った。

（……何だあの威力のないレイガストは？　どんだけトリオン少ないんだあのメガネ？）

戸塚の前にやっているメガネの少年について違和感を感じる。少年が振るったレイガストはバムスターの装甲に当たっているが殆ど

傷付いてない。普通なら装甲を破れなくてもある程度は傷付く。にもかかわらず殆ど傷付いてないって事は少年のトリオン量はかなり少ないって事になる。

(……でもあのトリオン量なら試験に受からないだろ？唯我みたいにスポンサーの息子か？)

そんな事を考えている時間切れのブザーが鳴り少年は訓練室を出た。妙なメガネだな。まああの実力なら関わる機会はないだろう。

——この時の俺はまだ知らなかった。あのメガネの少年と深く関わる事を

さて次は……

「戸塚先輩の番ですね」

双葉の言う通り次は俺の3大天使の一角、戸塚彩加の番だ。戸塚を見ると落ち着いた表情で銃を展開した。初めて訓練した時より成長しているな。確か今までの最高記録は21.6秒。ずっと20秒を切りたいと言っていたから頑張ってたほしい。

開始のブザーが鳴ると戸塚は突撃銃を構え撃ち始める。仮入隊当初と違ってあたふたせずに着いて撃っている。

「ふーん。中々狙いは良いね。ちゃんと訓練してるのが見てとれるよ」

犬飼先輩の言う通り、戸塚はちゃんと当てる為の訓練を重視していたからな。激しく動く相手なら兎も角バムスター程度なら簡単に当

てられるだろう。

改めて戸塚を見ると下からバムスターの顎に向けて集中放火を浴びせていた。それによってバムスターの顎は砕け、弱点の目に当たりバムスターが停止してアナウンスが流れて周りからは騒めきが生じた。

『記録、19.5秒』

それを聞いて俺は内心喜んだ。おめでとう戸塚。20秒を切れたな。訓練室では戸塚がガッツポーズをしていた。

「戸塚先輩、嬉しそうですね」

横では双葉も笑っていた。

「いいねー。ねえ比企谷ちゃん。今彼女を鍛えてるのって比企谷ちゃんと唯我だよねー?」

犬飼先輩がそんな質問をしてくるが1つだけ訂正がある。

「そうですね。後犬飼先輩、戸塚は男です」

俺がそう言うと犬飼先輩は固まり、加古さんと二宮さんは俺を見てくる。……予想はついていたがまたこのパターンかよ。

「本当ですよ。戸塚先輩は男です」

双葉が追加で言ってくるけど犬飼先輩は再起動した。

「へ、へえ。女の子だと思ったよ」

犬飼先輩は引き攣った笑みを浮かべている。まあ気持ちは良くわかりますよ。おれも初めは女とと思いましたしね。

「わかったらいいです。話を戻しますと今は俺と唯我が教えてますよ。もしも戸塚が誰かに師事されたいって言ったら犬飼先輩に頼んでいいですか?」

「うん。良いよ。最近じゃ若村ちゃんも大分腕が上がって教える事少なくなっただしね」

「そういや犬飼先輩は香取隊の若村に射撃を教えていたな。俺は香取に嫌われてるからあんま香取隊と接点ないけど。まあ話を戻すと犬飼先輩なら戸塚を強くしてくれそうだし安心できるな。……つといつの間にか訓練が進んでいたな。」

「次は……留美と材木座先輩ですね」

見ると真ん中の訓練室には留美が、右の訓練室には材木座がいた。

「今期の仮入隊2トップね。楽しみだわ」

加古さんが楽しそうに2人を見ている。さて……2人は緑川の4秒の記録を上回れるのか？

開始のブザーが鳴ると留美は走り出し、材木座は孤月を手にかけて居合の様な構えを取って何か騒いでいる。……あいつは毎回アレをやらないと気が済まないのか？

呆れている中、留美はジャンプしてバムスターの目を斬り裂いた。それと同時に材木座が跳び上がり孤月を抜いてバムスターの目を一闪した。

周りのC級は唾然としていて、B級以上のメンバーでは米屋と緑川が叫んでいてカゲさんは肉食獣の様な目をした2人を見ていた。戦闘狂3人に目をつけられるなんて……ドンマイ。

2人に合掌している

『記録、3.7秒』

とアナウンスが流れ、そのアナウンスが流れてから直ぐに

『記録、4.8秒』

もう一度アナウンスが流れた。留美は緑川の記録を上回り最高記録を叩きだした。つーか材木座は初めに叫ばずに普通にやれば4秒を切っていたと思う。もうお前中2病を卒業しろ。

呆れていると木虎は留美にはキラキラした視線を向けて、材木座の事は睨んでいた。前者は後輩だから慕われないと思っっているのだろう。後者は自分の9秒を抜かされたから睨んでるのだろう。つーか留美も双葉みたいな態度を木虎にとりそうだな。

「……ふん。上乘せされた分のポイントに恥じない実力はあるようだな」

二宮さんはそう言っているが相変わらず素直じゃない人だな。

「2人とも頭文字が『K』じゃないのが本当に残念ね」

珍しく加古さんが残念そうな顔を出している。まあ気持ちはわかるけどな。

「まあ次の新入隊員に期待するか、どっかから引き抜けばいいじゃないですか」

そう言っただけで缶を飲む。あんまり引き抜きはないけど頭文字が『K』の人なんてゴロゴロいるし。菊地原とか木虎とか小南とか烏丸とかゾエさんとか。

「そうね。……あ！良い事思いついたわ！」

そう言っただけで加古さんは何故か俺を見てきた。

「……何すか？俺の頭文字は『H』ですよ？」

俺がそう言おうと加古さんは満面の笑みで爆弾を投下してきた。

「だったら比企谷君が双葉の婿養子になれば良いのよ！そうすれば苗字は黒江になるから頭文字は『K』になるわ！」

それを聞いた俺は顔が物凄く熱くなってきた。加古さんは「アイデア！とばかりに頷いていて、犬飼先輩はニヤニヤしながらこちらを見ていて、二宮さんは訓練室を見ていた。あの二宮さん？助けるとは言いませんが無視はやめてください。」

「か、加古さん！」

双葉が真っ赤になって加古さんに話しかける。

「どうしたの双葉？」

加古さんが優しい笑みを浮かべて聞くと双葉が口を開ける。

「良い考えです！是非そうしましょう！」

ブルータス、お前もか?!

「ほら！双葉も賛成してるわよ？」

加古さんが笑顔でにじり寄ってくる。怖い怖いですからね。しかし俺が加古隊ねえ……。嫌じゃないが今は入る気はないな。

「……すみません。今はまだ太刀川隊にいたいです。ですから誘うとしたら双葉と結婚して苗字が黒江になってからまた誘ってみてください」

俺が自分の気持ちを正直に伝え頭を下げると

「……意志は固そうね。わかったわ。今は誘わないわ」

加古さんは簡単に引き下がってくれた。

「ありがとうございます」

「いいのよ。代わりに良い事も聞けたしね」

「良い事？何ですか？」

何か良い事あったか？頭に疑問符を浮かべながら加古さんに聞いた時だった。

「比企谷君、さっき『双葉と結婚して苗字が黒江になってからまた誘ってみてください』って言ったじゃない？ということは双葉と結婚するつもり満々って事じゃない！」

……あ。

確かにそうだな。まあ俺は双葉と結婚する気満々なのは否定しないけど。でもはつきりとは言えません。

「え、ええつと……その、双葉さえ良ければ……」
しどろもどろにそう返すと双葉はモジモジしながら見てくる。

「私は八幡先輩と結婚したいですよ。ですから私が高校を卒業したら……」

赤くなりながらも俺から目を逸らさない。正直可愛いです。俺も少し素直になるか。

「……高校卒業して直ぐは早過ぎる。せめてお前が大学を卒業してからにしろ」

すると双葉は目をパチクリしてから満面の笑みを見せながら抱きついてきた。

「……はいー!」

その笑顔を見て俺も笑いながら頭を撫でる。

「うーん。ラブラブだねえ」

「そうね。双葉も喜んでるし何よりだわ」

横では犬飼先輩と加古さんが笑いながら見てくるので若干恥ずかしくなり双葉を離す。二宮さんに至っては俺を見て軽く舌打ちをして訓練室を見るのに集中し始めた。今は二宮さんの対応が一番ありがたいな。

そう思いながら訓練室を見ると次はいよいよ最愛の妹、小町の出番となった。

小町の出番となったので俺は訓練室をガン見する。やっぱり小町の訓練服可愛いなあ!写真を撮りたい。

すると小町がこちらを見てきて手を振ってきたので、俺も手を振り返す。

「比企谷ちゃんイキイキしてるねー」

犬飼先輩がニヤニヤしながら肩を組んでくる。そりや当然の話ですよ。

「小町が手を振ってくれてんですよ？イキイキしない訳ないじゃないですか」

「相変わらずね」

加古さんの苦笑いを見ていると遂に開始のブザーが鳴った。それと同時に小町は手からキューブを出して3×3×3に分割して一斉に放つ。放たれたバイパーは初めは一直線に進んでいたがやがて全てが様々な方向に曲がり弱点の目を囲むように突き進んだ。

対象を囲むように放つバイパー『鳥籠』が炸裂した。見ると何発かは目に当たったが撃破には至っていない。

すると小町は走り跳びをして高く跳び上がりバムスターの目の近くに行き、近距離でバイパーを分割せずに叩き込んだ。やる事がエゲツないな、おい。

それにより弱点の目はバラバラに砕け散った。バムスターが停止するとアナウンスが流れる。

『記録、12.6秒』

ほう。かなりやるなあ。まさか双葉の一步届かずとは……

「もうすぐ私の記録を抜かされてましたね」

双葉が驚きながら言ってくる。いやいや、小町は練習をしてたからだが、仮入隊してないで11秒出したお前はかなりの才能だからな。呆れているとかなり騒めきが生じている。まあ当然か。

何せ今回の記録は、

1位 鶴見留美 3.7秒、2位 材木座義輝 4.8秒 3位
比企谷小町 12.6秒 4位 戸塚彩加 19.5秒で、その次の5位の人は48秒で4位と5位の差が凄すぎるしな。

初っ端から目立ち過ぎたな。こんなの緑川や木虎や双葉が入隊した時より遥かに騒いでいた。

「そう言えば比企谷ちゃん。あの4人は10月のランク戦に出るの？」

「さあ？決めるのはあいつらですから。まあ多分10月からのランク戦には出ませんよ。小町の学校は10月中旬に文化祭がありますから」

「小町ちゃんの文化祭は随分と先ね。まあそれなら無理にランク戦に出なくていいでしょ」

「そっか。上位グループに来たら可愛がってあげようと思ったのに」

「いやいや、犬飼先輩の可愛がってあげるって絶対に相撲部屋のな意味ですよ？止めてくださいよ。心がへし折れたらどうするんですか？小町の心をへし折ったら俺が犬飼先輩の心をへし折りにいきますよ。」

「いや。それは勘弁して欲しいなあ。比企谷ちゃん普通に俺の事をC級に落としそうだし」

「心の中を読まないでください」

「だって比企谷ちゃんの考えている事わかりやすいし」

「無駄話は止める。入隊者はもう次の訓練に行ったぞ」

二宮さんに指摘されて訓練室を見ると既に誰もいなかった。ヤベエ、話に夢中になっていた。つか二宮さんはもう少し早く言うってください。

呆れながら訓練室を出た。

その後の訓練だが当たり前だが4人が無双しまくっていた。しかも個人ランク戦が終わった時にはボーダーの戦闘狂が揃って4人に話しかけていた。

初っ端から目を付けられるとは哀れなり。

……まあ、良い休日になったから良しとしよう。明日からまた頑張ろう。

気分が良いまま俺は家に帰宅した。

「文化祭を最大限楽しむためには、クラスの方も大事だと思います。予定も順調ですので、少し仕事のペースを落とすってのはどうですか？」

……まさかその次の日にあんな面倒な事が起こるとは誰が予想出来たであろうか？

比企谷八幡は相模南が無能である事を改めて認識する

正式入隊日から2日後、2―Fでは海老名さんが大暴れしていて関わりたくないのも早めに教室を出ようとするので戸塚に声を掛けられる。

「八幡は今から実行委員?」

「そうだがどうかしたか?」

「ううん、頑張つてね!八幡達実行委員が頑張るから僕達が出し物を出せるんだし!」

何この天使?凄く可愛いんだけど。

戸塚から目を逸らしながら口を開く。

「ありがとな、そーいや本持ってきたが良かったら読むか?」

この間貸すとか言ってたし。

「え?いいの?」

「ああ、お前さえ良けりや読んでくれ」

そう言つて鞆から本を出して戸塚に渡す。本人は可愛い顔をして本をペラペラ捲ると笑顔を見せてくる。

「ありがとう!やつぱり八幡は優しくて頼りになるね!!」

ヤバイ、可愛いすぎる。この笑顔俺以外には見せないでくれ。

「そいつはよかった。劇もボーダーも頑張れよ」

「もちろん。……あ!そーいえば材木座君と留美ちゃんは昨日B級に上がったよ」

「……マジかよ」

あいつらの実力は知っているし仮入隊によって加算されたポイントも当然知っている。でもまさか1日でB級に上がるとは。

「うん。それで2人は昇格すると同時にB級下位相手に大暴れしてたの。そしたらA級の米屋君って人やB級2位の影浦先輩って人が2人にランク戦を挑んでたよ」

うわあー、早速戦闘狂が動き出したか。入隊して1日しか経つてな

い2人にランク戦をしかけるってどんだけだよ？今の2人じやボコボコにされるだけだ。それ以前に大暴れって何だよ？どんだけポイントに飢えてんだあの2人。

「一応聞くが結果は？」

まあボロ負けだと思っうけど。

「影浦先輩と戦った材木座君が0勝10敗で米屋君と戦った留美ちゃんも1勝8敗1分だったよ」

「……ほう。米屋から引き分けをもぎ取れたのか？」

「最後の勝負で勝てないと判断して相討ち覚悟で攻めたら引き分けをもぎ取れてたよ。それにしても影浦先輩って素人の僕が見ても凄かったよ」

「まあ素行が悪いからポイントは低いだけで単純な実力じゃ俺より強いからな」

俺がカゲさんと戦った時の最高成績は3勝5敗2分だからな。いつか勝ち越してやる。

「そうなんだ。僕も頑張らないと」

「そういやお前はどのくらい伸ばしたんだ？小町が3500ポイントまで伸ばしたのは知ってるけど」

「僕は3000ポイントだよ。でも平日は忙しいからB級に上がるのは当分先かな？」

まあこいつはクラスの出し物のメインだからな。仕方のない事だ。

「まあどうせ10月からのチームランク戦は無理だし焦らずにやれ。……つと、すまんが時間だから俺はもう行く」

「うん！頑張ってね！」

エールを受け取りテンションを上げて教室を出る。

終始無言のまま会議室へ行く入り口で数人が様子を窺っている。中で中かあったのか？

俺が扉に手を掛けると周りの人が場所を開けてドアに視線を集中する。そんな気になるなら早く開ければいいだろ。

そう思いながらドアを開けて、即座に後悔した。開けるべきじゃなかった。会議室には緊張感が走っている。原因は中央にいる3人の空気が原因だろうな。

中央に立つのは3人。

雪ノ下雪乃

城廻めぐり

そして雪ノ下陽乃

姉妹は三步ほど離れた位置で相對している。会長は雪ノ下さんの後ろでおろおろしている。

「ご、ごめんね。私が呼んだんだ。有志団体足りないうって事だからどうかなーって。雪ノ下さんは知らないかもしれないけど、はるさん、3年生の時、有志でバンドやったの。それが凄くてどうかなーと思っただけど」

「あはは、めぐり。ダメだよ。あれは遊びだし。でも今年はまだちよつとちゃんとやるつもり。だからさ、いいでしょ？雪乃ちゃん。雪乃ちゃんの為にあげられることはしてあげたいんだよー」

そう言つて雪ノ下の肩を抱くと雪ノ下は払い退ける。

「ふざけないで、だいたい姉さんが」

そう言つて雪ノ下は睨みつける。

「私が？何？」

雪ノ下の視線を受け止め全く逸らさない。浮かべている微笑は何か悍ましく感じる。

「また、そうやって」

悔しげに唇を噛み、目を背けると雪ノ下と俺の視線がぶつかった。まあ俺としてはどうでもいいのでスルーする。

いつも通り氷見に挨拶をして仕事を始めようとした時だった。

「あれ？比企谷君じゃん？」

そう言つてこちらにやって来る。どうやら揉め事は終わったみたいだな。

「どうもつす。貴女は有志参加ですか？」

「うんそうだよ。有志で管弦楽でもやろうかと思つてさ。OB、O

G集めたら面白いかなって。楽しそうじゃない?」

「いいんじゃないですか?好きにすれば?」

有志が増えた所で忙しくなるのは有志統制だけで記録雑務の俺には関係ないし。

雪ノ下さんはひとときしり笑って妹の所に戻る。

「ね?雪乃ちゃん、出ていいでしょう?」

「好きにすればいいじゃない。私に決定権はないわ」

「あれ?そうなの?じゃあ誰が委員長?比企谷くん?」

んな訳ないだろ。俺は人前に出るのは大嫌いだからな。呆れていと会議室のドアが無遠慮に開け放たれる。

「ごめんなさーい、クラスの方に顔を出したら遅れちゃいましたー」

どこも悪びれていない相模。やっぱりこいつは委員長の器じゃないな。

「はるさん、この子が委員長ですよ」

陽乃さんが底冷えするような目で相模を見る。

「あ、相模南です」

雪ノ下さんが息を吐き相模に一步詰め寄る。

「文化祭実行委員長が遅刻?それもクラスに顔を出して?へえ」

ヤバい声音だ。さつきまで明るかった人が急に凍てついた表情をするのはかなり怖い。

「あ、その」

相模が言い訳を探そうとしているうちに、雪ノ下さんは微笑む。

「やっぱ委員長はそうじゃなきゃねー!文化祭を最大限楽しめる者こそが委員長に相応しいよねー!」

「あ、ありがとうございます」

相模は戸惑いながらも表情を明るくさせる。おそらく初めての相模への肯定だからだろう。

雪ノ下さんが話を続ける。

「で、委員長さんをお願いなんだけど、わたしも有志団体出たいんだけど、私雪乃ちゃんに好かれてないから洩られちゃった」

しおらしい態度を取っているがあざといぞ。

「え？」

相模が雪ノ下に視線を向けるも雪ノ下は懽然とした表情を崩さない。
い。

「いいですよ。有志団体足りないし、出れば地域との繋がりとかア
ピールできるし」

それ誰かが言ってたような、少なくともお前の考えじゃないだろ。
お前バカだし。

「きゃー、ありがと!!」

わざとらしく相模に抱きつく雪ノ下さん。

「卒業しても帰れる母校って素敵だな。友達にも教えてあげよつと」

「そうなんですか……じゃあそのお友達の方も出たらいんじゃない
ですか？」

「お、グッドアイデア！早速連絡していいかな？」

「どうぞどうぞ」

言われるや否や雪ノ下さんは携帯片手に電話を始める。雪ノ下は
慌てて相模を止めにかかる。

「ちよつと相模さん」

「いいじゃない。有志団体足りないし。それにさ、お姉さんと何か
あったかは知らないけどそれとこれは別じゃない？」

そう言われると雪ノ下は言葉を詰まらせ黙る。相模はそれを見て
勝ち誇るように笑っているがその提案は雪ノ下さんが誘導している
事に気付いていないみたいだ。

まあ記録雑務の俺には関係ないか。

そう判断して席に座る。

「比企谷君って雪ノ下さんのお姉さんとも知り合いなんだね」

氷見が話しかけてくる。

「まあ顔を知ってるくらいだ。会ったのは今日入れて3回だけだ
し」

「そうなんだ。それじゃあ今日もよろしくね」

「ああ、よろしくな」

挨拶を交わしいつもの場所に座り仕事を始める。他の文実メンバ―の殆どは雪ノ下さんに注目している。雪ノ下だけは頑なに目を向けていないが。

仕事に集中していると上から声がかかる。

「ちゃんと働いてるかい、青少年」

顔を上げると座っている机の前に雪ノ下さんがいた。

「してますが何か用ですか？」

「ちよつと意外だな。比企谷君はこういうことしなれと思ってたよ」

「否定はしませんよ。くじ引きで外れを引いたんです。貴女の妹はどうかは知りませんが」

興味ない奴の事情なんざ知らないからな。

「うーん。私はやると思ったよ。姉の私が実行委員長やってたんだもん」

姉がやるから妹の自分がやる？という意味だ？よくわからん。

頭に疑問符を浮かべている時だった。

「みなさん、ちよつといいですか？」

相模が一段と大きな声を出してくる。何をするんだ？頼むから面倒な事にはならないでくれよ。騒ついた会議室が静まる。

「少し考えたんですけど、文実は文化祭はちゃんと楽しんでこそかかって。やっぱり自分が楽しまなければ人を楽しませられないっていうか……」

何か嫌な予感がしてきた。理由はない。ないけど嫌な予感がしてくる。

そんな中相模は続ける。

「文化祭を最大限楽しむためには、クラスの方も大事だと思います。予定も順調ですので、少し仕事のペースを落とすってのはどうですか？」

嫌な予感が確信に変わった。ここで相模の意見が通ればヤバイ事になる。実行委員の中には俺のようにやる気のない人間がかなり多い筈だが、皆ちゃんと仕事をしてるから周りに合わせて仕事をしてい

る。

しかし相模の意見が通れば殆どの人間がクラスを理由にサボり始めるだろう。『皆がサボってるから問題ない』って空気が蔓延するだろう。

この提案が通ることはヤバいと雪ノ下も分かっていたのか異議を唱える。

「相模さん、それは考え違いだわ。バッファを持たせる為の前倒し進行で」

「いやー、良い事言うねー、私の時も、クラスの方頑張ってたなー」
雪ノ下の意見を姉が邪魔をする。それにより相模が更に調子に乗る。

「ほら、前例もあるし、やっぱいいところは受け継いでいくべきだしー、先人の知恵に学ぶっていうか。私情を挟まないでみんなの事を考えようよ」

相模が返すと雪ノ下は無然として黙る。

その時だった。

「私は反対かな」

生徒会副会長の綾辻が反対をする。

綾辻が意見した事で全員の視線が綾辻に突き刺さる。

「どうして？ 卒業生の人も良いことって言ってるじゃん」

「実行委員の仕事を減らしてクラスの方に時間を割いたら危ないと思う。だから寧ろペースを上げて全ての仕事を早く終わらせる、それからクラスの方に時間を割けるのがベストだと思うな」

そう話すと相模は綾辻を面白くなさそうな顔で見ている。いるよなく。正論言われたらキレる奴。相模は暫く睨んだかと思えば取り繕った笑みを浮かべて反論する。

「でも、みんなもクラスに顔を出したいと思うんだよね。最後の方だとクラスのこと何も知らないでそのまま文化祭に入っちゃうってこともあり得るし。そうなると自分だけハブられるみたいじゃない?」

「別に文実の仕事をサボってクラスの方に行くってわけじゃないしさ。委員長ちゃんも両立するって言ってるんだよ。クラスの方にだけ集中しろなんて言っていないから大丈夫なんじゃない?」

ここでまた雪ノ下さんが口を挟んでくる。この人、何が目的だ? はつきり言って邪魔だろ? しかも正直言って論破する案が浮かばない。

それは綾辻も同じみたいで苦い顔をして黙る。それを見た相模は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「反対がないなら決定ですね。みなさんもクラスと文実の両立を考えつつ、クラスの手伝いもしながら文実の方にも来てください。クラスもみなさんも楽しめる文化祭を目指しましょう!」

相模の発言に一部を除いた文実メンバーは相模の考えに納得したのかちらほらと拍手がされる。このふざけた案は可決してしまった。

皆が従うなら綾辻1人がいくら反論しても覆らない。相模は満足気に笑っている。相模にとってはようやく実行委員長らしい行動が出来たと思っているのだろう。

「本当に良い事言うね。ね、比企谷君?」

雪ノ下さんは俺を見ながら言ってくる。

「まあそうじゃないっすか? 仮に文化祭が開催出来なくても責任を取るのには相模とおたくの妹さんですし」

そう言っただけで仕事に取り掛かろうとすると肩を掴まれる。顔を上げると雪ノ下さんが冷たい眼で見ってくる。

「……どういう意味かな?」

うおっ! 怖っ! まあ太刀川さんのレポート提出状況の悪さについてブチ切れた忍田本部長に比べたら怖くないので口を開ける。

「……だってそうじゃないですか? もしも文化祭が開催出来なかったらあんな提案をした相模はもちろん、実行委員長の間違いをキチンと

正せずに補佐に失敗した雪ノ下も責任を取るのは当然だと思いますが？」

「そう言っただけで仕事に取り掛かる。その間雪ノ下さんの冷たい眼によつて集中出来なかったのは言うまでもない。」

比企谷八幡は実行委員会が末期である事を理解する

相模の提案が可決されてから一週間、既に変化が現れている。委員会を休む者がかなり出ている。本来なら30クラスから2人ずつ、計60人集められているのに現在は20人くらいしかいない。負担がかなり大きくなっている。

さらに、雪ノ下さんたちの有志参加が引き金か、その他の有志参加も増え、それに伴う調整ごとも山のようにやってきた。

人手が減り、本来であれば回らないはずだが、生徒会役員ら執行部の尽力と雪ノ下のハイスペック、ときおり有志参加の練習ついでにふらつと現れては仕事を片付けていく雪ノ下さんの力でなんとか回っている。否、回ってしまっている。

「ああああ！やっつけられっか！」

つい発狂しながら机に伏せてしまう。今の俺の行動は悪くないと思う。

「大丈夫？」

「イラついてはいるが大丈夫だ。氷見こそ大丈夫か？」

「少し疲れたかな。でも犬飼先輩に比べたら……」

まあ犬飼先輩は有志統制だから急に仕事が増えてかなり苦しんでいる。アレはやバイ。俺だったら確実に逃げる。

記録雑務の仕事は有志が増えた所でそこまで増える事はないのだが、記録雑務は8人中6人が来ていない。つまり俺と氷見の2人だけだ。よって仕事も本来の仕事の4倍する事となっている。

サボりたいのは山々だが俺までサボると氷見が本来の仕事の8倍をしなくちゃいけない。流石の俺でもそこまで屑じゃない。

つか1日だけでいいんで一般人へのトリガー使用を許可してく

ださい。相模及びサボっている層共を俺の旋空で真つ二つにするんで」

「比企谷君落ち着いて。声に出していたし、殺気が漏れてるよ」

「マジか。すまん」

「別に怒ってないけど……このままじゃ文化祭開催も危ういよね？」

「まあそうだな。まあそうなくても責任を取るのは相模と雪ノ下だ。ちゃんとやってる俺達には関係ない」

「でも比企谷君、文化祭で双葉ちゃんとデートするんじゃないの？」

「待て。何で知ってる？」

「この前二宮さんに加古さんがそんな事を言っていたよ」

「……加古さん。まあ中止になったら出水んとこの文化祭でデートするだけだ。そういやお前は烏丸を誘わないのか？」

軽く笑いながらそう言うのと氷見はほんのりと頬を染める。クールなこいつにこんな表情をさせるなんて、木虎のパターンといいやるな烏丸。

「……誘いたいけど少し恥ずかしくて」

「バツカお前。あいつは女に興味ない挙句鈍感なんだし積極的にいかないとダメだろ？」

何せあの木虎の態度を見ても好意に気付いていない男だし。普段の木虎の態度を知ってる奴なら絶対気づくぞ。

「……うん。頑張ってみる」

「おう、頑張れ」

さて休憩もそろそろ終わりにするか。あー怠い。

溜息を吐いて仕事に取り掛かろうとした時だった。

会議室のドアが叩かれる。ドアの方向を見ると葉山隼人が入って
き

「有志の申込書類、提出に来ただけど……」

「申し込みは右奥へ」

仕事を止めずに答える雪ノ下。接客業なら論外な態度だがあいつ

ならいいな。葉山は礼をして申し込みに向かった。

これであいつの用事は終わったんだが何でいんだよ？それどころか俺の方に寄ってきた。

「人手、足りてるのか？」

少し見りやわかるだろうが。考えてモノを言え。まあ今ここでブチ切れても意味がないし適当に返すか。

「全体の事は知らん。担当部署で手一杯だ」

まあ知らないというよりどうでもいいだな。文化祭潰れても特に何も思わないし。

「担当部署って？」

「記録雑務」

「似合うな」

ケンカ売ってんのか。これまでの状況を見て大体のことを把握したのか、訳知り顔で頷く。

「なるほどな、じゃあ大変だ」

「そうだな」

実際に大変だ、何せもといいた人数の3分の1しか実行委員がいないんだしな。俺と氷見なんて本来の仕事の4倍やってるし。

「でも、見る限りじゃ雪ノ下さんが殆どやってるように見えるけどな」

葉山がそう言うのと雪ノ下が口を開く。

「ええ、その方が効率が良いし」

「でも、そろそろ破綻する」

珍しく突き放した言い方だな。葉山は続ける。

「そうなる前に人を頼った方がいい。だから手伝うよ」

バカかこいつは？こんなに人が居ないのに誰を頼れって言うてんだよ？それ以前に連れ戻す事を考えやがれ。

会長も暫く悩んでいたがやがて微笑む。

「お願いしてもいいかな？」

「どうか？」

葉山に問われ雪ノ下は顎に手をやる。少しの間考えていると会長が諭すように

「雪ノ下さん、誰かに頼るのも大事な事だと思うよ」

この人も何やってんだが。そもそも会長の城廻先輩があの時相模の提案をしつかり否定するべきだったんだよ。何で副会長の綾辻がやってあんたがしないんだよ？

呆れていると、雪ノ下は諦めたように溜息を吐く。

「そうですね、雑務に皺寄せがいつていますし、一度割り振りを考え直します。それと会長の判断もありますし、その申し出ありがとうございます。お受けします」

どうやら納得したようだ。つーか葉山は仕事手伝わなくていいからお前の人気使ってサボってる実行委員連れ戻せよ。効率を求めるならそっちの方がベストだからな？

そんなことを思っていると完全下校時刻になる。明日も怠いな。

「…」

もう言葉も出ないわ。翌日の実行委員会、出席者はさらに減り雪ノ下のほか、生徒会執行部と数人しか見当たらない。いくらクラスの方に出てもいいって指示があったからってこれはないだろ、これは。

「なあ氷見。一緒にサボろうぜ？もう俺は嫌だ。サボって甘い物食べに行こうぜ」

「気持ちわかるけど頑張ろうよ。遙が1番頑張ってるんだし」

生徒会なんて本来の仕事だけでなくサボりが多い部署の仕事もやってるし1番苦労してるのは綾辻だろう。次点でサボりが最も多い部署にいる俺と氷見だろう。

「…：…そうだよな。頑張るか」

「俺も手伝うぞ」

後ろから話しかけられ振り向くと奈良坂がいた。

「あ？お前会計の方は？」

「今ちようど山を越えたんで割と余裕がある」

「サンキュー奈良坂。愛してるぜ」

「止めろ。気色悪い」

軽いノリで言ったら冷たい眼で返された。今は疲れていてメンタルが弱ってるんだからその眼はやめてください。つーか三輪の冷たい眼そっくりだな。

奈良坂という優秀な助っ人のおかげで仕事の量は減った。それでもサボりの奴らの分は補填しきれいていないので大変だ。

作業を1時間くらいした時だった。

「2ーF担当者、企画申請書類が出来てないんだけど」

雪ノ下がそう言ってくる。2ーFって俺のクラスじゃねーか。確か以前相模がやるとか言ってた気がするんだが……

まあ俺には関係ないな。そう判断して仕事を再開する。

「比企谷、お前のクラスの企画申請書だがいいのか？」

「いいんだよ。だって奈良坂お前、企画申請書ってアレだぞ？必要機材や人員数、支給予算使い道など、企画意図を書くんだぞ。どっかの実行委員長と違って俺は毎日こっちにいるからクラスの状態を全く理解してないから書けねーよ」

「……なるほどな。だが相模が書くとは思えないんだが」

それを聞いて真面目組からの相模の評価がどれだけ低いかがよくわかる。それについては同感だが俺には関係ない。俺は出来る仕事だけをやるんだよ。出来ない仕事は出来る奴にまわすだけだ。

「まあ本当にヤバくなったら副実行委員長が2ーFに要求しに行くから大丈夫だろ？」

「……そうか。それにしても比企谷、お前いつも以上にやる気がないな」

「たりめーだ。お前んとこの会計と違って記録雑務の真面目な奴は俺と氷見しかいないんだぞ?」

奈良坂が所属している部署なんてサボってる奴は10人中3人とかなり少ない。あんなに真面目な奴がいるなら俺も会計にすれば良かった。

「……まあ俺も手伝うからそんなに眼を腐らせるな」

「……. そんなにヤバいか?」

「ヤバいな」

「何かいつもよりドロドロしてるね」

奈良坂だけでなく氷見にも言われた。俺の眼を見慣れてるこいつらでさえヤバいと言っているんだ。どんだけ俺の眼はヤバいんだ?

呆れていると葉山が雪ノ下からプリントを貰って何処かに電話をかけている。大方クラスの誰かだろうな。

葉山が電話をかけてから5分くらいした時だった。

扉が開き由比ヶ浜がやって来た。由比ヶ浜は入って直ぐに会議室を見渡して俺の方にやってくる。

「ねえヒツキー、何でこんなに人が少ないの?」

「相模が暴走した」

「ゆきのんは止めなかったの?」

「止めようとしてたけど最終的に止めなかった」

姉が介入した瞬間に黙ったし。マトモに止めたのは綾辻だけだ。

「ねえ、じゃあヒツキーは……」

「葉山がこっち見てるぞ早く行け」

どうせ何で俺は動かなかったの?とか聞くつもりだったんだろうけど、俺は必要以上に動くつもりはない。

そう言って仕事に戻る。俺が話を聞く気がないとわかったのか由比ヶ浜は葉山の所に行く。つたきたただでさえ忙しいんだから余計な事を増やさないでくれ。

更に1時間、葉山は由比ヶ浜に指摘されながら企画申請書を書いている。他のグループも働いたり、軽い雑談をしている。

「氷見の淹れた茶は美味しいな」

「ありがとう奈良坂君。でも月見さんのお茶の方が美味しいんじゃない?」

「いや、同じくらい美味しいぞ」

「ああ、美味しいな。にしても普通はオペレーターが淹れるんだな……」

国近先輩はあんまり淹れてくれない。あの人作戦室にいる時なんて食う、寝る、ゲーム、偶に仕事のサイクルだぞ? 大体俺が茶を淹れているし。

俺達記録雑務が僅かな休憩時間を堪能している中周りを見渡すと、参加している実行委員が真面目にやっている生徒しかいないので生徒会も励みになるのか会長や綾辻も笑顔で仕事をしている。状況は良くないが普段のピリついた空気はなく、穏やかな時間が流れていた。

その空間を引き裂くように無機質な音がした。

「遅れてごめんなさーい。あ、葉山くんこっちいたんだー」

相模が後ろに2人取り巻きを連れてやって来た。

さつき迄の心地良さは無くなり苛立つてきた。見ると、この場に居る全員がよい顔をしてなかった。まあこいつの所為で苦労してるし当然か。

当の本人は殺気に気が付かずに葉山に歩み寄ろうとすると、雪ノ下が立ち塞がり書類と印鑑を突き出した。

「相模さん、ここに決裁印を」

「……そう、ありがとー」

葉山との会話を邪魔されて不快だったのか無表情で印鑑をポンポン押す。明らかに問題だろ。この構図。由比ヶ浜は苦い顔で見ている。まあ見えていて気分の良いものじゃないしな。

「相模さん、調子はどう？」

葉山が話しかけると相模は身体を捻り顔を向ける。

「順調かな」

「そうじゃなくて文実の方。クラスは優美子がちゃんとやってるみたいだからさ」

今のセリフ、訳すと文実サボってるけどいいの？と聞こえるな。まあ相模には通じてないみたいだけどな。

「あー、三浦さん頼りになるよねー（あいつ、しゃしゃり出てきてうざいわー）」

「ははは、まあ悪い事じゃないよ（それ以上はやめなよ?）」

何か言葉の裏が読めてしまう。葉山の言葉にも裏を感じるぞ。

「いやいやうちも三浦さんみたいになりたいなー（あいつ潰して成りかわりたいわー）」

お前じゃ無理だ。現実見るバカが。

「相模さんもいいところあるしそのままでもいいんじゃない？（それ以上はやめようって言ったよね?）」

良いところ？ある訳ないだろうが。お世辞にしても笑えないな。

「えー？でも、うちのいいところってそんなないしー（ほら、今自虐的！褒めて！褒めて！葉山君が褒めて!）」

「人それぞれだよ。悪いと思ってもそれが人にはよく見える事もあるし（いやごめん。褒めるほどよく知らないから一般論を言っておくね）」

さつきから凄い気が散るんだが…… お前ら頼むから黙るか出て行ってくれ。特に相模、仕事しないなら消えろ。

内心文句を言いながら仕事をしていると下校のチャイムが鳴る。

葉山は雪ノ下に企画申請書を提出する。雪ノ下は頷きまどめて

ファイリングした。

「雪ノ下さん。決済印忘れてるよ」

「……あ、相模さん、ここに印を」

「あ、はい。ていうかハンコ渡しておくから押しちゃっていいよ」

「相模さん、それはよくないよ」

見かねた会長が苦言を呈するが悪びれるふうもない。

「えー？でも効率よくないじゃないですか。大事なのは形式じゃなくて中身だと思っんですよね。ほら、委任っていうか？」

「では、今後は私の方で決裁します」

雪ノ下が印鑑を受け取るがそしたら相模存在理由なくね？まあ元々ないけど。

そんなことを思っているとチャイムが鳴るので帰宅準備をして早々に会議室を出る。後ろで相模が葉山や由比ヶ浜、雪ノ下に何か言っているがどうでもいい。俺は疲れた。

「……って、こんな感じで凄い疲れたんだよ」

「だから相模さん、いつもクラスにいたんだ」

「……それヤバくね？」

「信じられないけど、お兄ちゃんがこんな顔をしてるって事は嘘じゃないね」

「八幡先輩、お疲れ様です」

「サンキュー双葉」

現在太刀川隊作戦室、俺は今実行委員の状況をこの場にいる戸塚、出水、小町、双葉に全部話した。

ちなみに留美と材木座はいない。あの2人ランク戦にはまりまくって放課後は毎日ランク戦に参加している。まさかここまで戦闘狂になるとはな。そーいや次の防衛任務はあの2人と合同だし今から楽しみだな。

「いやいや、そんなふざけた案が可決する事自体ヤバいだろ？俺とこの文実なんて多くても5人くらいしか休んでないぜ」

それはサボりじゃなくて体調不良とか家の用事だろうな。

「まあそんな訳だ。悪いが双葉。そんな訳で、もしかしたら文化祭デートは出水の学校の文化祭になるかもしれん」

「は、はい。わかりました」

「悪いな。俺は疲れたから寝る」

そう言つてベイルアウト用マットへ行く為立ち上がろうとした時だった。

「八幡先輩」

双葉はいきなり俺を呼んだかと思うと俺の頭を自分の膝に乗せてきた。

驚きながら双葉の顔を見ると優しい笑顔を見せてくる。

「……私の膝で良ければ寝てくれませんか？少しでも気持ちよくなれるように頑張りますので」

そう言つて俺の髪を優しく撫でてくる。余りの気持ちよさに睡魔がやって来た。

「双葉ちゃんありがとう。小町はランク戦に行くからお兄ちゃんを癒してあげて」

「あ！僕も行くよ」

「俺も邪魔しないように行くわ。比企谷は疲れを取っとけ」

3人はそう言つて作戦室から出て行つた。挨拶をしようにも眠くて出来なかった。

「……すまん双葉。少し、寝る……」

「……はい。おやすみなさい。八幡先輩」

ちゅっ……

そう言っつて双葉は俺のおでこに軽くキスをしてきた。

……ヤバい。気持ちが良い。もうだめだ。最近では眠れなかったが今はよく眠れそうだ。

余りの気持ちよさに俺は意識を手放した。

比企谷八幡は氷見亜季の為にヤル気を出す

「喰らえい闇の眷属よ!!我が必殺奥義、幻紅刃閃アアアア!!」

材木座がそう叫ぶと孤月の斬撃が伸びて3体のモールモッドは一瞬で真つ二つになった。これで残りはバムスター1体とモールモッド2体か。

……にしても

「……あのバカが。同じ防衛任務をしている者として恥ずかし過ぎる」

俺は恥ずかしさのあまり額に手を当てる。

「……まあ、トリガーを持って1ヶ月もしてないでモールモッド3体を一瞬で倒すのは凄いと思いますよ」

双葉は苦笑いしながらそう言ってくる。双葉よ。材木座の顔を立てる必要はないぞ。……まあ旋空を短時間でモノにしたのは認めるけど。

「中2嫌い。グラスホッパー」

すると材木座の後ろから現れた留美は呆れながらそう呟いて自分

の足元にグラスホッパーを起動して、バムスターとの距離を詰めて弱点の目を一闪する。

それを確認する事なく留美は残ったモールモッド2体のブレードを斬り捨てる。これで隙が出来た。

「中2、よろしく」

「心得た！喰らえい！豊穰たる幻の大地！岩砂閃波!!」

材木座がそう叫ぶと材木座の右手からトリオンキューブが現れて2分割される。2分割されたトリオンキューブはそれぞれモールモッドの顔面に飛んでいき大爆発が起こった。

爆風が晴れるとそこには前半分が吹き飛んだモールモッドの残骸が2つあった。

……何がブラスティーサウンドロックだ。ただのメテオラじゃねーか。マジで材木座ムカつくな。しかも唯我と違って実力があるからタチが悪い。

「あ、あはは……」

双葉は呆れが混じった苦笑いを浮かべ、留美は冷たい眼で材木座を見ていた。にしても留美も鮮やかにバムスターを殺し、モールモッドの隙を作らせるとは見所があるな。

そんな事を考えていると2人が俺と双葉のいる場所に戻ってきた。

「ふっ。見たか八幡よ。我にかかれば闇の眷属など孤月の錆になるのが当然「よう留美。お疲れ」酷いぞ八幡！せめて最後まで聞いて!!」

材木座よ。素に戻ってるぞ。お前中途半端な中2は止める。大体孤月は錆びつかないからな？

「……うん。私と中2はどう？」

「大丈夫だ。お前らなら普通に防衛任務をこなせるだろうな」

今日は留美と材木座の初めての防衛任務だ。そこで2人がどのくらい防衛任務をこなせるか調べる為俺と双葉が見張りとしてきている。

結果、2人は防衛任務を支障なくこなせると判断した。

「とりあえず小町と戸塚がB級に上がるまでは俺や双葉などが同行するから慣れとけよ」

「うむ。承知した!」

「……わかった」

「なら良し。……つと時間だ。回収班は呼んだし、後は次の隊に任せ
て引き上げるぞ」

そうやって今日の防衛任務が終わった。

「んで、俺は実行委員会に行くけどお前らはこれからどうすんだ?」

現在午後4時。実行委員会が始まる時間だ。サボりたいのは山々だが俺がサボると記録雑務は氷見1人になるからな。流石にそれは心が痛む。

「我はクラスの出し物において出番がないからランク戦をしに行くつもりだ。今日は熊谷氏と奥寺殿と戦う約束をしているのでな!」

「……理由が悲しいぞ。にしても熊谷と奥寺か。熊谷はポイントは低いがマスタークラスと戦える実力があるから気をつけろ。奥寺はタ
イマンなら勝てない相手じゃないから落ち着いてやれ」

小荒井もいたら確実に負けるけど。あの2人相手だと俺でも梃子
摺るし。

「…私もランク戦かな。相手は適当に探す」

「私はクラスの方の出し物に参加しなくてはいけないので学校に戻り
ます」

「わかった。報告書は俺がやつとくからじゃあな」

そうやって俺は作戦室へ行って報告書を書いた。

報告書を書いて、総武高に着いた。はあ、防衛任務が終わって直ぐ

に仕事とはな……

ため息を吐いて会議室を開ける。

するとそこは混沌の渦だった。

騒めきが各所で聞こえ、それは明らかに良い騒めきと言えないのが直ぐにわかった。

(何だ、この状況?)

疑問に思っている時だった。

「あ、比企谷君。防衛任務お疲れ様」

氷見が話しかけてきた。

「ああ。ところでこれどうなってるんだ? 30文字以内で説明を頼む」

「雪ノ下さんが風邪で休んで仕事が溜まっているんだよ」

「サンキュー。……にしても遂に雪ノ下に任せていたツケが回ってきたか」

殆ど雪ノ下がやっていたからいつかこうなると思っていたが予想以上だ。にしてもあのバカ、相模を増長させるのを止めないで真面目な組に迷惑をかけるとはな。お前が倒れるのは自業自得だが、俺の知り合いが倒れたらタダじゃおかないからな。

内心愚痴りながら仕事を続けた。

「そっぴいや会長も休みか?」

「城廻先輩なら外部からのスローガンについての問い合わせについての対応とかでないよ」

なるほど。まあ風邪やサボりじゃないならいいや。そう思いながら作業を続けた。

暫く作業を続けている時だった。

「ヒキタニ君」

葉山が呼んできた。

「何だよ? この書類はまだ書き終えてないから少し待て」

「いや、そうじゃなくて君は雪ノ下さんのお見舞いに行かないのかい？ 結衣は行ったよ」

……は？ 何言ってるんだ？

「バカ言うな。タダでさえ混乱してるのに戦力を減らしてどうすんだよ？ あいつの見舞いに行ったところ仕事が減る訳じゃないんだし行っても時間の無駄だ。それ以前にあいつの住所知らないしな」

そう言っつて書類作業を再開する。すると視線を感じるのでチラリと見ると何故か葉山が俺を睨んでいる。何であいつの見舞いに行かないだけで睨まれるんだ？ 解せぬ。

そう思いながら俺は下校時間まで作業を続けた。

翌日の昼休み、俺はいつも通りベストプレイスに行こうとした時だった。

「ヒツキー、ちよつと来て」

そう言っつて由比ヶ浜は俺の腕を掴み、歩き出す。

「は？ なんだよオイ」

「いいから来るし！」

あ、だめだこりや。話を聞かないパターンだ。面倒だなあ

そうして俺は校舎裏に連れてこられた。

「なんだよ。腹減ってるから早くしろ」

「あたし、ヒツキーにちよつと怒ってるんだよ」

「は？なんで？」

「なんでゆきのんが倒れるまで助けなかったの!?!？」

「……は？なに言ってるんだ？」

「言っただけだ。雪ノ下が俺に謝罪をしたら助けてやるって。俺はあいつから謝罪を受けていない。だから助けなかった。これは以前にも言わなかったか？」

「でもゆきのんが倒れて……」

「そんなもんあいつの責任だ。大体俺以上に怒るべき相手がいるだろうが」

「……え？」

「こいつ本当に理解できてないのか？呆れて物が言えないな。」

「相模だよ。あいつが暴走したから雪ノ下が倒れたんだぞ？俺以上に相模に文句を言うべきだろうが。それともアレか？クラスの人気者の相模を責めたらマズイと思ってる、ぼっちの俺を責めたのか？」

それが事実だとしても俺はどうでもいいが由比ヶ浜が最低な人間だとわかる。

「……ち、違うよ！そんなつもりじゃ……」

「後、助けてないだっけ？お前この間実行委員会の状況を見たよな？俺はあんな悪環境の中サボらずに本来の仕事の4倍近く働いたんだぞ。充分助けてると思うんだが？」

「そ、それは……」

「大体お前、俺に散々雪ノ下を助ける助けるって言ってるけどさ。お前は何か助けたのか？実行委員でない葉山は主役で忙しいのにしょっちゅう実行委員会に来て助けてくれたぜ。文化祭直前で大分劇が完成している以上仕事の少ない制作進行のお前は何をしたんだ？」

「こいつが来たのって企画申請書の手伝い一回だけだし。」

「……」

由比ヶ浜は黙っている。呆れた。あれだけ俺に文句を言っておい

て自分は何もしてないのかよ？こいつ本当に雪ノ下の事大事に思っているのか？思っていないだろ。

「話は終わりみたいだな。俺はもう行く」

俺は由比ヶ浜の返事を待たずに、ベストプレイスに向かって歩き出した。

放課後、文化祭のスローガン決めの際にいちやもんがついた。

『面白い！面白すぎる！ 潮風の音が聞こえます。 総武高校文化祭』

いやダメだろ。パクリじゃねーか。

当然却下され、それにより急遽人が集まった。オブザーバーとして、葉山や陽乃さんも出席していて、それ自体が既に文実の秩序が失われている事の証であった。

会議は一向に始まる気配はない。何故ならこの場を仕切る筈の相模が書記に任命した友人と喋っているからだ。

会長が見兼ねて声をかけた。

「相模さん、雪ノ下さん、みんな揃ったけど」

相模が話を中断して雪ノ下も顔を上げた。

「それでは委員会を始めます。議題は文化祭のスローガンについてです」

始めは挙手でアイデアを求められるがやる気のない集団によりそれも難しい。

葉山が見るに見兼ねて挙手する。

「いきなり発表っていうのも難しいだろうし、紙に書いてもらったら？」

「そうね、少し時間を取ります」

各自に紙が渡りそれぞれが書き始める。

暫くして回収されホワイトボードに板書される。

友情・努力・勝利

またパクリじゃねーか、つうか最後の勝利って何だよ？

そんな中みんなの目を引いたものがある。

ONE FOR ALL

隣にいる葉山が声をあげた。

「ああいうの、ちよつといいよな」

どうやら葉山のお気に召したらしい。そうか？と意味を込めて鼻息で返す。

「1人は皆の為に。俺は結構好きなんだ、あんなの」

「そーかよ」

まあどうでもいいけど。

そんなこんなしていると相模が友人と何か話して立ち上がった。

「じゃあ最後に。こちらの方から『絆 共に助け合う文化祭』っていうのを」

相模は自分らで考えたスローガンを発表し板書する。

プツ……

危なく笑いかけた。

何言ってるんだこいつは？そりゃ真面目な組の奴が出したなら良いスローガンと俺は褒めていただろう。

だが相模が言うのと笑いネタにしかならない。よく見ると真面目組は全員苦い顔をしていて、サボリ組は適当に頷いている。大体お前、助け合うとか言ってる誰を助けたんだよ？

呆れている間も議論は続き何とか1つの案に纏まった。

『千葉の名物、踊りと祭り！ 同じあほなら踊らにやsing a song！』

………どうしてこうなった？つかこれ文化祭飛び出して千葉全体のスローガンになってないか？

まあ決まった事には文句は言わないが。

スローガンが決まった以上平常運転に戻る。はあ、怠い。

その時だった。

「スローガンも決まったし、お疲れさまでした」

相模はそう言って会議室を出て行った。それに便乗してサボり組は殆ど全員出て行った。

……普通招集されたなら下校時間までやれよ。

呆れていると一部の真面目組が舌打ちがしているのが見てとれた。まあ気持ちはわかる。俺も舌打ちしたい気分だし。もう文化祭潰れろよ。

ため息を吐いている中、横を見ると氷見が早速仕事を始めていた。

「お前、凄いな。俺なんて完全にヤル気ないし」

「それが普通だよ。……でも私は文化祭が開催して欲しいから」

「意外だな。お前はそこまで文化祭に興味ないと思っていたんだが」
ぶつちやけ凄いクールな氷見が文化祭ではしゃぐ姿は想像出来ないし。

そう思った時だった。

「……実はね。烏丸君を誘う事が出来て、2日目と一緒にまわる約束をしたんだ」

氷見はほんのりと頬を染めてそう言ってくる。

まさかの展開かよ！この返答は正直予想外だった。

「……だから文化祭は開催して欲しいな」

そう言ってくる氷見を見ると、さっきまで文化祭潰れろと思っていた俺を本気で殴りたいと思った。

「………すまない」

「………え？どうしたの比企谷君？」

どうやら口に出していたようだ。俺は適当に返事をして仕事に取り掛かる。そしていつもよりヤル気を出して仕事をする。

俺個人の問題なら文化祭が潰れてもいいと思ったが事情が変わった。

しかし流石に割と親しい知り合い、しかも割と引っ込み思案な女が気になる男を誘えたんだ。このチャンスがファイになる所を見過ごすのは胸糞が悪い。

(仕方ない。怠いが俺もこの状況を打破する為本気で動くか)

柄じゃないが今はヤル気がそこそこある。

それに気が付きながら仕事を再開した。

比企谷八幡は裏で動く

翌日の昼休み。俺は購買でパンを買ってベストプレイスに行こうとした時、知った顔がいた。

「よう。綾辻」

「あ、比企谷君？こんにちは」

「ああ、その荷物……」

見ると綾辻は大量の荷物を持っていた。

「実行委員の資料だよ」

「昼休みもやるのか？」

「うん。このままじゃ開催が危ないからね」

やっぱりか。生徒会がそう言ってるなら相当ヤバいって事だろう。

……俺も動くか

そう判断した俺は綾辻から荷物をひったくる。

「持つてやる。会議室に運べばいいんだな？」

「あ、うん。ありがとう」

「気にするな。後俺も手伝う」

「……いいの？」

「構わない。文化祭潰れるのはアレだしな」

そう言つて俺と綾辻は会議室へ歩き出した。

会議室に着いて中に入ると生徒会役員がいた。
「手伝い1人来たよー」

綾辻がそう言うのと役員達は俺を見て、助っ人が増えたとばかりに息を吐いている。どんだけ苦労してるんだお前らは？流石に同情が湧いてきたな。

「いやー、ありがとね。危ないからね助かったよ」

会長がそう言うので会釈を返し自分の席に着きパソコンを起動する。

にしても、改めて確認するとかかなり多いな。とりあえず提出期限が近いものからやり始める。

暫くやつているとあるクラスの喫茶店に関する保健所への申請書類もあり正直驚いた。もしこの書類の提出が遅れたら喫茶店は当日開くことが出来ない。想像するだけでゾツとした。もしも開けなかつたら真面目に働いていた俺まで責められるかもしれん。

そんな事を考えながら仕事をしていると

「ねえ比企谷君。……このままじゃ開催出来るかわからないんだ。何かいい案はないかな？」

綾辻が話しかけてくる。その顔を見ると少し悲しそうな顔をして

「た。氷見の件でもそうだがそんな悲しい顔をされたら動かない訳にはいかない。」

暫く頭を使う。

現状、実行委員の内50人くらいサボっていて開催出来るか不安レベル。となると後10人から15人集められたら開催出来るだろう。最もな手段はサボり組を連れ戻すことだが、ただサボり組に声をかけても実行委員長の命令と言って無視するだろう。それで開催が出来なかつたら相模の所為だと言って逃げるのだろう。だが真面目組からすりやお前らも同レベルだからな。

……うーん。色々考えた所案はあるな。

「そうだな。一応2つある」

俺がそう呟くと全員が見てくる。

「比企谷君、本当？」

「一応な」

「それじゃあ教えて貰っていいかな？」

会長にそう言われたので口を開ける。

「先ず1つ目の案ですが……相模を実行委員会から除外して代わりに毎日参加している真面目組の中から新しい実行委員長を選出する考えですね」

俺がそう言うのと全員が絶句している。

「ちよつと待ってくれ……それってつまり……」

「だからあいつが上にいたら百害あって一利無しですから排除するって案だよ。それでサボリ組を招集する。お前もあいつが上にいたら嫌だろ？」

男子の生徒会役員が口をモゴモゴしているのはつきり告げる。そう言うとその男子生徒は「それは……そうだが」と言っている。他の役員も「まあ……違う人がやってくれるなら」と言っているのかわりかし好評だろう。

会長を見ると悲しそうな顔で見ってくる。

「でも、それじゃあ相模さんが……」

「それはあいつの自業自得ですね。実行委員長という立場にもかかわらず、あんな事態を引き起こしたんですよ。責められたとしても当然の事です」

会長の発言を容赦なく論破する。ぶっちゃけあんなカスがどうなるうと知ったことじゃない。俺にとっては相模の今後より文化祭が開催出来るかどうかの方が重要だ。

「そ、それは……」

見ると会長は落ち込んでいる。少し言い過ぎたか？

そう思っている肩を叩かれるので振り向くと綾辻がいた。

「比企谷君、もう1つの案を聞かせてくれる？」

「ん、ああ。わかった」

そう言って生徒会役員を見渡し口を開ける。

「もう1つの案ですが……生徒会の権限を行使して各クラスのルーム長を集めて手伝ってくれるように頼む事です」

俺がそう言うと会長と綾辻は納得した表情になる。一部は納得していないので口を開ける。

「確か昨年度、卒業式の準備をする際に生徒会が各クラスのルーム長を招集しましたよね？それと同じように文化祭の準備をする為に各クラスのルーム長を招集すればいいんじゃないですか？」

普段なら思いつかないが昨年度の俺のクラスは三上がルーム長で招集されていたのを何となく思い出せた。

「で、でも、クラスの準備は大丈夫なのか？」

男子の生徒会役員が聞いてくるがその対策もある。

「文化祭開催まで一週間を切ってるから準備が終わっているクラスもあるだろうし、終わってなくても完成直前だろうから1人くらい抜け

ても大丈夫だろう」

まあうちのクラスのルーム長みたいに劇に出るならともかく、飲食店なら準備が終わってるだろうから人を集められるだろう。

「でも、もし招集を断ったら？」

うーん。この男子の生徒会役員、常に悪い事態を考えるな。こういう人間は組織には絶対必要なタイプの人間だな。

内心感心しながらあるプリントを印刷して綾辻に渡す。

「これって……」

「そう。これは今まで誰がいつ参加していつ欠席したかわかる出欠表、何でこうなったか一目でわかる議事録、現時点で何が終わってなくて何をするべきか書いてある記録用紙だ」

記録雑務としての仕事を活きたな。どれも記録雑務としての必要事項だが、まさかこれが武器になるとは思わなかったな。

さて、そろそろ締めるか。

「これをルーム長全員に見せれば、向こうも文化祭開催が危ない事が理解出来るだろうな。そうすればルーム長30人のうち全員は無理でも10人や20人は集まると思うが」

そう言っただけで周りを見渡す。どうやら第一案よりは好評のようだ。

「とりあえず意見は言った。選択するのは生徒会だ。俺は部外者だから好きに決めてくれ。……っともう時間だ」

予鈴が鳴ったので立ち上がる。

「あ、うん。色々ありがとうね」

「いえ、では失礼します」

会長に礼を言われながら会議室を出る。

教室へ向かって歩いている時だった。

「比企谷君、今日はありがとう。凄い助かったよ」

綾辻が笑いながら礼を言ってくる。

「気にすんな、俺も文化祭が潰れて欲しくなかったからな」

そう返すと綾辻はキョトンとした顔を向けてくる。何だその顔は？結構面白いな。

「あれ？でも前に出水君から比企谷君は文化祭潰れろって文句を言ってたって聞いたよ」

「あー、まあ以前はな。お前らが頑張ってたのにそんな事思ってたかったな」

「あの状況じゃ比企谷君の考えが普通だよ。でも何で？」

「別に。氷見が文化祭2日目に烏丸と一緒に過ごせるって聞いたからな。それを聞いてちや黙って見逃すのは気分が悪い」

「え?! 亜季ちゃんとりまる君を誘えたんだ?!」

「俺はそう聞いた。だから今回動いただけだ」

「ふーん。比企谷君優しいね。まあ私としてもさっきの意見は凄く為になったから嬉しいよ」

綾辻はニコニコした顔で見ってくる。その視線はくすぐったいから止めろ。

「それはどうも。もう時間だから行く」

俺は綾辻の視線から逃げるように教室に逃げて行った。

午後の授業が全て終わった。また会議室に行く為に準備をしている時だった。

「ああ、最後に。ルーム長は生徒会室に来るように。生徒会長からの指示だ」

そう言っとうちのクラスの担任は教室を出て行った。どうやら第二案になったようだな。

頭に疑問符を浮かべているルーム長を軽く見ながら俺は会議室に向かって歩き出した。

もう嫌だ。俺の精神は限界だ。おそらく俺以外もそう思うだろう。

何せ真面目組の実行委員は約10人だ。

しかし今日は三輪隊と二宮隊は3時から7時まで防衛任務がある。すなわち今日は犬飼先輩と氷見と奈良坂がいない。

結論、今日来ている実行委員は一桁しかない。

予想はしていたが本当に一桁になるとは……

しかも生徒会役員はルーム長に話しているからいない。よって会議室には俺含めて8人しかない。進学校なのに何で相模のふざけた発言に賛成する奴があんなに居るんだよ？

俺が目を腐らせている時だった。

前の扉が開いて沢山の人が入ってきた。

「うおっ!! 本当に少ないな!」

「あの議事録や出欠表は本当だったんだ……」

「どれだけ実行委員長はふざけてんだ?」

「……流石にこれは手伝わなきやね」

「文化祭を潰れるのは嫌だし頑張るか!」

そんな事を言いながら入ってきた人は生徒会役員を除いて23人だった。

事情を知らない雪ノ下や真面目組は驚いた顔で見ている。そんな中、会長が口を開ける。

「はい。助っ人として各クラスのルーム長を集めてきたから協力して取り掛かってね」

会長がそう言うと言と真面目組は目をパチクリした。そして言ってる事を理解すると全員が目を輝かせていた。それはまるで砂漠の真ん中でオアシスを見つけた旅人のようだ。

一部の実行委員は「助っ人来たああ!」とバカでかい声で叫んでい

る。普段の俺なら黙れくらい思うが今回は気持ちが良い分かる。寧ろ叫んでもおかしくないと思っっている。

そう思っっていると

「比企谷君お疲れ様」

「事情は聞いたぜ。俺と三上も助っ人として来た」

記録雑務のところには三上と荒船さんが来てくれた。どうやらこの2人もルーム長みたいだ。知り合いがいて良かった。

「あざっす」

「気にすんな。にしてもこの人数でよく投げ出さなかったな」

そりゃそうですよ。俺がサボったら記録雑務は氷見一人になりますので。

「じゃあこの簡単に来るものから終わらせるね」

三上はそう言うのと早速仕事に取り掛かった。さて、俺もやるか。助っ人よりやらないのはアレだしな。

そう判断して集中して仕事に取り組んだ。

結論から言っつていつもの3倍くらいの人がいいた為かなり捗った。これなら本番までに間に合うだろう。

「……だから、文化祭は開催出来そうだ。だからその日は開けておいてくれ」

「わかりました。楽しみです」

実行委員会が終わり、俺はボーダー基地で双葉と一緒に歩いていた。その際に今日あった事を教え、文化祭デートが出来るって話になった。

太刀川隊作戦室に行こうとした時だった。

「あ、比企谷君。お疲れ様」

「ん？ああ、氷見お疲れ」

前方から防衛任務を済ませた氷見がいた。

適当に挨拶をして通り過ぎようとしたら肩を掴まれる。氷見の
とっさの行動に驚きながら振り向いた。

「遥から聞いたよ。比企谷君、私の為に文化祭を開催出来るように
色々と手を回したって」

「あー、まあ、それはだな……」

綾辻お前、何ペラペラと喋ってんだよ？俺はそういう風に動いた事
はあんまり知られたくないんだよ。

内心綾辻に文句を言っている中、氷見は口を開ける。

「遥から聞いた時凄く嬉しかったよ。……だから、ありがとう」

そう言っつて氷見は笑顔を見せてくる。

……ヤバい。初めて氷見の笑顔を見たが凄く可愛い。もし双葉と
付き合っつてなかったら間違いなく恋に落ちて告白して振られるレベ
ルだな。

「お、おう。ま、まあお前は本番で頑張れよ」

「うん頑張るよ。改めて本当にありがとう。それじゃ」

そう言っつと氷見は去って行った。

……にしてもさっきの笑顔本当に可愛いかつ「……八幡先輩」
急に殺気を感じたので殺気の方角を見る。

そこには物凄い冷たい眼をした双葉がいた。……ヤバい。死の気配が……

「……八幡先輩。今氷見先輩にデレデレしてましたね？」

双葉が俺に近寄ってくる。普段なら可愛さの余り抱きつくが、今は怖さの余り遠ざかってしまう。

「い、いや双葉。すまな」謝罪が聞きたいんじゃないです。デレデレしたかどうかを聞いたんですよ」……すみません。デレデレしました」余りの目の鋭さについて本音が漏れてしまった。双葉を見るとさっきより眼が鋭くなってるんですけど……

ビクビクしていると双葉が俺の手を掴んできた。

「久しぶりに模擬戦をしましょう？今の私なら八幡先輩に勝ち越せる自信がありますから」

ヤバい。今の双葉なら本気で勝ち越してくるかもしれん。

「ま、待て双葉。少し落ち着いてk」早く作戦室に行きましょう。本数は……100本勝負で」……はい」

俺は双葉に逆らえず作戦室へズルズルと連行されて行った。頼むから氷見よ。双葉がいる時にあんな可愛い笑顔を見せないでくれ。

現実逃避しながら作戦室に入れられた。

模擬戦の結果についてだが……双葉の殺気にビビり過ぎた為、本来の力が出せず結果は42ー58と初めて双葉に負け越した。

模擬戦が終わった後、俺が土下座して謝ったら文化祭デートの際、全額奢りで手を打ってくれた。

比企谷八幡の案によりサボり組は肩身が狭くなる

ルーム長を招集して2日。文化祭も後数日で開催だ。

そんな中、実行委員会の様子と言えば……

「ポスターの再製作だ！急げ！」

「待て。まだ予算がついてない」

「馬鹿野郎！算盤なんぎ後にしろ！俺は今なんだよ！」

「ポスター貼り直しの際は画鋏も回収しろ！あれも数えるんだからな
！」

「わかった。そんじや職員室に行って申請して来い！」

……こんな感じで凄い活性化している。

昨日までは働くだけ損だと思っていた真面目組は特に活発だ。おそらく昨日までと違ってやり甲斐があるからだろうな。

そんな中我らが記録雑務はと言えば……

「じゃあ比企谷君、こっちの書類お願いね」

「はいよ。悪いが氷見、そっちの申請書を生徒会に出してきてくれ
「わかった」

「議事録は終わったぜ。氷見が提出したら休憩するか」

こんな感じで俺、氷見、三上、荒船さんの4人で割とのんびりやつ

ている。俺と氷見は昨日までは本来の仕事の4倍やっていたので、人数が倍になった事でかなり楽になっている。

今日参加したルーム長は19人と昨日より少ないが立派な戦力だ。正直言つて凄く頼りになるな。

安堵の息を吐きながら記録雑務及びそのヘルプ2人は休憩に入つた。

「おつ、比企谷の淹れたお茶も中々美味しいじゃねーか」

「まあうちの隊で淹れられるのって俺と国近先輩だけですから」

「美味しいよ。ありがとう比企谷君」

「それにしてもこんな大量の仕事をして2人でやってたなんて……比企谷君も亜季ちゃんもお疲れ様」

「まあな……」

休憩に入った俺達のはんびりと茶を飲んでいる。俺と氷見だけだったら忙しくてこんなゆっくり飲めないからな。

「そういや比企谷。お前んとこの弟子2人かなり強いけどどんな訓練を施したんだ？」

「え？荒船さんはもう戦ったんですか？」

「ああ。確か材木座と鶴見だっけ？中二病の男と小学生の女の子だろ？戦ったぜ」

……材木座よ。もうボーダーでも中二病って認識されてるのか。哀れ過ぎる。

「とにかく俺や双葉と模擬戦して、その後2人で模擬戦ですね」

「なるほどな。だから孤月の対応の仕方があんなに上手かったのか」

「まあ俺も双葉も孤月使いですから。ところで戦績は？」

「既に10回近く戦ったけど、2人とも10本勝負で俺から2本とつてるぜ」

「マジか。というかどんだけ戦ってたあの2人」

「あいつらなら基本的にブースに行けばほぼ確実にいるぞ」

待てコラ。いくら小町のや戸塚と違って暇だからってどんだけ戦いに飢えているんだよ？小町と戸塚はまだC級なのに。

そんな事を考えながら携帯をしてみる。

そこには

『材木座義輝 孤月：5052 メテオラ：3600』

『鶴見留美 スコーピオン： 5175 ハウンド：3359』

と表示されている。こいつら入隊して1ヶ月もしないで1000ポイント以上稼ぐなんてどんだけランク戦に熱心なんだよ？まああいつらは学校じゃ俺と同じでぼっちだから暇なんだろうけどさあ……

呆れていると、同じ様に携帯を見ている三上と氷見は割と驚いていた。

「今月入隊したんでしょ？凄いよ」

「今期の新人王はこの2人のどちらかに決まりかな」

「まあそうだな。残り2人がBに上がったらチームを組むからその時が楽しみだよ」

「もしうちとあたる事になったらヘッドショットを決めてやるぜ」

「それは構いませんがもし小町にヘッドショットをしたら荒船さんの孤月のポイント根こそぎ奪いますので」

「……相変わらずシスコンだな」

「否定はしません」

そんな風に久々のまったりした休憩に癒されている時だった。

「すんませーん。クラスの方に行つて遅れましたー」

そんな事を言いながらある男子生徒が入ってきた。

瞬間、あれだけ騒いでいたのに静かになった。そして全員がその男子生徒を見ている。男子生徒は一斉に見られてたじろいでいる。

そんな空気の中、沈黙が破られた。

「おい。あいつはどうなんだ？」

「確かうちと同じ有志統制ですね。あのお触れが出て以来1回も来てません」

「つまりサボり組かよ？」

殆どの連中が不快そうに見ている。中にはこれ見よがしにため息を吐いている人もいる。

男子生徒はビクビクしながら自分の席に着いた。それを見た3年の有志統制の人はその席にドサリと簡単な書類を大量に置いた。

「じゃあそれやつといて。簡単な書類だから今までサボっていても出来るから。終わったら帰っていいから」

それって暗に終わるまで帰るなって言ってますよね？しかも今までサボっていても、って皮肉も言ってるし。はつきり言ってたかなりビビった。まあ気持ちはよくわかるけどな。

「あ、で、でも……」

「任せたから。じゃあ急いで2年の有志参加連中に確認をしてこい！」

反抗しようとしていたのを切って捨て本来の仕事に戻っている。男子生徒は暫くアタフタして、やがて1人寂しく仕事を始めた。

「……まあ、しょうがねーっちゃしょうがねーな」

「うーん。3年の有志の人も気持ちもわかるかな？」

「まあサボり組の自業自得ですよ。当然の報いです」

「比企谷お前、随分容赦ないな」

「昨日まで俺と氷見はメチャクチャ苦労しましたので。……つと、そろそろ休憩を終わらせましょう」

「おい、比企谷。この申請書の精査を頼む」

「はいはい。……書き漏らしはないですね」

「じゃあ提出つと。次は……って犬飼のクラスじゃねーか」

荒船さんがそう言うので企画書を見ると「ゆっくりと進むトロツコで、内部の装飾、ジオラマを見せる」ってコンセプトが書いてあった。「荒船さんがクラスにいたら間違いなく派手なトロツコになりそうっすね」

「まあそうだな。どうせなら人力でジェットコースターにするのも悪くないな」

ニヤリと笑いながらそう言ってくる。相変わらず派手な物が好きですね。流石アクション派狙撃手。まあ中々面白そうではあるがな。

そんな事を考えている時だった。

「遅れてごめんなさい。クラスの方に顔を出していました」
相模が後ろに2人取り巻きを連れてやって来た。しかも全く悪びれていない表情で。

瞬間、再び静寂が訪れた。静か過ぎる。風の音がはつきり聞こえるくらい静かだ。さっきの男子生徒と比較にならない程静かだ。

相模もこの状況に気がついたのか戸惑いだした。

「あ、あれ？私悪い事や変な事しましたか？」

自覚ないのかよ?!マジでタチが悪いな！別役以上の本物の悪だろ

！

戦慄している中、悪意は蔓延る。

「うわ……あんな呑気に来てるよ」

「彼女が実行委員長？」

「ああ。あんなふざけた指示を出した無能な実行委員長だよ」

「しかも悪いと思ってるのかよ……」

「どの面下げてきたんだが……」

さつきとは比較にならない程の悪口が聞こえている。まあ真面目組からすれば仕事を押し付けられた原因を作った女だし、ルーム長からすればクラスの方に出られなくなった原因を作った女でもあるからな。

予想はしていた事だ。俺が以前出した2つの案、ぶっちゃけどっちになるうとも相模が叩かれる事はほぼ確定だった。相模をクビにしたらクビになったバカと叩かれるだろうし、ルーム長を招集する案の場合、相模が実行委員会でやった事が広められ叩かれる。

まあ俺からすれば自業自得って話だ。俺にとつては相模の今後より文化祭開催が最優先だ。仮に相模がどうなろうと知ったことじゃない。

そんな事を思っていると相模は顔を青くしながら席に座り仕事を始めた。

すると更に顔を青くしながら近くにいる実行委員に話しかけた。

「……あの、すみません。これってどうやったら……」

どうやら相模は仕事のやり方がわからないようだ。まあ当然か。さっきの男子生徒は簡単な仕事があったけど、実行委員長である相模は難しい仕事をしなくちゃいけない。にもずっと関わらずサボって来た相模は手のつけ方を理解出来ない。

「……ちっ、そこは……こうすんだよ」

話しかけられた実行委員は舌打ち混じりに相模に説明をしている。それを見ていた他の連中はひそひそ話している。

「うわっ、来て早々わかんないから他人に聞いてるよ」

「今までサボっていたツケが回ってきたんじゃない？」

「っーか、実行委員長雪ノ下さんや綾辻さんがやりやいいのに……」

「本当傍迷惑だな。うちのクラスは後一步で完成なのにその現場に立ち会えないんだぜ？」

「……あいつの所為で」

もうヤバすぎる。真面目組はこれまでの不満が爆発したかのように相模をこき下ろし、クラスの方に出られなくなったルーム長はそれに便乗している。人間の悪意がここまで恐ろしくなる事を今日初めて知った。

相模を見ると泣きそうな顔で書類を進めている。まあ自業自得だが俺には不安がある。

「なあ比企谷。このままじゃヤバくね？下手すりゃ相模の奴、何をしでかすかわからないぞ」

荒船さんがそう言うってくるが同感だ。

このままだと相模のメンタルが壊れるだろう。別に相模のメンタルが壊れようともいいが問題はあある。

このままでは相模が何をしでかすかわからない。もう文化祭なんて知らないとばかりに役割を放棄するかもしれない。我慢の限界に達した時、彼女がそれを実行しないとは言い切れない。追い詰められ

た人間がすることなど予想出来ないからな。

とりあえず本番当日に相模が逃げ出した場合の対策をとっておくか。

そう判断して文化祭実行委員長が本番当日にやる仕事を調べ出した。

(相模を仕事は1日目の挨拶、2日目の挨拶、総評、優秀賞と地域賞の発表か)

賞の集計結果は本番当日に会議室詰めている人間が随時入れ代わり立ち代りで行う。まあ集計結果についての対策は今出来ないから放っておいていい。

俺が仕込んでおくのは挨拶についてだな。これをこなして本番当日に集計結果についての対策もやれば台無しになることはないだろう。

そう判断して俺はパソコンのあるプログラムを起動した。

あれから2時間、下校のチャイムがなり今日の業務は終了だ。

「荒船さんも三上も今日は助かったつす。ありがとうございます」

「どういたしまして。困った時はお互い様だよ」

「気にすんな。それと悪いが明日は防衛任務があるから無理だ」

「いえ、2人のおかげで大分仕事が減ったんでそこまで苦労しないと思いますから大丈夫です」

2人に礼を言っって会議室を出る。

その時だった。

「あれ？比企谷君じゃん」

雪ノ下さんがいた。そうだ、元はと言えばこの人が相模を増長させたからあんな面倒な事態になったんだよな。正直余り関わりたくな

い。

「どうもつす。それじゃあ」

そう言って通り過ぎようとする向こうは口を開けてくる。

「めぐりから聞いたぞ。比企谷君がルーム長を招集する案を出したって。比企谷君もえげつないね」

やっぱりこの人は今後どうなるか読めているようだ。

「案は出しましたが決定したのは生徒会です。それ以前に俺が動こうが動くまいが相模は叩かれますから」

俺が動いたら、相模があんな状況を引き起こしたと叩かれ、動かなかったら文化祭が中止になって叩かれる。

結論からして、クラスの方に顔を出してもいいみたいにあんなふざけた案を出した時点で相模は詰んだって事だ。まあどうでもいいけど、

それより気になる事がある。

「ところで……あなたは何を考えているんですか？」

率直な疑問だ。俺が動かなかつたら文化祭は間違いなく潰れていただろう。この人も相模の案が間違っている事くらい簡単に分かる筈だ。にもかかわらず相模の援護した理由が読めない。

「逆に聞くよ。比企谷君は私何が言って、君はそれを信じる？」

「……ぶっちゃけ信じないですね」

理由はない。ただ何となく思う。何か深遠な理由や壮大の理想を聞いてもまともに取り合いはしないだろう。

「なら聞かない事だね」

その声は実に冷たかった。装うでも偽るでもない、多分これが本当の彼女なのだろうと思った。

「そうですね。失礼します」

彼女の冷たさを不気味に思いながらこの場を後にした。

もうすぐ文化祭。願わくは平和に終わって欲しいものだ。

比企谷八幡は自隊の隊長の最大のライバルの様に暗躍をする

暗闇の中、生徒の騒めきが響く。手元の時計を見ると9時57分。そろそろ時間だ。

「開演3分前」

数秒もせずにイヤホンにノイズが入る。

『雪ノ下です。各員に通知。オンタイムで進行します』

雪ノ下の指示の元了解の返事がくる。これでオープニングセレモニーの下準備は万全だ。

そうこうしているとカウントダウンが始まった。

『5. 4. 3. 2. 1』

カウントが終わった瞬間ステージが光り出す。

「お前ら、文化してるかー?!」

「うおおおっー!」

会長のセリフに生徒が騒ぎ出す。

「千葉の名物、踊りとー?!」

「祭りいいいいい!」

「同じ阿呆なら、踊らにゃー?!」

「シンガツソー!」

叫び声の後にステージ上でパフォーマンスが始まった。つか文化してるって何だよ?

呆れていると

『こちらPA、まもなく曲あけます』

『了解、相模委員長、スタンバイします』

雪ノ下が連絡を入れるとパフォーマンスチームが下手袖にはけて、上手袖に立った会長が呼び込む。

「では、続いて文化祭実行委員長よりご挨拶です」

ステージ上の相模の顔は固い。生徒全員の視線が注がれる。ガチガチに固まった腕が上がり相模が一声を放つ。

瞬間、キーンとハウリングが起こった。どんなタイミングだよ。観衆も笑ってるし。悪意のない笑いだが相模本人は理解できてないだろう。

会長も不安に思ったのかフォローする。

「では、気を取り直して、実行委員長、どうぞ！」

その声で再起動したのか、相模は手に持つてるカンペを開いたがかさりと落ちて、また群衆の笑いを誘った。っーか初めからカンペ使うとかバカか？カンペはあくまで最終手段で普通は頭の中に入れておくんだがな。相模はカンペあつても、とちるかむは当たり前、つかえつつかえしながら進む。ちっ、たかが挨拶でも役に立たないなんて本当にカスだな。

やっぱ第一案だけ教えて相模をクビにして綾辻あたりを実行委員長にした方が良かったな。

そう思っている時だった。

「あーあ、初っ端から無様な姿晒しながらって…」

「サボってばっかで自分の役割を理解出来てないからだろ？」

「こりやエンディングセレモニーもかつこ悪く終わるな」

後ろからは他の実行委員がため息を吐きながら相模の悪口を言っている。どんだけ空気が悪いんだよ？

まあ幸い観衆からは「がんばれー」なんて言われているから相模はどうなるかはともかく、客からは受けているので大丈夫だろう。

そんな事をのんびりと考えている中、委員長の挨拶は終わり、次の進行に移った。

オープニングセレモニーが終わり教室に戻ると中はドタバタして

いて慌ただしい。公演に向けて最終追い込みの真っ最中だった。

「ヒキタニ君は実行委員の仕事あるの？」

「今の所はないな」

「じゃあ受付やってもらっていい？公演時間の案内」

「公演時間知らないんだが」

「受付に書いてるから大丈夫。座ってるだけでいいからよろしく」

マジか？凄いい楽だろ。この仕事。即答して教室の外に出て椅子に座る。

暗幕が張り巡らせた教室はすし詰めだった。これ以上は入れられないので満席御礼と書いた看板をドアに張り中に入る。どうせなら戸塚の演技を見たいし。

中に入ると劇は既にかなり進んでいて王子様がキツネを誘う場面で俺が好きなシーンだった。

「ぼくと一緒に遊ぼうよ。ぼくは今すごく悲しいんだ・・・」

顔を俯かせ寂しげに言う戸塚、凄いい良い。グツとくる。ちなみに海老名さんが書いたシナリオ第一稿では「やらないか？」になっていた。あの女は何を考えているんだ？

にしても戸塚は可愛いな。マジで。まあボーダーでは可愛い顔をしてアサルトライフルをガンガン撃っているけど。

そんな事を考えている間にも劇は続いている。

「最初は草の中で、こんなふうにお互いにちよつと離れて座る。俺は君を目の隅で見えるようにして、君の方は何も言わない」

王子様とキツネは対話を重ねる。しかしそれでも別れがくる。最後にキツネは王子様に大切なものは目に見えない、と教える。おそろく星の王子様で最も有名なシーンだ。

ぼくと王子様は砂漠の井戸を探しに行くのだ。

「砂漠が綺麗なのは何処に井戸を隠しているからだよ」

戸塚の言ったセリフに観客から嘆息がもれた。

やがて会話を重ね、時間を重ね、心も重ねた2人にも別れがやってくる。ちなみに海老名さんのシナリオだとさらに唇と身体も重ねた事になっている。何が全年齢だよ、明らかにアウトだろ。身体を重ねるって……

蛇に噛まれ、倒れる王子様、戸塚の演技に観客が息を呑む。舞台が暗転して葉山にスポットライトがあたりぼくのモノローグでラストシーンが締めくくる。

客席からは万雷の拍手が鳴り響いた。

公演が何回か終わりもうすぐ12時だ。劇を見る度に戸塚に癒された。流石俺の中の3大天使の一角だけの事はあるな。

さて、そろそろ腹が減ったな。昼食を買いに行くか。そう思いながら歩き出した。

「あ、ちよつとヒッキーー」

何か後ろの方から呼ばれた。

「何の用だ由比ヶ浜」

どうせまた雪ノ下を助ける云々だろ？はつきり言ってやる気はないんだが。

「あ、……えーつと今暇？」

「悪いが暇じゃない。いきなり何だよ？」

飯を食いに行くって仕事がある。

「やー、その、良かったら文化祭一緒に回りたくないな、みたいな」

は？いや無理だから。双葉にバレたら殺されるし。

つてもこいつはただ面倒だって言ってもしつこいからな。雪ノ下の例があるし。

……ん？待てよ。

「悪いが無理だ。実行委員でどうしても外せない重要な仕事がある」

「え？そ、そうなの？ちなみにその仕事って何？」

「明日のエンディングセレモニーについて少しな」

嘘は吐いていない。マジでやらなきゃいけない事がある。昼飯は会議室で食べるか。

「そ、そっか……じゃあ仕方ないね」

「そういう訳だ。悪いが急いでいるからまたな」

そう言つて俺は歩き出した。

昼飯を三上や奈良坂のクラスがやっている模擬店で焼きそばとお好み焼きをテイクアウトして会議室に向かった。

会議室に入ると知った顔がいた。

「あれ？比企谷君？どうしたの？」

そこには綾辻が飯を食いながらパソコンを見ていた。

「いやちよつとやる事があってな。それとお前に頼みがあるんだが」

「何？言って」

「優秀賞と地域賞の集計についてなんだが、俺が集計を担当する時間は明日の12時なんだよ。悪いんだけどさ、それを最後の方にしてくれないか？」

集計は会議室に詰めている人間が随時入れ代わり立ち代わりでやる。俺の担当は明日の12時だが出来るなら避けたい。

「別にいいけど、どうして？」

「いや、明日は双葉とデートだから途中で仕事をしたくない。だから俺が集計するのはエンディングセレモニー直前、双葉が観客席に行つてからにしたい」

まあ他にも理由はあるけど、1番の理由は双葉とのデートを邪魔されたくないからだ。

「ふーん。ラブラブだね」

綾辻はニコニコしながらそう言ってくる。その顔は恥ずかしくなるから止めてくれよ。

「まあそうかもな。それより時間は変えられるのか？」

「わかった。じゃあ比企谷君の本来の担当時間は私がやるよ」

「すまん。恩にきる」

そう言つて俺はパソコンを起動して、最悪の事態を回避する為に保険を仕込み始めた。

(総評については、基本的な事を打ち込んで後は新しく導入した地域賞について書いておけば問題ないな。んで締め挨拶は毎回同じようなモノだからそれを真似れば大丈夫だな)

そんな事を考えながらキーボードを打ち込み始める。

30分程して仕込みは終わった。これで最悪の事態の回避は7割

方出来た。残りの3割は明日しか仕込めないからな。

「じゃあ綾辻。俺は行く」

「うん。またね」

挨拶を交わして会議室を出た。

会議室を出て歩いていると正面から雪ノ下が歩いてきた。雪ノ下は俺を見ると苦い顔をして見てくる。俺何かしたか？まあどうでもいいか。そう判断して通り過ぎようとした時だった。

「……城廻先輩から聞いたのだけど貴方がルーム長を招集する案を出したそうね」

何かいきなり話しかけてきたよ？しかも何だその顔は？

「そうだが何か？」

「……何を企んでいるの？」

「んだよいきなり？」

「……貴方がそういう事をする人間じゃないからよ」

随分言ってくるなおい。否定はしないが喧嘩を売るとはいい度胸だな。

「別に。お前の間違ったやり方で文化祭を中止にされちゃたまらないからな。……それともアレか？お前のやり方を黙認して文化祭が潰れるのを見た方が良かったか？」

「……っ！」

皮肉を返すと苦い顔をしながら俯く。どうやら自分のやり方が間違っている事を理解したようだな。

「ま、これに懲りたらあんなふざけた依頼は受けない方がいいぜ」

「何故貴方が知っているのかしら？」

「ん？由比ヶ浜に聞いた。……で、話は終わりか」

そう返すと返答はしないで睨んでくる。どうやら話は終わりみただ。

「じゃ俺はこれで。頑張れよ」

何せお前は文化祭が終わった後も難しい仕事があるしな。まあ相模の依頼を受けた雪ノ下をが悪いんだし同情はしないけど。

そんな事を考えながら廊下を歩く。さて、ブラブラするか。

こうして1日目は無事終了した。

比企谷八幡は最愛の恋人と文化祭を楽しみ、愛の絆を更に深める

文化祭は2日目を迎えた。2日目は一般公開日で外部から客が来てかなり賑わっている。

現在、午後12時半。双葉は防衛任務が12時までであるのでデートをする時間は4時間くらいだ。

今日俺は記録雑務の仕事としてやる事は写真撮影だ。色々周りながら撮る。ちなみに氷見は昨日の撮影担当だったので今日は気兼ねなく烏丸と過ごせるので良かったと思う。

校門で待つ事10分…

「お待たせしました。八幡先輩」

俺の恋人がやって来た。相変わらず可愛いな。……え？ロリコン？だからどうした。

「よう、双葉。それじゃあ行こうぜ」

「はい」

そう言つて双葉に手を差し出すと双葉は笑いながら手を繋いできた。

双葉の手の柔らかさを感じながら歩き出した。

「じゃあ先ずは昼飯でも食べようぜ」

「はい」

そう言つて俺達が向かったのは2ーAの綾辻、宇佐美、氷見のクラ
スだった。

「いらつしやいま……つて、ハツチ君と双葉ちゃんじゃないか」

入つて直ぐに宇佐美が目を光らせてこつちに来た。

「よう宇佐美」

俺が軽く手を上げ、双葉はぺこりと頭を下げる。

「来てくれたんだ。さあさあ、入つて入つて」

俺と双葉は背中を押され椅子に座る。

「はい。これメニュー表。決まったら呼んで」

「あいよ。あ、後この店、写真を撮つてもいいか？」

「実行委員の仕事でしょ？いいよ」

そう言つて宇佐美は接客に戻つて行つた。俺はそれを見送つた後
に店内の写真を何枚か撮り始めた。まあ5、6枚撮れば問題ないだろ
う。

「八幡先輩はどれにしますか？」

「俺はこのローストビーフサンドイッチとココアだな。双葉は？」

「私は卵サンドイッチと牛乳にします」

「じゃあ頼むか。宇佐美。ローストビーフサンドイッチと卵サンド
イッチとココアと牛乳を一つずつで」

「あいあいさー」

そう言つてから5分して宇佐美は料理を運んできてくれた。

うん、実に美味そうだな。

「いただきます」

挨拶をして食べる。うん、予想通り美味しいな。

「八幡先輩、ローストビーフサンドイッチを一つくれませんか？」

「別に構わないぞ。ほれ、あーん」

「んっ……あーん」

そう言っただけで双葉に差し出す。双葉は小さい口を開けてサンドイッチを口に入れる。モゴモゴしているのを見ると小動物みたいで可愛いな。

「……美味しいです。八幡先輩も私のを食べますか？」

「じゃあくれ」

卵サンドイッチも中々美味そうだな。

「はい。……じゃあ、あーん」

そう言っただけで双葉はサンドイッチを差し出してくるので口に入れる。おお卵とソースの味付けがマッチしていて最高だな。

「あ、八幡先輩。頬にソース付いてますよ」

そう言っただけで双葉は自分の顔を俺の顔に近づけ、

ペロッ

いきなり俺の頬を舐めた。

「!?……お前……急にやるなよ」

恥ずかしいから……。

「……でしたら今からすると言ったら良かったですか？」

何っ—質問をしてくるんだコラ。んなもん答えられねーよ。

「あー、いや。そのだな……」

口をモゴモゴしている時だった。

「クスッ……」

前を見ると双葉が笑っていた。こいつ……

「お前なあ……人をからかうとはいい趣味してるな」

「ふふっ……ごめんなさい。でも可愛かったですよ」

双葉は軽く微笑みながら謝る。悪いと思っただろ……。

呆れる中、食事が再会された。

「ごちそうさまでした」

食事を済ませたのでレジに行く。

「宇佐美、幾らだ？」

「ちようど1000円だね」

「ほらよ」

「まいどありー」

会計を済ませて外に出る。

するとそこに知った顔がいた。

「あ、比企谷先輩に黒江。どうもっす」

そこにはもさもさしたイケメン、烏丸京介がいた。その横では氷見が頬を染めながらこっちを見てきた。

「烏丸先輩こんにちは」

「よう。烏丸。お前もこの店に来たのか？」

「はい。せっかく氷見先輩に誘われたんで先輩の店で昼食をとろうかと」

「そうか。……せっかくだし写真を撮ってやるよ」

そう言うのと氷見は更に頬を赤くしながらこちらを見てくる。恋のキューピッドになるつもりはないが、この程度なら協力してもいいだろう。

「何すかいきなり?」

「いや俺実行委員だから写真を撮る仕事があるから。それに折角来たんだし記念写真ぐらい撮っとけよ」

「まあいいですけど」

「う、うん。じゃあ比企谷君、お願いしてもいいかな?」

「はいよ。んじゃ並んでくれ……あ、もうちよっと近くに。割と狭いから俺後ろに行けないしな」

「……んじゃ、こうすか?」

鳥丸は氷見の真横に立つ。氷見顔が真っ赤だな。どんだけドキドキしてんだ?

まあいい。撮るか。そう思いシャッターを切ろうとした時だった。

「折角の記念写真ですから腕を組んだらいかがですか?」

双葉がとんでもない事を提案してきた。

「ふ、双葉ちゃん……」

もう止めてやれよ。氷見のライフはゼロだぞ!!

「まあ記録で撮った写真は今後も使うからな。どうせなら絵になった方がいいし腕を組んでくれ」

まあ俺も狂戦士の魂を発動して氷見のライフを削るけどな。

「俺は構いませんけど……氷見先輩は大丈夫すか?」

「あ、はい」

ライフを削り過ぎたか？氷見の奴烏丸に敬語を使ってるし早く撮った方がいいな。

「んじゃ……失礼します」

そう言うのと烏丸は氷見の手を取り腕を組んだ。ヤバい、氷見の奴顔が茹で蛸みたいに真っ赤になってやがる。つーか烏丸よ。あの顔を見たら普通気付くぞ。木虎の時といい、お前は鈍感だな。

……とりあえず急ぐか。

「はいチーズ」

パシヤリ

そう言って写真を撮る。デジカメじゃないからちゃんと撮れたかわからないのもう一枚。

パシヤリ

「……よし。いいぞ。時間を取らせたな」

「いえ。じゃあ失礼します。氷見先輩、行きましょう」

「……はい」

烏丸は真っ赤になった氷見を連れて宇佐美がいる店に入って行った。ちゃんと楽しめていて何よりだ。

「良かったですね氷見先輩」

「そうだな。俺達も行くぞ」

「はい」

そう言って腕を組んで歩き出した。

宇佐美のクラスを出て俺達は3年の教室に向かっている。双葉が犬飼先輩のクラスの出し物を行きたいと言っていたのでそれに行く事になった。

ちなみに行く途中に氷見から『後である写真ちょうだい』とメールが来た。あの写真ボードーの烏丸ファンクラブが見たら戦争が起こ

りそうで怖いな。

そんな事を考えながら目的のクラスに行くと思壁には洞窟っぽい装飾が施され、トロッコと書かれた看板がある。中からはきやーきやーという悲鳴とガタガタと激しい音が聞こえる。

あれ？確かこのクラスのコンセプトは「ゆっくりと進むトロッコで、内部の装飾、ジオラマを見せる」だった気がするんだが。まあ面白そうだな。今は空いてるしチャンスだろう。

そんな事を考えながら入り口へ向かうと3年の男子の顔色が変わった。

「おい！実行委員だぞ！」「ヤバいぞ！どうする?!」「とりあえず放り込め！」

いきなり男子3人に捕まりトロッコに押し込まれそうになる。は?!いきなり何だよ!?

「は、八幡先輩?!」

双葉も慌てて俺に付いてきた。いやいや、付いてくるより助けてくれ!!まあ一緒に来てくれるのは嬉しいけど!

そんなこんなで俺と双葉はトロッコに乗った。教室の中を見るとLEDで光る鉱石、発泡スチロールで作った岩石とかなり本格的だな。

トロッコは狭く双葉とは密着している。凄い良い匂いがするしマジで俺の理性が崩れてお前の事襲いそうなんですけど!

「えー、本日はトロッコロッコにご乗車いただきましてありがとうございます。それでは神秘の地下世界を存分にお楽しみください」

案内が終わると同時に体格のいい男子学生がトロッコは押し始め、机や長机、木板にトタン、鉄板を組み合わせて作られたコースを走っていく。

怖いよ、人の手が動かしているから不安感が半端ないな、おい。不意に服に引っかかりが覚えたので横を見ると双葉が裾を掴んでいる。そしてガタガタごとごと激しく揺れてようやくゴールに着いた。

「いかがでしたか、地底の旅は？」

そう締めくくられて俺と双葉は外に出る。

「どうよ！うちのアトラクションは?!」

代表らしき先輩が誇らしげに言う。

「すみません？パンフレットの内容と違うような…」

「ちよつとだけね！フレキシブルな現場判断でね！」

まあ変更したなら申請してもらわないと困る。後で実行委員に文句来たら面倒だし。

「とりあえずこのままで構いませんので申請書類の提出はしてください。後利用者には変更した事と変更内容は必ず説明してください」

「……まあそれくらいなら」

「よろしくお願いします。行くぞ双葉」

「は、はい」

先輩も納得したので俺と双葉は次の場所に歩き出した。

「ここ、気持ちいい風がありますね」

「だろ？俺が気に入ってる場所なんだ？」

あれから2時間経ち、午後3時になったので俺と双葉はおやつとしてクレープを買った。食べる場所は俺がいつも食っているベストプレイスだ。元々人が少ない場所だが文化祭もあつて人が全くいない。恋人とおやつを食べる場所としてはうってつけだろう。

しかも俺のやるべき集計の仕事も終わったし、後はベストプレイスで集合時間ギリギリまでクレープ食べればいいだけだ。

「じゃあ……いただきます」

「おう。いただきます」

そう言つてパクリと食べる。うん、生クリームがあつて凄く甘い。チョコレートもふんだんに使つていて凄く美味しいな。

「おいしいですね」

「ああ」

俺達は笑いながらクレープを食べ続けた。

「ごちそうさまでした」

クレープを食べ終わり挨拶をする。

「双葉、今日は楽しかったか?」

「え?は、はい。何ですかいきなり?」

「いや、その、何だ。この前お前を怒らせたからな。出来るだけ楽しんで欲しかったんだよ」

俺がそう言うと双葉は申し訳なさそうな顔で見ってくる。

「……その事なんですけど、私も八幡先輩に謝りたいです。あれだけの事で怒つて八幡先輩に強く当たるのは違うつて加古さんに叱られたんですよ」

加古さんに怒られたのかよ?これは予想外だ。そう思っている中双葉は話し続ける。

「ですからその……私も強く怒り過ぎました。その……八幡先輩も男ですから可愛い女の子にデレデレするのは仕方ないと思います。でも……せめて、私の前ではしないでくれると嬉しいです」

「……そうだな。それについては俺が悪かった」

恋人の前で他の女子にデレデレするのは間違っている。それについては間違いなく俺が悪い。

「いいえ。私はもう怒ってません。寧ろ、その八幡先輩は私の事を器の小さい女って怒ってませんか？」

双葉は不安そうな表情でこちらを見てくる。止めろ。お前のそんな顔は見たくない。

そう思うと同時に俺は双葉を抱き寄せた。

「……は、八幡先輩?!」

「そんな事ない。そんな理由で俺はお前に怒ったりはしない。だから悲しそうな顔は止めてくれ。俺はお前のそんな顔は見たくない」

「……八幡先輩」

双葉も俺の事を抱き返してくる。

「もしかしたらまたつまらない嫉妬をするかもしれませんが。それでも私の事を嫌いにならないでくれますか?」

「ならねーよ。寧ろ俺が双葉に嫌われないか不安だからな」

「……私が八幡先輩を嫌いになる事は絶対にありませんよ」

そう言っただけで双葉は俺に顔を近づけていきなり唇を重ねてきた。俺が驚いている中双葉は更に俺の唇を求めてくる。

暫くの間キスをされ続けて双葉は唇を離し俺を見てくる。

「初めて八幡先輩とキスした時の事を忘れましたか? 私は一生八幡先輩を愛するって言ったじゃないですか。ですから私が八幡先輩を嫌いになる事は絶対にありません」

そう言っただけで双葉は更に強く抱きしめてくる。そうだよな。そんな事で俺達が嫌い合う訳ないよな。

「双葉。俺もお前を一生愛するって言ったよな? だからお互いに嫌われるかもしれないって心配はする必要ないんだよ」

「……八幡先輩」

そう言っただけで双葉は目を瞑りもう一度俺に顔を近づけてくるので俺も顔を近づける。

そして……

ちゅっ……

再びお互いの唇が合わさった。
今、お互いにキスし合って確信した。

「んっ……ちゅっ……八幡先輩……大好き」

「……俺もだ双葉。ずっと一緒だ」

「俺と双葉が別れる事は絶対にありえないという事を

双葉と長い間、濃厚なキスをして俺達は唇を離すとお互いに自然と
笑みがこぼれてきた。

「……じゃあ双葉。そろそろ行こうぜ」

現在3時30分。実行委員は3時45分に体育館に集合だ。残りの時間は体育館で有志の出し物でも見るか。

「……はっ」

双葉が笑いながら腕に抱きついてくる。双葉との絆を再認識したのか双葉がさつきより可愛く見えるな。

俺は笑みを浮かべながらベストプレイスを後にした。

歩くに連れて体育館から音楽が聞こえてきた。BGMとしては中々良いな。

幸せな気分で体育館に向かっていている途中だった。

曲がり角から見覚えのある女子生徒が苦い顔をしながら走ってきて俺達の横を通り過ぎて言った。

(……あれ？今のって……)

俺はさつきの女子生徒を誰だか突き止めた。そして頭に疑問符が浮かんだ。

あいつは何処に行こうとしてるんだ？普通は体育館に行くだろう

?忘れ物か?

いや、それだけであんなに焦る必要はない。エンディングセレモニーまでまだ時間があるしな。

そう判断すると頭に答えが浮かんだ。

(……あの野郎。まさかな……)

俺は嫌な予感がしたので双葉に話しかける。

「すまない双葉。実行委員で嫌な予感がするから一緒に有志の出し物を見る事が出来ないんだがいいか?」

「え?は、はい。わかりました。頑張ってください」

双葉は俺の顔から何を思ったのか簡単に許してくれた。

「すまん。またな」

そう言っただけ俺はある場所に走り出した。

走る事2分、俺は目的の場所に着いた。そして大急ぎで必要な物を用意した。

集合時間まで後3分か。まあ間に合うから問題ないな。

(まさか本当に印刷するとは思わなかったな。正に備えあれば憂いなしってやつか)

そんな事を考えながら俺は扉を閉めて体育館へ走り出した。

比企谷八幡はやる気のない状態で相模南を探しにくい

エンディングセレモニー直前の有志団体ステージ、大トリを務めるのは葉山グループのバンドだ。その裏に着くとごった返していた。

葉山以外のメンバーは緊張しているようだ。その周りでは由比ヶ浜と海老名さんがグループのサポートをしていた。

そんな中ぶらぶらしていると氷見がいた。

「よう氷見お疲れ」

俺が氷見に話しかけると氷見は頬を染めて睨んでくる。

「……比企谷君。さつきは酷いよ」

大方悪ノリして烏丸と腕を組ませた事だろうな。

「悪かった悪かった。でもお前も嬉しかっただろ?」

「……それはそうだけど。……後で写真お願いね」

そんなことを話しながら必要なインカムを準備していると雪ノ下があつちこつち動いている。

「お前、さつきからどうした?」

尋ねると雪ノ下はこちらを向き、

「ねえ、相模さんは?」

と聞いてくる。

「あ?相模?さつき見たぞ」

「つ……!何処で?」

「昇降口の近くで。つても20分くらい前だから参考にならないぞ。まだ来てないのか?」

「ええ」

予想通りかよ。あのカス逃げやがったな。マジで保険を準備して

おいてよかった。

そんな中会長がやってきて雪ノ下と話している。

「エンディングセレモニーの最終打ち合わせをしたかったのだけど」

「ちよつとかけてみるね」

会長が電話をするがしばらくすると難しい顔をしている。

「出ないね」

会長はその後色々な人に連絡をしたが昼過ぎまでの消息しか辿れなかった。まあ間に合わなくても問題ないけどな。

「雪ノ下、相模は来たか？」

平塚先生も来て尋ねるが雪ノ下は首を横に振る。

「参ったわね、このままだとエンディングセレモニーが出来ない」

「さがみん居ないとマズイの？」

「ええ、挨拶、総評、賞の発表。これが相模さんの役割なのよ」

それらは代々実行委員長の仕事であるのでやるのは相模しかいない。このままだとい幕切れとはいえない。本当にカスだな。マジで綾辻が実行委員長になった方が良かっただろ？

「うわ、あいつ逃げやがったな」

「サイテー。どこまで足を引っ張ったら気が済むのかしら？」

実行委員も相模に文句を言っている。それを見た平塚先生や由比ヶ浜は苦い顔をしているがあのカスの自業自得だから何も言わない。

「……最悪、代役を」

実行委員長がいないなら生徒会長か副実行委員長がやるのが妥当だ。しかし雪ノ下はその案を却下する。

「それは厳しいわ。優秀賞と地域賞の結果を知ってるのは相模さんだ

け」

「じゃあゆきのん。発表は後日つてのは？」

「最悪の場合はね。でも地域賞はここで発表しないと余り意味はないでしょう」

地域との繋がりをアピールした文化祭だ。地域賞という新たな賞を創設した第1回から後日発表は様にならない。

そろそろ教えるか。

「問題ない。締め挨拶、総評、投票結果。全て俺が準備してある」

俺がそう言うところの場にいる全員が俺を見てくる。

俺は視線を感じながら会長に紙を差し出す。

「どうぞ。ここに相模がやるべき仕事は全て記されていますから代役を使えばエンディングセレモニーは支障なく行えますよ」

「……どういう事？何故貴方が？」

雪ノ下が驚きながら聞いてくる。

「保険として準備してたんだよ。んで投票結果は集合直前に集計し直したんだよ」

「……比企谷、それはつまり初めからこうなる可能性があると思って

いたのか？」

平塚先生が睨みながら言ってくる。

「はい。相模の実行委員会での怠慢ぶりを見れば支障が出る可能性は充分にあり得ると判断しましたので」

「それはつまり、相模を信用してなかったと？」

「はい。相模を信じられる要素はありませんので」

「ヒツキー言い過ぎだよー！」

由比ヶ浜がキレてくるが何でキレルんだ？

「じゃあ聞くが実行委員会の様子を見て相模がちゃんと仕事をするって思えるか？」

「そ、それは……」

そう言つて由比ヶ浜は黙る。あの状況を一度でも見たら相模を信じるなんて無理だしな。

まあ今は相模はどうでもいいな。俺は由比ヶ浜をこれ以上相手をしてしないで会長に話しかける。

「とりあえず確かに渡しました。それを使って代役を使うか今から相模を探しに行くか、どっちにするかは任せます」

俺個人としては相模を連れ戻すより代役の方が確実性があるから代役の方がいいと思うが下っ端には決定権がないしな。

会長はオロオロしながら周りを見る。

「えーっと、皆はどうかな？」

会長、その質問はダメでしょ……

俺が突っ込もうとするが一足遅かった。

「投票結果があるならわざわざ呼びもどさなくていいですよ」

「そうそう。その後にあいつが責められても自業自得ですし」

「同感ですね。もしもヒキタニが仕込んでなかったら台無しになってたんだし、台無しにしようとした奴に手間かける必要はないと思います」

「それにもしかしたら家に帰ってるかもしれないし」

それはもう一斉に反対が来た。俺でもドン引きする程だ。やはり人間の悪意は恐ろしいな。

「君達、止めたまえ」

「そ、そうだよ！少し言い過ぎだよ！」

平塚先生と由比ヶ浜は止めようとしているが全く効果がない。まるでノーマルタイプのポケモンがゴーストタイプのポケモンに攻撃しているようだ。しかも2人はみやぶるを使えないから絶対に止められない。

「ゆ、雪ノ下さん。どうしよう」

会長は困った様に雪ノ下に話しかける。雪ノ下は顎に手を当てて考え出す。やがて、口を開ける。

「……方針を発表します。一先ず相模さんを探します。もしもエンディングセレモニーまでに見つけられなかった場合、代役を使います」

まあ妥当だな。しかしまだ問題がある。

「でもゆきのん。もう殆ど時間がないよ」

「そうね」

雪ノ下は唇を噛み締める。

「どうかした？」

不穏な空気を感じたのか葉山が問いかけてくる。

「あ、相模さんが連絡つかなくて」

会長が説明すると葉山は直ぐに動く。

「副委員長、もう一曲追加でやらせてくれないか？」

「そんなこと出来るの？」

「ああ、優美子、もう一曲弾きながら歌える」

「え？マジで？いやいや無理だから！」

「頼むよ」

「ううっ」

悩む三浦の前に雪ノ下が立つ。

「恥を忍んで頼めるとありがたいのだけれど」

諦めたように溜息を吐き雪ノ下を睨む。

「別にあんたの為じゃないから。ほら戸部、大岡、大和、スタンバるよ」

すると3人は文句を言いながらも準備をする。葉山は携帯を取り出し操作している。大方メールやフェイスブックを使っているのだろう。

「感謝するわ」

「気にしないでくれ。俺も今日はいいところを見せたいからね。それより稼げる時間はおよそ10分だ」

稼げる時間はおよそ10分か。電話にも放送にも応じないって事は逃げる気満々だな。身を隠すつもりでいる人間を短時間で捜すのは無理だ。

「私捜してくるよ」

「闇雲に捜しても無理だろ」

既に生徒会役員は動いてるが見つかってない。今から由比ヶ浜1人が行っても無理だろう。

「……なら、更に時間を稼ぐ必要があるわね」

そして、雪ノ下は携帯を取り出し電話をかける。

「姉さん？今直ぐ舞台袖にきて」

雪ノ下が電話をしてから直ぐに電話の相手が現れた。

「はーい、雪乃ちゃん。なんか用？」

余裕に溢れた笑顔の雪ノ下陽乃が現れた。雪ノ下は単刀直入に用件を話す。

「姉さん、手伝って」

すると陽乃さんの瞳の色が変わって冷たい眼差しで雪ノ下を見下ろしている。

「へえ、いいよ。雪乃ちゃんが私にお願いするなんて初めてだし、」

「お願い？勘違いしてもらっては困るわ。これは実行委員長としての命令よ。指揮系統上、この場では私の方が上の立場である事を認識なさい」

随分上から目線だな。人に頼む態度じゃねーよ。当の陽乃さんはクスクスと笑っている。

「で、その義務に反した場合のペナルティーはあるの？別に強制力なんてないでしょう？出場取り消しなんてもう関係ないし。どうする？先生に言いつけちゃう？」

姉は現実論、妹は理想論、明らかに噛み合わない。こりや妹が不利か？

「ペナルティーはないわ。けどメリットはある」

「へえ、どんな？」

「この私に貸しを一つ作れる。これをどう捉えるかは姉さん次第よ」

いやぶつちやけ雪ノ下に貸しを作っても大してメリットはないよ
うな気がするんだが。

「ふうん、で、どうするつもりなの？」

「場を繋ぐわ。私と姉さん。あと2人いればなんとか。出来ればもう1人」

そんなことを呟きながら楽器を見ている。それだけで何をしようか分かった。

「はあん、楽しい事考えちゃうね。で、曲は？」

「昔、姉さんが文化祭でやった曲、今も出来る？」

「誰にもを言ってるのかな？雪乃ちゃんこそできるの？」

「私は、姉さんが今までやってきたことなら大抵のことは出来るのよ」

「そう。じゃああと1人いれば大丈夫な訳だ。……静ちゃん」

「仕方ない。私がベースをやろう。陽乃とやった曲ならまだ弾けるだろう」

「じゃあめぐり、サポートでキーボード、行けるね？」

「はい、まかせてください！」

「で、後はヴォーカルだけかな？」

陽乃さんがそう言うのと雪ノ下はそつと口を開けた。

「由比ヶ浜さん、あなたを頼らせてもらっていいかしら？」

「あ、えっと、その自信ないっていうか、逆に迷惑かけちゃうかもなんだけど」

一つ区切ってから

「そう言ってもらえるのずっと待ってたよ」

「ありがとう」

「うん、でも私歌詞とかうる覚えだからね！」

「正しくはうる覚えよ。今ので少し不安になってきたわ」

「ゆきのんちよつと酷いよ！」

「冗談よ、危ないと思ったら私も歌うから」

「うんっ！」

そんな光景を見てみると雪ノ下が俺を見てくる。

「比企谷君、あなたは相模さんを探しに行きなさい」

何でこいつはこんなに偉そうなんだ？こうなった元凶は相模だがお前にも非がある事をわかってないのか？本当にムカつくな。

「別に構わないが2つ質問に答えろ」

「質問？何かしら？」

「んじや1つ目、この場面で相模ここに連れてくるのに連れてこなきやいけない人物は誰だ？」

俺は雪ノ下に問いかける。すると雪ノ下は苦い顔をして話す。

「……私よ」

「正解。個人として相模南実行委員長の補佐の依頼を受けたお前が呼びに行くのが筋だな。んじや2つ目、何で1番行くべき人間が探しに行かないでそんな偉そうに命令してるんだ？」

「そ、それは……」

「ま、いいけど」

俺があつさりそう言うのと苦い顔をして俯いていた雪ノ下は顔を上げてくる。

「ただ1つ言っとくぞ。お前のそれは立派な逃げだ。それが分かったら今後は他人に迷惑をかけるなよ。元はと言えば副実行委員長の前があのかスの暴走を止めなかったのが悪いんだしな」

「……っ！」

「ヒッキー!!」

「比企谷！言い過ぎだ！」

「事実でしょう。はつきり言って雪ノ下は自分のやり方が間違っているという事実から逃げている。その所為で真面目な実行委員は迷惑がかかったんですから」

そう言って俺はステージ裏から外に出ようと歩き出した。

「まあ、副実行委員長の命令ですから相模は探しに行きますよ。それが下つ端の仕事ですから」

そう言って俺は外に出た。つてもやる気は余りないけどな。

俺はため息を吐いて歩き出した。

こうして文化祭は幕を閉じる

俺は体育館を出て校舎に入る。

もうすぐエンディングセレモニーなので殆ど人がいないから生徒がいたら遠目にも目立つ。しかしだからと言って色々な場所に行くのはできない。だから選択肢を絞る必要がある。考えろ。

恐らく相模は1人でいる。あれだけ実行委員で居場所を失ったんだ。誰かと一緒に居るとは考えにくい。

とりあえず下駄箱に行つて靴があるか調べるか

もし靴がなかったら校外にいることになってお手上げだ。まあそれはそれで構わないけど。

下駄箱に着き相模と書かれた場所を開けてみると靴があつた。ハズレか。

となると何処だ？俺のベストプレイスは靴を履く必要があるから違うし。俺はベストプレイス以外ではいつも教室で過ごしてるから分らん。こうなつたらあの男に聞くか。

携帯を取り出し電話をかけると

『我だ』

ノーコールノータイムで出たな、材木座。伊達にやる事なくて携帯弄ってる事はある。

「材木座、お前普段学校で1人でいる時何処にいる?」

『なんだ藪からステイックに。ぼほん、我は常にサスペンドモードを』
「早く答えろ急いでる」

『本気なのだな?』

「ちっ、もう切るぞ」

『待て待て待て待て待てお願い!保健室かベランダだ!図書館の場合も多い!あとは特別棟の屋上だな』

保健室には養護教諭が、ベランダは全クラスが使っているから違う。図書館は鍵がかかっているから入れない。

『他に人気のない所だと、部練等や新館だな。誰かを捜しているのか?』

「ああ、実行委員長を捜している。あの野郎逃げやがった」

『実行委員長?放っておいてよいのでは?以前八幡から聞いた話と照らし合わせると彼女の自業自得と思うが?どうせ貴様の事だから対策を取ってあるのだろうか?』

それについては同感だ。

「そうしたいのは山々だが、あのカス1人の所為で皆に迷惑つてもアレだろ?」

まあ最悪格好がつかなくてもいいけどな。

『……ふむ、どうやら我の力が必要なようだな』

「手伝ってくれるのか?」

『是非もない。何処を捜せばいい?』

「部室棟あたりを頼む。見つけたら俺の携帯に自分の居場所をメールしろ」

『心得た。我も全力を尽くすぞ』

「サンキュー、愛してるぜ材木座!」

『言う相手が違うぞ馬鹿者!!そのセリフは黒江殿だけに言うべきであらう!』

「それもそうだな。悪かった。じゃあな」

そう言って電話を切る。確かに愛してるは双葉と小町以外には言っではいけないな。

そう思いながら俺は走り出した。

まずは1番近い新館から探すか。

新館に着き、俺は気がなさそうなラウンジや廊下の隅、誰もいない教室に顔を覗かせる。

しかし相模は見つからなかった。

(こうなると女子トイレとかもあり得るかもな。そうだったらお手あげだな)

新館は全部で4階まであり、俺はまだ2階までしか探していない。

いざ3階へ行こうとすると氷見がいた。

「氷見、居たか?」

「見つかってないよ。今から新館の3階に行くつもり」

「それは俺が行くからお前は女子トイレを探してくれ。俺には出来ないからな」

「あ、うん。わかった」

「助かる。じゃあな」

そう言っで氷見と別れ3階に移動した。

3階に行つて探しても同じ結果だった。もう嫌だ。走り疲れた。何であんなカスが実行委員長になったんだよ？本当傍迷惑な奴だな。ああ、早く終わつて双葉とイチヤイチャしたい。内心愚痴りながら探している時だった。

「ヒキタニ君！」

いきなり呼ばれたので振り向くと葉山が相模の友人2人を連れてこちらに来ていた。どうやら葉山の時間稼ぎは終わったみたいだ。つー事は後は雪ノ下達のバンドだけで時間がない事が良くわかった。「何だよ。まだ見つかつてないぞ。他からも連絡が来てないから多分見つかつてない」

そう返すと3人が苦い顔をして俯く。しかし葉山は直ぐに顔を上げる。

「実は色々聞いて回つたら、1年の子が特別棟の階段を上がつて屋上行くのを見かけたつて言つてたからさ」

ほう、持ち前の人脈を生かしたのか。流石だな。つーか屋上？あそこは鍵がかかつていたような……

まあ今はどうでもいいか。

「で、今から行くのか。俺も行った方がいいか？」

「……いや、居なかつた場合に備えてヒキタニ君は新館の搜索を続けくれ」

まあ妥当な判断だな。人数が多くてもあんまり意味はない。そし

て俺が行った所で役に立たないしな。

「わかった。じゃあな」

俺がそう返すと3人はそのまま特別棟に向けて走って行った。

さて、俺も捜索を続けるか。

あれから5分、結局、新館の3階も4階にも相模は居なかった。

こりや新館は外れのようだ。まあ俺は相模を探せと言われたが連れて来いって言われてないし、俺のおかげで最悪の事態は免れたんだ。そこまで咎められないだろう。

そんな事を考えていると綾辻からメールがきた。内容を見ると『時間切れだから比企谷君の準備した用紙を使うね』って書いてあった。

任務失敗か。まあ今回の任務は失敗しても痛くもかゆくもないから大丈夫だろう。

俺は材木座に『時間切れだ。お前も体育館に行ってくれ』とメールを送信して体育館に向かった。

俺が体育館に入るとエンディングセレモニーはかなり進んでいて、俺の挨拶が雪ノ下によって行われていた。

雪ノ下の挨拶は客観的に見て物凄い堂々としていて立派に見える。生徒らは全員目を奪われていた。雪ノ下の挨拶が終わると絶大な拍手が体育館を覆った。実行委員からすれば不恰好な終わり方だが生徒らからすれば大満足だろう。

エンディングセレモニーが終わり解散となると生徒らは自分の教

室に向かつて歩き出した。そんな中うちのクラスの連中がいる辺りから声が聞こえた。

「何か相模さん逃げたらしくエンディングセレモニーに出なかつたらしいよ〜」

「は？何だそれ？ふざけてるの？」

「ふざけてんじゃないの？何でも実行委員でも皆にサボっていいとか言ったららしいし」

「そうそう、それに便乗して40人近くサボったんだってよ」

「マジか?!よく文化祭開けたな」

「真面目に参加している奴に聞いたらうちのクラスのヒキタニがルーム長集める案を出したり、実行委員長がやるべき仕事を準備しておいたんだってよ」

「ヒキタニって確かボーダーの太刀川隊にいる奴だよな？」

「そうそう。職場見学であの雪ノ下さんをボコボコにした女の子の師匠のヒキタニ」

「ああ、あの阿修羅の師匠ね」

「あの戦い方はまさに鬼神だったしな」

「あ、だべ？ヒキタニ君マジでパないわ〜」

「どうやら実行委員の人達が話しているのを聞いていたのだろう。もう相模が役目を放棄した事が伝播していた。」

「つーか何で俺がルーム長を集める案を出した事が知られてんだよ?!目立ちたくないからこっそりと話したのに!バラしたのは生徒会の誰かだな。まあ悪評じゃないから良しとしよう。」

「それより問題は双葉が阿修羅扱いされてる事だ。確かに職場見学での双葉のキレ方はヤバいと思っただが阿修羅はないだろ?阿修羅は?」

「双葉は天使だ、異論反論は絶対に認めん。阿修羅と言った奴は後でしばく。」

「そう決心している時だった。」

由比ヶ浜が怒った顔でやって来た。

「ヒツキー、何でさがみんを連れ戻せなかったの?!」

……は?何でいきなりキレてんだよ?理解できん。

「理由?俺が探している場所に相模が居なかったからだが?つーか何でキレてんだよ?」

「だつてさがみんなが皆に悪く言われてるんだよ?!このままじゃさがみんなが虐められちゃうよ!」

「違う違う。俺が言ってるのは何故俺だけにキレてんだよって言っているんだよ?」

「……え?」

「だから、何で俺だけにキレてんだよ?俺以外にも相模を見つけられなかったんだぜ?他の実行委員には文句を言わないのか?」

「……そ、それは」

「答えろよ。あそこにいる奴らも探した連中だぞ。怒鳴りに行けよ。……まさかと思うが俺なら何を言っても良いと思ってるのか?」

「ち、違うよ!私は、ただ……」

「大体俺は葉山に新館を探せって言われたんだぞ。俺に文句を言うんだつたら俺に指示した葉山にも文句を言えよ」

そう言うのと由比ヶ浜はアタフタしている。もうダメだ。こいつはつきり言つて俺なら何を言っても良いと思ってるな。

「お前の考えは良くわかった。はつきりと言うぞ。……俺を見下すのはお前の自由だがな、それだったら心の中で思ってくれ」

「ち、違うよ!ヒツキーの事を見下してなんかないよ!」

「見下してるだろ?俺前に言つたよな?ヒツキーって言うの止めろつて?俺を引きこもりと思ってるのか?」

「そ、それは比企谷だからヒツキーって……」

「渾名をつける時は先ず本人の許しを得るのが常識だろうが。俺は以前止めろつて言つたよな?」

もう我慢の限界だ。前からこいつにはキモいキモい言われていた。その程度なら我慢出来るが、勝手に希望を抱いて失敗するとキレる。傍迷惑極まりない。

「それにもう一度聞くぞ。他の人には文句を言わないんだ？」

「そ、それは……ヒツキーだから出来ると思っただから……」

やっぱりこいつ勝手に希望を抱いてやがる。しかもまたヒツキーって言ってるよ。もうはつきり言おう。

「お前の理想を人に押し付けるな。……もういいわかった。お願いだから今後俺に頼み事をしないでくれ。はつきり言っただけだ」

そう言う俺はステージ裏に歩き出す。

後ろから聞こえる嗚咽を無視して。

全てのクラスが退場してからも仕事は残っている。ステージ、舞台裏などの撤収作業が残っている。最後の仕事は相模とその友人2人を除いた全員で当たっていた。

「おう、文集集まれや」

あらかたの仕事を終えると厚木が声を張り上げて実行委員がぞろぞろと固まる。

「ひとまずご苦労さん。最後は格好つかんかったが、俺が見てきた中でもかなりいい文化祭だったわ。この後打ち上げではしゃぎ過ぎて問題起こすんじゃないやねえぞ」

それを聞いて歓声が上がって拍手も起こった。既に実行委員は相模の存在をないように扱っている。まるであいつの自業自得と言っているみたいだ。よく見るとサボっていた連中は苦い顔をしている。まあサボった事は殆ど知られているからな。

そんな事を思っていると雪ノ下が前に出た。

「まだ事後処理が残っているので終わるまでは余り浮かれないように。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした!!」

全員が最後に一礼して解散した。ようやく終わったか。にしてもサボり組がお疲れ様って言ってるって凄いな殺意が目覚めるな。

「あー、やっと終わった」

「これで肩の荷が下ったな」

「全くだぜ。実行委員長とサボり組がサボらなかつたらもつと楽だったのに」

「今日は疲れた。打ち上げでパーッとやるか!」

そんな風に話しながら片付けをしているので俺もそれに続く。その際に真面目組からは「よくやった!」とか言われて肩を叩かれたりしたが、俺が動いたのは自分が双葉とデートをする為と、氷見が烏丸とデートを出来るようにする為に動いたんだ。褒められる必要はないな。

そんな事を考えながら来賓、スポンサーが座っていた椅子を片付けている時だった。生徒会と雪ノ下と平塚先生が歩いてきた。

「よう綾辻。お疲れ」

「あ、うん。お疲れ様。比企谷君が準備してくれたおかげで最悪の事態は免れたよ。相模さんは残念だったけど……」

そう言う綾辻は弱った笑みを浮かべてくる。

「綾辻、お前は悪くない。悪いのは相模と雪ノ下姉妹と平塚先生だ」

俺がそう言うところの場にいる生徒会、雪ノ下、平塚先生、実行委員が全員俺を見てくる。……え? 何で見られるの?

「……ど、どういう事だ?」

生徒会の役員の男子が俺に質問をしてくる。

「だってそうだろ? 相模が悪いのは当然、姉は相模のふざけた発言に賛成して相模を調子付かせた、妹は実行委員長の補佐が仕事なのに姉に邪魔されたからって相模のふざけた発言をスルーして真面目組に

迷惑をかけた。平塚先生は監督でありながらサボり組に注意の1つもしない。この4人の所為で真面目組は苦勞したと思うんだが？」

厚木については運動部の出し物の統括の仕事が忙しかったから仕方ないかもしれない。

しかし平塚先生は生活指導の先生でありながら一切問題に介入しなかった。顧問としての仕事はないし明らかにサボっていたらどろ？」

質問してきた男子も「確かに……」と言って頷く。すると会長が慌てたような顔で俺に詰め寄ってくる。

「ちよ、ちよつと君！はるさんはそんなつもりじゃ……！」

「じゃあ聞きますが会長はあの人の意見は正しいと思っっているんですか？」

そう言うのと会長は黙る。自覚あったのに、俺を責めようとしたのかよ？本当にこの学校って末期だろ？

呆れていると騒めきが聞こえてくる。

「確かに雪ノ下さんのお姉さんがいなかったらサボり組も出なかったよね」

「つーか雪ノ下さんも姉の暴走を止めろよな」

「平塚先生も殆ど来てなかったしね」

何か色々3人は文句を言われているが、本当に3人は何を考えているんだか……特に平塚先生。

さて、俺も作業の続きをするか。そう思いながら椅子の片付けを再開する。

周りは未だに愚痴っているが俺には関係ないな。

色々な人間の悪口が聞こえる中、片付けを終わらせたので俺は体育館から出る。

するとそこにはまだ人が結構いた。それを見送りながら歩いていると正面に雪ノ下さんがいた。

俺と目が合うと冷たい目をしながらこちらに向かってくる。

「…何か用ですか？」

「比企谷君はさあ、実行委員長を連れ戻せたんじゃないの？」

「無理だったのは知ってるでしょう？結果を見れば」

「そうかなあ？あれだけ面倒臭がってたから探してないんじゃないの？」

「探しましたよ。そもそもあなたが余計な事をしなかったらこうはなりませんでしたし」

この人が余計な事を言わなかったら文化祭は問題なく開けたし。

「あなたが何を考えてるか知りませんがはつきり言って害悪ですから俺には関わらないでください」

その瞬間空気が冷たくなる。

「…………随分と言ってくれるね。あんまり調子に乗っていると潰すよ？」

マジか?!今の睨みは二宮さんクラスだぞ?!間違いない、この人は本気で俺を潰す気満々だ。…………さてどうするか？

頭を悩ませている時だった。

「あれ？比企谷先輩じゃないですか？」

いきなり呼ばれたので振り向くと知った顔がいた。

「何でお前がここにいるんだ、唯我？」

そこにはチームメイトの唯我尊が高級そうな服を着ていた。

「僕の家がこの文化祭のスポンサーになっていまして、僕も来賓として出席したんですよ」

「あ？何でまた？お前は総武に通ってないだろ？」

「母が総武高校の卒業生なんですよ。それより比企谷先輩は何で雪ノ下家の人間と居るんですか？」

「好きでいた訳じゃねえよ。っーか知り合い？」

「何度かパーティーで会った事がありますね」

「ふーん、有名なんだ」

「まあ千葉ではそこそこ力がありますね。全国的には大した事ありませんけど」

雪ノ下の家をそこそこ呼ばわりとは…流石コネでうちの隊に入っただけの事はあるな。

俺が感心していると唯我が話しかけてくる。

「ところで、さっき比企谷先輩は好きでいた訳じゃないと言つてましたよね？」

「ん？ああ」

「でしたら何があつたんですか？」

「ああ、それな。お前も以前うちの文化祭の開催が実行委員長の所為で危ないって聞いただろ？」

「はい。出水先輩から聞きましたけど」

「その実行委員長のふざけた案に賛成して調子付かせたのがこの人なんだよ」

「え?!そんな事があつたんですか?!」

「まあな。んで俺がその事について害悪だから止めろって言ったら、調子に乗っていると潰すよって言われたんだよ」

すると唯我は雪ノ下さんを鼻で笑いながら俺に話しかけてくる。

「たかが雪ノ下の家程度が随分大きく出ましたね。どうします?唯我の家の力なら雪ノ下なんて簡単に潰せますよ?」

お前はとんでもない事をさり気なく言うな。正直今ほどお前に恐怖を持った事はないぞ?

「少し落ち着け。実際は潰されてないから事を大事にする気はない。別にこの人が潰れるのは構わないが、雪ノ下の家の部下に悪いだろ?」

「じゃあ潰さなくてもいいのですね?」

だから簡単に潰すとか言うな。まあ唯我クラスの人間なら会社の買取とかは当然の事なのかもしれないが。

「まあもし俺に実害があつた場合は相談に乗っていいか?」

「もちろんです!比企谷先輩には借りがありますから」

「は?借り?」

俺なんかしたっけ?俺が頭を捻っている中唯我は口を開ける。

「比企谷先輩って何だかんだ言って僕がピンチな時は助けてくれるじゃないですか。出水先輩なんてしよっちゅう見捨てますよ」

あー、なるほどな。一応可能な限り助けている。だって見捨てると泣くからな。流石に泣くのは勘弁してもらいたい。

「まあサンキュー。つと、あれお前の親父じゃね?」

唯我の親父は超有名で俺も何回かテレビで見た事があるしな。

「あ、じゃあ僕はこれで。……その前に」

そう言うのと唯我は雪ノ下さんの前に立ちボーダー基地でよく見る、自慢気な表情で話しかける。

「……という訳で、比企谷先輩にちよっかいをかけるなら雪ノ下の家を完膚なきまで叩き潰すので。その事を理解して行動した方がいいですよ」

そう言つて唯我は高らかな笑い声をあげながら父親の所に向かつ

て行った。

……まさかここで唯我に会うとは。まああいつのおかげで安全は保障されたんだ。今度からは少し優しく接しよう。お荷物って呼ぶのは止めて、戦場では可能な限りフオローしよう。

そんな事を考えながら雪ノ下さんを見る。雪ノ下さんはつまらなそうな表情を見せている。

「……という訳で俺を潰したければご自由に」

「……潰さないよ。比企谷君なんかの為に人生を棒に振りたくないからね」

そう言つて雪ノ下さんはつまらなそうな表情のまま去って行った。マジで唯我には感謝だ。

そう思いながら教室に向かって歩き出した。

教室に行くと騒めきがしている。大方打ち上げの話で盛り上がっているのだろう。つたく、少しは静かにしやがれ。

そう思いながら扉を開けると予想は外れた。

中では、ほぼ全員が相模を見ていた。

あー、大体わかった。大方何でエンディングセレモニーに出なかつたか聞いているのだろう。

呆れた顔をしていると全員が俺を見てきた。

「あーもう1人が来たぞー！」

そう言っつて一部の連中が俺の方にやってくる。

「おいヒキタニ！相模はちゃんと仕事をしてたのか?!」

「……は？何だいきなり？」

「相模は普段はちゃんと仕事をしていた、エンディングセレモニーは体調不良で出れなかったって言ってるがどうなんだ?!」

「……は？今何て言っつた？」

「おい、相模は本当にそう言っつたのか？」

怒りのあまり殺気を込めてしまった。さつき俺に聞いてきた男子はビビりながら口を開ける。

「あ、ああ。確かにそう言っつた」

しまった。つい関係ない奴に殺気をぶつけてしまった。まあそれは良い。

俺は相模の前に立ち睨みつける。

「おい、お前随分とふざけた嘘を言っつてくれたな」

殺気を込めて言っつと相模は怯えながら腰を抜かす。

「な、何よーう、うちは皆が喜んでくれたらっつて……」

「それについてはどうでもいい。いや、良くはないけどな」

今はその事について聞きたい訳じゃない。

「お前、ちゃんと仕事をしたっつて言っつたらしいが具体的に何をしたんだよ？」

「そ、それは……」

「何もしてないよな？俺は1回も休まずに参加したからお前が半分以上出席してないのはわかっつてんだよ」

俺がそう言っつと相模は顔を青くしながら俯く。

「にもかかわらず、ちゃんと仕事をした？エンディングセレモニーは体調不良で休んだだど？」

そう言っつて相模に一步近寄ると相模は一步下がる。

「ふざけるなよ、お前今すぐ生徒会と真面目組に土下座しに行け」

怒りのあまり声音を強めてしまう。こいつさつきから本気で人の神経を逆撫でしてばかりだな。他の真面目組も今の聞いたら俺と同じ反応をするぞ多分。

「……う、うちは悪くない!!雪ノ下さんやあんたが悪いのよ!!」

そう言つて相模は教室から出て行つた。雪ノ下はともかく、何で俺が悪い事になつてんだよ?・

「お、おい。結局どうなんだよ?」

近くにいた男子が声をかけてくる。まああんな事を言ってきたら俺も疑われるよな。

そう思いながら俺は鞆の中から書類を取り出して、そいつに投げ渡す。

「それは実行委員会の出席表と議事録だ。それを見れば何があつたかわかる」

以前ルーム長を集める際に仕込んだ書類一式だ。

「その書類が信じられないなら葉山に聞け」

「……俺?」

「そりやそうだろ。お前は良く実行委員会に来てたから俺がちゃんと仕事をしていたのは知ってるだろ?」

「どうなの葉山君?!」

「隼人君は知ってるん?」

皆が一斉に聞いてくる。葉山は苦い顔をして口を開ける。

「あ、ああ。俺が見ている限りヒキタニ君は毎回参加していたな」

葉山がそう言うのと全員が落ち着く。「何だ結局あいつの嘘かよ」「葉山君が言ってるからヒキタニ君は悪くないんじゃない?」とか聞こえてくる。

流石学校トップクラスの人気者が言うと言得力があるな。

感心している間に周りは落ち着き、HRが始まった。

相模なんて初めから居なかつたように扱いはながら。

相模 side

うちは走り続けた。どこを走っているか全くわからない。

何もかもが気にいらぬ。うちが実行委員長で奉仕部とかいうところに依頼してあの雪ノ下さんを副実行委員長にした。そこまではよかつた。

雪ノ下さんはうちが仕切っていた会議に茶々をいれて最後には進行の役まで奪つたり、本来うちが振り分けようとしていた仕事を勝手に振り分けたり、うちが提案した“クラスの出し物を重視する”という提案は実行されたがいつの間にかウチは皆に悪く言われ出した。

エンディングセレモニーの時も私が自信を失つて逃げ出してしまった。うちがいなくなつて、文実が動く。うちがなにもしなくても、文化祭は進行する。うちが消えたつて、誰も……………。

屋上でぼんやりとしていると葉山君や遙、ゆつこが来てくれた。葉山君達は励ましてくれたが、うちは動けなくて泣いてしまった。

泣き止んだ時にはエンディングセレモニーは終わつていた。呆然としながら教室に入ると全員がうちを見てきて問い詰めてきた。

咄嗟の言い訳をした時にもう1人の実行委員のヒキタニが教室に入ってきた。クラスメイトがヒキタニに話しかけるとヒキタニは物凄い殺気を出してきてうちに近寄つてきた。

そして……

『ふざけるなよ、お前今すぐ生徒会と真面目組に土下座しに行け』

ヒキタニがそう言うとかラスのほぼ全員がうちを睨んできた。

なんで!?!こうならないように今まで立ち回ってきたのに!?!

今までクラスの二番目だったけど、三浦に取って代わって一番上に立ってやろうとしたのに!?!そのために文化祭で活躍して、頂点に立つ予定だったのに!!

これも全部うちをちゃんとフォローしなかった雪ノ下さんと皆の前でうちを悪く言ったヒキタニが悪いに決まっている。うちは皆が喜ぶように案を出したというのに!!

そう思っていると、うちは石につまづき転んでしまった。痛いっ!!
足を見るとかなりズキズキして動かすのが少し辛い。

って……ここはどこ?!

周りを見ると一部の家が壊れていたり、瓦礫の山があった。

(ここって、警戒区域?)

随分と走った。総武から警戒区域はかなりあるから、うちは相当走った事になる。

そう思った時だった。

『門発生、門発生 座標誘導誤差7. 69近隣の皆様はご注意ください
い』

そんなアナウンスが警戒区域に流れ出した。
すると目の前に巨大なバケモノが現れた。

(近界民……！)

誰もが知っている存在だ。数年前に突然三門市に現れて街や人、あらゆるモノを蹂躪した存在だ。

うちは慌てて逃げようと走った。しかしさつき転んだ足だと碌に歩けない。そしてまた転んでしまった。

上を見るとバケモノが私を見ていた。

(どうしよう……！逃げなきゃいけないのに！)

怯えているうちを無視してバケモノはうちに頭を近づけてくる。
バケモノはうちを食べるんだ。

そして……

気がつくとうちは見慣れない部屋にいた。周りを見ると機械が大量に埋め込まれた部屋にいた。

(あれ？何があったんだっけ？)

そう思い考え始める。

(……そうだ、確かうちは近界民に食べられて……!)

現状を思い出した。という事はここは近界民の腹の中だろう。近界民の腹の中がこうなっているのは予想外だ。

……でも、どうしてうちが食べられたの？

そう思い思考が回復する。

そうだ！雪ノ下さんがうちをちゃんとフォローしない上、ヒキタニがクラスでうちを責めたからこうなったんだ!!皆に虐められるのが怖くて教室を飛び出したんだっ!

「許さない……!!」

うちは怒りのあまり声に出してしまう。こうなったのも雪ノ下さんとヒキタニが悪いんだ!

「……いつか絶対に殺してやる!雪ノ下にヒキタニ……!!」

うちは機械が大量に埋め込まれた部屋で憎しみを口にしながら続けた。

???
side

俺は今、今回捕まえた玄界の人間を観察している。

『…いつか絶対に殺してやる！雪ノ下にヒキタニ……!!』

画面に映っている少女は呪詛を口にしてている。ここまで人を憎んでいるのは久々に見るな。

「これは……まさか……!」

そんな事を考えていると俺と同伴した部下が驚いた声を上げている。彼女は冷静で優秀な部下だ。そんな彼女が驚いた顔をするのは珍しい。

「どうした？この女に何か異常があったのか？」

俺が問うと彼女はこちらを見てくる。

「はい。彼女の体を調べた所、『炎の蛇』の適合者であると判明しました」

それを聞いて内心驚いた。『炎の蛇』は俺の領の人間では3年以上適合者が出ない為、お蔵入りになっていた黒トリガーだ。

「そうか……わかった。場合によっては玄界に攻め込む際に彼女は使えるかもしれないな」

「大丈夫でしょうか？彼女は玄界に憎しみを持っているのは分かりませんが、信じられるかは判断できません」

「それについてはいくらか策がある。それより玄界の戦力についてどうなっている？」

今は本来の目的の玄界の戦力の調査だ。

「申し訳ありません。玄界の戦力については確実な情報を得られませ

「んでした」

「……わかった。一度本国に引き返す。次に玄界に来る時は大量のラッドを準備しろ」

「了解しました。ハイレイン隊長」

こうして比企谷八幡の後夜祭が行われる

相模が出て行って少しの間騒がしかったが帰りのHRが始まると静かになる。

帰りのHRは形だけの短いモノとなり、直ぐに打ち上げの話となった。俺も一応誘われたが、怠かったから「夜に防衛任務がある」って嘘を吐いて断った。明日は日曜日で休み、月曜日は代休で休みだ。

戸塚にはメールで『疲れたから打ち上げはいかない』と打ってそのまま家に帰宅した。

家に着きたため息を吐く。ようやく肩の荷が下りたぜ。

そう思いながら鍵を開けるとそこには大量の靴があった。誰か遊びに来てるのか？

リビングに入ると

「おつ、比企谷。邪魔してるぞ〜」

出水が手を振ってきた。見ると他には小町、加古さん、双葉、米屋、緑川、材木座がいた。

「……いや、何でいるの？」

「ん？小町ちゃんが誘ってきた」

小町を見るとピースをしていた。あざとい、でも可愛い。

「そうか、太刀川さんと唯我は？」

「太刀川さんは新学期早々レポート提出してないのが忍田さんにバレてしばかれています、唯我はスポンサー同士の食事会だよ」

「留美は？」

「留美ちゃんは防衛任務があるから無理だつて。今日は那須隊と組んでるよ。ところでお兄ちゃんは行かないの？」

「行くわけないだろ。俺は合唱コンクールだろうが卒業式だろうが問答無用で直帰してただろ。今回も同じだ」

「むふう……しかし八幡よ。貴様は実行委員として貢献したのだから？呼ばれてもおかしくないが？」

「中2さんの言う通りだよ。誘われなかったの？」

「めんどいから防衛任務あるって言って逃げてきた」

「逃げてきたってハッチ、お前……」

「それでこそ、ハッチ先輩だね」

「まあ比企谷君が打ち上げではしゃぐ姿は想像出来ないわね」
まあ加古さんの言う通りだ。

「つーか俺の家で打ち上げっぽいがやるなら声をかけろよ」

「えー、でもお兄ちゃん声をかけたら、『いいよ別に、俺は大して働いてないんだから祝われる必要はない』って言って断りそうだし」

小町がそう言うのと全員が頷いてくる。げせぬ。そこまでは言わないと思うが。

呆れている時だった。

「私は頑張って八幡先輩を祝ってあげたいですが……嫌ですか？」

「いや、いやじゃない。双葉に祝ってもらえるなんて光栄だ」

「即答かよ?!ハッチがロリコンに?!」

何か米屋が言ってくる。それがどうした？ロリコンの何が悪い？

「ま、まあ！それはともかく！今日はお兄ちゃんの為に小町と加古さんと双葉ちゃんまで料理を作ったので楽しんでください」
まあ折角だ。楽しみにしよう。

「あ、まだ料理の途中ですから失礼します」

そう言うのと3人はキッチンに行った。さあ、どんな料理を出してくるんだ？

そう思いながらワクワクしている時だった。

「あ、小町ちゃん。私今から炒飯を作りたいからコンロを借りていいかしら?」

その瞬間、時が止まった。

え? マジで? 加古さんが炒飯を作るの?

「はい、今はコンロを使いませんので!」

呆気にとられている中、加古さんはコンロを使い始めた。小町いいいい!! 加古さんに炒飯を作らせるなバカ野郎!!!

「おい、どうすんだよ」

「美味しいのが出てくるのに賭けるしかないだろ」

「俺はまだ死にたくないよお」

出水と米屋と緑川は大量の冷や汗をかきながら打開策を話し合いをはじめた。

俺は耐えられるように無言で精神統一をはじめた。どうか生きられますように……

「……む? 何で4人はそんな悲哀に満ちた顔をしておるのだ?」

ああ、材木座は死んだ事がないのか。

俺達が材木座に加古さんのギャンブル炒飯について説明する。

「はっはっは、八幡よ。そんな虚言に騙される我ではない。あんな麗しき女性がそんな物を作るわけがなかろう」

まあ材木座の発言はよくわかる。俺も太刀川さんから聞いた時は信じられなかったしな。

「じゃあ中2先輩、これ見てよ」

緑川は携帯を材木座に見せてくる。すると材木座の笑い顔がどんどんと無くなっていた。

「……緑川殿、これは何であるか？」

「蜂蜜鯖味噌炒飯だよ。以前諏訪隊の堤さんが食べて死んだよ」

「……………」

材木座は暫く無言で携帯を凝視していると、やがて手をポンと叩く。

「……あ。我、急用を思い出しから帰らせてもらおうぞ」

そう言うのと材木座は立ち上がる。この野郎！

瞬間材木座以外の男4人は一斉に材木座を抑えにかかる。

「離せ貴様ら！我はまだ死にたくない！」

「逃すわけないだろ」

「ハツチの言う通りだ！お前も道連れだ！」

「お前も一度死ね、材木座！」

「1人だけ生き延びるのはダメだよ中2先輩！」

俺達は力づくで材木座を押しえつけた。

「どうしてこうなった……我はまだ死にたくないのに」

「大丈夫だ。加古さんの炒飯は10回に2回外れで8回はメチャクチャ美味しい炒飯だから」

「外れる確率は2割はかなり高いと思うが？」

「まあ否定はしない」

よくば当たりが来ますように……。

俺達が祈っていると小町達が料理を持ってリビングにやって来た。

どれも凄い美味そうだ。これで加古さんの炒飯が美味かったら文句ないんだが……

「できたわよ！」

俺達は加古さんの声を聞き、より一層気を引き締める。もしハズレが来た場合は、気を強く保たないと普通に死ぬ。

加古さんはテーブルに炒飯を置く。

するとそこには卵が美味そうに輝いているとても美味そうな炒飯があった。

「美味そう……だよな？」

俺は小さくつぶやく。

「ああ、美味そうだ」

「幻覚……じゃないよな？」

「…助かったあ」

「うむ……」

どうやら今回は当たりのようだ。良かった、本当に良かった。

そう思っていると料理が並べられたので食事が始まった。

まずは加古さんの炒飯から食べてみるか。

男子組は俺と同じ考えなのか一齐にスプーンを使って炒飯をすくった。

そして炒飯を一口食べる。

……美味しい、美味すぎる

パラパラになり卵とよくマッチしているご飯。良い色に焼けている豚肉、シヤキシヤキしながらもしつかりと味を出しているネギ、それら全てが胃を刺激してくる。

「……美味しい」

「超美味しい」

「美味すぎる」

「美味しい」

「絶品である」

男子5人は一斉にそう呟く。こんな美味しい炒飯を作れるなら新しい炒飯にチャレンジをするのは今後やめて下さいマジで。

「そう？なら良かった」

加古さんは笑顔を向けてくる。しかしこの笑顔は外れを食べた時には凄く恐ろしく感じるんだよなあ。

そう思っている時だった。

いきなり口の中に肉が入った。何だこの肉？味が染み込んでいて噛むと肉汁が溢れてきてクソ美味しい！

考えるのを止めて周りを見ると隣に座っていた双葉がスプーンを俺の口にいられていた。

双葉を見ると笑顔を見せてくる。

「私が作った料理ですけど、どうですか？」

中1の双葉がこんな美味しい飯を作るとはな。

「最高だ。よくこんな美味しい飯を作れたな」

「実は最近鈴鳴で今先輩から料理を習っているんです」

今先輩の料理は何回か食った事があるがアレは確かに絶品だ。双

葉がいつか今先輩クラスになるのなら楽しみで仕方ない。

「でも、何で料理を習っているんだ？」

すると双葉がモジモジしだす。

「そ、その……将来八幡先輩と結婚した時に備えて……花嫁修行を……ヤバいくソ可愛い。もう結婚する事を真剣に考えてるのかよ。俺も真剣に双葉との結婚を考えよう。」

「……ありがとな。俺もお前に相応しい夫になるように頑張るな」

「……じゃあ一緒に頑張りましょう」

「ああ」

双葉と笑い合う。やっぱり双葉と笑い合うのは幸せだな。

そう思っていると視線を感じたので周りを見ると全員がニヤニヤしている。

「ほほう……やるねえお兄ちゃん」

「あらあら」

「チームメイトとしては嬉しいねえ」

「やはり八幡の隣は黒江殿が似合うな」

「あの無愛想だった双葉が……」

「式には呼んでくれよ」

何か色々と言つてくる。2人だけの空気を作り過ぎたか？

「うううう……」

双葉は真っ赤になりながら俯く。何とかしてあげたいが双葉クソ可愛い。

俺は暫くの間双葉の真っ赤な顔を見続けた。

食事を済んだので俺達は食後のドリンクを飲んでいる。

「お兄ちゃん、ご飯は美味しかった？」

「ああ、最高だった。加古さんも双葉もあざす」

「いいのよ別に」

「はい、私達がしたくてただけですから」

「なら良かった。明日からやつと楽になるぜ」

「うむ、八幡も実行委員ではなくなったからのう。そう言えばあの後は実行委員会は揉めなかったのか？」

「まあ相模を筆頭にサボり組は学校中に悪評が広まつてるから今後は肩身が狭いだろうな」

「ハッチ先輩容赦ないね」

「元はと言えば本来の仕事を放棄した奴が悪い」

「まあ比企谷は黒江ちゃんとデート出来て良かったじゃん。俺はお前の学校の酷さを聞いた時文化祭は開催出来ないと思っただぜ」

「まあ色々あったしな」

「おいハッチ。結局どうやって人を集めたんだ？」

「あ！それは小町も気になる！」

米屋と小町が聞いてくる。他の人も頷いているがどんだけ興味があるんだよ？

「まあいいけど。先ず実行委員長がふざけた案を出してサボり組が出た、ここまでは知ってるな？」

確認をすると全員が頷く。

「それで60人中、40人以上休んでこのままじゃヤバイとなって綾辻は俺に案はないかと聞いてきたんだよ」

「それで比企谷君は何て言ったの？」

「俺が提案したのは各クラスのルーム長を集めて、実行委員会の酷さを話して協力を求めました」

「なるほどね。確か総武高は全部で30クラスあるから最大で30人集められるわね」

「はい。実行委員会の現状を説明したら毎回20人くらい手伝ってくれて開催出来ました」

「でもハッチ先輩、そうだったらサボってた人は肩身が狭くならないの？」

「緑川お前……肩身が狭いなんて言葉を知ってたんだな」

正直俺は物凄く感動してしまった。成長したな緑川。

「……駿」

「ちよつ双葉?!意味は知ってるからね!というかハツチ先輩バカにし過ぎだから!よねやん先輩と一緒にしないでよ!!」

「んだと緑川!!」

米屋は緑川にヘッドロックをしているが実際に合ってると思うんだが……

「バカ2人はほつとくぞ。で、比企谷。さっき緑川が言ったけどサボってた人は肩身が狭くならないのか?」

「それはサボり組の自業自得だ。それに俺は案を出ただけで、実行した訳じゃない。実行したのは生徒会だからな」

「うわっ、えげつねえ」

「黙れ出水」

「確かに八幡先輩のやり方は恐ろしいと思いますが、荒療治をしないと開催は出来なかったと思いますよ」

「まあ話を聞いている限りじゃ、お兄ちゃんの案は恐ろしいけど最善だと思うな」

さっきから恐ろしい恐ろしい言われ過ぎだろ?

「で、その後に実行委員長が逃げたのだろう?」

材木座が俺に確認を取ると全員が俺を見てくる。

「は?逃げた?比企谷、説明を」

「ああ、それからは順調に進んで文化祭は無事開催したんだよ。問題は2日目のエンディングセレモニー直前に起こったんだよ」

1つ息を吐き続きを話す。

「相模の奴がエンディングセレモニーで発表する優秀賞と地域賞の集計結果が書かれた紙を持って行方不明になったんだよ」

「逃げたのね」

「そうです。まあ結局見つけられませんでしたけど」

まあ俺は一生懸命探したから文句は言われないうらやま多分。

「大体わかった。てか比企谷が動かなかったら文化祭潰れてたんじゃね?」

まあ可能性はあったな。でも俺が居なくても相模は更迭されて、文

化祭は延期の形で開催したかもしれないな。

「さあな、とりあえずもう終わった事だ。いくらたられればを言っても意味はないだろ」

そう言ってこの話題を終わらせた。

そして、遊ぶぞって事になり俺も付き合わされた。てか俺は疲れたって言ったんだし寝かせろよ。

夜10時を回った所で三輪隊が防衛任務があるとのことでお開きとなった。

「んじやあハツチに小町ちゃん、またな」

「明日から実行委員がないから模擬戦を頼むぞ八幡よ!」

「あ!じやあ俺ともやろうよハツチ先輩!」

「はいはい。また明日な」

「あら、私もお相手しようかしら?」

「小町は後100ポイントでBに上がれますから明日には上がりたいですね」

「私も参加してもいいですか?」

別れの際にはランク戦の話になるのはボーダー特有だろうな。

そんな事を考えながら皆に挨拶をして家に入る。

「お前は後100ポイントでBなんだな?」

「そうだよ。平日は生徒会で忙しいからね」

「まあ戸塚も劇の練習はなくなったし直ぐにBに上がれるな」

「ところで留美ちゃんと中2さんは防衛任務はどうなの?」

「既に5回以上経験しているから問題ないな。お前らが隊を作った

際はあいつらに聞け」

材木座と留美は既にボーダーとしての基本的な行動はマスターしてゐるしな。

「うん、わかった。お兄ちゃんは疲れてるだろうから寝なよ」

「そうだな。じゃあまた明日」

そう言つて俺は自室に戻り死んだ様に眠つてしまった。

それから2日して月曜日、今日は代休で休みなのでのんびり出来る。つても出水の学校は休みじゃないから本部には余り人がいないだろうからランク戦もする気がない。

ぼんやりとテレビを見ている時だった。

『――総武高校に通っている相模南さんの行方が土曜日から分からなくなったという事が判明いたしました』

そんなニュースが流れたのでテレビを見ると相模の映像が映っていた。

『――学校での相模さんについて聞いてみた所、相模さんは先日行われた文化祭で問題を起こした事で周りから責められたらしく、この事から自殺の線も――』

そのニュースを見て唾然とした。実行委員の仕事をしている時は死ぬ死ぬ思っていたが本当に行方不明になるとは。

つーか実行委員の実態を知ったら間違ひなく雪ノ下姉妹や平塚先

生はヤバいだろうな。下手したら俺も何か咎められるかも。俺の案って間接的にサボり組を排除しようって案だし。

(まあ最終的に逃げたのは相模だし、どうなる事やら……)

そう思いながらニュースを眺め続けた。

太刀川隊は新しく出来た隊と試合をする事になった

文化祭も終わり体育祭も大過なく過ぎると一気に気温が下がり涼しいというより寒い風が吹き抜けていた。

周りの連中が騒いでいる中は俺は携帯で昨日見損ねたB級ランク戦を見ていた。

最近になって漸く相模の問題がなくなったしな。

そう、相模が居なくなってから総武には警察がしょっちゅう来るようになった。

特に実行委員にいたメンバーは何回も招集されたし。その時のサボり組の青い顔は忘れられないな。

その際に驚いたのは警察が俺が作った議事録と出席表を使って調査していた事だ。

まあ俺が作った議事録はルーム長を集める為に物凄く細かく書いていたしな。

特に事情聴取をされたのは雪ノ下と平塚先生だった。

まあ議事録には『相模実行委員長は予定は順調であるからペースを

落としてクラスの方に顔を出すべきだ、と発言した』とか『生徒会副会長の綾辻遥は相模実行委員長の見解に反対したが外部から来たO G雪ノ下陽乃が実行委員の仕事を放棄してクラスの方に行く訳ではなく両立すればいいと反対した為に棄却された』とか書いてあったからな。

暫くして何処から情報が漏れたのか雪ノ下の家に大量にマスコミが来たのをテレビで見た。

妹が一人暮らしをしているらしいマンションから出る度に『どうして副実行委員長であるあなたは相模さんの案をしつかりと反対しなかったのですか?』と責められていた。

そして姉が家から出る度に『あなたが余計な事を言わなければ相模さんは行方不明にならなかつたんじゃないですか?』とか『どう責任を取るのですか?!』とか言つて問い詰められていたが、これについては完全に自業自得だろう。

実際2人は犯罪を犯していないが、世間では『相模が行方不明になった原因を生み出した姉妹』って評価されている。

それによつて雪ノ下の父親の建設会社は最悪の評価を得て、県議会議員としてもマスコミに連日叩かれている。どうやら唯我の力を借りる事はないみたいだな。

平塚先生に至つてはもつとヤバイ。

何せ殆ど実行委員会に顔を出してない事がバレて校長にも咎められていた。そりやそうだ。平塚先生が来たのつて初めのミーティングと雪ノ下が休んだ時とスローガン決めの3回だけだったし。しかもその間、文化祭についての仕事は殆どしてなかつたらしい。監督の癖に信じられないぞ。

それによつて平塚先生は再教育センターに飛ばされてしまった。まあ予想通りだ。千葉村でも虐め問題を生徒に丸投げしてたし。

余談だが、平塚先生がいなくなった事で奉仕部は潰れる予定だったが、由比ヶ浜が他の先生に頼み込んで奉仕部は存続出来たようだ。し

かしあれは潰れた方がいいだろ？奉仕部が無かったら相模が行方不明になる事もなかったし。

まあ、そんな訳で世間では相模と雪ノ下姉妹と平塚先生が最悪の評価となっている。

俺？俺については何とも言えないな。雪ノ下姉妹や平塚先生と違って世間には認知されていない。まあ事情聴取はされたが、俺はルーム長を集めると提案しただけで相模の事は悪く言っていないから特に咎められなかった。

しかし学校では俺の行動は知られているから俺に対する評価は大きく2つに分けられている。

片や『文化祭を開催する為に全力を尽くした上、最悪の事態の回避にも貢献した総武高の英雄』と評価していて、片や『実行委員長をはじめ沢山の実行委員を切り捨てた屑』と評価している。

初めは闇討ちされないか不安だったが、エンディングセレモニーの後に学校の人気者の葉山が言った「ヒキタニ君はちやんと仕事をやっていた」発言が広まって、俺に危害を加える奴はいない。まあ今の時期に危害を加えたら間違いなく世間から問題になるだろうしな。そんな事したら間違いなく加害者の家にマスコミが来るのは簡単に予想出来るし。

しかし俺にとって1番大変だったのはそこじゃない。

事件が発覚して、しかも俺が深く関わった事が上層部の耳に入り根付さんに「ボーダーのイメージが悪くなったらどうするんだね?!」と1時間近く説教をくらった事だ。

それについては返す言葉がないので俺は1時間近く上層部がいる中で土下座をし続けて説教を甘んじて受けた。まさか1時間も土下座をする日が来るとは思わなかった。

閑話休題：

そんな事もあり、一時期はマスコミが校門にいて面倒だったが最近になって漸く落ち着いた。そして俺に対する嫌な視線もおさまってきた。

俺がランク戦の録画を見終わって携帯をしまっていると騒ぎ声が聞こえたので声のした方向を見る。

「つつーか、修学旅行かー、やべえな」

「やばいな」

葉山グループの大岡と大和はやばいやばい言っているが意味が分からん。何で修学旅行でヤバイんだよ？てかあんな問題が起こったが修学旅行はあるのか？

「そーいや、戸部、アレどーすんの？」

「って聞いちゃう？聞いちゃうかー。それもうあれでしょー。決まってるでしょー、っていうか決めるでしょー」

そんな事を話していると急に静かになる。どうやら余り人に聞かせられない話のようだ。

そんな事をぼんやり考えていると

「八幡」

天使が話しかけてきた。戸塚はあんな事件があっても変わらずに接してくれるいい奴だ。

「よう、どうした？」

「今度のLHRで修学旅行の班決めするんだって」

「そういやそうだった。どうでもいいから忘れてた。」

「まあ皆決まってるだろ」

「そうかな、僕まだ決まってるないんだ」

「何だど？ならチャンスだな。」

「じゃあ一緒に班にするか？」

「え、うん、いいよ！」

「何て可愛い笑顔だ。朝からいい気分だな。」

「そしたら後2人だね」

「まあ、他の2人組みしか作れない所とドッキングだろ」

「そうだね。あ、後八幡さえ良ければ3日目の自由行動一緒にまわら

ない？」

「いいぜ。よろしくな」

「うんよろしく！あ、後放課後の模擬戦もよろしくね！」

「ああ、悪いが手加減はしないからな」

「もちろん！……でも僕達の隊が初めて戦う相手がA級1位とは思わなかったよ」

そう、ちょうど先週、戸塚がB級に上がって小町、戸塚、材木座、留美の4人でチームを結成した。ちなみに隊長は戸塚となった。

そしてその際に材木座と留美が「自分達の目標であるA級1位とはどれくらいの差があるのか知りたいから戦ってくれ」と言ってきたので模擬戦をする事になった。どんだけあの2人は戦闘狂になっていくんだよ？小町と戸塚は始めビビってたし。

……まあ明らかに本気でA級1位を目指しているのは理解出来たし、俺達も本気で相手をする事になった。

「そういや、お前んとこのオペレーターってどんな奴なんだ？」

俺まだ会ってないし。

「……うーん。基本的に凄い無口だね」

「え？それだけか？」

「まあ昨日会ったばかりだしね。でも昨日4人でトレーニングでトリオン兵を倒した際に欲しい情報が簡単に手に入って凄
い助かったよ」

ほう、戦闘員4人を難なくサポート出来るって事はかなり優秀なの
だろうな。もしかしたら国近先輩、綾辻、月見さんクラスかもしれないな。

そんな事をぼんやり考えていると教室の前から葉山と海老名さん
が入ってきた。珍しいな、2人きりで話しているなんて。海老名さん
は手を振りながら三浦や由比ヶ浜の所へ向かう。その明るさはいつ
も通りだった。

しかし葉山の顔は浮かなかった。珍しく自嘲するかのような悲し
げな印象を受ける。大して仲良くない俺でもわかる事だ。グルー
プの奴らも分かっているだろう。

そんな光景を見てみるとチャイムが鳴るのでグループは解散して
席に戻った。さてまた1日の始まりか。怠いが頑張るか。

放課後になり俺は戸塚と材木座と一緒にボーダー本部に行く。

基地の入口に着くとそこには小町と留美がいた。

「よう小町に留美」

「あ！お兄ちゃん！今日はよろしくね！」

「……今の私達じゃ太刀川隊に勝てないけど一矢報いるつもりで頑
張る」

「それがいい。やるからには全力で、そして勝つつもりでやらない
と強くなる為の経験は積めないからな」

まるで昔の双葉を見ている気分だ。双葉も入隊初日に俺に挑んで
壁の高さを知ろうとしてたし。

感心しながら俺達はゲートに入った。

「そういえば八幡、チーム同士の模擬戦は作戦室でやるのか？」

「ああ、材木座はチーム同士の模擬戦をした事ないからわからないか。チーム同士の試合は個人ランク戦のブースで設定をいじれば出来る。俺はよく他の高2メンバーとやってるし」

つい最近じゃ、俺、那須、奈良坂、若村、綾辻の5人で出水、米屋、熊谷、隠岐、三上の5人と試合したしな。結果は最後に俺と出水の一騎打ちになってギリギリ俺が勝った。

そんな事を考えている時だった。

「あ、彼女がうちのオペレーターだよ！」

戸塚がそう言ってきたので、前を見ると金髪のツインテールの女子がこちらにやってきた。まあ確かにクールっぽいな。

「お前が戸塚隊のオペレーターか。太刀川隊の比企谷だ。今日の試合はよろしくな」

そう言う女子は軽く会釈をする。

「遊佐です」

……え？それだけ？まあ俺としては静かな方がいいけど。

若干戸惑っていると太刀川隊のメンバーもやってくる。

「おつ、戸塚隊は全員揃ってるな。よろしくな」

太刀川さんがそう言うと言とうと全員が頭を下げる。

「弟子だろうと容赦はしないぜ小町ちゃん？」

「全力でお願いします！」

余り小町がボコされるのは見たくないが本人がそう言っているの
で俺は止めない。まあやり過ぎと判断したら試合が終わった後に出
水を殺すけど。

「ふっ、この剣豪將軍の初陣がA級1位とは……まさに剣豪將軍に
ふさわしい」材木座さん、昨日も言いましたが將軍は戸塚さんですよ

ね？」……あ、はいそうですね」

材木座が語っている途中遊佐が突っ込みを入れてきた。それにより材木座を素にするとは……この女、出来る!!

「それよりランク戦のブースに行こうよ」

国近先輩の意見に賛成して俺達はランク戦のブースに向かって歩き出した。

個人ランク戦のステージに到着して各自ブースに入る。オペレーターは隊長と同じブースに入りオペレーターする。

『んじゃあお前ら、先ずは合流な』

太刀川さんがそう言ってくる。まあ戦術としては基本だ。しかし……

『いやいや太刀川さん。流石に初めて試合をするチームにそれは……』

まあ否定は出来ん。明らかに大人気ないし。

『向こうが全力で来いと言ったんだ。こつちも全力でやるのが普通だろ?』

まあそれについても同感だな。どのみち俺達は太刀川さんの指示に従うだけだ。

『了解』

チームメイト全員がハモった。

戸塚 side

今僕はチームメイトの皆に作戦を説明している。

「最終確認をするよ。MAPは『工業地区』。ただし絶対に開けた場所には行かないで工場が密集している場所で戦うようにね」

開けた場所で戦ったら間違はなく何も出来ずに全滅すると思う。八幡は僕がC級の頃から「ステージについては今のうちに学んでお

け」って言っていたから、ある程度の作戦は立てれた。

『了解』

僕以外の4人から了解の返事が来た。

「それで昨日決まったけど小町ちゃんは……」

『任せてください!!1秒でも長く太刀川さんを足止めします!!』

そう、小町ちゃんの仕事は太刀川さんの足止めだ。

八幡と出水君もかなり強いが太刀川さんはその2人より遥かに強い人だ。会ったら間違いなく瞬殺されるだろう。

だからバイパーを自在に操れる小町ちゃんが太刀川さんの足止め
に立候補した。確かに工場が密集している場所なら時間を稼げるか
もしれないしね。

「材木座君と留美ちゃんは合流する場所は覚えてる?」

合流する場所はちょうど真ん中に近い目立たない路地だ。昨日何
時間も歩いて調べた場所だから直ぐには気付かないだろう。

『無論だ!!』

『うん、大丈夫』

それを聞いて息を吐く。

今日が僕達の初陣、圧倒的強者が相手である事もあり凄く緊張する
が絶対に何を学んでみせる。その為に全力で頑張ろう。

僕が強く決心しているとステージ転送が始まった。

思いのほか戸塚隊は優秀である

転送が完了する。

俺の視界に入ったのはコンビナートだった。

(……て、事はステージは工業地区か)

レーダーを確認すると相手チームはバグワームを付けていてレーダーに映らない。

チームメイトの位置は出水と唯我はマップ中央あたりで俺と太刀川さんは割と端っこの方だった。

「どうします太刀川さん？」

『向こうは多分4人で固まる事を最優先にしているな。それで奴らが戦いたい場所は工場が密集している場所だな』

まあ向こうは開けた場所で俺達と戦っても瞬殺されるのがオチだと思ってるだろうし当然か。

『でもそしたら向こうの策に乗るって事ですよね？』

出水の言う通りだ。戸塚隊と接敵するには奴らのテリトリーに入らないといけない。

「でも向こうは開けた場所に出ないから乗るしかないだろ」

俺が向こうの立場なら間違いなく開けた場所には出ないつもりだしな。

『そうだな……よし。先ず出水と唯我は急いで合流しろ。俺と比企谷は少ししてから追いつく。国近は出水と唯我のサポートを優先しろ』

「比企谷、了解」

『出水、了解』

『ゆ、唯我、了解』

『国近、了解』

隊長からの指示が出たので俺達は走り出す。初めは止まって話していたので大分出遅れた。おそらく向こうは4人合流しているだろうな。

試合が始まって僕達は全員バッグワームをつけて動き出した。

留美ちゃんと小町ちゃんは工場が密集している場所に転送された。僕と集合場所に走っていると留美ちゃんから通信が入る。

『マップの端の方に太刀川さんと八幡がいたよ。出水さんと唯我さんは見えないから私達と同じで工場が密集している所にいると思う』
『タグを付けます』

遊佐さんがそう言うのとレーダーに映っているマーカーに『太刀川慶』『比企谷八幡』と表示された。

八幡の居場所は僕と近いけど進行方向は少し違うから僕達が合流する前に鉢合わせする事はないだろう。

一方小町ちゃんは……

『太刀川さんと近いです。今から小町は時間稼ぎの仕込みをしますの
でそっちはよろしく願います！』

太刀川さんとかかなり近い。まあ小町ちゃんを見つけるのはかなり
難しいから時間稼ぎは出来るだろう。

『我はもう直ぐ留美嬢と合流出来るぞ！戸塚氏も早う！』

レーダーを見ると材木座君も間もなく留美ちゃんと合流する。僕
も急いで合流しないと……

でも、その前に……

「その前に八幡を足止めする為の仕込みをしておくね」

八幡 side

おかしい。さっきから探しているものの1回も相手と会っていない。向こうは何を考えているんだ。

「出水、お前は誰かと会ったか？」

「いや、会ってない。今唯我と合流したが、唯我也会ってないだつて。太刀川さんは？」

『俺もだ』

マジか？全員会ってないのかよ？マジでどうなってんだ？1人倒して逃げ切るならともかく、1人も倒してないで逃げるのは普通はないぞ。

仕方ない。探す場所を変えるか。

そう判断して方向転換した時だった。

ギツ……

足元で変な音がして俺はずっこけた。

「ぐっ……」

体を起こして足元を見た。これは……

俺はチームメイトに通信を入れる。

「こちら比企谷、敵は発見してないがワイヤーを確認。向こうはスパイダーを使用している」

俺の足元にはワイヤーが張ってあった。更に先を見るとワイヤーが大量に張ってあった。

『スパイダーだ?! って事はお前の近くにいるとしたら留美ちゃんか?』

まああの面子でスパイダーを使うとしたら留美だろうな。あいつ何回かスパイダーの練習をしてたし、木虎の戦闘データよく見てるし。

『何? お前ずっこけたの?』

太刀川さんが笑いながら言うてるのが凄くムカつくんだけど。

「こけましたが何か?」

『はっはっはっ、向こうも中々……チツ!』

すると突然太刀川さんの方から激しい音が聞こえてくる。まさか敵か?!

「大丈夫ですか?」

『問題ない。今色々な方向から弾丸が飛んできた。だから多分小町が近くにいます』

なるほどな。複雑な地形でのバイパーはウザいからな。正しい選択だ。

『とりあえず比企谷、お前の近くに鶴見がいるだろうから倒せ。俺は小町を倒す。出水と唯我は材木座と戸塚を倒せ』

そう言われて一同は了解の返事をして各々の仕事に取り掛かる。

俺の仕事は留美を見つけて倒す事だ。その為には先ずはワイヤーを切る事からだな。

そう判断した俺は孤月を出してワイヤーを斬り始めた。

戸塚 side

今レーダーを見ると八幡が中央地点から少しずれた方向に進みだした。

「どうやら八幡はスパイダーを斬っているようだな」

合流した材木座君が笑いながら頷く。見ると色々と走り回っているからスパイダーの切断を最優先にしているようだ。

「うん、これで小町ちゃんを除いて全員集まったね」

「ふむう、それにしても中々良い作戦であるな。何せ……」

戸塚氏がスパイダーを使っているとは予想もしていないであろう」

そう、今八幡が斬っているスパイダーは留美ちゃんが仕込んだスパイダーではなく僕が仕込んだスパイダーだ。

僕は自分の作戦室でしか練習してないから、太刀川隊からすれば八幡の近くにいるのは留美ちゃんと思っただろう。

太刀川隊はおそらく、八幡の足止めが留美ちゃん、太刀川さんの足止めが小町ちゃん、出水君と唯我君の相手は僕と材木座君と思っ

るだろう。

しかし八幡の近くには誰もいない。八幡はいると思って邪魔なスパイダーを斬っているだけだ。

「そろそろ出水君と唯我君がこっちに来るよ。僕と材木座君で隙を作るからよろしくね

留美ちゃん」

「うん、わかった」

留美ちゃんが頷く。今からはスピード勝負だ。八幡が来る前にどれだけ出水君と唯我君にダメージを与えられるかが鍵だ。

頑張ろう

出水 side

さつきから誰とも会っていない。太刀川さんはバイパーに襲われた事から小町ちゃんの近くにおいて、比企谷はスパイダーでこけた事から留美ちゃんの近くにいるのだろう。

さつきから通信を聞いている限り、2人の前には出てきてない事から足止めが目的だろう。その間に材木座と戸塚が俺を叩くつもりだろう。

中々良い戦術だ。基本がしつかりとしている。

しかし甘いな。確かに戸塚といい材木座といい才能はある。しかし今のあいっらじや2人がかりでも常日頃からA級の猛者達と戦っている俺に勝つのは無理だと思う。

これについては比企谷もそう思っているだろう。俺を倒したかったら小町ちゃんか留美ちゃんを連れて3人以上で戦うべきだ。そう思っている時だった。

タタタタタツ

上から銃声が聞こえたので顔を上げるとバググワームを装着した戸塚が右上の方向からアステロイドを撃ってきた。

俺と唯我は急いでシールドを出してアステロイドを防ぐ。

「ふう、あ、危なかった!」

唯我は安堵の息を吐いているが安心するのはまだ早い。

「油断するな! 材木座の奇襲に用心しろ!」

戸塚隊は全員バググワームを装着している。となると間違いなく材木座も奇襲をしてくる筈だ。

警戒していると材木座が正面の工場から飛び降りてくる。腰にある孤月に手をかけながら。

(…………この距離は…………マズい!)

材木座は旋空を使ってくるだろう。この距離の旋空だと俺に当たるのはブレードの先端部分だろう。あんなもんマトモに食らったら確実にベイルアウトだろう。

「唯我! お前のシールドを俺の頭の上に張って戸塚の攻撃を防げ!!」

「い、出水先輩?!」

「早くしろ!!」

「は、はい」

俺がそう声を荒げると唯我は俺の頭にシールドを展開して戸塚の銃撃を防ぐ。

それと同時に

「必殺!!幻紅刃閃アアアア!!」

(両防御!!)

材木座の旋空と俺の両防御が同時に発動した。

材木座の伸びる斬撃と俺のシールドがぶつかり……

ガギギギンツ

物凄い音がして俺のシールドは1枚が割れてもう1枚にもヒビが入った。危ねえ、一步遅かったら負けてた。やっぱり旋空は当たればデカイな。

てか材木座よ、お前何で刀を使ってるのに技名がカタカタ語なんだよ?普通に旋空って言えよ。本当に才能のある中二病だなこいつ。

まあそれともかく、材木座の旋空は防げた。今の材木座は孤月を振り抜いているので隙がデカイ。材木座を殺すなら今だ。

そう判断してアステロイドを撃とうとした時だった。

『出水君、後ろ！』

いきなり柚宇さんにそう言われて反射的に横に飛んだ。

するとそこには留美ちゃんがいて俺の右腕と唯我の首を斬り飛ばしていた。

(……は、何で留美ちゃんが?! いや、考えるのは後だ!)

唯我がベイルアウトしたのを尻目にアステロイドを撃つ。留美ちゃんは簡単にシールドで防いで材木座の横に立つ。

とりあえず、囲まれたらヤバいのでバイパーを3人に向けて放ち、後退して少し開けた場所に立つ。

(つーか何で留美ちゃんが? てつきり比企谷の近くに……)

まあそこは問題じゃない。問題なのは留美ちゃんが俺の近くにいる事だ。

俺は急いで比企谷に通信を入れる。

「比企谷! 何で知らんが留美ちゃんはこっちにいる! 急いで来てくれ!」

いくら俺でも3対1は怠いからな。

『留美がそっちに? て事はこのスパイダーは俺に留美がいると思わ

せる為の罨か!』

比企谷の話聞いて納得した。確かにスパイダーがあつたら近くに留美ちゃんがいると思うのは当然だ。留美ちゃんがいると思わせ比企谷を足止めとは……戸塚の奴、中々優秀だな。

「そうみたいだ。とりあえず急いでくれ!」

『了解!』

そう言つて通信が切れる。

おそらく3人がかりで俺と唯我を倒すのが本当の目的だったのだろう。事実唯我はやられ、俺もダメージを負った。

となると俺の仕事は……

(比企谷が来るまで生き延びれば俺達の勝ちだ)

俺1人である3人を倒すのは骨だが、比企谷が来れば間違いなく勝てるだろう。

自分のやる事がわかった俺は3人を視界に入れながらトリオンキューブを浮かせた。

さて、戦闘開始だ。

八幡side

俺は今、出水から通信が来たので出水の方へ向かっている。

幸いスパイダーは大分斬つたので移動に支障はない。

「国近先輩、太刀川さんはどうすか?」

『今はかなり足止めを食らってるね。バイパーだけでなく足元にスパイダーを仕込んであつてもう2回もこけてるよ』

マジか?小町もスパイダーを入れてんのかよ?!時間稼ぎの方法といい、相当ステージについて研究して作戦を立てたのだろう。この事から戸塚隊は本気で勝ちにきている事がわかった。

(柄じゃないが久々に熱くなってきたな)

正直言つて凄く楽しい。

しかし一応俺もA級1位を背負っているんだ。向こうが優勢に立つのはあまり面白くない。

(急ぐか。出水と合流したら俺達の勝ちだしな)

そう思いながらグラスホッパーを起動して進み始めた。

やはり太刀川隊を崩すのは困難な道のみである。

「ふんっ!!」

正面から材木座が俺、出水公平の首めがけて袈裟斬りを放ってくる。鋭い一撃だが俺の相棒に比べたらまだ甘い。紙一重で躲して後ろに下がりながらメイントリガーのアステロイドを撃とうとする。

しかし……

タタタタタツ

材木座の斜め後ろにいる戸塚がアステロイドを撃ってくる。しかもどの弾も頭を狙ってきているので無視出来ない。

「チツ」

1つ舌打ちをしてシールドで防ぐと今度は留美ちゃんが上から斬りかかってくる。それをサブのシールドで防ぐと同時に留美ちゃんは地面に着く。

すると留美ちゃんはチラリと下を見た。

(……ん？下には誰もいないが何を……まさか?!)

嫌な予感がしたので更に後ろに下がる。

その直後、コンクリートの地面を突き破り飛び出してきたのは光り輝くブレードだった。

ボーダー内でもぐら爪という名称で知られているこの攻撃は足から地面を通してスコープピオンのブレードを伸ばす技だ。No.2攻撃手の風間さんが偶にやるがくらうと結構苛立つ技だ。

にしても入隊して1ヶ月でもぐら爪を使うとは本当に末恐ろしい

な。

(……比企谷が来るまでに1人は落としておきたいが……)

ぶっちゃけかなり厳しい。向こうは3人もいるという余裕があるのか決して無理な攻めをしてこない。確実に少しずつダメージを与えてくる。

さて、どう攻めるか？

合成弾？論外だ。あれを作っている間は完全に無防備だ。少し離れているなら変化炸裂弾で削れるが材木座と留美ちゃんの射程に間に作ろうとしても間違いない撃つ前にこっちが負ける。

メテオラ？悪くはないがリスクもある。メテオラを使えば3人のテリトリーである工場を破壊出来るが爆風でこっちの視界も遮られる。それで材木座の旋空を食らったら笑えないぞ。

(やっぱりこれしかないな)

そう思いながらサブのバイパーを起動して5×5×5の125分割にして、3人纏めて当てるともりで放つ。

1人につき約40発当たる計算だ。ある程度は防げても40発全てを防ぐのは無理だろう。

そう思っている中、バイパーは3人に飛んでいく。さあどうなる?!

瞬間、3人の周りにシールドが発生して全弾防いだ。

おそらくシールドを耐久力を上げる固定モードで使ったのだろう。

チームメイトに小町ちゃんがいる事からバイパー対策はしっかり立てていたのだろう。それについては本当に凄いと思う。

しかし俺に対してそれは悪手だ。

固定モードのシールドは強力だが、使っている間は生やした場所か

らは動かせないという欠点がある。
そして解除する瞬間は数秒の隙が出来る。

そして、数秒あれば俺は合成弾を作る事が出来る。

俺はメインとサブのトリガーから同じ銃手用トリガーを起動して合わせる。幸いな事に3人とも同じタイミングで固定モードのシールドを出したので邪魔が入らない。

「通常弾＋通常弾……」

合わせる弾丸は貫通力に特化して、シールドや硬い装甲を破る為に使われる弾丸だ。

「徹甲弾」

そう呟いて合成弾を放つ。

狙いは留美ちゃんだ。近寄られたら1番厄介なのは留美ちゃんだからだ。

いくら固定モードのシールドを使っているもボーダーで2番目にトリオン能力がある俺の攻撃は防げないだろう。

予想通り俺が放った徹甲弾は留美ちゃんの体をシールドごと撃ち抜いた。

蜂の巣になった留美ちゃんは光となって空に飛んで行った。よし、先ずは1点返したぜ。

そう思った時だった。

少し離れた場所にある工場がズズンツと音がして倒れた。
何だ？と思つて見てみるとまた光が空に飛んで行つた。柚宇さん
から連絡が来てないからベイルアウトしたのは小町ちゃんだろう。
これで一氣に有利になつたぜ。

内心ガッツポーズをしている時だつた。

殺気を感じて反射的にシールドを張る。

瞬間……

ドドドドドツツ

物凄い爆撃が俺のシールドを襲つた。おそらく材木座のメテオラ
だろうな。タイミングは悪くないが俺のシールドは硬いからそう簡
単には破れないぞ。

内心突っ込んでいると、爆風の中からアステロイドが飛んできた。
それを確認した俺は頭と心臓にシールドを張る。こうすりゃとりあ
えず死なないだろうな。

安堵の息を吐いた瞬間だつた。

爆風の中から斬撃が飛んできて俺の両足が斬り落とされた。
前を見ると材木座が剣を振り抜いているのが見えた。

(あー、なるほどな。メテオラもアステロイドも材木座の旋空の為の

布石だったのか。やるな)

そう思っていると俺の相棒が材木座に斬りかかっているのが見えた。

『すまん、遅れた』

「全くだぜ。俺はもう動けないから戸塚の足止めだけするぞ」

『了解だ』

お互いのやるべき事は決まった。

俺はトリオンキューブを出して戸塚目掛けて放った。比企谷の邪魔はさせないからな。

遡る事、3分……

小町 side

小町は今太刀川さんの足止めをしています。地面にはスパイダーを設置して太刀川さんをこけさせて、あらゆる方向からバイパーを放ち、位置を知られないようにしています。

こんなんじやA級1位隊長は倒せる筈はないですが、それでもいい。小町の仕事は他の3人が出水さんと唯我さんを倒すまで太刀川さんの足止めをする事だしね。

予定としては2人を倒した後逃げ切るつもりだ。

そう思いながらバイパーを放った時だった。

「あー、ダメだ。やっぱり地道に探すのは性に合わないな」

太刀川さんのノンビリとした声が聞こえてきた。

え？何か理由はないけど凄く嫌な予感が……

そう思った時だった。

少し離れた場所で光が空に飛んで行ったのが見えてしまった。

(あれはベイルアウトの光?!)

「遊佐さん！誰がベイルアウトしましたか?!」

オペレーターは遊佐さんに聞いてみる。

『鶴見さんが出水さんの徹甲弾によりベイルアウトしました』

「留美ちゃんが?!」

これは痛い。うちのエースは留美ちゃんと中2さんだ。戸塚さんも優秀だけど、得意分野は援護射撃だから点を取るのには向いていない。

しかも出水さんの所にはお兄ちゃんも向かっていて後少しで到着するから危ない。

内心焦っているその瞬間だった。

「ん？こつちの方から小町の声が聞こえたな」

いきなりそんな事を言ってるのが耳に入った。

しまったああああああ！内部通信にするべきだった!!小町のバカ!!何をやってるんだか!!小町は絶対に太刀川さんに居場所を知られちゃいけないのに！小町的にポイント低い！

小町が自分に文句を言っている中、

「旋空孤月」

そう聞こえたと思った瞬間、小町は周りの工場もろとも真っ二つにされてしまった。

前を見ると遮蔽物の工場を真っ二つにした太刀川さんがドヤ顔をしていた。何か腹立たしい。

(……すみません。後よろしくです)

『戦闘体活動限界、緊急脱出』

そのアナウンスを聞くと同時に小町は光に目を眩ませて、気が付いたらベッドに叩きつけられた。

八幡side

俺は今グラスホッパーで高速移動をしている。

もう少しで出水と合流出来る。急がなくては…

更にグラスホッパーを起動していると光が空に飛んで行った。まさか出水じゃないよな？

国近先輩に聞こうとすると更に光が飛んで行った。あれは太刀川さんがいる方向だ。太刀川さんが小町に負けるとは思えないから飛んで行ったのは小町だろう。

すると視界に材木座が入った。いぎ、斬りかかろうと考えた瞬間、材木座は旋空を放っていた。という事は出水はまだ生きてるって事か。

そう判断して俺は材木座に斬りかかる。が、簡単に止められる。

「むう?!」

材木座が叫ぶ中、材木座の孤月と鏢迫り合いをする。剣をぶつけながら出水に通信を入れる。

「すまん、遅れた」

『全くだぜ。俺はもう動けないからな』

「了解だ」

さつきまでまんまと向こうの罠にはまった俺のせいだ。詫びとして材木座を倒すから許してくれ。

内心謝罪しながら改めて材木座の孤月の横っ腹に孤月を叩きつけて材木座の孤月を弾いた。今がチャンスだ。

俺は孤月を構え直し、材木座に斬りかかろうとするが嫌な予感を感じ下る。

するとさつきまで俺がいた場所に大量の弾丸が降り注がれた。これは……戸塚か。
面倒な援護だな。

だが今戸塚がいる場所は材木座の斜め後ろだ。位置の取り方が良いとはいえないな。まあ下手に動くとも出水にやられるから仕方ないな。

そう思いながら材木座に突っ込んでいく。戸塚がアステロイドを撃ってくるがグラスホッパーで軽く躲し材木座に斬りかかる。

材木座は簡単に俺の剣を受ける。まあ予想はしていたし、斬るのが目的ではない。俺は材木座の横っ腹に蹴りを入れて材木座を斜め後ろに飛ばす。

すると戸塚の銃撃がおさまる。当然だ。今撃ったら材木座に当たるからな。

相手が攻撃手、銃手の2人の時は攻撃手にぴったり近寄るのが最善だ。そうすれば銃手は攻撃手を巻き込む可能性があるからな。

その上今戸塚の射線には材木座がいるからこれで戸塚は何も出来ない。

となると戸塚がとれる行動は俺の後ろにまわって射撃しかない。まあさせる気はないが。

「出水、材木座に集中したいから、戸塚をそこに縫いつけろ」

『はいよ、俺はもうトリオンが少ないから急げよ』

「わかった」

出水からから了承を得た。先ずはお前からだ材木座。

標的を決めた俺は材木座の足を狙う。足を落とせば一気に有利になるした。

俺が体を低くして突っ込むと材木座は上段から孤月を振り下ろしてくる。

俺はそれを確認してサブのアステロイドを起動して材木座の顔面目掛けて放った。

「ぐっ、し、シールド！」

材木座はそう言ってシールドを張る。アステロイドは全弾防がれたが、孤月を振り下ろす動作は止まっていた。

いくら強くても材木座はまだ実戦慣れしていない。何故ならある程度実戦慣れしているなら顔面にシールドを張りながらも攻撃出来るからだ。材木座は無意識のうちに顔面攻撃にビビったから孤月を振り下ろす動作を止めたのだろう。

そしてそれは実戦慣れしている俺にとっては絶好のチャンスだ。

現在、材木座はシールドと孤月を起動している。しかしシールドは頭に張ってあるので足は無防備だ。上級者なら直ぐに孤月をOFFにしてシールドを張るが、まあ入隊して1ヶ月の奴にそれを求めるのは酷だな。

そう思いながら材木座の両足を斬り落とす。

それと同時に俺の後ろから大量のバイパーが飛んできて戸塚を囲むように攻撃している。出たな鳥籠。あれを使ってる間は戸塚は防戦一方だ。

もちろんその隙を見逃す俺ではない。

虫の息の材木座を放置して俺はグラスホッパーを使って詰め寄る。ある程度近づいた所で戸塚と目が合った。ヤバい、不安そうな目をして罪悪感が……いかにいかに！真剣勝負に私情を挟んじやいけない！

首を振って切り替える。せめてもの情けで一撃で屠る。

そう結論付けた俺は孤月専用のオプショントリガーを起動する。

「旋空孤月」

そう呟いて戸塚を真つ二つにした。

それを確認すると直ぐに材木座の方を向く。両足を失った材木座は逃げられないだろう。中々楽しかったぜ。

そう思いながら再び旋空を発動しようとした時だった。

「ただではやられぬ!!道連れだ出水殿!!」

俺の方を向いていた材木座は出水の方を向いて腰の孤月を抜こうとした。

マズい!!最後に死にかけの出水を倒すつもりだろう。出水を見ると防御の構えをとっていない。おそらく片腕、両足を失った出水はもう反撃や防御が出来ないくらいトリオンが少ないのだろう。

『すまん、今の俺のトリオン量じゃ材木座の旋空は防げない』

出水本人もそう言っている。おそらく材木座の旋空が決まれば出

水はベイルアウトするだろう。
となると俺の取るべき行動は1つ。

材木座が旋空を発動して出水を殺す前に材木座を殺す。

そう決まったと同時に腰の孤月に手をかける。すると向こうもほぼ同時に腰の孤月に手をかけている。間に合え!!

「旋空孤月!」

同時にそう叫び、お互いの斬撃を伸びた。

俺の斬撃は見事材木座を真っ二つにした。それによつて材木座はベイルアウトした。その光に目を眩ませる。

「出水、大丈夫か?」

一墨の希望を持って通信を入れてみる。
すると、

『ギリギリセーフだ』

そう返ってきた。マジで? てっきりやられたかと思ったぞ。材木座のベイルアウトの光が消えたところで出水を見てみた。

すると出水の真横に斬撃の跡が残っていた。どうやら孤月を完全に振り抜く前に材木座を殺せたのだろう。本当に危なかった。あと1秒遅かったら出水はベイルアウトしていただろう。

(……にしても初陣でこのレベルか。次のシーズンのランク戦が楽しみだな)

そう思っていると俺達の体は光に包まれた。

仮想フィールドから戻り、ブースから出ると参加者全員出ていた。そして戸塚隊には拍手が送られていた。まあ運が良かったら出水も落とせたかもしれないからな。

「ようお疲れ」

太刀川隊は戸塚隊の所に向かって話しかけた。

「あ、八幡。お疲れ。やっぱり太刀川隊は強いね」

「当たり前だ。簡単には負けねーよ。でも中々楽しかったぜ」

「まあ、そうだな。俺なんて3対1でかなり苦しかったし」

まあ一番苦しかったのは出水だろうな。俺なんて前半ワイヤー斬ってただけで楽だったし。

「最後に出水殿を落とせなかったのは無念である！」

「いやいや、最後はマジでビビったぜ」

「まあ早く俺としては殺せて良かったぜ。そういや小町はどうやってやられたんだ？」

俺がそう聞くと小町は苦い顔をして目を逸らす。……何があったんだ？

「……留美ちゃんがやられた事を遊佐さんから聞いて叫んじやった」

アホか……？内部通信で話せ。足止めをする人間が叫んでどうするんだよ？まあ本人も反省してるみたいだから責めはしないけど。

「まあスパイダーを使った足止めや合流方法は良かったぞ。後は戸塚、テレポーターや他の銃手トリガーを入れてみて援護だけでなく攪乱する事もやってみろ。そうすれば戦術の幅が広がるぞ」

「は、はい。ありがとうございますー！」

太刀川さんがそうアドバイスする。流石月見さんから戦術を学んだ事もあるな。ついでに勉強も学んでください。

俺が内心そう突っ込んでいると槍バカと迅バカがやってくる。

「いやー、中々面白かったぜ！次は俺と個人ランク戦やろうぜ！」

米屋がそう言っつて誘ってくる。ぶっちゃけ怠い。

そう判断して断ろうとした時だった。

「では米屋殿。我とやろうぞ！」

材木座が手を上げてそう言っている。

「おっ、材木座か！10本な！」

「承知した！」

そう言っつて2人はブースに入っつて行った。どんだけランク戦が好きなんだよ？

「……中2が米屋さんとやるなら私は緑川さんとやる」

呆れている中、留美もそう言っつてくる。

「じゃあ10本でいい？」

「うん、いいよ」

そう言っつて緑川と留美もブースに入っつて行った。

「あ、あはは……」

「うわー、チームランク戦終わっつて直ぐに個人ランク戦っつて……。相変わらずだなあ」

戸塚は苦笑いをしていて、小町は呆れている。まあ同感だ。あれだけ戦いに飢えてるっつて何処の11番隊長だよ？

呆れている中、ランク戦の状況がモニターに映し出されていた。

まあこれだけ向上心があるならいつかはわからんがA級には上がるだろう。その時が楽しみだ。

そう思いながらモニターに映し出されている米屋と材木座のランク戦をぼんやりと眺め続けた。